して更に他子を養ひて醫を嗣かしめ玉山をして一に儒學を專はらにせしむ玉山乃ち藩主に從ひて江都に至りて林鳳岡に就いて業を受く前後留學十年鳳岡其の才學を奇とす講説の日已れ事故あれば玉山をして代り講ぜしむ靈雲公卒するに及びて玉山乃ち國に歸る爾後門に入りて業を受くるもの千餘名嗣主隆德公擧て侍讀とす祿百石を賜ふ公卒して靈惑公立つ恩寵甚渥し常に左右に侍りて裨補する所少からず之より公東上すれは玉山必す從ふ年五十に及んで擢られて鳥銃隊長となる寶暦四年熊本新に學校を建つゝくるに時習館を以てす玉山の建議に出づるなり玉山之か揚學たり學規十三條を制し學政を整ふ文學の士十餘人を薦て教員となす功を以て祿を增して二百石となる玉山學をなす極て該博を尙ぶ自ら門人を起ふ欲せず詩及び古文詞に長す嘗て富嶽士山に登りて其の記を作る文勢則暢、南郭評して富嶽生出以來の記なりと曰ふ而して詩名最も顯はる詩を作るに一字苟もせず其の或は麤かならざるあれば沉思果年定まりて後之を出だす嘗て人に語りて曰く天下作者に乏しからず然れども余の如く善く思ふものあらずと玉山江戸に在るや富松公日出侯宇土侯樂山公子等爭ひ延て上客とす交通甚密し講筵の徒に於ては服部南郭、福仲英、高野蘭亭、澁井太室、瀧鶴臺、紀平洲の輩と交り尤も厚し其國に在るや家老より以下皆待つに師禮を以てす寶暦十三年公東上する時玉山の老たるを憫み命じて家に居らしむ是の冬玉山果して疾む枕に伏する旬日吟哦を廢せず病漸むに及て扶けられて起き端坐紙筆を索め淸鏡無底水月似我の八字を大書し筆を抛て瞑す年六十二玉山人と爲り體貌豐腴、眉宇秀發、巍然動かざるの勇あり然れども平居溫藥にして人と爭はず人に語りて曰く吾少うして三の願あり富士山に登り學校を建つ二願既に遂けたりと人其の一を問ふ笑ひて答へずと云ふ著書玉山詩集、玉山遺稿あり校正の書は校正墨子全書あり（先哲叢談、近世叢語、近世名家著述目錄）

アキヤマ クワウヘウ 秋山光彪 豐前小倉の藩士なり京邸の留守居を勉む字は士卿製園と號し莊兵衛と稱す荷田春滿の門に入りて詠歌を修し古學を研究す家集あり世に行はる天保三年二月六日歿年五十八（鑒定便覽、平安名家墓所一覽）

アキヤマ スケロクラウ 秋山助六郎 陸軍歩兵少佐なり高知市の出身にして舊高知藩士秋山久作の長男なり明治二十三年七月榮を卒へ翌年三月歩兵少尉に任ぜらる二十七年日清戰役に從軍し平壤の戰闘に功あり中尉に進み爾後林木城海城牛莊田庄臺其他各地に轉戰し二十八年六月凱旋す二十九年九月臺灣守備歩兵第三聯隊副官に補せられ十月日清戰役の功に依り功五級勳六等に叙せらる三十一年九月大尉に昇任し後陸軍戸山學校在學を命ぜらる三十七年日露戰役起るに及び第三師團歩兵第十八聯隊附として出征し金州南山得利寺蓋平等の各地に轉戰し終に遼陽大戰に參加し八月三十一日遼陽の前面首山堡の激戰に於て戰死す享年三十六戰功により歩兵少佐に昇任し功四級勳四等に叙せらる

アキヤマ ソン 秋山遜 熊本侯の儒員なり孫太夫と稱す玉山の子（鑒定便覽）

アキヤマ ツマ 秋山津摩 越前守虎康の女なり下山殿と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後ち德川氏に仕ふ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山玄蕃家康に屬して忠あり不幸にして嗣なし家康萬千代を以て其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アキヤマ ノブトモ 秋山信友 武田氏の臣なり新左衛門信任の子なり伯耆守と稱し武田氏に屬す天文十五年信玄信友を擢て土隊長となす明年信玄伊奈郡を伐つ信友高遠城に居り後勝賴高遠に徙るに及び信友飯田城を鎭す是時に當り木曾義昌武州山に據り信友と俱に叡遠尾濃の地を侵暴す元龜元年十二月兵を率ひて之に克ち明智城を拔き遠山入道宗叔父子及び首級二千を率ゐて郡邑を侵暴し濃叡の兵と美濃の上村に戰奈郡悉く平ぐ信友高遠城に還り信友飯田城を鎭す後ち德川氏に仕へ後ち德川氏に屬して忠あり家康萬千代を以て其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アキヤマ ノブトモ 秋山信友 武田氏の臣なり新左衛門信任の子なり伯耆守と稱し武田氏に屬す天文十五年信玄信友を擢て土隊長となす明年信玄伊奈郡を伐つ信友高遠城に居り後勝賴高遠に徙るに及び信友飯田城を鎭す是時に當り木曾義昌武州山に據り信友と俱に叡遠尾濃の地を侵暴す元龜元年十二月兵を率ひて之に克ち明智城を拔き遠山入道宗叔父子及び首級二千を率ゐて郡邑を侵暴し濃叡の兵と美濃の上村に戰奈郡悉く平ぐ信友高遠城に還り信友飯田城を鎭す後ち德川氏に仕へ後ち德川氏に屬して忠あり家康萬千代を以て其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アキヤマ ヨシタカ 秋山芳隆 陸軍歩兵中佐なり岡山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第三十九聯隊附として出征し同年九月三日清國盛京省エフヲ附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

アキヤマ ヨシトキ 秋山義時 揚心流柔術の祖なり四郎左衛門と稱す長崎の人初め武官と云ふ者に捕手三手活法二十八法を學ぶ後ち自から研究して一派を立つ（武術流祖錄）

アキヤマ ヨネキチ 秋山米吉 海軍中尉なり山梨縣巨摩郡穴山村の人明治三十三年十二月海軍兵學校を卒へ恩賜の双眼鏡を拜受す翌年八月少尉に進み三十六年八月更に中尉に進む日露戰役起るに及び軍艦嚴島より轉じて初瀨に移り分隊長心得となる同年五月十五日旅順港外にて出動中初瀨沈沒の時共に戰死す戰功により勳五等功五級に叙せらる

アキヤマ ユキ 明行 備後尾道の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アキヤマ ユキ 鑑行 平姓豐後高田派の刀匠にして弘治比の人なり（古今鍛冶備考）

アキヤマ 秋義 又秋吉に作る相摸の刀匠にして秋廣の子後秋廣と改む文和延文年間の人なり或は云秋廣の門人にして九郎五郎と稱す鎌倉に住す應安年間の人彫鑢甚た美なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アキヤマ 顯義 一名顯吉長門の刀匠にして初代顯國の二子顯吉の弟應永年間の人なり或は云永享嘉吉年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アキヤマ 顯吉 長門の刀匠にして初代顯國の子應永年間の人なり一に云二世顯國の門人又云嘉吉年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アキヤマ 觀喜 備前福岡の一文字派の刀匠にして天福年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アキヤシ 紹芳 彦坂氏江戸幕府の士にして冶法を水心子正秀に受く寛政比の人也（古今鍛冶備考）

アキヤリ 觀依 備前の刀匠貞宗の流にして承元年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アクゲンダ 惡源太「ミナモトヨシヒラ」

アクサフ 惡左府「フヂハラヨリナガ」

アクシチビャウエ 惡七兵衛「タヒラカゲキヨ」

アクゼンジ 惡禪師「アノゼンセイ」

アクタガハ ギョクタン 芥川玉潭 越前鯖江藩の儒者にして丹丘の男元澄の二子なり元澄字は子泉思堂と號す始めて鯖江侯臨部氏の文學に聘せらる文化十一年藩主詮允進德館を興すや之に與つて力あり是より藩の學風大に振ふ文政元年藩政紛雜、玉潭命を奉じて江戸に赴き其事を議して功あり玉潭和殺恰謹學を家庭に受け博く經史に涉り詞章を善くして書に工なり藩主詮熙詮允に侍講し詮勝立つに及びて益殊遇を蒙る所著詩文集若干卷あり天保十三年二月廿日歿す年五十六（日本教育史資料）

アクタガハ タンキウ 芥川丹丘 京師の儒者なり名は煥、字は彥章、養軒と號す宇士新に學ぶ著書丹丘詩話、薔薇館詩集、管蠡奉獻集あり（名家全書、鑒定便覽、近代名家著述目錄）

アクタ ロクベエ 芥田六兵衛 秋月種實の家臣也臣杵鑑速當て兵三萬餘を率ゐて秋月を圍む攻戰數日種實勢窮り潔く能はず親族臣下を會し死を決し訣飲す涙を落すものあり六兵衛時に年十六進みて曰く臣能く鑑速を獲ん種實叱して聽さず明日兵九十四人を率ゐ出て敵に入らんとす六兵衛導を引て諫め敵に箭留を請ひ呼て曰く願くは白杵殿に見えんと刀槍を投棄て走て敵に入り進て鑑速を見種實の密旨を告ると詐り左右を避けしむ鑑速少年と輕侮し馬を下り長刀を杖て之を聞く六兵衛俄に起ち其の頭を攫み佩刀を奪ひ壓して其の首を斬り疾風の如く走り歸る種實機に乘じ奮擊て敵を卻く大に六兵衛の功を賞し惡の字を與へ惡六兵衛と稱せしむ（野史）

アクツセン 阿久津潛 陸軍歩兵少尉なり栃木縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て歩兵第四十三聯隊附として出征し八月九日清國奉省小孤山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アクトガハ クワンガイ 阿久刀川寬海 陸軍歩兵少佐なり舊常陸笠間藩士阿久刀川大江の長子なり明治七年征臺の役起るに及び之に從軍せんと欲し東京に出づ事既に遲く其志を達する能はず即ち陸軍教導團に入り卒業後福岡鹿兒島の二亂に出軍して功あり更に陸軍戸山學校に入り卒業後陸軍少尉に任ぜらる次で駐韓公使花房義質を護衛して朝鮮に出張し二十七八年日清戰役には中尉を以て出征し武功を樹て大尉に進み二十九年臺灣守備隊に屬し蕃匪を討伐して功あり三十五年後備役仰付けらる三十七年日露戰役起るや充員召集に應じて第一師團歩兵第三聯隊中隊長と爲り出征し同年十月末大連に上陸し旅順攻圍軍に屬し十一月二十六日旅順背面松樹山砲臺に夜襲を試み遂に敵丸に中ち岩村城に薄る城主遠山景任先づ卒し子勝長幼なり紋に鑒嫡家人と城を守り險に據り拔けず信友使を遣し鑒嫡を墨り幼兒を擁育し門胄を保つを以てす鑒氏許諾す信友城に入り鑒嫡に應し勝長を執へ甲府に送り織田氏賞を納るゝと稱す信長惡甚し近郡多く信玄に屬す三年長篠敗れて後國勢始めて衰ふ信忠師數萬を督し來圍す信友兵二千を率ゐて險に據り拒守す敵水晶山に輝し艦兵力衰耗す信友圍を衝て走らんと欲し果さず城中益々困む信友人に懲りて信長に謂ひて曰く我の死を敢まば余嘗元貞房と共に城を致して去らんと信長伴り諾す三人城を出つ信忠兵を伏し之を路に要し悉く捕へて長良川に磔殺す信友死に臨み罵りて曰く我れ信長と姻族たり何爲れそ此の如く殘忍なるやと切齒して曰く彼の終を觀るべしと乃ち瞑す（野史）

アキヤマ ヤスタラウ 秋山安太郎 海軍機關兵曹長なり佐賀縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て軍艦嚴乘組として從軍中同年五月二十日旅順口附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

アキヤマ フナン 秋山富南 儒者なり名は章字は子成文藏と稱す伊豆國安久村の人幼より學を好み群書に涉獵す老て州志の纂輯に志し官に請ひ州中を歷覽し豆州志稿十三卷、海島志二卷を編す文化五年十一月歿す年八十六（豆州志稿）

アキヤマ ヨシタカ 秋山芳隆 陸軍歩兵中佐なり岡山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第三十九聯隊附として出征し同年九月三日清國盛京省エフヲ附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

アキヤマ ヨシトキ 秋山義時 揚心流柔術の祖なり四郎左衛門と稱す長崎の人初め武官と云ふ者に捕手三手活法二十八法を學ぶ後ち自から研究して一派を立つ（武術流祖錄）

アキヤマ ヨネキチ 秋山米吉 海軍中尉なり山梨縣巨摩郡穴山村の人明治三十三年十二月海軍兵學校を卒へ恩賜の双眼鏡を拜受す翌年八月少尉に進み三十六年八月更に中尉に進む日露戰役起るに及び軍艦嚴島より轉じて初瀨に移り分隊長心得となる同年五月十五日旅順港外にて出動中初瀨沈沒の時共に戰死す戰功により勳五等功五級に叙せらる

アキヤマ スケロクラウ 秋山助六郎 陸軍歩兵少佐なり高知市の出身にして舊高知藩士秋山久作の長男なり明治二十三年七月榮を卒へ翌年三月歩兵少尉に任ぜらる二十七年日清戰役に從軍し平壤の戰闘に功あり中尉に進み爾後林木城海城牛莊田庄臺其他各地に轉戰し二十八年六月凱旋す二十九年九月臺灣守備歩兵第三聯隊副官に補せられ十月日清戰役の功に依り功五級勳六等に叙せらる三十一年九月大尉に昇任し後陸軍戸山學校在學を命ぜらる三十七年日露戰役起るに及び第三師團歩兵第十八聯隊附として出征し金州南山得利寺蓋平等の各地に轉戰し終に遼陽大戰に參加し八月三十一日遼陽の前面首山堡の激戰に於て戰死す享年三十六戰功により歩兵少佐に昇任し功四級勳四等に叙せらる

アキヤマ ソン 秋山遜 熊本侯の儒員なり孫太夫と稱す玉山の子（鑒定便覽）

アキヤマ ツマ 秋山津摩 越前守虎康の女なり下山殿と號す甲斐の人、世々豪族たり虎康初め武田氏に仕へ後ち德川氏に仕ふ津摩年甫めて十六家康の左右に侍し天正十一年萬千代を生む初め武田の族穴山玄蕃家康に屬して忠あり不幸にして嗣なし家康萬千代を以て其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アキヤマ ノブトモ 秋山信友 武田氏の臣なり新左衛門信任の子なり伯耆守と稱し武田氏に屬す天文十五年信玄信友を擢て土隊長となす明年信玄伊奈郡を伐つ信友高遠城に居り後勝賴高遠に徙るに及び信友飯田城を鎭す是時に當り木曾義昌武州山に據り信友と俱に叡遠尾濃の地を侵暴す元龜元年十二月兵を率ひて之に克ち明智城を拔き遠山入道宗叔父子及び首級二千を率ゐて郡邑を侵暴し濃叡の兵と美濃の上村に戰奈郡悉く平ぐ信友高遠城に還り信友飯田城を鎭す後ち德川氏に仕へ後ち德川氏に屬して忠あり家康萬千代を以て其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アキヤマ ノブトモ 秋山信友 武田氏の臣なり新左衛門信任の子なり伯耆守と稱し武田氏に屬す天文十五年信玄信友を擢て土隊長となす明年信玄伊奈郡を伐つ信友高遠城に居り後勝賴高遠に徙るに及び信友飯田城を鎭す是時に當り木曾義昌武州山に據り信友と俱に叡遠尾濃の地を侵暴す元龜元年十二月兵を率ひて之に克ち明智城を拔き遠山入道宗叔父子及び首級二千を率ゐて郡邑を侵暴し濃叡の兵と美濃の上村に戰奈郡悉く平ぐ信友高遠城に還り信友飯田城を鎭す後ち德川氏に仕へ後ち德川氏に屬して忠あり家康萬千代を以て其の家を繼ぎ氏武田を冒し信吉と名づけしむ十九年津摩病んで其の采地下總葛飾郡小金邑に死し妙眞院日上と法名し郡の本土敎寺に葬る墳墓に一松樹あり土人呼んで日上松と曰ふ（碑陰、甲斐國志、雍藪記）

アクタガハ ヨシヒサ 惡左衛門督「フヂハラヨリナガ」

アクタガハ タンキウ 惡源太「ミナモトヨシヒラ」

アクツセン 惡禪師「アノゼンセイ」

アクトガハ クワンガイ 惡七兵衛「タヒラカゲキヨ」

アクリヤウミンブキャウ 惡靈民部卿「フヂハラタダミ」

アクリヤウサフ 惡靈左府「フヂハラミツフヂ」

アクエモンノカミ 惡右衛門督「フヂハ

ラノブヨリ」

アケチ ミツタダ 明智光忠 光久の子にして明智光秀の從父弟たり字を次右衞門と稱し髮を剃り入道して長閑齋と號す光忠八上城主と爲る後ち光秀に從ひて二條城を攻め銃に中り傷つき知恩院に寓居して療治す因りて光秀の山崎の戰に會せず光秀敗死すと聞くに及び悔憤して曰く今より數日を歷は我が病癒んのみと乃ち光春と共に坂本城に自殺す時に歲四十三なり(野史)

アケチ ミツトシ 明智光俊「アケチミツハル」

アケチ ミツハル 明智光春(光俊又た光昌に作る)光安の子にして明智光秀の從父弟なり初め字を彌平次と曰ひ族を三宅氏と稱す後明智氏に復し左馬介と稱す天正十年光秀從軍の命を織田信長に受けて龜山に歸り光春を寢室に召し密かに謂て曰く余に一大事の在るあり願くは子が首を得んと光春曰く唯〻臣一人の首に止る乎と光秀曰く既に三人の首を約せり而して猶ほ足らざるが故なりと光春曰く此れ固に易々たるのみ思ふに大事必らず當に成るべしと光秀驚きて曰く何を以て我が大事を知ると光春曰く何ぞ君が問の奇なるや君常に恨を信長に挾く臣の能く知る所也と光秀曰く然り今將に信長を討たんとす而れとも汝が力を假らざれば能はず但恐る汝が之に從はざるを故に汝若し余か命を拒まは汝の生命を得んと欲せしなりと光春曰く君先つ臣一人に語らるれば臣當さに諫爭せん然れ共今事既に他に聞ゆ唯其の廣く泄れざるに及んで當に事を擧ぐべし猶豫機を誤らは臍を噬むの憂あらんと辭色共に勵し夜半急に勸めて兵を擧げしめ馳せて本能寺を圍み遂に織田信長を弑す光春先鋒を以て軍を率ゐ攻めて本能寺を陷る並河金右衞門と云へるもの信長の首及ひ白綾衣袖を獲たり光春乃ち陰かに之を匿さしめんとする時に金右衞門其の功を蔽ふを恚る光春乃ち諭して曰く織田信長嘗て甲斐を伐ち武田勝頼の首を辱むるや人之を誹譏せり今や主公之を見ば怨恨の深き信長の勝頼に於ける比に非ざるを以て必ずや戮辱詬罵して以て詬を後代に遺さん抑々天命は長ろべし足下の功勞は我れ後證たらんと泣きて之れを強請す是に於て金右衞門其の志に感じ乃ち之を光春に託す光春之れを僧西譽に命じて斂葬すと云ふ而して光秀覺らす光春を詰て曰く卿先鋒と爲りて未だ明證を得ず甚だ異むべし若し信長をして遁れ去らしむるに於ては存亡を窮めざれば大事忽ちにして終らんと是に於て光春其の實を告く利三之れに感じ僉餘の白綾衣を取り以て證と爲し事止むを得たり光秀二條第を圍み光春尋て安土を留守す而して羽柴秀吉師三萬を率ひて東上すると聞くに及び赴きて戰はんと欲して火を縱ちて城を焚き兵を卒ゐて馳す途にして遁兵に遇ひ光秀已に敗死すと聞き坂本に入らんと欲し粟津原を過ぎ秀吉の先鋒堀秀政に大津に遇ひ打出濱に戰ひ兵寡きを以て敗られ三百餘人之れに死す而して光春將さに坂本に至らんとするに敵兵坂路に充塞し以て之れを絕つ因りて光春馬を湖水に入れ徐々として大津唐崎を經て遂に坂本十三堂に逹して馬を堂柱に繫ぎ片紙に書して左馬介湖水を渉るの馬と乃ち之を鬣に括して坂本城に入る時に秀政等追ひ來たり圍み攻むる數重、是に於て光春光秀の妻孥を天主樓に置き自ら羅郭櫓上に登りて敵兵を招く乃ち敵將秀政自ら來りて其の故を問ふ光春乃ち不動國行及び二字國俊刀、藥研藤四郞佩刀、奈良柴茶器、乙御前釜、餌番建盞、虛堂書等の名器を漢織肩及び緋服に覆ひ之れを結ぶに婦人の繦帶を以てし且つ目錄書を附し之れを秀政に託し又二谷胄、黃金百兩を西教寺に贈りて後事を依託し光秀の妻孥及び我が孥を殺し而して火を樓屋に縱ち自殺す實に天正十年六月十四日なり(野史、常山紀談)

アケチ ミツヒデ 明智光秀 土岐氏の支族なり美濃の人祖父を光繼と曰ひ父を光綱と曰ふ(若狹守護代年數に云く光秀は若狹國小濱の鍛工冬廣の第二子にして幼時より鍛工を嫌ひ武藝を好みて近江に往き佐々木氏に仕へて明智十兵衞と稱し其の使者と爲りて尾張に赴むくや織田信長其の言語鮮にして進退度あるを愛し請ひ得て臣と爲す)と光秀歲甫めて十六にして元服を加へ十兵衞と稱し光秀と名く弘治二年四月齋藤義龍其の父を弑するや光秀の叔父、光安入道宗宿明智城に據りて之を拒く而して力戰勢屈し之に死す光秀之に殉せんと欲す宗宿制止して曰く是れ汝の死すべき地に非らず宜しく命を保ちて宗家を興すべしと乃ち其の子光春等を托す是に於て光秀族を携へて越前の穴馬に遁れ又諸州を遍歷し六年を踰えて歸り朝倉義景に仕ふ永祿八年冬人あり光秀を義景に譖して曰く彼が擧動を察するに智謀勇健遠く衆に超ゆ他日宿臣を輕蔑し恐くは異圖を懷かんと義景漸く之を疎斥す是に於て光秀遂に去りて長岡藤孝に仕へ步手と爲る然れとも其の老臣と協はずして又去る九年岐阜に赴むき始めて織田信長に仕ふ時に歲三十九なり信長其の智勇を愛し擢んでて士隊長に列す十年二月瀧川一益に從ひて北勢を伐ち上木、木股、持福等を下だし又た楠攝津守に箕城に克ち山路國友を高岡城に攻む十一年十月池田城を攻めて守將勝政を下だす十二年丹波を伐つ後ち元龜元年五月丹羽長秀と共に若狹を伐つ二年九月和爾城主和爾氏條を擊ち功を以て滋賀郡を賜はり坂本に城きて之に居り采邑十萬石を食む天正元年二月光秀柴田等と石山堅田を攻めて之に克ち七月自から木戶城及び田中城を攻め功を以て高島郡及び木戶、田中の二城を賜はり滋賀の郡領を併す二年三月從五位下に叙せられ日向守に任ぜらる三年春信長の命を以て族を惟任と改ため丹波に封せらるる時に國人所在に割據して一統せず光秀乃ち兵を率ひ赴き擊ちて之れを平く四年四月大坂の一向徒と戰ひて利あらず五年十月織田信忠に屬して片岡城を拔く後ち光秀丹波丹後の間に戰ひ多く城壁を屠り又人を殺すと其數を知らず其の波多野秀治を八上城に攻むるや敵兵固く拒きて屈せず光秀乃ち母を質と爲して成ぎを行ふ而して秀治及び弟秀尚を擒にして安土に送る信長之を磔殺す是に於て波多野氏の族人怨憤し光秀の母を斬る因りて世人光秀を指彈して謂ふ母を殺せりと光秀之を怒り八上城を屠りて最も慘酷を極め且つ信長が其の母を奪還するを竢たずして秀治兄弟を誅せるを恨む而して信長亦た光秀の詐僞卑怯を憎みて賞せずと云ふ後ち光秀赤井景遠を鬼城に攻めて之に克ち悉く丹波を平げて其の守護と爲り龜山に城きて周山と號す而して竊かに己を以て周王に比し信長を殷紂王に擬すと云ふ光秀人となり謹厚にして人に接して恭順嘗て信長讌を設けて七合入の盃を擧げて先づ柴田勝家に予へ次を以て光秀に授けしむ光秀辭して曰く臣能はすと信長刀を

脫し詰めて曰く酒を飮むか將た劍を飮むか汝の欲する所に任すと光秀乃ち酒を飮む光秀稻葉一鐵の家人那波和泉守齋藤利三を扶持し善く之を遇す一鐵信長に愬へて曰く光秀我が股肱の臣を奪ひ以て仕途を禁過すと信長乃ち怒り光秀の髮を捽み引き伏せて鮮血迸しるに至る光秀首を俯して曰く臣大封を受け士を養ふは全く君の爲にして臣の利を計るに非らざるなりと信長手を脫して曰く吾今刀を佩びざるを以て予幸に頭あるを得たりと十年五月德川家康穴山梅雪と安土に往き信長を見る信長乃ち光秀に命じて曰く孤嘗て濱松に過りし時家康待遇甚だ慇懃なり以て之れに酬いざるべからず汝馳走の事を司り努力して其の厚誼を報いよと光秀悅びて命を拜し大寶坊を定めて客館と爲し湖畔に幀り人を京畿に遣はし珍羞器玩を購ひ供具甚だ盛にして善美を兼ね盡せり信長鷹を郊原に放ちて歸途大寶坊を過ぎり其の鳥魚の腥氣あるを怒り草鞋にて薦席を蹂躪し器具を履碎す光秀更に亦之を設く(明智軍記に云く家康の安土に入るや光秀迎接最も謹み家人光春、光忠、光近等各々調を執る信長時に光秀を召し色を作して曰く汝司賓と爲りて山海の珍味を設け金銀を以て供具を裝ふ抑々孤は既に三鼇を踏み四海を掌握す天下の群牧皆な孤の旗下なり然るを汝何の故に斯く厚く之れを接享するや他日君主を饗するが如きは何を以て恭敬の意を表せんと乃ち左右を顧て曰く渠を擯却し以て他日を懲すべきなりと侍童數人扇を揚けて光秀を搏つ森蘭丸躍躍し鐵扇を揮ひて光秀の額を擊ち血流れて面に濺ぐと)此時に當りて羽柴秀吉軍に山陽道に在り信長に勸て西征せしむ信長秀吉の報を得て悅び命を畿甸の侯伯に下だし光秀を以て先鋒と爲し期を促して發遣せしむ光秀悵み且怒て曰く享禮未だ了らず又遠征を命ず醜虜胡ぞ此に至るやと乃ち珍羞玩器を湖に投じ馳せて坂本に還る尋て龜山に歸る信長嫉忍にして殺虐を好み臣下を遇するに禮なし嘗て酒を置て高會し醉に乘じ光秀を挾して其顱を搖し以て鼓節を爲す光秀怨恨數回蓄憤日久うして決意する所あり廿七日愛宕山に登て西坊威德院に舍し人を遣はして金銀を里民に頒與し竹木を伐りて路を作らしむ光秀時に卒爾として曰く本能寺の壍の深さ幾ばくぞと既にして光秀龜山に歸る六月朔日の夜左馬助光春を寢室に招き悉く傍人を退け謂て曰く余に一大事あり子須らく蚊幮の中に入れと光春頭を蚊幮の中に入れ何事なるやと問ふ光秀曰く余願はくは汝の首を得んと光春曰く唯〻臣一人の首に止る乎と光秀曰く既に三人の首を貫ふ而して猶は足らざるが故なりと光春曰く此れ固に易々たる耳大事必ず當さに成るべしと光秀驚きて曰く何を以て我が大事を知ると光春曰く何ぞ君が問の奇なるや君常に恨を信長に挾くは臣の能く知る所なりと光秀曰く然り今將に信長を討んとすれ共汝の力を假らざれば能はず但恐る汝か之に從はざらんことを故に汝若し拒まば汝が生命を得んと欲せしなりと光春曰く光づ臣一人に語らるれば臣當に諫爭すべし然れ共今事既に他に聞ゆ唯其の廣く泄れざるに及んで當に事を擧ぐべし猶豫機を誤らば臍を噬むも益なしと夜半俄かに軍兵を出だし桂川を濟るに及びて光秀策を揚げ大呼して曰く我が仇本能寺に在り努力する者は重賞あらんと衆始て其反せるを知る光秀兵一千を督して三條堀川に屯し光春騎兵三千五百を以て進んで本能寺を圍み鼓譟して登る信長の近侍森蘭丸長定兵馬の聲を聞き出でて望めば水色桔梗の旗幟已に寺門に遁れり信長長定を召し其敵兵の誰たるを問ふ長定對て曰く光秀なりと言未だ畢らざるに前隊已に殿庭に亂入す信長白單衣を着弓を以て敵を射しに弦絕ゆ乃侍女十文字の鎗を呈す信長之を以て暫く防ぎしが事の爲す可らざるを察し內に入りて障子を閉づ然れども銀燭未だ滅せず信長の影映するを見て天野源左衞門鎗を延ばして刺し殺せり光春其の屍を隱して出ださず光秀之を求めて得ず快々として樂しまず齋藤利三白綾衣の焦餘を搜得て之れを刺して勝哦を發すと言ふ明智光忠兵四千を率ひて二條城を襲ふ信長の長子信忠火を縱ちて自殺す是の夜光秀妙心寺に入る意剃髮せんと欲す光春等諫めて曰く古今先蹤なきにあらず請ふ旗を京畿に揚げて禁闕を護衞し以て武名を後世に傳ふべし亦愉快ならずやと諸老亦諫む光秀遂に坂本城に入りて更に湖橋を修め尋て安土に入りて悉く帛金を收め以て興羸を賞す時に朝廷光秀の威虐を憚り詔して使者を賜ひ安土に到りて慰藉す光秀傲然將軍を以て自ら居る而して之に應ずる者は市井無賴の徒若くは亡命の姦兇のみ列侯世族に至りては一も至る者なし細川忠興のごとき光秀の女婿なりと雖も使者を逐ふて絕を示す蒲生賢秀日野に據りて檄を四境に傳へて光秀始めて懼心を生ず既にして光秀荒木行重に佐和山を妻木範賢に長濱を守らしめ自ら京師に往き入朝して禮を行ひ三宅秀朝を所司代に滿尾茂朝を町司監と爲して京師を鎭衞せしむ又人心を收めんと欲し輦轂の戶稅を蠲き祠堂金を五山及び大德、妙心二寺に寄附す天皇詔して其戶稅を蠲くを嘉す光秀復た安土に往き將に日野を攻めんとし織田信雄の土山に次するを聞きて前むを能はず光秀初め以爲らく柴田勝家北越に在りて上杉氏と對抗し羽柴秀吉毛利氏と中國に相接し德川家康界浦に在りて圖城遠隔す而して信孝及び長秀は將に四國に濟らんとす筒井順慶は莫逆にして信澄は忠興の女婿たり此時に乘じて織田信長を弑殺せば天下圖るべきなりと而して意を遂ぐるに及び人を馳せ毛利氏に報ずるに其の人謬りて秀吉の軍陣中に到りて虜にせらる秀吉移文を見て乃ち喜悲交〻至り遂に毛利氏と成ぎを行ひ長秀、勝入等と東上す家康變を聞きて國に就き信澄は長秀の爲に殺され順慶、忠興亦來り會せず是に於て光秀安土を發し京師に逾き豫め守備を議す入朝して天顏を拜せんことを請ふ終に聽されず乃ち步騎兵一萬八千を率ゐて洞嶺に次し大に秀吉と山崎に戰ひ敗走す光秀遁れて靑龍寺に入らんと欲す會〻土寇群起して道を遮ぎり漸く間道を經て靑龍寺に入る時に見兵纔一千餘あり而して遁れ去るもの多く忽ち兵僅に數百を餘すに至れり城代三宅綱朝諫て曰く臣請ふ此に戰死せん宜しく疾く坂本に逃るべしと是の夜二更光秀及び村越三十郞、堀與二郞、進士貞運等潛に靑龍寺を出て伏見深草を經て四更小栗栖を過ぐ土寇路に要し藪中より竹槍を以て之を刺して光秀の右脇を洞す光秀急に馳する數百步にして馬より墜つ滿尾茂朝馳せ到る光秀切齒して曰く疾く首を刎れ以て密藏すべしと乃ち瞑す是に於て從者皆な自殺す茂朝光秀の首を取りて之を襯に裹み泥中に埋めて之に殉死す光秀歲五十七光秀旗を擧げてより僅かに十有三日なるを以て世に之を十三公方と稱すと云ふ光秀和歌を善くし嘗て志賀唐崎に松を植ゑ歌を作りて曰く「我ならで誰かはうゑんひとつ松心して吹け志賀の浦かぜ」と又た茶道に

通ず三男三女あり長は光慶次子字は自然、季子字は乙壽丸、女は明智光忠、細川忠興、織田信澄に嫁す（野史、常山紀談、茶人系傳全集）

アケチ　ミツヨシ　明智光慶　日向守光秀の子なり十兵衞と稱す英才にして孝德あり行年十四歳天正十年より病に臥して丹州龜山に在り同年夏五月父光秀俄に隱謀を企つと雖も光慶が賢才に恐れ必ず諫諍せん事を憂へ深く秘して之を告げず親族隱岐守をして附人とし僞つて西國出陣と號し遂に兵を催ふして京都に至り遽かに主君信長を弑し頓て勅宣を受て將軍に任ず乃ち早く將軍宣下の事を光慶に告げて彼れが心を悅ばせんと飛檄を以て之を告ぐ光慶之を開き却つて大に悲泣し鬱氣胸に逼て遂に卒せり（豹皮錄）

アケボノアン　曙庵「ナカジマシウキヨ」

アゲマキ　總角　京都島原里の娼妓なり元和中京師に助六といふ者あり任俠を以て聞ゆ其の姓氏を詳かにせず或は云ふ貴族に出づと蓋其の魚葉牡丹を用て記號と爲すを以つて也島原里青樓丹波屋に蓄ふる所の妓名は總角色艷千里に甲たり助六深くこれと相馴しむ人因て總角助六と號す四條街に家す僕を蓄ふ五六人居るに恒產なく亦兄弟妻子なし人と爲り淸秀にして鄙ならず內剛にして外柔志を高うして義に任じ强きを挫き弱きを援け俠を以て世に立つ又藝事に多能なり常に高門に出入して他の俠者と伍するを屑しとせず時に陶要人浪遊して京に寓す初朝倉義景の臣眞柄晴俊（十郎左衞門と稱す）勇天下に著はる義景の亡ぶるや其の役に死す子を某（七郎左衞門と稱す）と曰ふ家康其の名士の子たるを以て祿して以て麾下の士と爲さむと欲す未だ命せず病むで卒す子なし前に其妻の從弟陶七郎を養つて嗣とす七郎蓄と大內氏に仕へ旣に眞柄氏を冒かし改めて主馬と稱す妹あり色美に書を能くし忠輝に給事す忠輝は家康の第六子にして秀忠の弟也妹幸を得て側室と爲り盛寵あり主馬因て忠輝に出仕するを得仍ち本姓に復し更に要人と稱す要人慧敏倭便常に忠輝に事ふるに其好む所を勸め稍〻以て寵を取る夙夜忠輝に侍し大に威福を作す故を以て藩士これを怨む傅相山田某（長門守に任ず）深くこれを憂ひ屢〻忠輝を諫めて之を退けしむ聽かず要人懼れて某を讒す某知らず又顏を犯して諫む忠輝大に怒り侍臣に命じて之を前に戮せしむ秀忠これを聞き大に悅びずして曰く山田某は神君が擇んで以て弟に傅する所なり今弟擅まゝに之を誅する我其意を知らずと近臣高島伊織をして往て忠輝を責めしむ忠輝素と剛暴驕蹇旣に使命を聽き忿氣沸然伊織に謂つて曰く汝我が爲めに幕府に謝せよ某已に弟が家に相たれば即ち弟が臣なり今臣罪ありて主これを誅す何ぞ幕府に關せむ幕府尙ほ弟を怒りて橫虐と爲さば弟請ふ腹を刎り以て罪を謝せむ汝且之を思へ我が神君に於ける亦子也特に其後生の故を以て幕府に臣たる耳今小事必ず讓む何ぞ寬ならざるの甚だしきと言多く忌諱に觸る伊織已に退き謂らく是以て復命す可からず恐らくは其親を間する有らむかと徑ちに歸りて家居する三日幕府執政土井利重を召して之を問ふ利重乃ち退き伊織を其邸に召す伊織至り侍士を屏けむとを請ひ密に告ぐるに狀を以てし且曰ふ僕不幸にして此際に在り唯一死あるのみと直ちに刀を執り自から其腹を刺す利重驚きて之を支ふ逮ばず遂に死す利重復た殿に上りて具さに聞す幕府之を悼み其の弟を以て嗣と爲し銀卅枚を賜ふて厚く屍を斂めしむ又利重に命じて山田某の後を存せしむ忠輝の傅相皆川某遠山某共に忠輝を諫めて曰く往日伊織反命せずして自殺す幕府終に復た問はず是親に敦き也君何ぞ獨り大兄に負て幕府に抗するか願くは死臣の忠言を思ひ速かに要人を退けて之を遠ざけよ臣等敢て死を以て請ふと忠輝亦頗る悔ゆ乃ち陰かに厚く貲斧を賜ふて之を逐ふ要人竊かに意ふ今國家太子猶ほ幼なり幕府若し不諱あらば當に嗣て大位に即くべき者は吾が公に非らずして誰ぞ公にして祉を獲ば我將に大に用ひられむとすと遂に大逆を謀り京畿に往來して陰かに泯士桑客に結び忠輝の命と僞はり以て黨徒を誘ふ同九年癸亥將軍秀忠入朝して二條城に居り大に散樂を張る數日士民をして之を縱覽せしむ遠近來り聚り京中雜踏す要人黨人に約して曰く風烈しき日を俟ち上風より火を市家に放ち延いて城に及べは則將軍必ず之を他方に避けむ是時に當り我が徒爲めに奔馳して火を救ひ遽かに御馬に逼まらば一刄の下に必らず志を得るあらむと京商越前屋源八亦謀に與かる助六素と源八と友とし善し相視ること親戚の如し一日之を訪ふ會〻家に在らず老僕請て曰く主耶弱齡にして父母を喪ふ親信する所は獨り君あるのみ近日豪暴の徒と相結び飲酒是れ耽り驕傲自ら高うす奴數〻之を諫むれば輙ち曰く爾何をか知る我將に侯たらんとするのみ爾徐復た言ふ勿れと奴竊かに惑ふ伏して請ふ君警戒し之をして禍敗を免かれしめよと助六曰く諾是れ惡少年の爲めに誤まるゝのみ次夕我將に爲めに來り言はむとす耶をして門を出づる無からしめよと期に及むで助六至る源八酒肴を具へて且飲み且話す助六源八に伴はり勸めて曰く方今大亂始めて定まり天下未だ安ずる可らず野士鄕客猶ほ或は劍を磨き眼を張る若し豪の士あり大呼して起らば諸侯豈に應ずる者無らざらむ人生一世閒安むぞ能く終に草木と同く朽ちむ余嘗て陰かに士に結び已に數人を得たり卿獨り意無き耶と源八大いに悅び悉く謀を告ぐ因て曰く卿の志此くの如くならば我れ請ふ爲めに陶君に介せむ且つ近傍に黨士六七人あり招き請ふて倶に酌む亦よからずやと遂く僕を馳す黨士尋て至る是に於て樽を換へ肴を薦め轟飲歡を盡す助六乃ち衆に謂つて曰く諸君の謀る所も亦可なり況はむや陶君これが唱を爲し黨巳に聚まる事宜しく成るべきに似たり然りと雖ども竊かに謂ふに今將軍新に入朝して民太平を視す政令の及ぶ所恩威幷立し諸侯異心なく百姓怨氣なし此の時に方り獨戶の堀小臂を舉げて大事に當る恐らくは百一も成る無からむ且僕諸君と朝食して夕飮し居に屋あり體に衣あり分に於て亦足れり何ぞ遽かに封侯を以てするを爲さむ今の計を爲すは陶某を捕へて狀を官に首するのみ啻に禍を免かるゝのみならず誠に國家の爲めに忠ならむ諸君試みにこれを圖れと衆肯て言ふ者なく色相亢し目相瞋らす俄にして一人突起し助六を攫み擊つて之を斃す五人急に刀を拔く助六前後相向ひ二を殺し三を傷つく某一人牆を踰えて逃る遂に傷つく者二人を縛し因て源八に諭し市尹三枝氏の廳に詣りて首せしむ久頃らくありて吏來り引き捕へて去る官大に助六源八を賞し各銀五十枚を賜ふ初め傷ついて逃るゝ者往て要人に告ぐ要人懼れて近邑に匿る官諜跡忠輝に涉るの故を以て置て究訊せずして要人自から安むせず冀くは一計を作り禍を助六に加へ其の身を全うせむと復た京に入り

潜かに馬術に住す時に助六銀を賜ふを以て酒食に易へ每夕友を延きて宴を張り或は寅夜に至る要人これを覗かひ知り一夕助六の宅に抵り急に戶を叩く僕應じて曰くいづれよりぞと要人倖はり答へて曰く市尹の邸より尹公遽かに助六を召す宜しく輿に倶に來るべしと戶開けば隨つて入る時正に丑の下刻客已に散し助六沈醉して厨口に假寐し鼻聲齁然要人刀を脫し官命と呼び直ちに助六を擊つて額に中る助六驚き起ち枕頭の刀を執つて之に應ず流血眶に入り器に蹶ついて仆る要人圖つて之を刺し殺す一僕棒を提げて其の背を撻つ燈滅す要人暗に乘じて逃れ去る頃くありて衆僕燈を點して隣人を呼ぶ而して助六死せり隣舖を得たり衆倶に緘を開いて之を讀むに文に曰く僕陶氏要人と稱す嘗て忠輝公に仕ふこのごろ病を告げて骸骨を乞ひ來りて痾を此の地に養ふ爰に助六といふ者あり多く凶徒を聚め敢て大逆を謀る何ぞ料らむ叨りに僕を稱して謀首と爲し遂に事忠輝公に出て以て廣く其黨を結び期するに萬一を徼幸するに至る天網之を漏らさずと雖も恐らくは禍基漸く大ならむ僕謹むで國家の爲めに之を誅し且以て忠輝公の爲に寃を雪かば僕亦冀くは以て難を免かるゝを得む敢て擅まゝに鬪を作すに非ざる也伏して乞ふ明官の之を察せむをと衆書を攜へて官に訴ふ官書を納れ僕をして助六の屍を收めしむ竟に究訊せず妓總角助六死すと聞き慟哭哀傷殆ど生るを欲せず悒々將に疾を成さむとす已にして奮然自ら謂ふ吾不幸にして勾欄に入り路柳牆花人の折取に任す然れとも靑心芳意未た嘗て君の所に在らずば非ず況むや已に同穴を約して未だ合巹に及ばざるも猶ほこれ夫妻の如き也汝陶奴、情に義に共に天を戴かず楊枝縱ひ風に勝ふるに力無くとも蕉葉猶ほ雨を捲くに心あり女亦人なり且に手足眼口あり苟しくも其志を一にせば豈に天祐なからむ然りと雖とも身勾欄を出づるに非ざれば事或は成すに難からむと乃ち其主に請ふて曰く助郞の婢に於ける愛遇く恩重し郞視て妻と爲し婢仰て夫と爲す固より他客の比に非らず是れ主の知る所也今郞不幸にして賊の爲めに殺さる婢が心將に何如せむとす且郞素と孤獨今より後落葉墓に堆するも人の之を掃ふなけん伏て祈る主公恩惠の餘婢に賜ふに其身を以てし以て庬尼を晉我君に効すを得せしめば婦死すとも朽ずと涙下りて仰がず主恩傷して之を許るす助六の友に難波屋治助といふ者あり屢〻丹波屋に遊び總角の操心あるを知り嘗て約して云ふ汝櫻を出づるの後我汝を以て吾か妹と爲し助六の爲に柯を執らむと是に於て往て之を弔す總角悽然涙を揮ひ告ぐるに其志を以てす治助嘆賞し久うして曰く汝苟しくも報仇を志さば我將にこれを助けむとす然れども圓頂して櫻を出づるは俱に良計に非ざる也吾聞く要人年なほ壯且修行の士に非らず豈に其時に來りて花柳を訪ふを無らむや此の時を以て圖らば則志得易き耳と乃ち樓主に謝して曰く我嘗て助六と兄弟の交を爲す助六總角を妻視す我亦應に之を婣視すべし婣已に身を乞ふを得たり理宜しく攜へて我が家に至るべし獨り艷なる彼の女子の我に在るないかむ嫌ひを避けざるを得ず、請ふ且らく之をして卿か所に在らしめよ衣食の資は我敢て卿を煩はさずと主曰く敬て命を奉ぜむ請ふ多く慮を勞すること勿れと居ると數月要人しば／＼衆を率ゐて某樓に遊ぶ港屋の妓吉野と狎る總角之を察知し以て治助に謀る一夕要人果して樓に登る治助これを時とし一妓を攜へて其樓に登り就て棊局に宿す總角亦來り遊び佯はりて治助に邂逅するまねをなし妓と俱に局に入り談偶〻寅牌に至る頃くありて要人圊に如く、治助起つて之を尾し僅かに懸燈の下に抵り後より之を擁し急に總角を呼ぶ總角馳せ應じ劍を脫き要人に向つて曰く夫助六の爲めに讐を報ずと徑ちに其脇を刺し力を究めて之を劉る妓も亦治助の刀を執りて之を擬す要人痛みを忍び嘆して曰く烈なる哉婦や請ふ擅まゝに甘心せよ但問ふ後より擁する者を誰れとか爲ると治助答へて曰く商人治助なり嘗て助六と友たり義因て此に及ぶ君已に女の志を感じて安死す僕獨り情無からむ哉若し匿せらるゝを有らば請ふ試みに言へと要人謝して曰く我巳に此に至る復た何をか言はむ特に一事あり我家宗丸の胄、千代鶴の刀を藏す是れ義景より眞柄晴俊に賜ふ所なり我嘗て其家に養はるゝ故を以て之を傳ふ我死せば恐らくは此の物他氏に移らむ越前不老邑に晴俊の從弟仁兵衞といふ者あり豪農なり卿請ふ家僕をして二器を彼れに致さしめよ是を至屬と爲す凡そ有る所の家什資財は僕等の分取に任す我荷包中に齎らす金少許あり請ふ之を用ひ吾が屍を收め葬ましして其醜を嗤はしむることなければ竊汝がらずと因て總角を顧みて曰く汝刀を斜めにせば吾が吭抉れて死せむと治助傍らより之を助く遂に死す初め治助の要人を擁する要人賊と呼ぶ吉野懼れ伏す是夜會〻風雨甚だしく應ずる者なし已にして一家擾々近隣並びに至り馳せて所司代板倉宗重に告ぐ廳吏來りて二人を引く宗重廳に陞り備さに其狀を訊ひ大に二人を襃賞し總角に銀五十枚を與へて曰く是れ官賜に非らず余甚た汝が義烈に感ず因て私に之を與ふと又治助に大小二刀を帶ふるを許し以て其の義を旌はす更に奉行私邸の諸役に命じ要人を論じて反逆と爲し將に屍を日の岡に磔せむとす治助請ふて曰く要人死に臨み僕に囑するに屍を斂むるを以てす言猶ほ耳に在り僕負くに忍びず伏して願ふ君公大仁を垂れ屍を以て僕に賜はらば幸甚と宗重其の志を感じて之を許す但罪條を揭げ著はして之を日の岡に建つ盡し以て忠輝を警むる也旣にして總角治助に請ひ薙髮して尼と爲り以て助六に香花を奉ぜむとす治助曰く姑く是を置け我將に汝の爲めに親に議せむとす我汝を諒とせざるに非ず然れども此に一あり我か妹幼時痘瘡を患ひ首髮少なく廬漆の如く斑痕額に滿ち醜比すべきなし助六嘗て我に謂つて曰く令妹已に笄するも恐らくは終に售れさるを我當に乞ふて以て妻と爲すへしと時に我之に答へて曰く醜惡彼れの如し安くむぞ巾櫛に侍せしむへけむと助六又曰く令妹の資性柔順貞淑、已に針機に巧みに兼ねて絲竹書詠を能くす其容醜くしと雖ども其德甚だ美なり且妻何ぞ美醜を擇ばむ德何如を顧みる耳と我心に之を感荷す然れども敢て嫁せず妹之を聞き感泣して曰く人の棄つる所にして之を納るゝを許す恩義の厚き三生報じ匝し即ち箕帚を執らざるも妾に於て足れりと其死を聞くに及むで哀感す意なし今汝夫の爲めに仇を報じて已に一節を立つ汝にして尼と爲らば妹は則身を以て殉ふるならむ我甚だ之を憐む汝請ふ其事を以て之を妹に讓り其れをして因て以て身を終へしめは則妹亦一節を立て而して我助六と幽明に相喜ぶを得む況はむや汝は即ち別に琵琶を抱き改め嫁する者と太だ異なるをやと總角曰く已に請ふ所を得ざれば寧ろ死あらむのみ但事貴妹に關る且君の厚意に背くも亦忍びさる所也事已に斷くの如くなれば唯命

是れ從ほむと是に於て治助總角なる以て已れが妹と爲し其從弟野口其兵衛に嫁す妹祝髮して浮圖尼と爲り亦庵を其里に結び塔衣鑊飯日夕佛に事へ專ら助六の爲めに後福を祈る後總角男を生む而して夫病むで歿す遂に比丘尼と爲り來て庵に入り亦亡夫及び助六の爲めに浮圖道を修めて庵中に終ふ治助が妹善く佛經を讀み深く其旨を領し遂に一寺を創し寂するまで終身人道を知らずと云ふ(事實文編)

アケヤ　キサイ　揚屋喜齋　絃家なり頗る三絃の道に深し特に六節懸に長なり慶安明暦の間其の名最も著はる天下一平左衛門、庄左衛門等と名を齊うす(聲曲類纂)

アケラ　キウカン　明浦宮鑑　勢州の儒人なり曇梅を嗣きて甚だ清奇あり遠く補之の風を學びて尋常儒家の流に非ずと云ふ(本朝儒史)

アケラ　クワンカウ　朱樂菅江　有名なる狂歌師は山崎名は景貫字は道交通稱鄙助といふ牛込二十騎町に住す幕府の先手與力なり內山椿軒の門に入りて廣く和漢の學に涉り最も和歌を能くす後蜀山人等と共に狂歌をもつて名聲世に聞ゆ菅江の名は初め俳名を貫立と云ひしを以て入皆貫公々と呼びしか菅江と書きしといふ中頃菅江の名憚ありと爲して漢江と改む日光宮公邊親王之を聞て曰く菅江何ぞ妨げんと因て後菅江に復す之に朱樂の二字を加へしは安永の頃人と酒を飲み戲れに行燈の紙に「我のみひとりあけら菅江」と書せしが初まりとす淮南堂一に夢陀利華庵と號す著書に大抵御覽狂歌大體等あり斯道の虎の卷なり元文三年十月廿四日に生れ寛政十年十二月十二日歿す書山青原寺に葬る(狂歌崎人譚、古今狂歌人物誌)

アコ　阿己　尾張國の故なり其の歌新續古今集雜部の部にあり世に際ふる景清が愛妓五條坂の遊君阿兒耶は是なる乎

アゴキン　ジャウシュン　安居院淨俊　悟井宮の執事にして律師に任ず護良親王を補佐し殿法印良忠と同勤たり中興の大業成るに及び足利尊氏兄弟の讒言により良忠と共に獄に下され建武元年十二月十二日殺さる(太平記)

アサウエ　ヨシタラウ　麻植芳太郎　陸軍歩兵大尉なり德島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第四十四聯隊附として出征旅順攻圍軍に屬し同年八月廿四日盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサエダ　タカ　朝枝玖珂　防州吉川侯の儒臣なり名は世美、字は德濟、善次郎と稱す玖珂は其の號なり亦世美に從ひ侯に仕へ藩校の教授に過し小說を解せり(經定便覽、名家全書)

アサクベエ　カウ　安積覺兵衛　小笠原藩に仕へ騎なる軍功者なりけれど俟音を更めて訓とし呼て覺兵衛とす關原の戰殊に大功を立てたり大垣の役出て戰ふ覺兵衛敵三人に遇を負せ五首を取て主君に示し再び槍を執て出づ敵六騎前後より夾擊す覺兵衛屈せず戰敗合ならざるに二人を擒伏せたり時に礮丸流れて其一人を殪す三人驚慴し覺兵衛を捨て其傷者に集る覺兵衛亦藥を出して之に與へ俱に扶けて其營に送り又三兵衛亦藥を出して之に與へ俱に扶けて其營に送り又三人と戰ひ又三首級を獲たるを以て入賞し再び槍を執て出づ一人の覺兵衛の無禮を怒ることありて辭せずして其平の後覺兵衛侯の無禮を怒ることありて辭せずして其姓名を飯土用總內と改めて京師に寓住す侯怒て永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用して永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用して永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用して永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用して永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用して永く仕遇の道を閉ず水戸藩德川氏其英名を稔聞し收用總內と云へるもの足下の鑽實を受け沈淪年を經て我面目を起さしめよ侯對て曰く吾家世て飯土用某の果ぬと其罪の輕重を知らされども請ふ我が爲に救し以て我面目を起さしめよ侯對て曰く吾家世て飯土用某なる者を扶持せしと無し無ければ罪に處せん事もなしと扶持せしと無し無ければ罪に處せん事もなしと爲す川氏乃ち召して臣とす謁を執るの日原名に復せしむ其孫は即ち安積澹泊なり(豪雄言行錄)

アサカ　キウケイ　淺加久敬　金澤の國學者にして字は山鄉通稱丸之丞山井と號す淺香山の古歌に取れるなり天資雅致口財を言はず能く歌文を爲る又國史を諳に典故に精し嘗て徒然草を讀み歌氣の通曉し諸註の謬れるに病み勵精して諸抄大成廿卷を編輯し眞享五年上梓して藩主前田綱紀に進む綱紀曰く精は精なれども一片の裝心近稼を褥益するに足らず惜らくは力を架典に盡さずして擅に梨棗を梓と久敬慚愧して退く凡そ久敬の纂寬する所の雜記漫錄數十卷今猶好事家の傳寫する所なり(燕臺風雅、徒然草諸抄大成)

アサカキ　サイ　安積希齋　水戸の人なり名は真吉介之丞と稱す寛永七庚午歲生る性學を好み頗る詩に嗣ふ希齋と號す是時府下學に志す者少し義公敬に真吉を貴す交正信の幼なるや安積と淺香と邦音相通ずるを以て入誤りて淺香と書す竟に誤を傳へて改めず公其眞を失するを以て真吉に命じて其正に從はしむ年三十七寛文六年丙午七月十七日を以て歿す希齋詩集あり(盆雲錄)

アサカ　ゴンサイ　安積艮齋　文章家なり奥州安積郡郡山の人父を安藤筑前親重といひ同地八幡社の嗣官にして安積比止爾命の五十餘世の孫なり艮齋、通稱を祐助といひ諱は重倍單に信を以て行ふ幼より讀書を好み二本松藩信今多八本藩民に從學して頭角を露はす十六歲の時出でゝ近村の里正今泉氏の壻となり其妻に據はる祐助大に發憤し翌年單身出奔し江戸に向ふ旅費乏しく艱難を嘗め法華僧日明の拯ふ所となり遂に其紹介に依て佐藤一齋の僕となる日明は祐助刻苦勉勵且つ薪水の勞に服し且つ讀書し夜間睡眠を催すに逐へば煙草の脂を眼に塗りて自警す二十一歲より林祭酒の門に遊び業益々進む二十四歲の時初めて雌を碑田驢河臺土屋邸邊に下し徒に授く見山樓と號す日夕富士山に對するを以てなり其文を行る艷麗富贍にして自ら一家の機軸を出す四十一歲の時文哈三卷を刻して公行するに及び名聲頓に海內に震ひ文章ないふもの先づ指を艮齋に屈す四十六にして初めて丹羽侯の文學となり五十三にして奥州二本松に下り藩學教授となる居る幾くならずして江戸に祇役し永田町藥蟲尻に居る嘉永三年歲六十にして昌平黌教授に任じ師一齋と共に育英の任に當る萬延元年庚申十一月二十一日歲七十六にして昌平黌官舍に病歿す所著、艮齋文略、同續、詩略、遊豆記錄、東省標錄、艮齋閒話、史論、熙朝名賢錄、烈婦傳、加藤清正傳、魏叔子文抄(以上上木)論語良註、南柯餘稿、洋外記略、論語簡端錄、記事本末評本尊數十本あり皆有用の著作なり艮齋出類にして眇目蓬頭亂髮の態に伴せず敢て邊幅を飾らず人と談論すれば人皆之を畏る

時酸苦を經しが爲めに後生を誘掖するに勉め譚々教へて倦まず性最も謙讓にして終身他の短を言はず終生の嗜好は七ゝ山水の遊觀に在り本所番場町妙源寺に葬る日明師の緣あるを以てなり男文九郎重允嗣ぐ(石井研堂氏寄贈)

アサカ　ゴラウ　安積五郎　勤王の志士なり江戸の人諱は武貞通稱五郎淺草に住みて寶卜を業とす軀幹長大龍眼虎鬚にして其容宛然畫ける天王の如し文久三年八月侍從中山忠光が大和に兵を擧げし時岡見留次郎等同志の者十四人と共に其群に入り十津川及び坂本村にて奇計を出して屢ゝ敵を惱ましゝが遂に利あらず九月二十三日の夜竊知堂村にて津藩の兵に生擒せられ後京都の獄に下されしが翌年二月十六日獄中に殺さる享年三十七明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を贈ちる(殉難餘稿)

アサカ　シンワウ　安積親王　淳武天皇の皇子也母は夫人縣犬養刀自、天平十六年閏正月帝に從て難波宮に行く途次脚氣を患ひ京に還りて薨す年十七

アサカ　タンパク　安積澹泊　水戸藩の碩儒なり名は覺字は子先覺兵衛と稱す澹泊は其の號、蓋し諸葛武侯が澹泊に非れば以て志を明すなしの語に取るなり又老圃常山の號あり晩に老牛居士と號す祖正信覺兵衛と稱し元和乙卯大阪の役、小笠原秀政に屬して戰功あり後ち水戸侯に仕ふ父貞吉纖て其の祿を食む澹泊生れて十歲朱舜水を師とし江戸に來る明年父死したるを以て歸り十三の時復た舜水に江戸に從ふ舜水甚だ其の才を愛して特に教授す居ること三年痘を疾みて還る故に親しく句讀を受くるものは僅に孝經小學論語其の他數部の書のみ然れども長ずるに及んで博學能文にして尤も史學に長ぜり初め義公四方の英俊を招集して日本史編修の擧あり澹泊之わが總裁に任ぜらる享保中幕府屢ゝ促がして史を獻ぜしむ時に論贊未だ成らず義公乃ち澹泊に命じて之が撰せしむ之より先き澹泊新井白石室鳩巢と交りて互に學事を切磋す澹泊虛心物を容れ能く人の善に服す然れども事に遇へば一に義を以て斷じ眞乎犯す可らざるの節あり是を以て二子稱して益友とす論贊を撰むに及びて屢ゝ鳩巢に示す鳩巢曰く安倍仲麻呂は羈旅の臣を以て唐の諸名家と交はり名譽を天下に擅にす而して論中一語の褒稱なきは何ぞや澹泊曰く仲麻呂は異朝の官爵を受け大唐國くるあり世人其の才に眩して其の罪を知らず甚だ謂れなしと鳩巢深く愧服す史享保庚子の歲初めて稿を脫す全編二百四十六卷、前後之に與るもの數十百人而して澹泊の功多きに居る史成りて義公之れを幕府に進む將軍吉宗有馬某を以て之を褒賞せしむ義公大に喜び物を賜ふ差あり澹泊亦鳩巢の功を上進す乃ち亦物を贈りて其の勞を謝す人滋ゝ澹泊の其の功に伐らざるか歎ず初義公の世に當て史館人を得る尤盛なり公薨ずるに及びて一時の名彦相尋て凋喪す澹泊獨存して世に仰ぐる老に至りて氣力衰へず其の命を奉じて烈祖成蹟を著はす時七十二歲なりと云ふ元文二年病を以て家に終ふ年八十二明治廿五年十一月正四位を贈る澹泊本と角兵衛と稱す俊才にして學を好む義公以爲らく其の器乃祖に減ぜずと乃ち命して覺兵衛の稱を襲がしむ既にして祿廩ゝ增し職番頭に至る澹泊學は伊洛を主とす然れども敢て之に拘泥せず又華音を著くす其の通鑑に於ける溫公の書を喜ひて朱子の綱目を喜ばず曰く綱目書法發明は議論剴切なれども頗る苛酷に過ぐる者あり其の人をして面あたを羞ひて嗣と爲し女を以て之に配す長女は各務氏に適ゝ第三女は烟川氏に適ゝ澹庵雌を下し教授年あり初め筮仕に意なし松浦侯の舊奬あるに感じ翻然竊を釋き起つ是に於て侯待するに重臣の禮を以てし政事に參與せしむ資する所甚だ尠からず澹庵の長嫡に遊ぶや大略庵を過ぎ竈を買ひて客舍に至り主人を上して之を解かしめんとす主人天滿神の祭日たるを以て辭す澹庵止むを得ずして之を鷹に包み臥床に置く竈夜半に至り鷹を破りて縱橫飛行し衣衾盡く汚す後ち澹庵之を十返舍一九に謂る一九之を借りて膝栗毛に作ると云ふ(愛日樓集)

アサカハ　ウンダイ　朝川雲臺　江戸の儒者にして名は壽字は不騫通稱壽太郎南山と號す平戸藩士なり文久頃の人(廣益諸家人名錄)

アサカハ　ゼンアン　朝川善庵　松浦侯の儒臣なり名は鼎字は五鼎江都の人父片山兼山原氏を娶る乃ち澹泊に命じて之が撰せしむ之より先き澹泊新井白石室鳩巢と交りて互に學事を切磋す澹泊虛心物を容れ能く人の善に服す然れども事に遇へば一に義を以て斷じ眞乎犯す可らざるの節あり是を以て二子稱して益友とす論贊を撰むに及びて屢ゝ鳩巢に示す鳩巢曰く安倍仲麻呂は羈旅の臣を以て唐の諸名家と交はり名譽を天下に擅にす而して論中一語の褒稱なきは何ぞや澹泊曰く仲麻呂は異朝の官爵を受け大唐國くるあり世人其の才に眩して其の罪を知らず甚だ謂れなしと鳩巢深く愧服す史享保庚子の歲初めて稿を脫す全編二百四十六卷、前後之に與るもの數十百人而して澹泊の功多きに居る史成りて義公之れを幕府に進む將軍吉宗有馬某を以て之を褒賞せしむ義公大に喜び物を賜ふ差あり澹泊亦鳩巢の功を上進す乃ち亦物を贈りて其の勞を謝す人滋ゝ澹泊の其の功に伐らざるか歎ず初義公の世に當て史館人を得る尤盛なり公薨ずるに及びて一時の名彦相尋て凋喪す澹泊獨存して世に仰ぐる老に至りて氣力衰へず其の命を奉じて烈祖成蹟を著はす時七十二歲なりと云ふ元文二年病を以て家に終ふ年八十二明治廿五年十一月正四位を贈る澹泊本と角兵衛と稱す俊才にして學を好む義公以爲らく其の器乃祖に減ぜずと乃ち命して覺兵衛の稱を襲がしむ既にして祿廩ゝ增し職番頭に至る澹泊學は伊洛を主とす然れども敢て之に拘泥せず又華音を著くす其の通鑑に於ける溫公の書を喜ひて朱子の綱目を喜ばず曰く綱目書法發明は議論剴切なれども頗る苛酷に過ぐる者あり其の人をして面あたを羞ひて嗣と爲し女を以て之に配す長女は各務氏に適ゝ第三女は烟川氏に適ゝ澹庵雌を下し教授年あり初め筮仕に意なし松浦侯の舊奬あるに感じ翻然竊を釋き起つ是に於て侯待するに重臣の禮を以てし政事に參與せしむ資する所甚だ尠からず澹庵の長嫡に遊ぶや大略庵を過ぎ竈を買ひて客舍に至り主人を上して之を解かしめんとす主人天滿神の祭日たるを以て辭す澹庵止むを得ずして之を鷹に包み臥床に置く竈夜半に至り鷹を破りて縱橫飛行し衣衾盡く汚す後ち澹庵之を十返舍一九に謂る一九之を借りて膝栗毛に作ると云ふ(愛日樓集)

アサカハ　ドウサイ　朝川同齋　松浦侯の儒臣なり名は鼎字は士修通稱晋四郎同齋は其の號なり嘉遯、眠雲山房、小泉漁夫等皆その別號なり年十五江都に遊び市河米庵の門に叩き請ふて塾僕と爲り一意に書法を攻む刻苦數年既に諸體に通じ筆力氣韻殆と師に迫る米庵甚愛し其成立をまち產を分たむとするの意あり時に都下の儒朝川善庵贅婿を求む同齋の人と爲りを聞き其の意居る三年にして歸る寛政戊午長崎鎭臺肥田豐州に從て長崎に赴き又南肥薩摩に遊歷す五年を經て歸る學益ゝ博く經業尤も精し時に松浦侯其の名を聞き之を延て厚く禮遇す列侯贄を取て業を受くる者十數藤堂氏大村氏尤も親昵する所なり文化十一年默齋卽世す歿するに臨み遺言して曰く汝ち三十餘歲學既に成る汝ち當に本姓に復し以て先業を繼ぐ可しと善庵之を聞て愕然始めて其生む所の父あるを知るなり然れども默齋撫育の恩生む所過ぐ遂に國く請ひて終身朝川氏を冒す乙亥の冬清國海舶漂ひて豆州下田港に到る奥俗盲語通ぜず下田は韮山縣令江川氏の管する所也善庵縣令の招に應じて筆語贈答し國體を辱しめず帛金若干を賞賜す弘化三年丙午閏五月幕府の召を辱うし謁を賜はる世之を希世の榮と謂ふ嘉永紀元十二月病に嬰り翌年二月七日を以て終る天明元年辛丑四月八日を距ること五十九年遺屬して北總墓飾郡小梅村常宗寺に葬る遺孤及門人胥議し私に之に諡して學古先生と曰ふ配春田氏男女子六人を擧く長は正準出て相田氏を嗣ぐ次は格字は天壽本姓に復し片山氏を稱す風世す第三子蘊字因て大聖寺藩横江成美の子鷹を養ひて嗣と爲し女を以て之に配す長女は各務氏に適ゝ第三女は烟川氏に適ゝ善庵雌を下し教授年あり初め筮仕に意なし松浦侯の舊奬あるに感じ翻然竊を釋き起つ是に於て侯待するに重臣の禮を以てし政事に參與せしむ資する所甚だ尠からず善庵の長嫡に遊ぶや大略庵を過ぎ竈を買ひて客舍に至り主人を上して之を解かしめんとす主人天滿神の祭日たるを以て辭す善庵止むを得ずして之を鷹に包み臥床に置く竈夜半に至り鷹を破りて縱橫飛行し衣衾盡く汚す後ち善庵之を十返舍一九に謂る一九之を借りて膝栗毛に作ると云ふ(愛日樓集)

を通ず同齋米庵に謀らず直ちに之を諾し約既に成て告く米庵艴然として叱して曰狡奴何ぞ吾に負くと机上の鐵鎭を取て擊たむとす同齋着皇俯伏罪を謝す米庵また迫らず莞爾として坐して曰く書法叢獻に褻すと雖も亦徒爲のみ我畢生の精力を書に寓す然れども他人の瓢具たるに過ぎず儒は人を濡し邦家に益す豈書家者流と同日に論ず可むや汝之を勉めよと時年二十五既に贅して專ら家學を究め數年にして米庵に代て敎授し兼て書法を授く一日米庵書を致して召て曰く頃日一農人村社の祭幟二旒を携て來る布長さ二丈餘字の大さ方三尺左右各七字を書す曰く昔者請ふ所の社幟なり年久しく布汚る今之を新にせむとす更にまた書せむことを請ふとこれを閱するに字は則我の書なり印も亦常に用ふる所なり然れども吾心にこれを書せしことを記せず我人の爲に字を造る大小必らず手記に謄す今支干を照し索搜するに此ことなし兒既に逝けり(男恭齋夭す)三治(義子遜庵)未だ贅せざる前なり當時たゞ足下あるのみ足下これを記するや否因て展してこれを示す同齋熟視し從容として曰く是なり是事ありこれ實は僕先生に代て書せる所なり米庵愕然として驚き且其故を詰る曰く往時農人來り乞ふ時に先生病床にあり意ふに此大文字病間必らず能しかたし僕平素大文字を試みむと欲す只紙筆の供すべきなきを恨む今幸にこれあり失ふ可らずと竊に門友および筆匠交魁等と謀て書し燈下に印影を摸刻してこれを捺し以て與ふる所なり事已に十餘年前にあり米庵撫然として膝を打て曰く足下の技茲に至る乎噫善庵は我が小米を奪へりと遂庵側にあり始て同齋の書する所なるを知り感歎巳まず米庵また曰く當時農人謝金ありしならむ同齋曰くあり貳十五金を奉す僕收て以て米石顚の法帖を購へり米庵曰く二十五金の價は款識米庵の二字にあり然らばこれ我が有耳、然れども今更に以て足下に賞せむと共に大に笑て止む同齋書法晩に諸家に出入し別に機軸を出す當時儒流にして兼て書法を能する者獨同齋あるのみ嘉永二年善庵病歿し同齋業を繼ぎ家聲を墜さず諸侯招待して經筵を開くこと先代に異らず藩主平戶侯淺草島越の邸にあり同齋夙夜侍講啓沃これを務む松浦伯爵謚是なり性溫厚よく人と交る小笠原明山公子、藤田東湖、日下部伊三治、勝野豐作、內山隆佐寺田淸三郞等殊に親交來往する所なり平生酒を嗜まず友來れば必ちず杯を擧ぐ徵醺氣旺し慷慨危言絕だ別人のごとし然れども每に喘息を患ひ瘋癇を成す嘉永の末時事に感じ疾を力め沐浴正服與に坐して堀織部正を見北地開拓の事を建議す家に歸り疾いよ〳〵篤く竟に肺炎に陷いり安政四年十月二十二日歿す享年四十有四小梅村常泉寺に葬る門人私に紹復先生と諡す配朝川氏善庵の第二女なり子なし片山述堂の子尙綱を養て嗣となす同齋著述する所尙書古今文管窺、眠雲札記、紀効新書秘解、天正本孫子曹註輯補、征韓實記、長政暹羅戰記等あり(中根香亭氏報)

アサカハ　ノリヒコ　朝川範彥　細菌學者なり舊高知藩士なり慶應元年正月土佐國土佐郡秦村に生る夙に醫學を縣立醫學校に修め卒業後上京して濟生學舍に學び造詣すること深し明治二十二年鄕里に歸りて開業し二十六年高知病院に聘せられて副院長となる北里博士の新に傳染病研究所を開くや之に師事して助手となり實布垤里亞血淸療法の研究に從事して大に斯道に貢獻する所あり又血淸製造所の創設せらるゝや專ら其製造を擔當す三十二年四月傳染病研究所部長となり主として講習を擔當し諄々として後進を敎導し餘暇を以て實習細菌學を著はし醫學博士の學位を受けたり著書に實布垤里亞血淸應用論一冊實習細菌學三册あり四十年一月十日病を以て逝く年四十三我國細菌學の恩人と稱せらる

アザカミ　シヤウザウ　阿坐上正藏　勤王の志士なり長藩士にして諱は正光通稱を正藏といふ吉田松陰の門人なり文久三年の五月壬戌艦に乘りて赤間關に行き十一日の戰には異國船と烈しく戰ふ後荻野隊に入りて隊長となり元治元年甲子七月の變には國司信濃に從ひて嵯峨天龍寺に屯し七月十九日の曉天龍寺を出て進て中立賣に至る敵兵迎戰銃丸雨の如し正光重傷を蒙むり靜に符袋を鎧袖より出し人に托して之を父母に送り戰況を詳報せしめ自ら喉を割きて死す年僅に十九(殉難餘稿、甲子殉難士傳)

アサギノ　ウラナリ　淺黃裏成　「シヤクヤクテイナガネ」

アサクサアン　淺草庵　「センサウアン」

アサクラ　カゲヒラ　朝倉景衡　日下部氏孫右衞門と稱す號は南山字は君采新井白石の室の弟なり、書數十部あり鎧著用次第、愚得隨筆、定西法師琉球物語、本朝軍器考圖式、及び遺老物語なり(近代名家著述目錄)

アサクラ　ゲンタラウ　朝倉源太郞　勤王の志士なり水戶藩士初めの名は廣高後景行と改め源太郞と稱し後に彈正と改む安政中牀杌廻と爲り又齊昭の護衞に選ばる文久三年京都に往きて藩主慶篤に從ひ日夜國事に奔走す元治元年甲子の變に於て那珂湊の陣に在りしが林正德の戰死するに及び井田好德と一方の隊を督して數ゝ敵兵を惱しゝが軍敗れて後同志と共に加賀に遁れしも翌慶應元年四月俱に敦賀に斬らる年三十明治四十年五月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる(殉難餘稿)

アサクラ　トシカゲ　朝倉敏景　姓は日下部孝德天皇の皇子日下部公表米より出づ後世廣景に至り斯波氏に屬す延元中越前坂南郡本鄕黑丸城に居る敏景彈正左衞門尉と稱す斯波氏三老臣の一となる長祿二年斯波氏衰へ其臣甲斐某家事を恣にす敏景擊ちて之を滅し徙りて一乘谷に住む應仁元年五月京極持淸と戰ひ之を敗る畠山義就敏景の勇を稱し山名宗全に薦む宗全景を越前の守護となす是歲敏景義尙の命を奉し甲斐八郞及び斯波氏の族を伐ち之に克つ尋いで髮を削り宗雄居士と號し英林寺と稱す久からずして卒す(野史)

アザクラ　ノブマサ　朝倉宣政　義景の再從兄弟なり初の名は藤十郞父を在重と云ふ宣政豐臣秀吉に仕へ天正十八年使番となり小田原に從ふ慶長庚子の役德川秀忠に從ひて上田城を攻む鎗を把て城門に薄る敵樓上より之を射る宣政鎗を延はして之を刺す後從五位上に敍し筑後守と稱す秀忠の三子忠長に附屬し掛川城邑二萬五千石を賜ふ寬永九年郡山に流さる十四年二月卒す年六十五子孫世々幕府に仕ふ(野史)

アサクラ　ノリカゲ　朝倉敎景　敏景の子、小太郞と號す兄を孫五郞景綱と云ふ妾腹の子なり故に坐次每に敎景に下る文明十五年七月景綱敎景を武戲場に殺さんとす敎景遁て髮を剃り宗滴と稱す敎景の母二位尼之を憤る景綱京師に走り細川氏に憑り名を元景と改む敏景の弟遠江守景冬にして力あり人呼で朝倉の小天狗と稱す其の子孫四郞景豐竊に宗家を滅さんとを計る元景之を扶く敎景の孫貞景即ち宗家の主宗滴等をして之を伐たしむ文龜三年四月朔日其不意を襲ひ急に敦賀を圍み景豐等を殺す元景步騎一萬八千を率ゐ越前に入る貞景伐ちて之に克つ永正二年四月元景死す宗滴功を以て敦賀の郡司となる三年七月越前一向宗の賊兵三十萬を嘯聚し河北を侵し邑里を燒く宗滴馳て根照寺に入り僧を擒にし率て一乘谷に到る貞景悅び宗滴及び山崎入道祖桂等をして邀へ戰はしむ遂に之を敗る其の脫し歸る者三分の一に過ぎず享祿四年八月宗滴子景紀等と兵八千餘を率ゐ能越賀の漂客及び遊佐神保等と戰ひ首を獲ること八百之を河岸に梟す十一月宗滴越前に歸る天文二十一年宗滴年七十九勢力尙衰へず兵を率て加賀に入り津葉を攻て之を拔く八月宗滴病甚しく歸て卒す(野史)

アサクラ　マスヒト　朝倉益人　和銅寶龜間の人なり位外從五位下に至る性和歌を好み頗る其の蘊奧を究む詠歌は載せて萬葉集其の他諸書に在り(萬葉集作者履歷)

アサクラ　ヨシカゲ　朝倉義景　越前の領主なり世々一乘谷に居る彈正左衞門孝景の子、孫二郞と稱す初名は延景天文二十一年六月大將軍義輝諱の字を賜ひ左衞門督に任ず永祿二年十二月義景從四位下に敍す五年八月大覺寺の門主義俊越前に來る義景爲に曲水の宴を設く皆以て亂世の一與となす之より先き加越の土賊越前の一向徒と謀を合せ嘯集亂を作す義景兵を遣はして之を伐ち賊と約して手取川を境となし以て半州の租稅を收めしむ尋て將軍義輝の命を受け之と和して女を本願寺敎如に要はす悉く加賀の地を以て本願寺に附す之を誓くして加賀の賊盟約に背き本願寺の貢米を抑留し又郡邑を侵し行旅の資財を奪ふ是に於て義景人を遣はし賊を諭さしむ賊僞り謝す九月二十日夜又急に來り月津御幸塚を襲ふ勝蓮華景基等力め禦ぎ之を敗る賊酋坪坂伯耆力盡きて來り降る是に於て義景の兵威大に振ひ近江以北盡く服す九年九月足利義昭來て義景に投す義景親族群臣と謀りて其の恢復の計を議す會ゝ義景の長子阿若死す義景之を悲み稍ゝ武事を怠る義昭去て美濃に行く義景文を好み和歌を詠ず嘗て細川氏の女を娶る卒す近衞氏の女を迎ふ又小宰相を愛し近衞氏を送り歸す又齋藤兵部少輔の女を納る少將と名く一男を生む之を愛王と名く家政漸く衰へ婦女口を出す又老臣祖導て歿し讒間大に行はれ賞罰當らず十一年九月織田信長義昭を擁立して京師に入る畿甸の諸侯皆服從す獨り義景疑て行かず元龜元年信長家康と兵十萬を帥ゐ敦賀に到る金碕手筒山の諸城遂に陷る信長猶進て一乘谷を攻んとす淺井長政義景と謀を通して信長の歸路を斷つ義景兵を出し之を追ふ信長夜に乘し京師に奔る六月信長長政を攻む義景族景健を遣して之を救はしむ二十八日景健家康と姉川に戰ひ大に敗れ僅に免れて歸る九月信長兵を攝津に用ふ長政義景と合し其虛を伐たんとす一向の宗徒亦義景等を助けて信長の歸路を遮ぎる信長兵を還し京師に入る十一月彼我勢屈し且つ北地雪深きを患ひ義景等義昭に因り信長と和す三年七月信長虎御前山に城く義景人を遣り小谷を援け自ら兵三萬餘を率て深ヶ瀨に陣す此に於て和復た破る天正元年七月信長兵を率ひ虎御前山に陣す八月長政の將叛く者あり長政援を義景に乞ふ義景兵を出して之を救ふ十日信長大嶽下野を攻め降す義景の兵敗を聞き稍ゝ脫し去る義景狼狽甲を棄てゝ走る信長の將佐々成政前田利家等追ひ至る義景の兵死傷頗る多し十五日義景僅に數騎を從へ一乘谷に歸る信長勝に乘し連りに諸城を降し敦賀に入る義景の族景胤景健等皆信長に降る義景朝倉景鏡烏居景近等と謀りて母廣德院及び愛王を亥山東雲寺に匿し書を平泉の僧徒に送りて救を乞ふ僧徒從はず十八日信長府中龍門寺に入る僧徒火を一乘谷に縱つ朝倉氏累世の貨物悉く灰燼となる景鏡素より反心あり乃ち義景を勸め母子と山田六坊に徙らしむ從者僅に八人景鏡兵二百を率ひ急に六坊賢松寺を圍みて之を燒き人を遣はし義景に謂て曰く運命旣に盡く乞ふ自ら計をなせと義景怒て曰く姦賊悟む可し假令我死すとも三年を出てすして讎を復せんと言未た終らず兵卒亂入す義景劍を把て自殺す四十一年鳥居景近高橋景信殉死す景鏡義景の首及び母子を信長に呈す或人景鏡の不義不道を惡み之れを誅せんと請ふ秀吉曰く彼無道と雖も我に忠あり之を殺すは歸路の道を塞く也と乃ち之を宥す信長義景の首を京師及び岐阜に梟し母子を殺す景鏡に命し族を土橋と改めしむ四月景鏡土寇の爲に殺され二子皆屠らる實に義景死後數月を出てず(野史)

アサクラ　アリシゲ　朝倉在重　仁左衞門と稱す朝倉六兵衞在重の二男元和元年大阪の役牧野忠成に屬し敵士の首を獲たり使番目附を經て町奉行にすゝみ從五位下石見守に叙任す慶安三年十一月十九日死す年六十八(寬政重修諸家譜)

アサコ　ジヨウワウ　淺子女王「アキノミヤ」

アサダ　ガウリツ　麻田剛立　天文家なり名は安彰、綾部絅齋の次子幼より穎悟人に負はれて外に出る每に仰て列宿を視其名を問ひ悉く之を記憶して忘るゝと無し漸く長ずるに及びて深く天文曆術の學を好み又醫術を究むるを喜び二事を修むること二十餘年の長きに及べり家貧しくして師を他鄕に求むるを難く又求むべきの師なかりければ少しも師に據りて受くる所なく獨學を以て遂に大に其の道に通し當時の學者未だ思はざるの發明をなすに至れり明和末年杵築侯に擢てられて侍醫に列し駕に從つて江戶に赴く然れども剛立は更に之を喜ばず反て我が學を妨ぐるものとし鄕に歸るや否や書を上りて仕を辭せんとす三度遂に容られざるを見て藩を脫して大阪に至る時に年三十八姓を麻田と變して醫を活業とし心を星曆に潜め空理を論せす測量實驗を本とし日夕研磨すること又二十餘年の長きに及び其學大に成り其名益天下に轟く諸侯禮を厚うして之を聘せんとする者踵を接するに及べりされども剛立は曾て應ぜず吾敢へて我が君を棄てんとの心にあらず今他に仕ふれば是れ舊君を棄つるなりとて祿の厚薄を問はず固く辭して動かざりき寬政九年幕府大に曆政を修むるに及び之を招かんとす剛立齡已に高く且つ出仕を肯せざるを以て高弟高橋作左衞門間五郞兵衞を召す二人江戶に至り曆政を改修するに及び其の精確詳密從來の天官と全く日を同うして語るべからず幕府之に嘗ゝ剛立が學の大なるを知り物を贈りて之を賞す剛立又醫學に深く當時あらゆる醫書に於て包羅せざるものなかりき常に語りて曰く之を人に試みて其功を得れども其理を得ざるは吾の未だ明かならざるなり又其の理

を得れども其功を得ざるは是れ眞に理を得たるにあらす亦吾の未だ明かならざるなり斯事あれば必ず斯理あり吾將さに深く詣り明かに其理を究めんとすとされども星曆を修めんとするの念更に急なりしかば逐に專ら醫學のみを攻むるに及ばず晩年星學の略成るに及び大に論著する所あらんとす病に罹り其の志を果さず寛政十一年年六十六にして終に歿す淸舶曾て西洋曆書二種を載せて來る其說珍奇學者傳へて寶とす之を剛立が發明する所に比するに符節を合するが如し(近世叢語)

アサダ カン 淺田敢 陸軍步兵少佐なり石川縣石川郡鄕村字番匠垣内の出身にして明治三十七年日露戰役に當り第三師團步兵第十八聯隊附中隊長として第二軍に從ひ出征し五月二十六日南山の激戰に於て負傷す重傷に屈せず中隊を指揮し後魏家屯第三師團第一野戰病院に入院し翌二十七日遂に逝く戰功に依り步兵少佐に昇任し勳四等功四級に敍せらる

アサダ ジャウザン 淺田上山 江戶の書家なり名は寛字は子裕一の號は大陸山人六兵衞と稱す書を細井廣澤に學んて之を能くす法帖、墨妙間記、京極帖、醒眠帖等あり(鑑定便覽、續諸家人物誌)

アサダ ソウハク 淺田宗伯 漢家の名醫なり信州筑摩郡栗村の人因て栗園と號す初名は直民後惟常と改む其先は源賴光朝臣に出づ筑摩郡淺田の莊に住するを以て淺田と名乘れり祖父、父共に醫術に通じ文章亦妙なり宗伯幼時は極て壯健而も魯鈍にして四書孝經左傳文選を習ふに通曉する所なし師大に之を卑む年十五にして徂徠集を讀み大に困苦し戰國策を讀むに至りて史記列傳を參照し標註を參照して稍〻會得せり然も志氣凡童に異なる所あり暇ある每に神宮野乘を讀んて古の豪傑を希へり而して母常に傍にあつて其立志を賛めたりと云ふ後高遠藩に遊び醫術を修め亦京都に入り師に就て專ら傷寒論を研究し又儒を賴山陽に學ぶ刻苦研磨の末江戶に出てゝ初めて業を開く三年一人の宗伯の名を知る者なし時に人の紹介に仍て幕府の醫官本康宗圓に謁し是れより紹介によつて他の諸名家に附し業漸く行はるゝに到れり偶〻在鄕の父危篤の報あり到れば已に後るゝ一日宗伯痛恨已む能はず大に名を立て家風を興し以て之に酬ひんことを誓ひ家事を親戚に托して單身江戶に還り晝夜勉勵せり當時宗伯惟へらく今や學と術とは二途に分れ何れも他に疎にして以て病を托するに足らずと即ち脉法私言、傷寒辨要、雜病辨要等を著はし病理治法合一の論をなし門人大に增加せり亦惟へらく醫道を壞る者は洋醫に若くはなしと原醫警醫記事等を著はして西洋說を辨駁せり是より十餘年姓名次第に盛に諸侯より招聘屢なるも辭して就かず安政五年將軍昭德公に謁して徵士となり後佛國公使の病を治して幕府より白銀の賜あり佛帝より時計燈爵等を贈られたり慶應二年昭德公の病を診して脚氣衝心とし江戶に還つて天璋院初め大奧の侍醫となり三十口俸米二百俵を受け法眼に敍せられたり幕府傾頽に方り和宮及天璋院の命に依り熾仁親王に謁し江戶鎭撫を請ひ周旋甚だ務めたり宗伯身醫を業とするも有爲の氣多く幕府の末路には川路左衞門、水野筑後、小栗上野介、黑川近江、井上信濃等と交を結び執政と時事を談じて口角沫を飛ばす事も屢〻なりし其他藤森天山、林鶴梁、佐田介石、羽倉外記等と交り篤し、明治四年職を辭し牛込に隱居せしに來つて治を請ふ者多く淸國公使朝鮮公使等常に來て診を求む明治十二年皇太子誕生の節宗伯は倚藥として常に宮中に伺候し年俸千圓絹四匹を賜ひ從六位に敍せられ是れより常に宮中に伺候せり十六年滋宮增宮兩親王醫藥の効なく薨去す宗伯自ら責て骸骨を乞ひしに許されず即ち其職にある十年明治廿一年五月東宮侍醫の職を辭し終身年金千圓を賜ひ且從五位に昇敍せられたり宗伯老て愈〻健爾來ますく漢醫家の泰斗として老後の勉强怠りなし明治二十七年三月十六日終に逝けり年八十一宗伯常に論語を以て道德の標準とし傷寒論を以て醫術の玉條金科とし常に同人に此兩書を讀ましめたり又詩文を能くし漢文殊に勁健なり著はす所上に擧げたる外我國の醫傳缺けたるを補はんが爲めに著はせる名醫傳、先哲醫話、杏林風月等あり常に蓄風を慕ひ髮を剃り駕籠に乘て往來す皇太子嘉仁親王の病を療するの功を以て卅三年七月十六日從四位を贈る

アサダ タケシ 麻田猛 通稱公輔初周布政之助と稱す其先は石見の人後長門に居る公輔生れて父兄導て歿す唯〻母に賴れり幼より史乘を好みやゝ群兒と異なり長するに及て自ら許るに身を立て親を顯はすは書をよむに如ずと選ばれて國學都講となる二十六にして檢使となり超遷して政務使となり國事に參與す周布の名やゝ著はる嘉永癸丑墨人來舶せしより天下多事朝威沈淪して物情囂然たり公輔慨然嘆して曰く朝權の移るや久し而して征夷府もまた柄を失ひ外夷の番日一日より甚し堂々たる神州安くんぞ胡羯腥羶の俗たらさるを保せむや然れども大義明かならざれば朝權復せず外敎攘はざれば國躰立たず吾儕皇土に生れ暖飽爲すことなくむば罪これより大なるはなしと之を以て藩侯に說く其後井伊安藤二氏の變あり藩侯また奮然當世に志あり公輔時に江戶にあり事を論して合はず事を用ふる者に中てられて歸國す幾ばくもなくして侯また東す公輔追及して再び前議を執て反覆辯論す侯其說を可とし機務に參せしむ侯世子と力を天朝幕府の間に竭し公輔は閣老及び土越の間に出入し規畫甚だ力む是時高杉東行久坂義助等幕議の因循決せさるを憤り密かに橫濱の外館に火せむと謀る其事やゝ洩る土州侯これを長の世子に報ず世子袂を攜て起ち單騎これを追ふ公輔時に會飲す世子出づと聞て亦馬に策つて至り東行等を見て罵て曰休めよ爲すこと勿れ容堂公の如きもまた模稜なるかなと土人大に怒る公輔曰侯朝廷の望を負ひ新たに幕議に參す而して曠日因循今日の擧の如きもために激成する所なりこれ模稜に非ずして何ぞや土人大呼して曰可否もとより論ぜず臣にして君の辱めらるゝに遇ふたゞ死あるのみと事急なり東行等回護して强て馬にのす公輔なほ罵て止まず東行刀を揮て斫むとす馬逸して中らず遂に邸にかへる土人來て偶剌せむと請ふ世子慰撫してこれを遣り親から老侯に詣て其罪を謝す侯曰く以て念となす勿れ益〻二藩の好みを成さむと又使を遣り公輔の嚴譴なからむことを請ふ故を以て公輔死を免れ職を褫はれ家を子に傳ふ既にして公則にこれを錄し姓名を改めて京畿の間に居らしむ麻田の名隱然として起る爾後天下の事日に急なり馬關の役あり尋てまた長藩禁門の戌を解かるゝに至り七卿長州に遁る重臣故老等各〻危疑を懷く公輔天を仰て嘆し時勢の漸く去ることを知り絶食數日遂に意見を上疏して自刄す時に年四十三といふ明治廿四年四月正四位を贈る(麻田猛傳)

アサダ タンジ 淺田丹治 陸軍步兵中尉なり宮城縣出身にして明治二十七年日淸戰役に於て第五師團步兵第十二聯隊附として出征中同年十二月十四日奉天省鳳凰城の戰鬪中負傷し同月十五日同所野戰病院に於て死去す

アサダ ヤウシュン 麻田陽春 百濟國朝鮮王准也の後なり神龜中正八位に敍せられ姓麻田連を賜ふ寶字元年藥方と爲る天平十一年正六位上に敍し石見守に任し外從五位下に進む陽春は萬葉作者の一に列し和歌を善くするを以て世に知らる(萬葉集作者履歷)

アサドノ 阿佐殿 後龜山帝の中宮なり誰の女なるを詳にせす宮に入り女御と爲り阿佐殿と稱す建德二年九月紅葉一枝を嘉喜門院に獻す門院和歌を作り之を謝して曰く「君がはや秋のみやゐに移るべきほとを紅葉の色にこそ知れ」後龜山帝代りて之に和して曰く「散らてなほ千年の秋も色そへよはこやの山のみれの紅葉」と後龜山帝位に即き中宮と爲す(大日本史)

アサナガ ジユイチ 朝長壽一 陸軍一等軍醫なり長崎縣出身にして明治二十七八年日淸戰役に於て步兵第四聯隊第二大隊附として出征中病に罹り廿八年七月十三日鳳凰城舍營病院に於て死去す

アサネバウ ムラク 朝寐坊夢樂「ムラク」

アサノ インエン 淺野筠圃 陸軍砲兵中尉なり長野縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び徒步砲兵第二聯隊附として出征旅順攻圍戰に從軍中同年十二月廿八日盤龍山舊東砲臺戰鬪の際負傷翌日楊家屯第九師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に敍せらる

アサノ ウヲカヒ 朝野魚養 醫道に通す本氏は忍海原連延長七年播磨大掾に任せられ尋て典藥頭を兼ね十年請て姓を朝野宿禰と改む宿禰は乃ち其祖先の稱、朝野は其の居る所の地なり(皇國名醫傳)

アサノ カトリ 朝野鹿取 大和の人正六位上忍海連鷹取の子叔父朝野宿禰道長に子とし養ふ延曆中請て連の姓を復す敕して鷹取の姓を追陞して宿禰と爲す鹿取少にして大學に遊び頗る漢史に涉り兼て漢音に通す始め音生に試みられ相模博士に補せらる後登科して文章生と爲る尋て遣唐准錄事と爲り式部少錄左大史左近衞少將を歷て弘仁中藏人に補せらる藩邸の侍講を以て從五位下に敍せられ左衞門佐と爲り尋て喪に遭ひて官を解く服未だ闋らざるに起て近江介と爲る數年にして右近衞少將に遷り內藏頭に轉じ正四位下に進み兵部中務民部大輔を歷藏人頭に補せられ左中辨に遷る天長中從四位上を授けられ太宰大貳に除せられ上表して之を辭す許さす赴任するに及んで帝紫宸殿に御して宴餞し文人を召して詩を賦し雅樂寮に樂を奏せしめ御製及び御服を賜はる十年參議に任せらる承和中左大辨を兼ね藤原愛發に代りて民部卿と爲る上表して之を辭す許さず數年にして越中守を兼ね從三位に敍せられ幷びに其の男女十九人に朝臣の姓を賜ふ十年薨す年七十鹿取才藝多く性亦謹愼事に臨みて明なり史幹を以て稱せらる(大日本史)

アサノ セイコ 朝野西湖 江戶の儒人なり名は晃敬、西湖は其の號又桂齋白毫の號あり(鑒定便覽)

アサノ セイシウ 淺野靑州 儒者なり父鐘法を善くす名は韋相字は巨卿、尾張の人、中西淡淵の門に學ぶ寛政壬子正月六日歿す年八十(古今諸家人物志、尾張名家志二編)

アサノ セイサ 淺野井左 大阪の俳人なり井左は其の號一に世外庵又採薇堂の號あり弘化中の人其の俳歌に曰く「菜畠や花さくまでの幾手入れ」(俳諧海內人名錄)

アサノ タカカツ 淺野高勝 初の名は道世後ち高勝に改む通稱は助左衞門又孫左衞門初め明智光秀に仕ふ光秀の織田信長を弑するや事倉卒に起る高勝適〻福地山城に留守して之を知らす後ち高勝竊に瀧川一益の臣堀田武助に投ず武助は其の妹夫なり豐臣秀吉高勝の賊謀に參らざるを以て故さらに赦して其の罪を問はず時に大津の城主淺野長政高勝の智謀あるを聞て之を招き其の子長滿丸を屬して曰く願くは卿其れ豚見を輔けて吾か業を興せと是に於て高勝長滿丸に近侍し誼を締して之に事ふ長滿丸も亦阿爺を以て呼ぶ長滿丸は幸長の小字なり時に甫めて八歲天正十八年秀吉東北條氏政を伐つ幸長父長政と俱に其軍に從ふ高勝も亦從ふ經る所の城邑皆下る獨り岩槻城固く守て下らず長政攻めて之を拔き幸長を遣して忍城を攻めしむ幸長奮戰して遂に之を陷る此役や幸長高勝が軍功あるを以て姓を賜ひて之を賞す、朝鮮の役に幸長加藤淸正等と蔚山に陣す明の大軍來り擊つ我が軍敗れて機陽に退く淸正幸長に謂て曰はく兵を勒して戰ひ且つ退かんと幸長曰く請ふ之を老臣高勝に謀らんと乃ち之を召す高勝至る淸正に謂て曰く君侯往年朝鮮王子を虜にす英武の絕倫なるは韓人の識る所なり獨り寡君世子は年少にして未だ嘗て一の戰勳なし今日明韓の大軍と鋒を交ふ是れ信に死を致して君父に報するの秋なり然れども君侯已に寡世子を攜へて東に歸る臣父た之を奈何んともす可らず抑〻韓人已に我主家の定算を識る臣願くは此を得て陽に寡世子と稱して死せん然らざれば何の面目ありてか寡君に見えんと淸正歎じて曰く吾甚だ卿に愧づと高勝曰く將帥の勇怯は死と不死とに在らず順ふに事宜如何に在るのみ隊伍を整へ精銳を嚙へ以て彼此の形勢を察するは是れ君侯今日の任なり死は其の所に非ずと淸正益〻歎服す幸長の甲斐に封せらるゝや高勝が累年の勳を賞して秩八千石を賜ひ又高勝及淺野右近等を召して感狀各〻一通を賜ふ高勝之を受讀して潸泣已ます幸長愠て曰く感狀猶は汝の意に請たざるや高勝曰く大臣は國家と休戚を同うす片言一行の美必らず喋々嘆賞せず小臣は則ち否らず率れ恩を貪ぼり賞を思ふ故に徵勳報ぜず寸勞賞せざれば則ち怨懟四出す而して人君土地財賄の給し難きあり是に於て乎感狀あり一言の褒以て千石の祿に代ふ是れ固と人主小臣の心を慰むるの術に出てゝ大臣を待つ所以の道に非ざるなり今我が公之を高勝に施す是れ其の流溺大息せざる能はざる所以なりと幸長曰く我過てり々々と、關原の役に諸將岐阜城を攻む幸長亦將に岐阜に赴き諸軍と之を合擊せんとす高勝曰く瑞龍寺城は近地に在て且つ他將未だ圖まず恐らくは彼れ備なからん其の虛に乘じて之を襲はゞ殲す可し其の衆と功を立つるは獨り功を奏するに孰れと幸長曰く善しと高勝自ら鼓を鳴らして進み響くにして城陷る亂平いて後一日德川家康外藩老臣を駿城に召ず本多正信命を傳て曰く豐公遺言して吾主侯をして其の世子秀賴を輔けて天下の政を治めしむ其の大公至正なる他人の敢て喙を容るゝ所にあらず然れども纔きに石

田三成流言して我公將に孺子に利ならずと之を危めんとすと一日誅に伏して忠義唱然神内皆な我が公の偉德に服せり若し他日汝等の主我公に猜疑ある三成の如き者あらば速に之を訴へよと言畢て即ち誓紙を徴す高勝獨り肯んぜずして曰く是れ臣等ふして其主に背くを教ゆる耳縱令幕府死を賜ふとも臣敢て命を奉ぜず不幸にして寡君天人の歸する所為し妄りに干戈を動かし敢て幕府に抗せんと欲せば二三臣と誠を盡して諫爭せん用ひざれば則ち一比干たらん耳豈に復た主の罪を訴ふるに忍びん乎と家康障を隔てゝ之を聽きて曰く高勝の言是なりと其の勝遂に繼む慶長十八年高勝病んで京師に殁す年七十六帝長嘯惜す（事實文纂）

アサノ　チャウソ　淺野長祚　德川幕府の儒下なり字は風卿、一に湛香、又蔣澤蝦侶、又梅堂と號す長祚は其の名、赤穗侯の支派にして三千五百石を領す前後歷する所幾千軸なるを知らず藏を栗本鋤雲に學ぶ後棒椿山の藏を惹ひ大に上進す京都在勤の時に當りて禁裏御造營係み勤むに依て御營誌と名つくる圖入の書五冊を綴りて朝廷に獻ず明治三年二月十七日殁す年六十五私に諡して文莊と曰ふ著す所瀛芳閣書藏銘心錄あり（扶桑獨人傳）

アサノ　トモシチ　淺野友七　京都の醫論師なり二世長野横笛の門人にして横笛の家號を讓られ櫪屋と稱す笛て島津家の囑托に應じ禁中に奉る醫論の原風を製造せり其の藏標は表面近江八景および奈良八景裏面は華山の馬、桃林の牛にして下藏は原在照なり安政六年十二月十二日殁す（京都美術協會雜誌）

アキノ　ナガアキラ　淺野長晟　小字は岩松幸長の弟なり幼より秀吉家に給事す秀吉家康と碁を圍む毎に御に侍す時案けれど即ち碁子を温めて之を進む家康其怜利を嘉みし常に其人となりを稱す慶長二年食祿三千石を賜ふ三年從五位下に叙し右衛門佐と稱す年弱冠にして小姓部隊長と爲る十五年大阪より京師に至る家康備中の田二萬四千石を賜ふ十八年幸長卒し子なし長晟嘗て任子たり大阪に成長す群臣避嫌し季弟長重を召し封を襲しむ榮慢服す改て但馬守と稱す十九年命

に居る天使至る毎に未だ嘗て其間に幽陪せずんばあらず以て自ら其能に拾り人に驕る事なき共にする者其指授を利し多く賄賂を行ひ之を誘く長矩人と爲り强硬興に屈下せず以爲己に義央と同じく公事を執る私に阿諛を爲すべからずと未だ嘗て請謁問遺以て其獻を取らず故を以て其相善からず他日長矩義央に謂て曰く公廷僕の不肖を以せず賓禮を典らしむ願くば獨以て僕に誨るあれ義央曰く僕と雖も又禮を諳んぜざるなり且つ事を行ふの間他人に仰ぎ雖し獨宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く怨む十四日命あり白書院に於て親しく答謁の禮を行ふ期に先ち諸老及び臣僚諸代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し長矩等廟堂の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至る吾輩何くにか之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義央曰く此等淺近の事獨尚知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の爲に嗤はるゝ無ちんやと元妃藤夫人内使を遣り思を天朝に謝すに會す先づ堤川與三兵衛をして行禮擧るを俟し還り報ぜしむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮擧らば請ふ僕に告げよ長矩曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く獨議する所何事ぞ僕常に與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其已を少とする知り色動く乃默して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子屢〻禮に曠し亦司賓の遇を辱しめざらんや長矩之を聞き憤怒に勝へず乃ち反て義央を呼び一喝刀を揮ひ鳥朝子に中り血流る義央眩惑興に抗するに意なし手を揚げ面を掩して俯す長矩復擊て背に中つ將に再び刃せんとす與三後より長矩を抱き止む與三管力あり長矩脫するを得ず闘久和緩り進て刀を奪ふ長矩切齒忿疐大友義孝品川伊氏義央を扶けて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て命じて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て長矩に代ふ是に於て讞決せず以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言春保對て曰く席を更へば則何ぞ忌まん乃ち命じ更ふるに黑書院を以てす四に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼以て諍を禁ずべし而して長矩率意闘狠血を殿階に蹂む私怨を以て公法を滅す其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊田安利を遣し田村氏の邸に到り長矩をして辭を受け自り約を守り奢侈を省き古風を尙ふ嘗て謂ふ凡そ人一朝幸を得れば君と爲り臣と爲り公侯城主家老と爲る同僚の武弁不幸にして陪臣と爲る者驕を下り伽閣して我が意を私第に幽す遂に諸老に命じ議して赤穗城邑を收め死を以て其相善からず他日長矩義央に謂て曰く公廷僕の不肖を以せず賓禮を典らしむ願くば獨以て僕に誨るあれ義央曰く僕と雖も又禮を諳んぜざるなり且つ事を行ふの間他人に仰ぎ雖し獨宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く怨む十四日命あり白書院に於て親しく答謁の禮を行ふ期に先ち諸老及び臣僚諸代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し長矩等廟堂の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至る吾輩何くにか之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義央曰く此等淺近の事獨尚知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の爲に嗤はるゝ無ちんやと元妃藤夫人内使を遣り思を天朝に謝すに會す先づ堤川與三兵衛をして行禮擧るを俟し還り報ぜしむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮擧らば請ふ僕に告げよ長矩曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く獨議する所何事ぞ僕常に與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其已を少とする知り色動く乃默して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子屢〻禮に曠し亦司賓の遇を辱しめざらんや長矩之を聞き憤怒に勝へず乃ち反て義央を呼び一喝刀を揮ひ鳥朝子に中り血流る義央眩惑興に抗するに意なし手を揚げ面を掩して俯す長矩復擊て背に中つ將に再び刃せんとす與三後より長矩を抱き止む與三管力あり長矩脫するを得ず闘久和緩り進て刀を奪ふ長矩切齒忿疐大友義孝品川伊氏義央を扶けて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て命じて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て長矩に代ふ是に於て讞決せず以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言春保對て曰く席を更へば則何ぞ忌まん乃ち命じ更ふるに黑書院を以てす四に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼以て諍を禁ずべし而して長矩率意闘狠血を殿階に蹂む私怨を以て公法を滅す其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊田安利を遣し田村氏の邸に到り長矩をして辭を受け自り約を守り奢侈を省き古風を尙ふ嘗て謂ふ凡そ人一朝幸を得れば君と爲り臣と爲り公侯城主家老と爲る同僚の武弁不幸にして陪臣と爲る者驕を下り伽閣して我が意を私第に幽す遂に諸老に命じ議して赤穗城邑を收め死を以て其相善からず他日長矩義央に謂て曰く公廷僕の不肖を以せず賓禮を典らしむ願くば獨以て僕に誨るあれ義央曰く僕と雖も又禮を諳んぜざるなり且つ事を行ふの間他人に仰ぎ雖し獨宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く怨む十四日命あり白書院に於て親しく答謁の禮を行ふ期に先ち諸老及び臣僚諸代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し長矩等廟堂の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至る吾輩何くにか之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義央曰く此等淺近の事獨尚知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の爲に嗤はるゝ無ちんやと元妃藤夫人内使を遣り思を天朝に謝すに會す先づ堤川與三兵衛をして行禮擧るを俟し還り報ぜしむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮擧らば請ふ僕に告げよ長矩曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く獨議する所何事ぞ僕常に與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其已を少とする知り色動く乃默して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子屢〻禮に曠し亦司賓の遇を辱しめざらんや長矩之を聞き憤怒に勝へず乃ち反て義央を呼び一喝刀を揮ひ鳥朝子に中り血流る義央眩惑興に抗するに意なし手を揚げ面を掩して俯す長矩復擊て背に中つ將に再び刃せんとす與三後より長矩を抱き止む與三管力あり長矩脫するを得ず闘久和緩り進て刀を奪ふ長矩切齒忿疐大友義孝品川伊氏義央を扶けて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て命じて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て長矩に代ふ是に於て讞決せず以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言春保對て曰く席を更へば則何ぞ忌まん乃ち命じ更ふるに黑書院を以てす四に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼以て諍を禁ずべし而して長矩率意闘狠血を殿階に蹂む私怨を以て公法を滅す其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊

牛を受て東府の石壁を修む土地深泥底に材木を著く修築すば威り垣壁崩壞衆危懼す弟長重曰く是奉行の過なり請ふ命じて腹を割き以て謝せしめんと長謝さずして曰く我左衛門佐をして奉行たらしむ石の崩るゝ唯一人の罪に非す咎先づ我に歸して無辜を殺戮せんと欲する我忍びざる所長重愧服す九月大阪亂を作す長晟國に就く十月兵を率ひ住吉に到り進て今宮に陣す蜂須賀至鎮と晉議し請ひて穢多塚を拔く又舟を以て葦島に渡り四面より之を襲はんと欲す城兵自ら船場を燒き昔郭中に入る長晟の兵船場に入り首を獨ひ士寇を誘き將に新宮城を攻んとす淺野右近の家月吉野熊野の賊徒長晟師を出すの蹤を聞き新宮城を攻め土寇二千餘と將に新宮川を渉んとするか擊つ土寇敗散す又高野の土寇蜂起し廻て佐野に到り土寇を起し將に紀伊を侵さんとすと左衛門佐及右近高綱等軍議す左衛門佐謂ふ敵を斯に誘ん高綱謂ふ退て樫井に戰ん議高松原に陣張を設し高綱獨り奴に樽の陣營を襲んと高綱泣下の土寇を起し將に長晟の陣營を襲ん既に佐野市場に至る長晟乃旅を整へ出て信達に向ふ野士寇に遮與し長晟の出軍を聞て樫井に到り退き長晟に問ふ長晟曰く悉く長矩原に樽を據し之を平ぐ東西和成るに及び長晟國に還り悉く餘賊を誅し之を平ぐ元和元年四月大阪吉村兵左衛門を遣て來て長晟の臣淺野右近左衛門佐桑田高綱に謂て曰く但州嘗て右府と親好あり若し舊義を存せば即ち金法馬三を但州に各一法馬を三老に送らん且禁廟三千慶下に列せしめん三人晉議し使者を辭し遣歸す大野治長又書を寄せて曰く鑒ほくは來り授けよ事若し成らば即ち紀和二州を以て長晟を封し攝泉河を左衛門佐右近高綱三人に割んと又議して長晟に以聞す長晟計を三人に問ふ僉曰く不可なり乃辭す板倉勝重檄を聽功あり元和六年笠岡城を賜ふ邑五萬三千五百石を食む長重茶を三齋に學び其道に通す寛永九年九月三日卒す年四十五鐵山道乎と號す子長直嗣く叙爵内匠頭と稱す邑を赤穗城に遷す（野史、茶人系譜全集）

アサノ　ナガノリ　淺野長矩　赤穗の城主なり小字は又一郎叙し内匠頭と稱す元祿十四年三月十一日勅使權大納言藤原實廉權中納言藤原保春東府に至る上臺使左衛門佐謂ふ敵を斯に誘ん高綱謂ふ退て樫井に戰ん議撫中納言藤原經興に至る德川氏長矩及び伊達宗春に命じ館待の事を分領せしむ長矩勅使に係る吉良義央大友義孝等曾高家を以て興れ日舊德に習はざるを以て之を辭す老中曰く義央老成故事に練達す刑宜く之と謀るべし然る後施行すると赤穗きこと無き也何を以て辭することを爲んと義央官爵の高きを以て諸高家の上

殺せしむ（長矩の辭世は多門傳八郎雄記に見ゆ曰く「風さそふ花よりも猶我はまた春の名殘をいかにとかせん」）是日命じて長矩の邸宅を收む十五日長矩の弟長廣を私第に幽す遂に諸老に命じ議して赤穗城邑を收め死を以て其相善からず他日長矩義央に謂て曰く公廷僕の不肖を以せず賓禮を典らしむ願くば獨以て僕に誨るあれ義央曰く僕と雖も又禮を諳んぜざるなり且つ事を行ふの間他人に仰ぎ雖し獨宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く怨む十四日命あり白書院に於て親しく答謁の禮を行ふ期に先ち諸老及び臣僚諸代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し長矩等廟堂の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至る吾輩何くにか之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義央曰く此等淺近の事獨尚知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の爲に嗤はるゝ無ちんやと元妃藤夫人内使を遣り思を天朝に謝すに會す先づ堤川與三兵衛をして行禮擧るを俟し還り報ぜしむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮擧らば請ふ僕に告げよ長矩曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く獨議する所何事ぞ僕常に與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其已を少とする知り色動く乃默して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子屢〻禮に曠し亦司賓の遇を辱しめざらんや長矩之を聞き憤怒に勝へず乃ち反て義央を呼び一喝刀を揮ひ鳥朝子に中り血流る義央眩惑興に抗するに意なし手を揚げ面を掩して俯す長矩復擊て背に中つ將に再び刃せんとす與三後より長矩を抱き止む與三管力あり長矩脫するを得ず闘久和緩り進て刀を奪ふ長矩切齒忿疐大友義孝品川伊氏義央を扶けて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て命じて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て長矩に代ふ是に於て讞決せず以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言春保對て曰く席を更へば則何ぞ忌まん乃ち命じ更ふるに黑書院を以てす四に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼以て諍を禁ずべし而して長矩率意闘狠血を殿階に蹂む私怨を以て公法を滅す其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊

アサノ　ナガハル　淺野長治　長晟の子なり母賤きを以て嫡に庶子と爲る從五位下に叙し因幡守と稱す頃て三次城に封せらる采邑五萬石長治像に居り約を守り奢侈を省き古風を尙ふ嘗て謂ふ凡そ人一朝幸を得れば君と爲り臣と爲り公侯城主家老と爲る同僚の武弁不幸にして陪臣と爲る者驕を下り伽閣して我が意を私第に幽す遂に諸老に命じ議して赤穗城邑を收め死を以て其相善からず他日長矩義央に謂て曰く公廷僕の不肖を以せず賓禮を典らしむ願くば獨以て僕に誨るあれ義央曰く僕と雖も又禮を諳んぜざるなり且つ事を行ふの間他人に仰ぎ雖し獨宜く以て自ら處する有べしと長矩心深く怨む十四日命あり白書院に於て親しく答謁の禮を行ふ期に先ち諸老及び臣僚諸代侯伯皆朝服して之に趨く元日の儀の如し長矩等廟堂の下に集り爲めに事を議す義央に問て曰く勅使至る吾輩何くにか之を迎へん階下に迎ふる宜しと爲すや否や義央曰く此等淺近の事獨尚知らず今期に迫り急に議す乃ち衆の爲に嗤はるゝ無ちんやと元妃藤夫人内使を遣り思を天朝に謝すに會す先づ堤川與三兵衛をして行禮擧るを俟し還り報ぜしむ與三長矩に謂て曰く幕下行禮擧らば請ふ僕に告げよ長矩曰く諸義央傍に在り與三に謂て曰く獨議する所何事ぞ僕常に與かり聞くべし然らずんば恐くは便宜を失はん長矩其已を少とする知り色動く乃默して起つ義央衆に言て曰く鄙野の子屢〻禮に曠し亦司賓の遇を辱しめざらんや長矩之を聞き憤怒に勝へず乃ち反て義央を呼び一喝刀を揮ひ鳥朝子に中り血流る義央眩惑興に抗するに意なし手を揚げ面を掩して俯す長矩復擊て背に中つ將に再び刃せんとす與三後より長矩を抱き止む與三管力あり長矩脫するを得ず闘久和緩り進て刀を奪ふ長矩切齒忿疐大友義孝品川伊氏義央を扶けて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て命じて長矩を囚へ田村邦顯の邸に幽す戸田忠眞を以て長矩に代ふ是に於て讞決せず以て天使に問て曰く血穢あり禮を行ふ之を如何せん權中納言春保對て曰く席を更へば則何ぞ忌まん乃ち命じ更ふるに黑書院を以てす四に還らしむ是の日將軍老中土屋政直を召して曰く今日天使に禮接するを以て人臣に在ては最も當に戒懼以て諍を禁ずべし而して長矩率意闘狠血を殿階に蹂む私怨を以て公法を滅す其れ死を賜へと政直乃ち大目附莊

田原に在り酒井忠次葛西雅氷東金諸寨を拔て之に會し兵を併て岩槻城を圍む城主北條氏房小田原に在り伊達與兵衞等留後して牙城を守る妹尾兼延片岡正則次郎を保つ長政の子幸長忠勝の子忠政及び鳥井元忠等兵一萬二千を以て四面合圍す長政命して火を街口に縱つ敵出てゝ禦き戰ふ幸長時に年十五忠政十六先登して前門車橋の上に薄る忠政兼延と戰ひ之を獲士卒力戰、死傷する者多し遂に次郭を拔く長政諸部を督し牙城に薄る守將笠を揭け降を乞ふ長政城に入り捷を行營に報す又命を受て忍城を攻む是より先三成佐竹宇都宮の兵を率ゐて之を攻むる旬餘下す能はず而して長政赴き攻む城中長政に詣り降を乞ふ長政之を三成に讓す三成已が功の果さゞるを愧ち欺きて曰く城中己に內應する者あり豫め明日を期し諸部合せ攻めんと長政之を信し兵を率て行田口に逼る三成等の諸隊敢て期に合せず敵慕り桿禦し死傷者數百人和議乃ち破る秀吉命じて加越の師を助け鉢形を攻めしむ長政等禁戰功微なるを以て肯んせず時に兵を進め房より二總に入り兵を分ち轉闘月餘城砦を得る前後合せて六十二秀吉其功を嘉みし還るに節度に違ふを以てせず津輕三郡亂る南部信直之を伐ちて克たず中納言秀次師を率て赴き援ふ長政軍に從ひ鳥屋碕城に抵り郡縣を點檢し租稅を定め松田太郎左衞門をして水澤を守り濱口外記に江刺を守り淺野重吉に鳥屋碕城を守らしめ九月西に歸る甲信二州を檢知して駿府に往く未だ幾ばくならず葛西大碕士冠蜂起し水澤を拔く岩井の黨悉く戍兵を殲し太郎外記の首を梟し佐沼城に蟻附し和賀稗貫賊亦群起す初め葛西大碕人累世土著す今皆秀吉の放逐する所となり胥議して謂ふ我儕餘邑秀吉に封せらるゝに非ず罪を遲參に託し籍沒せらる醜ひざる可らず代官目代を攻め屠り征討使を受るに如かず禦戰力竭きば則死せんのみと群冠嘯合喧囂邑里を侵掠す重吉特に鳥屋碕城を守る和賀義忠等檄を馳せ黨を樹て土寇二千を併せ十月鳥屋碕城に蟻附す重吉防禦力戰日を歷土寇倍ゝ加はる南部信直急を聞き自ら五百餘騎を率ひて應援し土寇の後路を斷つ重吉機に臨み城を出て力擊す信直の前鋒八戶直榮擊て賊を郤く賊猶ほ八森に屯す信直城に入り重吉に諭し城を塞てしめ携て三戶に歸る長政駿府に在り亂を聞き馳て東府に到り家康に見え淺野重長を名生の陣に遣し導て發し二本松に抵る十九年正月長政二本松に在り蒲生氏郷來り會す長政其手を執て曰く伊達正宗賊勢を援く滋蔓すれば則ち芟除し易からず請ふ速に發せよ氏郷乃ち師を發す既にして正宗家康が旅を岩槻に出すを聞て懼る潛に來り長政に陳謝し族盛重成實二人を送り質と爲す長政之を氏郷が名生の營に送り具狀して家康に報す家康東府に還る是夏九戶政實亂を作し逋亡を招集し郡邑を侵略し士民を虜掠す秀吉中納言秀次をして師を督せしめ氏郷及び堀尾吉晴等前鋒たり長政軍監たり衆を督し九戶城を攻む長政吉晴後門より入り追擊し橋上に戰ふ是の夜政實竊に來り請ふ幼主に南部本領を賜はしめば城を致さん長政許諾す明日賊徒弭散し諸將營に就く長政乃ち政實を携へ會津に赴んと欲す秀次命を待たず之を宥赦するを讒む命して政實を中途に誅せしめ秀次凱旋す長政從て京師に歸り政實に約するが如く南部氏の後を立しむ時に秀吉更に金貨を造る長政の家人僞金を造り連坐將に罪に陷らんとす家康之を憐み竊に來り其の故を審問し爲めに長政の罪なきを聽に辯明す長政深く家康を德とし親睦日に遲し文祿元年征明の軍起る長政兵を那古耶に遣はす二年六月秀吉長政及び黑田如水に書を齎し朝鮮に往しむ其書に曰く諸將晉州城を攻むと雖も城主牧司拒戰して未だ陷らず故に今長政如水を遣し軍監と爲す急に城を拔き牧司を誠し宜く捷を報ずべしと二人書を增田長盛石田三成大谷吉隆に寄せ以て韓に渡るを告ぐ長盛等先づ宇喜多秀家の營に會議す二人往て秀家に見え旨を告て我營に歸る長盛等人をして長程航海の勞を慰せしむ二人碁を圍み之を聞かざるが如し頃くありて長政三成吉隆來り訪ふ二人猶意を征黜の深きに屬す三成乃ち長盛吉隆を目し潛かに退去す二人猶未た識らず奮に黑白子を收めて後相謂て曰く三監來れりや左右曰く來れども既に去れり乃ち遽に驚き馳せて之を逐ふ使者三反すれども聽かず且詰りて曰く其吾儕に逢ふと碁擊の丁々然と孰れか要と爲すと遂に去る是に於て二人已むを得ず秀吉の命を諸將に傳て還る三成等深く憤り二人の圍碁に溺るゝを嫉む讒侮屢ゝ譖間を構ふ人と語る每に必ず說て之を誹謗す二人慚恨す長政の子幸長如水の子長政俱に深く之を悪り三成等を見る寇讐の如し秀吉薨後三奉行の姦を家康に愬へ又關原の役首として東に屬するは本此に起ると云ふ征韓日久し明軍數十萬韓を救ふ我師糧食匱乏會ゝ沈惟敬和平を議するも事未だ整はず在韓の諸將屢ゝ書を報し援を乞ふ秀吉之を憂ひ日夜諸將を行營に會して群議す一日秀吉家康及び利家氏郷長政と議し謂て曰く將卒皆郷里の情を懷き鋒矢鋭ならず或は明軍の夥多を懼る孤甚だ異域に愧づ我邦を以て家康に託し孤親ら海に航し十萬を督し中軍と爲り利家氏郷各十萬を以て左右翼と爲り韓地を蹂躙し明國に跋扈し大明皇帝と稱する亦快ならずや利家氏郷曰く人生朝露の如し我武を異邦に震燿するは嘗て庶幾する所なりと家康惟り艴然として曰く余弱少より弓を挽き戟を執り武を以て業と爲す方今諸將海に航し武を殊域に振ふ吾れ特り空虛を守り何をか爲ん吾年衰なりと雖も衆に先ちて海を渡らんと秀吉色を變して曰く卿命に逆ふかと家康應へず秀吉益ゝ怒り事將に破裂せんとす長政進みて曰く亞相の議論是なり諺に曰く鼈人を食ひ人亦鼈を食ふ方今畿西南海侯伯多く韓に渡る殿下如し航せば則東北將士亦多く從はん我が邦虛耗し外夷隙を窺ひ寇賊間に乘せば亞相雄偉と雖も之を奈何ともする能はず壞るれば則ち責め一人に歸す宜べなり航海を欲すと謂ふや殿下機斷甚だ往時と異なり是必ず妖狐の誑す所にして往時の殿下に非ずと秀吉震怒髮冠を衝く親ら劍を撫して曰く吁彈正の言何ぞ逆戾なる妖狐の謂得て聞くへきなり若し明かに對へずんば汝の驟首を刎ん長政泰然として曰く我儕戮を被る以て患と爲すに足らず頻年兵革屢ゝ起り之に加るに無名の師を發し醜夷を征伐し士卒罷困百姓究苦す今我か四海の內致て命を拒む者無し冀くは民と樂を同うし歛を薄くし賦を省かば天下安寧ならん然るに今殿下如し海に航せば則寇賊群起せん亞相縱ひ八臂六翼と雖も鎭する能はじ故に先驅たらんと謂ふなり殿下勝算皆之に反す是妖狐に誑せらるゝに非ずや秀吉奮起將に長政を斬らんとす利家氏郷長政を目して退き去らしむ長政俯みて曰く臣老たり命を吝まず家康曰く彈正去れよ德永壽昌有馬則賴強て長政を牽き退く長政命を待て自殺せんと欲す出ざる數日會ゝ薩人梅北宮內左衞門黨を樹て反し寇賊群起肥後を侵掠し熊本城を襲ふ秀吉大に駭き人を家康に馳

せ長政を召し謂て曰く聞く肥後賊起ると汝か子幸長をして往て伐しめんと長政命を拜し抃躍す幸長及び本多忠勝即ち發す賊首誅に服す乃ち長政を肥後に遣り郡邑を鎭撫せしむ是年長政を甲斐に轉封し二十萬四千石を食しむ慶長二年秋秀吉疾篤し長政及三成を召し後事を囑して曰く征明諸將未た凱旋せず孤如し起ずんは即ち我十萬の師をして他邦の鬼たらしめん孤最も之を憐む汝等深く喪を秘し往て海に航し衆を收めて還るべしと幾もなく秀吉薨す遺命に依て喪を秘す九月長政三成と那古耶に赴く會ゝ報あり島津義弘明軍と戰ひ大に之に克ち明兵長怖して去り我師日あらずして還ると是を以て諸將を那古耶に待ち犒ひ迎へて各をして國に就かしむ三成長盛等屢々亂を作すを謀る長政父子竊に策を決し家康に屬す三成等家康を謀人と欲する數回謀漏れ果さず或は長政を疑ひ之を家康に譖す長政自ら安んせす封を子幸長に致んと請ふ家康之を許す長政武藏府中に還り潛居す秀忠屢ゝ使者を賜ひ訪問す慶長庚子の亂(關ヶ原の戰)幸長小山の行營に從ふ又諸將と西し軍功を建つ家康書を長政に賜ひて曰く卿嘗て讒に遇ひ蟄居す孤其の罪なきを識る方今中納言(將軍秀忠)山道より西上す卿亦宜く之に會すべしと長政大に悅び師に從ふ慶長十年長政妻孥を携て東府に往く秀忠親愛他に異なり十一年眞壁及び愛知の田一萬石を賜ひ老休田と爲す十五年四月卒す年六十五長政每に家康に侍し相對して碁を圍む其交手に臨み我を遺れ動もすれば爭て君臣の禮を失ふ然れとも家康亦咎めずして其の意に任す親昵せらるゝ此の如し長政卒するに及び家康碁を廢す世之を絕擊に比すと云ふ(野史、諸士略傳、本朝武林傳)

アサノハマゴラウ　淺野濱五郎　陸軍步兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け第十師團步兵第十聯隊附と爲り從軍し卅八年三月五日清國盛京省柳匠屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサノミヤ　淺野宮　德川家綱の室なり名は顯子伏見宮貞清親王の女明曆三年七月降嫁す貞靜にして婦德あり延寶四年乳癌を患ふ醫曰く糸を以て脈に掛く其の詳を得難し親ら拜診せざれば不可なりと家綱之を許す宮曰く乳癌治し難しと聞く假令治すべきも一死を以ての故に節を屈するを欲せずと遂に治せずして八月薨ず年三十八東叡山に葬る高巖院月澗圓心と號す明年從一位を贈る(壼範記)

アサノ　モトヲ　淺野元雄　陸軍步兵少尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十七師團步兵第卅八聯隊附として出征し卅八年三月八日清國盛京省韓滯橋附近戰鬪の際負傷後送せられ四月八日廣島豫備病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサノヤ　サヘイ　淺野屋佐平　名は茂枝又篤柄といひ通稱初め次郎後に佐平と改む金澤の商人なり性强記にして才幹あり國學を好み殊に金澤藩の典故に委し町奉行等擢てて記錄方と爲ししが頻りに進みに勤王の說を唱へ特に福岡總助等と親交あり同志の徒と密書の往復を司れり元治元年五月世子慶寧京都に上るに際し佐平も運送方を以て隨行せり此時藩士福岡總助の北添佶磨に送る書翰を傳達し且つ在京の諸有志と交を結へり後總助の密書の事露はれて國に檻送せられ十月終身禁獄に處せられ翌二年四月五日獄中にて病死す時に年五十二(殉難錄稿)

アサノ　ヨシナガ　淺野幸長　小字は長滿長政の子なり幼より秀吉に近侍す天正十七年四月從五位下に叙し左京大夫に任す十八年五月父長政諸部を率ゐ岩槻城を攻む幸長及び本多忠政衆に超え前門に先登し敵と橋上に戰ふ城中慴撓み長政に詣り降を乞ふ文祿二年九月薩人梅北某黨を起し肥後を侵掠し熊本城を襲ふ幸長秀吉の命を受け本多忠勝と赴き伐つ途にして賊平らぐと聞き罷め歸る是の年兵を率ひ韓に渡る伊達正宗嘗て長政と相善し請て幸長を助け韓を伐んと欲す秀吉其の志を嘉獎し許可す乃ち諸將と釜山浦に會す幸長西生浦に築て之に據り加藤淸正と寨を侵畧し俘獲尤も多し初め幸長の書佐芥川藤介罪を得て亡命す三成潛に之を疎す關白秀次の變藤介擬して幸長秀次に通ずる手書を作る三成長盛と謀り之れを媒孽す兵を發し幸長の邸を圍み以て命を俟つ前田利家寃狀を探知し爲めに其姦を發す秀吉藤介を逮捕し之を鞫し乃ち幸長を宥し之に藤介を予ふ幸長之を磔殺す衆皆三成を怨む而して三成寵遇益渥し慶長二年再び韓に渡り西生浦を守る加藤淸正機陽に在り犬牙相持し韓將李元翼を追擊し進みて忠淸道に至る是秋秀吉征明の功成らざるを怒り屢ゝ諸將を督促し胥議して曰く韓虜多年城寨を築き能く拒守し攻れは則入を傷け入れは則路を杜ぐ故に疑議日久し更に促命を承け猶豫すべからず十二月宇喜多秀家師を督し順天より王城に入り毛利秀元將帥と爲り黑田長政幸長等之に副たり經理し還りて彥陽に宿し將に蔚山に入らんとす是時明將楊鎬麻貴三協兵を率ゐ慶州に赴き將に蔚山を攻んとす蔚山の南に島山あり淸正の兵之を守る麻貴高策吳惟忠を彥陽梁山に遣り蔚山と釜山の來往の路を阻す幸長及び太田一吉宍戶元續彥陽に屯す舜山を去る數十里巨川あり斥候を河岸に置く高策吳惟忠の兵掩擊皆之を殺す幸長聞て怒て曰く吾儕設令蔚山に入るとも斥候の死し盡くるを見虜に逢はずして歸らば則怯恇の嘲を免れじ乃ち騎を進め戰んと欲す元續一吉制止して曰く幸長の言武と雖も寡を以て衆に敵す恐らくは利あらずと幸長勇氣奮銳聽かずして曰く虜に逢はざれば則歸らず戟を揮て進む一吉元續之に次ぐ虜と相値ふ虜我寡軍を察し重圍して斬る幸長、一吉元續と奮擊利あらず且つ鬭ひ且つ走ると三里ばかり幸長數創を被り標破裂す殆と蔚山に達せんとし虜勢益振ふ幸長將に死せんとす臣龜田高綱死戰して虜酋を獲て途少しく排く會ゝ加藤淸兵衞兵を率ゐて之を城に邀ふ幸長東面を守り一吉西面を守り元續及び加藤與左衞門父子北面を守り戒嚴備禦す淸正西生浦に在り急を聞て曰く幸長をして死せしめは我何の顏ありて歸朝せんや即ち輕舸を馳せ夜蔚山に入る明日李如梅楊登山衆を率ひて來り攻め羅郭を破り壁際に逼り銃を縱つ二十七日防禦勞屈し城中飮を絕ち糧を斷ち憔悴罷困す小早川秀秋警を聞き釜山浦を發し是日丸山に至り後援をして會せしむ明日岡本越後守を遣り和議を講す陰に將帥を擒にせんと欲し豫め正月三日を以て會期と爲す城中食盡き瘦馬の肉を裂き箭鏃に貫き燔て以て食と爲す慶長三年正月二日夜巳に闌にして越後來り告ぐ明將欺計ありと三日疾を以て會盟を辭す虜將怒り鼓噪して隊を進め壁に逼る我か兵屈せす六日秀秋加藤嘉明等諸將と大に明虜を擊ち首を得る萬三千餘級虜遂に解き去る秀秋命して西生

浦の兵を駐め蕭山を守らしめ幸長四生浦に歸り軍士を慰勞す唐子の秋家康に小山に從ふ上國軍起るに及び諸將と先つ發す八月池田輝政と新加納を濟り岐阜の兵と戰ひ首十餘級を獲次日幸長瑞龍寺の寨を攻む三成の臣柏原彦右衛門及び河瀬左馬助等千餘兵を以て寨を守り岐阜の聲援を爲す幸長及一柳直盛兵を督し之を攻む敵銃を縱て備禦し士卒爲に傷く幸長麾を揮ひ奮鬬す蟻田高緒又衆を進め四面齊しく進み城門に薄る杉浦源之丞と鬬ひ之を獲左馬助逃走し衆陷る千餘人を斬る關原の戰池田輝政と命を受け南宮山を壓す十一月封を紀伊に轉し三十七萬石を食む次年改めて紀伊守と稱し從四位下に叙す慶長十八年八月廿五日卒す年卅八幸長薨原惺窩と孟子を講し憂患に生し安樂に死すと云ふを聞き終て曰く嘗て我れ石治部と隙あり治部世に在るの日自勵み人の爲に誹謗を被らず躬亦健固なり今治部已に滅び且つ恩遇を被り島津佐竹と相親み氣綏み心寛なり而して病綿を生す賢智の言誣ひざるなりと(野史)

アサノ リキタラウ 淺野力太郎 陸軍騎兵少佐なり麝島藩出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團騎兵第八聯隊附として出征し卅八年二月十五日清國吉林省張家窩子戰鬪の際負傷し同日吉林省張家窩子に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

アサノ リョウ 淺野陵 京都の醫にして字は有政通稱主計如水と號す文政頃の人著述金匱要略章句あり(平安人物志)

アサバ キンザブラウ 淺羽金三郎 海軍大佐なり薩藩士藤原忠豐に仕へ采地二百石を領す可長天資純強輕捷多力好むて兵技を學ひ百家に通習し最も柔術に長す初めこれを水野自適齋に學ぶこと爾三年覓に家傳深秘を受けたり正信は希世の逸人にして武家衆技の粹を拔き柔術一派の源を立つ門人三千心傳の妙を得る者は可長學一二人のみ明暦三年武江大火あり可長邦君に陪す時車馬路を塞ぐ可長奮擊して人を除け手から車を抛つ此に依て君危難を免る繼て豐昌に仕ふ嘗て言ふ路を行くに可長一人側らに在れば即ち百千の副士の扈從するが若しと勇烈忠貞人に信ぜらゝこと此の如し其餘軍功の聞見に顧はるゝ者勝げて記す可からず應變神速は世の知る所也薨の妙に至ては即ち古今に獨歩すといふも亦可なり天和二年壬戌十一月十日病歿す行年五十八眞如寺山に葬る(事實文編)

アサヒナ ヨシヒデ 朝夷義秀 鎌倉の元老和田義盛の三男安房國朝夷郡に生長す故に稱して朝夷三郎と曰ふ勇武多力無雙と稱せらる將軍頼家嘗て小坪濱に遊ぶ義秀の善く潜ぐを聞き召して其技を觀る義秀游泳數回忽ち沒して見えず少くして浮鰾巨大の三鰐魚を挾み出つ人々其猛勇に愕く建保元年父義盛北條氏の讒惡を怨り之を除かんと欲し兵を擧て義時怖れて府中に奔り實朝を挾み合力諸將に傳ふ義盛幕府に逼る義秀直に進み南大門を排破して入る力戰最も激し向ふ所人馬糜粉す北條朝時を傷つけ足利義氏を追ひ又馬首を廻らして幕府を指し武田信光に若宮小路に遇ふ義秀双を接へんとす信光子信忠年十三驍至りて父を戒ひ義秀に抗す義秀心其孝義を愛し見棄て馳す小物實政續て進み直に斬仆さる凡そ其鋒に罹る者命を殞さざる莫し既

び存ぜり(事實文篇)

アサヒナ ヤタラウ 朝比奈彌太郎 鎌客なり寛永九年武術上覽の時年八十五才和鹿野傳右衛門と相打つ共に老て益々矍鑠たり終に木刀を捨てゝ相撲つ觀者之を壯とす大久保忠輔判して曰ふ敢て勝敗を決する勿れと乃ち止む

アサヒナ ヨシナガ 朝比奈可長 駿河國の人なり其先は堤中納言兼輔卿より出つ平兵衛某可長を生む元の名は半左衛門のち丹左衛門と改む始めて土佐國主藤原忠豐に仕へ采地二百石を領す可長天資純強輕捷多力好むて兵技を學ひ百家に通習し最も柔術に長す初めこれを水野自適齋に學ぶこと爾三年覓に家傳深秘を受けたり正信は希世の逸人にして武家衆技の粹を拔き柔術一派の源を立つ門人三千心傳の妙を得る者は可長學一二人のみ明暦三年武江大火あり可長邦君に陪す時車馬路を塞ぐ可長奮擊して人を除け手から車を抛つ此に依て君危難を免る繼て豐昌に仕ふ嘗て言ふ路を行くに可長一人側らに在れば即ち百千の副士の扈從するが若しと勇烈忠貞人に信ぜらゝこと此の如し其餘軍功の聞見に顧はるゝ者勝げて記す可からず應變神速は世の知る所也薨の妙に至ては即ち古今に獨歩すといふも亦可なり天和二年壬戌十一月十日病歿す行年五十八眞如寺山に葬る(事實文編)

アサヒナ ヤスシゲ 朝比奈泰榮 後北條氏の世臣なり頭領は興兵衛、泰榮の子、小田原亡て北條氏規の子氏盛河内狭山に封せらるゝや泰澄父子並に執政たり人以て榮とす狭山草創に屬し所領せず父子嬉村に住し邑里の政小無治す嬉村は即ち右衛門の采邑なり泰澄性忠良上を奉じて禮あり下を撫して憲あり元和三年卒す年三十九其の病革まる時封内の民哀泣して狂するが如し泰澄世に在る時暇あれば田獵を好む其の最も愛する所の鷹犬泰澄の葬後に忽ち墓前に抵て死す人以て靈異す即ち墓前に瘞す今に到て麼犬塚並

アサヒナ ヤスズミ 朝比奈泰澄 後北條氏の世臣なり頭領は興兵衛、泰榮の子、小田原亡て北條氏規の子氏盛河内狭山に封せらるゝや泰澄父子並に執政たり人以て榮とす狭山草創に屬し所領せず父子嬉村に住し邑里の政小無治す嬉村は即ち右衛門の采邑なり泰澄性忠良上を奉じて禮あり下を撫して憲あり元和三年卒す年三十九其の病革まる時封内の民哀泣して狂するが如し泰澄世に在る時暇あれば田獵を好む其の最も愛する所の鷹犬泰澄の葬後に忽ち墓前に抵て死す人以て靈異す即ち墓前に瘞す今に到て麼犬塚並時宗に賜ひ以て自ら洗雪す事是に由つて解くを得たり(大日本史)

アサハラ ナイシンワウ 朝原内親王 平城帝の妃なり延暦元年伊勢の齋宮と爲る十五年罷めて京師に歸る三品に叙す十七年田二百五十町を賜ふ後ち二品に進む宮に入る寵なし弘仁三年薨む八年薨す年三十九嵯峨帝使を遣し喪事を監護す(大日本史)

アサハラ ヨカノ 朝原岡埜 官醫なり山城葛城の人、承和三年遣唐醫師となる(皇國名醫傳前篇)

アサヒコ シンワウ 朝彦親王 「トモヨシシンワウ」

アサヒシャウグン 旭將軍 「ミナモトヨシナカ」

アサヒナ ダイリャウ 朝比奈泰亮 「テウナンザン」

アサヒナ ブンエン 朝比奈文淵 「テウブンエン」

アサヒナ ヤスシゲ 朝比奈泰榮 後北條氏の世臣なり右衛門と稱す永祿初年北條氏康の氏規を詛山に封ずるや泰榮を以て執政大夫と爲す天正十八年豐臣秀吉の北條氏を攻むる泰榮氏規を輔けて士卒を激勵し城に嬰て堅く守る諸將百方攻擊す數日を閱て城竟に破れず既にして小田原城陷り氏政自殺す是に於て氏規及び長子氏盛紀州に遁れて高野山に入る泰榮も亦從ふ後ち氏盛の河内狭山一萬石に封ぜらるゝや泰榮も亦嬉村に三百石の采邑を賜ひ以て執政と爲る元和中病みて死す年七十七(事實文篇)

アサヒナ ヤスズミ 朝比奈泰澄 後北條氏の世臣なり頭領は興兵衛、泰榮の子、小田原亡て北條氏規の子氏盛河内狭山に封せらるゝや泰澄父子並に執政たり人以て榮とす狭山草創に屬し所領せず父子嬉村に住し邑里の政小無治す嬉村は即ち右衛門の采邑なり泰澄性忠良上を奉じて禮あり下を撫して憲あり元和三年卒す年三十九其の病革まる時封内の民哀泣して狂するが如し泰澄世に在る時暇あれば田獵を好む其の最も愛する所の鷹犬泰澄の葬後に忽ち墓前に抵て死す人以て靈異す即ち墓前に瘞す今に到て麼犬塚並

亭に至り之を謝す遂に其母を賞とし家康を見んとす求むる是に於て行を命す發するに臨みて曰く吾縱ひ不幸にして京師に死するも夫人の與かり知る所に非れば必ず之を害するなかれと其後三年秀吉の母病あり家康及ひ夫人京師に如き之を省す夫人も亦病み衆樂に留り年を踰えて遂に起たず天正十八年正月十四日薨す年四十八時に秀吉方に小田原を征す秘して喪を發せず小田原平ぐに及び歸りて駿府に次し偶開けり夫人骨て瑞龍寺に詣り佛を拜して追想に堪へず因て寺領を寄せ以て其冥福を修めむと京師東福寺に葬り南明院と號す又寺領を寄せんと欲す主僧辭して曰く骨て有するの寺田兵の奪ふ所となる今田を賜ふも亦之を失はんとを恐る如かじ貧を得んには則ち黄金千兩を賜ふ久しきを經て其金亦散失す正德中新井君美京師に使し夫人の遺僕の南明院にありて祀奠あるなき觀還て文昭公に言ふ公其言を聞き之を憫む然れども先世の遺失を明かにするを欲せず以爲らく家康百年遠忌近きに在り將に其時を待て並に之を彙行せんと而して疾に遇ひ起たず遺言して供料五十石を南明院に寄す(將軍外戚傳)

アサブ ケンカウ 麻生賢幸 陸軍少兵中尉なり愛媛縣松山市の出身にして三十五年陸軍少兵少尉に任ぜられ大津第九聯隊第十中隊附を命ぜらる三十七年四月日露戰役に依り出征し第二軍に屬し五月二十六日の南山激戰に於て負傷し金州第四師團第一野戰病院に送られ療養中同二十九日遂に瞑す十九日軍功に依り中尉に昇任し勳六等功五級に叙せらる

アサミ ケイサイ 淺見綱齋 平安の儒者なり名は安正近江高島の人なり後ち家を京師に徙す初め醫を業とし高島順其と稱す後ち改めて淺見氏と爲す安正人と爲り崎直にして夙とに大志あり家本と豪富す產を破りて以て一時の豪傑に交はる山崎闇齋を見るに及びて欣然として心服し遂に業を改めて儒と爲り清苦篤志す時に略血を患ひて連日癒えず闇齋猶ほ苦學せしなきに似たりと闇齋曰く病勢此くの如し姑らく業を廢ほ苦學せしむ從ふ所の姿體百五十餘人衣裝皆鮮麗なり天正十四年倫情を習はしむ可けんや佐藤直方安正に謂て曰く吾曹の怒詈を喫して精力已に罄く恐らくは壽を損するを如何せん安正曰く予も亦之を知る然れども當今の世翁

にして義盛以下兄弟宗族敗衂す義秀五百の殘兵を將て安房に走る其終る所を知らず或は云高麗に赴くと世俗稱す義秀は勇女輌綸の生む所と是れ誤なり(大日本史、豪雄言行錄)

アサヒノカタ タ 朝日之方 德川家康の室なり一に駿河御前と稱す秀吉の異父妹初秀吉微なる時早く父を喪ひ其母再ひ織田信秀の同朋筑阿彌に嫁し秀長及び夫人を生む夫人生れて容貌端麗既にして佐治日向守に嫁す小牧の敗秀吉使を遣はして和を請ふ家康聽かず使歸ゝ反る秀吉沈吟累日未た其謀を得ず中夜幸かに興さて曰く吾之を得たり聞く德川氏未た繼室あらずと我妹を以て之に配せは彼れ悪んぞ來らざらん尚し猶從はざれば吾か大政所の一行を煩はさんのみと堀尾吉晴生駒正俊曰く公妹何くにか在る秀吉曰く佐治日向に妻はす者なり焉れ未た子あらず佐治人となり知慮多し若し曉すに國家の大計を以てせば必ず命を聽かんと明日吉晴正俊をして意を致さしむ佐治か曰く天下の安危の係る所君命何そ能く逃れん吾死を以て之を濟んと乃ち自から腹を刺して死す是に於て秀吉使を遣はし酒井忠次に因り意を致す忠次も亦爲めに固請す家康曰く我秀吉と宿怨なし彼れ婚を以て和を乞ふに至る我豈に敢て拒まんや其使反命す秀吉父淺野長政をして固く誓約せしむ家康か曰く夫人出あるも樹子を易るとなけんや成を行ふの後も長麿を以て貧となすなけん吾不幸にして世に立て尺寸奠移割なけん長政馳驟之を報す秀吉喜び裁書を上る其言ふ所皆符合す長政馳驟をして偕を納れしむ手書を以て之を謝す家康天野康景をして名を聞かず德川氏何爲る者ぞ吾未だ嘗て其名を聞かず德川多樹原あるに非ずや何そ徵なる者なること能はざるやと織田信雄使を遣はして其意を告ぐ家康懲はず何を怒りて之を絕たんとす使の曰く事成らざれば則ち信雄何の面目あつて秀吉を見んや願くは強いて信雄に爲に長臣一人を遣はせと家康曰くもを得ず本多忠次に因り賞となすなけん吾不幸にして刀を賜ひ之を勞らふ終に長政等をして旭姫を護送せしむ從ふ所の姿體百五十餘人衣裝皆鮮麗なり天正十四年五月禮成り信康を以て之を子とし散樂を設け縱觀する者如何せん安正曰く予も亦之を知る然れども當今の世翁

が舍てゝ其れ誰をか師とせんと安正頗る武事を好み常に騎馬擊劍し一長刀に赤心組信の四字を篆刻し之を帶ぶ初め父、安正の學を好むを以て別に家を成さしめんと欲し叔子を以て其家を繼がしむ其の性不斷にして家益〻衰へ纖毋を養ふこと能はず大小安正に倚賴す安正毎夜往て經紀看護し且に逮して還り乃ち學生に教授す炎暑嚴寒年一日の如し路人往々其の面を識り曩て其の孝を稱す而して安正貧窶尤も甚だし茅屋蓬戸襤褸猶は不堅冬戒は一布袍恬然として其の操を易へざる者數十年王侯貴人安正の風を聞て見んと欲する者多し太上天皇も亦之を召見す固辭して出でず嘗て云ふ予の斯學に於ける特り先師の遺德を拾ふ耳耕獲の功あるに非ざるなり然れとも出處の一事に至ては古人と雖ども自ら愧ぢざるなりと直方曰く古人の出處を論ずる出るには則ち出て處るには則ち處る子は未だ嘗て出でず何ぞ之を自負することを爲ん安正嚴然として色を正して曰く仕ふ可くして仕へ仕ふ可らずして仕へざるを敢へて出處に非ざると安正師弟の間喪だ嚴峻門人講筵を敢へて出處ほ臣下の君前に在るが如く席上講義を錄する者筆硯墨楮皆豫め備へ安正既に席に就けば硯に注ぎ墨を磨るを許さず一座肅然として屏氣端聞し一章一節を終はる毎に聽者皆拜す、嘗て近思錄の萬世の爲めに太平を開く亦是れ萬世の爲に太平を開くなりと時に閨齋敬義內外を講じて身は內たり天下國家は外たりの說あり安正以て不可ゝ爲し遂に其の說を辯駁す閨齋又神道學を唱ふ安正諫爭す是に於て師門を絕せり直方親喪未だ除かざるに出でゝ仕ふ安正之を面折し是より復た相接ぜず門人三宅緝明水府に仕ふ安正曰く其の志、道を行ふに非ずと書を以て之を絕つ然れども晚年に先師に背くを悔い香を炷き稽首して罪を其靈に謝すと云ふ年六十正德元年十二月朔殁す重次郎と稱し望楠軒と號す（事實文篇）

アサミ　サウウン　淺見巢雲　名は正敏字は子愼淺見氏又兵衞と稱す巢雲は其號なり六世の祖名は無入書を善くするを以て德山侯に仕ふ高祖名は正信始めて德山に遷る父名は正辰母は松田氏巢雲才器人に絕す經學詞藻劍法砲術より以て茶儀音律の末に至るまて博く綜ぐざるはなく然して其弟生精力の注ぐ所の者は騎馬擊劍と云ふ仕途五十餘年學館の句讀師に補せられ劍法の師事を壻に訓導に除し侍讀を兼ね判司に遷り目付に轉す皆當藩職に稱ふ歷〻賞賚を受く安政五年二月廿九日病みて　家に終ふ年七十有四奥元寺の　先塋に葬る（事實文編）

アサミ　トシタカ　淺見俊孝　京極高峯の臣なり對馬守と稱し髮を剃りて春向軒と號し尾上城に居る淺井亮政赤高峯の臣なり而して主君を蔑如し政を擅にし振ふ春向之を見て悲憤に堪へず永正十四年十一月六角定頼に謂て曰く高峯亮政と君臣たり故に姑く意を容て病む自られ其の起さるを知り二子に告げて曰く余の虛既に華甲に躋れり壽に不足なし但た亮政をして赤族を以て公卿の間に列するを得たり崇心常に烏紗巾を戴き崇紗の深衣を着く籠遇優渥多く書器の賜あり三年帝崩ず乃ち塵外に靜處して悠然自適す後ち諸侯交々徵せとも終に出でず寛文四年九月疾を以て殁す年七十六崇心詩文傳らず惟た小瀨甫菴の太閤記殺現に存するのみ一說に曰く崇心は本と豐臣秀頼に仕ふ故に小瀨甫菴が太閤記を纂修するに當り其の手を假るもの多し崇心其殺文を作るは皆私かに故主に報ゆる所なりと（先哲叢談）

アサヤマ　ロシウ　淺山蘆洲　醫工なり大阪の人にして青陽齋と號し又狂齋堂蘭英齋と號す醫本手引草を著す（虛心筆記）

アサリ　マサヨシ　淺利政吉　字は金助彌生家に事ふ常に圖書を好み寢食を忘る巧に土蛟（土佐か）の風格を具へ岩樹も亦趣きあり（續本朝醫史）

アサリ　ヨシトホ　淺利義遠　甲斐源氏にして安田冠者義清の子、義定の弟、奥市左衞門と稱す覆浦の戰ひに和田義盛射て平知盛の船に中つ麾て呼んで曰く請ふ射て之を還せと知盛仁井親清に命じて射さしむ其の矢遠く義盛の胄を汰す再び射て義經の船に中る親清も亦其の矢を返さんことを請ひ以て義盛を弄辱す義經義遠を衆中に遇みて射さしむ義遠親清の箭を視て曰く幹弱くして短し用ふるに足らず請ふ我が矢を用ひんと獄東等有司の命を承け安之丞を拉して海に投じて之を殺す時に年三十三其後罪を赦され祭粟料として米二石を賜はる明治三十一年七月特旨を以て從四位を贈らる（殉難錄稿）

アサヤマ　イチデンサイ　淺山一傳齋　劍客なり身の丈六尺初め三五郎と稱す上泉伊勢の神陰流を學び其の八天夠の一と稱せらる（イバサヨスキケン傳を見よ）

アサヤマ　イリンアン　朝山意林菴　平安の儒者なり名は素心字は藤丸、意林菴と號す京都の人なり初め五山の長老に學ふ朝鮮使節李文長至る乃ち就て說を受く寛永中大納言忠長に從て駿河に往き居ること三年致仕して歸る後ち又時々四海に遊ふ承應二年後光明帝辭して勞經を講せしむ朝儲三位に至らざるものは殿上に昇るを得ず而るに素心は儲禮を蒙り處士を以て公卿の間に列するを得たり素心常に烏紗巾を戴き崇紗の深衣を着く籠遇優渥多く書器の賜あり三年帝崩ず乃ち塵外に靜處して悠然自適す後ち諸侯交々徵せとも終に出でず寛文四年九月疾を以て殁す年七十六素心詩文傳らず惟た小瀨甫菴の太閤記殺現に存するのみ一說に曰く素心は本と豐臣秀頼に仕ふ故に小瀨甫菴が太閤記を纂修するに當り其の手を假るもの多し素心其殺文を作るは皆私かに故主に報ゆる所なりと（先哲叢談）

アサヤマ　ヤスノジョウ　淺見安之丞　勤仕なり諱は正虔通稱初め虔之輔後に安之丞と改む長州藩の支封德山藩の士榮三郎正鈇が嫡子なり安政元年學館の句讀教授方となる又武技に長じ一刀流の劍術大島流の槍術に達したりしかゞ同二年大島流槍術指南役取立を命ぜらる其後小姓役となり文久元年藩主に具せられて江戸に行き翌年京都に上り藩國後職を免せらる同三年春御親兵に撰ばれて都に上り翌年石清水行幸の時供奉三條四少將の隨身となりしかゞ烏帽子布衣一領を賜はる其後檜本少將の警固となり七月藩の周旋方命ぜらる八月朝議一變して宗藩堺町御門の警衞を解かれ京師騷擾するや安之丞京坂の間にありて後圖を謀る直に藩に歸り藩主に山口に謁して事變の顚末を告げて更に宗藩麗にも之を報せり其後世子の附役を命ぜられたり翌元治元年七月之を免じて學館の訓導役を命ぜらる時に京都の變あり宗藩の兵敗れてより藩論漸く二派に分れ正俗相鬩ぐり八月十二日の早天同藩士熊谷某等大勢入り來り訊問すべしとなして安之丞を拘して遂に濱崎なる私屋に幽囚せり翌慶應元年正月十四日の夜に遊び後ち藩陽に住す幼にして容姿あり長ずるに及べゝ疎し亮政乃ち自立の志あり八年正月泰舜を逐ふ十三年高家兵を募り亮政を伐つ亮政小谷に築て之れに居る十四年二月高家卒し高綠嗣く騎兵を率ゐ來て亮政を攻む六月亮政火を縱て夜竄を遮ふ高峯敗れ去る八月亮政捷を賀し自ら備前守と稱す高峯援を六角氏に乞ふ九月朝倉氏亮政を援く尋で亮政高峯と和す十月高峯に謁し君臣の禮を執る亮政江北を伐ちて平げ國人多く伏す十五年四月六角定頼來り攻む亮政佯て弱を示す敵の怠るを窺ひ火を縱て之を襲ふ十月江北悉く亮政の有となる十六年九月定頼復た來り攻む擊て之に克つ天文八年亮政老し休外と號す十五年七月　卒す年五十二法名宗謎、德勝寺と號す（野史）

アサヤ　ソウズキ　阿佐井宗瑞　和泉の醫なり女科に精し世稱して阿佐井嬉人醫と曰ふ大永の初め醫書大全を得て世に公にす醫書を板刻するは此を以て權與とす（皇國名醫傳前篇）

アサヤ　チャウサブラウ　淺井長三郎　陸軍歩兵少尉なり秋田縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや隊伯より召集を受け後備歩兵第十七聯隊附と爲り出征し卅八年一月廿八日清國盛京省老橋に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサヤ　チュウ　淺井忠　洋畫家なり安政三年六月江戸京橋木挽町に生れ幼名は忠之丞後忠と改む明治八年士佐の人國澤新九郎英京倫敦より歸りて彰技堂と稱する畫塾設立せり乃ち此塾に入りて洋畫を學ぶ天禀の畫才韋歩著しく翌年工部省設立の美術學校に入り伊太利人フォンタネシーに就きて研鑽し其技大に進む後ち故ありて退校し神田今川小路に一家を賃して同志の洋畫研究所と爲せしが同志も漸次增加してモデルを雇ひ與に俱に切磋せり十四年の頃洋畫排斥論起りしかゞ極力之に反對したれとも政府閣僚の繪畫研究會には洋畫の出場を嚴禁するに至れり忠等大に之を憤慨し十九年東京府閣僚の共進會には同志相謀りて六尺以上の畫三十枚出したるに大に同會の歡迎する所となり其後屢〻展覽會等に出品せり洋畫研究の爲め洋行したる山本芳翠等の歸朝するに會す乃ち芳翠と明治美術會を起し上野公園馬見所四軒寺跡に製作品展覽會を開き益

一發觀衆の胸を洞して亦海を過ぐること五段許り學軍大に驚く建仁中城實盛敵を伴す姑板額多力にして善く射る實盛敗れ板額捕と爲る義遠之を源賴家に請ひて己が妻と爲んと請ふ賴家其の醜なるを以て之を怪しむ義遠謝して曰く臣他意なし願くは板額の材武なるを以て故に之を得て勇壯兒を生み以て國家の用に充てんと欲する耳と賴家笑て之を許す義遠攜へて具に甲斐に歸る（大日本史、本朝武功正傳）

アサワ　マサユキ　淺輪昌之　陸軍歩兵中尉なり長野縣東筑摩郡松本町の人三十二年十二月一年志願兵として第一師團歩兵第十五聯隊（高崎）に入營し除隊後三十五年三月歩兵少尉に任ぜらる三十七年日露戰役起るや直に召集せられて近衞後備歩兵第一聯隊に入隊し嘗く攻城警衞の任に當り六月運送船常陸丸に搭じて宇品を發し出征の途に上る同月十五日玄海洋沖ノ島附近に於て敵艦に碇擊され搭乘將士の進退谷るや少尉は碇創を負ふて海に殁す年二十六功に依り勳六等に叙せらる

アサヤ　イサミ　淺井勇　陸軍砲兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰砲兵第十六聯隊附として出征し卅八年三月六日清國盛京省大石橋戰鬪の際負傷同八日同地第九師團第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサヤ　カイロウ　淺井海樓　京師の儒者なり名は置良字は士俊、海樓は其の號、清田貯錄の門人、又善書を以て聞ゆ明和九年十月殁す年五十三洛西本妙寺に葬る（鑑定便覽）

アサヤ　キウジイ　淺井久敬　神儒學者にして通稱万右衞門と云ふ山崎闇齋の門人京都の人なり恐らくは珠菴と同人（先進遺事）

アサヤ　キチノスケ　淺井吉之助　陸軍工兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや第九師團工兵第九大隊附として出征し八月二十二日清國盛京省五家房西南烟地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

アサヤ　サウシュン　淺井草春　字は白一酒名は將成山城伏見の人、父は定以幕府に仕へて譜部を監督す草春は其第三子なり頗齡にして父に隨ひ駿府に遊び後ち洛陽に住す幼にして容姿あり長ずるに及べゝ疎し亮政乃ち自立の志あり八年正月泰舜を逐ふ十三年高家兵を募り亮政を伐つ亮政小谷に築て之れに居る十四年二月高家卒し高綠嗣く騎兵を率ゐ來て亮政を攻む六月亮政火を縱て夜竄を遮ふ高峯敗れ去る八月亮政捷を賀し自ら備前守と稱す高峯援を六角氏に乞ふ九月朝倉氏亮政を援く尋で亮政高峯と和す十月高峯に謁し君臣の禮を執る亮政江北を伐ちて平げ國人多く伏す十五年四月六角定頼來り攻む亮政佯て弱を示す敵の怠るを窺ひ火を縱て之を襲ふ十月江北悉く亮政の有となる十六年九月定頼復た來り攻む擊て之に克つ天文八年亮政老し休外と號す十五年七月　卒す年五十二法名宗謎、德勝寺と號す（野史）

アサヤ　シトク　淺井士德　名は奉政稻左衞門と稱す享保十七年五月二日大御番頭酒井紀伊守組より御書物奉行となり二百俵を賜はる分類國史綱二百卷の著あり享保十九年六月二日殁す年三十八（名人忌辰錄）

アサヤ　スケマサ　淺井亮政　江州小谷の城主なり姓は藤原氏新三郎と稱す貫政の子なり年十三京極高家に仕ふ永正五年高家の臣上坂景重殺を立つ亮政入張る永正五年亮政景重に隷して屢〻功を立つ亮政入を知て善く任す寡きを以て衆に敵し謀て中らざるなし景重殊に寵遇す景重死して泰舜之に代る亮政を遇する稍〻疎し亮政乃ち自立の志あり八年正月泰舜を逐ふ十三年高家兵を募り亮政を伐つ亮政小谷に築て之れに居る十四年二月高家卒し高綠嗣く騎兵を率ゐ來て亮政を攻む六月亮政火を縱て夜竄を遮ふ高峯敗れ去る八月亮政捷を賀し自ら備前守と稱す高峯援を六角氏に乞ふ九月朝倉氏亮政を援く尋で亮政高峯と和す十月高峯に謁し君臣の禮を執る亮政江北を伐ちて平げ國人多く伏す十五年四月六角定頼來り攻む亮政佯て弱を示す敵の怠るを窺ひ火を縱て之を襲ふ十月江北悉く亮政の有となる十六年九月定頼復た來り攻む擊て之に克つ天文八年亮政老し休外と號す十五年七月　卒す年五十二法名宗謎、德勝寺と號す（野史）

アサヤ　ソウズキ　阿佐井宗瑞　和泉の醫なり女科に精し世稱して阿佐井嬉人醫と曰ふ大永の初め醫書大全を得て世に公にす醫書を板刻するは此を以て權與とす（皇國名醫傳前篇）

アサヤ　チャウサブラウ　淺井長三郎　陸軍歩兵少尉なり秋田縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや隊伯より召集を受け後備歩兵第十七聯隊附と爲り出征し卅八年一月廿八日清國盛京省老橋に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサヤ　チュウ　淺井忠　洋畫家なり安政三年六月江戸京橋木挽町に生れ幼名は忠之丞後忠と改む明治八年士佐の人國澤新九郎英京倫敦より歸りて彰技堂と稱する畫塾設立せり乃ち此塾に入りて洋畫を學ぶ天禀の畫才韋歩著しく翌年工部省設立の美術學校に入り伊太利人フォンタネシーに就きて研鑽し其技大に進む後ち故ありて退校し神田今川小路に一家を賃して同志の洋畫研究所と爲せしが同志も漸次增加してモデルを雇ひ與に俱に切磋せり十四年の頃洋畫排斥論起りしかゞ極力之に反對したれとも政府閣僚の繪畫研究會には洋畫の出場を嚴禁するに至れり忠等大に之を憤慨し十九年東京府閣僚の共進會には同志相謀りて六尺以上の畫三十枚出したるに大に同會の歡迎する所となり其後屢〻展覽會等に出品せり洋畫研究の爲め洋行したる山本芳翠等の歸朝するに會す乃ち芳翠と明治美術會を起し上野公園馬見所四軒寺跡に製作品展覽會を開き益

と世上の稱賛を得たり二十七年日清戰役の起るや許可あ得て從軍し旅順陷落後歸國しけるに恰も京都に内國勸業博覽會の開けるに際したるを以て即ち其戰爭畫を出し非常の稱讃を博したり三十一年東京美術學校に洋畫科の併置せらるゝや舉げられて直に教授に任ぜられ翌三十二年佛國に留學を命ぜられ居ること二年三十四年八月歸朝し直に京都高等工藝學校教授に任ぜられ同校の首席教授として敎々後進を誘導し傍ら製作に從事し又第四回内國勸業博覽會場路易萬國博覽會審査官となりて洋畫界の勃興に貢獻する所勁からず東宮御所の御裝飾として揮毫したる大幅古武士乘馬の圖は一年餘を費して大成したる苦心の大作なりと云ふ四十年十二月十五日病を以て京都大學病院に逝く年五十三

アサキ ツネタラウ 淺井常太郎 陸軍歩兵少尉なり山口縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや近衛後備歩兵第一聯隊附として出征し十月十一日清國盛京省本溪湖附近戰鬪の際負傷し本溪湖第十二師團第一野戰病院に於て療養中同十六日死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

アサキ トナン 淺井圖南 醫なり又畫を善くす名は惟寅字風夜通稱は賴母平安の人（一に長州の人に作る）圖南は其號幹亭篤敬齋の別號あり世々醫を業とす父東軒出て名護屋侯の聘に應す圖南嘗て樂を守る明脉を以て名あり其の衛藤龍倉公に原き折するに仲景を以てす嘗て曰く内經既に言ふ所仲景暑して論ぜず内經未だ盡さゞる所仲景演べて之を詳にす旨實に相俟て相背くに非ず近ろ僉父あり語言を造作し仲景を主張し而して其本を究めず素難を貶斥して以て迂誕と爲す無識の者其の譬説に眩惑し互に相附和す古經の微文愈むに近し眞に歎す可きなりと嘗し香川吉益の二氏を斥するなり圖南を能くし平安に居る最も墨竹に妙なり故に宮崎筠圃、山科李蹊、御園中梁と與に平安四竹の一と稱せり東軒歿するに及んで名護屋侯召して職を繼がしむ尋で門學訓導と爲す著はす所冊倉傳割剖解ありて天明二年八月五日歿す年七十七子真庵、孫紫山（皇國名醫傳、扶桑畫人傳）

アサキ ナガマサ 淺井長政 江州小谷の城主なり久政の子、幼名猿夜叉、後新九郎と改む永祿二年六月年十五元服して備前守と稱す久政に勸め六角義賢を擊ち侵地を復せんと欲す久政聽かず長政將帥の器量あり群臣謂らく眞に亮政の孫なり必ず淺井氏を興さんと久政の時武威義へ六角氏に屬し其の老臣の女を將軍義昭三國を和解す正親町天皇詔を下し之を平く十政年已に十六老臣等相議し久政に退隠せしめ長政の妻僧徒と土冦を誘起す秀吉擊て之を敗る天正元年八月信長に妻す義賢立つに及び實に六角氏の臣下の如し長政に怒り兵二萬五千餘を出し四年八月長政と戰ひ大に敗れ江北の諸城多く長政に服す義賢を隔る二十七日秀吉極圍獄に上り長政父子の遺路を斷つ明日秀吉久政を攻む久政自殺す二十九日信長小谷を圍み人をして謂ほしめて曰く彌と相攻め累年決せず是れ武事に依るなり然れども親戚の好あり請ふ城を出で、盟約し宜く家國を保つべしと長政死を矢ひ應ぜず夫人及び三女を送り歸へす信長再三長政を諭す長政曰く久政無事ならば我亦諾せんと信長陽りて久政未た死せずと告く長政從者數名と將に信長の營に到らんとして城を出づ遇ま久政の死を聞き悔い且怒て自殺す年廿九、法名大英宗清、養源院と號す寛永九年九月大納言正二位を贈る二男三女あり二子曾殺さる長女茶々後秀吉の側室となり淀君と稱す二女京極高次に嫁す三女阿江與德川秀忠に配し家光及び忠長を生む（野史、常山紀談）

アサキ ヒサマサ 淺井久政 江州小谷の城主にして亮政の次男なり初め新九郎と稱し後ち下野守に改む天文十五年襲ぎ立つ軍事を憂へず狩を好み諫を拒み諫を信じ老臣を疎んず兵力衰ふ弘治二年久政益く懶惰、士氏心を反く大橋秀元切に諫め怒を避けず久政讒を信し召て之を殺さんとす秀元書を長政に遺して自殺す長政嘗て六角氏と戰ひ克たず皆を老將に歸す赤尾清綱答て曰く兵を用ふるは鷹を放つが如し主將の指揮如何にあり臣等老ゆと雖も能く功あらんと久政冒窮す永祿三年三月久政鷹を境上に放つ諸將長政を小谷に入れ久政に告て曰く君將たるの人に非ず臣等長政を立つ君早く老せよと久政怒る然れども拒む能はず十月長政の母之を和解し久政を別邸に置く天正元年八月秀吉小谷の道路を斷つ久政子政元元春と皆自殺す年五十法名兵獄瓦唐、甲堅院と號す（野史）

アサキ フウスキ 淺井風睡 俳人なり利

を成菅德院に饗するや長政に勸め之を斬らしむ長政許さず是に於て終に其前局を了る九月信長攝津を伐つ長政延暦寺の僧と其の師路を斷つ義景及び六角承祖亦兵を舉て之に應す信長攝の軍を聞く石山を歴志賀に到る將軍義昭三國を和解す正親町天皇詔を下し之を平く十二月天使到る信長等遂に和す元龜二年五月長政一向の僧徒と土冦を誘起す秀吉擊て之を敗る天正元年八月信長義景を滅し兵を近江に還し所在の城砦を隔る二十七日秀吉極圍獄に上り長政父子の遺路を斷つ明日秀吉久政を攻む久政自殺す二十九日信長小谷を圍み人をして謂ほしめて曰く彌と相攻め累年決せず是れ武事に依るなり然れども親戚の好あり請ふ城を出で、盟約し宜く家國を保つべしと長政死を矢ひ應ぜず夫人及び三女を送り歸へす信長再三長政を諭す長政曰く久政無事ならば我亦諾せんと信長陽りて久政未た死せずと告く長政從者數名と將に信長の營に到らんとして城を出づ遇ま久政の死を聞き悔い且怒て自殺す年廿九、法名大英宗清、養源院と號す寛永九年九月大納言正二位を贈る二男三女あり二子曾殺さる長女茶々後秀吉の側室となり淀君と稱す二女京極高次に嫁す三女阿江與德川秀忠に配し家光及び忠長を生む（野史、常山紀談）

右衛門と稱す伊賀上野の人（俳林小傳）

アサキ マサオミ 淺井正臣 陸軍歩兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや及び第七師團歩兵第二十六聯隊附として出征し旅順攻圍軍に從軍中同年十一月廿八日赤坂山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アサキ マサミチ 淺井正路 惟寅の男、畫を能くして上總介大舍人たり（名家全書）

アサキ モトアキ 淺井元秋 德川幕臣七平元久の子なり初め八郎左衛門と稱し又彦七郎織部と改め後に隼人といふ致仕して恣睡と號す甲州流の兵學を太地寄治に學び奥旨を得たり伊部綱村俸米百人ロみ與へ公議使となす累進して大番頭となり評定役をかれ旗奉行となり尋で若老となる祿を增賜すること二次并せて千石に至る大石真雄細井廣澤と別蟹の交をなす真雄の義學に際し廣澤と共に竊かに相助る所あり真雄その德に感じ愛する所の刀一口を贈る今尚その支家に存すといふ享保十年三月九日を以て歿す年八十一綱村別墅を鄕六に築き鄕六御殿と稱し寺を茂ケ崎に創し開足佛刹に過ぎずといへども居然として地を相せしむ名は圍固し築城の法を以てこれを經始するといふ（仙臺史傳）

アサキ リウタウ 淺井柳塘 南宗畫家なり京都の人幼名は永吉諱は龍字は子祥柳塘は其號なり雄新後號を以て名と爲し長白山人小白山人拜竹山人雲客等の諸號あり幼にして畫を好み初め百々廣年に就き次で谷口蠲山に從ひ專ら其技を研鑽せしが後ち長崎に遊び木下逸雲僧鐵翁等に就きまた清國人徐雨亭につき專ら山水を學び其風神を得たり明治の初年京都に歸り畫を以て家をなし聲名一時に喧す又漫遊を好み足跡海内に遍れく到處雲烟か留めたり晩年書畫器玩を蒐集し尤も其鑒識に精しく斯道の者以て重きを措くに至れり四十年十一月二十三日京都麩屋町御池南宅に病歿す年六十六高倉五條下る西念寺に葬る

アサキ リンアン 淺井琳菴 圍部侯の儒員なり名は琅遠、琳菴は其號、萬右衛門と稱す近江の人、山崎闇齋の門人、圍部侯に仕へて義解説、武要鈔を著はす（總諸家人物誌）

アサキ レウイ 淺井了意 著作家なり京都の人字は子石、靜齋、如儡子、松雲、又瓢水子と號す戲者を善くす東海道名所記本朝女鑑日本廿四孝太平記首毒等世に行はる寶永六年九月二十七日歿す年七十（鯰曲小說通志、名人忌辰錄）

アサキ ヰカウ 淺井惟亨 京師の御醫なり從五位長門守と稱す字は子元、南皐と稱す傍ら文雅を能くし平安に居る最も墨竹に妙なり故に宮崎筠圃、山科李蹊、御園中梁と與に平安四竹の一と稱せり東軒歿するに及んで名護屋侯召して職を繼がしむ尋で門學訓導と爲す著はす所冊倉傳割剖解ありて天明二年八月五日歿す年七十七子真庵、孫紫山（皇國名醫傳、扶桑畫人傳）

アサキ ナガマサ 淺井長政 江州小谷の城主なり久政の子、幼名猿夜叉、後新九郎と改む永祿二年六月年十五元服して備前守と稱す久政に勸め六角義賢を擊ち侵地を復せんと欲す久政聽かず長政將帥の器量あり群臣謂らく眞に亮政の孫なり必ず淺井氏を興さんと久政の時武威義へ六角氏に屬し其の老臣の女を將軍義昭三國を和解す正親町天皇詔を下し之を平く十政年已に十六老臣等相議し久政に退隠せしめ長政の妻僧徒と土冦を誘起す秀吉擊て之を敗る天正元年八月信長に妻す義賢立つに及び實に六角氏の臣下の如し長政に怒り兵二萬五千餘を出し四年八月長政と戰ひ大に敗れ江北の諸城多く長政に服す義賢を隔る二十七日秀吉極圍獄に上り長政父子の遺路を斷つ明日秀吉久政を攻む久政自殺す二十九日信長小谷を圍み人をして謂ほしめて曰く彌と相攻め累年決せず是れ武事に依るなり然れども親戚の好あり請ふ城を出で、盟約し宜く家國を保つべしと長政死を矢ひ應ぜず夫人及び三女を送り歸へす信長再三長政を諭す長政曰く久政無事ならば我亦諾せんと信長陽りて久政未た死せずと告く長政從者數名と將に信長の營に到らんとして城を出づ遇ま久政の死を聞き悔い且怒て自殺す年廿九、法名大英宗清、養源院と號す寛永九年九月大納言正二位を贈る二男三女あり二子曾殺さる長女茶々後秀吉の側室となり淀君と稱す二女京極高次に嫁す三女阿江與德川秀忠に配し家光及び忠長を生む（野史、常山紀談）

アサキ ヤスヒサ 淺井泰久 江州小谷の城主にして亮政の次男なり初め新九郎と稱し後ち下野守に改む天文十五年襲ぎ立つ軍事を憂へず狩を好み諫を拒み諫を信じ老臣を疎んず兵力衰ふ弘治二年久政益く懶惰、士氏心を反く大橋秀元切に諫め怒を避けず久政讒を信し召て之を殺さんとす秀元書を長政に遺して自殺す長政嘗て六角氏と戰ひ克たず皆を老將に歸す赤尾清綱答て曰く兵を用ふるは鷹を放つが如し主將の指揮如何にあり臣等老ゆと雖も能く功あらんと久政冒窮す永祿三年三月久政鷹を境上に放つ諸將長政を小谷に入れ久政に告て曰く君將たるの人に非ず臣等長政を立つ君早く老せよと久政怒る然れども拒む能はず十月長政の母之を和解し久政を別邸に置く天正元年八月秀吉小谷の道路を斷つ久政子政元元春と皆自殺す年五十法名兵獄瓦唐、甲堅院と號す（野史）

アサヤ 淺井了意 著作家なり京都の人字は子石、靜齋、如儡子、松雲、又瓢水子と號す戲者を善くす東海道名所記本朝女鑑日本廿四孝太平記首毒等世に行はる寶永六年九月二十七日歿す年七十（鯰曲小說通志、名人忌辰錄）

アサヤ カウ 淺井正路 惟寅の男、畫を能くして上總介大舍人たり（名家全書）

アサヤ ヤスヒサ 淺井泰久 江州小谷の城主にして亮政の次男なり初め新九郎と稱し後ち下野守に改む天文十五年襲ぎ立つ軍事を憂へず狩を好み諫を拒み諫を信じ老臣を疎んず兵力衰ふ弘治二年久政益く懶惰、士氏心を反く大橋秀元切に諫め怒を避けず久政讒を信し召て之を殺さんとす秀元書を長政に遺して自殺す長政嘗て六角氏と戰ひ克たず皆を老將に歸す赤尾清綱答て曰く兵を用ふるは鷹を放つが如し主將の指揮如何にあり臣等老ゆと雖も能く功あらんと久政冒窮す永祿三年三月久政鷹を境上に放つ諸將長政を小谷に入れ久政に告て曰く君將たるの人に非ず臣等長政を立つ君早く老せよと久政怒る然れども拒む能はず十月長政の母之を和解し久政を別邸に置く天正元年八月秀吉小谷の道路を斷つ久政子政元元春と皆自殺す年五十法名兵獄瓦唐、甲堅院と號す（野史）

アサヤ ヤスヒサ 淺井泰久 江州小谷の城主にして亮政の次男なり初め新九郎と稱し後ち下野守に改む天文十五年襲ぎ立つ軍事を憂へず狩を好み諫を拒み諫を信じ老臣を疎んず兵力衰ふ弘治二年久政益く懶惰、士氏心を反く大橋秀元切に諫め怒を避けず久政讒を信し召て之を殺さんとす秀元書を長政に遺して自殺す長政嘗て六角氏と戰ひ克たず皆を老將に歸す赤尾清綱答て曰く兵を用ふるは鷹を放つが如し主將の指揮如何にあり臣等老ゆと雖も能く功あらんと久政冒窮す永祿三年三月久政鷹を境上に放つ諸將長政を小谷に入れ久政に告て曰く君將たるの人に非ず臣等長政を立つ君早く老せよと久政怒る然れども拒む能はず十月長政の母之を和解し久政を別邸に置く天正元年八月秀吉小谷の道路を斷つ久政子政元元春と皆自殺す年五十法名兵獄瓦唐、甲堅院と號す（野史）

アサヤ ゲンゴラウ 淺尾元五郎 京師の人幼名は永吉諱は龍字は子祥柳塘は其號なり雄新後號を以て名と爲し長白山人小白山人雲客等の諸號あり幼にして畫を好み初め百々廣年に就き次で谷口蠲山に從ひ專ら其技を研鑽せしが後ち長崎に遊び木下逸雲僧鐵翁等に就きまた清國人徐雨亭につき專ら山水を學び其風神を得たり明治の初年京都に歸り畫を以て家をなし聲名一時に喧す又漫遊を好み足跡海内に遍れく到處雲烟か留めたり晩年書畫器玩を蒐集し尤も其鑒識に精しく斯道の者以て重きを措くに至れり四十年十一月二十三日京都麩屋町御池南宅に病歿す年六十六高倉五條下る西念寺に葬る

アサヤ ジュウウウ 淺尾重行 海軍少尉なり薩富山藩士慶應三年八月を以て藩富山城下に生る家貧にして夙く父母を喪ひ郷校に在りて敎鞭を執れり明治十八年九月忽然職を辭して上京し東洋英和學校に入り拮据して之を攻めしむ義宗敗死し義治出羽に走る建德元年義宗等の餘黨武藏上野の間に勃起す氏滿上杉朝房及び畠山基國を遣し攻めて之を走らす文中二年後圓融院左馬頭を授け從五位下に叙す天授五年士岐康行兵を起して足利義滿に畔く義滿兵を氏滿に蠱す氏滿上杉憲方を遣

海兵團に轉じ二十七年三月吉野艦分隊士を命ぜらる韓山の風雲急を告ぐるや吉野艦は第一遊擊隊旗艦として七月二十三日佐世保を解纜し韓海に向ひ二十五日豐島沖に於て初めて敵艦と戰を開き大捷を傳ふ踊えて九月十七日黃海の大海戰に會し奮鬪任務に盡瘁したりしが遂に敵彈破裂の下に戰死せり年二十八

アシカガ イヘトキ 足利家時 尊氏の祖父にして治部大輔頼氏の子なり從五位下伊豫守に叙任す先祖義家の置文に我か七代の孫に至り我必ず生れ變りて天下を取るべしとあり家時既に七世に當りて猶ほ其時節の來らざることを慨き憤り竊に八幡の祠に參詣し此度我一命を約め申せば今より子孫三代の内に天下を取らしめ給へと祈りて自殺せり（梅松論、本朝名傳記）

アシカガ イヘナガ 足利家長 越前守高經の長子、孫次郎と稱す從五位下に叙せられ陸奥守と爲る延元二年申納言源顯家を鎌倉杉本に邀へ擊ち克たずして死す（大日本史）

アシカガ ウヂツネ 足利氏經 高經の次子なり民部少輔、左京太夫と爲る正平七年筑紫探題と爲りて豐後に抵る菊地武光來り攻む氏經子松王丸をして少貳頼尚等七千人を率ひ邀へて長者原に戰はしむ敗れて還る氏經退きて高崎城を保つ又武光の爲に圍まる歲餘にして解けず氏經脫走して京に還り剃髮して僧と爲る之く所を知らず初め氏經の任に赴くや兵庫に艤し毎船妓を載す識者其の必ず敗れんことを知ると云ふ（大日本史）

アシカガ ウヂミツ 足利氏滿 鎌倉管領なり父基氏薨するに及て氏滿襲て管領と爲る年甫め九歲明年（正平二十三年）平一揆河越城に據る氏滿執事上杉憲顯を率て攻めて之を滅す宇都宮又亂を擊て之を平ぐ頃くありて新田義宗脇屋義治竝びに起て南朝の興復を圖る氏滿上杉憲將上杉能憲等を遣し兵に將として之を攻めしむ義宗敗死し義治出羽に走る建德元年義宗等の餘黨武藏上野の間に勃起す氏滿上杉朝房及び畠山基國を遣し攻めて之を走らす文中二年後圓融院左馬頭を授け從五位下に叙す天授五年士岐康行兵を起して足利義滿に畔く義滿兵を氏滿に蠱す氏滿上杉憲方を遣

はして之に赴かしむ康行降ると聞て還る是時義滿頗る政事に意り稍〻人心を失ふ會々義滿將に土岐頼康を誅せんとして兵を諸國に徴す氏滿上杉憲方を遣して鎌倉に向かしむ是に於て氏滿機に乘じて義滿に代らんと欲す上杉憲春諫して自殺す氏滿乃ち止む明年左兵衛督と爲り從四位下に進む小山義政兵を起す宇都宮基綱往て擊つ克たずして死す氏滿乃ち上杉憲方を遣して義政を攻めしむ義政僧服を被て罪を請ふ氏滿之を赦るす弘和二年義政又兵を起す氏滿親ら擊て之を斬る元中三年義政の子若犬丸又兵を起して陸奥人田村則義と謀る通じ小山城に據る氏滿兵に將として之を攻む若犬丸戰敗れて陸奥に走る氏滿上杉憲孝を遣し追ひて之を殺す氏滿兵を進めて白川に至る則義亦た敗れて自殺す乃ち引て還る四年小山五郎男體城に據る上杉朝宗を遣はして之を擊つ明年朝宗攻めて之を拔き小山氏を滅す八年山名氏清亂を作す明年春氏滿將に義滿を援けんとす氏清已に平ぐと聞て止む義滿陸奥出羽を以て遙に氏滿に授く進んで從三位に叙せらる應永五年薨ず年四十（一）に四十二に作る）法名道全、永安寺と號す氏滿酒を嗜んで雨ふる毎に必らず內外臣僚を會し歌曲を盡して醉ひて侍者に謂りて曰く天子も人なり將軍も亦人なり我も亦人なり我に事ふる者も亦人なり而して上人は下人の疾苦を知るに如かず上下位を易ふれば則ち治し雖からずと子滿兼、滿直、滿盛、滿貞、滿秀、女一人あり（大日本史）

アシカガ　エイリウ　足利永隆　義滿の第七子にして一に扇寿と名く永隆相國寺に入りて僧と爲り虎山（或は立山と號す）と稱し鹿苑院と號す（野史）

アシカガ　ギカク　足利義覺　義政の第二子なり三寶院に入りて僧と爲り權僧正に任せらる文明十五年九月十七日歿す年十六

アシカガ　ギシャウ　足利義承　義滿の第八子なり梶井に入りて僧と爲る後ち大僧正と爲り天台座主に補せられ三后に進す應仁元年薨す（野史）

アシカガ　ギセウ　足利義照（或は　義昭　又義有に作る又義性に作る）將軍義滿の第六子にして義教の異母弟なり義照大度あり僧となりて大覺寺宇智院に居り又仁和寺西院に住す大僧正に任じ三后に准ぜらる將軍義滿頗る衆望に背く義照以て好機となし小倉王子に說て曰く方今將軍新に立て暴戾なし小倉王子若し有為の志あらば何を待ぞ天下の諸侯各々方隅に割據し將軍義政政事に倦み日に若し一色氏の一族怨を幕府に構へ又結城の兵起りてより東國の亂るゝ甚し此時に當り王子若し令旨を九州の將士に下し之を招諭せば大藝坐して成るべし王子大に悅び乃ち書を薩地、大村の徒に寄す義照則ち病と稱して母驚大井持光に依る既にして春王、安王使を結城氏に遣して曰く請ふ子の力を假り上杉氏を擊ちて以て仇を復さんと氏朝其の將士を會して曰く吾佐公の恩眷を被り而して其の死を救ふ能はず今南郎君我れに託するに大事を以てす是れ武人の榮なり吾れ力を出して之を許るす永藩名を成氏と爲ひ龍樓名を憲忠と爲ひ既にして結城成朝陸奥より來り成氏に仕ふ成氏之と謀り怒を上杉氏に修めんと欲す寶德二年謀洩れ成氏江の島に走る憲忠追て海濱に戰ひ將士之を和解し成氏江の島に走る憲忠追て鎌倉に歸る車輪に轢ひ將士之を救ふ得是時に當て天下の諸侯各々方隅に割據し將軍義政政事に倦み日に若し一色氏の一族怨を幕府に構へ又結城の兵起りてより東國の亂るゝ甚し此時に當り王子若し令旨を九州の將士に下し之を招諭せば大藝坐して成るべし王子大に悅び乃ち書を薩地、大村の徒に寄す義照則ち病と稱して母驚大井持光に依る既にして春王、安王使を結城氏に遣して曰く請ふ子の力を假り上杉氏を擊ちて以て仇を復さんと氏朝其の將士を會して曰く吾佐公の恩眷を被り而して其の死を救ふ能はず今南郎君我れに託するに大事を以てす是れ武人の榮なり吾れ力を出して之を許るす永藩名を成氏と爲ひ龍樓名を憲忠と爲ひ既にして結城成朝陸奥より來り成氏に仕ふ成氏之と謀り怒を上杉氏に修めんと欲す寶德二年謀洩れ成氏江の島に走る憲忠追て海濱に戰ひ將士之を和解し成氏を奉して鎌倉に歸る車輪に轢ひ將士之を救ふ得是時に當て天下の諸侯各々方隅に割據し將軍義政政事に倦み日に若し一色氏の一族怨を幕府に構へ又結城の兵起りてより東國の亂るゝ甚し此時に當り王子若し令旨を九州の將士に下し之を招諭せば大藝坐して成るべし王子大に悅び乃ち書を薩地、大村の徒に寄す義照則ち病と稱して母驚大井持光に依る既にして春王、安王使を結城氏に遣して曰く請ふ子の力を假り上杉氏を擊ちて以て仇を復さんと氏朝其の將士を會して曰く吾佐公の恩眷を被り而して其の死を救ふ能はず今南郎君我れに託するに大事を以てす是れ武人の榮なり吾れ力を出して之を許るす永藩名を成氏と爲ひ龍樓名を憲忠と爲ひ既にして結城成朝陸奥より來り成氏に仕ふ成氏

アシカガ　シゲウヂ　足利成氏　持氏の第四子にて鎌倉五代の管領なり小字永壽永享十一年管領持氏執事上杉憲實と隙を生し戰ひ破れて自殺するやこれ二孤又た上杉氏の兵に獲られて死す時に嘉吉元年四月なり獨り永藩遺れて大井氏の許に在り上杉氏之を知りて憲實其の結城を攻めたるを悔恨して髮を下に剃し治部大輔に任せらる元弘元年後醍醐帝兵を起して北條高時を討つ尊氏遂に父の喪に遭ふ高時強て之を起して往て笠置赤阪を攻めしめ尊氏屈勉之に赴き城陷りて還る帝船上に在るに及びて高時又尊氏を以て名越高家と軍を總べて西に向はしむ尊氏會〻疾あり高時屢〻之を促す尊氏怒りて謂ふ往日臺眼の中に在るに彼れ

之を恤まず反りて起して役に赴かしむ今ま病みて是の如し然るに又復た遥ゝ人を虐ぐると一に何ぞ此に至ると始めて歸順の志あり初め大父家貞父貞氏源氏の臂膊を以て北條の爲めに裁制せらるゝを怨り每に之を滅さんとするの計あり而して終に果さず尊氏豐に乘じて先人の志を濟さんと欲す即ち疾を力めて起ち將に族を擧て西に行かんとす高時の老臣長崎圓喜之を聞て高時に謂て曰く足利氏は源氏の宗なり今行くに屈を擧げて自ら隨ふ其の意測り難し何ぞ誓書を作り要子を留めて質と爲きしめざると高時乃ち尊氏に誓書を徵す尊氏之を弟直義に謀る直義曰く要盟は神の享けざる所、今大義を擧げて無道を誅せんと欲す小節何ぞ顧るに足らん幼息は竊かに衛るに家士を以てし嫂氏は之を相州（赤橋相模守を云ふ尊氏と姻戚なり）に附せば以て憂と爲す に足らじと尊氏之を然りとして誓書を高時に遺る高時大に悅び尊氏に臨るに義家建る所の白旄を以てし副ふるに被馬鎧刀を以てして曰く此の旗は君家累世の重器にして二位禪尼の我が家に傳ふる者、今以て君に遺ると尊氏心竊かに自ら喜ぶ直義及び吉良上杉仁木細川今川荒川の諸族と兵三千を率ゐて鎌倉を發し名越高家に先ちて京師に到る翌日間かに海老名季行を船上の行在に遣して歸順を乞ふ詔して賊を平ぐるの日賞は其の請ひに依らんと報ず、高家醉て至る其の謀を知らず時に源忠顯、赤松則村、六波羅を攻む北條仲時、時益之を禦ぐ高家尊氏と期を刻して往て忠顯等を攻む高家矢に中りて死す尊氏兵を引て大原野に到り飲を張りて之を久うす傍に古刹あり勝持寺と名づく大に喜びて曰く我將に勝ちて之を持たんとすと高家敗死すと聞き乃ち奪じて丹波篠村に至り旗を八幡の廟側の柳樹に建て始めて義を唱ふ本國の人久下時重氏を率て先づ至る其の旗號に一番の字を書す尊氏執事高師直を召して之を問ふ師直對て曰く昔右大將源義朝杉山に起すや彼の祖重光請將に先ちて至る右大將之に謂て曰く我若し志を得ば其れ汝を以て賞首と爲さんと自ら一番の字を書して之に賜ふ因て以て旅に銘すと尊氏喜びて曰く是れ我が家興隆の兆なりと是より降附する者相踵て二萬人を得乃率て京に入る發するに臨みて廟に禱り蔔むるに隻矢を以てす直義以下將士各〻之に傲ふ須臾にして矢を積て丘を爲す行〻降兵を收て又三萬人を得大江山を過ぐるに比ひに鳩あり旗上に翔る尊氏以て瑞と爲し命じて其の此時に乘じて義貞を除かば則ち其の勢以て朝廷を制するに足らんと又帝の己を助けて以て義貞を討たしめんことを欲し上書して其の罪狀を列し新田氏地邑の東國に在る者を寄ひて悉く部下に守配す直義又密に書を西方に移して兵士を招集す是に於て鄙國蕩々樹て類を分ち親信蓄故目を仄だて〻相視る其の志朝廷に在る者は關左を委て〻西上し意を尊氏に通ずる者は闕下を辭して東に赴く來往縞紵道路織るが如し公卿歷〻尊氏の反狀を奏す帝僧裏鎧をして鎌倉に往きて旨を諭し且つ其の情狀を察せしむ未だ行かざるに細川和氏尊氏の書を持て至る意は義貞を討つの宣旨を賜はらんと云ふにあり義貞も亦上書して尊氏の反狀を告ぐ南海四海も亦尊氏兵を促がすの書を上る乃ち詔して尊氏在身の官爵を削り義貞を遣して尊氏を討たしむ東海東山竝び進む直義薙將と戒裝して尊氏に見え兵を發して迎へ拒がんと請ふ尊氏默然たること良久して徐ろに直義等に謂ひて曰く今鑑を被むるは正に親王を戕ふと兵を拒ぐとを以ての故なり二者皆我が爲す所に非ず陳情控訴して其の疑ひを解かん或は聽かれざれば便ち當に薙髮遁世して以て自ら解なきを明らかにせんのみ細等善く身の圖を爲せ我敢て弓を彎て王師に向はざるなりと言未だ畢らざるに色を作して起つ直義等相見て錯愕す諸將私に直義と謀り兵を發して往て拒ぐ利あらず直義繼て發して手越河原に戰ひて大に敗る官軍追ひて伊豆府に抵る尊氏諸將兵を發するか聞て身に反名を受けんことを惡み軍事を以て直義に付して建長寺に遁入り髻を截りて僧と爲らんと欲す左右の諫めに因りて止む直義等自ら軍を發ひて還る則ち府門皆閉ぢ扉を叩く之を久うして須臾公能出て迎へ具に尊氏の狀を言ふ上杉重能直義と謀りて諸道に下す綸旨の文を僞作して帝を惑議足利尊氏左馬頭足利直義肆まゝに武威に矜りて朝廷を輕蔑す愛に六師に命じて往て反臣を征せしむ尊氏兄弟身を桑門に投じ蹤を山林に匿るゝ雖在窮討して殿に提撕を加へ以て朝憲を正して逮捕せしむる勿れと連窩數十通持して建長寺に至り尊氏に視せしめて曰く是れ手越の戰に獲る所上意此の如し公綸之桑門

に遁るとも恐くは免るゝことを得ざらん願くは門戸の計を思へと尊氏奮然として起ちて曰く死生汝と倶にせんと乃ち道服を脱し錦直垂を著て出づ軍士大に喜ぶ衆皆髻を絶ち以て尊氏に同じ官軍をして辨識するを得ざらしむ逃亡の士卒之を聞きて卒ひ還る一日間に三十萬と號す直義先つ發して箱根山に向ふ尊氏別に險道より直に竹下に出づ足利高經等先鋒と爲りて尊良親王の前軍を撃ちて之を退く脇屋義助更に進みて奮戰す會〻大友貞載、鹽冶高貞來降す因て與に夾み攻めて大に之を敗る義助西に走る箱根の官軍之を聞て夜潰ゆ尊氏義詮をして留りて鎌倉を守らしめ自ら直義と官軍を尾して西上す延元元年正月近江に至り攻て伊岐洲城を拔く官軍要衝に屯據して橋を撤し水柵を施す尊氏諸軍を分遣して勢多宇治を攻めしめ親ら軍を帥て大渡に向ひ義貞と河を隔てゝ陣す進み攻むる毎に溺死する者數百千人會〻細川定禪四國の兵を招集して赤松範資と倶に進みて山崎を攻め撃ちて脇屋義助の軍を走らし長驅して京師に入る義貞及び諸路の官軍皆潰走し乘輿を奉じて延暦寺を保つ定禪等火を放ちて宮闕を火く尊氏諸軍を總べて京師に入り藤原公賢の第に居る園城寺延暦寺と素と相惡む尊氏書を園城寺に贈りて僧徒を招誘す僧徒悅び從ふ尊氏乃ち細川定禪等を遣し園城寺に據りて以て行在に逼らしむ既にして義貞顯家定禪を攻めて大に之を敗る尊氏煙の揚がるを望んで曰く園城寺敗る當に急に救を遣るべしと自ら三條河原に出て將士を部分す義貞亡ぐるを追ひて已に京師に入り分ちて東山の麓に陣し潜かに兵をして裝ふて園城寺の敗卒の爲れして混じて麾下に入らしむ尊氏之を覺らず亦大に陣を布きて以て俟つ既にして尊氏義貞と戰ふこと數十合義貞遣す所の兵僅かに左右に起る麾下動搖して遂に大に敗れて西に走る官軍勝に乘じて急に躡す桂川に至る比ひ尊氏辟むこと甚だし將に自殺せんとし適〻日暮に會ふ追兵引て還る僅かに免るゝことを得たり即夜定禪襲ひて義貞を破りて之を走らす尊氏復た京師に入る居ること數日官軍道を分ちて來攻む尊氏拒て大に敗る義貞路を分ち之を追ふ暮に抵りて官軍引去る尊氏又京師に入る明日楠正成間を遣して言ふ義貞等戰ひて桂川に死すと尊氏之を信じ其の衆の奔逸するを遏めんと欲し分ちて兵を諸路に遣す麾下單弱なり官軍釁を伺ひ火を放ちて急に攻む尊氏大敗して竟に丹波に走る敗卒兵庫に聚り將に尊氏を迎へて再び京師を攻めんとすと聞て乃ち往て之に會す赤松則村入りて摩耶山を保たんと請ふ諸將或は曰ふ將軍一日城に入らば諸軍望を失し官軍勝に乘ぜん從ふ可らずと尊氏乃ち止む適〻顯家義貞兵を率て來攻む直義豐島河原に拒ぎ戰ふ利あらず明日大友貞宗等戰艦を率て來援く直義之を率て湊川に戰ふ又敗る既にして尊氏兵を進めて瀨川に至る細川和氏等宗貞等を率て義貞と戰ふ克たず則村尊氏に說きて曰く宜く西に行き九國の兵に賴りて再び京師を取るべしと貞宗も亦言ふ我船三百餘艘以て西行の資と爲すべしと尊氏之に從ひ倉皇として海に泛ぶ士卒船を爭ひて相排擠す溺死する者二千人許り鎧馬悉く委棄す播磨室津に至り軍を駐めて謀議す或ひは曰く官軍必ず將に我を躡んとす請ふ諸將を分遣して國郡に據り以て之に備へんと尊氏曰く善しと乃ち佐竹義敦を東國に仁木賴章を丹波に、細川和氏、細川定禪を讃岐に、上杉憲顯を石見に、今川範國を備中に、桃井小早川氏を安藝に、大内弘世を周防に、厚東宗西を長門に、石橋和氏を備前に遣還し赤松則村を播磨に留め並びに機を伺ひて同じく擧げしむ尊氏直義と僅に見卒五百人を率て赤間關に至る少貳賴尙選兵五百を率て來會す筑前蘆屋に至る宗像大宮司宗像政弼迎へて館せしめ資くるに鎧馬を以てす是に由りて軍を擧けて稍〻安んず菊池武敏兵數萬を以て來り攻む諸將尊氏直義並び進んことを勸む尊氏曰く我九國に至りて始めて敵と交戰す而して我二人齊く進んで小蹉跌あらば全軍皆死せん如かず留りて軍後に在り先鋒をして特む所あらしめんには若し利あらざれば徐に麾下を率て之に赴くも未だ晩からざるなりと先づ直義をして往て拒かしむ大に多々良濱に戰ふ直義の兵士鎧仗具はらず徒歩して赴き戰ふ衆必ず死せんことを懷ふ一以て百に當らざるなし武敏敗走す直義追ひて博多に至る武敏返戰す鋭甚はだし尊氏乃ち兵を麾て前み大に武敏を敗る松浦神田氏尊氏の軍を望て以爲く數萬至ると旗を偃せて來降す武敏走りて肥後に還り菊池城を保つ一色賴行等をして攻めて之を拔かしむ武敏逃匿す九國風を望みて降附す時に美作備中の土豪一時蜂起して悉く尊氏に應ず帝新田義貞に詔して西討せしむ義貞大軍を將て白旗城を圍み兵を分ちて奈義能仙菩提寺三石城を攻めしむ尊氏太宰府に留りて月を踰ゆ衆或は謂ふ勢に乘じて京師に入らん或は謂ふ秋熟を待んゝ議未た決せず會〻赤松則村其の子を遣して速に京師に向はんことを勸む石橋和義の使も亦急を告ぐ尊氏乃ち一色賴行仁木義長を留めて九國を守らしめ急に太宰府を發して長門に抵り守護厚東宗西に命じて悉く其の舟を發せしむ嚴島に到るに及びて禱祀すること三日初め尊氏の京師を陷るるや後伏見帝の胄胤を奉じて帝と爲さんと謀る而して諸皇子皆從ひて延暦寺に幸して果さず敗れて兵庫に奔るに及び赤松則村も亦以て言を爲す時に熊野別當道有從ひて軍に在り素と藤原資名と相識る尊氏道有に謂て曰く吾軍の屢〻敗るゝは王師に抗するを以てなり吾將に光嚴帝の院宣を請ひ兩帝をして國を爭はしめんとすと乃ち道有を遣し資名に因て之を請はしむ是に至りて三寶院の僧賢俊光嚴帝の書を齎らして至る尊氏悅びて曰く我か事濟ると乃ち日章錦旗を製す是に於て四國西國の兵士大に來集して軍益〻振ふ尊氏少貳賴尙の議に從ひ舟師七千隻を率ゐ直義歩騎二十萬に將として水陸並び進む直義進みて福山城を陷る義貞白旗等の圍を解き退て兵庫に屯す尊氏直義進みて兵庫に抵る錦旗日に曜やき鉦鼓地に震ふ脇屋義助經島に、楠正成湊川に、義貞和田崎に陣し、細川定禪の兵二百餘人先つ義助と戰ひて悉く殺す定禪更に舟師を率ゐて岸に傍ひて紺邊濱に向ふ義貞義助營を空ふして舟を逐ひて東す尊氏の兵一時に船を下りて和田崎に登る直義既に攻て正成に湊川に克つ乃ち倶に軍を合して義貞と大に生田森に戰ひて之を敗る義貞走りて京師に還り駕を奉じて延暦寺に幸し法皇光嚴院を促がして行在に詣らむ光嚴院病に托して往かず尊氏進みて男山に陣し法皇光嚴院を迎へ之を奉じて東寺に據る公卿稍〻來集す尊氏吉良石堂澁川畠山氏をして東坂本に由り仁木細川今川荒川氏をして無動寺に由り高、南部、巖松、桃井氏をして西坂本に由り延暦寺を攻めしむ官軍拒ぎ戰ひて之を破る諸軍大に潰え自ら相踏藉して死する者千許官軍勝に乘じて來り攻む尊氏弱卒を出して之を誘ふ官軍追ひて京師に入る乃ち大に兵を出し衢街を塞礙して縱横攻擊す官軍

又東西夾みて東寺を攻めんと謀る尊氏其計を探知し乃ち軍を分ち三と爲し一を東山七條河原に一を船岡の麓に一を遊軍と爲して四入條に陣せしむ官軍果して大擧して火を縱ちて來り攻む諸軍合擊して大に之を敗る時に帝延暦寺に詔し興福寺に牒して官軍を援けしむ興福寺之に應ぜず是に於て近畿の兵多く起ちて官軍に屬し水陸の糧道を絕つ尊氏の軍大に困しむ始めは鎧馬を賣りて食に供す久くして給する能はす乃ち四出して食物を劫掠し衣服を礪奪す京師の居民兵燹に累經して既に資業を失ふに復た殘暴に遇ふ往々出て乞丐し飢て路上に臥す公卿と雖も亦飢渇漂泊を免かれず喪亂の慘極まれり官軍復た兵を出して來り攻めんとす尊氏細川定禪等を遣して擊ちて之を走らす義貞又諸軍と約して日を刻し尊氏を攻む火を擧ぐるを號と爲す會〻白河の民家火を失す藤原隆資之を望みて直に進み東寺南門を攻む高師直逆へ擊ちて破らる隆資勝に乘じて急に譙樓に薄まる時に兵皆外に出てゝ在る者は只〻老弱のみ驚怖して爲す所を知らず而して尊氏經誦をして少しも怖るゝ色なし會〻土岐賴直變を聞て馳せ至り大に羅城門外に戰ふ師直も亦至る倶に奮擊して之を卻く俄かにして義貞徑ちに東寺に薄り尊氏と身を挺んでゝ決戰せんと請ふ尊氏之に應じて將に門を出てゝ戰はんとす上杉重能固く諫めて之を止む土岐賴遠等義貞の後に出てゝ之を圍むこと數重義貞圍を突て脫し去る尊氏光嚴院を位に復せんと欲す衆謂らく此の主は往時北條高時の爲めに立てられ曾て年を踰えずして海內覆亂し北條氏滅ぶ之を立つるは不祥なりと遂に弟の豐仁親王を奉じて帝と爲す是を光明帝と爲し號を建武と爲す民間之が爲めに語りて曰く君王は多福なり未だ親ら一戰だもせずして將軍賜ふに王位を以てすと是より南北朝の戰となる興福寺南軍の援を爲す尊氏邑を與へて之を誘ふ是に於て叛きて尊氏に黨す乃ち足利高經を遣し兵を以て北陸道を扼せしめ小笠原貞宗をして甲斐信濃の兵を率て近江野路に屯せしめて南軍の糧道を梗がしむ南軍內糧食に乏しく外攻伐に利なし勢ひ孤に援ひ絕えて窘飢益〻甚だし尊氏密かに使を遣し僧忠圓に賴りて僞りて降を乞ふ帝之を許す尊氏大に悅び曰く誰か謂ふ君王は叡明なりと已に吾が計中に陷りたりと又た書を從駕の諸將に貽りて之を招慰す是の冬義貞皇太子を奉じて北、越前に奔り車駕京に還る尊氏直義をして奉迎せしめ遂に帝を華山院に幽し悉く駕に從ふ公卿の官職を奪ひ將士を拘繫し三神器を新主に傳へんことを請ふ帝乃ち僞器を授く又帝の詔を矯めて足利高經仁木賴章等を遣し義貞を金崎城に攻めしむ何ばくもなくして帝夜に乘じて吉野に幸す京師騷擾し諸將馳せ至る尊氏曰く頃者帝華山院に在り諸將をして警衛せしむ固と煩勞なり然れども若し先代に倣ひて之を海島に遷すは敢て安んぜざる所あり我れ甚だ之を憂ふ今帝の自から出づる安んぞ福に非ざるを知らん但〻其の所在に就て漸く之が謀を爲さん耳と是に於て衆始めて安んず是の歲光明院尊氏を拜して權大納言と爲す二年足利高經金崎城を陷れ皇太子を執へて京師に送る尊氏之を幽す義貞杣山城に入り北國を經略して兵勢又振ふ尊氏高經に命じて之を攻めしむ冬源顯家等鎌倉を攻む義詮敗走す三年土岐賴遠等顯家と青野原に戰ひて大敗す尊氏大に驚き高師泰師冬等の諸將を遣して之を援けしむ賴遠等顯家を尾して黑地に至り前後夾み擊つ顯家道を伊勢に轉ず師泰追ひて雲津川に戰て克たず顯家奈良に入る桃井直常兄弟を遣して之を擊たしむ又克たず時に義貞越前府城を拔く高經大に敗れ走りて足羽を保つ初め高經の皇太子を執ふるや誘ひて義貞義助の所在を問ふ太子紿いて曰く皆自殺すと故を以て杣山の攻めを緩うす是に至りて尊氏始て紿かれたるを知り直義と謀りて藥を進めて皇太子及成良親王を弑す源顯家屢〻兵を和泉に出し弟顯信をして男山に據らしむ尊氏高師直を遣して之を攻めしむ既にして顯家敗死し男山陷る高經義貞と相持して之を久うす義貞矢に中りて死す是に於て諸國の官軍勢日に蹙り將士相率て來降す光明院尊氏に正二位を授け征夷大將軍に拜す四年高經新田義助と越前に戰ひて敗らる尊氏、高師治及土岐賴遠等をして之を援けしむ既にして城陷る是の歲後醍醐帝崩じ後村上帝登祚す興國六年兒島高德備前に荻野朝忠丹波に起る尊氏山名時氏を遣して之を攻めしむ朝忠降る正平二年楠正行兵を攝津に出し以て京師を伺ふ細川顯氏等を遣して之を拒がしむ屢〻敗らる復た高師直等を遣す明年春師直等正行と四條畷に戰ふ正行敗死す師直等進みて吉野に逼る帝出て賀名生に幸す師直行宮に火して還る是歲光明院位を興仁に讓る是を崇光院と爲す四年直義上杉重能畠山直宗と謀りて高師直を殺さんとす事漏る師直怒りて將に直義を攻めんとす諸將多く之に應ず尊氏大に驚き使を直義に遣して曰く師直兄弟奢侈驕悖、復た君臣の禮なし變測る可らず宜く急に來りて安危を共にすべしと直義即ち出て之れに赴く從兵途に亡げて宗戚信近在る者僅に千人に過ぎず明日師直師泰兵を率ゐて來圍む尊氏怒りて須賀清秀を遣して師直を讓む師直對へて曰く臣他志なし止だ饞臣を執んと欲する耳と軍を麾て進む尊氏益〻怒りて將に出て戰はんとす直義固く諫めて其請ふ所を許さしむ尊氏之に從ふ師直圍を解て退く尊氏乃ち直義を罷め義詮を召して京師に入りて軍政を掌らしめ重能直宗を越前に流す師直遁りて之を殺さしむ又直冬を忌みて之を殺さんとす直冬逃れて肥後に到る五年三角某直冬に應じて兵を石見に起す尊氏師直師泰を遣して之を攻めしむ時に土岐賴明尊氏に美濃に反す尊氏師直を召還し義詮と共に擊ちて之を平らげしむ直冬勢ひ稍〻强し冬尊氏師直等を率て往て擊つ即夜直義潛に出亡す師直留りて之を索めんと請ふ尊氏聽かすして發す適〻直義歸順すと聞て途より還る六年春直義男山に桃井直常延暦寺に據り將に義詮を京師に攻めんとす義詮京を棄てゝ走る直常京師に入る尊氏義詮に西郊に遇ふ軍を分ちて直常を攻めて之を走らす尊氏京師に入る是夜將士多く直義に降る明日尊氏師直と西に走りて書寫山に至る師泰三角の圍を解きて至る直義石塔賴房をして來り攻めしむ尊氏親ら兵に將として之を擊つ利あらず直義又畠山國清等をして賴房を援けしむ尊氏逆へて御影濱に戰ひて大敗す狼狽して松岡城に入り夜に至りて師直を召して兵數幾ばくかあるかと問ふ曰く見兵五百其の餘皆亡げ去ると尊氏歎じて曰く我事去れりと乃ち甲を解て坐す諸將列に就き將に與に倶に自殺せんとす會〻饗場氏直城の東門を叩き大に呼びて曰く和議定まれり諸君死を輕んずる勿れと徑に入り尊氏に見えて曰く將軍臣を以て亡げたりと爲す邪、臣軍士の鋭氣沮喪せるを以て竊に國清の營に往て和を講ず國清道ふ錦小路殿高兄弟の不義を懲さんと欲す然れども必らず誅するの意なし且つ臣其の國清に賜ふの書を觀るに情義深厚詞

辭に見ぬる將軍疑ふと勿れと尊氏悅び遂に諸將を率て京師に還る師直師泰道に殺さる直義男山より義詮丹波より各〻兵を率めて京師に還る乃ち義詮を罷めて復た直義を以て政を掌らしむ而して尊氏直義外相和すと雖も內實は平なる能はず既にして仁木頼章、細川頼春、土岐頼康、佐々木高氏の諸將石塔頼房、桃井直常等と互に相猜忌して各〻疑懼を懷く是に於て浮言沸騰し釁隙復た起る頼章頼春等各〻逃れて領國に還る直義之を聞て亦た越前に奔る將士多く之に從ふ義詮其の反りて襲はれんことを懼れて之が備を爲んことを請ふ尊氏曰く運は天に在りと吟嘯自若たり秋崇光院の命を奉じて直義を討つ兵二百に將として近江鏡驛に抵る佐々木高氏及び子秀綱仁木義長土岐頼康等各〻兵を率て來會し直義の將細川畠山桃井等と八相山に戰ひて之を破る國清顯氏直義に勸めて和を講ぜしむ就らず乃ち京師に還り復び親ら往て之を擊んと謀る而れども京師の空虛に乘じて官軍の襲はんことを懼れて歷を使を吉野に遣し崇光帝を廢して車駕を迎へんことを請ふ帝許さず時に赤松則祐吉野に在り尊氏又則祐に就て降を請ふ帝伴りて之れを許し詔書を賜ひて直義を討たしむ尊氏乃ち義詮をして留りて京師を守らしめ親ら諸將を率て發す駿河に到り兵を傍郡に徵がす時に東北の諸國既に多く直義に屬して僅に招て兵三千を得進みて薩埵山に屯す宇都宮氏綱兵を下野に起して之が聲援を爲す直義十萬に將として伊豆府に陣し上杉憲顯に二十萬石塔義房に十萬を遣して尊氏を薩埵山に圍ましむ桃井直常氏綱を拒く氏綱連戰して皆克ち進みて古宇津に至る憲顯義房潰走す仁木義長追ひて伊豆山に匿る尊氏島山國清等を遣し書を貽りて招て之を降たす七年春尊氏鎌倉に入りて直義を幽し尊氏遂に斷つ城外を掠て歸る是より先き新田義興、同義宗、脇屋義治兵を上野武蔵に起す諸將衆寡敵し難きを以て先づ安房上總に赴き諸國の兵を招て之を擊んと請ふ尊氏曰く敵を避けて而て後勝を制するは千中に一あり今一たび鎌倉を去らば則ち阪東悉く敵の有へ爲らん如かず先づ發して之を制せんには子基氏を留めて鎌倉を守らしめ自ら五百騎に將として出づ久米川に抵る比ひに兵集るもの幾んど八萬分ちて五隊として義興等と大に金井原に戰ふ殺傷相當る鑾揚氏直兒玉蕨と戰て大に敗れ奔りて尊氏の中軍に赴く諸軍挽敗して義宗の爲めに乘ぜられ奔りて石淵に至る尊氏自殺せんと欲す親兵二十餘騎拒ぎ戰ひて死す曾て日暮る木頼章同義長、義興義治と戰ひて之を敗る義興義治又敗卒を聚め轉じて鎌倉を攻む基氏敗走す時に義宗當吹嶺に在り尊氏以爲らく先づ義宗を破らば則ち義興等自ら潰えんと乃ち兵に將として笛吹に赴く義宗小手差原に遇ふ苦戰數十合義宗越後に奔る兵士悉く尊氏に降る義興義治果して逃る尊氏鎌倉に入る八年夏山名時氏官軍に歸して義詮を京師に攻む義詮後光嚴帝を奉じて美濃に走る尊氏基氏を鎌倉に留めて關東管領と爲し自ら諸軍を率て西す義詮に錢驛に會ひ興に俱に後光嚴院を奉じて京師に入り仁木頼章を以て執事と爲す九年是より先き直冬南朝に降り山名時氏と謀て尊氏を討ち足利高經桃井直常北國の兵を率て之れに應ず兵勢甚だ熾んなり尊氏義詮をして播磨斑鳩驛に屯して時氏に備へしむ冬直冬時氏等竝に進みて丹波に到る尊氏京師に還り直冬時氏等を破る尊氏遂に西に走りて近江武佐寺を保つ十年春直冬等京師に入る仁木義長土岐頼康佐々木氏頼等兵を率て尊氏に武佐寺に會し乃ち義詮を以て留守を命じ親ら諸將を率て發す駿河に到り兵を徵がす時に東北の諸國既に多く直義に屬して山名時氏を破らんとす尊氏東山に仁木頼章嵐山に義詮を屯して諸國に徵兵を命じ增して二十分一を爲す是に由て諸將風を望みて出て〻降る義詮勝に乘じて足羽を攻む高經禦ぎ戰ひて累りに捷つ義詮義助復た大に兵を發し日を刻して必ず拔かんことを期す時に城兵僅かに三百高經謂へらく衆寡敵ぜず諸道餌に斷つ城外棄て〻走ること亦得可かず方今の計は唯〻死守あるのみと城主朝倉景冬之を贊す乃ち七城を足羽島の間に築きて益々守備を固くす會々平泉寺の僧使を遣して曰く頻年延曆寺我と藤島莊を爭ふ今地を以て歸さば我兵を出して援を爲さんと高經喜びて之を許す僧徒之れを利なりとして乃ち健者五百人を擇て藤島を守る義詮兵を分ちて之れを攻む利あらず乃ち親ら輕騎を率て馳せて救ふ時に日已に晚し高經細川某等を遣して藤島を救はしむ道に義詮に遇ふ弓手をしむ橋を截ぶて射さしむ箭義詮の顏に中る義詮自刎す起中の人氏家重國探りて其の首を京師に傳へしむ明年義助の將畑時能來りて諸營を攻め夜に乘じて黑丸城に至る高經上木家光の言を用ひ夜五城を燒て加賀に走り富樫介に依て那谷城を保ち尋て高師治と兵七千餘に將として時能を鷹巢城に圍み晝夜攻戰すること數十合時能矢に中りて死す是に於て官軍終に靈き北國悉く尊氏の有と爲る義詮義助の勢日に盛んなり初め義詮の死する高經其の佩刀を獲て所謂鬼切丸にして源氏嫡嗣の傳ふる所なり尊氏使を遣して之を索む高經吝惜して出さず更に他刀を燒燼して之を與ふ或人之を訐く尊氏大に怒る故を以て其の功を賞せず高經居常怏々として樂まず會〻尊氏弟直義と隙あり足利直冬兵を起すと及んで高經之に應じ從ひて神南及び東寺に戰ふ既にして直冬兵敗れて四に走る高經越前に歸りて再舉を謀る尋いで薨ぜして道朝と號す正平十六年義詮の執事細川清氏南朝に歸順して足利義詮を攻む是より先き義詮數〻使を遣し禮を厚くして高經を招く高經遂に子氏頼義將等と出て〻降る是に至り高經義將を以て執事と爲す時に義將年尚ほ弱し高經代て其の事を行ふ時人其の蓄宿なるを以て政を爲す嚴刻にして復た思み憚る時に諸國の守護に令して年ごとに軍賦五善光寺城を保んと欲す道騰急に迫て城に入る能はず直ちに足羽に走り黑丸城を保つ是に於て諸將風を望みて出て〻降る義詮勝に乘じて足羽を攻む高經禦ぎ戰ひて累りに捷つ義詮義助復た大に兵を發し日を刻して必ず拔かんことを期す時に城兵僅かに三百高經謂へらく衆寡敵ぜず諸道餌に斷つ城外棄て〻走ること亦得可かず方今の計は唯〻死守あるのみと城主朝倉景冬之を贊す乃ち七城を足羽島の間に築きて益々守備を固くす會々平泉寺の僧使を遣して曰く頻年延曆寺我と藤島莊を爭ふ今地を以て歸さば我兵を出して援を爲さんと高經喜びて之を許す僧徒之れを利なりとして乃ち健者五百人を擇て藤島を守る義詮兵を分ちて之れを攻む利あらず乃ち親ら輕騎を率て馳せて救ふ時に日已に晚し高經細川某等を遣して藤島を救はしむ道に義詮に遇ふ弓手をしむ橋を截ぶて射さしむ箭義詮の顏に中る義詮自刎す起中の人氏家重國探りて其の首を京師に傳へしむ明年義助の將畑時能來りて諸營を攻め夜に乘じて黑丸城に至る高經上木家光の言を用ひ夜五城を燒て加賀に走り富樫介に依て那谷城を保ち尋て高師治と兵七千餘に將として時能を鷹巢城に圍み晝夜攻戰すること數十合時能矢に中りて死す是に於て官軍終に靈き北國悉く尊氏の有と爲る義詮義助の勢日に盛んなり初め義詮の死する高經其の佩刀を獲て所謂鬼切丸にして源氏嫡嗣の傳ふる所なり尊氏使を遣して之を索む高經吝惜して出さず更に他刀を燒燼して之を與ふ或人之を訐く尊氏大に怒る故を以て其の功を賞せず高經居常怏々として樂まず會〻尊氏弟直義と隙あり足利直冬兵を起すと及んで高經之に應じ從ひて神南及び東寺に戰ふ既にして直冬兵敗れて四に走る高經越前に歸りて再舉を謀る尋いで薨ぜして道朝と號す正平十六年義詮の執事細川清氏南朝に歸順して足利義詮を攻む是より先き義詮數〻使を遣し禮を厚くして高經を招く高經遂に子氏頼義將等と出て〻降る是に至り高經義將を以て執事と爲す時に義將年尚ほ弱し高經代て其の事を行ふ時人其の蓄宿なるを以て政を爲す嚴刻にして復た思み憚る時に諸國の守護に令して年ごとに軍賦五

アシカ

爲して義興等と大に金井原に戰ふ殺傷相當る鑾揚氏直兒玉蕨と戰て大に敗れ奔りて尊氏の中軍に赴く諸軍挽敗して義宗の爲めに乘ぜられ奔りて石淵に至る尊氏自殺せんと欲す親兵二十餘騎拒ぎ戰ひて死す曾て日暮る木頼章同義長、義興義治と戰ひて之を敗る義興義治又敗卒を聚め轉じて鎌倉を攻む基氏敗走す時に義宗當吹嶺に在り尊氏以爲らく先づ義宗を破らば則ち義興等自ら潰えんと乃ち兵に將として笛吹に赴く義宗小手差原に遇ふ苦戰數十合義宗越後に奔る兵士悉く尊氏に降る義興義治果して逃る尊氏鎌倉に入る八年夏山名時氏官軍に歸して義詮を京師に攻む義詮後光嚴帝を奉じて美濃に走る尊氏基氏を鎌倉に留めて關東管領と爲し自ら諸軍を率て西す義詮に錢驛に會ひ興に俱に後光嚴院を奉じて京師に入り仁木頼章を以て執事と爲す九年是より先き直冬南朝に降り山名時氏と謀て尊氏を討ち足利高經桃井直常北國の兵を率て之れに應ず兵勢甚だ熾んなり尊氏義詮をして播磨斑鳩驛に屯して時氏に備へしむ冬直冬時氏等竝に進みて丹波に到る尊氏京師に還り直冬時氏等を破る尊氏遂に西に走りて近江武佐寺を保つ十年春直冬等京師に入る仁木義長土岐頼康佐々木氏頼等兵を率て尊氏に武佐寺に會し乃ち義詮を以て留守を命じ親ら諸將を率て發す駿河に到り兵を徵がす時に東北の諸國既に多く直義に屬して山名時氏を破らんとす尊氏東山に仁木頼章嵐山に義詮を屯して諸國に徵兵を命じ增して二十分一を爲す是に由て諸將風を望みて出て〻降る義詮勝に乘じて足羽を攻む高經禦ぎ戰ひて累りに捷つ義詮義助復た大に兵を發し日を刻して必ず拔かんことを期す時に城兵僅かに三百高經謂へらく衆寡敵ぜず諸道餌に斷つ城外棄て〻走ること亦得可かず方今の計は唯〻死守あるのみと城主朝倉景冬之を贊す乃ち七城を足羽島の間に築きて益々守備を固くす會々平泉寺の僧使を遣して曰く頻年延曆寺我と藤島莊を爭ふ今地を以て歸さば我兵を出して援を爲さんと高經喜びて之を許す僧徒之れを利なりとして乃ち健者五百人を擇て藤島を守る義詮兵を分ちて之れを攻む利あらず乃ち親ら輕騎を率て馳せて救ふ時に日已に晚し高經細川某等を遣して藤島を救はしむ道に義詮に遇ふ弓手をしむ橋を截ぶて射さしむ箭義詮の顏に中る義詮自刎す起中の人氏家重國探りて其の首を京師に傳へしむ明年義助の將畑時能來りて諸營を攻め夜に乘じて黑丸城に至る高經上木家光の言を用ひ夜五城を燒て加賀に走り富樫介に依て那谷城を保ち尋て高師治と兵七千餘に將として時能を鷹巢城に圍み晝夜攻戰すること數十合時能矢に中りて死す是に於て官軍終に靈き北國悉く尊氏の有と爲る義詮義助の勢日に盛んなり初め義詮の死する高經其の佩刀を獲て所謂鬼切丸にして源氏嫡嗣の傳ふる所なり尊氏使を遣して之を索む高經吝惜して出さず更に他刀を燒燼して之を與ふ或人之を訐く尊氏大に怒る故を以て其の功を賞せず高經居常怏々として樂まず會〻尊氏弟直義と隙あり足利直冬兵を起すと及んで高經之に應じ從ひて神南及び東寺に戰ふ既にして直冬兵敗れて四に走る高經越前に歸りて再舉を謀る尋いで薨ぜして道朝と號す正平十六年義詮の執事細川清氏南朝に歸順して足利義詮を攻む是より先き義詮數〻使を遣し禮を厚くして高經を招く高經遂に子氏頼義將等と出て〻降る是に至り高經義將を以て執事と爲す時に義將年尚ほ弱し高經代て其の事を行ふ時人其の蓄宿なるを以て政を爲す嚴刻にして復た思み憚る時に諸國の守護に令して年ごとに軍賦五

アシカ

猜疑多く殺戮度に過ぎ骨肉も横死を免れざるは爲めに懲む可し我は則ち然らず云々と、曾是圓及ひ玄慧に命じて憲令十七條を定めしむ之を建武式目と謂ふ初め順を犯して兵を稱するを以て人心の服せざるを懼れ陽に光明院を尊みて事必ず稟請す志を得るに及びて復た悉憚する所なく其の主を視る弁髦の如く廢立皆其の手を竢ちて成る天下の國郡は神祠の封戶、公卿の食邑を問はず强奪豪占して悉く將佐に頒給し五十分の一を賦して軍國の用を資く其の主の供御と雖も時或は闕乏して願みず宗人顧列する者凡そ四十三人、守護更たるもの勝げて計ふ可らず衣冠盛門其の陵轢を被りて反りて其の僕隸に跪拜す鎌府北面の士に至るまで競ひて厥泰の衣服言語を學び以て其の侮笑を免れんと欲す兵を興してより以來前後二十餘年京師爭戰の地と爲り宮門殿舍悉く皆焚蕩し饑疫相踵き盜賊縱橫死する者枕藉す尊氏平生儒を好む地藏を信して每に其の像を畫く又尚ほ觀音の像を作る華法敏密にして職工の畫に齊し宅間榮賀竹若、義詮、基氏、聖王(大日本史、扶桑畫人傳)

アシカガ タカツネ 足利高經 尊氏と同宗なり或は斯波氏と稱す曾祖家氏は宮內少輔泰氏の長子なり祖は宗家父は家貞皆北條氏の出なり高經小字は千鶴麻呂、尾張孫三郎と稱す有馬頭を歷從四位下に叙せられ修理大夫に任ぜられ尾張守を兼れ越前守護と爲る建武二年尊氏と同じく反す官軍來り攻む尊氏利なく失す高經土岐頼遠等と官軍を竹下に破ぶり遂に進んで京師を陷る延元元年尊氏再び東驚に延暦寺に逼まる高經越前に在て官軍の北路の餉道を斷つ後醍醐帝尊氏と和して京師に還るに及びて新田義貞皇太子を奉じて金崎(越前)に如く脇屋義助新田義顯、瓜生保の杣山城(越前)に投ず高經尊氏の旨を承けて誘ひて保を降す義助義顯遁れて金崎に走る高經因て保の兵を併せ高師泰を俱に金崎を圍む保の弟重等脇屋義治を推して再び兵を杣山に起す保尊氏に降るを悔いて逃れて杣山に還る高經踵進して保の爲めに敗られて還り復た師泰と金崎を圍む明年城陷る高經火を縱て之を燒く部下の兵皇太子を執ふ即ち護送して京師に至る義貞義助の兵復た後に起る高經還りて越前の國府に陣す時に方に隆冬士卒戰

の封戶河口莊を奪ふ僧徒激怒し春日の神木を奉じて京に入り高經の宅前に詣て訴ふ延臣咸な高經を憚りて敢て言ふ者なし訟斷ぜざること二年既に大に怒る高經の家に火あり資財蕩盡す高經恬然として意を爲さず燒くるに隨て復た作る制度前に倍す居ること幾ばくならずして禍に罹る

人以て神靈と爲す(大日本史)

アシカガ タダツナ 足利忠綱 鎌倉府將軍藤原秀郷の裔なり田原又太郎と稱す世〻下野足利莊を食む父は俊綱仁安中讒に遭ひて其の食邑を收められ京師に往て冤を訴ふ平重盛申理して還與す俊綱深く之を德とし力を平氏に効さんことを思ふ忠綱驍勇絕倫時人謂ふ忠綱人に過ぐる者三つあり齒の長きこと一寸聲の聞ゆ十里、力百人に敵すと治承中以仁王兵を舉げ令旨を忠綱及び小山朝政に賜ふ忠綱朝政と同宗竝びに州の豪族たり故を以て常に相猜忌す忠綱業より平氏に善し遂に平知盛に從ひて王を宇治に擊つ橋既に撤所を奪ふ高氏稼み平なる能はずんことを懼ふ諸將に連結して其の言を納れ佐々木氏頼をして兵經入りて義詮に見えて曰く臣凡庸なり以て久く大任に處る諸論實に多き所以なり若し以て賢みんと乃ち衆を屬して直に濟る從騎三百一も漏るゝ者なし諸軍纔て進み遂に大克を獲たり時に年十七既にして京師に還る清盛召して之を賞せんと欲す忠綱上野に自ら借まさるなり願くは將軍少し久く矜察を垂れよと因て壁派共に下る義詮も亦泣く之を許す忠綱の一門深栖三郎、利根四郎、山上五郎、戶屋子七郎等皆後綱の弟にして忠綱の叔父なり其忠綱一人の功となるを快しとせず大胡、高屋、大室、那波、佐貫、小野寺等の一族と議し十人連署して訟へて曰く宇治川の功忠綱一人の功にあらず一門與みせずは忠綱爭て加渡することを得可き勸賞は須らく十人の上にある可きに忠綱一人に賜はるとは其の理なしも忠綱の大介を稱ぜざれば臣等亦事あるの日、召に應せざるべし乞ふ忠綱畠山義深等七千餘人を遣して之を一人を召せと清盛力及ばず十郡を一門十人に分ち賜はす忠綱を六郡の大介とし中務丞に任じ新田庄を賜ほる忠綱十六郡を賜はりて其大介となりたるは僅に一刻に

過ぎず忠綱心平かならず之れより平家を怨み郎黨百餘人を具し告げずして關東に歸り又催促に應せず又一門の伯父と別れて相善からず既にして右兵衛佐頼朝高倉宮の令旨を奉じて伊豆に興り石橋山の一戰敗れて武藏の原に再擧を圖る忠綱乃ち一門と別れ七百餘人を率ゐて之に從ひ富士川浮島ヶ原に轉戰し殊功あり頼朝鎌倉に入るに及んで搦手として景親の子大庭太郎の首を捕れ功を以て舊領上野の六郡を知す忠綱常に小山朝政と隙あり明年信太義廣叛するや忠綱義廣の爲に誘かれ東西力を併せて朝政を襲はんとし兵を率ゐて新田を發す忠綱の臣切生六郎虚に乘じて居城を襲ひ俊綱及び一族を殺す忠綱驚き軍を還せども及ばず既にして信太の謀逆に與するの罪に坐し新田に安ずる能はず密に遁れて西海道に至り居ること數年、足利義兼忠綱と友とし善し爲に辨疏して罪僅に死を宥さる然れども其私に兵を動したるの故を以てまた舊知を復せられず足利に至つて義兼に食實たると五年許義兼の侍婢藤野事によつて忠綱を怨む義兼奥州に泰衡を伐つより返るの日讒するに忠綱、義兼の室時子と私あるを以てす、義兼怒て忠綱を追ひ且兵を遣して之を攻む忠綱防ぐ能はず安蘇郡飛駒村の峡澤に至つて自殺す郎黨殉するもの十三人、時子亦自殺す時に文治六年なり 而して後竟初めて晴る、義兼悔いて剃髪す忠綱自殺の地に今忠綱明神あり古文書及忠綱の遺物を藏す(大日本史、鑁阿寺舊記)

アシカガ　タダフユ　足利直冬　尊氏の庶長子なり母の賤しきを以て尊氏の爲に育はれず幼にして出て東勝寺に依る正平の初め竊かに京師に至りて尊氏に見えんことを求む之を久しして請ふ所を得ず乃僧玄慧の家に居て學を受く玄慧頗る之を器とし爲めに叔父直義に言ふ直義乃ち召見て之を試み命じて其の家に居らしめ數々尊氏に請ふ尊氏未だ之を許さず適々紀伊に兵起るに會ふ尊氏始めて許して父子と爲り光明院に請ふて右兵衛佐に任じ兵に將として往て擊たしむ直冬之を破て還る時人稍々之を重んず而して嫡母赤橋氏深く之を惡み密かに之を尊氏に讒す故に尊氏終に之を恩遇せず視ること仁木細川の族と等し直義遂に之を子とし養ふ尋て從四位下に進み宮内大輔と爲る四年直義高師直を討たんと欲す乃ち尊氏に請ひて直冬を出して中國探題と爲し陰に外援を爲さしむ直冬往きて備後鞆に留る事を視る明審、賞罰號して平允と爲す狡黠の徒跡を竄くして遠く遁る國人多く心を歸す是時師直執事と爲て專ら天下の務を決す其の與奪する所一に愛憎に出つ是に至て其の惡益々彰かなり直義將に事を擧げんとして使を遣して來り告ぐ直冬往て之に應ぜんと欲す師直赤松則村をして遮りて備前美作に拒かしめ又た中國將士をして之を圍らしむ是に於て杉原利孝二百騎を率て來て鞆を襲ふ適々守兵甚た少なし直冬殆んど獲られんとす其の兵礒部左近等射て之を禦ぐ直冬僅かに脱して肥後に走る宅磨守直尊兵を以て來屬す師直又た尊氏の令を矯めて西國人をして直冬を殺さしむ而して人皆其の詐なるを曉て敢て應ずる者なし直冬少貳頼尚の女を納れて妻と爲し往て其の家に居す九國服從し兵勢大に振ふ石見の人三角某等も亦遙かに之が聲援を爲す天下分裂して三と爲る官軍を稱して宮方と爲し尊氏の兵を將軍方と爲し直冬の兵を右兵衛佐殿方と爲す師直尊氏に勸めて親ら直冬を擊たしむ會々直義南朝に歸順し兵を引て尊氏を討つ故を以て尊氏來るを果たさず未だ幾ばくならず直義尊氏の爲めに殺さる國人皆直冬に背く直冬長門に走て豐田城に據り吉見滿貞等に因りて南朝に歸順す西國の諸將又起て直冬に應ず八年直冬國人の爲めに逐はれて安藝周防の間に流落す是の時に當りて山名時氏亦既に南朝に歸順す乃奏して直冬を奉じて大將と爲んとす詔して直冬を以て總追捕使と爲し承久巳前の故事に遵ひて守護以下の事を裁決せしむ九年詔して山名時氏と京師を復さしむ足利高經桃井直常並びに北國兵を以て來屬す直冬進て丹波に到る聲勢大に熾んなり尊氏京師を棄て、遁る 明年直冬入て東寺に據る尊氏諸將と來り戰ふこと月餘直冬兵食日に乏し乃ち退て男山を保つ見兵五萬餘近畿の兵集るを竢ちて更に尊氏と戰はんと謀る群議決せず乃ち八幡宮に祈る巫言不吉なり諸將之を聞て犇散す直冬遂に石見に還る十七年山名時氏山陰山陽を徇へ宮田直貞をして宮信兼を備後に攻めしむ直冬兵を率ゐ出て、之れに應し宮內に屯し僧をして信兼に説かしむ信兼聽かず子氏信をして宮内を攻めしむ直貞敗走す直冬戰ひて屢々利あらず乃ち引て還る應永七年石見に卒す法名は慈照、慈恩寺と號す子冬氏兵衛佐となり備後に居る世呼んで中國武衛と曰ふ(大日本史)

アシカガ　タダヨシ　足利直義　尊氏の同母弟なり初の名は高國又忠義嘉暦中兵部大輔と爲る元弘の初め尊氏に從ひて後醍醐帝を笠置に攻む尊氏歸順するに及びて直義毎に從ひて軍事を贊畫す車駕京に還る功を以て左馬頭と爲り正五位下に叙せられ尋て相摸守を兼ぬ上野太守成良親王出て、鎌倉を鎮す直義執權と爲り東國の兵を率ひて從て鎌倉に赴く時に鎌倉兵燹の餘にして殘破尤も甚はだし將士皆懾懼す直義遠近を招撫し號令一に北條氏の舊に沿ふ東國頼て安んず建武元年高時の餘黨本間澁谷の二氏兵を發して鎌倉を攻む直義澁川義季を遣して討て之を平ぐ朝廷恢復の功を追論し直義を以て遠江守護と爲す時に護良親王尊氏を疾みて之を誅せんと謀る尊氏帝の寵姫に結びて護良の反を誣告す帝之を信じ遂に護良を鎌倉に流す直義騎兵を遣して迎護し土牢を作て之を幽し防過甚嚴なり明年北條時行反して鎌倉を攻む又義季等を遣して之を討たしむ義季戰死す直義自ら往て之を拒いて破らる時行勝に乘じて進む直義成良親王を奉じて西奔し山内に至る比ひに護良後に在りて患を爲さんことを慮り淵邊義博に命じて還て之を戕はしめ走て駿河手越驛に至る敵兵遮ぎり擊つ直義窘迫して戰死せんと欲す義博等苦戰して死す直義脱れ去る會々工藤春倫兵一百を率て來援ふ乃ち進みて尊氏の軍に矢矧に遇ふ兵合して五萬倶に還りて時行を討ち之を走らす帝尊氏に詔して軍を班さしむ尊氏詔を奉ぜんと欲す直義固く之を止めて曰く公は甞世の功あり而して諸公卿及び新田義貞等多く之を妬みて屢々異計あり今幸に虎口を脱して萬全の地に據るを得何んぞ復た往て禍機を踏まん哉と尊氏之に從ふ直義乃ち書を諸道の將士に移して之を招く帝怒て詔を下して尊氏直義を討たしむ尊良親王及び新田義貞東海東山二道より進む直義之を聞て拒き戰はんとを請ふ尊氏肯んぜず直義上杉憲房等の言を用ひ乃ち佐々木高氏をして先づ發せしむ尊氏言ふ王師を拒ぐは已が意に非ずと軍事を以て一に直義に付す直義繼き進んで官軍と手越に戰ひ大に敗れて還る尊氏已に遁れて建長寺に入る直義之を患ひて上杉重能の計を用ひ僞りて尊氏が討つの綸旨を作り持して尊氏に視せしむ尊氏乃ち出づ軍氣大に振ふ語は尊氏の傳に見ゆ直義進て新田義貞と箱根に戰ふ利あらず既にして尊氏大に尊良親王を竹下に破る義貞の軍從ひて潰ゆ直義等後を踵で進む延元元年京師を陷る車駕延暦寺に幸す尊氏官軍と京師に戰ひて大に敗れて兵庫に走る新田義貞等追ひて豐島河原に至る直義返戰して敗らる會々大友貞宗等舟師を帥て來り附く直義其の軍を董して湊川に戰ひ又敗る遂に尊氏と筑紫に走る菊地武敏兵を發して來り攻む直義兵五百を以て進みて武敏と多々良濱に戰ふ會々北風砂を揚け石を走らして白日昏暝武敏の軍士暝して進むを得ず直義上風より兵を縱ちて之に乘じ追ひて博多に至る武敏兵を返して決戰す勢ひ甚た鋭し直義使を遣して尊氏に謂て曰く直義此に死せん將軍宜しく周防長門に赴て徐に再擧を圖るべしと因て衣袖を截ち之を遺り訣と爲す士卒皆奮勵殊死して戰ふ尊氏來救ふ遂に大に武敏を破る直義追擊して太宰府に至る降附甚だ多し乃ち再び京師を犯さんとを議す尊氏海路より兵庫に抵り直義陸路より進みて福山城を圍む守將大井田氏經戰ひて敗死す是に於て新田義貞楠正成と兵庫を守る尊氏水軍を以て義貞に當り直義陸軍を統べて正成と湊川に戰ふ利あらず直義の馬傷て危急なり薬師寺公義己が馬を以て直義に授け步鬪して數人を斬る尊氏直義の走るを視て兵を分て之を救ふ正成力戰して死す直義乃ち尊氏の軍と合し義貞を擊て大に之を敗る尊氏豐仁親王を立て帝と爲す是を光明帝とす三年直義左兵衛督征夷副將軍となる時に武人倣猾無禮にして多く法令を奉ぜず土岐頼遠光嚴院の駕を射る直義大に怒り之を六條河原に斬る二階堂行春坐して讃岐に流さる是に由て武人震慄し驕横稍々熄む直義人と爲り強忍狡猾而して人の己を譏せんとを畏れ外恭順を示して內深刻尊氏の志を得るは多く直義の力なり興國六年光明院從三位を授く直義執政數年威權赫奕として一時に薰灼す其の吉凶慶弔は上光明院より下公卿士庶に至るまで贈遺訪問其の門に輻輳す當時尊氏と竝び稱して兩御所と曰ふ直義初め子なし尊氏の庶長子直冬を養ひて子と爲す後ち子を生む特に之を鍾愛す時に直義僧疎石を崇信す疎石其の徒妙葩を薦む妙葩懸黠にして容止あり直義深く之を敬信して爲めに寺を姬河に建て、此に居らしむ高師直師泰之を惡みて屢々凌辱を加ふ妙葩大に之を憾む因て竊かに直義に說て師直師泰を誅せんと謀る直義其の言を納る乃ち直冬を以て中國の探題と爲し外に居て援を爲さしめんと欲す正平十四年粟飯原清胤等と謀て事に託して高師直を召し兵一百餘を簡みて戸外に匿す師直巳に至る清胤遽に圖を改め師直に目して變を示す師直覺て逸去し兵を聚めて自ら備ふ師泰兵を將て外に在り變を聞て馳せ還る直義憂懼し使を途に遣して師泰を諭して曰く師直は才智庸劣にして理務に任へす更に卿を以て之に代らしめんと欲すと師泰拒て聽かず兵を勒して扞衛す是に於て人心恟々として都下騷擾す尊氏直義を召す直義尊氏の營に至る從士多く亡ぐ師直等兵五萬を以て之を圍む尊氏怒りて親ら出て戰はんと欲す直義之を止めて曰く何ぞ將軍梟猾の輕きや彼れ獲んと欲する所の者は止だ直義及び畠山直宗上杉重能のみ宜しく姑らく其の請ふ所を許して以て急を濟ふべしと尊氏乃ち直義の政務を罷め重能直宗を越前に流す師直乃ち師を退く尋て還て重能直宗を殺さしむ又た中國の將士をして直冬を攻めしむ直冬肥後に走る直義屏居して聊んぜず竟に髪を剃て慧源と號し復た用ふるなきの意を示す明年直冬兵を鎭西に起す師直尊氏に勸めて親ら往て之を攻めしめ且つ直義を殺さんことを請ふ直義夜奈良に走り内侍原好專に依る好專師直の書を得ると聞き復た大和に走り越智伊賀守に依る越智供侍すること甚はだ篤く鄕邑の兵を發して保守す時に大和河内和泉紀伊の將士多く南軍に屬す直義巳に師直の爲めに逼まられて南軍の內地に入る又王師の來襲はんことを懼れ上書して降を請ふ藤原實世其の降に因て之を誅せんと請ふ源親房藤原師基等と議して謂ふ直義降れば則ち尊氏自ら平がんと帝之に從ひて其の降を納る直義又た武家管領に任ぜられんことを請ふ朝議未だ允さず會々石塔頼房畠山國淸等兵を率て來り附く直義の軍勢稍々振ふ乃復た觀應の年號を用ひ守護地頭を私署し遂に絕ちて復た歸款の事を言はず六年直義兵を男山に觀す桃井直常北國兵を將て進みて延暦寺に據る時に尊氏西のかた直冬を擊ち義詮を留めて留守せしむ義詮京師を棄て、走る直常京師に入る尊氏軍を旋し直常を擊ちて之を走らす其夜尊氏の部兵多く畔て直義に降る尊氏遂に播磨に走る直義石塔頼房をして往て攻めしむ頼房進みて光明寺に陣す尊氏兵を率ひて之を圍む頼房援を請ふ直義畠山國淸上杉義依等をして赴き援けしめ大に尊氏を御影濱に破る尊氏走りて松岡城に入る饗庭氏直潜かに國淸の營に抵て和を議す國淸曰く三條殿の意も亦此くの如しと和議已に成る高師直師泰懼れて髪を剃り出て、降る途に殺さる尊氏京師に還る直義往て之に會す是より意復た盈滿す藤原有範直義を煽して曰く義詮は淫樂殷紂に超ゆ公の聰明仁智を以て政を天下に行はば誰か敢て之に敵せんと直義も亦自ら以爲らく衆心の歸する所なりと意義詮の政務を得んことを欲す故を以て之と諧はず尊氏兩ながら之を解諭す尋て尊氏義詮を罷め復び直義に命じて政事を掌らしむ而して中心實は和せず直義既に權柄を秉る桃井直常石塔頼房等功に矜り勢を恃んで仁木細川の諸將と合はず釁を構て類を分ちて互に相輕侮す時に訛言あり毎夜兵を郊に治むる者ありと是を以て各危疑を懷く仁木細川等逃れて國に還る義房直常、直義に謂て曰く仁木細川の輩は將軍父子の意を承けて國に還り兵を起す是れ實に我を謀るなり公晏然として備なく若し一旦警あらば何を以てか之を禦がん公宜しく姑く北國に赴く可しと直義之に從ひ即夜直常等數人と出奔す兵士稍々追ひ至り敦賀に抵る比には凡そ六萬と號す尊氏兵を率て來攻む直義細川顯氏等諸將と近江に至り八相山に陣す佐々木定詮城を擧て降り尊氏と山下に戰ひて勝たず顯氏畠山國淸直義に勸めて和を講ぜしむ直義之に從ひ復た尊氏と平ぐ直常固く和議を排く顯氏國淸計の行はれざるを怒り遂に尊氏に降る直義遂に鎌倉に走る遠江以東悉く之に應ず尊氏尋て又來り攻む宇都宮氏綱兵を率ひ往て尊氏に應ず直義桃井直常をして尊氏の援路を斷たしめ上杉憲顯石塔義房等をして尊氏を薩埵山に圍ましめ自ら伊豆國府に陣す既にして氏綱大に直常を破り勝に乘じて進む石塔義房大に懼れ戰はずして走る仁木義長追ひて國府に至る直義支ふること能はず伊豆山に竄る尊氏書を贈り招慰す直義出て、降る明年尊氏之れと倶に鎌倉に還り暴かに薨す年四十七或は云ふ尊氏之れを毒殺すと古山大休寺と稱す十三年後光嚴院功を追錄して從二位を贈る子あり夭す嗣絕ゆ(大日本史)

アシカガ　ハルウヂ　足利晴氏　高基の長子小字を熱王丸と曰ひ古河に居る享祿元年十二月元服し諱字を大將軍義晴に請ひて晴氏と稱し河内守と稱す晴氏資性慧多く決斷の心に乏し初め北條氏綱の女を娶り以て之に依る後父好みを嗣上杉氏に通して漸く北條氏を疎んず關上杉の北條氏を攻るや晴氏之と共に河越城を攻む軍敗るゝに及ひて遁れて古河に歸り和を北條氏に乞ふ天文十八年三月左兵衛督に任ぜられ從四位下に叙せられ永祿三年五月二十三日卒す法名を道統系山と曰ひ永仙院と稱す子あり義氏と云ふ（野史）

アシカガ　ホツソン　足利法尊　義滿の第五子なり本の名を法高と曰ひ仁和寺に入りて僧と爲り大僧正に任せ三后に進ぜらる應永二十五年寂す時に識七十二、諡して慈光院と號す（野史）

アシカガ　マサウヂ　足利政氏　成氏の長子古河に居る左馬頭に任ぜられ從四位下に叙せらる永正三年冬其子高基と隙はす接戰すると數回上杉顧定長尾景春をして和を行はしむ政氏乃ち城を去りて閑居す享祿四年七月十八日卒す法名を道長吉山と曰ひ甘棠院と號す三子あり高基、義明、基頼（野史）

アシカガ　マサトモ　足利政知　（或は智に作る又政氏に作る）將軍義教の第三子、初め僧と なり天龍寺中香嚴院に居る長祿元年九月足利成氏鎌倉を去て關東主なし將軍義政知をして鎌倉の主となす時に年廿三なり義政數〻書を東海東山二道に下し政知を奉して成氏を討たしむ豆、駿、甲、信等の人士競ひて之を遊ふ然も東國の將士服せず道路梗塞して鎌倉に入る能はず因りて伊豆の北條に居り堀越御所と稱す政知長子茶々丸を蹴んし後妻の子義遐を愛し立てゝ以て嗣となさんと欲す因りて茶々丸を黜けり且つ飲酒狂疾ありと稱し捕へて之を一室に幽閉し人をして之を警衛せしむること數年茶々丸憤怨洩すに由なし會〻人あり密に之に贈るに匕首を以てす茶々丸乃ち戍者の眠るを窺ひて悉く之を刺殺し室を出て馳せて政知の寢室に入り先つ繼母を殺し次に父政知を試す政知時に年五十七、道號は九山、勝願院と號す二子あり茶々丸、義遐と曰ふ（野史）

アシカガ　ミツカネ　足利滿兼　鎌倉管領なり氏滿の長子、左馬頭に任ぜられ從四位下に叙せられ應永五年舊で管領と爲り左兵衛佐に遷る六年陸奥出羽を巡行して還る會〻大内義弘兵を擧げて堺浦に至る滿兼遽かに之に應ず軍を發して武藏に抵り陽りて義滿を援くと言ふ既にして聞て兵を頓めて滿兼に畀へ以て其の謀を紓ぶす滿兼乃ち鎌倉に還る何ぞくも無く宇都宮氏廣亂を下野に作す斯波持詮擊ちて之を斬り首を以て來り獻ず滿兼之を勞して授くるに氏廣の叔父を滿屋と云ふ（野史）

アシカガ　ミツタダ　足利滿貞　鎌倉管領氏滿の二子なり從五位下に叙し左兵衛佐に任ぜられ稻村殿と號す應永六年陸奥に赴く三十一年十一月鎌倉に持氏に黨して軍敗れ持氏と與に自殺す（野史）

アシカガ　ミツタカ　足利滿隆　鎌倉管領氏滿の第三子なり新御堂殿と稱す應永十七年陰に管領持氏を除んと計る鎌倉爲めに壓拯す上杉長基之を和平して事止むを得たり十九年十二月新御堂小路の第を作り徙りて之に居り持氏の弟滿仲を養ひて子となす二十三年足利義嗣將軍義持を闘り陰かに滿隆に通して復た持氏を誘ひ十月氏を合して急に持氏を攻む持氏遊れて駿河に奔る是に於て滿隆及び滿仲鎌倉に入り管領の事を行ふ明年正月持氏幕府の援兵を得て來り討つ滿隆軍破れて滿仲と與に雪下に自殺す（野史、外史）

アシカガ　ミツタダ　足利滿直　鎌倉管領氏滿の第四子なり篠川殿と稱す應永九年夏陸奥の管領となり往いて篠川城に居る奥人伊達政宗叛して篠川館を襲ふ五月政宗と赤館に戰ひて克たず再た擊ちて之を破る政宗遂に敗る二十四年滿隆及び滿仲に黨して軍氏に乗じて之を襲ふ五月政宗と赤館に戰ひて克たず再た擊ちて之を破る政宗遂に敗る二十四年滿隆及び滿仲に黨して軍潰え自殺す（野史）

アシカガ　ミツナカ（ミモチナカ）　足利滿仲　「アシカガ　ミツタカ」の第二子なり天授三年三月從五位下に叙せらる六年春左馬頭に任ぜられ左兵衛督に遷る應永九年正月正四位下に歷叙し三月參議に任ぜらる尋で從三位に陞り權中納言に累遷し更に權大納言に轉じ從二位に進む薙髪して道智と號す二十五年五月十四日薨す時に年五十勝山、養德院と稱す左大臣從一位を贈り小川禪閤と稱す五子あり義巡、持弁、義賢、持圓、義快皆僧なり（野史）

アシカガ　モチウヂ　足利持氏　鎌倉四代の管領なり滿兼の第一子小字を幸王丸と云ふ應永十六年管領となる執事上杉氏憲持氏と隙あり職を辭し乃ち上杉憲基を以て之に代ふ持氏の叔父を滿隆と云ふ顧る聲望あり廷持仲を養ひて子と爲す氏憲滿隆に說いて曰く公方酒色に耽り師を統る能はず而して憲基の政を爲す又た偏私多し邪を匡し雖を靖んずるは君にあらずして誰ぞ若き事を擧ぐるときは臣請ふ之を輔けん乃ち將軍義持の教令を矯め密に將士を招く將士競ひ附く應永二十三年十二月氏憲兵に將とし滿隆持仲を奉じて持氏を圍む持氏大に驚き遽に馬に騎りて憲基の佐介の第に入る憲基族氏定をして之を拒かしむ衆寡兵勢敵せず持氏夜出て四に走り藤澤の道場に至る氏定自殺し憲基越後に走る持氏伊豆に匿る狩野介業來り攻む持氏更に駿河に走り今川範政に依り急を京師に告く京師方に流言す大納言義嗣立つを得ざるを以て竊に駅忍を懷き氏憲と謀る通し義持を伐たんと欲す義持嗣に迫り髮み創らしめ教を關東の將士に下たし持氏を救はしむ是に於て憲基兵を越後に起し武相の將士等亦た競ひ起り氏憲遂に自殺す持氏左馬頭に任ぜられ鎌倉に入る滿隆持仲氏憲遂に自殺す持氏左馬頭に任ぜられ鎌倉に入る滿隆持仲て滿仲と與に雪下に自殺す（野史、外史）

アシカガ　ミツタダ　足利滿直　鎌倉管領氏滿の第四子なり篠川殿と稱す應永九年夏陸奥の管領となり往いて篠川城に居る奥人伊達政宗叛して篠川館を襲ふ五月政宗と赤館に戰ひて克たず再た擊ちて之を破る政宗遂に敗る二十四年滿隆及び滿仲に黨して軍氏に乗じて之を襲ふ五月政宗と赤館に戰ひて克たず再た擊ちて之を破る政宗遂に敗る二十四年滿隆及び滿仲に黨して軍潰え自殺す（野史）

アシカガ　ミツナカ（ミモチナカ）　足利滿仲　「アシカガ　ミツタカ」の第二子なり天授三年三月從五位下に叙せらる六年春

徵せしむ號して曰く植清を救ふは實は憲實を誅せんと欲する也と鎌倉騷擾し兵士大に山内に集る持氏慢れ自ら山内に往て而り憲實に諭し罪か憲直に歸して之を返ふ事稍〻釋く永享十年持氏其子賢王の冠禮を鶴岡に行ふと遠祖義家の故事の如くせんと欲す憲實又た爭ひて曰く室町に冠し將軍の偏諱を受くるは禮也と持氏曰く還俗將軍何ぞ吾子に冠するに足らんやと嗣前に冠す諸將入りて之を賀す獨り憲實病と稱して入りて賀ぜず持氏怒り兵を發して憲實を攻めんと欲す憲實乃ち上野に奔り平井の城に據る持氏自ら將として之を討つ將軍義教天子に請ひて持氏を討するの詔書を下し之に副ふるに教書を以てす關東の將士皆な持氏に叛く持氏窮蹙して遂に髮を削りて降を乞ふ憲實之を永安寺に徙し兵を置きて之を監す憲直直兼をして自殺せしめ關東の將士と連署して將軍義教に持氏の死を宥さんことを請ふ使者十餘反義教覓に聽かず十一年憲實義教の令を以て兵を遣はして諸軍をして永安寺を圍ましむ持氏火を縱ちて自殺す時に年四十二長春院道紀楊山と號す（野史）

アシカガ　モチナカ　足利持仲　（或は滿仲に作る）滿兼の第三子なり小字を乙若と曰ふ應永十八年元服を加へて從五位下に叙し右衛門督に任ぜらる二十三年叔父滿隆と持氏を鎌倉に襲ふ持氏敗れて駿河に走る是に於て持仲僧立して鎌倉の主と稱す十二月今川範政持氏の爲に援を京師に乞ひ來りて鎌倉を圍む二十四年正月持仲軍敗れて滿隆、滿直及び上杉氏憲等と皆雪下に自殺す（野史）

アシカガ　モトウヂ　足利基氏　關東管領なり幼名は龜若丸尊氏の四子なり正平四年尊氏基氏を以て關東管領と爲し鎌倉に居らしむ時に尚ほ幼なり上杉憲顯及び高師冬を以て執事と爲し之を輔けしむ足利直義の南朝に歸順するや憲顯遂かに之に應じて上野に奔る師冬基氏を奉じて之を攻む兵僅かに五百皆往くを欲せず遂に基氏を切ゆかして歸らしむ師冬甲斐に走り遂に殺さる既にして尊氏直義を執へて鎌倉に至る基氏營救甚だ至る尊氏之を憂ひて出て、安房に走る尊氏人を遣して之を召し還へす崇光帝左馬頭を授け左兵衛督に遷す七年尊氏親ら出て、新田義興同義宗脇屋義治を金井原に拒ぐ既にして義興義治來て鎌倉に薄まる基氏壁三浦に在りと聞て南宗繼を遣し兵に將として之を擊たしむ敵兵な見ずして還る俄にして義興義治來り攻む衆未だ甲を脱せず基氏拒いて大に敗れ尊氏の石濱營に奔る尊氏義宗と戰ひて之を破ふる義興等鎌倉を棄てゝ河村城に保つ尊氏基氏襲ひて之を走らす明年尊氏尊氏京師に還る畠山國清を留めて基氏の執事と爲す尊氏薨するに及びて義興罪に乘じて復た鎌倉を攻めんと謀る基氏之を患ひて國清を誅して義興を誘殺せしめ親ら入間河に至て大に兵威を耀かす東土粘然たり時に兄義詮新たに將軍職を襲ぐ衆皆以爲らく基氏久しく關東に在りて兵柄を握る必らず義詮の爲めに疑忌せられんと畠山國清因て兵を發し吉野を攻めて以て其の嫌を避けんと請ふ基氏之を然りとし大に東國の兵を擧げて之に屬す國清京師に至りて以て義詮に請ふ義詮之を悅び十餘反義教覓に聽かず十一年憲實義教の令を以て兵を遣はして賭軍をして永安寺を圍ましむ持氏火を縱ちて自殺す時に年四十二長春院道紀楊山と號す（野史）

アシカガ　モチナカ　足利持仲　（或は滿仲に作る）滿兼の第三子なり小字を乙若と曰ふ應永十八年元服を加へて從五位下に叙し右衛門督に任ぜらる二十三年叔父滿隆と持氏を鎌倉に襲ふ持氏敗れて駿河に走る是に於て持仲僧立して鎌倉の主と稱す十二月今川範政持氏の爲に援を京師に乞ひ來りて鎌倉を圍む二十四年正月持仲軍敗れて滿隆、滿直及び上杉氏憲等と皆雪下に自殺す（野史）

アシカガ　ヨシアキ　足利義明　政氏の第三子成氏の孫なり初め僧となりて雪下院と號す後ち還俗して左兵衛督と稱す義明其の父兄と睦しからざるを取る勿れと國清乃ち伊豆に奔りて修禪寺に據る其氏兵三百餘を發して之を擊つ反りて爲めに敗らる更に新田義一を遣し兵に將として往て之を攻めしめ親ら出でゝ箱根に軍す國清降を乞ふ乃ち兵を引て還る是の時上杉憲顯信濃に匿居す基氏罪を宥めて之を招き芳賀禪可に代て越後守護爲らんことを命じ遂に徵して復た執事と爲す禪可兵に將として上野板鼻に遮ぎる基氏大に怒り親ら出でゝ禪可を宇都宮に攻んとし禪可の子高貞高家に武藏若林野に遇ひて交戰す基氏驍捷多力善く大刀を揮ふて戰ふこと數刻刀毀缺して鋸の如し遂に高家を斬り退て兵を餌ふ愛將木戸毎氏鬬死すと聞き大に哭して曰く彼毎に我と死生を同ぐしこと約す彼今已に死す我豈に前言を食むに忍びん耶と乃ち刀を提げて進む衆皆奮ひて戰ひ益〻鋭とし基氏傷て斃る敵兵之を望み爭ひ進んで之を圍む基氏刀を揮て斬殺す大高重成驍主て面たり其の勇み愛し馬を以て基氏に授く基氏喜て曰く昔源平の戰に後藤守長は主君の馬に乘りて還る獨り敵の所爲は彼と相反す獨の姓は大剛（剛高晉相ひ通す）と呼ぶと亦可ならず乎と巖松直國基氏に勸めて己と甲を易へしむ敵兵直國を以て基氏となす競ひて之に趨く會〻日暮る敵兵引き退く基氏追擊して大に之を敗り進みて將に宇都宮氏綱を攻めんとす會〻氏綱軍に至りて陳謝し且つ告ぐるに禪可已に罪を懼れて亡去せるを以てす基氏乃ち鎌倉に還る是役や高貞の子八郎を獲基氏其の幼弱なるを憐んで之を放還す人其の寬裕を稱す是歲安藤九郎等二十餘人罪あり之を府内に誅す初め諸將功を恃んで驕戾動もすれば多く異圖を企つ是に至て震懾せざる莫し二十二年基氏薨ず年二十八法名同所、瑞泉寺と號す初め尊氏直義と議して曰く義詮は負荷に堪へず恐らくは吾業を墜さん然れども關東諸國を以て國家を亂すしめば則ち天下危ふに至らず吾當に一子を以て關東を鎮せしむ可しと乃ち基氏を擁して東國を鎮せしむ尊氏薨ずるに及びて東國將士多く義詮に憾あり往々基氏に勸めて之を圖らしむ基氏嗾拒納れず能く其の職を修めて義詮をして東顧の憂なからしむ計京師に至るに及びて皆哀惜す（大日本史）

アシカガ　ヨシアキ　足利義明　政氏の第三子成氏の孫なり初め僧となりて雪下院と號す後ち還俗して左兵衛督と稱す義明其の父兄と睦しからざるを以て去りて陸奥に漂泊す此時上總の守護武田三豐、原胤榮と戰ひて勝たず三豐則ち義明を奉して盟主とす義明人となり弟猛剛敎にして度量あり總房三州の士人來歸する者頗る多く武威稍〻震ふ是に於て邊境の順はざる者を略し永正十四年十月兵を二總に發して小弓城を攻め遂に原胤榮及び高城越前守父子を滅し尋で三上城を拔く明年居を小弓に徙す乃ち屬言して曰く我れ古河を廢して八州の管領たると已に近きにありと天文八年八月古河に薄りて將に晴氏を廢せんとす晴氏敕を北條氏綱に乞ふ十月七日（是の年月日に就て諸說一定せず此年十月と曰ふ說あり又は天文九年十月と云ふものあり又他の一說には天文六年十月五日なりと云へり）義明里見義堯と房總二州の兵を率ゐて氏綱と大に鴻囊に戰ふ義明敗死す土人後義明の靈か祟めて社寺神と稱すと云ふ或は云く義明走りて小弓城を保つ北條氏綱來り

て之を攻む義明拒き戰ふて之に死すと又一説に義明天文十五年軍潰えて鄙に就き小田原に於て殺さるとも法名を道智空善と曰ひ八正院と號す（本朝威功正傳、野史）

アシカガ ヨシアキ　足利義昭　足利十五代の將軍也將軍義晴の子にして將軍義輝の弟なり天文六年を以て生る南都一乘院に入て僧となり覺慶と云ふ永祿八年三好松永の黨將軍義輝を弑し又覺慶を幽せんとす細川藤孝覺慶を奉して近江に奔る髮を蓄へ名を義秋と改む初め佐々木義賢に依り復讐を謀る國亂るゝを以て果さず十年朝倉義景に依り元服して名を義昭と改む義昭數〻征伐の師を義景に促す義景言を左右にして應ぜず時に織田信長新に美濃に移り壯武勇敢比なしと聞き往て之に賴らんと欲し人をして之を策せしむ臨の節に之くに遇ふ吉孰れか大ならんと即ち意を決して使を遣し託するに討賊の事を以てす信長悅て之を迎ふ即ち兵を率て西上し義昭を迎へて京師に入る賊又京師を犯す義昭恐れて遁逃せんとす細川藤孝諫むるに依て止む幾もなくして信長師を率て京師に入る賊悉く逃る信長羽柴秀吉を留めて去る義昭權大納言に任じ從三位に叙す元龜元年賊又起る義昭信長と共に之を討つ朝倉義景佐々木義賢賊に應す是に於て義昭信長と師を班へすさるを責め十七事を諫む義昭懼びす初て嫌隙を生す天正元年武田晴信に使を遣し爽み擊て信長を滅さんとを約す細川藤孝諫むれども聽かず信長之を聞て謝し且つ盟を為さんとを請ふ許さず信長遂に二條の第を圍む義昭拒ぐと能はす成を行ふ信長其過を改め自ら新にせんとを請て去る幾くもなくして義昭又信長を討んとを謀る信長又兵を率て二條の第を圍む義昭窮して死を滅せんとを求む信長之を河内に逐ふ留して義昭の官爵を削る漂泊歲餘困窮日々に甚し天正三年備後に往き毛利元就に依り薙髮して昌山と號す後ち又京師に歸り慶長二年大阪に薨す歲六十一（靈陽院と稱す足利氏是に至て亡ぶ（野史、外史）

アシカガ ヨシアキラ　足利義詮　足利二代の將軍なり小名は千壽王、尊氏の第三子なり元弘三年尊氏北條高時の令に從ひて四、官軍を禦ぐ義詮母赤橋氏と貧となりて鎌倉に在り尊氏歸順するに及びて家人抱て下野に走る新田義貞の高時を滅すや家人二百餘義詮を奉じて之に屬し往て鎌倉に居る尊氏細川和氏細川頼春逆へ戰ひて大に敗らる義詮者一百五十人と東に走る光厳光明崇光三主及び直仁親王南軍の爲めに獲らる義詮勢多に至る官軍已に橋を燒て進む能はず兵に水を裨くする者あり游て前岸に至り舟を絮て來る因て衆を濟し擧る乃ち命じて舟を沈めしめて笑て曰く今始めて生を得たりと進みて武佐寺に至る土岐頼康等部する所を率て之に赴く義詮騎三萬を率て漸く進て東寺に至る南軍退て男山に陣ず細川顯氏等至る義詮聲勢大に振ふ因て顯氏等の諸將なして東條路を塞で以て男山の糧餉を絶たしむ進戰連りに捷つ義詮乃ち諸將の兵を合して期なく刻し竝び進みて大に官軍を破り遂に男山に逼まる帝闕を衝て賀名生に還る義詮諸將の兵を督して之を追ひ大納言藤原隆資等三百餘人を獲、秋義詮光厳帝の子彌仁を奉じて帝と稱す是を後光厳帝と爲す八年夏山名時氏官軍と俱に來り攻む義詮禦かず後光厳帝を東阪本に移し諸將を率て神樂岡に陣して之を拒ぐ利あらず明日後光厳帝を奉じて東に走る南軍遮て眞野浦に擊つ義詮遂に垂井に走り南軍京師を守る秋義詮東山北陸東海三道の兵を率て進んで京師に逼る時氏等戰はずして義詮京師に入り尊氏鎌倉より還る義詮出て鎖驛に迎へ乃ち後光厳帝を奉じて京師に入り尊氏四播磨に赴き班鳩驛に屯し以て時氏に備ふ九年冬直冬時氏と兵を進めて丹波に至る尊氏近江に走る十年春直冬等入つて京師に據る是時に方て四國四國の兵士大に疵驛に集る義詮因て尊氏と夾みて京師を攻めんと謀る乃ち赤松則祐等を率て神南に至り時氏等と戰ひて敗らる時氏の子師義直義詮の陣を衝く則祐等殊死して戰ひ更に大に之を敗る尊氏進みて直冬を攻て之を走らす十一年冬三位に叙せらる十三年尊氏薨ずず義詮嗣ぎて立つ後光厳帝征夷大將軍を授く筑紫探題一色直氏菊池武光と戰ひ敗れて京師に還る武光兵威甚だ熾んなり義詮其の鋒に乘じて來り攻めんとを懼れ細川繁氏を遣して九國を鎮撫せしむ繁氏途に病て死す十四年武蔵守を兼れ細川清氏を以て執事と爲す是の時義詮の弟基氏鎌倉に居て關東を管領し頗ぶる士心韶して曰く天下未だ安んぜず非常の事戒めざる可らず爾其れ疑ふ勿れと義詮之を信じて備を設けず既にして南軍道を分て奄ち至る細川顯氏細川頼春逆へ戰ひて大に敗らる義詮者一百五十人と東に走る光厳光明崇光三主及び直仁親王南軍の爲めに獲らる義詮勢多に至る官軍已に橋を燒て進む能はず兵に水を裨くする者あり游て前岸に至り舟を絮て來る因て衆を濟し擧る乃ち命じて舟を沈めしめて笑て曰く今始めて生を得たりと進みて武佐寺に至る土岐頼康等部する所を率て之に赴く義詮騎三萬を率て漸く進て東寺に至る南軍退て男山に陣ず細川顯氏等至る義詮聲勢大に振ふ因て顯氏等の諸將なして東條路を塞で以て男山の糧餉を絶たしむ進戰連りに捷つ義詮乃ち諸將の兵を合して期なく刻し竝び進みて大に官軍を破り遂に男山に逼まる帝闕を衝て賀名生に還る義詮諸將の兵を督して之を追ひ大納言藤原隆資等三百餘人を獲、秋義詮光厳帝の子彌仁を奉じて帝と稱す是を後光厳帝と爲す八年夏山名時氏官軍と俱に來り攻む義詮禦かず後光厳帝を東阪本に移し諸將を率て神樂岡に陣して之を拒ぐ利あらず明日後光厳帝を奉じて東に走る南軍遮て眞野浦に擊つ義詮遂に垂井に走り南軍京師を守る秋義詮東山北陸東海三道の兵を率て進んで京師に逼る時氏等戰はずして義詮京師に入り尊氏鎌倉より還る義詮出て鎖驛に迎へ乃ち後光厳帝を奉じて京師に入り尊氏四播磨に赴き班鳩驛に屯し以て時氏に備ふ九年冬直冬時氏と兵を進めて丹波に至る尊氏近江に走る十年春直冬等入つて京師に據る是時に方て四國四國の兵士大に疵驛に集る義詮因て尊氏と夾みて京師を攻めんと謀る乃ち赤松則祐等を率て神南に至り時氏等と戰ひて敗らる時氏の子師義直義詮の陣を衝く則祐等殊死して戰ひ更に大に之を敗る尊氏進みて直冬を攻て之を走らす十一年冬三位に叙せらる十三年尊氏薨ずず義詮嗣ぎて立つ後光厳帝征夷大將軍を授く筑紫探題一色直氏菊池武光と戰ひ敗れて京師に還る武光兵威甚だ熾んなり義詮其の鋒に乘じて來り攻めんとを懼れ細川繁氏を遣して九國を鎮撫せしむ繁氏途に病て死す十四年武蔵守を兼れ細川清氏を以て執事と爲す是の時義詮の弟基氏鎌倉に居て關東を管領し頗ぶる士心

を得義詮稍〻之を忌む基氏懼れて兵を發し吉野を攻めて以て自ら救さんとを請ひ畠山國清を遣し兵を率て京師に至らしむ義詮乃ち國清及諸將兵を率ひ出て尼崎に屯ず明年巷國清等南軍と戰ひて敗る義詮畠山義深等を遣して之を援はしむ官軍敗走す義詮諸軍を引て還る秋和田正忠楠正儀渡邊橋を絕ちて將士を擊つ二十二年春正之に遇逃す是に於て義昭從四位下に叙し征夷大將軍に拜す時に永祿十一年なり十二年賊又京師を犯す義昭恐れて遁逃せんとす細川藤孝諫むるに依て止む幾もなくして信長師を率て京師に入る賊悉く逃る信長羽柴秀吉を留めて去る義昭權大納言に任じ從三位に叙す元龜元年賊又起る義昭信長と共に之を討つ朝倉義景佐々木義賢賊に應す是に於て義昭信長と師を班へすさるを責め十七事を諫む義昭懼びす初て嫌隙を生す天正元年武田晴信に使を遣し爽み擊て信長を滅さんとを約す細川藤孝諫むれども聽かず信長之を聞て謝し且つ盟を為さんとを請ふ許さず信長遂に二條の第を圍む義昭拒ぐと能はす成を行ふ信長其過を改め自ら新にせんとを請て去る幾くもなくして義昭又信長を討んとを謀る信長又兵を率て二條の第を圍む義昭窮して死を滅せんとを求む信長之を河内に逐ふ留して義昭の官爵を削る漂泊歲餘困窮日々に甚し天正三年備後に往き毛利元就に依り薙髮して昌山と號す後ち又京師に歸り慶長二年大阪に薨す歲六十一（靈陽院と稱す足利氏是に至て亡ぶ（野史、外史）

アシカガ ヨシアキラ　足利義詮　足利二代の將軍なり小名は千壽王、尊氏の第三子なり元弘三年尊氏北條高時の令に從ひて四、官軍を禦ぐ義詮母赤橋氏と貧となりて鎌倉に在り尊氏歸順するに及びて家人抱て下野に走る新田義貞の高時を滅すや家人二百餘義詮を奉じて之に屬し往て鎌倉に居る尊氏細川和氏細川頼春逆へ戰ひて大に敗らる義詮者一百五十人と東に走る光厳光明崇光三主及び直仁親王南軍の爲めに獲らる義詮勢多に至る官軍已に橋を燒て進む能はず兵に水を裨くする者あり游て前岸に至り舟を絮て來る因て衆を濟し擧る乃ち命じて舟を沈めしめて笑て曰く今始めて生を得たりと進みて武佐寺に至る土岐頼康等部する所を率て之に赴く義詮騎三萬を率て漸く進て東寺に至る南軍退て男山に陣ず細川顯氏等至る義詮聲勢大に振ふ因て顯氏等の諸將なして東條路を塞で以て男山の糧餉を絶たしむ進戰連りに捷つ義詮乃ち諸將の兵を合して期なく刻し竝び進みて大に官軍を破り遂に男山に逼まる帝闕を衝て賀名生に還る義詮諸將の兵を督して之を追ひ大納言藤原隆資等三百餘人を獲、秋義詮光厳帝の子彌仁を奉じて帝と稱す是を後光厳帝と爲す八年夏山名時氏官軍と俱に來り攻む義詮禦かず後光厳帝を東阪本に移し諸將を率て神樂岡に陣して之を拒ぐ利あらず明日後光厳帝を奉じて東に走る南軍遮て眞野浦に擊つ義詮遂に垂井に走り南軍京師を守る秋義詮東山北陸東海三道の兵を率て進んで京師に逼る時氏等戰はずして義詮京師に入り尊氏鎌倉より還る義詮出て鎖驛に迎へ乃ち後光厳帝を奉じて京師に入り尊氏四播磨に赴き班鳩驛に屯し以て時氏に備ふ九年冬直冬時氏と兵を進めて丹波に至る尊氏近江に走る十年春直冬等入つて京師に據る是時に方て四國四國の兵士大に疵驛に集る義詮因て尊氏と夾みて京師を攻めんと謀る乃ち赤松則祐等を率て神南に至り時氏等と戰ひて敗らる時氏の子師義直義詮の陣を衝く則祐等殊死して戰ひ更に大に之を敗る尊氏進みて直冬を攻て之を走らす十一年冬三位に叙せらる十三年尊氏薨ずず義詮嗣ぎて立つ後光厳帝征夷大將軍を授く筑紫探題一色直氏菊池武光と戰ひ敗れて京師に還る武光兵威甚だ熾んなり義詮其の鋒に乘じて來り攻めんとを懼れ細川繁氏を遣して九國を鎮撫せしむ繁氏途に病て死す十四年武蔵守を兼れ細川清氏を以て執事と爲す是の時義詮の弟基氏鎌倉に居て關東を管領し頗ぶる士心

を得義詮稍〻之を忌む基氏懼れて兵を發し吉野を攻めて以て自ら救さんとを請ひ畠山國清を遣し兵を率て京師に至らしむ義詮乃ち國清及諸將兵を率ひ出て尼崎に屯ず明年巷國清等南軍と戰ひて敗る義詮畠山義深等を遣して之を援はしむ官軍敗走す義詮諸軍を引て還る秋和田正忠楠正儀渡邊橋を絕ちて將士を擊つ二十二年春正之に遇逃す是に於て義昭從四位下に叙し征夷大將軍に拜す時に永祿十一年なり十二年賊又京師を犯す義昭恐れて遁逃せんとす細川藤孝諫むるに依て止む幾もなくして信長師を率て京師に入る賊悉く逃る信長羽柴秀吉を留めて去る義昭權大納言に任じ從三位に叙す元龜元年賊又起る義昭信長と共に之を討つ朝倉義景佐々木義賢賊に應す是に於て義昭信長と師を班へすさるを責め十七事を諫む義昭懼びす初て嫌隙を生す天正元年武田晴信に使を遣し爽み擊て信長を滅さんとを約す細川藤孝諫むれども聽かず信長之を聞て謝し且つ盟を為さんとを請ふ許さず信長遂に二條の第を圍む義昭拒ぐと能はす成を行ふ信長其過を改め自ら新にせんとを請て去る幾くもなくして義昭又信長を討んとを謀る信長又兵を率て二條の第を圍む義昭窮して死を滅せんとを求む信長之を河内に逐ふ留して義昭の官爵を削る漂泊歲餘困窮日々に甚し天正三年備後に往き毛利元就に依り薙髮して昌山と號す後ち又京師に歸り慶長二年大阪に薨す歲六十一（靈陽院と稱す足利氏是に至て亡ぶ（野史、外史）

アシカガ ヨシアキラ　足利義詮　足利二代の將軍なり小名は千壽王、尊氏の第三子なり元弘三年尊氏北條高時の令に從ひて四、官軍を禦ぐ義詮母赤橋氏と貧となりて鎌倉に在り尊氏歸順するに及びて家人抱て下野に走る新田義貞の高時を滅すや家人二百餘義詮を奉じて之に屬し往て鎌倉に居る尊氏細川和氏細川頼春逆へ戰ひて大に敗らる義詮者一百五十人と東に走る光厳光明崇光三主及び直仁親王南軍の爲めに獲らる義詮勢多に至る官軍已に橋を燒て進む能はず兵に水を裨くする者あり游て前岸に至り舟を絮て來る因て衆を濟し擧る乃ち命じて舟を沈めしめて笑て曰く今始めて生を得たりと進みて武佐寺に至る土岐頼康等部する所を率て之に赴く義詮騎三萬を率て漸く進て東寺に至る南軍退て男山に陣ず細川顯氏等至る義詮聲勢大に振ふ因て顯氏等の諸將なして東條路を塞で以て男山の糧餉を絶たしむ進戰連りに捷つ義詮乃ち諸將の兵を合して期なく刻し竝び進みて大に官軍を破り遂に男山に逼まる帝闕を衝て賀名生に還る義詮諸將の兵を督して之を追ひ大納言藤原隆資等三百餘人を獲、秋義詮光厳帝の子彌仁を奉じて帝と稱す是を後光厳帝と爲す八年夏山名時氏官軍と俱に來り攻む義詮禦かず後光厳帝を東阪本に移し諸將を率て神樂岡に陣して之を拒ぐ利あらず明日後光厳帝を奉じて東に走る南軍遮て眞野浦に擊つ義詮遂に垂井に走り南軍京師を守る秋義詮東山北陸東海三道の兵を率て進んで京師に逼る時氏等戰はずして義詮京師に入り尊氏鎌倉より還る義詮出て鎖驛に迎へ乃ち後光厳帝を奉じて京師に入り尊氏四播磨に赴き班鳩驛に屯し以て時氏に備ふ九年冬直冬時氏と兵を進めて丹波に至る尊氏近江に走る十年春直冬等入つて京師に據る是時に方て四國四國の兵士大に疵驛に集る義詮因て尊氏と夾みて京師を攻めんと謀る乃ち赤松則祐等を率て神南に至り時氏等と戰ひて敗らる時氏の子師義直義詮の陣を衝く則祐等殊死して戰ひ更に大に之を敗る尊氏進みて直冬を攻て之を走らす十一年冬三位に叙せらる十三年尊氏薨ずず義詮嗣ぎて立つ後光厳帝征夷大將軍を授く筑紫探題一色直氏菊池武光と戰ひ敗れて京師に還る武光兵威甚だ熾んなり義詮其の鋒に乘じて來り攻めんとを懼れ細川繁氏を遣して九國を鎮撫せしむ繁氏途に病て死す十四年武蔵守を兼れ細川清氏を以て執事と爲す是の時義詮の弟基氏鎌倉に居て關東を管領し頗ぶる士心

て御義詮を拒がしむ御義戰はずして退く義詮斯波氏經を以て九國探題と爲す十八年後光厳帝義詮に從ひ二位大納言を授く十九年大内弘世長門周防を以て降る山名時氏御義仁木義長石塔頼房上杉憲顯亦相繼て降る二十年母憂に丁り職を辭し尊て復職す二十一年秋義詮兵に遭て足利高經及び義詮を擊つ二十二年春正之に遇逃す是に於て義昭從四位下に叙し征夷大將軍に拜す時に永祿十一年なり十二年賊又京師を犯す義昭恐れて遁逃せんとす細川藤孝諫むるに依て止む幾もなくして信長師を率て京師に入る賊悉く逃る信長羽柴秀吉を留めて去る義昭權大納言に任じ從三位に叙す元龜元年賊又起る義昭信長と共に之を討つ朝倉義景佐々木義賢賊に應す是に於て義昭信長と師を班へすさるを責め十七事を諫む義昭懼びす初て嫌隙を生す天正元年武田晴信に使を遣し爽み擊て信長を滅さんとを約す細川藤孝諫むれども聽かず信長之を聞て謝し且つ盟を為さんとを請ふ許さず信長遂に二條の第を圍む義昭拒ぐと能はす成を行ふ信長其過を改め自ら新にせんとを請て去る幾くもなくして義昭又信長を討んとを謀る信長又兵を率て二條の第を圍む義昭窮して死を滅せんとを求む信長之を河内に逐ふ留して義昭の官爵を削る漂泊歲餘困窮日々に甚し天正三年備後に往き毛利元就に依り薙髮して昌山と號す後ち又京師に歸り慶長二年大阪に薨す歲六十一（靈陽院と稱す足利氏是に至て亡ぶ（野史、外史）

アシカガ ヨシツグ　足利義勝　足利七代の將軍なり大將軍義教の長子にして永享六年を以て生る父義教赤松滿祐の爲に弑せられ義勝職に就く時僅に五位下に叙し遂に滿祐誅に伏す時に嘉吉元年なり閏九月令を出して借る所の財物子母を合せて還すとなく貸する所の財亦償ふを得さらしむ稱して德政と云ふ其民之を便とせず總日〻に繁人始めて亂を思ふ二年義勝正五位下に叙し征夷大將軍に補し左近衛中將に任ず三年從四位下に叙す義勝性馬を馭するを好む出雲の國人駿馬を獻す駿馬甚だ之を愛す人或は諫むれども聽かず馬場に於て駿馬を御するに當て遂に馬より墮て薨す年僅に十歲慶雲院と稱し左大臣從一位を贈る（野史）

アシカガ ヨシカズ　足利義量　足利五代の將軍なり大將軍義持の子にして應永十四年に生る二十四年に正五位下に叙し右近衛中將に任ず義量酒を好み劇飲度なし義持之を誡む三十年征夷大將軍に拜す三十二年病て薨す歲十九長得院と稱す左大臣從一位を贈る（野史）

アシカガ ヨシタネ　足利義兼　三郎と稱す陸奥の判官義康の子、母は源頼朝の從母姉妹なり頼朝兵を起すに及て義兼山名義範等と往て之に屬す寿永三年源範頼從軍の將士を饗し義兼に馬を賜ふ文治五年頼朝に從ひて藤原泰衡を擊つ其黨熊野別當某を虜にす尋て遠江守と爲る明年泰衡の故將大河兼任兵を起す頼朝義兼及び小山宗政等に命じて陸奥に赴て之を擊たしむ栗原を待たんと欲す然れ共麾下の壯士志し先登に在り故に夜を冒して進む死傷甚だ多し泰時意に字治に赴て之を救ふ利あらず遂に今を下して戰を罷む翌日壯士將に河を渡らんとす時に雨後にして水大に漲ざる沒溺する者算なし義氏筏に乘じて渡る是に於て尾藤某民屋を撤して筏と爲す諸將相繼て進む官軍大に敗らる元仁元年以て邑を美作新野等の地に食む武蔵陸奥守を歷て

左馬頭に至り正四位下に進む仁治中髮を削りて名を正義と更む三浦泰村の亂に功あり故に上總權介平秀胤の食邑を并せ食す建長六年卒す年六十六（大日本史）

アシカガ ヨシカツ　足利義勝　足利七代の將軍なり大將軍義教の長子にして永享六年を以て生る父義教赤松滿祐の爲に弑せられ義勝職に就く時僅に五位下に叙し遂に滿祐誅に伏す時に嘉吉元年なり閏九月令を出して借る所の財物子母を合せて還すとなく貸する所の財亦償ふを得さらしむ稱して德政と云ふ其民之を便とせず總日〻に繁人始めて亂を思ふ二年義勝正五位下に叙し征夷大將軍に補し左近衛中將に任ず三年從四位下に叙す義勝性馬を馭するを好む出雲の國人駿馬を獻す駿馬甚だ之を愛す人或は諫むれども聽かず馬場に於て駿馬を御するに當て遂に馬より墮て薨す年僅に十歲慶雲院と稱し左大臣從一位を贈る（野史）

アシカガ ヨシカズ　足利義量　足利五代の將軍なり大將軍義持の子にして應永十四年に生る二十四年に正五位下に叙し右近衛中將に任ず義量酒を好み劇飲度なし義持之を誡む三十年征夷大將軍に拜す三十二年病て薨す歲十九長得院と稱す左大臣從一位を贈る

アシカガ ヨシタネ　足利義兼　三郎と稱す陸奥の判官義康の子、母は源頼朝の從母姉妹なり頼朝兵を起すに及て義兼山名義範等と往て之に屬す寿永三年源範頼從軍の將士を饗し義兼に馬を賜ふ文治五年頼朝に從ひて藤原泰衡を擊つ其黨熊野別當某を虜にす遠江守と爲る明年泰衡の故將大河兼任兵を起す頼朝義兼及び小山宗政等に命じて陸奥に赴て之を擊たしむ栗原を待たんと欲す然れ共麾下の壯士志し先登に在り故に夜を冒して進む死傷甚だ多し泰時意に字治に赴て之を救ふ利あらず遂に今を下して戰を罷む翌日壯士將に河を渡らんとす時に雨後にして水大に漲ざる沒溺する者算なし義氏筏に乘じて渡る是に於て尾藤某民屋を撤して筏と爲す諸將相繼て進む官軍大に敗らる元仁元年以て邑を美作新野等の地に食む武蔵陸奥守を歷て

に過ぐ而して資性諧長なり輒朝其の忠直を嘉みし北條時政に命じて子婿と爲さしめ親待を加ふ正治元年三月八日卒す子義純、義助、義氏、義胤あり（大日本史、續本朝通史）

アシカガ ヨシキ 足利義材「アシカガヨシタネ」 足利義清 義康の長子信濃に居り矢田判官代と稱す源義仲の兵が起すや義清兵を引て丹波に赴き平氏を討つ平忠度戰はずして退く平氏屋島に據るに及びて鄰清海野幸廣等と兵七千を將て備中水島に屯し將に屋島を攻めんとして平重衡等の爲めに敗られ弟義長と力戰して死す（大日本史）

アシカガ ヨシシゲ 足利義重 治部大輔義將の子なり初め義敎と名づく治部大輔右近衛奮を歷應永十二年父に襲て將軍義滿の管領と爲る世に斯波細川畠山を以て三管領と稱す斯波は其の別姓なり（大日本史）

アシカガ ヨシスケ 足利義助 二郎と稱す義無の二男左兵衛尉となる承久の役宇治川に戰死す（大日本史）

アシカガ ヨシズミ 足利義澄 足利十一代の將軍なり初の名を義遐と云ふ父義清と云ふ大將軍義政の養子にして左兵衛督政知の子なり文明十一年生る父政知親義遐を京師に送り細川政元に托す政元請ひて天龍寺の喝食となす明應二年政元義稙を廢して義遐を立つ（從五位下に叙し名を義高と改む三年正五位下に叙し左馬頭に任し尋で征夷大將軍に拜す政務巨細となく皆政元に決す文龜元年從四位下に叙し參議に任し勅筆名を義澄と賜ふ政元死し其子澄元管領となる五年義稙大内義興と大舉して京師に入るに當て義澄之を避て近江に奔る尋で官職を罷らる六年義稙人を遣して搜索す義澄逃れ匿るゝ八年義澄男を產み赤松亀村に託す復た一男子を生み澄元に託す尋で樫山に奔す年三十二法住院と號す太政大臣を贈る（大日本史）

アシカガ ヨシタネ 足利義植 足利十代の將軍なり太政大臣義視の男大將軍義政の養子たり初め義材と云ひ又義尹と云ふ文正元年生る父義視叡山に登るに及て武田信賢に依る義視山名持豐の陣に入るに當て信賢義材を山名の陣に送る長享元年從ヵ位下に叙せらる二十二年父義滿已に薨す且見義持の意に悖ふを以て守護職を罷めらる是に於て義尹密に佐々木及び六角氏に遷らんとす而して六角氏肯ぜず明年十月義持命して義尹を捕へしむ義尹創髮して道純と號し世事に意なきを示めす而して竊かに葉立の心を懷く會ゝ上杉禪秀鎌倉管領持氏を圍る義嗣途に之に應し逃匿して謀を通す終に義持の爲に捕へられ二十五年正月廿四日に殺さる時に年二十五、法名は道純、圓修院と號す後ち從一位を贈る義嗣二子あり梵修及び清欽と云ふ皆附となる一說に曰く義嗣の子嗣俊と云ひ右兵衛佐と稱す（野史）

アシカガ ヨシツナ 足利義維 大將軍義澄の第二子にして義晴の弟なり阿波の細川澄元の許にあり大永七年泉州界浦に至り元服して從ヵ位下に叙し左馬頭に任ぜらる後ち其の終る所を知らず（野史）

アシカガ ヨシテル 足利義輝 足利十三代の將軍なり將軍義晴の長子本の名を義藤と云ふ天文五年生る小字を菊童と云ふ十五年從五位下に叙し尋で正五位下左馬頭に任ず父義晴に從て坂本に居る日吉神主樹下成保の宅に元服して從四位下に叙し征夷大將軍に拜す父義晴に從て自川城に據る城陷り坂本に奔る又京師に入る諸國の守護地頭に命して四十丁ゟ一里と定め塚ゟ築かしむ十八年亂を避て坂本に奔る二十一年細川氏綱三好長慶と成を行ひて京師に踏る初め長慶氏綱ゟ以て主となし細川晴元と諍戰す幕府の政令行はれず義藤坂本に遣ゟ長慶使ゟ遣し義藤に謂て曰て臣素より上ゟ浸くの意なし只晴元に恨みあり若し晴元ゟして冤雪せしめば臣が望足れりと晴元即ち憂ゟ創て出亡す義藤京師に入る時に幕府あれども無きが如し三好長慶及家人松永久秀等姦權を逞うす義藤又晴元ゟ懷ひ密に召して之ゟ祿す晴元亦漸く其の驕奢を集む長慶之ゟ知り大に怒り兵ゟ引て京師に入る義藤晴元と近江に遁れ名を義輝と改む時に年二十二弘治元年明使を遣して我が西陲の姦民彼の邊境ゟ犯す ゟ訴ふ義輝慰諭して之ゟ還す永祿四年上杉輝虎義輝に請て曰く願くは毛利元就と東西京師に入り姦邪を鋤せんと義輝之ゟ元就に謀ゟ元就應せず八年久秀が權ゟ專らにし己れゟ廢して義榮を立てんとするゟ聽ゟ第ゟ修め溝ゟ深うして不成に進み十一月權大納言に轉す二十一年正月正二位に叙せらる二十二年父義滿已に薨す且見義持の意に悖ふを以て守護職を罷めらる是に於て義尹密に佐々木及び六角氏に遷らんとす而して六角氏肯ぜず明年十月義持命して義尹を捕へしむ義尹創髮して道純と號し世事に意なきを示めす而して竊かに葉立の心を懷く會ゝ上杉禪秀彼の賊ゟ滅して鎌倉管領持氏を圍る義嗣途に之に應し逃匿して謀を通す終に義持の爲に捕へられ二十五年正月廿四日に殺さる時に年二十五、法名は道純、圓修院と號す後ち從一位を贈る義嗣二子あり梵修及び清欽と云ふ皆附となる一說に曰く義嗣の子嗣俊と云ひ右兵衛佐と稱す（野史）

アシカガ ヨシツナ 足利義維 大將軍義澄の第二子にして義晴の弟なり阿波の細川澄元の許にあり大永七年泉州界浦に至り元服して從ヵ位下に叙し左馬頭に任ぜらる後ち其の終る所を知らず（野史）

アシカガ ヨシテル 足利義輝 足利十三代の將軍なり將軍義晴の長子本の名を義藤と云ふ天文五年生る小字を菊童と云ふ十五年從五位下に叙し尋で正五位下左馬頭に任ず父義晴に從て坂本に居る日吉神主樹下成保の宅に元服して從四位下に叙し征夷大將軍に拜す父義晴に從て自川城に據る城陷り坂本に奔る又京師に入る諸國の守護地頭に命して四十丁ゟ一里と定め塚ゟ築かしむ十八年亂を避て坂本に奔る二十一年細川氏綱三好長慶と成を行ひて京師に踏る初め長慶氏綱ゟ以て主となし細川晴元と諍戰す幕府の政令行はれず義藤坂本に遣ゟ長慶使ゟ遣し義藤に謂て曰て臣素より上ゟ浸くの意なし只晴元に恨みあり若し晴元ゟして冤雪せしめば臣が望足れりと晴元即ち憂ゟ創て出亡す義藤京師に入る時に幕府あれども無きが如し三好長慶及家人松永久秀等姦權を逞うす義藤又晴元ゟ懷ひ密に召して之ゟ祿す晴元亦漸く其の驕奢を集む長慶之ゟ知り大に怒り兵ゟ引て京師に入る義藤晴元と近江に遁れ名を義輝と改む時に年二十二弘治元年明使を遣して我が西陲の姦民彼の邊境ゟ犯す ゟ訴ふ義輝慰諭して之ゟ還す永祿四年上杉輝虎義輝に請て曰く願くは毛利元就と東西京師に入り姦邪を鋤せんと義輝之ゟ元就に謀ゟ元就應せず八年久秀が權ゟ專らにし己れゟ廢して義榮を立てんとするゟ聽ゟ第ゟ修め溝ゟ深うして不成に

備ふ然れども門葉未だ成らず久秀其の子久通及び三好長緣等と兵ゟ率ひ石清水に詣ると偽り急に二條の第ゟ圍む義輝人ゟして敵ゟ禦はしむ一兵進て曰く君の陰謀已に發覺す三好の代官松永彈正來り攻むと時に宿直の士多からず畠山一色の徒防禦奮戰し賊敵く進ます或は將軍ゟ擧して奔らんと云へども四門已に塞がる是に於て衆殊死して戰ふ義輝も亦自ら眉尖刀ゟ揮て奮鬪し數ゝ賊兵ゟ郤け火ゟ營第に放ち寢殿に入て自殺す時に年三十光源院と稱し左大臣ゟ贈る義輝資性昏愚幕府の威權愈ゝ振はす豪傑四方に蜂起して遂に天下の大亂となる義輝餘暇好んで花鳥ゟ畫く其はだ絕筆のものあり（野史、皇國名畫拾遺）

アシカガ ヨシナガ 足利義長 義敎の第五子なり左馬頭に任ぜられ小松谷と號す後ち罪ありて隱岐國に配流せらるると云ふ（野史）

アシカガ ヨシノリ 足利義敎 足利六代の將軍なり初の名を義宣と云ふ義滿の子應永元年生る十年青蓮院に入り慈鬘と號す大僧正に任し天台座主となる義持病篤きに及で管領諸將と嗣を議すれども決せず乃ち石清水の社に詣て八幡の神廟に卜して義圓ゟ得遂に之を迎ふ義持薨し義圓喪主となり頭を裏て諸將ゟ見る尋で還俗して名を義宣と改む從五位下に叙し左馬頭に任ず正長二年征夷大將軍に拜し權大納言に任ず義宣を改めて義敎となす永享十年足利持氏ゟ伐つ初め義敎の立つゝ持氏統ゟ繼くの志あり果さず故に密に叛ゟ謀る執事上杉憲實諫するも聽かす憲實遂に幕府に訴ふ義敎大に兵ゟ募り鎌倉ゟ攻む持氏敗走し憲實に依て成ゟ請ふ後寺に入り自殺す十二年持氏の遺子春王安王結城氏朝に依り兵ゟ擧く義敎兵ゟ遣しと之ゟ討つ嘉吉元年氏朝及び春王安王ゟ殺す義敎人となり敏慢にして諸將ゟ輕んず居常赤松滿祐の人となりゟ忌み其の短矮なゟ嘲り之ゟ呼ひて三尺入道といふ滿祐嘗て宴に侍し謔て曰く軀矮偉ゟなれ三國の主と義敎又滿祐の營ゟ出るゟ窺ひ猿及獒狗ゟ出して之ゟ嗾す滿祐恚て之ゟ斫る義敎之ゟ銜む滿祐の族義敎に侍し旨に忤て殺さる滿祐恚恨す義敎又滿祐の三州の守護ゟ奪て嬖臣赤松貞村に與へんとす滿祐遂に意ゟ決し密に伏ゟ設て義敎ゟ招て曰く池中の鳧雛ゟ產むと義敎期ゟ約して到る酒酣にして鵝鬼の舞曲ゟ奏す半ば了る頃厩馬逸すと云て門ゟ閉つ義敎駭く滿祐子教康及び廷滿康左右より進み義敎の手ゟ執て曰く今日の事公の自ら取る所なり鬼安穩某後より之ゟ刺す義敎時に歳四十八此日義敎已に發覺す三好の代官松永彈正來り攻むと時に宿直の士多からず畠山一色の徒防禦奮戰し賊敵く進ます或は將軍ゟ擧して奔らんと云へども四門已に塞がる是に於て衆殊死して戰ふ義輝も亦自ら眉尖刀ゟ揮て奮鬪し數ゝ賊兵ゟ郤け火ゟ營第に放ち寢殿に入て自殺す時に年三十光源院と稱し左大臣ゟ贈る義輝資性昏愚幕府の威權愈ゝ振はす豪傑四方に蜂起して遂に天下の大亂となる義輝餘暇好んで花鳥ゟ畫く其はだ絕筆のものあり（野史、皇國名畫拾遺）

アシカガ ヨシハル 足利義晴 足利十二代の將軍なり澄元の子にして小字ゟ魚王丸と云ふ大將軍義澄の子にして小字ゟ魚王丸と云ふ父義澄携て播磨に如き赤松義村に依託す年細川澄元魚王丸ゟ奉して兵ゟ起し京師に入る細川高國佐々木高頼京師ゟ攻ゟに及て澄元魚王丸ゟ擁て淡路に出奔す是に於て高國魚王丸ゟ迎て嗣しむ從五位下に叙し名ゟ義晴と賜ふ尋で征夷大將軍に拜す時に大永元年なり二年從四位下に叙し參議に任す享祿元年三好長基京師ゟ犯す義晴高國と近江に奔ゟ三年朝廷使ゟ賜ひて從三位權大納言に任す高國死して細川晴元に依り又京師に入る頃年三好筑及び無賴の兇徒京畿の間に橫行し幕府用度給せず資權乏きゟ告ぐ天文十二年波爾杜瓦葡國の商船大隈の國種子島に漂着す島主時堯之に款て硝藥ゟ傳習す鳥銃此時に始ゟ次年耶蘇教徒薩摩に到る十五年晴元反して高頼と京師ゟ犯す義晴坂本に避て尋で職ゟ子義藤に讓て老す十六年亂ゟ避て白川に城て居ゟ晴元高頼東西入寇し火ゟ縱て侵略す城陷り國く守る晴元即ち僞て成きゟなし其備の意遂ゟ請元從て之ゟ攻む義晴和ゟ請ひ又京師に還ゟ時に年七年也此時に當て三好松永細川の徒各々兵ゟ分て相攻擊し專恣驕橫にして幕府の命令一も施す所なし侯伯士庶人相共に怨望す義晴憂慰遂に病ゟなす十九年薨す歳四十萬松院と稱し左大臣從一位ゟ贈る（野史）

アシカガ ヨシヒサ 足利義尚 足利九代の將軍なり將軍義政の子にして本の名ゟ義熙と云ふ寛正六年生る初め義政職に倦ゟ弟義視ゟ遣ゟせしゟ嗣ゟなす後ち夫人男ゟ生む之ゟ義熙と成す夫人之ゟ山名持豐と謀ゟ爭ひ東西軍起り義視西陣に入る義政遂に義熙ゟ立つ文明五年正五位下に叙し征夷大將軍に拜す時に義熙尚幼なり義政專ゟ執る義視亦西陣にあり主と爲ゟ恰も三主將あるゟ如し七年正四位下參議に任す義熙文學ゟ好み和歌ゟ善くす父射御ゟ試み書法ゟ習ふ九年累進正三位に叙す此年勝元持豐前後死亡し列侯各々京師ゟ去り國に歸く義視奐濃に如く京師始て靜かなり然れとも上下困乏有司議し借貸ゟ返辨する事ゟ禁す奸邪の徒之に依て掠奪ゟ專らにす父御相伴衆供衆中次走衆ゟ蹤く長享元年佐々木高頼國ゟ以て命ゟ起む義親ゟ兵ゟ帥て之ゟ征す陣にあるの日軍議の間あれは即ち命して孝經及び春秋左氏傳ゟ講ぜしめ自ら讐て曰く此行や若し賊ゟ平けすんは又京師に還らすと名ゟ義尚と改む幾もなくして陣中に薨す歳二十五常鑑院と號し太政大臣ゟ贈る義尚天性潔良文義政の驕侈に懲りて自ら德ゟ修め惠ゟ布く甫て十一歳文學ゟ好み和歌ゟ嗜み弓馬ゟ練り書ゟ學ひ或は和漢の讀書ゟ聞く成童政事ゟ聽き十六歳驕酷治罰ゟ擅ましむ陣中ゟ離ち餘力あれは講學ゟ聞く文武兼備足利十五世中の尤なり（野史）

アシカガ ヨシヒサ 足利義久 鎌倉管領持氏の長子なり小字ゟ賢王丸と曰ふ元服ゟ加へて太郎と改む永享十一年持氏執事上杉憲實と隙ゟ生し自殺するゟ諸將士爭ひて義久ゟ報國ゟ謀む（一說に曰く安永寺と）義久神色自若毫も驚かずして曰く我れ今仇ゟ復すること能はずと雖ゟ死して閻魔となり上杉氏ゟ滅さんと冒帽りて刃に伏す時に年二十八（野史）

アシカガ ヨシヒデ 足利義榮 足利十四代の將軍なり左馬頭義冬の子にして大將軍義稙の孫なり天文七年生る永祿八年松永久秀三好筑前ゟ將軍義輝ゟ弑す義榮時に平島にあり三好長緣來て之ゟ迎ふ從五位下に叙し尋で征夷大將軍に拜す時に永祿十一年なり久秀三好筑前と隙ゟ生して相攻擊す時に織田信長足利義昭ゟ奉して京師に入る久秀等義榮ゟ扶て阿波に奔ゟ幾ゝもなくして義榮疔ゟ病て暴に卒す或は久秀の鴆殺する所なりと云ふ（野史）

アシカガ ヨシヒロ 足利義澄「アシカガヨシヒサ」

アシカガ ヨシフヂ 足利義藤「アシカガ

アシカガ　ヨシフユ（ヨシテル）　**足利義冬**　將軍義稙の子なり小字を龜王丸と曰ふ母を清雲夫人と稱す永正六年京師に生る夫人狂疾あり色衰ふるに及びて義冬奉して淡路に行き志築浦に居る細川氏の族之れを迎へて阿波名東郡平島に館せしめ左馬頭と稱す（一説に右馬頭と曰ふ）天正元年十月八日卒す年六十五法名を中山と稱す（野史）

アシカガ　ヨシマサ　**足利義政**　足利八代の將軍なり本の名を義成と云ひ大將軍義教の二男なり永享八年生る小字を三寅と云ふ文安三年從五位下に叙し名を義成と賜ふ寶德元年征夷大將軍に拜し從四位下に叙し二年從二位に進み權大納言に超任す享德二年從一位に進み名を義政と改め淳和奨學兩院の別當源氏長者となる三年京師亂る初め烏山持國子なし政長を養て子となす後ち義就を生み政長を逐ふ細川勝元山名持豐政長を援て遂に持國の弟を失き義就を逐ひ政長を立つ義政持豐の專横を怒る勝元爲めに歎訴し僅に釋る持豐但馬に退く康正元年持豐兵を率ゐて京師に入り赤松氏を襲ふ威武日々に盛なり義政如何ともする事能はず鎌倉亦亂れ兵結て解けず寛正元年黑蓮左大臣に至る持豐勝元亦松氏を右くるゐ憤り荐りに之と權を爭ふの計を廻す大亂の孥蹟是に始る天正五年誌士の品級を議定す曰く大名曰く國持外樣曰く外樣衆曰く伴衆曰く部屋衆曰く申次等是に始る義政職にある事已に久しく頗る倦怠の意あり故に弟義尋の淨土寺に在るを召し還俗せしめて以て天下を讓らんとす義尋辭すれども聞かず義政乃ち他日子を生まば直に之を桑門に寧てんとを約す是に於て義政の夫人男を生む竊に持豐に依り之を立て義視と改む勝元之が執事たり義政の夫人男を生む竊に持豐に依り之を立て義視と改む勝元之を援て政長と戰ふ政長敗走し持豐益々專横なり勝元政長を援け政長と戰ふ政長敗走し持豐益々專横なり勝元政長を援け政長と戰ふ恥ぢ又持豐を怨み之を滅さん事を圖る即ち大に其族黨を募る持豐之を聞き亦兵を集め互に京師に抗衡す勝元東にあり持豐西にあり義政威望日々に衰へ之を制する事能はず骨肉を下して曰く接戰するものは皆孤の敵なりと其意二人をして和睦せしめん事を望む然れども二人肯せず勝元幕府に入る義政征旗を授く是に於て東西兵を交へ鬪喪敗回互に勝敗あり勝元義政が己れを右けざるを盛り主上及び上皇を奉迎す日夜戰鬪兵火四に起り京師大半兵燹に罹る大小館舍三萬餘神社佛閣悉く灰燼となり僅に風闕を遺すのみ上皇室町花第に崩ず義政悲泣嘆羅を着て慮御し上皇を葬る此の時に當て公卿百官逃匿離散し寶貨文書焚亡するもの勝て計る可らず文明五年持豐勝元相繼て卒す然れども餘黨猶連結幕府の命令一も施す所なし之を應仁の亂と云ふ義政職を義尙に讓る十五年東求堂を東山に造り鎔刻するに金銀を以てす時人之を銀閣と稱し北山の金閣に比す中に茶室あり之を四疊半の茶室の始とす義政之に移り茶宴を設け古器丹青を玩弄す數窃の盛なる此時を第一とす近江の人熊谷某嘗て書を作て義政の驕侈を諫む義政怒て曰く其言は可なり其人は非なり彼罪焉ぞ我を諫むる事か得んやと薙髮して道祖と號し又道慶と改む延德二年正月七日薨す年五十六慈照院と稱す太政大臣を贈る義政詩歌を善くす又國書を藝阿彌に學んで喜山と號す終に妙手に至る（野史、古今茶人系譜、扶桑畫人傳）

アシカガ　ヨシマサ　**足利義將**　高經の第四子なり和歌を善くす高經之を愛す正平十七年細川清氏に代りて將軍義詮の執事と爲り尊て高經に從ひて越前に走り粟屋城に據る高經死するに及んで降を請ふ義詮之を釋るす執事たること故の如し是の歲將軍義詮薨じ義滿嗣て立つ始めて執權を改めて管領と爲す義將管領を罷む建德元年桃井直常其の子直和を遣し出でゝ義將本國の守護たるを以て富樫某を越中長澤に軍せしむ義將之を擊て直和を斬る明年直常再び兵を越中に擧ぐ義將又能登の兵を併せて擊て之を破る天授五年再び管領となる應永五年罷む明德四年又管領となる應永五年罷む義滿に侍する舊に寧に闕ひて開導す匡益する所多し嘗て罪人あり義滿其第を毀たんと欲す義將曰く昔平康頼流所より召し還されし歌を咏じて曰く「故郷の軒の板間に苔むして思ひし程は漏らぬ月かな」と是を以て之を親るに古の處罪は罪人の家を毀たざるを納る、官左衛門佐治部大輔に至り昇殿らんと義滿之を聽され越前越中能登信濃佐渡若狭等の守護と爲り剃髮して名を道將と改め雪溪と號す世に勸解由小路と稱す十五年義滿薨ず敕して太上法皇の位を贈らる義將以爲らく人臣の贈位法皇に至る者は古より未だ之れあらずと遂に義持に勸めて之を辭せしむ十七年卒す法華寺と稱す子あり義重（大日本史）

アシカガ　ヨシミ　**足利義視**　本名は義躬將軍義敎の四子なり永享十一年正月を以て生る曾となり義尋と名く將軍義政は其兄なり職にあると既に久し大に職務に倦み義尋をして之を嗣かしめんと欲す義尋之を辭す義政曰く他日我若し見な皇るも即ち直に當とすべしと義尋遂に髮を蓄へ名を改め今出川の館に入る細川勝元其執事たり累進して權大納言に任じ從二位に進む既にして義政職を授くるの意なし夫人男を擧ぐ義尙と稱す山名持豐に依て之を立て以て義視を廢せんとを希ふ終に應仁の亂階を爲す時は義政の傳に詳かなり應仁元年義視京師にあるを厭ひ間行して坂本に如く夫人藤原氏亦た離を避けて此に在り相見て大に喜び僧に伊勢に赴き國司北畠教具に依る義視勝地を歷遊して和歌を詠じて與を遣り京師を想像して以て兵革を憂ふ二年義政勝元等と共に書を致して京師に還らしむ既にして流言あり勝元義視を立て將に義政を廢せんとすと義政疑懼し潛に親ら持豐の陣に投せんとす勝元聞きて大に驚き義視を以て雨を冒して觀山に登らしむ持豐喜びて之を迎へ入斯波義廉の第に留きて幕府に擬す其黨與臣と稱す是に於て夫人藤原氏其男義材を武田信賢に托す義政請ひて義視の官爵を削る應仁の亂既に止み義視美濃に如く將軍義尙死すると及び義政嗣なきを歎く遂に義視と和紐し招きて京師に入れ義材を養ひて嗣となす義視髮を剃りて道存と號す詔して三后に准す延德三年正月七日薨す歲五十三道號久山大智院と稱す二月詔して太政大臣從一位を贈らる（野史）

アシカガ　ヨシミツ　**足利義滿**　足利三代將軍なり小字は春王義詮の子正平十六年南軍義詮を京師に襲ふ義詮近江に逃る義滿時に幼なり從者抱て南禪寺に走る僧眞芳衣被を以て藏ひ匿すこと五日親ら之を赤松則祐の白旗城に送る明年京師に還る二十一年冬後光嚴帝授くるに從五位下を以て親ら其名を書して之に賜ふ明年冬義詮病あり義滿正五位下に叙せられ左馬頭に任ぜらる十二月義詮薨ず義滿嗣て立つ年甫めて

十歲聰明にして偉度あり細川頼之管領と爲り赤心を相けて之を輔導す諸將敬憚す二十三年秋義滿兵を還して新田義宗脇屋義治と越後上野の間に戰ふ義宗敗死す義治逃れ走る冬征夷大將軍に拜せらる二十四年楠正儀降る秋桃井直常越中松倉城に據り赤松氏範攝津中島に據る義滿亦松則祐等を遣して之を攻めしむ氏範敗走す延德二年冬四海に兵起る義滿今川貞世を以て九州探題と爲し大内義弘と俱に之を擊たしむ連歲攻戰して漸く平に歸る楠正儀來り謁す義滿乃ち正儀をして河内に還らしむ官軍歷々紀伊河内の間に往來して正儀を攻むと謀る是の歲後光嚴帝位を東宮に傳ふ是を後圓融帝と爲す文中二年春義滿細川氏春をして天野行宮を犯さしむ秋帝蹕を吉野に移して之を避く冬參議兼左近衛中將に任ぜられ從四位下に叙せられ天授元年冬從三位に叙せられ四年春權大納言に任ぜらる是歲室町に新第を造り徙りて此に居す世に花亭と稱す秋右近衛大將を兼れ五年春右馬寮御監を兼ぬ是より先き和泉土丸城の將橋本正督降を請ふ義滿因て兵を遣はし南下せしめて屢々南軍を敗る是の春紀伊の藤波石垣等の城を陷る利氏滿將さに亂た作さんとして謀を稍々漏る義滿遽かに南行の諸將を召し還して京師に備へしむ氏滿悔いて和を乞ふ事遂に寢む夏義滿細川頼之の權あるを忌み積んで嫌隙を成し兵を集めて自ら備ふ適ゝ義滿意解く乃ち寢む斯波滿將を以て管領と爲す六年春從一位に叙せらる弘和元年内大臣に任ぜられ明年春左大臣兼藏人所別當と爲り牛馬を聽され院執奉と爲る山名氏清擊て南軍を破る是に於て悉く河内和泉紀伊を取る南軍行在所を吉野に保つ夏後圓融帝位を皇太子に傳ふ是を後小松天皇と爲す三年淳和奨學兩院別當源氏長者と爲る是より先き久我氏世々源氏長者たり是に至て始めて足利氏に屬す尋で三宮に准ぜらる冬後小松帝室町殿に幸す足利氏世々廟敎を崇む義滿に至て益々熾んなり始めて僧錄司を置き鹿苑院寶鐘寺を造る是歲又相國寺を造り將國の守護をして役を助けしむ規制宏麗當時比なし後七層塔を寺内に造る元中元年右近衛大將を辭す四年春後小松帝元服を加ふ義滿理髮す五年夏左大臣を辭す秋新田氏の族二人を京師に獲て之を斬る六年春安藝に如き豐島祠に詣し明石筑紫に如く風俗を巡察せんと欲し細川頼之を以て船を備へて殿島に到らしめ進て周防の巖屋に泊す時に大に風ふく夜田島浦に至り漁人の家に投ず翌日頼之と會して轍つこと連日舟漂ふて屆る所を得ず義滿特に小舟に乘じて俱に東に還る七年春兵を遣して土岐康行を滅ぼす康行降を請ふ乃ち之を釋す是の歲山名氏清及び滿幸を遣はして山名時熙同氏之を擊たしむ其の義滿の命を拒むを以てなり氏清訓責を加へんとして自ら新たならしめんと請ふ義滿聽かず氏清幕遂に往き攻めて之を走らす八年春斯波義將の管領を罷め夏細川頼元を以て管領と爲す細川頼之を召還して輔政故の如くならしむ是より先き山名時熙同氏之潛に京師に入て罪を謝す義滿將之に之を聽かんとす山名氏清、同滿幸聞て恐る冬遂に兵を擧げて京師に擁ふ上下騷擾す義滿使を遣して氏清の兄義理に諭して之を止めしむ義理聽かず義滿諸將の向背を察せんと欲し夜召して古山滿藤の宅に至り軍事を議せしむ衆或は曰く國家須らく無事を要すべし彼若し訴ふる所あらば爲めに善く之を處べしと義滿曰く彼は天下を亂る更らに何の訴ふる所かあらん倘し之を釋るさば後ち必ず復た反さん時に及んで誅するに如かずと明日義滿一色詮範の策を用て出て詮範の堀川第に陣す細川頼之の頼元等を分遣して内野神祇官等の處に陣す山名氏清の先鋒大宮に至る大内義弘に戰て敗ぶる敵の大軍纒て進むと聞て驅せ還て救ひて之を敗ぶる敵を追ふ義滿赤松義則をして之を助けしむ細川頼之等山名滿幸と戰ひて利あらず義滿乃ち鑾下を率て赴き救ひ擊て之を走らす氏清又兵を率て大宮に入る兵勢甚た銳し義滿一色詮範を遣して義弘を援けしむ戰酣に及て乃ち親ら鑾下を督し鼓譟して進む敵兵義滿の旅を望みて大に潰え走る詮範遂に氏清を獲て之を斬り其の首を獻ず義滿指して曰く天誅容れず刑等逆を謀る者の運命如何を視よと後ち法會を内野に設けて事に死する者を弔し併せて戰死者を追悼す明年功を論じ賞を行ひて氏清官を剝奪し山名義理を紀伊に攻む義理城を棄て遁る山名滿幸亦逃れ走る三月細川頼之死す義滿素服親ら喪を送る冬大内義弘を以て和を吉野に謀ぜしむ義龜山帝之を許す乃ち京師に幸し三神器を後小松帝に傳ふ尊氏光明院を奉立してより世を易ふること五主五十有七年を歷て是に至て南北混一す是の歲の冬復た左大臣に任ぜらる明德四年秋氏仗を賜ふ尋で左大臣及び征夷大將軍を辭す是歲細川頼元を罷め又斯波義將を以て管領と爲す應永元年冬太政大臣を辭し髮を剃りて天山道義と號す又道有と曰ふ三年秋延曆寺に往く儀御幸に擬す四年大内義弘を筑紫に遣して少貳菊池千葉大村等を擊て之を平らゞ此の年義滿三層閣を北山に作る其の柱戸廂壁悉く塗るに金泥を以てす時人之を金閣と名く義滿移りて之に居す甍煥敢て入朝せず有司文書を抱て來りて呈署す六年大内義弘叛して和泉堺浦に據る土岐詮直尾張に京極某近江に山名氏清を招き又曾中津をして往て之を諭さしむ從はず義滿曰く彼兵を擁す三十餘年皆我が力なり山名氏清の如きも我既に之を滅ぼす義弘強なりと雖も一旦我に叛かば何ぞ能く爲んと乃ち親ら軍を男山に出し畠山斯波細川を遣し兵三萬に將として攻めて之に克ち義弘を斬り詮直を擊つ餘黨悉く潰ゆ時に足利滿兼義弘と謀を協せ東西並び舉げて京師を攻めんと欲し出でゝ武藏の國府に陣し義滿の爲めに應援すと宣言す七年義滿滿兼に授くるに足利莊を以てす滿兼乃ち兵を罷む八年是より先き義滿僧祖阿商人肥富を明國に遣して好を通ず文中年中明主三たび曾を遣して來て通商交易を求む是より信使絶えず竟に異域の封爵を受て自ら倣り彼を稱して皇帝陛下と稱するに至る（明主冕と弁服と為義滿に贈りて曰く朕汝を封じて日本國王とせんと義滿大に悅ぶ冕するに及んで明主恭獻王の諡號を贈る）十九年帝義滿の北山別墅に幸す義滿幼子義嗣を携へて出て迎ふ義嗣闕白藤原經嗣の上に班す五月薨ず年五十一鹿苑院と稱す詔して號太皇を贈る義持辭して受けず初め尊氏義詮の治を爲す寛にして下を戒めず諸の功臣驕恣にして動もすれば輒ち姦亂す義滿職を襲ひて軍政を修飾し紀綱大に振ふ山名大内の二族相ひ繼て誅滅して僅强の徒も亦遯れ走る三月細川頼之の死す義滿素服親ら喪を送る亦怨を懷く尊氏の時凡そ事を行ふ源頼朝の制を沿用す

義滿に至りて其法益々備はると云ふ平生儲事を好み靈驗を能くす子義持、義嗣、義教、義承、義昭、法尊、周喜、持圓（尊滿（法尊以下の四人皆女僧）あり（大日本史、野史、扶桑略人傳）

アシカガ ヨシモチ 足利義持 足利四代の將軍なり父は將軍義滿、元中三年生る始め從五位下に叙す義滿憎ばず天命權れて葬官の議に託して更に正五位下に叙す征夷大將軍に拜し左近衛中將に任じ應永九年累遷從一位に陞る「十年稱光天皇位に即く是時に當て南朝の皇子及び伏見殿之を窺むと雖も足利氏聽かず遂に天皇を立つ此に於て大和紀伊河内陸奥ノ南軍所在皆起る義持約するに他日南帝の皇子なして踐祚せしめんことを以てす南軍稍々解け去る二十五年義持弟義嗣を殺す是より先き義滿義嗣を愛し一竊に廢立を謀る義滿薨じて後義持義嗣と協はず義嗣密に不軌を圖る義持怒て之を執へ相國寺に幽す是に於て遂に之を殺す二十七年成敗式條を定む三十年職を子義量に讓る薙髮す三十二年義量薨じ義持又た政を攝く義持管て赤松持貞を愛し赤松滿祐の領地を割て持貞に與ふ滿祐怒て反す諸將案より持貞を憎む故に赴て滿祐を伐つものなし却て持貞の罪を訴ふ持貞遂に自殺し事漸く止む正長元年義持病篤し諸將と謀し義持の弟義圓を青蓮院より迎て其職を繼かしむ義持尋て薨ず歲四十三太政大臣を贈り勝定院と稱す義持の職にあるや國家無事なり故に屢〻撰家諸門跡及び諸公卿の第に遊ぶ世俗之れを御成りと云ふ（野史）

アシカガ ヨシヤス 足利義康 三郎と稱す義重の弟足利氏諸流の祖なり鳥羽上皇に仕へて北面となり左衛門大尉に補せられ陸奥守に進み又檢非違使と爲る足利陸奥判官と稱す保元の亂に源義朝等と禁闕を守衛す崇德上皇の軍敗れ將士逃散す義康右衛門尉平家弘父子五人を捕へて之を大江山に斬る功を以て藏人に補せられ昇殿を聽さる明年卒す（大日本史）

アシカガ ヨリモト 足利頼基 義明の族なり鎌倉の役歐將山本兵庫と戰ひて勇名を顯はし其の名海内に傳はる三國志北條盛衰記にくわし（太朝武功正傳）

アシサハ マサカツ 蘆澤正勝 陸軍上兵大佐なり兵庫縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第九師團工兵第九大隊長として出征し同年八月二十日清國盛京省五家房西南畑地に於て戰死す戰功に依り勳三等功四級に叙せらる

アシダ タメスケ 蘆田爲助 丹波天田郡の將軍なり父は將軍義滿、元中三年生る始め從五位下に叙す義滿憎ばず天命權れて葬官の議に託して更に正五位下に叙す征夷大將軍に拜し左近衛中將に任じ應永九年累遷從一位に陞る「十年稱光天皇位に即く是時に當て南朝の皇子及び伏見殿之を窺むと雖も足利氏聽かず遂に天皇を立つ此に於て大和紀伊河内陸奥ノ南軍所在皆起る義持約するに他日南帝の皇子なして踐祚せしめんことを以てす南軍稍々解け去る二十五年義持弟義嗣を殺す是より先き義滿義嗣を愛し一竊に廢立を謀る義滿薨じて後義持義嗣と協はず義嗣密に不軌を圖る義持怒て之を執へ相國寺に幽す是に於て遂に之を殺す二十七年成敗式條を定む三十年職を子義量に讓る薙髮す三十二年義量薨じ義持又た政を攝く義持管て赤松持貞を愛し赤松滿祐の領地を割て持貞に與ふ滿祐怒て反す諸將案より持貞を憎む故に赴て滿祐を伐つものなし却て持貞の罪を訴ふ持貞遂に自殺し事漸く止む正長元年義持病篤し諸將と謀し義持の弟義圓を青蓮院より迎て其職を繼かしむ義持尋て薨ず歲四十三太政大臣を贈り勝定院と稱す義持の職にあるや國家無事なり故に屢〻撰家諸門跡及び諸公卿の第に遊ぶ世俗之れを御成りと云ふ（野史）

アシカガ チュウエモン 蘆塚忠右衛門 蘆塚忠右衛門と曰ふ肥後宇土城代たり行長亡ぶるとき忠右衛門と謀宗意軒を召して遺志を嗣がんことを托す二人還れて肥前の島原に聚る時の至るを待つ寛永八年端午の節天草甚兵衛等と反を謀り百姓を煽動し耶蘇教に托し十四年八月十一日を以て兵を天草に起す謀を以て松倉寺澤兩氏の捕卒を破り其兵佚を奪ふ忠右衛門軍略あり衆推して軍師となす忠右衛門其の首將なきを憂ふ渡邊某時に飛板倉内膳近國の諸侯を集めて之を攻む忠右衛門屢〻謀を以て之を破り遂に板倉を殺す松平伊豆守信綱代る又克つ能はず因て遠く圍みて城中糧の盡るを待つ忠右衛門大に驚き乃ち城兵をして毎夜金鼓を鳴して城門を出て敵を襲ふの狀をなさしむ敵兵初は之に備ふと雖も每五日同じきを以て稍々懈る忠右衛門乃ち五年正月二十日城を以て城兵を率ゐて出るを聞き夜の如くし敵兵に近づき急に銃を放つ敵狼狽死傷頗る多し已にして糧盡く二月廿七日官軍之に乗じて四面圍み攻む衆防戰力むと雖も士多く死す忠右衛門乃ち城中を掃除し老幼婦女を附城に送り本城を以て死處を定め敵の至るを待つ二十八日城陷り官軍城に入る忠右衛門等奮戰し遂に伊藤氏を擊て之を敗る遂に伊南河原田氏を擊つ十六年伊達

晴宗大内備前ノ與に相馬氏を伐つ敗れて還る十八年伊達氏と與に最上氏を擊て天文二十二年八月卒す歲六十四子盛氏（野史）

アシナ モリシゲ 蘆名盛重 奥州黑川の城主なり本の名は義廣、小字鳴貪丸、實は佐竹義重の二男也蘆ゝ盛隆死して嗣なし族臣猪苗代盛國等相議して迎て之を立つ義廣時に年十三盛隆の女に配す字は平四郎、右兵衛尉修理太夫日向守と稱す大繩義辰淵石駿河守井薩摩義廣に從ひ佐竹より來りて國政を預り常く席諸老に次ぐ三人驕恣、群下和せず猪苗代盛國巽圖を懷き伊達正宗に應ぜんとす蘆名平三郎横田氏勝河原田盛次遠藤四郎兵衛等亦皆正宗に通ず天正十七年四月正宗來りて相馬に次し新地駒峰の二城を略す是に於て盛國意を決して之に應す正宗の老中片倉景綱伊達成實進んで摺上原に抵り地利を計り戰備を議し近境を焚く是の時義廣須賀川に在り盛國叛きて正宗を封内に誘入ると聞き急に黑川に還り議して曰く盛國敵を猪苗代に迎へ入れ其の反形既に顯る彼の備へざるに乘じ急に兵を發して之を屠戮せんと高田盛隆諫て曰く伊達の兵銳練精悍地勢に依て備を設く然るに君急遽事を發す恐くは不可ならん義廣色を作して曰く汝爾か云ふと雖彼焉ぞ地理を諳せん我師を發して之を擊たば一擧して陷るのみと盛隆切に其非策を諫め勸むるに使ち遣はし和みを講ずるの事を以てす義廣大に怒りて盛隆を刃す又た大繩義辰等屢〻權を弄して賞罰私多し蘆名の四老佐瀬平田富田松本等屢〻之と權を爭ふ而れども義廣明斷する能はず故を以て四老恨んで正宗に通ず義廣敵摺上の近邑を焚くと聞き夜中黑川を發し摺上原に抵る正宗亦安子島を發し猪苗代にゆき五日黎明盛國が先鋒とし原田宗長、片倉景綱、伊達成實等之に次く義廣が兵富田將監を以て先鋒とし出湯、田潭、佐瀬、河内、河沼等之に次く激戰數刻義廣殆んど勝んとして終に大敗す從者の切諫なより死戰を期す猶ほ進んで戰はんと欲す從者の切諫なを以て漸く止む初め義廣の兵步騎合せて一萬六千五百人或は敵に降り或は死傷し黑川の城に歸るに及んで從者僅に六人のみ是に於て門族重臣多く叛きて四面楚歌なり十日の夜義廣左右三十餘人と竊に常陸に逃る蘆名氏遂に亡ぶ義廣人と爲り豪邁にして能く士卒を指揮す進退度あり然ども壯年にして暴を好み靡〻無謀の擧あり諫を拒み鄙陋を登庸す惑まに舊政を改めて人の憂苦を察せず是を以て宿臣多く離叛し卒に此に至る後ち關白秀吉其の零落憫れみ之に常州江戸崎を賜ふ（野史）

アシナ モリタカ 蘆名盛隆 奥州黑川の城主なり本の名は義廣、小字鳴貪丸、實は佐竹義重の二男也蘆ゝ盛隆死して嗣なし族臣猪苗代盛國等相議して迎て之を立つ義廣時に年十三盛隆の女に配す字は平四郎、右兵衛尉修理太夫日向守と稱す大繩義辰淵石駿河守井薩摩義廣に從ひ佐竹より來りて國政を預り常く席諸老に次ぐ三人驕恣、群下和せず猪苗代盛國巽圖を懷き伊達正宗に應ぜんとす蘆名平三郎横田氏勝河原田盛次遠藤四郎兵衛等亦皆正宗に通ず天正十七年四月正宗來りて相馬に次し新地駒峰の二城を略す是に於て盛國意を決して之に應す正宗の老中片倉景綱伊達成實進んで摺上原に抵り地利を計り戰備を議し近境を焚く是の時義廣須賀川に在り盛國叛きて正宗を封内に誘入ると聞き急に黑川に還り議して曰く盛國敵を猪苗代に迎へ入れ其の反形既に顯る彼の備へざるに乘じ急に兵を發して之を屠戮せんと高田盛隆諫て曰く伊達の兵銳練精悍地勢に依て備を設く然るに君急遽事を發す恐くは不可ならん義廣色を作して曰く汝爾か云ふと雖彼焉ぞ地理を諳せん我師を發して之を擊たば一擧して陷るのみと盛隆切に其非策を諫め勸むるに使ち遣はし和みを講ずるの事を以てす義廣大に怒りて盛隆を刃す又た大繩義辰等屢〻權を弄して賞罰私多し蘆名の四老佐瀬平田富田松本等屢〻之と權を爭ふ而れども義廣明斷する能はず故を以て四老恨んで正宗に通ず義廣敵摺上の近邑を焚くと聞き夜中黑川を發し摺上原に抵る正宗亦安子島を發し猪苗代にゆき五日黎明盛國が先鋒とし原田宗長、片倉景綱、伊達成實等之に次く義廣が兵富田將監を以て先鋒とし出湯、田潭、佐瀬、河内、河沼等之に次く激戰數刻義廣殆んど勝んとして終に大敗す從者の切諫なより死戰を期す猶ほ進んで戰はんと欲す從者の切諫なを以て漸く止む初め義廣の兵步騎合せて一萬六千五百人或は敵に降り或は死傷し黑川の城に歸るに及んで從者僅に六人のみ是に於て門族重臣多く叛きて四面楚歌なり十日の夜義廣左右三十餘人と竊に常陸に逃る蘆名氏遂に亡ぶ義廣人と爲り豪邁にして能く士卒を指揮す進退度あり然ども壯年にして暴を好み靡〻無謀の擧あり諫を拒み鄙陋を登庸す惑まに舊政を改めて人の憂苦を察せず是を以て宿臣多く離叛し卒に此に至る後ち關白秀吉其の零落憫れみ之に常州江戸崎を賜ふ（野史）

アシナ モリタカ 蘆名盛高 奥州黑川の城主なり本の名は義廣、小字鳴貪丸、實は佐竹義重の二男也蘆ゝ盛隆死して嗣なし族臣猪苗代盛國等相議して迎て之を立つ義廣時に年十三盛隆の女に配す字は平四郎、右兵衛尉修理太夫日向守と稱す大繩義辰淵石駿河守井薩摩義廣に從ひ佐竹より來りて國政を預り常く席諸老に次ぐ三人驕恣、群下和せず猪苗代盛國巽圖を懷き伊達正宗に應ぜんとす蘆名平三郎横田氏勝河原田盛次遠藤四郎兵衛等亦皆正宗に通ず天正十七年四月正宗來りて相馬に次し新地駒峰の二城を略す是に於て盛國意を決して之に應す正宗の老中片倉景綱伊達成實進んで摺上原に抵り地利を計り戰備を議し近境を焚く是の時義廣須賀川に在り盛國叛きて正宗を封内に誘入ると聞き急に黑川に還り議して曰く盛國敵を猪苗代に迎へ入れ其の反形既に顯る彼の備へざるに乘じ急に兵を發して之を屠戮せんと高田盛隆諫て曰く伊達の兵銳練精悍地勢に依て備を設く然るに君急遽事を發す恐くは不可ならん義廣色を作して曰く汝爾か云ふと雖彼焉ぞ地理を諳せん我師を發して之を擊たば一擧して陷るのみと盛隆切に其非策を諫め勸むるに使ち遣はし和みを講ずるの事を以てす義廣大に怒りて盛隆を刃す又た大繩義辰等屢〻權を弄して賞罰私多し蘆名の四老佐瀬平田富田松本等屢〻之と權を爭ふ而れども義廣明斷する能はず故を以て四老恨んで正宗に通ず義廣敵摺上の近邑を焚くと聞き夜中黑川を發し摺上原に抵る正宗亦安子島を發し猪苗代にゆき五日黎明盛國が先鋒とし原田宗長、片倉景綱、伊達成實等之に次く義廣が兵富田將監を以て先鋒とし出湯、田潭、佐瀬、河内、河沼等之に次く激戰數刻義廣殆んど勝んとして終に大敗す從者の切諫なより死戰を期す猶ほ進んで戰はんと欲す從者の切諫なを以て漸く止む初め義廣の兵步騎合せて一萬六千五百人或は敵に降り或は死傷し黑川の城に歸るに及んで從者僅に六人のみ是に於て門族重臣多く叛きて四面楚歌なり十日の夜義廣左右三十餘人と竊に常陸に逃る蘆名氏遂に亡ぶ義廣人と爲り豪邁にして能く士卒を指揮す進

アシナ モリヒサ 蘆名盛久 奥州黑川の城主なり盛政の子、修理太夫下總守と稱す嘉吉元年時軍足利義政教書を下して足利持氏の殘黨を結城に伐つに會せざるを誚む文安元年に卒す子無し弟盛信代て立つ下總守と稱す寶德三年卒す歲四十四（野史）

アシナ モリマサ 蘆名盛政 奥州黑川の城主なり姓は平氏、三浦義明の季子佐原義連鎌倉に仕へ始て會津四郡に封ぜらる子盛連の六男時連新宮を貪み蘆名氏と稱す時連の玄孫盛益小山の城に居り足利氏に仕へ其の死に及んで之に殉す盛益盛政を生む盛政嗣て修理太夫と稱す應永七年枝陽新宮盛俊反す攻て之を走らす十八年薩摩して義安と稱す二十三年上杉禪秀足利持氏を伐つ義安子盛久を遣して禪秀を助く二十七年六月又盛俊を攻めて新宮城を拔く首を斬ること百八十六級永享四年卒す歲四十七法名義安仁公禪師壽院と號す盛政每に禪法を學ぶ（野史）

アシノヤ ケンゲウ 蘆之屋檢校 名は麻續一東洋堂と號す初め本所横綱に住し後ち兩國樂研堀に移る兩眼夙に盲す酷た國學を嗜み記性凡ならず尤も源語に邃なり又和歌を善くし且針術に精し一夕病家の女を娶る十六年八月兵を率ゐて二階堂氏と戰ひ一族多く死す明應元年猪苗代氏の臣金曲伊賀反を謀るに赴く此夕都下地大に震ふ壓死するも無數檢挍も亦其秩に擬る實に安政二年十月二日なり年五十餘（書人傳）

松本備前伊藤民部謀反す事覺れ誅せらる七年六月松本右馬允叛く捕て之を殺す井に其黨松本豐前右馬允を誅す永正元年八月家臣の事に因て盛高子盛滋と隙あり家臣藤分て父子に從ふ十月盛高盛滋と廐川橋を隔て戰ひて之を破る三年和す十四年十二月盛高卒す盛滋嗣く

アシナ モリシゲ 蘆名盛滋 盛高の子なり父に嗣て黑川城主たり初字三郎出羽列官と稱す永正十七年伊達植宗を援け最上義光と戰ふ十八年二月卒す子無し弟盛舜嗣く（野史）

アシナ モリノリ 蘆名盛詮 奥州黑川の城主なり盛久の子なり年尚幼きを以て臣下を制する能はず家臣松本右馬允多々良伊賀相ひ善らず右馬允盛詮を挾みて私邸に據り以て伊賀を攻む伊賀父子及び伊藤等皆自殺す長祿二年八月盛詮兵を出して伊達某と戰ひ利あらずして歸る盛詮下總守と稱す文正元年卒す歲三十六（野史）

アシナ モリヒサ 蘆名盛久 奥州黑川の城主なり盛政の子、修理太夫下總守と稱す嘉吉元年時軍足利義政教書を下して足利持氏の殘黨を結城に伐つに會せざるを誚む文安元年に卒す子無し弟盛信代て立つ下總守と稱す寶德三年卒す歲四十四（野史）

アシナ モリマサ 蘆名盛政 奥州黑川の城主なり姓は平氏、三浦義明の季子佐原義連鎌倉に仕へ始て會津四郡に封ぜらる子盛連の六男時連新宮を貪み蘆名氏と稱す時連の玄孫盛益小山の城に居り足利氏に仕へ其の死に及んで之に殉す盛益盛政を生む盛政嗣て修理太夫と稱す應永七年枝陽新宮盛俊反す攻て之を走らす十八年薩摩して義安と稱す二十三年上杉禪秀足利持氏を伐つ義安子盛久を遣して禪秀を助く二十七年六月又盛俊を攻めて新宮城を拔く首を斬ること百八十六級永享四年卒す歲四十七法名義安仁公禪師壽院と號す盛政每に禪法を學ぶ（野史）

アシノヤ ケンゲウ 蘆之屋檢校 名は麻續一東洋堂と號す初め本所横綱に住し後ち兩國樂研堀に移る兩眼夙に盲す酷た國學を嗜み記性凡ならず尤も源語に邃なり又和歌を善くし且針術に精し一夕病家の女を娶る十六年八月兵を率ゐて二階堂氏と戰ひ一族多く死す明應元年猪苗代氏の臣金曲伊賀反を謀るに赴く此夕都下地大に震ふ壓死するも無數檢挍も亦其秩に擬る實に安政二年十月二日なり年五十餘（書人傳）

アシハラ タケヂ 蘆原武治 陸軍歩兵大尉なり京都府出身にして明治三十七年日露戰役起るや召集を受けて第十師團歩兵第四十聯隊補充大隊附となり夥て出征し十月十二日清國盛京省三塊石山戰鬪の際負傷し後送歸國の後餘病を併發し廿九年十二月十一日兵庫縣武庫郡須磨村に於て死去す戰功により勳六等功五級に叙せらる

アシハラ トウザン 蘆原東山（蘆原氏自ら銘して單に蘆とす）仙臺の儒者なり小字は幸七郎後ち東民と稱す名は德林、字は茂仲、一字は世輔、東山と號す父は卯左衛門德芳奥州東山澁民村に住し四子を生む次郎は即ち東山なり東山幼にして頴悟好て神史を讀む七歳にして僧定山に就き句讀を受く九歳にして僧素忠に從て經を受け勞ら醫術兵法を及ぶ寶永七年東山甫めて十五歳仙臺に遊び富商久四郎を以て主と爲し處士吉田儒軒に從ふ儒軒其の才を愛し江戸に遊學せんことを勸む久四郎を以て資を供せしむ祖父白榮聽かずして曰く汝仙臺に在り二十歳を待て西遊して可なりと是に於て東山大島佐藤諸子に就て相切磋し又江志彦想に從て天文曆數を學ぶ十一月藩老田村圖書に見て學庸二書を讀ず圖書遂に之を藩に薦め學資を賜ひて儒臣田邊整齋に就て學ばしむ享保元年東山年方さに二十一白榮の冒に從て京師に遊び淺井義齋の門人と爲る義齋沒して又三宅尚齋に學ぶ四年白榮病あり即ち歸り治めて府に至る國侯命じて經を說かしむ事學て家に歸へる幾はくもなく白榮沒す六年擯んで〻儒員となし侯に從て江戸に往く七月諫書を奉り以て大に時務を論ず侯嘗て書を其前に命じ親から墨を磨り紙を展べ以て東山に請ふ即ち筆を援て大書す字稍〻斜なり侯曰く斜なり宜く之を改め書すべし東山色を正して對へて曰く臣の書は斜なりと雖ども亦字たるを失はず國政直からざれば必ず政體を失せん公何んぞ之を改めざるとや侍臣皆之が爲めに汗下す初め東山の京に在る桑名松重と嘗世の人物論じて謂ふ經術文章は當さに室鳩巣を以て第一と爲すべし是に於て謁を鳩巣に執り就て業を受く鳩巣も亦其才學を稱し託するに其子を以てし且つ曰く皇國律令の書は殘欠して存せず我れ嘗て漢土諸儒の論及び刑律を采寛して一書と爲す今は老いたり能く爲すことなし子繼て之を成せと東山因て以て自任す會〻命あり念四侯以下の世祀を撰次す尋で其已前の事を撰し書成て之を上る廿年東山國學を建てんことを請ふ免るさず是時晉す五年大番頭に進み祿三百石加俸八百石に至る是歳齊昭再び靈を蒙る蓋し齊昭家臣たるを以て其の師に洩すと云ふにあり翌年四月帶刀奉府の評定所に召され鞫問を受く帶刀奉の藩主に關係なきを陳す九鬼長門守邸に幽せらる八月廿七日再び評定所に召され齊昭の子一橋慶喜が西城に入るの世評を喜ふの旨同僚に書送したるは職掌柄慎重を欠くの所爲なる事并に薩藩の士と通謀し朝廷に遊說し公武の不和を釀すの罪を以て切腹を命ぜらる年四十八家絶ゆ後長男信義祿三百石を賜り家名を再興す明治二十四年四月朝廷正四位を贈る（安島信義氏聞）

アジン 阿人 駿河島田の俳人なり鰹中庵蓋太の門人江原氏壯丹庵鵬入道等の號あり家書鰒の幸あり（俳諧人物便覽）

アシヤ ダウマン 蘆屋道滿 陰陽家なり安部晴明の門人、（晴明の條參看）師の旅に在るに乘じ其の妻李花と通じ晴明の秘書金烏玉兎集を寫し了る遂に晴明を殺すと云ふ

アジロ ヒロノリ 足代弘訓 世を伊勢神廟の神主なり通稱は權太夫寛居と號す祖は弘實從四位上父は弘早正四位下なり弘訓に至りて異進して正四位上に至る前代未だ嘗てあらざる所なり弘訓少にして學を好む以爲らく祠官は神典を明らかにせざる可らずと首として之を研究し遂に國史律令歌集の書に及ぶ少にして宇治久老に從ひ長じて本居太平及び拳庭に從ひて遊び猶以て自ら足らずと爲し屢〻京師に往て芝山竹屋の諸體神は從ひて質正する所あり又江戸に遊び新見岡本成島の諸士及び塙朝川荷谷諸人と相往來し以て聞見を廣くす人と爲り洞介にして守る所有り師して其の學は門戸を立てず常に曰く今の學者は識見に昏き吾窮り識見なきを以て識見と爲す是を以て考證を務め述べて作らずと其の編輯する所國史類聚歌集類語寛居雜錄度會系圖攷證以下凡千有餘卷あり天保中勅ありて宮中に國史を講ぜしめ又吾詢する所あり弘訓乃ち六國史人名部類若干卷を撰して之を獻ず朝廷之を嘉して物を賜て繰を浸收し扶持五口を給せらる嘉永二年四月歿され再び漸を以て其の班を進め安政二年五月小丝頭列側用人見習に至り尋で學校奉行兼れ軍艦旭丸造立の事を管す五年大番頭に進み祿三百石加俸八百石に至る是歳齊昭再び靈を蒙る蓋し齊昭家臣たるを以て其の師に洩すと云ふにあり翌年四月帶刀奉府の評定所に召され鞫問を受く帶刀奉の藩主に關係なきを陳す九鬼長門守邸に幽せらる八月廿七日再び評定所に召され齊昭の子一橋慶喜が西城に入るの世評を喜ふの旨同僚に書送したるは職掌柄慎重を欠くの所爲なる事并に薩藩の士と通謀し朝廷に遊說し公武の不和を釀すの罪を以て切腹を命ぜらる年四十八家絶ゆ後長男信義祿三百石を賜り家名を再興す明治二十四年四月朝廷正四位を贈る（安島信義氏聞）

アジン 阿人 駿河島田の俳人なり鰹中庵蓋太の門人江原氏壯丹庵鵬入道等の號あり家書鰒の幸あり（俳諧人物便覽）

アシヤ ダウマン 蘆屋道滿 陰陽家なり安部晴明の門人、（晴明の條參看）師の旅に在るに乘じ其の妻李花と通じ晴明の秘書金烏玉兎集を寫し了る遂に晴明を殺すと云ふ

アジロ ヒロノリ 足代弘訓 世を伊勢神廟の神主なり通稱は權太夫寛居と號す祖は弘實從四位上父は弘早正四位下なり弘訓に至りて異進して正四位上に至る前代未だ嘗てあらざる所なり弘訓少にして學を好む以爲らく祠官は神典を明らかにせざる可らずと首として之を研究し遂に國史律令歌集の書に及ぶ少にして宇治久老に從ひ長じて本居太平及び拳庭に從ひて遊び猶以て自ら足らずと爲し屢〻京師に往て芝山竹屋の諸體神は從ひて質正する所あり又江戸に遊び新見岡本成島の諸士及び塙朝川荷谷諸人と相往來し以て聞見を廣くす人と爲り洞介にして守る所有り師して其の學は門戸を立てず常に曰く今の學者は識見に昏き吾窮り識見なきを以て識見と爲す是を以て考證を務め述べて作らずと其の編輯する所國史類聚歌集類語寛居雜錄度會系圖攷證以下凡千有餘卷あり天保中勅ありて宮中に國史を講ぜしめ又吾詢する所あり弘訓乃ち六國史人名部類若干卷を撰して之を獻ず朝廷之を嘉して物を賜

ふ少より和歌數萬首を作くり亦一家を成す然れども歌人たるを欲せず自ら其の稿を抄して一卷と爲し海士嶋と曰ふ素と經世の志を抱き屢〻人の急を救ひ貧學生の四方より來る者は之を宿して數月に至るも曾て厭惡の色なく家之が爲めに貸し山田の地は豪奢風を成し桐宦に家を破ぶり嗣を絶つ者多く其他然習其多し弘訓之を憂ひ謂らく弊あること此くの如くにして救はざれば我が大神を如何せんと遂に江戸に走り書を當路に上り て頗る矯正する所あり晩年に洋夷の狡獪を憂ひ博く圖志書史に考へて從遊の士に告げ以て方標する所を知らしむ亦皆神國に忠する所以なり安政三年十一月五日病を得て歿す年七十三（墓銘）

アスカ ケイシュウ 飛鳥圭洲 儒者なり名は淵（一に頴に作る）字は子靜長崎の人富て學を好む小河天門祀平洲と交り親し後ち東都に來り平洲の家に寓して平洲天門と均く中四淡淵に學ぶ雅量淹通を以て名あり門戸を開かずして歿す時に寶曆五年十月也（墓定便覽、江戸諸名家墓所一覽）

アスカシンワウ 明日香親王 桓武帝の皇子にして母は宮人紀若子なり弘仁二年四品を授けられ彈正尹となる九年上表して親王の號を除かれ下諸臣と同じからむことを乞ふ許されず再び上表して生む所の男女に姓朝臣を賜はらむことを乞ふ帝其請を嘉みして子女四人に姓久賀朝臣を賜ふ後孫王に姓を賜ふは皆之に效へり十二年三品に進み天長八年上野の太守となる承和二年二月薨ず親王天資倫朴にして浮華を尙ばず弘仁中、世奢侈に趨き朝貴の衣服華鮮なり唯〻親王竊り競ふ所なし夏日猶朝服を澣するもの再三時は或に駿馬を賣りて以て費用に充つ薨ずるに及びて朝廷哀悼す（大日本史）

アスカノ イタブキノ ミヤニ アメノシタシロシメシシ スメラミコト
飛鳥板蓋宮御宇天皇「クワウキョクテンワウ」
アスカノ キヨミハラノ ミヤニ アメノシタシロシメシシ スメラミコト
飛鳥淨見原宮御宇天皇「テンムテンワウ」
アスカノ ヤツリノ ミヤニ アメノシタシロシメシシ スメラミコト 飛鳥八釣宮御宇天皇「ケンソウテンワウ」

アスカノ ヨツモトノ ミヤニ アメノシタシロシメシシ スメラミコト
飛鳥岡本宮御宇天皇「ヨミヤウテンワウ」

アスカベツ子ノリ 飛鳥部常則 畫手なり巨勢公憂ひ等と名を齊うす曾て獅子を畫く生狗之を見て吠ゆ又應和中勅を奉じて白澤王が鬼を斬るの圖を清涼殿西廂の南壁に畫く所謂鬼の間是なり延喜天曆の二朝に仕ふ（本朝畫史）

アスカ中 マサアキ 飛鳥井雅章「フヂハラマサアキ」

アスカ中 マサカズ 飛鳥井雅萬 陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第十師團後備歩兵第十聯隊附として出征し同年九月三日遼陽南門外に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アスカ中 マサカタ 飛鳥井雅賢 雅世の長子なり左近衛少將に任じ從四位下に叙す柔容美なり慶長十二年拳鳥丸光廣等と伴を結んで蕩遊するに坐し隙蛟に流さる寛永三年配所に歿す年四十二（野史）

アスカ中 マサチカ 飛鳥井雅親 歌人なり雅世の子にして和歌を善くす參議中納言を歷て權大納言に至る寛正六年勅を奉じて近古以來の和歌を撰進す文明五年創髮して榮雅と法名す（野史）

アスカ中 マサツグ 飛鳥井雅經 「フヂハラマサツネ」

アスカ中 マサツグ子 飛鳥井雅康 蹴鞠家なり雅世の次子、一の名は雅枝、累遷して參議正三位に至り右衛門督を兼ぬ慶長十三年足利幕府雅庸の補先蹴鞠式の印章を賜ひしより累世蹴鞠の式を掌りしが雅庸の時に至り賀茂の社司松下某と云へる者あり故を以て更に德川家康に請ひて蹴鞠式の印章を受く元和元年に卒す年四十七法名尙雅と曰ふ（野史）

アスカ中 マサノブ 飛鳥井雅宣 「ナンムチカツ」

アスカ中 マサモチ 飛鳥井雅望 闕白藤原師實の曾孫四條刑部卿經に出づ正二位雅典の長男にして雅經二十六世の孫なり世々蹴鞠和歌を以て家聞とす天保十三年五月四日京都に生れ安政二年元服昇殿を許され四年侍從に任ず万延元年九月親王家司に補す元治元年五月左近衛權中將に任ず慶應三年正月親王家司を免ぜられ同年四月侍從に任ず明治十六年殿掌を命ぜらる十七年七月伯爵を授けられ十九年二月非蔵となり爾來京都に退隱す華族會館內に蹴鞠保存會の設置せらるるや敎師となりて盡力せり三十九年四月二十日急症を以て京都の邸に逝く年六十五

アスカ中 マサヤス 飛鳥井雅康 歌人なり雅世の二男にして和歌を能くす權中納言正三位に累進し文明十四年二月剃髮して宋世と法名し二樂軒と號す明應八年駿河に往き小夜の中山に到り富士を觀て和歌十首を詠じ又吉美妙立寺に入り暗峰を望て亦歌を詠ず（其歌に云く横雲のひくまの里を隔て來て又たぐひなき不二の嶺）と其の平生詠ずる處の和歌雅趣多しといふ（野史）

アスカ中 マサヨ 飛鳥井雅世 參議藤原雅經の後にして累世和歌を以て名あり初め左兵衛少將從二位に叙せられ後ち權中納言正二位に至る永享四年將軍義教に謁ひて富士峰に遊覽し國府に到りしとき和歌を詠進せり（其歌に云くふじのねの山とし高きよはひをも立まちにても今契らむ）後ち勅を奉じて新續古今和歌集を撰む而して其の集には南朝公卿の和歌を省き專ら後鳥羽天皇及右大臣花山院長親、權大納言木造持康の和歌を記せしといふ嘉吉二年剃髮して祐雅と法名す（野史）

アスケ シゲノブ 足助重信 三郎太郎と稱す重範の族にして世〻三河に住す新田義貞の義擧に加り元弘三年五月二十二日北條高時追討の時鎌倉に於て一族郷之房賢尊横山次郎重頼と共に戰死す（太平記）

アスケ シゲノリ 足助重範 鎭守府將軍源頼政の後なり三郎と稱す五世の祖重秀始めて參河足助に居り足助冠者と稱す重範射を善くし鎧織後政と竝びに勇敢を以て聞ゆ後醍醐帝北條高時を討んとす重範後政と密旨を奉じて此の事に預る事漏る車駕移て笠置に幸す北條伸時同時益兵を遣して行營を犯す重範門樅

に登りて呼びて曰く先鋒は美濃尾張の兵に非ずや足助重範飮みて聖旨を奉じて此の門を守る本城は車駕の御する所なり六波羅殿必ず親ら詣るならん吾大和の工人に命じて爲に一二箭鏃を備ふ請ふ諸君と之を試みんと乃ち一矢を發して荒尾行忠を斃す其弟彌五郎身を以て其の屍を蔽ひ呼びて曰く君が手は聞く所に及ばず請ふ再び之を射よと重範以爲らく彼は重鎧を頼むと乃ち其の兜鍪を射る顙を貫て之を殪す山田重綱馬を躍らして鋒に迫る重範又射て之を卻く賊兵更に楯を擁し肉薄して進む城兵皆殊死して戰ふ會ゝ奈良般若寺の僧本性事を以て行在に至る本性膂力あり鉅石數十を投ず賊兵魄を褫はれ數日敢て近づかず城陷るに及んで重範擒に就き終に京師に殺さる明治二十四年七月正四位を追贈せらる

アスハ　タダトシ　足羽忠俊　醫者なり永延中左近衛馬醫師となる子千平治安中典藥屬と爲る(皇國名醫傳前編)

アスハ　チヒラ　足羽千平　治安中の醫なり典藥屬と爲る(皇國名醫傳前編)

アスヰ　蛙水　柴田家の臣なり俳諧を溝口素丸に學ぶ氏は柴田滑濱庵と號す(俳諧人物便覽)

アセイ　阿淸　高僧なり百濟氏、備中の人、常に苦行を行ひ聖迹を巡禮す傳へ言ふ巡禮中偶ゝ病に罹りて死し二日を經て蘇生し人に語りて曰く我死する時一の處に至る殿閣莊嚴恰も官府の如し庭上數千人を集めて罪狀を決す我之を見て身慄する時に比丘あり錫杖を持し二童子を携へて來り文牒を以て官に授けて曰く此は阿淸の行業記なり乞ふ詳覽あらんことをと官閱し畢り曰く誠に記する所の如くんば宜しく放赦すべしと語り了りて比丘に敬禮す我乃ち童子に問ふて曰く此比丘誰人とす童子曰く地藏菩薩なりと遂に欠伸して甦むと聞くもの皆嗟嘆す(元亨釋書東國高僧傳)

アゼクラ　ロクエモン　支倉六右衛門「ハセクラツネナガ」

アゼタ　バンソン　畔田伴存「クロダバンソン」

アソ　コレズミ　阿蘇惟澄　惟國の第三子にして肥後の人なり惟澄の先實に神八井耳命の子健磐龍命(日本紀に阿蘇津彥命に作る)より出づ神武天皇の七十六年二月癸卯朔健磐龍命阿蘇に封ぜられ其の子健嵬玉命始めて阿蘇國造と爲り其の後ち姓阿蘇氏を賜はり裔孫惟人景行天皇の朝に命を受けて阿蘇神社を造り之れが祭祀を掌り相傳へて惟泰に至る惟泰、惟次を生み惟次、惟義を生み惟義、惟景を生み惟景、惟助を生み惟助、惟國を生む而して惟國は即ち惟澄の父なり建武三年二月二兄惟道、惟成足利尊氏と多々良濱に戰ひて之れに死す惟澄二兄の尸を奉じて矢部城に歸る鞍岡の戰に惟澄創を被むり筑前有智山、肥後唐河の戰皆な力を竭して遂に南郷城を拔く而して國人離散す延元二年惟澄僅に五十餘人を率ゐて砥用、小池、甲佐、堅志田を陷れ豐田莊に入りて遂に土寇を卻く是歲惟澄少貳賴尙饗庭小太郞入道等と山崎原に戰ひ四月一色少輔入道と大塚原に戰ひて一色右馬助入道等を獲六月矢部山を攻めて越前守賴顯の兵を逐ひ數百人を獲て南郷城に入り坂梨太郞入道宗嘉及び其の子雅長等を獲たり七月津守城を拔き三創を蒙むる而して三條少將を援けて一色水垂入道と守富莊に戰ひて利あらず士卒多く死傷す惟澄又菊地武重と與に合志城を攻む三年十月少貳賴尙兵士數千を率ゐて甲佐城を攻む惟澄僅に三十餘騎を率ゐて城外に戰ひ又南郷城を陷れて數人を生獲し屢ゝ仁木義長と接戰し城を小國郷玖珠日田に拂ふ興國元年冬市下八郞入道道惠等反して南郷城に據る惟澄赴きて之を攻め終に其の城を拔き道惠等六十餘人を獲たり五年惟澄惟時の反を討ちて矢部城を取り五月田日向城を取る惟澄軍に從ふ大小合せて百回斬獲數千人の多きに至り身七創を蒙むるも尙屈せず以て忠を南朝に竭し子孫世世相傳ふと云ふ(野史)

アソ　コレタケ　阿蘇惟武　阿蘇明神の大宮司たり父惟澄の遺訓を守り忠を南帝に盡し菊地氏と共に各地に足利勢と戰ふ天授二年八月廿一日遂に戰死す(阿蘇系譜)

アソ　コレトヨ　阿蘇惟豐　肥後の人にして阿蘇神社の大宮司なり其先惟澄と云へる者あり南北朝の時菊地武重と共に少貳賴尙等と戰て功あり其の後世惟憲に至る惟憲實に惟長及び惟豐を生む惟長嫡子たるを以て繼て立ち大宮司と爲る永正二年十二月菊地氏の臣連署して菊地氏を繼かんとを請ふ惟長神主職を惟豐に讓り出て、菊地氏を承ぎ名を武經と改ため惟豐兄の後を繼ぎて大宮司となる而して武經の子惟前大宮司の食邑を併さんと欲し十年三月急に惟豐を益城郡堅志田城に襲ふ事急に起るを以て惟豐支へずして日向の鞍岡山に奔り其の所領の地を奪はる是より惟豐日夜恢復を思ひて已まず終に甲斐親宣に依賴す親宣乃ち兵を起して阿蘇益城の諸城主と謀を通して堅志田城を拔き惟豐其の職を復す天文五年冬從五位下に叙せられ正四位下を歷て天正三年九月禁闕造營の功を以て從三位に陞る時に惟豐矢部陣内に住して濱屋形と稱し阿蘇、益城の二郡及び託麻郡健軍、宇土郡郡浦、飽田郡新開、正實、蠣江谷町、玉名郡日置、薩摩國伊豆、筑後國隱岐、豐後國井田、太宰、蓼野、山田、家中、坂田、日向國鞍岡等を領し併せて三十萬石を食むと云ふ後ち從二位に進み十三年を以て薨す二子あり惟光惟善と曰ふ(野史)

アソ　コレマサ　阿蘇惟將　惟豐の族人なり(或は云く惟豐の子なりと)甲斐宗運の女婿隈府盛昌と云へるもの宗運を憾みて竊に島津氏に通す惟將大に怒り宗運を以て隊長と爲し隈府城を攻めしむ盛昌捍禦して挽まず是に於て惟將天文十八年三月を以て早川吉秀、渡邊吉久等の兵三百をして吉野山、茶臼山、一谷に陣せしめ又宗運の女婿伊豆野山城守をして兵を率ゐて會戰せしむ巳にして敵兵と相接し宗運奮戰力鬪して盛昌の族を擧げて之を殲す(野史)

アソ　コレミツ　阿蘇惟光　惟豐の長子なり天正十二年父惟豐の死するや惟光幼にして母に從へり十五年夏六月惟光母に擁せられて熊本城に入り佐々成政に謁る成政之を憐みて城中に駐らしめ阿蘇氏の部下坂梨孫太郞及び西源兵衞を以て之に傅たらしむ十月舊臣猿渡丹波謀を成政に通して土寇を擊ち之を平らぐ成政其の志を嘉みし爲めに豐臣秀吉に請ひて惟光の職を復せしむ尋て成政自殺し加藤淸正及び小西行長肥後に割封せらるゝに及び惟光淸正に謁る後ち征明の師起るに及び人あり讒を秀吉に構へて曰く惟光實に土寇の魁首たり彼れの先世肥後を領するを以て衆皆心を歸せり恐くは惟光を戮せざれば寇亂殄たずと是に於て秀吉人に命じ文祿二年八月十八日を以て惟光を飽田郡阿彌陀

守に殺す惟光時に歲十三なり後ち淸正征明の陣より歸り其の死を憐れみ措かず因りて惟光の弟惟善をして其の職に復さしめんと欲す秀吉の死を以て果さず遂に自ら其封土を割き散する所の社人を招聚し僅に阿蘇の祭祀を復す時に慶長六年也(野史)

アソノミヤ　阿蘇宮　後醍醐帝の皇子なり母は權大納言三位局爲道朝臣の女

アダカアシツヒメ　吾田鹿葦津媛「コノハナサクヤヒメ」

アタク　阿澤　江戶の俳人なり東燕志の門人東氏初め珠翠菴と號し後ち蝸牛菴と改む(俳諧人物便覽)

アタケ　フユヤス　安宅冬康　三好長慶の一族なり初の名は神太郞、攝津守と稱し岸和田城に居り由良須本岩屋等の城を併せ保つ歌を嗜み書を能くす一舟軒と稱す永祿七年長慶病に臥す松永久秀讒するに冬康の謀反を以てす五月久秀相議して刺客を遣して冬康を芥川城に殺さしむ冬康慈仁にして義あり常に長慶が國務を廢して衰へたるを嘆き一日金鐘兒を籠にし長慶に贈りて曰く夏虫は弱くもろしと雖も善く畜ふれば冬月に至る迄生を保つを得況や人に於てをやと常に書を讀み又軍旅を廢せず其の述懷の歌に曰く古へを記せる文の跡もうし左らずば降る世とも知らじなと子信康淸康康重あり信康字は甚太郞、須本城に居る永祿九年松永の黨が布曳瀧山城に攻む元龜元年八月信康矣岸長綠と共に福島城に據り織田信長と對抗し後ち淡路に歸り病死す淸康或は云冬康の猶子なり河內守と稱す由良城に住す天正八年池田之助來り攻む淸康降を乞ひて城を致す之助淸康を携へて安土に往く信長之に舊領を予ふ須本城に在て病死す康重三河守と稱し族を三好と稱す剃髮して笑二と號す阿州小出城に居り天正九年八月界浦に戰死す(野史)

アタゴ　ババ　愛宕婆　女俠なり嘗て洛東愛宕山祠の傍らに寡居す故に人呼てて愛宕嫗と曰ふ其形儇然として齒頰る高し任俠を以て聞ゆ人の僞を挾み詐を用ふるものを摘發することは神の如し故に里閭に爭擾あることに必ず嫗の處決を仰く大難巨件指顧して決す故に山豪市儈博徒より以て馬鞅船梢米脚魚丁に至るまで咸な推して盟主となさざるなし嘗て二偷あり夜嫗の室に入りて衣笥を搜收す嫗驚き覺めて誰何す偷曰く深夜室に入る胡んぞ誰何を用ん我は豪客なりと後ち其愛宕嫗なるを知り愕然相視て曰く吾が大嫗なりと乃ち頓首罪を謝す嫗曰く明日を待て處分するあらんと遂に身を轉じて寐ぬ二偷枕上に伏し涕泣哀を求む嫗颺言して曰く聒し我が眠を妨る勿れと二偷愈ゝ懼る黎明嫗起き乃ち辭色を降して之を遣る其の惡漢輩に畏れらるゝこと類れ此の如し(野史)

アダチ　アンリフ　足立安立　浪華の醫者なり通稱伊介樂菴と號す後藤艮山の門に入りて古醫法を修して行なはる明和年中に歿す(鑒定便覽)

アダチ　イツケイ　足立一薫　江戶の俳人なり武州多摩郡大谷村の人くの木菴又蚌蓬居と號す通稱は平左衛門天保中の人(萬家人名錄)

アダチ　ウンサイ　安達雲齋　石州流の茶道を淸水道竿に學びて能くせり(茶人系傳全集)

アダチ　カゲモリ　安達景盛　盛長の長子なり彌九郞と稱す源賴家に仕へて鎌倉に居り父の故を以て時に重んぜらる嘗て姿を京師に求む姿色あり賴家屢ゝ書を遣て之を挑む從はず會ゝ參河の賊室平重廣群盜を招集して縱まゝに剽竊を行ふ賴家景盛に命じて之を討たしむ景盛辭に託して命を辭す賴家聽かず責めて之を遣り乃ち人を遣はして其の姿を奪ふ景盛參河に往くも賊旣に遁る獲ずして歸る或人譖して曰く景盛姿の故を以て屢ゝ怨言を出すと賴家怒りて兵を遣して之を誅せんとす政子素と其の寃を知り營救甚はだ力む賴家已むを得ずして之を許るす建永中右衞門尉に任ぜらる建保六年出羽介と爲り秋田城を管し從五位下に叙せらる時人謂ふ昌泰以來數百年間此官に居る者は唯々平繁盛一人のみ是に至て景盛之を得る實に榮選なりと明年實朝害に遭ふ景盛悲慨して髮を斷ち法名覺地と稱し大蓮房と稱す高野山に住す世呼て高野入道と曰ふ常に鎌倉に往來し處分ある每に多く諮詢せらる承久の難に北條時房に從ひ京師を犯して戰功あり初め景盛の女北條時氏に適して經時時賴を生む時賴政を執るに及んで最も尊禮せらる時に三浦の族貫盛なり景盛心に悅ばず子孫に戒めて曰く三浦氏の權勢無比なり汝が輩不武恐らくは他日與に抗する能はざらん宜しく今に及んで之が計を爲すべしと會ゝ匿名書あり曰く三浦の族變を圖ると鎌倉騷擾し人情危疑す景盛心獨り喜び從ひて之を構陷し遂に三浦氏を滅ぼす寶治二年病みて高野山に卒す子義景(大日本史)

アダチ　クラキチ　安達倉吉　陸軍步兵中尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團步兵第卅二聯隊附として從軍し卅八年三月七日淸國盛京省寧官屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる。

アダチ　クワクロ　安達郭露　奧州仙臺の俳人なり郭露は其の號、一に陸友庵の號あり與吉と稱す弘化中の人其俳歌に曰く「船おろす汐の光りや夏の月」(俳諧海內人名錄)

アダチ　セイカ　安達淸河　江戶の儒者なり最詩に長ず名は修字は文仲淸河は其の號初の名は干慶字は吉甫下野の人家世々修驗者たり牧野村道觀の祀事を司る淸河幼にして穎敏十四歲の時同國千本里玉泉觀の司祀死して嗣なし其の族人淸河に請ひて祀事を司らしむ淸河因て玉泉院法印と號して南部の神道を研究す然れども巫覡と伍を爲すを耻づ是の時に當りて江戶に服部南郭あり長門に山縣周南あり各ゝ詩文を以て一世を震撼す南郭門下の士に鵜士寧、石仲綠詩名最も顯る淸河心私に之を慕ひ舊作の詩若干を抄錄して點竄を士寧に乞ふ士寧深く之を奇賞し以て南郭に示す南郭亦之を奇とす是に於て淸河江戶に遊びて士寧に謁し其の家に寓して業を南郭に受くること八年遂に法印の職に居るを厭ひ姪俊明をして已に代りて祀事を掌らしめ自ら諸國に遊びて居處を定めず年三十八遂に家を挈けて江戶に移る儒居徒に授く其の居市廛に近きを以て市隱堂と曰ふ中年以後南郭門下の諸士凋喪殆と盡く淸河巋然獨り存して朝野の望を負ふ來りて敎を受くるもの絕えず寬政四年二月六日歿す年六十七淸河家を治むる極めて節儉然れども南郭の忌日に當れば香花の資料を菩提院に納めまた社中諸友を招ぎ芳醑饗應各人をして歡を竭さしむ之を爲すこと二十年終始一日の如しと云ふ著はす所の書市隱艸堂集初篇、同二篇、同遺編、妄談錄、孟浪之言、詩準、詩典、向風艸初編、同後編、相中紀

行、東毛紀行、大東地名考あり(近世叢書、名家全書、近代名家著述目錄、續諸家人物志)

アダチ セイセイ 足立正聲 鳥取藩士足立中和の次男天保十二年九月廿日生る夙に勤王論を主唱し十七歳の時同藩佐幕黨の爲め捕へられて獄に繫がれしが一夜同志十八名と獄を破り長州に走り大村益次郎の塾に入る明治元年京都彈正臺列事に任ぜらるる曾て薩藩士蠡某大村益次郎を暗殺す正聲其薩藩の使嗾に出づるを知り蠡某を捕へ之を斬らんとす長官海江田信義は薩人なるを以て蠡某を救はんと欲し其無罪を太政官に申述せん爲め東京に赴く正聲其不在に乘じ蠡を四條河原に斬る正聲は爲めに官を免ぜられ暫く獄に下さる出獄後縣令宮內省少書記官等を歷任せり性豪放なるを以て昇進極めて遲く記錄局書記官等を歷任せり性豪放なるを以て昇進極めて遲く主璽官諸陵頭に終る然れども維新の勳功により三十九年十二月男爵を授けられ華族に列せらる四十年四月十九日病を以て逝く年六十七正聲の號は老狸と稱し輪奮刻陶磁器製の別なく遍れく理を集めて其數夥多に上り人をして自由に之を觀覽せしむ巢鴨に萬壑樓と稱する別邸あり何人を問はず宿を乞へば夕且二食一泊して僅かに二十五錢を徵するのみ但一其宿帳に和歌詠發句何れか一を記せざる可からずと定めたり又陰陽の石を愛し諸國より汎く蒐めて庭前に置けり和漢の學に通じ殊に和歌は其最長ずる所なり其作多けれども未だ世に知られず蓋し近代の奇人なり。

アダチ タカカゲ 安達高景 安達義景の後なり世々鎌倉幕府に仕へ秋田城介に除せられ讃岐權守となる後醍醐帝の隱岐に幸するや高景北條高時の使となりて京師に入り光嚴帝を立つ(大日本史)

アダチ チャウシュン 足立長儁 產醫なり幕府旗下の士淺野氏の臣井上正廣の子にして名は世茂無運と號す長儁幼時より醫を好み薩藩の醫員足立梅庵に就きて漢醫方を學ぶ時に梅庵其の才を奇とし遂に已れの姓を冒さしむ長儁後ち多紀安長に從ひて學び既にして學術共に進み藝山侯に聘せられて侍醫と爲る長儁又吉田長叔に從ひて蘭學を修め專ら其の翻譯に從事し天保二年醫方研幾若干卷を撰す長儁當時未だ產科の闡醫なきを憂ひ自ら任じて其の業を修め以て一家を開く果して業大に行はる七年十二月廿六日を以て殺す時に識六十一長儁子なく大垣藩の醫江藤養樹の第三子榮を養ひて嗣と爲し又他の一子を養ひて井上氏の後を繼ぐ(大日本史 廣益俗說辨殘編)

アダチ トクベイ 安達德兵衞 陸軍歩兵少尉なり明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ後備歩兵第二十聯隊附として出征し同年九月二十日遼陽附近にて病に罹り歸國後自宅療養中死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる。

アダチ ビケン 足立美堅 陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ後備歩兵第一五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從ひ同年十一月二十八日二〇三高地戰鬪の際負傷大東滿第一師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる。

アダチ フミマル 足立文丸 陸軍歩兵少尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第九聯隊附として出征し三十八年三月二日清國盛京省北臺子附近に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる。

アダチ ミツヨシ 足立光吉 陸軍三等獸醫なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け第十師團輜重兵第十大隊附として出征し卅八年七月七日清國盛京省小台子にて病に罹り開原兵站病院に於て療養中八月十五日死去。

アダチ モリナガ 安達盛長 頼朝に仕へ藤九郎と稱す中納言藤原山蔭の後、祖國重下野掾出羽介となる、父雄廣小野田三郎と稱す源頼朝蛭島に在るや盛長往來給事す其の兵を起して東國の將士を募るや及びて盛長を遣はして檄を傳へしむ盛長日歸あり至る所曉々に願逆を以てす聞くもの感動して響の如く之に應す時に平兼隆と云ふものあり清盛の族人にして山木に據る勢を恃み威を逞うす盛長藤原邦道を誘めて韓朝に侍せしむ邦道兼隆の動靜を偵伺し遂に之を襲殺する橋山に戰ひ敗れて杉山に逃るゝや盛長を得たり頼朝石橋山に戰ひ敗れて杉山に逃るゝや盛長等數人艱辛を涉歷して僅かに免かれしむるを得頼朝尊で安房に赴く散兵來り集る軍勢稍々振ふ東國の將士饋するもの日に來り還りて相携に至り將士の功を論ず盛長之に與かる頼朝志を得るに及びて益々親寵せらる後

少尉なり明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ後備歩兵第二十聯隊附として出征し同年九月二十日遼陽附近にて病に罹り歸國後自宅療養中死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる。

アダチ トクベイ 安達德兵衞 陸軍歩兵少尉なり明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ後備歩兵第二十聯隊附として出征し同年九月二十日遼陽附近にて病に罹り歸國後自宅療養中死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる。

アダチ ビケン 足立美堅 陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ後備歩兵第一五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從ひ同年十一月二十八日二〇三高地戰鬪の際負傷大東滿第一師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる。

アダチ フミマル 足立文丸 陸軍歩兵少尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第九聯隊附として出征し三十八年三月二日清國盛京省北臺子附近に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる。

アダチ ミツヨシ 足立光吉 陸軍三等獸醫なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け第十師團輜重兵第十大隊附として出征し卅八年七月七日清國盛京省小台子にて病に罹り開原兵站病院に於て療養中八月十五日死去。

アダチ モリナガ 安達盛長 頼朝に仕へ藤九郎と稱す中納言藤原山蔭の後、祖國重下野掾出羽介となる、父雄廣小野田三郎と稱す源頼朝蛭島に在るや盛長往來給事す其の兵を起して東國の將士を募るや及びて盛長を遣はして檄を傳へしむ盛長日歸あり至る所曉々に願逆を以てす聞くもの感動して響の如く之に應す時に平兼隆と云ふものあり清盛の族人にして山木に據る勢を恃み威を逞うす盛長藤原邦道を誘めて韓朝に侍せしむ邦道兼隆の動靜を偵伺し遂に之を襲殺する橋山に戰ひ敗れて杉山に逃るゝや盛長を得たり頼朝石橋山に戰ひ敗れて杉山に逃るゝや盛長等數人艱辛を涉歷して僅かに免かれしむるを得頼朝尊で安房に赴く散兵來り集る軍勢稍々振ふ東國の將士饋するもの日に來り還りて相携に至り將士の功を論ず盛長之に與かる頼朝志を得るに及びて益々親寵せらる後

アダチ ヤスモリ 安達泰盛 義景の第三子なり世々鎌倉府に仕ふ父死するに及びて秋田城介を襲ひ評定衆と爲る騎を善くするを以て世に名あり弘安中陸奥守を兼ぬ、秋田城介を解き子宗景を以て之に代らしめんと請ふを許さず尋で祝髮して名を覺眞と改む泰盛素より北條氏と連姻す女又時宗に適き真時を生む真時執權と爲るに及びて勢を恃み肆横真時の寧左衞門尉平頼綱亦驕縱にして頗る威福を弄し泰盛と相軋る而して子宗景狂躁奢侈父より甚だし自ら謂ふ曾祖景盛實は頼朝の子なりと遂に姓を源氏と改む頼綱因て真時に說て曰く宗景私に觀覦の心を懷く姓を改むるの一事最も掩ふ可らずと真時之を信じて遂に泰盛父子を殺し其の族を滅す初め三浦泰村の殺さるゝや(安達景盛の傳を見るべし)人皆之を寃なりとす而れども敢て明言せず此に至て泰盛等又讒に遭ひて死す後ち頼綱も亦た亂を起さんことを謀て誅せらる人以て應報と爲す(大日本史)

アダチ ヨシカゲ 安達義景 景盛の子なり世々鎌倉府に仕ふ嘉禎中父の職を襲で秋田城介と爲り從五位下に叙せられ評定衆と爲る四條帝崩じて嗣なし北條泰時義景を京師に遣して後嵯峨帝を立つ建長中病を以て薙髮し願智と法名し尋で卒す子頼景、景村、泰盛、時盛、重盛、顯盛、長景、時景あり皆な時に顯はる(大日本史)

アダチ ヨシユキ 安達喜之 泉州堺の人弘化三年金魚青草一卷を作る(岡氏筆記)

アダチ ライセン 足立來川 江戸の俳人なり倫里の男水軒と號す(俳林小傳)

アダチ リンリ 足立倫里 江戸の俳人なり穗葉軒と號す無倫か門人なり(俳林小傳)

アダツヒメ 吾田津姬「コノハナサクヤヒメ」

アチキシ 阿知吉師 (阿知は名にして吉師は族名なり)阿直岐史の祖にして百濟の人なり應神天皇十五年秋八月百濟王この人を遣し良馬一匹を貢つる即輕坂の上の厩に養ひ阿知をして飼ふ事を掌どらしむ阿知またよく經典を讀め太子菟道稚郎子これを師とし漢籍を學ぶ或は阿直岐と書するは誤なり(日本紀、姓氏錄、古事記)

アヂスキ タカヒコネノ カミ 味鋤高彥根神 (下照姬の傳を見よ)下照姬の兄なり迦毛大神と祀る(古事記)

アチノ オミ 阿知使王 漢の靈帝の曾孫なり漢魏に歸るに及び神牛の敎に因り出て帶方に往き實帶端を得其象宮城に歸り乃ち國色を建て其民庶を保つ後ち父兄に告げて曰く吾聞く東國に聖主ありと往て之に歸せん若し久しく此に居らば徒らに覆滅を取んのみと子都加使主女弟迂興德及び七姓十七縣人口を率ひて歸化す實に應神帝の二十年なり詔して高市郡檜前邑を賜ひ因て居す奏して曰く帶方の男女皆才藝あり近ろ百濟高麗の間に寓して心懷猶豫し未だ其去就を知らず請ふ天恩を垂れ使を遣して之を召さんことを帝勅して八腹氏をして之を召さしめ以て公民と爲す諸國の漢氏は其後なり三十七年詔を奉じ都加と吳に往き縫工を求めんとして先づ高麗に至り郡導を請ふ高麗王久禮沈、久禮志二人をして之を導いて吳に抵らしむ兄媛、弟媛、吳織、穴織の四女工を得て四十一年筑紫に歸到す胸形大神之を得んと欲す阿知、兄媛を留めて去る攝津武庫に到る會々帝崩ずるに因て三女を仁德帝に獻ず履仲帝の皇太子たるや住吉仲皇子叛す阿知平群の木兎と與に變を告げ皇太子を扶けて馬に上せて走る皇太子位に即く皇て厩人となし食邑を賜ふ(大日本史)

アチヤウアン ザウホ 蛙聽菴双甫「アリザハサウホ」

アヂヨカ タマキ 咏岡玉喜 陸軍歩兵大尉なり新潟縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第貳師團歩兵第三十聯隊附として從軍中卅八年三月十四日清國盛京省蘇牙屯東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる。

アツキザカノ シチホンヤリ 赤豆坂七本鎗 織田信光、同信房、佐々政次、同勝豐、下方匡範、岡田重能、中野忠則の七人なり

アツクラ 篤倉 藤原姓薩摩波平の刀匠にして永祿年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

アツコ ナイシンワウ 篤子內親王 堀河帝の中宮なり後三條帝の第四女、陽明門院養ひて子と爲す治曆四年內親王と爲る延久元年三品に叙す五年賀茂齋宮と爲る後三條帝崩し職を罷む承曆三年三宮に准す陽明門院の封邑千戶を給す寬治五年帝納れて女御と爲し七年二月立て中宮と爲す關白師實を以て假父とす時に年三十四帝より長ずる十九歲長治元年堀河院に遷る嘉承二年薨髮して尼と爲る永久二年十月堀河院に崩す年五十五中宮駕く佛法を信じ同彌陀經を誦する四十餘年崩するに至るまで意らず每日法華經を供養し證菩提院を建つ(大日本史)

アツザネ シンワウ 敦實親王 宇多天皇第八の皇子母は皇太后胤子內大臣藤原高藤の女一品式部卿たり六條宮一に八條宮と號す字多源氏の元祖なり康保四年三月二日(或は曰く三年二月二日)薨ず年七十五仁和寺宮と稱す法名覺信(又燒眞に作る)(紹運錄)

アツタ ダイグウジ 熱田大宮司季兼 雲藏藤原曰勢腐の第十三子中納言貞嗣より六代從四位上大學頭實範の次子なり本名は季風河國に住し四郎大夫と號す尾張國の目代に補す熱田大宮司の元祖たり康和三年十月七日赴任中に卒す年五十八(家譜)

アツタ ダイグウジ 熱田大宮司秀範 季兼の嫡子なり從四位下に叙す塾田大宮司當流相續の初め也久寧二年十二月二日卒す年六十六季範の女は下野守義朝の母なるを以て此一族大に威權を得て子孫六波羅評定衆數人を出す(家譜)

アツチコウ 安土公「オタノブナガ」

アツノブ 淳信「カノショウリン」

アツノリ シンワウ 敦儀親王 三條天皇第二の皇子なり母は皇后宮城子冥丸八年十月五日式部卿に任す天喜二年七月廿一日薨ず五十八歲(榮花物語)

アヅ ヒイラツメ 安都扉娘子 大實中和歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者覆歷)

アツフサ 敦房 又鋪房に作る筑前金崎の人にして古刀の鍛工なり或は天文頃の人と云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

アヅマ クニタイフ 吾妻國太夫 三綱家なり二代目常磐津文字大夫の門下にして始め大和太夫と稱し天明中兼太夫と更ため後ち師と絕ちて今の稱に改む遂に一家を成す後ち續く者なく一代にして絕ゆ(聲曲類纂)

アヅマ スケミツ 吾妻助光 實朝の臣なり膂力あり且射を善くす嘗て罪を得て將に罰せられんとす衆其の射を賞して宥を求む實朝乃召して館上の蓍鷺を射さしむ助光射て之を落す矢鏃の身に中らず唯々羽を縫ふのみ實朝怪て之れを問ふ答て曰く身に當て血を流さば館屋を穢さんを恐る故に斯くの如くするのみと遂に免さる(本朝武功正傳)

アツママロ アツマロ アツミ 厚麿「トンダアツママロ」 春滿「カダアヅママロ」

カツヨシ 渥美勝吉 家康の臣なり源五郎と稱す姓は藤原氏天正三年長篠合戰の時十九歲首一を獲て統を破る四年武田勝頼遠州橫須賀城を拔んとして沖津を發す家康濱松より急に出馬總社山に陣す勝頼退て勝吉及び鷺山專入郎淺井九左衞門拓植又十郎等之を逐ふ勝吉又十郎各首を得たり家康直に革羽繼を脫ぎて之を賞す六年十月八日高天神の戰に康高首三を得たり其一は即ち勝吉の獲る所なり後ち高天神城下旅賀屋に於て城中より脫出の敵一人の首を得たり又下林屋に於て武田勝頼の兵一人夜半密かに城中に入らんとす勝吉之を殺して視るに頸に勝頼自刎の文書あるけたり即ち之を家康に獻ず褒として百俵を賜ふ七年九月十三日城兵三人出て甲州に赴んとす勝吉鎗を把て之を追ふ敵之を見て退く遂に一人を殺す甲州の兵城下中村に屯し城中を窺はんとす因て通路に伏兵を設けて之を却けんとす勝吉命を奉して其將となり自ら首一を得たり其の他首を獲ること無數世に頸取源五郎と云ふ某年某月日死す子正勝其の後を繼ぐ(諸士略傳、本朝武功

正傳）

アツミ　ケイエン　渥見契縁　眞宗大谷派本願寺耆宿なり尾張の人齋藤拙堂に從ひ漢學を修め佛學は伏見の單章院に受け造詣する所深く後ち鶉山の眞宗末寺の住職となり其後加賀の本覺寺に轉住し明治初年本山に於て末寺の僧侶を集めて事務を取扱はしめし際議事となりて出仕し在職十五年に及び一時解職となりしも十六年再び出仕して參務となり二十二年の頃執事阿部惠行示寂の後を受けて執事となる爾來石川舜臺派との軋轢を生し石川派は別に白川黨なる一派を作りて極力渥見派を排斥し三十年石川舜臺遂に執事となるや契縁は退隱せり此間堅忍以て本山の財政整理に鞅掌したり其後三十五年更に本山顧問となり三十六年顧問の廢せらるゝやなほ耆宿として本山にあり三十九年四月十六日東京に於て寂滅す本山にては病危篤の報に接し積年の功勞を想ひ破格の例を以て連枝と同じく權大僧正に補したり年六十八

アツミ　ゲミヤウブ　安曇外命婦　天平寶龜の間和歌に工みなるを以て其の名を知らる詠歌は載せて萬葉集其の他の諸書に在り（萬葉集作者履歷）

アツミ　ゴラウ　安積五郎　慷慨家なり名は武貞本姓を飯田と曰ふ東海と號す江戸の人なり父を飯田忠藏と曰ふ下總銚子の人忠藏江戸に來り安積光角に就きて易學觀相を修め其の高弟たり天保七年光角死す因て其の業を嗣ぎ安積光德と稱し後光角と改む居を日本橋檜物町の三島屋敷にトし易學觀相を以て名あり五郎幼にして痘瘡を病み太だ危し父北辰に祈りて其命全きを得たり然れども遂に右眼を失ふ十一歲のころ父五郎を京橋の穀物商に託す五郎商業を習ふに意なし幾くもなくして家に歸る是より父に從て書を讀み兼て易學觀相を學び稍長じて文才發達す又擊劍を父に學ぶ父の門下に土屋政暘なるものあり尼崎藩の士藩命を以て易を學ぶ五郎政暘に就き太平記綱目を借覽し是より深く楠公の人となりを景慕す嘗て父に隨て銚子に行く路を筑波山に取り山に登りて東海の渺茫たるを下瞰す因て東海と號す父常に五郎に謂て曰く賣卜者に學問なし少く學ばゝ假令論客の來て難詰するあるも毫も恐るゝに足らず十五歲のころ幕府の醫官鹽田順庵に從ひ其學頗に進む五郎の眉毛中斷す一日父順庵に謂て曰く眉毛の中斷する者は名を成さずと順庵曰く否示すに新井白石朝鮮人と筆談するの圖を以てす父白石の眉毛の中斷するを觀て大に悅ぶ蓋し眉毛の中斷する者名を成さゝるものなきを以てなり後東條一堂に從ひ其の塾に在りて勵精研鑽し學力大に進む塾の西隣に千葉某あり擊劍を以て名あり五郎講學の餘就て劍を學び筋骨を鍛錬す五郎常に漢の王陵を稱譽し父は周勃を稱し仍て父の意に適はず父政暘に謂て曰く五郎の學問動もすれば傍道に馳す之を訓誨せんと欲す請ふ倶に一言を副へよと政暘諾す是に於て一日五郎を招き周勃の王陵に勝る所以を說き史記を引證して之を諭す言辭懇到五郎服せず大に其の然らざるを辯じ互に論難す父怒て曰く兒の志斯の如くんば前途其れ憂ふべし今より後我子にあらずと遂に之を逐ふ五郎塾に歸り此の事を以て同學に告ぐ同學交ゝ之を諭す五郎大に悔ゆ時に政暘の來り訪ふあり五郎悔悟の情を陳べ之を介して父に謝し事解くを得たり既にして五郎塾頭となる父の曰く一堂の家東北に庫あり家相に於て塾頭たる者に害ありと此の事を以て塾を退かしむ然れども五郎家に在らず或は塾に寓し或は學友の家に居る嘉永五年十二月五日父病を以て死す政暘賻るに米二表と金五兩を以てし兼て一時の糊口に資す五郎易を以て家を繼ぐの意なし易學觀相の書を擧て之を政暘に傳ふ政暘贈るに肥前忠廣の劍二尺二寸許なる者一口を以てす五郎大に喜ぶ是れ眞に劍を購はんと欲するの意ありしを知るを以てなり五郎素と繼母と和せず父の死するを以て家を賣り其金を繼母に與へて之と別る後繼母再嫁す吉原の引手茶屋に大和屋久兵衞なる者あり安積氏の舊知なり五郎依て戸籍を大和屋に移す久兵衞の家花柳の中にあり頗る雜沓す五郎講學に妨あるを以て常に此に居るを厭ひ或は去て他に寓し是より後常住を定めず五郎屢ゝ政暘を訪ひ易學觀相の父が口授の漏れたるを傳へ且曰く今より後志の易學に篤き者あらば之をして安積の業を繼がしめよと仍て此の事を託す久兵衞の家に在るや毎に讀書に從事し夜に入り店を鎖せば劍を揮ひ體を練る衆悚恐怖す後木劍を購ひて之に代ふ一日刀を拭ひ久兵衞の女に示して曰く是れ正宗の刀なり女曰く正宗の刀を有すれば發狂す宜く速に神に納むべしと五郎莞爾として之を給にす後江畑九郎と倶に下谷徒士町の組屋敷に塾を設けて漢學を授け塾頭となりて之を管理す其の江畑と同名なるを以て自ら長五郎と稱す安政六年五郎淸川八郎と同く駿河臺の旗下士某の家に寓す是年政暘を訪ひ閑話數刻將に歸らんとす曰く今より後久く音問を絕つべし必す之を以て意と爲す勿れと憮然として長別の意あり政暘怪みて其故を問ふ曰く將に漫遊の途に上らんとす政暘曰く漫遊歸期あり再會豈に有ざらんや敢て問ふ他事あるかと五郎曰く方今幕府政を失ふ將に終に京師に事あらんとす是の時に當て誰か幕府を佐くる者あらん然れども是れ素と秘事必ず漏洩すべからずと既に尊攘の志あり萬延元年庚申吉原災す久兵衞假宅を本所松井町に營み自から之を管し吉原の家に其女を居く五郎久兵衞の託を以て之が後見となる翌文久元年五月五郎將に上總に遊ばんとし久く厚誼を受くるを謝す女曰く一たび父に面して謝せよと仍て松井町の家を訪ひ久兵衞に謝して去る蓋し幕吏の蹤跡するを覺り淸川八郎の於玉ヶ池の家に潛伏するが爲なり幾くもなく幕吏來りて搜索甚だ嚴なり五郎の書類等悉く沒收せられ久兵衞等數ゝ糺訊を受け次て事漸く解く後去りて京師に行き文久三年八月終に中山忠光の大和の義擧に會し兵を率て善く戰ひ劍を揮りて捕に就く元治元年二月十八日京師の獄に斬らる享年卅三五郎狀貌雄偉氣象豪邁痘痕あり右眼を失す漢籍に深く擊劍を能くし孫子に通し謀を好む少にして楠公の人となりを慕ひ王室の式微を歎き夙に尊攘を唱ふ幕府の蹤跡を避け花柳の地に潛む數年毫も志を變ぜず終に國難に殉す後京都東山靈山に墳墓を修すと云ふ明治卅五年十一月從四位を贈る

アツミ　サン　渥味贊　陸軍步兵大尉なり北海道出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び第七師團步兵第二十七聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中同年十二月一日二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に敍せらる

アツミ　トモヨシ　渥美友吉　德川家康の家臣にして太郎兵衞と稱す豪勇を以て世に稱せらる姉川の戰に槍を揮ひて勇鬪す槍折る乃ち徒手敵を搏つこと數人なり（本朝武功正傳）

アヅミ　ミクニ　安曇三國　天平中の人なり武藏少目從五位下に至る和歌を善くして萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其第二十卷に在り（萬葉集作者履歷）

アツヤス　シンワウ　敦康親王　一條天皇第一の皇子母は藤原道隆の女皇后宮定子始め太宰帥となり後一品式部卿に任ず寬仁二年薨ず（紹運錄）

アツヨシ　シンワウ　敦慶親王　「タマヒカルミヤ」

アトベ　カツスケ　跡部勝資（穴山梅雪の傳を見よ）

アトベ　ヨシアキ　跡部良顯（初め良賢に作る）光海と號し重舒齋と號す幕府麾下の士なり年甫めて七歲其父親から大學一本を寫し以て之に授けて曰く此書を熟讀するに非れば即ち人と爲る能はずと是より常に之を懷にし日として讀まざるなし母も亦頗る書を知り敎誨して倦むことなし已にして神道學を澁川春海に學ぶ都翁の門良顯を以て上足と爲す中歲にして佐藤直方淺見安正三宅重固等に就き理學を講究して頗ぶる發明する所あり太極易數筆記を著はす又た榊原玄輔友部安崇と友とし善し良顯人と爲り方正一門生あり嘗て告けて曰く某好て劇場に遊ふと良顯曰く恐らくは人之を譏ゆるならん曰く然らず良顯日く何を以て其實なるを知る答へて曰く小子親ら之か場に見ると良顯愕然として色を作して曰く是れ汝先づ犯すなり何か以て人を責めんと即日之を絕つ良顯嘗て皇統正閏を論じて云ふ後醍醐帝南遷以來宜しく南を以て正統と爲すべし後龜山帝の禪讓に及んて皇統始めて一に歸す而して舊史北朝を以て正統と爲し或は南北並び稱する者は皆春秋の大義を犯す以て訓ゆ可らず獨り源准后の神皇正統記は南朝を以て正統と爲す卓見と謂ふ可し然れども其の意專ら南山の衰微を憤り足利氏の凶逆を惡むに出づ故に上世帝王の正閏に於けるは則ち論著する所なし亦た未だ盡さゞる所あるなりと因て南山編年錄を著はす晩に深く神道學を信じ安崇等と研尋講習して遂に其道の秘蘊を得儒佛を合して一致と爲す是にかて直方等皆之と絕つ享保十四年卒す年七十一と云ふ著す所神學發明、神代混沌草、神代講談書、神道喪祭家禮、中臣祓集記、十穗瑞寶秘傳、三穗神器集說、仝秘傳鈔、排佛說、夢寐說、古語說、古語拾遺示蒙、玉鉾道草、伊加保紀行、齒黑辨、南朝編年錄、國號傳、安坐傳、御鎭坐本紀重波草、正神邪神論、猿樂傳、御鎭坐傳記日輪草、心御柱和訓傳、日少宮傳坐死說、混沌傳考、三種神器傳來考、土金稽古五行辨書、夷大黑記、庚申待傳、龍靈傳、天文曆道鈔畧、七夕考、古今三ヶ條大事錄、和字傳來自從抄、口訣誕生臺目傳、垂加翁神說、光海翁筆錄和文集（事實文編、續諸家人物志、鑒定便覽、嘉爾一覽）

アトリノ　ワウジ　蠟嘴鳥皇子　欽明天皇の皇子なり母は皇妃堅鹽媛と曰ふ（大日本史）

アナザハ　ウンサイ　穴澤雲齋　神道流槍術の名家なり飯篠盛綱の門人（武術流祖錄）

アナザハ　モリヒデ　穴澤盛秀　穴澤流薙刀術の祖なり主殿助と稱す豐臣秀賴に仕ふ慶長元和の間軍功多し大阪の役敵十數を殺して死す（武術流祖錄）

アナホ　トヨマサ　穴太豐理　醫者なり正曆中典藥屬となる（皇國名醫傳）

アナフベ　トミヨ　孔生部富世　官醫なり延喜二年太宰府の醫師に任ぜらる（皇國名醫傳）

アナホノ　テンワウ　穴穗天皇　「アンカウテンワウ」

アナホベ　ハシビト　穴穗部間人　用明帝の后なり欽明帝の女、欽明帝三十一年二月用明帝納れて妃と爲す位に即くに及んて立てゝ皇后と爲す廐戸皇子、來目皇子、殖栗皇子、茨田皇子を生む推古帝二十九年十二月崩す（大日本史）

アナヤマ　バイセツ　穴山梅雪　名は信君伊豆守と稱す梅雪は其の號信友の子武田信玄の姉の產む所なり其先は刑部大輔信重の子信介より出づ小字を勝千代と云ひ彥六と改め玄蕃允、左衞門大夫、陸奧守と稱す永祿八年剃髮して梅雪齋不白と稱し父に繼ぎて武田氏に仕ふ親姻の故を以て威望極めて重し天正五年八月出てゝ山科に次し遠江を侵畧す德川家康と戰ひて敗績す九年十二月梅雪嬖臣長坂釣閑、跡部勝資の佞姦を憎みて竊かに款を織田信長に通ず天正十年二月家康持船を攻む是より先き勝賴女を以て梅雪の子に嫁するを約す而して勝賴の族弟信豐亦其子の爲に之を娶らんと欲し遂に釣閑勝資に賂ひて之を謀る是に於て二嬖勝賴に謂て曰く公の女は梅雪の子と本命協はず娶はす可らずと更に婚を信豐の子に約す梅雪之を聞き大に憲り且當時國勢日に蹙まり將士月に離るゝを見遂に意を決して叛す是の役や出てゝ江尻を守り遂に家康の命を聞きて潛かに之に謁見し其の邑下山に還り人を甲府に遣はして妻孥を取る時に勝賴亦出てゝ軍に在り留後の者人を馳せて之を勝賴に報ずるや驚き且つ怒る而して信豐及び臣士梅雪の叛を聞きて皆狼狽し遂に甲府を棄てゝ邑里に犇る三月梅雪家康の嚮導となりて駿河を伐ち竊かに甲府を窺ふ而して勝賴滅ひて後ち駿河より諏訪に抵りて信長に謁見し巨摩一郡を賜はる五月家康に從ひて安土及び京師に往き又從ひて界浦に抵る會ゝ信長の變至るに會し忽ち猜忌の念を生じて自ら安せず遂に別を告げて甲府に奔らむとし途に土寇の爲めに刺されて死す法名月山大龍寺と號す（或は靈泉寺古道集公に作る）子信治字は勝千代尙幼きを以て下山に在り梅雪殺されて後ち駿河の食邑を削られ僅かに河内の邑を領し十五年六月痘を病みて死し統遂に絕つと云ふ（野史）

アニチバウ　リウシュン　阿日坊隆舜　菊池武時入道寂阿の六男也父武時後醍醐天皇の勅を奉し探題北條英時を博多に攻む少貳貞經大友貞宗反覆し其後背より急擊す阿日房父と共に奮戰して死す時に元弘三年四月廿五日也（菊池佐々軍記）

アヌ　ヒロシマ　安努廣島　天平寶龜間の人なり和歌を善くし萬葉作者の一に列す詠歌は載せて其第十九卷に在り（萬葉集作者履歷）

アネノコウヂ　イヘツナ　姉小路家綱　參議高基の長子なり姓は藤原氏、天授中參議に任ぜられ從三位に陞る後ち元中七年を以て薨す（野史）

アネノコウヂ　キントモ　姉小路公知　勤王家なり右少將に任ず正四位下に敍す維新の前幕府の勅命を奉せさるを以て之を倒し有志と謀りて攘夷を決行せんとす詔を受けて近畿の海防を巡視す勝安芳の幕府の海軍を率て兵庫に在るに會し海防の一朝一夕に行ふ能はさるを聞く歸て復命す人之を惡む文久三年五月二十日從者二人を從へ猿か辻を過ぐ賊あり急に公知

が剃す從者一人先つ北で一人吉村右京刀を執りて侍す後れて從ふ公知刀を呼ぶ右京趨り來る賊已に公知を刺す呼吸甚だ苦むものゝ如し右京刀を揮て賊を逐ひ公知を扶けて歸る明治十四年三月廿日殁す時に歳三十參議左近衛權中將を贈る明治三十九年九月一日正二位を贈る

アネノコウヂ　コレツナ　姉小路自綱　參議嗣經の子也姓は藤原氏、本の名を光經（或は綱經に作る）と曰ひ永祿三年叙爵せられて左衛門佐に任ぜられ侍從と爲る永祿年中木曾義元と正瀧に於て戰ひ義元軍敗れて自殺し自綱之に克つ天正三年八月關白豐臣秀吉金森長近をして來り伐たしむ自綱敗れて之に死す（系圖、武家譜並に曰く自綱天正十五年を以て京師に卒す時に歳四十八にして法名を休安と號すと）子あり宣綱と曰ふ（野史）

アネノコウヂ　タカモト　姉小路高基　從三位內藏頭經基の子なり姓は藤原氏宮內卿從三位を歷て參議に至る後ち正平十三年を以て薨す二子あり家綱、尹綱と曰ふ（野史）

アネノコウヂ　タダツナ　姉小路尹綱　（南方傳に尹經に作る南山巡狩錄、中國治亂記並に尹綱に作る）は參議高基の第二子也姓は藤原氏、本の名を賴時と曰ひ飛驒の國司となり左京大夫に任ぜらる（一説に參議に任ぜらるに作る）後龜山天皇の密旨を奉して竊かに兵を聚む足利義時京極高數（治亂記に高賴に作り○足利家譜に高員に作る）を誅して之を擊たしむ尹綱乃ち向井、小島の二城に據りて之を拒ぎ應永十八年九月城陷りて死す子あり昌家と曰ふ（野史）

アネノコウヂノ　ツボネ　姉小路局　名はいゝ本姓橘本若くして關東に下り本丸大奥に勤め居りしか文恭公の女和姫毛利家に嫁するとき之に隨して小女鶴となれり和姫逝去の後本丸に歸り公薨じて後は慎德公の上臈年寄となり大いに權を弄し大奥は勿論諸侯旗本の請託夥しく神樂坂下に町地面を賜ひ富み萬を以て數ふ公薨ずるに及び毛利家の檜屋敷に退隱し剃髮して勝光院といふ檜屋敷破却の時本所に遁れ進佐渡守の家に養はる維新後幾ばくもなくして殁す（香亭手稿）

アネノコウヂ　ツグヨリ　姉小路嗣賴　參議實繼の第二子也本の名を良賴と稱す弘治四年飛驒守に任ぜられ從四位下を經て從三位に進み今の名に改む永祿六年三月武家執奏に因りて參議に任ぜらる元龜三年薨す法名は雲山、三木又は古川國司と稱す子自綱あり

アネノコウヂ　ナガタカ　姉小路長隆　父は左京大夫尹綱、後龜山天皇の密旨を奉して飛驒に遣き衆を率めて其の國司を襲ふ康正中參議に拜し正三位に叙ぜらる昌家忠氣あり常に父の志を嗣かむと欲し遂げずして殁す子權中納言基綱孫參議正三位實繼曾孫正五位下榮濃權介清俊相承け飛驒に在りと云ふ（續日本史）

アネノコウヂ　マサイヘ　姉小路昌家　後龜山天皇の密旨を奉して飛驒に遣き衆を率めて其の國司を襲ふ康正中參議に拜し正三位に叙ぜらる昌家忠氣あり常に父の志を嗣かむと欲し遂げずして殁す子權中納言基綱孫參議正三位實繼曾孫正五位下榮濃權介清俊相承け飛驒に在りと云ふ（續日本史）

アネノコウヂ　ナガタカ　姉小路長隆　父は左京大夫尹綱、後龜山天皇の密旨を奉して飛驒に遣き衆を率めて其の國司を襲ふ康正中參議に拜し正三位に叙ぜらる昌家忠氣あり常に父の志を嗣かむと欲し遂げずして殁す子權中納言基綱孫參議正三位實繼曾孫正五位下榮濃權介清俊相承け飛驒に在りと云ふ（續日本史）

アノ　アクゼンジヤウ　阿野惡禪師「ゼンジクワンジャキモト」

アノ　ジラウ　阿野冠者「ミナモトトツ」

アノノ　ツボネ　阿野局「チバラロクラウダイフ」

アハガハ　トキハル　淡河時治「アフガワトキハル」

アハシマノ　カミ　淡島神　紀州海部郡加田神社を云ふ祭神は少彦名神大己貴誓息長足姫三座を祀る

アハダ　イラツメ　粟田娘子　實字八年外從五位下に叙せらる性和歌を嗜みて頗る其の蘊奥を究はむ詠歌は戰せて萬葉集に載る（萬葉集作者履歴）

アハダ　ウマカヒ　粟田馬養　聖武帝の時の人なり善く華言に通ず天平二年太政官奏して曰く諸蕃異俗風俗同じからず若し語譯することなければ互に意を通じ難し今の大學生は志ありと雖も家產究乏にして業を成すこと能はず請ふ聽難なる者を擇みて貧財を給せば必らず其の志す所を成さんと乃ち馬養及ひ播磨乙安陽侯眞身文元眞等に詔し各〻弟子二人を擇み以て華言を授けしめ冬夏の衣服及食料を給す（日本儒林傳）

アハダ　カネフサ　粟田兼房　嘗て和歌を嗜み未た秀逸を得さるを以て慨と爲す是歲に平日佛本人麿の才親を想墓す人麿は上世の歌人にして持統文武の朝に仕ふ或る時兼房夢に西阪下に遊ひ落梅地に滿ち芬馥人を襲ふ傍らに一の老翁あり寧姿不凡にして鬼神鳥朝左手に紙を持ち右手に毫を執り尊恩する所有るか如く未た其識れたるを知らす翁告げて曰く君久しく人麿を想ひ慕ふ故に遲迎を得たりと言畢つて見えす兼房覺めて後甚た喜ひ靈工を屈ひ夢みる所の像を寫し數紙を換て乃ち成る既に裝潢して長く壁間に掛けて拜敬す後麿を佳句を得て神助有るが如し晩年以て白河帝に奉獻す帝悅て鳥羽の官庫に實蓄すと云ふ（桑華蒙求）

アハダ　カゲクニ　粟田口景國「カゲクニ」

アハダ　クニイヘ　粟田口國家「クニイヘ」

アハダ　クニキヨ　粟田口國清「クニキヨ」

アハダ　クニツナ　粟田口國綱「クニツナ」

アハダ　クニトモ　粟田口國友「クニトモ」

アハダ　クニミツ　粟田口國光「クニミツ」

アハダ　クニヤス　粟田口國安「クニヤス」

アハダ　クニヨリ　粟田口國賴「クニヨリ」

アハダ　ゼンホ　粟田口善輔（一に善法に作る）京師粟田口の隱者なり初め田中兵部大輔と云ふ北面の士なり後粟田口に隱居す慶に一茶爐あり手取り盞と號す蓋し名器なり毎日以て茶を煮る其の湯の沸騰する時便ち彷彿ゝ松濤ノ聲ニ昔日高遠幽邃ノ趣と高吟し馬諫舁夫の往來するものには必ず茶を施し談話

以て樂とす又之を以て飯を炊く食竭くれは即ち市に出て〻施を乞ふ人皆な其の人となりを知り喜びて金銀穀帛を與ふ其の得る所盡きされば出でず關白秀吉嘗て手取釜の名を聞き茶博利休をして之を請求せしむ善輔勃然色を變して曰く吾れ貧窶にして長物なし苟くも之を公に獻ぜは何を以て茶を烹ん抑〻是の命あるは斯の器あるを以てなりと乃釜を取り石に投して碎く利休以て告く秀吉歎して曰く策れは眞に道人なり其の茶鐺を請求するは予の過ちなりと乃ち上手の鎔工に命して二個の手取釜を模鑄せしめ其の一は善輔に與へて之を償ひ一は以て自ら之を藏むと云ふ（續近世畸人傳）

アハダグチ　タカミツ　粟田口隆光　土佐派の畫家なり民部と稱す土佐光顯の三男にして家を爲し洛東粟田口に住す故に呼びて粟田口法眼と稱す畫法を父に學びて佛像人物花鳥を能くす應永年間の人なり（扶桑畫人傳、本朝畫史）

アハダグチ　タダツナ　粟田口忠綱「タダツナ」

アハダグチ　ツネミツ　粟田口經光　土佐藩の名家なり隆光の子なり又粟田口法眼と號す畫法父に同くして活動あり設色の草花生るか如し應永晩年の人（扶桑畫人傳）

アハダグチ　ニフダウ　粟田口入道「フザハラサダマサ」

アハダグチ　ノリクニ　粟田口則國「ノリクニ」

アハダグチ　ホウヂン　粟田口法眼「フザハラミツクニ」アハダグチタカミツ「アハダグチツネミツ」

アハダグチ　ヒサクニ　粟田口久國「ヒサクニ」

アハダグチ　ヨシミツ　粟田口吉光「ヨシミツ」

アハダ　クワンパク　粟田關白「フヂハラミチカネ」

アハダ　サダイジン　粟田左大臣「フヂハラアリヒラ」

アハダ　ドノ　粟田殿「フヂハラミチカネ」

アハダノ　オトド　粟田大臣「フヂハラアリヒラ」

アハダ　ベツタウ　粟田別當「フヂハラコレタカ」

アハダ　マヒト　粟田眞人　天足國押人命の後なり眞人學を好みて文を能く進止容あり天武の朝小錦下直大肆に進む持統の朝筑紫太宰と爲る準人一百七十四人及び布・牛皮、鹿皮若干枚を獻ず賞して衣裳を賜ひ直大貳に進めらる文武の朝律令を撰むに與かる民部尙書と爲る文大寶元年遣唐執節使と爲り位號を改められ正四位下に叙し節刀を授けらる筑紫に至る比風浪惡くして發することを得ず遂に京師に歸る二年朝政に參議す尋で再び唐に赴き楚州に至る人あり來り問ひて曰く何れの國の使ぞと眞人曰く我は日本國使なり此處は何れの州界ぞ曰く是れ大周の楚州鹽城縣なり眞人又問ふ櫛に大唐と稱す何に繇て號を改むる曰く永淳二年天皇崩じて皇太后政に登り神聖皇帝と稱し國を大周と號す聞く海東に大倭國あり之を君子國と謂ふ人民豐樂に敎行禮義ありと今使人を見るに儀容閑雅風聞果して信なりと言畢て去る長安に至り武后に見て宴を麟德殿に賜ひ司膳卿を授けらる眞人進德冠か冠す頂に華蘭四披あり紫袍帛帶す唐廷其の溫雅を稱す慶雲元年復命し詔を拜し從三位に進み和銅の初め太宰帥と爲り正三位に昇る養老三年薨す（大日本史）

アハダ　ミチマロ　粟田道麻呂　醫人なり內藥帖と爲る寶字三年姓朝臣を賜ひ參議、近衛員外中將兼勅旨員外大輔、式部大輔を歷て因幡守となる神護元年和氣王の事に坐して官を免せらる後驚もなくして飛驒員外介に任ぜらる其守某道麻呂と甚怨あり乃誣ゆるに罪を以てし拘へて之を幽す粟田諸姉、淳仁帝の後宮なり初藤原仲麻呂の子眞從に適す眞從卒して寡居す帝譴王たりし時仲麻呂諸姉を以て之に娶はし私第に居く帝位に即く從五位下に叙す（大日本史）

アハダ　ハイテイ　淡路房　大和の刀匠にして平治年間の人なり或は行瀨と同人祕伯書に住す或は正應年間の人なりとも云ふ（本朝鍛冶考）

アハヂバウ　淡路房「ライクニヤス」

アハヂヤ　ソウクワ　淡路屋宗和　泉州堺の茶人なり茶法を武野紹鷗に學て能くせり

アハニ　マス　カミ　安房坐神「スサキノカミ」

アハノ　オトド　阿波大臣「フヂハラツネ」

アハノ　カミ　阿波神　大和添上郡率川に坐す祭神三坐あり大神御子神は姬蹈鞴五十鈴姬なり子守神は其の母玉櫛姬なり狹井神は其の父事代主神なり以上三坐後の二坐は後世の合祀に係る（大倭神社注進狀）

アハノ　ヒデモチ　粟野秀用（一に粟野を阿波に作る）陸奥の人なり初め藤八郎と稱す後喜右衛門と改む伊達正宗に仕へて徒士たり罪ありて死刑に擬せらる秀用之を聞き實遁れて京都に至り羽柴秀吉の威武目に熾んなるを聞き尾張に往き仕へて步士隊に列す秀用性勇悍每に軍に從ひ先驅夜擊の功衆に超ゆ秀吉食邑一萬石を賚賜し以て中軍の前鋒とす正宗之を聞きて怒り入を遣して秀用を請ひ以て甘心せんとす秀吉曰く渠れ初め來りて孤に屬す其の由來を問ふに彼れ隱匿することなし今足下に罪あるとを知て孤之を扶持するは頗る禮に悖ると雖ども彼れの意亦憫む可し始めより今に迄る功勞も亦寡からず孤爲めに宥を請ふと正宗強ひずして罷む秀用心を竭して仕へ屢〻軍功を樹つ食邑を累加す伊豫柾木城邑十萬石を賜ひ木工頭に任す復三萬石を加へて秀次に屬す而て又三萬石を益封す文祿四年秀次秀吉に反して高野山に遁る〻や秀用坐して京師大雲院に入り自殺す法名を大雄誓義と曰ふ（野史）

アハノ　ミコト　阿波命　石戶別命の子にして事代主神の本の后なり一名天津羽々命と云ふ土佐國土佐郡朝倉郷小朝倉神社と祀られ伊豆の神津島に御瀧中社と祀られ遠江佐野郡には阿波々神社と祀らる（古事記傳）

アハヤ　ノブカタ　粟屋信賢　毛利元就幕下の士なり文龜年中尼子經久大內義興と備前の三好郷に會戰す元就兵を遣り義興を援ふ信賢その道中にあり

苦戰の際大將福原貞俊軍旗を敵に奪はる信賢射術に達す旗を奪ふものを射斃し首級を擧げ旗を取返し邸等に附與して通行かしめ自から敵中に入り數騎を斫りて遂に戰死す(豹皮錄)

アハヤ マタスケ 粟屋又助 長州藩士諱は照道又助と稱す片山喜平の長子にして夙に粟屋氏を嗣ぐ劍術を以て農兵町兵僧兵等を教導す元治元年七月十九日京都の變起るに及び福原越後に從ひ蛤御門に戰ひ傷つき還宮にて敵兵の爲めに捕へられ大阪の獄に繫かれしが同年十一月朔日于日に於て斬らる時に年三十(甲子殉難士傳)

アハヤ ヤスヨシ 粟屋康良 陸軍歩兵中尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として從軍し卅八年三月三日清國盛京省大庄河北方畑地戰鬪の際負傷同五日大庄河第五師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アハヤ ヨシオミ 粟屋良臣 膳所の勤王家なり初の名は逸道龍之助と稱す瞻跋を以て家を弟に讓り京師に出て長門の人岡村貫齋に從學す文久三年貫齋藩侯毛利慶親の國に幽せらるゝを聞き弟子に訣して郷に歸り將に盡すあらんとす良臣共に俱にせんとを請ひ譯所に至り志を父彦右衛門に告げ師と共に萩に往き清水親知の家に寓す毛利侯延見して其の氣節を愛す後浪士復籍の令あるに會し侯及ひ親知の勸に從ひ郷に歸り學官に擢でらる直言を以て黜けらる元治元年六月幕兵浪士の三條の客舍を襲ふに當てや其臣變を浪花の萩邸に報せんとして四下す途に從花の東上に遇ひ事を告げて京に從ふ至れば則福原越後等兵を率て藩侯の寃を訴ふるに會す良臣大に喜ひ眞木保臣に請ふて之に從ひ進て鷹司の邸前に至る幕兵四もに逼り衆奮鬪す良臣傷を被りて其の門外に斃る時に年二十四(愛國偉績)

アハヤ ヨシヒコ 粟屋義彦 陸軍少兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第五十七聯隊附として從軍し卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アハヤ ロキウ 粟屋爐久(サカタロキウ) 相川景見 國學者なり初定泰、又加茂と稱し柏園又山の井と號す通稱彦之進德川氏の御徒組頭にして文武に通ず香川景樹の門に入り上野宮に和歌を教ふ

アヒカハ カゲミ 合川珉和 畫工なり名は秀成字は士隣雪山と號す北川春成と共に扁額軌範を畫き又漫畫百女を畫く(虛心筆記)

アヒキ ミンウ 合川珉和 畫工なり名は士隣雪山と號す北川春成と共に扁額軌範を畫き又漫畫百女を畫く(虛心筆記)

アヒキ モリノスケ 相木森之助 武田氏の臣なり小田井の城を攻むる時城將小田井又六郎と闘ひ之と搏て谷に落ち終に其の首を馘す

アヒコ ウヂヨ 阿比古氏雄 官醫なり仁和中侍醫兼鍼博士たり(皇國名醫傳、本朝醫考)

アヒコ ナンサウ 安孫子南窓 羽州最上の俳人なり南窓は其の號一に翠谷庵の號あり久左衛門と稱す弘化中の人

アヒサハ キンチュウラウ 會澤金重 歩兵中尉なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや躍俑役より召集せられ第一師團歩兵第三聯隊附として出征し旅順攻圍軍に從軍中同年十一月二十六日松樹山補備砲臺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒザハ セイシサイ 會澤正志齋 水戸藩の儒員なり名は安字は伯民通稱は恒藏水戸藩の人なり幼より警敏にして學を好み彰考館寫字生と爲る初め留守に班し江戸より還りて歩士に班し尋いて病を以て職を辭に侍讀し數年にして累進して進物番と爲り藤田幽谷殺するに及び彰考館總裁と爲り尋いて病を以て職を辭し教授と爲る後ち擢んでゝ郡奉行と爲り小性頭總教に轉す前後秩を增して二百五十石に至る幕府擴夷の令あり安新論五篇を著はして哀公に獻ず哀公不豫嚴嗣未た定まらず人心洶々たり安藤田東湖等と江戸に來りて建白す可きを議り召し見て政事を咨詢し公國に就くに及び啓沃多きに居ると云ふ烈公致仕して國事一變す安亦た致仕して蔵齋と稱し幾ばくもなく謹を祥て蹤屏すること四年江戸に還る時に幕府方に邊備を議し烈公を召して參畫せしむ公、安の忠懇な思ひ再び誅を鴟ふ文久三年病を以て家に終ふ年入十二著はす所孝經考、中庸釋義、劇詩卷、典謨述義、讀論日札、讀書日札、讀易、讀葛花、閑聖漫錄其他十數種あり明治廿四年四月正四位を贈る(近世先哲叢談)

アヒダ クワツ 會田豁 陸軍歩兵中尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第三師團歩兵第三十聯隊附として出征し卅八年三月十四日清國盛京省蘭家屯東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒダ ノブヤ 相田信也 京師の人也溫厚にして學を好む祖父内匠は加藤清正に仕へて爪牙の臣たり秩祿五千石を食む加藤氏國除かるゝに及びて忠厚に由利の配處に從ふ嫡子權頭は即ち信也の父なり志を得ずして死す信也零丁多難四長崎に遊び東江都に來り不幸にして知己に遇ず時に式部少輔丹羽氏伊藤若干を以て之を待ち要ほすに親屬を以てす居ること歲餘祿及び要を辭して去る初め信也其の推擧に遷り大家に仕ふるを得て父祖の名を揚げんと欲す已にして丹羽氏其の家事を與かり聞かしめんと欲す故に辭し去るなり既にして京師に適き松永昌易四村孝齋伊藤維貞の諸子に就て書を講じ又書法を賀陽歳舟に和歌を廣澤長好に學び共に稱譽せらる凡そ弓馬劍槍武夫の講する所は皆大意に通じ兼て筆尺八に通ず水戸侯其の名を聞て厚く之れを聘す壹し森尚詠の薦に係ると云ふ(事實文編)

アヒダ ヤスアキ 會田安明 算術家なり出羽最上の人初め鈴木安旦と云ひ彦助と稱し後今の名に改む字は子貫自在亭と號す俗稱算左衛門幼にして郷里の算師某に就き數學を受く後關流の本多利明の門に入る天性捷悟精力餘り有るを以て蚤く已に天元演段の深理を究め又諸家の秘頗を探りて遍く之を採め後東都に出て廣く算學有名の士を訪ふて之を試むるに復た吾か伎に較ふるに足る者なし是に於て當今の術士を輕視し其學を都下に開く來り者日に衆し安明雪て譯ふ天元演段の方唯乘法有て除法無し未だ以て天元の妙數を發するに足らざるなりと乃ち思を煩し精な

アハヤ ヤスヨシ 粟屋康良 陸軍歩兵中尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として從軍し卅八年三月三日清國盛京省大庄河北方畑地戰鬪の際負傷同五日大庄河第五師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる(甲子殉難士傳)

アハヤ ヤスヨシ 粟屋康良 陸軍歩兵中尉なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として從軍し卅八年三月三日清國盛京省大庄河北方畑地戰鬪の際負傷同五日大庄河第五師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アハヤ ヨシオミ 粟屋良臣 膳所の勤王家なり初の名は逸道龍之助と稱す瞻跋を以て家を弟に讓り京師に出て長門の人岡村貫齋に從學す文久三年貫齋藩侯毛利慶親の國に幽せらるゝを聞き弟子に訣して郷に歸り將に盡すあらんとす良臣共に俱にせんとを請ひ譯所に至り志を父彦右衛門に告げ師と共に萩に往き清水親知の家に寓す毛利侯延見して其の氣節を愛す後浪士復籍の令あるに會し侯及ひ親知の勸に從ひ郷に歸り學官に擢でらる直言を以て黜けらる元治元年六月幕兵浪士の三條の客舍を襲ふに當てや其臣變を浪花の萩邸に報せんとして四下す途に從花の東上に遇ひ事を告げて京に從ふ至れば則福原越後等兵を率て藩侯の寃を訴ふるに會す良臣大に喜ひ眞木保臣に請ふて之に從ひ進て鷹司の邸前に至る幕兵四もに逼り衆奮鬪す良臣傷を被りて其の門外に斃る時に年二十四(愛國偉績)

アハヤ ヨシヒコ 粟屋義彦 陸軍少兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第五十七聯隊附として從軍し卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アハヤ ロキウ 粟屋爐久(サカタロキウ) 相川景見 國學者なり初定泰、又加茂と稱し柏園又山の井と號す通稱彦之進德川氏の御徒組頭にして文武に通ず香川景樹の門に入り上野宮に和歌を教ふ

アヒカハ ミンウ 合川珉和 畫工なり名は秀成字は士隣雪山と號す北川春成と共に扁額軌範を畫き又漫畫百女を畫く(虛心筆記)

アヒキ モリノスケ 相木森之助 武田氏の臣なり小田井の城を攻むる時城將小田井又六郎と闘ひ之と搏て谷に落ち終に其の首を馘す

アヒコ ウヂヨ 阿比古氏雄 官醫なり仁和中侍醫兼鍼博士たり(皇國名醫傳、本朝醫考)

アヒコ ナンサウ 安孫子南窓 羽州最上の俳人なり南窓は其の號一に翠谷庵の號あり久左衛門と稱す弘化中の人

アヒサハ キンチュウラウ 會澤金重 歩兵中尉なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや躍俑役より召集せられ第一師團歩兵第三聯隊附として出征し旅順攻圍軍に從軍中同年十一月二十六日松樹山補備砲臺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒザハ セイシサイ 會澤正志齋 水戸藩の儒員なり名は安字は伯民通稱は恒藏水戸藩の人なり幼より警敏にして學を好み彰考館寫字生と爲る初め留守に班し江戸より還りて歩士に班し尋いて病を以て職を辭し教授と爲る後ち擢んでゝ郡奉行と爲り小性頭總教に轉す前後秩を增して二百五十石に至る幕府擴夷の令あり安新論五篇を著はして哀公に獻ず哀公不豫嚴嗣未た定まらず人心洶々たり安藤田東湖等と江戸に來りて建白す可きを議り召し見て政事を咨詢し公國に就くに及び啓沃多きに居ると云ふ烈公致仕して國事一變す安亦た致仕して蔵齋と稱し幾ばくもなく謹を祥て蹤屏すること四年江戸に還る時に幕府方に邊備を議し烈公を召して參畫せしむ公、安の忠懇な思ひ再び誅を鴟ふ文久三年病を以て家に終ふ年入十二著はす所孝經考、中庸釋義、劇詩卷、典謨述義、讀論日札、讀書日札、讀易、讀葛花、閑聖漫錄其他十數種あり明治廿四年四月正四位を贈る(近世先哲叢談)

アヒダ クワツ 會田豁 陸軍歩兵中尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第三師團歩兵第三十聯隊附として出征し卅八年三月十四日清國盛京省蘭家屯東方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒダ ノブヤ 相田信也 京師の人也溫厚にして學を好む祖父内匠は加藤清正に仕へて爪牙の臣たり秩祿五千石を食む加藤氏國除かるゝに及びて忠厚に由利の配處に從ふ嫡子權頭は即ち信也の父なり志を得ずして死す信也零丁多難四長崎に遊び東江都に來り不幸にして知己に遇ず時に式部少輔丹羽氏伊藤若干を以て之を待ち要ほすに親屬を以てす居ること歲餘祿及び要を辭して去る初め信也其の推擧に遷り大家に仕ふるを得て父祖の名を揚げんと欲す已にして丹羽氏其の家事を與かり聞かしめんと欲す故に辭し去るなり既にして京師に適き松永昌易四村孝齋伊藤維貞の諸子に就て書を講じ又書法を賀陽歳舟に和歌を廣澤長好に學び共に稱譽せらる凡そ弓馬劍槍武夫の講する所は皆大意に通じ兼て筆尺八に通ず水戸侯其の名を聞て厚く之れを聘す壹し森尚詠の薦に係ると云ふ(事實文編)

アヒダ ヤスアキ 會田安明 算術家なり出羽最上の人初め鈴木安旦と云ひ彦助と稱し後今の名に改む字は子貫自在亭と號す俗稱算左衛門幼にして郷里の算師某に就き數學を受く後關流の本多利明の門に入る天性捷悟精力餘り有るを以て蚤く已に天元演段の深理を究め又諸家の秘頗を探りて遍く之を採め後東都に出て廣く算學有名の士を訪ふて之を試むるに復た吾か伎に較ふるに足る者なし是に於て當今の術士を輕視し其學を都下に開く來り者日に衆し安明雪て譯ふ天元演段の方唯乘法有て除法無し未だ以て天元の妙數を發するに足らざるなりと乃ち思を煩し精な

研き創意して乘除互用を開き以て短合的當の方を得たり其術實に古今算師の未た發せざる所也因て自ら其術を命けて天生法と曰ひ遂に一家を建て最上流と稱すと云ふ安明嘗て人に語て曰吾か天生法の術我之を神夢の感通に得たり豈信せざる可けむやと其の著す所世に刊行する者數十部あり文化十四年丁丑冬十月二十六日東都の僑居に歿す享年七十一墓は本所卽現寺の側らに在りと云ふ安明嘗て藤田定資を訪ふて門に入らんと請ふ定資曰く子が愛宕山神額堂に掲ぐる算法正しからず之を改めず可ならんと安明可かず返て人に謂て曰く吾が定資を訪ひしは其の賢愚を試みんが爲なりと後ち定資の著書精要算法を非難し改精算法を著し之を上木す之より關派相論じて反駁の書多く版行せらる(專實文編大日本數學史)

アヒダ ヤスマサ 會田安昌 は歌人なり國學に通ず宮内省御歌所に仕ふ明治二十八年一月廿一日歿す年六十四

アヒヅ チュウジャウ 會津中將「ホシナマサユキ」

アヒヅ チュウナゴン 會津中納言「ウエスギカゲカツ」

アヒヅノ ゴテツ 會津小鐵 江戸の俠客なり本名は上坂仙吉安政中人と爭て之を殺す匿れて會津侯に投す侯其の義氣を愛して之を藉ふ小鐵亦其の恩を感し盡す所あり維新の後京都に住し屢丁の總頭たり明治十八年三月十九日歿す

アヒザハ モトスケ 會澤元輔 勤王の志士なり其生地を詳にせず或は云ふ水戸の浪士なりと野州出流山義擧の首謀者なり慶應三年十一月竹内齋西山隊之助等と相謀り野州出流山に據り檄を遠近に傳へて義兵を募り幕府の兵と岩船山に戰ふ元幡先鋒隊にあり士衆を督し勇戰し遂に重傷を負ふ然れども屈する色なく呶喊猛進して敵軍に圍入し苦戰數次遂に敵彈に中り殪る時に十二月十二日なり(殉難錄稿)

アヒバ センブ 相羽仙夫 俳人なり通稱文一郎越中富山和泉町の人賣藥を以て業とす故に行商を利用して四方の俳客に音信を通し名大に廣まり學も又進む親父は黑川邦雄六平齋亦夢と稱して著書數部に渉り名都鄙に著る仙夫が俳全く之に因す家名を近江屋といふより琵琶園と號す明治十五年一月二日歿す一族皆俳諧に名あり(三森松江氏寄)

アヒバラ イクノスケ 相原郁之輔 陸軍工兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第三十三聯隊附として出征し五月二十六日清國南山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒバラ イナザウ 相原稻造 陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第一師團歩兵第一聯隊附として出征し同年十月十三日清國盛京省高力勾北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒバラ カセキ 相原可碩 碁手なり實は愛知縣人來朝す可碩師井上因碩と共に島津家に招かれ使臣屋良と碁を圍みて二目の勝を得たり時に年十三屋良曰く本因坊おゝび因碩に對し勝を得ること能はさるは自期する所なりしと雖も少年に對し敗を取りしは遺憾なりと(因云碁話)

アヒバラ シャウイチラウ 相原正一郎 陸軍工兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや及び第十一師團工兵第十一大隊附として出征旅順攻圍戰に從軍中同年十二月四日一ノ堡壘附近敵情偵察の際負傷し王家屯第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヒバラ トモナホ 相原友直 仙臺藩の士にして平泉雜記、平泉藪蹟志の著者なり天明二年正月二十一日歿す歲八十餘井郡赤萩村篠谷里に葬る(平泉舊蹟志)

アヒラツヒメ 吾平津媛 日向吾田小椅名の妹也神武帝の太子たりし時に納れて妃と爲す研手耳命、岐須美々命を生む(大日本史)

アフカフ トキハル 淡河時治 北條時房の孫なり父時盛攝部權助越後守と爲り六波羅南方に列たり家佐介に在り因て佐介氏と稱す後ち今の氏に改む後醍醐帝北條高時を討つに及んで時治遠く越前牛原の地頭たりしが兵を引て北軍を防く六波羅敗るゝに及んで部下逸散する者多く平泉寺の僧徒數に乘じて來り攻む時治勢ひ敵せざるを知て其の要と訣れ二子を水に沈め屠腹して死す妻も亦水に赴て死す(大日本史)

アフギヤ キトウ 扇屋凡藤 三州吉田の俳人なり一に九花亭の號あり通稱甚兵衛と云ふ弘化中の人(俳諧海内人名錄)

アフギヤ ボクカ 扇屋墨河 俳人なり鈴木宇右衛門と稱す加藤千蹤に從て和歌を學び又俳句を善くす吉原江戸町二丁目の妓樓扇屋の主人にして家に瀬川花扇の兩妓あり共に全盛を極む初め瀬川客少し墨河之を奬勵せんと欲し優劣二品の贈物を作り先づ婢をして優等品を瀬川に贈り少時して再たび婢を遣し言はしめて曰く先刻謹らす所の贈品は當に花扇に贈るへき品誤て姐に付す乞ふ之を返せと更に劣等の贈品を贈て之に代ふ瀬川之を慙ぢて以後客を遇ること頗る力む頃客大に增す花扇曾て商家飯田屋の息女之助なる者に契り密かに樓を脱す墨河人をして之を探りて以て歸る歌を與へて曰く「散らさじと止めし心も白梅の斯はかり風の吹すさむらん」と花扇歌吟良久して返歌す曰く「散らしそとしめしかきれの梅の花又來る春に咲かさらめや」と翻然心を改めて樓に勵むと云ふ墨河花扇を東江に瀬川を手蹤に從はしめて文雅歌詠を學はしめ妓女皆數あり墨河寛政十三年正月十一日五十八歲にして歿す

アフゴ サブラウ 杜佐五郎 陸軍歩兵大尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第四十四聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はり廿七年十二月十八日東鷄冠山北砲臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アフス牛 ギヨフ 鴨水漁夫「マルヤマオウキヨ」

アブヅ 阿佛 權大納言藤原爲家の妻にして權中納言爲相の母なり姓は平氏初め安嘉門院に仕へて四條又右衛門佐と稱す和歌を能くす著はす所十六夜日記、夜鶴あり尼と稱す和歌を能くす著はす所十六夜日記は長子爲氏が季子爲相に屬すべき和歌所の領地を奪領せしを訴へ鎌倉の裁決を乞はんが爲め建治三年京より鎌倉に至るの日記なり初め爲家僧ふる所の和歌所の栞邑掃部國細川庄と近江國小野庄とあり細川庄を長子爲氏に與ふ而しも不孝の行あるを以て之を奪

ふて爲相に與ふ爲氏之を遮さず依て之を訴ふ訟事永く決せず已に四年を經弘安六年九月殺す（大日本史）

アフトツグワ　ミドリノスケ　凹凸窩イシカハヂヤウザン」　阿武松緑

アフノマツ　有名の角力者なり能登國鹿島郡七海村の產初め長吉と稱す角力者とならんと欲し文化十二年廿五歲にして江戸に來り武隈の門弟となり名を小車と稱す武隈其大食なるを見て相撲の術に堪へずとし路金一分を與へて國に歸らしむ歸路に板橋に一泊して獨り熟々謂ら角力者となるも一は生計の爲めなり今虛しく故鄉に歸らば徒に衆人の嘲を招くのみゝ遂に宿主に還り更に鍛山の弟子となり名を小緑と改む同年麴町心法寺內相撲興行に初めて上口と爲り小柳長吉と改稱す夫より年年の興行毎に段を進み文政二年の春幕下二段に上り同五年の春江戸藏前八幡の花相撲に先師武隈と角ふて勝つ此の年の幕幕の內前頭に進み六年幕八枚目に至り翌七年小結八年の冬關脇九年の冬大關となり十年の春芝神明に於て改稱して阿武松緑之助と呼ぶ角力場に出つる毎に初めより晉て敗を取りしことなく古今未曾有の力者なるを以て世に日の下開山と稱し同十一年橫綱を許され名を天下に聲す後ち長門藩毛利家に抱たられ慶米五十俵を賜ふと云ふ天保十四年年寄となる嘉永四年十二月廿九日江戸に歿す享年六十一歲深川淨心寺に葬る今金澤市寺町立傳寺に墓あるは改葬せるものか（森田平次所誌）

アフヒ　アキラ　葵彰　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て歩兵第十九聯隊附として出征旅順攻圍軍に加はり十月二十九日二龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アフヒ　シモサカ　葵下坂「アフヒヤスツグ」

アフヒ　ニョゴ　葵女御「アフヒノマヘ」

アフヒノマヘ　葵前　建禮門院の婢なり高倉帝之を寵幸す龍後宮を傾むく宮中呼んで葵女御と曰ふ帝其の聲を愧ちて復た遊御せず關白基房帝の意を察し間を承け養ひて己の子と爲し以て嬪御に充んと請ふ帝聽かずして曰く如し請ふ所位を去るの後なれば問々或は之を爲さん朕位に在りて之に働はゞ後人其れ之を何とか謂はんと然れども是の後帝眷念して已まず古歌を書して葵前に賜ふ葵前持して家に歸る遂に病を爲して死す一說に曰く門院の二婢葵は容色あり宿嚴は情厚し高倉帝先づ葵に幸して內豎と爲る（高僧傳要文鈔に曰く淡海居士は即ち三船なり幼にして出家して元開と名く勝寶中勅して還俗せしめて姓を賜ふ唐に入りて學ばんと欲す病を以て果たさず居常梵行を修す）八歲にして藤原仲麻呂の爲めに譜せられて衛士府に因へられ出でゝ藤原仲麻呂の門弟なり尋で從五位下に進み參河守文部少輔を歷六年美作守に遷り造池使に遷り近江の敢池を造る、仲麻呂反して近江に據らんと欲し先づ使を遣して國中の兵馬を調發す三船時に勢多に在り列官佐伯三野と謀りて使人及び同惡者を縛す功を以て正五位上勳三等を授けられ近江介と爲り中務大輔兼侍從に遷る神護二年功田二十町を賜ひて其の子に傳へしむ尋て東山道巡察使と爲る景雲の初め兵部大輔を加へられ既にして還りて視察する所の事を列狀して之を上る旨に稱はず責めて太宰少貳を授く寶龜中稍々刑部大輔に遷り大判事等を歷大學頭兼文章博士と爲り從四位下に進む延曆の初め因幡守を兼ね刑部卿と爲り四年卒す年六十四、三船人と爲り聰敏にして博く群書に涉り善く文を屬す名一時に高し嘗て勅を奉じて神武以來持統に至るまでの諡號を定む今ま稱する所は即ち是れなり或は曰ふ懷風藻は二船の作る所なりと（日本儒林傳）

アフミヤ　キウシラウ　近江屋久四郎　狂言作者なり當時有名の作者輩出して村山又兵衛勝三郎杉三安、都萬太夫座に近松門左衛門、鹽屋九郎左衛門座に近江屋久四郎等の作者ありて名聲互に相ひ鳴る而れ共門左衛門の外は皆專ら作者を業とするものにあらずと云ふ（續遊笑覽）

アフミヤ　トアン　近江屋堵菴「テジマトアン」

アフミヤ　ニヘエ　近江屋仁兵衛　心學者なり本と平安六角街の商人にして家を以て子に屬し老て自ら全門と號す少にして學を石田勘平に受く勘平の學は王陽明を本とし傍ら老佛を雜へて一家を創立し

アフミノ　ミツマロ　淡海三麿「クリモトヒヤウゴ」

アフミ　ミフネ　淡海三船（三一に御に作る）葛野王の孫なり父を地邊王と曰ひ三船初め諸王たり勝寶三年姓を淡海眞人と賜ひ尋で內豎と爲る（高僧傳要文鈔に曰く淡海居士は即ち三船なり幼にして出家して元開と名く勝寶中勅して還俗せしめて姓を賜ふ唐に入りて學ばんと欲す病を以て果たさず居常梵行を修す）八歲にして藤原仲麻呂の爲めに譜せられて衛士府に因へられ出でゝ藤原仲麻呂の門弟なり尋で從五位下に進み參河守文部少輔を歷六年美作守に遷り造池使に遷り近江の敢池を造る、仲麻呂反して近江に據らんと欲し先づ使を遣して國中の兵馬を調發す三船時に勢多に在り列官佐伯三野と謀りて使人及び同惡者を縛す功を以て正五位上勳三等を授けられ近江介と爲り中務大輔兼侍從に遷る神護二年功田二十町を賜ひて其の子に傳へしむ尋て東山道巡察使と爲る景雲の初め兵部大輔を加へられ既にして還りて視察する所の事を列狀して之を上る旨に稱はず責めて太宰少貳を授く寶龜中稍々刑部大輔に遷り大判事等を歷大學頭兼文章博士と爲り從四位下に進む延曆の初め因幡守を兼ね刑部卿と爲り四年卒す年六十四、三船人と爲り聰敏にして博く群書に涉り善く文を屬す名一時に高し嘗て勅を奉じて神武以來持統に至るまでの諡號を定む今ま稱する所は即ち是れなり或は曰ふ懷風藻は二船の作る所なりと（日本儒林傳）

アフミノ　ケヌ　近江毛野　繼體帝の二十一年勅を奉じ兵六萬に將として任那に赴く筑紫國造磐井火豐二國に據りて海路を扼斷す因つて兵を交へて歸ふ老て自ら全門と號す少にして學を石田勘平に受く勘平の學は王陽明を本とし傍ら老佛を雜へて一家を創立す（大日本史）

アフミノマツ　有名の角力者なり能登國鹿島郡七海村の產初め長吉と稱す角力者とならんと欲し文化十二年廿五歲にして江戸に來り武隈の門弟となり名を小車と稱す武隈其大食なるを見て相撲の術に堪へずとし路金一分を與へて國に歸らしむ歸路に板橋に一泊して獨り熟々謂ら角力者となるも一は生計の爲めなり今虛しく故鄉に歸らば徒に衆人の嘲を招くのみゝ遂に宿主に還り更に鍛山の弟子となり名を小緑と改む同年麴町心法寺內相撲興行に初めて上口と爲り小柳長吉と改稱す夫より年年の興行毎に段を進み文政二年の春幕下二段に上り同五年の春江戸藏前八幡の花相撲に先師武隈と角ふて勝つ此の年の幕幕の內前頭に進み六年幕八枚目に至り翌七年小結八年の冬關脇九年の冬大關となり十年の春芝神明に於て改稱して阿武松緑之助と呼ぶ角力場に出つる毎に初めより晉て敗を取りしことなく古今未曾有の力者なるを以て世に日の下開山と稱し同十一年橫綱を許され名を天下に聲す後ち長門藩毛利家に抱たられ慶米五十俵を賜ふと云ふ天保十四年年寄となる嘉永四年十二月廿九日江戸に歿す享年六十一歲深川淨心寺に葬る今金澤市寺町立傳寺に墓あるは改葬せるものか（森田平次所誌）

アフヒ　アキラ　葵彰　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て歩兵第十九聯隊附として出征旅順攻圍軍に加はり十月二十九日二龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アフヒ　シモサカ　葵下坂「アフヒヤスツグ」

アフヒ　ニョゴ　葵女御「アフヒノマヘ」

アフヒノマヘ　葵前　建禮門院の婢なり高倉帝之を寵幸す龍後宮を傾むく宮中呼んで葵女御と曰ふ帝其の聲を愧ちて復た遊御せず關白基房帝の意を察し間を承け養ひて己の子と爲し以て嬪御に充んと請ふ帝聽かずして曰く如し請ふ所位を去るの後なれば問々或は

專ら閭里小人の爲めに修身齊家の道を說く所謂心學是也弟子甚だ多し而して全門之れが嚆弟たり故に勘平の歿後全門相繼て其の業を修む（塙處傳）

アフブン　蛙文「ヤスダアブン」

アフラコウヂ　タカヂネ　油小路隆眞　權大納言隆貞の子なり蛙藤原氏寬文二年從五位下に叙し藏人頭、參議、左衞門督、權中納言を累歷して權大納言正二位に至り民部卿を兼れ享保十四年薨す時に歲七十隆眞嘗て曰く近年人名甚だ雜ならず周公撰む所の爾雅に佳字多し宜しく採用すべしと一子あり隆典と曰ふ官權大納言に至る（野史）

アフラコウヂ　タカナホ　油小路隆董　從二位隆晃卿の長男なり天保十年正月十二日を以て生れ嘉永元年八月從五位下に叙せられ同四年四月元服昇殿を許さる明治元年三月溟華御親征行幸內侍所供奉仰付けられ三年十二月宮中勤書仰付けられ九年十二月侍宮淑子內親王祇候仰付けられ十五年一月之を免ぜられ十六年十一月殿掌仰付けられ十七年五月加茂奏祭叶興勅使仰付けらる爾後加茂奏祭春日男山廟神社御勅上卿等奏向を每に仰付けらる二十八年八月家督を相續し伯爵を授けられ同九月殿掌取締仰付けらる三十四年六月從二位に叙し四十一年一月七十歲を賀し付御紋章盃下賜ぜらる同二月特旨を以て位一級を進め正二位に叙せらる同四月十三日病を以て逝く年七十洛東眞如堂に埋葬す

アフラヤ　ゴロザエモン　油屋五郎左衞門　大阪天滿に住す放逸無漸にして噴毒强盛下人を責め人を役すること獄卒の如し世人異名して山椒太夫といふ眞享年中の人又陸奥風土記に是に似たる事見えたり是れ三庄太夫淨瑠璃の出所と云ふ（人名故事早引）

アフラヤ　ジャウイウ　油屋常祐　茶人なり茶法を紹鷗に學びて能くせり泉州堺の人貴て青磁柑子口の花器を讃田信長に獻す世に名器の稱あり（茶人系譜全集）

アフラヤ　セウザ　油屋紹佐　茶人なり茶法を紹鷗に學びて能くせり泉州堺の人（茶人系譜全集）

アフラヤ　ソウミ　油屋宗咏　茶人なり茶道を紹鷗に學びて能くせり泉州堺の人（茶人系譜全集）

アベ　イセノカミ　阿部伊勢守「アベマサヒロ」

アベ　イラツメ　阿部娘子　和銅寶龜間の人なり和歌に工なるを以て其の名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に出づ（萬葉集作者履歷）

アベ　エツ　阿部兄雄　從五位上經益の孫、父を道守と曰ふ兄雄は延曆の末從五位下を授けられ少納言中衞少將を歷大同中從四位下に叙せられ大膳太夫參議近江守に遷り山陽道觀察使と爲り淮奏議石京大夫を拜し兼右兵衞督近衞中將を歷東山道觀察使と爲り正四位下に叙せらる幾內觀察使に遷りて官に卒す兄雄篁直にして才文武に涉る其職にあるや公廉の稱あり伊豫親王の廢せらるゝや帝方に震怒す群臣敢て諫むる者なし唯り兄雄固く爭ふ言聽れずと雖も時論之を偉とす（大日本史）

アベ　オキユキ　安部興行　大納言安仁の子なり秀才に擧られて對策及第す貞觀中大內記勸解由次官を授られ從五位下に叙せられ遣太宰府推問密告使と爲る元慶中民部少輔を歷上野介に累遷す初清和帝の太皇太后の崩ずるに遇ふや喪服の期未だ決せず諸儒をして之を議せしむ興行も亦與る（大日本史）

アベ　オクミチ　安倍奧道　和歌を善くす秀歌に多く萬葉集に載す寶字六年從五位下に叙せられ若狹守に任ぜられ轉じて大和守と爲る八年三階を超えて正五位上に叙せられ攝津大夫と爲る神護元年勅三等を授けられ左兵衞督となる從四位下に叙せらる景雲元年中務大輔と爲り三年叉左兵衞督に遷る寶龜二年是より先き事に坐して解官せらる是に至りて復た從四位下內藏頭に任ぜらる三年但馬守に遷る（萬葉集作者履歷）

アベ　カツタイフ　安部勝太夫　陸軍歩兵少尉なり宮城縣出身にして奎濤守備歩兵第一聯隊第十一中隊附となり土匪討伐中明治三十年二月六日同島太營附生蕾九碗社に於て戰死す

アベ　キウハ　阿部休巴　石州流の茶人なり牛雷龍示求と號す藤重藤藏に學び其の歿後水村不言より皆傳す嘉永六年六月歿す年六十九（古今茶人系譜）

アベ　コオヂ　阿部小祖父（小祖父一に小路に作る）宿奈麻呂と同祖なり和歌を善くするを以て知らる萬葉集中載する所多し累進して從五位下武藏守に至る（萬葉集作者履歷）

アベ　ゴンノジョウ　阿部權之丞　勤王家なり諱は信足字は貞廉猪三郎と稱し後權之丞と改む文政十年三月五日を以て近江國膳所に生る權之丞長ずるに及び學を好み文を好み京都谷森大和介に就て國史を修め傳記を好む和歌を習ひ又好んで佛書を涉獵し心理を鑽研す且つ深く武道に達し計策に長ぜしを以て文久元治の際大監察に任じ尋で勝手元締役に轉じ後に大砲方頭取となり祿百五十石を給せらる權之丞人と爲り篤實にして廉潔塞節あり又好んで慈惠を施す文久年中保田信解田河藤馬之丞等と勤王攘夷の議を唱へ屢々其徒を家に延き密談議論する所あり慶應元年遂に讒に遇ひ同志と共に獄に下り十月二十一日自刎に處せらる時に年三十九安昌寺に葬る明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる（膳所藩勤王家列傳）

アベ　サダタカ　阿部貞孝　陸軍少兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第六師團歩兵第四十五聯隊附として出征し八月三十一日清國盛京省マエトウン戰鬪の際負傷し第六師團第二野戰病院に於て療養中九月八日死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アベ　サダタフ　阿部貞任　賴時の長子なり厨川邑に居て厨川二郎と稱す容貌偉にして皮膚肥白なり長六尺餘にして腰圍七尺四寸安死するに及び家に其の兵を領す天喜五年十二月源賴義來り攻むと聞き自ら精兵四千餘を帥ひ出て入河磯柵に據り迎へて鳥海に戰ふ時に大風雪軍飢困す貞任精騎を縱つて之を衝き數百人を殺し更に驍騎二百餘人以て左右翼を張り爽み擊ちて大に之を破る賴義僅に免る貞任の兵勢甚だ盛なりA氏を刼略す別に藤原經清を以て兵數百人帥ひて衣川關を出て使を諸郡に遣し私符を用ひて官物を徵せしむ康平五年賴義清原武則等と兵を合して貞任の叔父僧貞照の檜を攻む貞照の軍潰ゆ阿倍宗任亦戰ひて敗らる之久しして官軍食に乏し貞任衆に謀りて曰く月頃日敵軍食盡き四散して櫓を求め營中の兵數千に過ぎずと我精兵を以て之れを襲はゞ則ち之を破らんこと必せりと九月精兵を率ゐ夜に乘じて之れを襲ふ官軍

備あり真任大に敗れて營に還る官軍追攻し火を縱ちて之を燒く營中大に亂れ自から相鬪擊して死傷甚だ多し退きて衣川を保つ明日官軍來り攻めて藤原榮近の柵を燒く真任火を望みて大に驚き又た退きて鳥海柵を保つ既にして官軍奄ち至る真任宗任戰はずして走り厨川の柵を保つ其の地西北は大澤にして二面は河を阻て岸の高きこと三丈餘柵上に雉堞を構へ陣中に丸太樹て鏃疾藜を施して守備甚だ固し官軍又た之を圍む真任矢石を發し沸湯を注ぎて拒守すること甚だ勉む鮏女數十艘に登りて歌を唱ひ以て官軍を激す輕蔑怒りて急に之を攻む真任擊ちて數百人を殺す官軍辰巳に起り櫓樓屋舍一時に焚蕩す賊兵大に潰亂す官軍圍を解めて之を出し橫擊殆ど盡くす真任劍を揮ひて出で戰ふ官軍鋒を攖めて之を刺す未だ死に至らずと之を大楯に載せ舁て輕義の前に至る輕義其の罪を責む真任言はず尋て死す時に年四十四（大日本史）

アベ　サダユキ　阿部貞行　大納言安仁の子なり仁壽中右兵衛權佐檢非違使と爲り齋衡天安の間左衛門權佐に轉じ大和守と爲る貞觀の初刑部大輔に任ぜられ攝津守と爲る母憂に丁りて職を解く詔して之を起す十四年正五位下陸奥守と爲る拜辭するに及びて引きて殿に上り酒食及び御衣を賜ふ明年奏して二十人以下を限り毎年叙爵に位階を授けんことを請ふ又曰く國司にして敬納に缺損するあらば其の公廨か零ひて先づ缺損を補はしめ然後ち科責せん云々と元慶中從四位上に叙し太宰大貳に任ぜられ國に詣りて辭見す御衣一襲を賜ふ拜辭して出づ親王公卿仗下に參侍し真行を遮り留めて之に饌す內藏の錢一萬を賜し碁を圍み酣宴して罷む是より先き少貳藤原房雄等固の寡を行ふ遂りて肥後守に任ぜらるる乃ち警固を勾當するの人なし真行奏請す警仗烽燧は是れ長官の職なり然れは即ち警固は例あり何ぞ必ず別に勾當を配せん宜く少貳の勾當を停めて府司宜しきに隨ひて處置すべしと又筑後豐後兩國司に令して先づ府司を經て後ち入京を許し若し府解なければ職を發することを得さらしめんと敕して之れに從ふ（大日本史）

アベ　サダヨシ　阿部定吉　參河の人大藏大輔と稱す（逸史に大藏少輔に作る）定吉德川清康に仕へて家政を執り安危を以て自任し恒に松平信定の異志を蓄ふるを憂ひ恭山軍中屢〻信を贈りて之れを諷停す時に怨家流言す定吉將に信定に逆ひて亂を作きんと すと人心恟々たり定吉乃ち子正豐を戒めて曰く我れ寵を蒙ること已に過ぎ因徒讒を構ふ唯〻我が君當に我が赤心を察すべし然りと雖も誹に之あり絲口金を鑛し積毀骨を銷すと其の災未だ知るべからず我れ若し戮せらるれば汝宜く身を草澤に藏め時を俟ちて之れを雪ぐべし縱令ひ下情上達せざるとも慎んで怨望するを勿れと憂悲累日なる會〻營中馬逸して東卒驟然たり清康起て之を觀る正豐刀を率じて從ふ響りて我が父殺されたりと聞き輙ち後より清康を弑す植村泰安進みて正豐を斬る上下震駭して爲す所を知らず時に天文四年十一月五日なり定吉變を聞き將に自殺せんとす松平信孝素より定吉の忠良なるを知る故に遽に之を止む時に德川長親尙ほ存す群臣喪を率じて岡崎に歸り定吉の處分を請ふ長親定吉の罪なきを察し特に之を宥す廣忠嗣ぎて立ち定吉を以て輔佐となす信定嘗て長親に寵あり百方懇密して國權を擅にしを怒り定吉を除て自立せんとす是に於て定吉懼れて廣忠を奉じ伊勢の神戸山田に赴き眷水太夫に寓し又東條の城主吉良持廣に賴り其弟正定及び大久保、酒井、石川の徒と謀を遂じ五年春長篠に赴き廣忠を民舍に寓せしめ騎州に往き周旋して終に廣忠を岩呂城に納る（岩呂は茂呂に作る）駿人之を請迎し國人多く來り屬す明年五月群臣相議し廣忠を迎へて岡崎城に入る十五年信孝功に誇り且つ廣忠の叔父たるを以て專恣を逞め常に詈謗して曰く定吉罪なしと雖とも其の子大犯を爲す君父を鏂けざると定吉之を聞き密り酒井忠次、石川清兼等と謀し其の岡崎の居第を收め捕へ之を囚し其の罪を責て曰く我れ嘗て信孝を怒りて三木及び岡崎の二城に據り尾張に屬す十八年三月定吉、太久保忠尊と今川氏の爲めに岡崎を攻めて之を取り進みて安祥を破ると乃ち命じて之を長崎に送り清客來來頻なして祝せしむ來頻嘆異す吉宗因て厚く將翰に賜ふ又大附子を蝦夷に得附子は從來專ら之を海外に仰ぐ是に至りて吉宗之を藥園に植ゑしむ數年の後卒に諸州に繁衍す朝鮮人參の種法亦將翰より始まる清商嘗て貝母栽正次の第二子初字を作十郎と稱す重次三浦重威の嗣子となり秀忠に近侍す後ち重威子重勝を生みて家を之に讓り近江の田三千石を割きて重次に與ふ重次慮徙部隊長となり叙爵せられて山城守と稱す寛永五年兄正澄卒して家に歸り族を復す九年（藩翰譜に七年に作る）慮徙部番頭となり十二年三月國政に參預し嘗て對馬守と改稱し猶ほ番頭を兼れ邑一萬石を賜はる十五年四月父の封邑四萬六千石を受けて岩槻城に居り尊ぎて老中となる十六年正月從四位下に叙せられ正保中邑一万石を加賜せられ父卒して其の後を繼ぎ邑九萬九千石を合せ領す慶安四年四月家光薨じ重次其の夜を以て殉死す是れ嚮に重次一死以て君に獻ず可しと云ひしとあるに因て然るなり時に年五十七なり（或は五十四に作る）法名は全巖淨心、芳松院と號す二子あり定高、正春と曰ふ（野史）

アベ　シンキチ　阿部信吉　陸軍步兵少尉なり山形縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第八師團步兵第廿二聯隊附として出征し廿八年一月廿七日滿國盛京省蘇麻堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アベ　シャウヨウ　阿部將翰　有名の本草家なり名は輝（一に照任に作る）字は伯重丹山と別號し友之進と稱す將翰は其號陸奥盛岡の人、延寶中清船に乘じて大坂（一說に江戸）に赴く途颶風に遇ひて清國に流到て福建に止ること十八年本草學を學び歸りて江戸に住す享保中幕府本草に通ずるものを求む將翰辟に應じて藥を東海北陸の諸州に採り三たび蝦夷に往く幕府其の勞を以て俸及び宅を賜ひ更に地を城東三十間堀に給して藥種を植ゑしむ將翰前後得る所の物品甚夥し藥石に至りては前人の未だ言はざる者多し其の甲州に在るや黃芩を得て幕府に進む時に舶來の黃芩僞物多し將軍吉宗謂らく國產の黃芩は延喜式の未だ載せざる所而して將翰始めて之を得其の功偉なり且以て西商の姦を破ると足ると乃ち命じて之を長崎に送り清客來來頻なして祝せしむ來頻嘆異す吉宗因て厚く將翰に賜ふ又大附子を蝦夷に得附子は從來專ら之を海外に仰ぐ是に至りて吉宗之を藥園に植ゑしむ數年の後卒に諸州に繁衍す朝鮮人參の種法亦將翰より始まる清商嘗て貝母栽

を獻ず吉宗偏く諸醫に命じて品評せしむ能く知るものなし乃將翰に就て問はしむ將翰曰く此貝母なり而して品質極めて佳なりと人益〻其の博識に服す相州雨降山の神廚に玉の如き一小石あり傳へて秘寶と言ふ而れども其の何たるを知らず將翰之を見て曰く是れ鮓答（イガラメッタ）と名く能く雨を致す以て祈らば必ず驗あらんと時適〻大旱即ち取りて之を試む果して驗あり又甲州金峯山水晶を出すの說あり將翰之を視て其の石英なることを辨ず其の精鑑博識大率此の如し其の他方藥を以て穀物に代へ甘蔗を種て砂糖を取り朱地佐を採りて蠟燭に代ふるの類皆世に用あり是の時京師に遠藤玄理と云ふものあり藥性に精しきを以て自負す嘗て本草辨疑を著はして和漢諸藥の精粗眞僞等を論ず將翰之を視て其の誤謬を指摘す玄理聞て大に服す遂に來りて贄を執ると云ふ將翰慶安三年を以て生れ寶曆三年正月神田三河街の宅に歿す享年一百四、翰人と爲り顏貌奇偉、人一見して其の凡ならざるを知る而して專ら力を實用の學に用ふ翰未幕府に仕へざる時關西に遊ぶ熊本侯藤孝侯其の能を聞き相ひ競ひて之を招かんと欲す將翰皆辭して從はず去て長崎に之き窮迫殊に甚し然れども專名物を考究するを以て己が任となし毫も榮辱を顧みずと云ふ著す所本草綱目類考、本草備襲、採藥雜記、採藥使記、將翰軒隨筆、全續隨筆、眞僞諸藥考、三百種考、藥性要覽、藥性裘擇記、人參耕作記、七十二侯辨、人參辨正、大雅之論、硫黃盃考、柳田雜記、精神考、其餘雜著叢錄の未定稿數十卷あり（皇國名醫傳、先哲叢談續編）

アベ　シャミマロ　安倍沙彌麻呂　萬葉作者の一人にて天平九年從五位下を授けられ十年少納言に任ぜらる十四年帝紫香良樂に幸し沙彌麻呂等六人を以て前次第司と爲す十五年正五位下に叙せられ左中辨と爲り正五位上に進む十八年從四位下に叙せられ勝寶元年從四位上に進み寶字元年正四位下に至り參議と爲る二年三月中務卿を以て卒す（萬葉集作者考證歷）

アベ　シュンアン　阿部春庵　儒醫なり天和二年本草纂言十三卷を著はす（日本博物學年表）

アベ　ジラウ　阿部二郎　豫備陸軍步兵少尉なり岡山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第十師團後備步兵第四十聯隊附として出征し八月三十日清國盛京省クウヤイ北方高地に於て戰死す

アベ　スクナマロ　阿部宿奈麻呂　比羅夫の子なり初引田朝臣と稱す持統の朝直廣肆より直大肆に進み食封四十戶を賜ふ大寶中造大殿垣司と爲る慶雲元年改めて姓を阿部と賜ふ二年中納言に任ぜらる和銅元年再び中納言に任ぜらる其の公平百僚に率先するを褒め宿奈麻呂に正四位上を授け尋いで遣平城司長官と爲す明年從三位に叙せらる養老の初め正三位に進められ大納言に至り四年に薨す（大日本史）

アベ　スエカネ　安倍季兼　樂師なり初名は兼行、本姓太秦、秦河勝の後裔にて天王寺の樂人なり東儀氏と稱す父を兼滿といふ世々篳篥及舞を以て樂と爲す應仁以後四海の喪亂を承け京師の伶官耗散し樂道廢頹す元龜年中に至りては則ち樂曲の奏法一に其傳を失し大曲の如きは聲樂もまた遂に亡ふ正親町帝大に之を憂ひ天王寺の樂人を京師に召す筐には廣遠廣康篳篥には兼行兼秋笛には昌永昌忠是なり皆な太秦姓たりまた是時朝典久しく廢闕し內侍所神樂の篳篥亦た用ふべきものなし則ち兼行に命じ之を奏せしめ姓を安倍と兼と改む然れども天王寺の樂人は世〻樂とするが故神樂の如きは其樂譜だに見ることを得ず季兼大に苦慮し遂に笙譜に依り篳篥を再興せしめ神樂を奉仕せりといふ德川家康天下を賜ふ是に於て季兼と改む帝親王公卿を御前に召し皆な唐樂譜を以て樂とすに見ることを得ず季兼大に驚て新製して御神樂を奉定むるに及び京師の樂官先職に復す安倍氏また御神樂を奉仕す是に於て京師に安倍兩姓あり共に朝廷に仕ふ季兼は天正年中從五位下四日卒す年五十三（東儀氏家傳）

アベ　スエケ　安倍季資　天王寺の樂人なり安倍季良の子なり安倍氏家の秘曲を傳へ名風に高し慶應三年從四位上修理權亮たり同四年三月十五日卒す年五十六（安倍氏家傳）

アベ　スエトホ　安倍季遠　京師の樂人なり季正の子によく父業を繼ぎ篳篥に堪能なり永暦元年右近衛府生に任ぜられ中從五位下左近衛將監に進み建暦元年九月廿七日卒す年七十六（安倍氏家傳）

アベ　スエナホ　安倍季尙　京師の樂人なり季正廿二代の孫にて父を季爲といふ元祿年間の雅樂名家たり正保五年正六位下左近衛大尉に任ぜられ元祿年中正四位下に進み伊勢守に任ず寶永五年十二月廿一日卒す年八十七著す所樂家錄三十卷あり當時樂統紊亂し多くは異說を傳へ失するを憂ひ則ち樂曲樂器の來歷を細叙し一家に傳へたるものなり（安倍氏家傳）

アベ　スエノブ　安倍季誕　近世雅樂の大家なり本姓太秦、季郛の子にて季政の孫なり伯父季邑養ふて子とす篳篥に巧妙にして安倍季資と並び稱せられ名聲藉甚なり文政六年九月從五位下薩摩守に任ぜられ弘化二年出雲守に轉じ安政六年從四位上に進む文久二年三月廿九日卒す年五十八（東儀氏家傳）

アベ　スエハル　安倍季良　雅樂の泰斗にして特に篳篥の妙を極む季康の子なり天明五年正六位下伊勢權介たり享和三年加賀守に進む內侍所御神樂の時帝麗〻吹笛し給ふ毎に篳篥を合奏す故を以て特に正五位下を授けられ兼て右近衛將監に任ぜらる天保五年更に雅樂助を兼れ嘉永二年秘曲相傳の賞として特に正四位上に進む安政四年十一月十五日卒す年八十三（安倍氏家傳）

アベ　スエマサ　安倍季政　京師の樂人也本姓太秦季兼六代の孫にて父を季通と云ふ寶曆中從五位下右兵衛大尉たり明和二年出雲守を兼れ文化六年正月舞樂御覽の時六十餘旬の高齡を以て傳家の秘曲還城樂を舞ふ其賞として四市正を兼任す文政二年十一月正四位上に叙す同月廿九日卒す年七十六（東儀氏家傳）

アベ　スエマサ　安倍季正　京師の樂人安倍氏の鼻祖也篳篥を善くする以て稱せられ季正の後世々神樂及唐の樂儛を兼ねし朝廷の樂官たり久安四年從五位上左近衛將監に任ぜらる長寛二年八月八日卒す年六十六（安倍氏家傳）

アベ　スエヤス　安倍季康　有名の篳篥師なり季尙の曾孫にして寛保元年初めて正六位下に叙せられ左兵衛少尉に任ず明和二年內侍所御神樂の時宮人の秘曲篳篥音取を再興せる功に依り正五位下を授けらる安永四年雅樂助に任ぜられ後ち伊賀守を兼ぬ享和二年技藝絕妙を以て正四位上に進む同年三月十二日卒す

年七十二(安倍氏家傳)

アベ セイメイ 安倍晴明 有名の天文博士也右大臣御主人の後、父は益材、大膳大夫たり、晴明初め賀茂忠行及び其の子保憲に從ひて陰陽推算の術を學び職神を役使し天文を解し雜占を曉る奇中神の如し進みて從四位下に叙せられ天文博士、大膳大夫、左京大夫、播磨守を累歷す世傳て言ふ華山帝の位を遜かれ夜潛かに宮を出づるや嬪妾と雖も之を知らず是夜晴明暑を庭中に避け仰て天象に變あるを見大に驚き走りて朝に詣る帝果して在さず長德中術士あり左大臣藤原道長に告げて曰く某日家當に怪あるべしと期に至りて道長門を杜ぢ客を謝し唯ゝ鎭守府將軍源賴光醫師丹波忠明僧正勸修及び晴明を招く會ゝ大和瓜を獻ず道長疑ひて食はず晴明曰く瓜中に毒ありと勸修咒を唱ふ其の瓜跳躍圓轉して止まず忠明針を以て之を刺す瓜乃ち動かず賴光刀を拔きて瓜を斫る中に小蛇あり針其の眼に中り刀其の頭を斷つ、道長の家に一犬を畜ふ出づる每に必す隨ふ一日將に法成寺に往かんとす犬前を遮りて吠え衣を銜みて之を牽く道長怪みて寺門に入らず晴明を召して之を問ふ晴明曰く相府を咒詛する者あり厭物を此に埋むと因て一所を指示し之を掘りて泥封の土器を得内に一字を朱書するあり晴明曰く世此術を知る者なし必ず道滿法師の所爲ならんと乃ち紙を結びて鳥形を作り咒を誦じて之を投ず化して鷺と爲り飛び去る因て人を遣して其後に從はしむ萬里小路河原院側の民家に止まる衆其の主を執て來る果して道滿なり鞠問して實を得道滿を播磨に逐ふ又園城寺の僧智興病んで將に死なんとす其の徒晴明に病を祈らんことを請ふ晴明曰く師の病起たず我に秘符あり以て他人に移すべしと僧證空代り死せんと請ふ晴明符を書して祈る智興立どころに癒え證空忽ち病を甞て陣座を經藏人某が鳥の爲めに穢さるゝを見て謂へらく鳥は則ち職神なり此人必ず職神の祟あらんと依て之に告げて曰く子の命は今夕に過ぎずと其人涕泣して救を求む晴明隨ひて其の家に至り通夜之を擁して誦咒す曉に及びて門を叩く者あり之を問へば即ち厭禱を致す者自ら來りて實を吐き大に叫んて暴死す其卒に免るゝを得たり晴明の要職神を畏る故に之を一條反橋の側に置き事あれば即ち召して之を使ふ其の門戸守者なくして常に開闔す時に播磨の人智德と云へる者あり亦た方術を能くす晴明を試んと欲し偽りて術を習ふ者の爲れして其の家に造る二童子從ふ晴明以爲らく彼れ我術を試んと欲するなり二童子は蓋し職人なりと是に於て心念手印して密に二童子を匿し而して謂て曰く今日事あり請ふ他日を竣んと智德去る少時にして復た來りて曰く我二童を失す意ふに卿の匿せしならん晴明笑ひて曰く我知らず智德叩頭して已まず晴明曰く子我を試みんと欲す而して我之を知らずと謂ふ邪何ぞ我を料るの淺きやと乃ち誦咒す二童忽ち出づ智德歎服して曰く卿は神と謂ふべしと遂に之に師とし事ふ初め天德中節刀災に罹る人其の制を知る者なし詔して晴明に問ふ晴明木樣を作り之を獻ず著はす所金烏玉兎集(一名簠簋袖裏傳)古事略決一卷あり(大日本史)

アベ ソウケン 阿部棕軒 福山城主也字は子純、棕軒と號す備中守侍從に任せちろ性畫を好み沈南蘋の畫法を愛して遂に其の妙所を得花卉鳥獸に巧なり其の傑作なるものに至りては南蘋に齊し設色多くして水墨少なし又詩文を能くし當時增山雪齋と名を齊うす文政九年六月二十日卒す年五十三(扶桑畫人傳)

アベ タカボシ 安倍高星 貞任の次子也敗るゝや乳母之を抱きて津輕藤碕に匿る後ち遂に其の地を領す(大日本史)

アベ タダアキ 阿部忠秋 德川幕府の老職也正吉(一本阿部家譜に忠吉に作る)の子にして初字を小平次と稱す忠秋年甫めて九歲德川三代將軍家光に近侍して夙夜怠らす元和三年米廩を賜はり膳番となり九年扈從部番頭となり尋て從五位下に叙せられ豐後守と稱す寬永元年父の采邑六千石を襲ふ明年春邑四千石を加賜せられ併せて一萬石を領し累れて食邑を賜はる九年冬少老職となり番頭を兼ね十年春政事に參預し尋て老中に補せらる十一年秋從四位下に叙せられ十四年再び邑を加賜せられ下野の壬生城に居り合せて五萬石を領す十六年武藏の忍城に移り一萬石を加へらる(或は云く是月二萬五千石を加賜せらる)正保四年復た一萬石を加賜す慶安三年四代將軍家綱の西城に徙るや忠秋命を受けて之に傅たり明年八月侍從に任ぜらる是冬十二月諸老會議す酒井忠勝曰く由井正雪等の餘黨を懲らさんが爲め悉く府下所在の浪客を放逐せんと忠秋曰く無辜の諸客を他邦に放つ恐くは仁政に非らずと井伊直孝亦た忠秋に同意し遂に放逐の議罷む明曆元年六月忠秋請ひて再び從父弟正能を以て嗣となす寬文三年春邑一萬石を加賜せられ八萬石を領す十一年夏職を辭す後ち延寶三年五月卒す時に年七十四なり法名を隆譽天期空烟秀玄院と號す忠秋資性廉直敦厚能く人を愛し府下棄兒あるに遇へは則ち命して拾納せしめて曰く大郡に棄兒あるは執政の恥なり之を收むるは亦職事を治むるなりと之れを邸第に撫育す其の鞠養する所數十人あり而して男子は給仕せしめ女子は皆な婚嫁せしむと云ふ正能繼ぐ(野史、本朝武林傳)

アベ タダマサ 阿部忠政 德川家康の家臣也大久保忠次の子初字を四郎五郎と稱す後ち四郎兵衞と更たむ阿部正定嗣子なし忠政を養ひて子となす忠政武を好みて射を善くす天文十四年年十四にして織田信秀の將某を射殺す以後諸所の役射を以て敵を苦むるを多し弘治元年蟹江城を攻めて杉浦大八郎五郎吉貞同八郎五郎勝吉大久保新八郎忠勝同半右六忠員同七郎右衞門忠世同次右衞門忠佐等と七本鎗の名譽を得又酒井將柴田勝家を射て之を地に仆す尾人之を援けて去る其の他勇戰多し後長子を喪ひ官を辭す家康屢々之を召還す天正十二年五月歿す(本朝武功傳、野史)

アベ タンサイ 阿部淡齋 府內藩の儒者にて名は正令字は子恭通稱六郎世々藩に仕ふ廣瀨淡窓竹內鳳洲佐藤一齋に學び藩の文學に擧げられ後藩黌遊焉館の敎師たり維新後藩の諮詢方となり尋て權大屬となる六年致仕し家塾を興し綠游園と稱し後進を誘啓す生徒三百人に至る明治十三年四月廿四日歿す年六十八爲人溫良にして博聞强記詩を善くす(日本敎育史資料)

アベ チカヨシ 安倍親良 儒醫なり盛親の子、保元應保の間侍醫能登權介たり(皇國名醫傳)

アベ ヂウタラウ 阿部重太郎 陸軍步兵中尉也秋田縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け第八師團步兵第十七聯隊附として出征し卅八年三月六日淸國盛京省寧官屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アベ チヨドウジ 安倍千代童子 貞任の長子、容色美にして驍勇、頗る祖父の風あり貞任敗るるに及んで柵を出てて戰ひ官軍に獲らる源賴義之を憫みて死を宥めんと欲す淸原武則進み諫めて曰く將軍小仁を思ふて大害を遺す莫れと賴義其の言を然りとして之を斬る時に年十三(大日本史)

アベ ツギマロ 阿部繼麻呂 萬葉集作者の一人にして秀歌多し天平七年從五位下に叙せられ八年遣新羅大使と爲る(萬葉集作者履歷)

アベ トウリム 阿部童琳 江戸の畫家なり名は貫、字は董琳字を以て行はち蠢拙と號す通稱隼太郎(續墓所一覽)

アベ ナカマロ 安倍仲麻呂 (麻呂一に滿に作る)中務大輔船守の子なり性聰敏にして讀書を好む從八位上に叙せられ靈龜二年選まれて遣唐留學生と爲る時に年十六唐に往て留學し博識の名あり姓名を易へて朝衡と曰ふ玄宗帝左補闕を授け儀王の友と爲し(古今集鈔に曰く唐朝仲麻呂に姓を朝名を衡字を仲と賜ふと未だ孰れが是なるを知らず)且唐人王維等詩を贈るに朝或は鼂に作る又た文苑英華に包佶が日本國聘賀使晁臣卿の東歸を送るの詩あり李白集に日本晁卿と稱す晁鼂と通す臣卿は蓋し仲麿呂の字ならん)秘書校書に遷し後祕書監に至り衞尉卿を兼ぬ勝寶中遣唐大使藤原淸河唐に至る玄宗仲麿呂をして之れに接せしむ淸河の還るに及びて仲麻呂與に歸らんと欲す玄宗因て命じて使と爲す乃ち詩を賦して曰く銜レ命將レ辭レ國、非才忝二侍臣一、天中戀二明主一、海外憶二慈親一、伏奏違二金闕一、騑驂去二玉津一、蓬萊鄕路遠、若木故園隣、西望懷二恩日一、東歸感二義辰一、平生一寶劍、留贈二結交人一、尙書右丞王維も詩并に序を爲りて行を送る包佶、趙驊等も皆贈るに詩を以てす既にして明州に至り唐人と別る仲麻呂月を望みて悵然として和歌を詠じて曰く「あまの原ふりさけ見ればかすがなる三笠の山に出し月かも」因て寫すに漢語を以てして之に示す衆皆感歎す海上風に遭ひて安南に漂泊す唐人以爲く仲麻呂溺死すと翰林供奉李白詩を作りて之を哭す仲麻呂淸河と復唐に至る肅宗左散騎常侍安南都護に擢んで光祿大夫に至り御史中丞、北海郡開國公を兼ね邑三千戶を食む寶龜元年正月唐に卒す年七十代宗潞州大都督を贈る仲麻呂嘗て書を作りて新羅宿衞王子金隱居に憑て鄕親に寄す新羅使金初正其の書を持して至る仲麻呂唐に在ると凡そ五十餘年身は榮ふと雖も歸思多し言鄕國に及ぶ每に未だ嘗て悽惻せずんばあらず寶龜十年勅して曰く前の學生阿倍朝臣仲麻呂唐に在て亡ふ家口は單乏にして葬祭闕くることあり其れ東絁百匹白綿三百屯を賜へと承和三年因て遣唐使に命じて正二位を贈る(大日本史)

アベ ナガユキ 阿閉長之 (或は義秀に作る)淺井長政の將なり淡路守と稱し近江國山本山城に據る永正十四年淺井亮政の爲めに陷らる後ち二年之を復す天正元年八月淺井長政に叛きて織田信長に降る淺井氏亡ぶるに及びて伊香郡(或は志賀郡に作る)二萬五千石を賜はり山本山城に居らしむ後ち信長の弑せらるるや長之明智光秀に屬し京極高次と謀りて將に長濱を取らんとす而して光秀の亡ぶるに及びて亦出亡し終に殺さる(野史)

アベ ノブカツ 安倍信勝 元眞の子なり字を彌一郎と稱す信勝父と與に德川家康に仕へ夜木巢砦を襲ひて之を拔く後ち小牧の役に平城を守り又た長湫の役及び蟹江城の戰に從ひ功あり天正十八年下總の田五千二百五十石を賜はる慶長五年正月死す時に年四十九、子信盛繼ぐ(野史)

アベ ノブモリ 安倍信盛 德川家康の臣なり信勝の子庚子の亂多田正信の隊下に屬して軍に從ふ又た大坂冬夏兩役に從ふ後ち從五位下に叙せられ攝津守と稱し累りに食邑を加賜せられ書院番頭を歷て大坂城番となる子孫相繼て武藏の岡部に居ると云ふ(野史)

アベ ハマナリ 安倍濱成 儒醫なり典藥頭となり從五位下に叙せらる(皇國名醫傳)

アベ ハルミチ 安倍晴道 陰陽權助兼天文博士たり仁平三年三月朔卒す年六十八(本朝世紀)

アベ ヒコタラウ 阿部彥太郎 大阪の實業家なり天保十一年七月近江國神崎郡能登川に生る長じて相場社會に雄飛し其一言一行は優に市場の大勢を左右するに足るものあり大阪商船東洋汽船其他幾多の會社銀行に重役として敏括堅忍を以つて廣く其名を知られたり明治三十七年五月五日を病を以て東京の寓居に逝く年六十五大阪生玉西の島居南隣大蓮寺に葬る

アベ ヒラフ 阿倍比羅夫 或は阿倍引田臣と稱す齊明帝の時越の守と爲る四年勅を奉じ舟師一百八十艘を率ゐて蝦夷を伐つ鰐田渟代二郡の蝦夷降を乞ふ比羅夫遂に渟代、津輕郡領を定め渡島蝦夷等を會し大に饗して歸る又肅愼を伐ち生熊二、羆皮七十張を獲歸て之を獻ず明年再び蝦夷を伐つ飽田、渟代、津輕三郡及び膽振鉏蝦夷二百七十三人降る三十五人を集め之に賜ふに船一艘と五色の綵帛とを以てし以て其の土神を祭らしむ進みて肉入籠に至り郡領を置き遂に肅愼を伐ち四十九人を虜にして歸る比羅夫及び道奧國司に位各二階を賜ふ六年戰艦二百を率ゐて肅愼を伐つ陸奧の蝦夷を將て大河の側に至る渡島の蝦夷千餘河に向ひて營す蝦夷二人營を出て呼びて曰く肅愼の舟師多く來り將に我を殺さんとす願くは河を渡て相屬せんと比羅夫船を命じて之を召し賊の伏する所と其舟數とを問ふに蝦夷其の處を指し且つ曰く舟二十餘艘と因て使を遣して賊を召す賊敢て來らず乃ち綵帛兵鐵を河畔に積みて之に餌す賊羽を繫て旗と爲し舟師來り近く既にして和を乞ふ比羅夫聽かず其柵を攻む能登馬身龍賊の爲に殺さる比羅夫遂に賊を破り五十人を虜にす天智帝の時前將軍阿曇比羅夫と百濟を救ふ時に大華下後將軍たり尋て前將軍上毛野稚子等と新羅を討て唐兵と戰ひ利あらず百濟の諸將王師に隨て來投す比羅夫筑紫の太宰の帥より大錦上と爲る子あり宿奈麻呂と云ふ(大日本史)

アベ ヒロニハ 阿部廣庭 大彥命の後なり天武帝の十三年姓臣を改めて朝臣を賜ふ和歌を善するを以て名あり秀歌は多く萬葉集中に載す第三卷第八卷等比々皆な是れなり慶雲五年父右大臣從二位御主人の功封百戶の四分の一を傳賜せらる伊豫守宮內卿を歷て養老二年正四位下を以て左大辨に任ぜられ六年朝政に參議す是年河內和泉の事を知す七年正四位上に叙せらる神龜中從三位に叙せられ中納言と爲り造宮長官を兼れ天平四年病を以て薨ず(萬葉集作者履歷)

アベ マサカツ 阿部正勝 德川家康の家臣なり正宣の子初字を善九郎と稱し又善右衞門と更む姓は藤原氏八田知家の後、參河の人なり天文十六年正勝

年甫めて八歳德川家康に黍田に從ひ常に左右に侍し大小の爭戰一として從はざるなし殊に武田勝頼と天龍川の戰に於て最も勇功を顯はしたり天正十年旗隊長となり食邑を賜はる十四年從五位下に叙せられ伊豫守と稱す十八年豆州方原の地五千石を賜はる（一本家譜に武藏鳩谷に作る）後ち慶長五年四月卒す時に年六十歳子正次嗣ぐ（野史、本朝武功正傳）

アベ　マサズミ　阿部正澄　阿部備中守の子なり大坂の役父に從て家康の軍にあり先鋒となりて敵の勇士五人を斃す又岡山の戰に敵將淺井三浦の兵一萬人の中へ切り込み遂に之を追ひ散したり上總大多喜城に居る寛永五年卒す年廿六（本朝武功正傳）

アベ　マサタカ　阿部正喬　正武の子なり從五位下に叙せられ出羽守と稱す又飛驒守と改たむ采邑一萬石を賜はり奏者番寺社奉行と爲る後ち父の後を繼ぎ其の食邑を襲ふ從四位下に叙せらる正德元年老中に補せられ更らに豐後守と稱す尋で侍從に任ぜらる享保二年職を辭す正喬父に事へて季朝夕膳を羞むる毎に自ら次座に候し其の終るを待ちて後ち自ら食すと云ふ子正允繼ぐ（野史）

アベ　マサタケ　阿部正武　正能の子なり正武從五位下に叙せられ美作守と稱す著職に歷任して老中となり更に豐後守と稱す從四位下に叙せられ尋で侍從に任ぜらる正武才智ありて能く獄を斷ず初め寺社奉行の職に在るに常り越後家の訟獄起り正武小栗正矩永見長其及び荻田主馬を江府に召て其の評論を聞く正矩口辯明瞭にして動遁の印書を取り以て證左となす正武遽ち聲を勵して曰く吁汝の不忠は印書に顯然たり苟も其主の家政を執り證書を收めて以て他日の變に備へて己れの奸邪を覆ひ家亂を謀る是れ惡むべきの甚たしきなり我儕の如き職に在りて何ぞ悉く印證に因らんや公直清廉を以て旨となし諸事を裁斷して敢て違屈あるなしと正矩面灰の如く言語忽ち屈し遂に其の罪に伏す乃ち正矩を松平綱昌の第に其の子大六を松平綱政の第に禁錮し并に死を賜ふと云ふ子正喬繼ぐ（野史）

アベ　マサツグ　阿部正次　正勝の子なり小字を德千代と稱し又た善九郎と更たむ姓は藤原氏八田知家の後裔河の人なり天正十八年正次邑を下總の地に賜はり父の後を繼ぎて書院番頭と爲る是を從五位下に叙せられ備中守と稱し相州一宮の田五千石を加賜せられ慶長十五年下野鹿沼の田五千石を領し武州鳩谷に居る慶長十五年下野冬夏の兩役共に從ひて縱横奮戰し大に功を樹て采邑を加へらる元和九年武藏の岩槻城に移りて邑五千石を食む（藩翰譜に云く大坂軍後岩槻城三萬石を賜はり元和に補せられ寛永三年四月食邑三萬石を加賜せられ命を受け赴て大坂城を守り併せて邑八萬六千石を食む正保元年冬從四位下に叙せらる四年十一月疾に罹り大に篤し子重次他に在り病を聞て驛せ到り奉行及び城番堅に謂て曰く父の疾危篤なり若し城中に死せば殿宇を穢さんと願くば別業に還りて其の終を遂げしめんと衆議皆な之れに應じ重次之を諾る正次曰く我れ敢て諫を拒むには非らざるなり昔し文化中晉國の使者長崎に來り闔所に非らざるも我の命を受けて此の城に守たるや其の船の武器を官に付して滯泊半歲に至り終に其の請ふ所を得ずして去れり願くは當時太平已に久しく武備惰廢や文化を距る僅かに五十年にして今日の孱を取るに至る雖ども我が國威尚ほ能く海外に振ふを知るべし今三年正之又命を奉じ江戸城下潰路を巡視し水道の事を沙汰す六年又江戸城三の丸虎口石垣普請の時も正之の管理する所たり此年より堅年に亘る迄正之伊豆・相模・駿河に赴き役夫を以て大に巨石を江戸に運はしめ八年江戸城主殿を造り石垣を築く九年正之祿千石を加增せらる是の年越前忠直配流せらる正之命を奉じ越前に赴

アベ　マサヒロ　阿部正弘　德川幕府の臣なり伊勢守と稱す正弘少にして老中と爲る嘉永年間米國の使節渡來し幕府其の要請を聽くに及び正弘深く慚愧して曰く時勢の推移國運の隆替殆と人力の能く及ぶ所に非らざるなり昔し文化中晉國の使者長崎に來り闔船の武器を官に付して滯泊半歲に至り終に其の請ふ所を得ずして去れり願くは當時太平已に久しく武備惰廢や文化を距る僅かに五十年にして今日の孱を取るに至る雖ども我が國威尚ほ能く海外に振ふを知るべし今三年正之又命を奉じ江戸城下潰路を巡視し水道の事を沙汰す六年又江戸城三の丸虎口石垣普請の時も正之の管理する所たり此年より堅年に亘る迄正之伊豆・相模・駿河に赴き役夫を以て大に巨石を江戸に運はしめ八年江戸城主殿を造り石垣を築く九年正之祿千石を加增せらる是の年越前忠直配流せらる正之命を奉じ越前に赴

のと爲し又吾れ數〻水戸の邸に至るを觀れば之を嘲笑して以て好事家と爲す（嘉永六年米艦浦賀に來り書を水府に呈して通信を乞ふ時に昇平日久しく事意外に生ず幕議姑息の旨とす是の時水戸烈公名望最も隆く且其の言驗あるを以て親ら駒籠の邸に詣り將軍の旨を稱し出て幕議に參するを勸む烈公遂に從ふ）是れ皆な晉の淺識庸才を以て人の上に在るの致す處なり將に其の任に勝るの人を擇みて之に讓らんと欲すれども其の人を得る能はず又願れば國家の多事に方りて危を避け安に就く是れ臣たるの義に非らず故に忍びて今日に至ると或は曰く正弘國事の爲すべからざるを視て職を辭せんと欲すと雖ども責任方に重きを以て能はず即ち酒色を恣にして羸弱を速き安政四年に至りて卒すと（續愛國偉跡）

アベ　マサユキ　阿部正之　重政の子なり德川秀忠に仕へて初め御書院番たり慶長十六年御使番と爲る十八年目付役となり伏見城に赴く十九年秋八月秀忠の命を奉じ目付として將に肥後に至らんと偶〻大坂大亂あり正之秀忠に從て入坂し常に左右に在て命を聽く十一月命を以て河内より攝津に行き尼ヶ崎中島を經歷して諸軍を按察す正之曾て地理に精し本多正信と與に築營の利害を論じ大に稱賛せらる又武事に長じ大坂の役屢々戰功を著はせり時に大坂和議成るに及び正之朝比奈源六と與に秀忠の命を奉じて肥後に赴き國事を沙汰す是れより先き國主加藤忠廣幼弱なり其の家宰加藤美作本多正純等竊に大坂に通じ熊本城を守る正之源六と議し忠廣の家臣神尾力を召て美作の譴謀を論じ美作を筑後堺南關屋城に移し又忠廣の繼母を攜へて本丸に居らしめんとす會〻大坂城陷る美作譴誅せずして罷む正之源六と肥後より江戸に歸り悉さに言上す元和二年十月江戸神田の堀を驅り土手を築く正之其の工事を董す又日光宮殿造營材木水陸運漕の事を奉行す三年正之又命を奉じ江戸城下潰路を巡視し水道の事を沙汰す六年又江戸城三の丸虎口石垣普請の時も正之の管理する所たり此年より堅年に亘る迄正之伊豆・相模・駿河に赴き役夫を以て大に巨石を江戸に運はしめ八年江戸城主殿を造り石垣を築く九年正之祿千石を加增せらる是の年越前忠直配流せらる正之命を奉じ越前に赴

き國事を沙汰し翌年八月江戸に歸る寛永二年五月正之旨を奉じ江戸城下宅地の事を沙汰して諸士に分與す五年江戸普請あり正之之を掌る翌年の秋に至て事畢る十年家光五百石を加へ十一年家光に從て入洛す十七年日光御參詣の時も正之其の供奉たり正之幼にして敏捷更才あり屢〻德川氏の爲に力を效して功業を建つ其の肥後の處分の如き江戸城築造の如きは尤も著るしきものなり子正重家を繼き普請奉行たり後ち小普請に入り元祿十年死す子四郎五郎家を繼ぐ

アベ　マサヨシ　阿部正吉（阿部家譜に忠吉に作る）德川家康の家臣なり正勝の子、初字を善七郎と稱す弱年より家康に仕ふ天正十八年軍に從ひて小田原城を圍み銃に中りて傷く慶長四年食邑を賜はり徒歩隊頭と爲る元和元年大阪の師に從ひ奮戰して敵兵を挫き軍終り諸士の剛怯を糾問するに及び正吉命を受けて之を監證す三年正吉邑五千石を加賜せられ從五位下に叙せられ左馬介と稱し大番頭となる子忠秋嗣ぐ（野史、本朝武功正傳）

アベ　マサヨシ　阿部正能　正澄の子なり幼にして父を喪ひ叔父重次に養はる寛永十五年祖父正次の封一萬石を割受して上總の大多喜城に居り東市正と稱す又重次の遺邑を分ち受け合せて一萬六千石を領す後同族忠秋の嗣となるに及びて六千石を以て從父弟定高に還附す尋で從五位下に叙せられ播磨守と稱す邑九萬石を領す延寶元年老中となり尋で從四位下に叙せらる後ち疾を以て致仕し入道して養拙と號す子正武嗣ぐ（野史）

アベ　マナホ　安倍眞直　儒醫なり衛門佐、大舍人助、相摸介を歷て少納言左近衛少將に累遷す勅を奉じて出雲廣貞等と醫方一百卷を撰集す大同三年五月書成りて奏進す名けて大同類聚方と曰ふ之を本邦方書の鼻祖とす（皇國名醫傳）

アベ　ミツシ　阿部御主人（天武紀朱鳥元年持統紀八年並に布勢朝臣と書す十年阿部朝臣と書す續日本紀大寶元年の文に據れば御主人の本姓は蘇し阿部普勢臣にして更に姓を朝臣と賜ふ但し其の布勢を改めて阿部とするは年月考ふる所なし）天武帝の功臣也直大參に位し持統の朝臣廣肆に累進し封二百戶を增す前に遡じて五百戶、氏上と爲り大納言に任ぜられ貢人八十人を假せられ文武帝巡察使の奏を以て諸國司の善政を賞し御主人を正廣參に進む（本書天武紀に其の何の國司たるを載せず今考ふる所なし）大寶元年改めて從二位を授け右大臣に拜し總五百四絲四百絇布五千段銀一萬口鐵五萬斤備前備中但馬安藝の田二十町を賜ひ又壬申の功臣たるを以て一百戶に封せられ四分の一を其子に傳へしむ三年薨ず朝廷正三位石上麻呂を遣はして弟に就て弔祭せしむ御主人和歌に妙なり萬葉集等に載する所頗る多し（大日本史、萬葉集作者歷）

アベ　ミツクニ　阿部光國　裝劍彫工なり俗稱か升屋義兵衛と云ふ京都富小路御池町上るに住す裝劍奇賞）

アベ　ムネタフ　安倍宗任　頼時の次子良任の弟なり烏海三郎と稱す康平中貞任と衣川に據りて反す軍敗るゝに及びて泥濘中に投して免るゝを得弟家聞て弟則任及び金爲行、同則行、金經永、任等降るを聞て弟則任及び金爲行、同則行、金經永、藤原業近等と出て降る七年源頼義宗任等を以て京師に至り宗任を伊豫に放つ宗任頼義の家に在りて義家に親近せらる後ち僧と爲て筑紫に居る松浦黨は其の後なり（大日本史）

アベ　モトザネ　安倍元眞　駿河今川氏の臣なり刑部大輔信眞の子にして大藏と稱し姓は滋野氏駿河の人なり父の後を繼ぎ今川氏に仕へ岡部正綱及び子信勝と氏眞の命を受けて駿府城を守るや武田信玄人を遣はして元眞を招く元眞應ず而れ共其の終に守る能はざるを察し去りて食邑安倍谷に閑居す信玄之を怒り命を伊川の七邑、田代、河内の郷に傳へ惡賞を以て之を戮せて拒戰し四五人を斬り擊を攜へて遠州に赴き告げ命を受けて田代に往き悉く其の曾長を斬る後ち武田信玄駿河を攻め禁を諸處に築くに及び元眞家康の命を受け攻めて悉く之を屠る時に天正五年九月なり家康書を賜ひて元眞の功を賞す後ち十五年十月卒す時に年七十五法名を心清淨安と號す一子あり信勝と曰ふ（野史）

アベ　モトヒサ　安倍基尚　儒醫なり延喜の勅典藥允となる（皇國醫傳）

アベ　モリチカ　安倍盛親　儒醫なり圓弼の子醫術を丹波雅忠に學ぶ典藥允侍醫兼采女正丹波介等に歷任す永久二年の秋大納言宗通戀を病みて劇し盛親之を診し即ち先づ鍼を以て瘡口を挑り水を注射して膿を去る〻と二三日次に艾灸を加ふ幾もなくして癒ゆ（皇國名醫傳）

アベ　ヤスクニ　安倍泰邦　朝廷の曆學者なり寶曆四年冬十月泰邦に詔して曆を改めしめ名けて寶曆甲戌曆と曰ふ貞享以降數年を距て一曆を用ふるに推步の法天と差あり因て今泰邦をして此の曆を作らしめ以て之を天下に頒布す（三國雜談）

アベ　ヤスチカ　安倍泰親　晴明五世の孫なり家學を善くし占候差はず世呼びて指御子と曰ふ其の推す所掌を指すが如きを謂ふなり嘗て雷其の家に震ひ泰親の背に觸れ衣裳灼するに至る而して身損傷する所なし顧る其の毒に中るを疑え地黃酒を煎して之を服す即日にして癒ゆ人傳へて以て奇と爲す祇園社嘗て災に罹る泰親時に陰陽博士たり之を占ひて曰く六月壬子內裏當に災あるべしと期に至りて土御門內裏果して火あり人以て神と爲す治承三年十一月京師地大に震す剋を移して巳まず泰親驚て奏して曰く告徵鈴なり其の應遲きに在らんと言ふ未だ學らざるに淵泗を下る左右皆な曰く方今天下平安何の虞か之あらんと相顧みて其の狂躁を笑ふ未だ旬を踰えざるに平清盛數千騎を率て福原より還り關白基房を流し延臣數十人の官を削り意猶ほ足らず法皇を鳥羽殿に幽す適〻且鬼あり翻覆して悲鳴し法皇に向ひて踊躍し去る法皇之を怒みて泰親に問しと法皇未だ之を信ぜず清盛の子重盛父の狠戾を患ひ諫爭苦到して法皇を八條鳥丸に遷し防禁稍〻弛む意始めて安ずと雖ども既にして以仁王兵を起す克たずして死す時人其の術に服す（大日本史）

アベ　ヤスヒト　安倍安仁　治部郷東人の孫、參議太宰大貳寬麻呂の子なり左京の人、身の長六尺三寸姿貌魁偉にして威重あり弘仁中山城大掾と爲り昇殿を聽さる心清淨安と號す一子あり信勝と曰ふ（野史）

アベ　モトヒサ　安倍基尚　儒醫なり延喜の

ざるに從五位下を授けられ信濃介に叙せらる事を視る三年境内肅然なり任滿るの年位一階を進め以て奬勵す、藏人頭に補せらる承和中兵部刑部大輔を歷太上皇に蟋蟀に侍す太上皇甚はだ信任し院の別當と爲す事大小となく安仁をして決せしむ是より先き院の事壅滯す安仁職に臨みて數月に平理す太上皇深く之を嘉みす尋て治部大輔に遷る太上皇曾て從容として諸國の吏才を評論して曰く安仁信濃を治るの能に若くもの無しと頗ち牙笏玉帶金魚袋及び御衣一襲を賜ふ有識相賞して曰く是れ宰相の鴻漸也と從四位下に累進し參議兼刑部卿豪帥となる（六郡とは即ち伊澤、和賀、江刺、稗抜、志波、岩手なり）四、白河關に界し東、率土濱に抵る衣川の形勢其中央に當り險に據り關を設く名けて衣川關れ別當を停む自後院の事は理せず敕して復た別當を兼れしむ辨官の務晨を凌て入衙す安仁公務を終るや常に蟋蟀に詣る朝廷其の往還煩劇を恤みて大藏卿に轉ず文德帝の儲宮に在るや春宮大夫たり兼下野守彈正大弼を歷て校河内和泉田使長官兼右大辨と爲り從三位に叙せられ中納言兼民部卿に任せらる春宮大夫は故の如し文德帝位に即て正三位を授けらる齊衡中陸奥出羽按察使を領し權大納言に任せらる安仁志尚謙虛にして公を親る家の如し子弟に謂て曰く謙國の調庸は多く封家に入りて官に納むる者は少なし食する所の邑身に於て餘ありと乃ち上表して大納言食する所の封を減じて中納言の封を給せられんとを請ふ帝之を嘉みして特に請ふ所なくして大將を辭す表再び上る之れを許す直觀元年薨す年六十七安仁政治に練達し朝章に明かなり參議あると雖も毎に應對滯ほることなし會〻假日に値へば子弟を敎諭す八子あり貞行宗行淸行興行最も名を知らる（大日本史）

アベ ヤスマロ 阿部安麻呂 伸麻呂と同 龍なり文武帝の慶雲二年從五位下に叙せらる靈龜二年遣唐大使と爲る已にして疾みて往く能はず（日本儒林傳）

アベ ヨシヒラ 安倍吉平 天文博士晴明の子なり能く家業を傳ふ長和五年擢んで、從四位下に叙せらる當時之を榮とす主計頭陰陽博士に歷任す肇て滿を持す吉平曰く今當に地震波雅忠と飲み杯を引きて滿を持す吉平曰く今當に地震して杯中の酒を覆へさんと言未だ覺らざるに地震す（大日本史）

アベ ヨシマサ 安倍吉昌 星學家なり晴明の子、但馬權頭、陰陽頭、天文博士を歷長和四年勞を以て敕して正五位下に叙す寛平中卒す（大日本史）

アベ ヨリトキ 安倍頼時 初名は頼良、祖父忠經、世〻陸奥に居て俘因の酋長たり父忠良陸奥大掾と爲る頼良安大夫と稱し父祖の業に藉りて勢益〻強大、陸奥に横行し人民を劫奪す部落皆服し遂に六郡の主となる（六郡とは即ち伊澤、和賀、江刺、稗抜、志波、岩手なり）四、白河關に界し東、率土濱に抵る衣川の形勢其中央に當り險に據り關を設く名けて衣川關れ別當を停む自後院の事は理せず敕して復た別當を兼れしむ辨官の務晨を凌て入衙す安仁公務を終るや常に蟋蟀に詣る朝廷其の往還煩劇を恤みて大藏卿に轉ず文德帝の儲宮に在るや春宮大夫たり兼下野守彈正大弼を歷て校河内和泉田使長官兼右大辨と爲り從三位に叙せられ中納言兼民部卿に任せらる春宮大夫は故の如し文德帝位に即て正三位を授けらる齊衡中陸奥出羽按察使を領し權大納言に任せらる安仁志尚謙虛にして公を親る家の如し子弟に謂て曰く謙國の調庸は多く封家に入りて官に納むる者は少なし食する所の邑身に於て餘ありと乃ち上表して大納言食する所の封を減じて中納言の封を給せられんとを請ふ帝之を嘉みして特に請ふ所なくして大將を辭す表再び上る之れを許す直觀元年薨す年六十七安仁政治に練達し朝章に明かなり參議あると雖も毎に應對滯ほることなし會〻假日に値へば子弟を敎諭す八子あり貞行宗行淸行興行最も名を知らる（大日本史）

アベ リヤウヘイ 阿部良平 篆刻家にして名は温字は伯玉、縑州、又月痴の號あり大阪の人天保嘉永の頃の人なり著述頁山堂茶話あり（涙花堂時人名錄）

アベ レキサイ 阿部櫟齋 江戸の本草家なり名は喜任字は亨、友之進と稱す一に巴蔵園と號す明治三年十月二十日年六十六にして歿す（續臺所一覽）

アボシンウウ 阿保親王 平城天皇の皇子なり母は宮人葛井藤子、王謹遜にして才文武を兼ね膂力あり又絃歌をよくす弘仁の變に太宰員外帥に貶せられ天長の初に召還されて三品に進めらる後伴健岑橘逸勢等反を謀り時王上書して變を太皇太后に奏し事平きて蒙て朝廷其功を賞して一品を贈る

アボシヤ ダウリン 網干屋道琳 茶人なり武野紹鷗に學びて茶道に巧みなり和泉堺の人（茶人系傳全集）

アボ ツネヨ 阿保常世 醫者なり昌泰中典膳頭となる（皇國名醫傳）

アマ 安萬 越田安萬と稱す天平勝寶頃の人大和藥師寺佛定石の灌に刻する佛像は此安萬の鑄する所なり安方と云ふは誤れり

アマイヌ 天狗 紀伊熊野の刀匠にして子孫同名の者數世に及ぶ寛永中の作者に同名あり又熊野の刀匠吉重も亦天狗と稱す天正年間の人なり（本朝鍛冶考）

アマガサキ リヤ 尼崎リヤ女 勇女なり丸藤藩引組足輕尼崎幸右衛門の女、母菜は姿色あり同組岩瀬傳内之れを挑めども從はず一夜幸右衛門の外行か窺ひ復た來りて之に迫る幸右衛門歸り見て之を怒る傳内刀を拔て之を斬り遂に亡命す時にリヤ年甫て二歳慶年母亦病て歿すリヤ女叔母の家に養はれ十三歳に及んで初て其の實を聞き遂に復讐の意あり因て藩士村瀨藤馬に從ひて江戸に來り藤下の士永井源介と呼べる劍法指南の家に入りて炊婢となる暇あれば演武場を窺ひて試合を熟視す源介其奬常なるを怪しみ切に問ひて其の志を知り益〻愛憐して刀法を練磨せしむ居ること二年驗して多く主家を易へて仇を探らしむ凡そ十二年間にして井田と稱す次きは貞任、宗任、僧長照、正任、重任、家任、則任なり（大日本史）

アベ リヤウヘイ 阿部良平 篆刻家にして名は温字は伯玉、縑州、又月痴の號あり大阪の人天保嘉永の頃の人なり著述頁山堂茶話あり（涙花堂時人名錄）

アボシンウウ 阿保親王 平城天皇の皇子なり母は宮人葛井藤子、王謹遜にして才文武を兼ね膂力あり又絃歌をよくす弘仁の變に太宰員外帥に貶せられ天長の初に召還されて三品に進めらる後伴健岑橘逸勢等反を謀り時王上書して變を太皇太后に奏し事平きて蒙て朝廷其功を賞して一品を贈る

アボシヤ ダウリン 網干屋道琳 茶人なり武野紹鷗に學びて茶道に巧みなり和泉堺の人（茶人系傳全集）

アボ ツネヨ 阿保常世 醫者なり昌泰中典膳頭となる（皇國名醫傳）

アマ 安萬 越田安萬と稱す天平勝寶頃の人大和藥師寺佛定石の灌に刻する佛像は此安萬の鑄する所なり安方と云ふは誤れり

アマイヌ 天狗 紀伊熊野の刀匠にして子孫同名の者數世に及ぶ寛永中の作者に同名あり又熊野の刀匠吉重も亦天狗と稱す天正年間の人なり（本朝鍛冶考）

アマガサキ リヤ 尼崎リヤ女 勇女なり丸藤藩引組足輕尼崎幸右衛門の女、母菜は姿色あり同組岩瀬傳内之れを挑めども從はず一夜幸右衛門の外行か窺ひ復た來りて之に迫る幸右衛門歸り見て之を怒る傳内刀を拔て之を斬り遂に亡命す時にリヤ年甫て二歳慶年母亦病て歿すリヤ女叔母の家に養はれ十三歳に及んで初て其の實を聞き遂に復讐の意あり因て藩士村瀨藤馬に從ひて江戸に來り藤下の士永井源介と呼べる劍法指南の家に入りて炊婢となる暇あれば演武場を窺ひて試合を熟視す源介其奬常なるを怪しみ切に問ひて其の志を知り益〻愛憐して刀法を練磨せしむ居ること二年驗して多く主家を易へて仇を探らしむ凡そ十二年間

に主家を易ふること七十所最後本庄なる幕臣阪部安兵衛に事へしに家に小泉文内と云へる者あり一夕酒氣に乘して幸右衛門を殺せし顚末を語り肌を露はして其刀を反復せしめ直に驅て源介に告く源介躍喜し之を公廳に上告し又丸龜藩に通す有司糺問して其の實を得因て文内を藩邸に縛送す乃ち邸中に場を設け勝負を爲さしむ是の日リヤ肌に鎖衣を着下し白綿紗を抹額とし雙刀を帶ひ登場す村瀨藤馬之を輔く傳内罵りて曰く我汝が幸右衛門の娘なるを知らず謬事を洩し遺恨甚しされども汝の父を殺せし刀を以て汝をも刀下の鬼となし父の跡を追はしむへしと三尺餘の大太刀を打振り接戰數合リヤ透間を窺ひ横に拂ひし刀にて傳内の肋を割り二刀に面部を切りひるむところを得たりと踏込み屑先より乳下かけて切込み直に押伏せ首を掻き落すリヤ身に一創なを受けず且つ憾遽の氣色些も面に見えず諸人喝采の聲沸くが如くなりきと云ふ藩主其の孝烈苦節を偉として士分格に擢て息女の側仕とせり（家雄言行錄）

アマカス カゲモチ 甘糟景持 近江守と稱す上杉謙信旗下第一の勇者なり初め備中守と稱す信甲の境白峯の獵夫なり謙信行脚の時之に謁して出仕を約す川中島の戰上杉氏の軍大に敗る景持千五百人を領し後陣に在り毫も動かず武田の兵以て輝虎となし之を襲ふ景持遮擊て奮鬪す衆寡敵せず敗れて十三騎となり犀川を渡りて敗兵を集む僅かに三百人を得たり然れども之に次すること三日の間退かず武田氏の兵其勇なるを感じ以て輝虎の自ら殿する者なり又天正十年織田氏の兵と太田切に戰ひ手兵を率ゐて敵四百餘を得たりと云ふ（本朝武功正傳）

アマカタ ミチナホ 天方通直 備前守と稱す茶道を桑山重長に受けて之を能くす法號は槃叟淨茂居士と曰ふ（茶人系傳全集）

アマカタ レキザン 天方曆山 江戸の儒者にして名は璞字は冥明通稱隆助竹鎖山人又有期齋の號あり管沼家の士なり文久頃の人（廣益儲家人名錄）

アマギ ジチユウ 天木時中 京都の儒者なり通稱善六尾州須佐邑の人父は重右衛門光玄、母は石黑氏、時中幼にして讀書を好み其の誦を成し義を曉ること常兒に異なり廿二歳にして佐藤氏に武江に謁し親炙十九夕月にして尾に歸へり京に往き天明二年期年二十五歳にして幾州相國寺に學ぶ寛政五年後ち京に卜居す學徒數十人日〻に相講磨し家貧にして自ら炊く女兒あり寡て之を養ふに尤とも友愛を盡くす時中人となり朴質にして華らず剛直にして堅を守り義の爲めに勇み過ぎを喜び其の人に接する誠信にして親切懇ねて情を盡くす其の學に於ける日々に研精窮微孳孳として倦まず殆んど寢食を忘る卒する前三日自ら其の起たざるを知り生徒を會して戒むるに程子臨終の訓を以てす其の言少しも平日に異ならずと時に元文元年なり年四十（常磐記）

アマクサ トキザダ 天草時貞、天草亂徒の首魁也姓は渡邊通稱四郎 天草の人、異靈あり愚民神童と稱して之を尊崇す寛永十四年十一月耶蘇教徒肥前島原に據る初め小西行長の臣蘆塚忠右衛門森宗意軒等天草に匿れ亂を謀る時貞は其の推戴する所なり將軍家光關四諸侯に命じて之を討ぜしめ板倉重昌をして之を管せしむ教徒四萬城に據りて能く之を防き二月拔く能はず家光更に松平信綱をして之に代らしむ水野勝成之に副たり重昌之を聞き激戰して死す信綱勝成繼道を四絕し城遂に陷る是より德川氏の耶蘇教禁ずる愈〻嚴なり（江戸政記）

アマクニ 天國 日本刀鍛師の祖なり文武帝の時大和國宇多郡に住す大寶中の人平氏の傳寶小鳥丸の作者なり（萬寶全書、本朝鍛冶考）

アマクニ 天國 大和の鍛工にして天日一箇神の齋祭神天皇御宇の時の人なり天皇の六年勅命に依り新たに劒を造る是れ天皇護身の御璽と爲し給ふ所なり云（本朝鍛冶考）

アマクモ 天雲 大和の刀匠にして繼體天皇御宇の時の人嫌切の作者なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アマクラ 天座 （又アマザと訓む）大和宇多郡の刀匠にして天國の門人大寶年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アマコ イラツメ 尼子娘 天武帝の宮人なり胸方德善の女、天武帝の幸を得て高市皇子を生む（大日本史）

アマコ カツヒサ 尼子勝久 誠久の第四子なり小字を助四郎と稱す尼子義久の毛利元就の爲めに亡ぼさるゝや山中幸盛尼子氏の血統の者を立て、主と爲さんと欲す偏く之を索む義久の叔父僧となる者あり獲て之を立つ是れ勝久なり其の他叔父諸兄多く殺さる時に勝久僅かに二歳京都の東福寺に居る人と爲り勇悍矯捷にして膂力衆に越ゆ潛かに武技を修めて戒業を事とせず是に於て勝久山中幸盛、立原久綱等と竊かに恢復を圖る永祿十一年毛利元就老いて將に死せんとす元春、隆景の二將又出て、筑紫の軍に在り勝久此の機に乘じ群臣數百を糾合し相率ゐて但馬に還る時に山名豐國海賊の船を募りて之に應し國人亦多く來り屬す遂に逆て雲州の弓濱に入り益〻檄を四方に傳へ兵を分ちて四出抄略す此に於て伯、石の國人響の如く相應じて忽ち四千騎を得進て多賀重綱の新山築を攻て之を拔き以て勝久の據城と爲す而して兵を富田城下に進む城將天野隆重に說くに出で降る可きを以て隆重聽かず是時に方りて美作高田の前城主玉串昭則勝久に應じて今の城主牛尾久盛を攻む勝久屢〻郡邑を侵略す宇喜多直家に求む直家兵を出だして之を助け山陰大に亂る元龜二年正月毛利輝元及び元春、隆景等兵を率ゐて來り攻む勝久、幸盛、久綱等と之を布引に迎擊して克たず死傷甚だ多し二月日多邊中山牛尾等の諸寨悉く陷り部下の士或は走り或は降る而して敵兵來り勝久に迫る是に於て勝久新山に奔る是より先き勝久の援を直家に乞ふや直家兵を出だして備中の諸城を拔く而れ共未た幾くなくして元就の將穿井田元清之を復す八月勝久敵將元春が進みて新山を圍むと聞き去て簾岳に屯す元春追擊して新山墓を蹈き進て簾岳を攻む勝久力盡に艦を率ゐて道尾するに遇ひ畏縮して爲す所を知らず遂に隱岐に往き山名豐國に頼り以て復た雲州に入らんとを謀る二年正月勝久但州より因州に入り轉戰して數城を拔く三年二月豐國の客人森下道興中村春次等屢〻豐國反覆して常なきを諫め勸めて毛利氏の兵と與に勝久に

迫る是に於て勝久城を棄てゝ退て因州若櫻鬼城に據り兵を分ちて桑市城を守る元春兵を發して桑市城を拔き牛尾元眞を生て鬼城を攻めしむ勝久乃ち爲す可らざるを知り衆を悉して但馬に走り遂に京師に入る六年正月勝久羽柴秀吉に因て雲州に入るを求む幸盛及び久綱等と相謀り尼子氏舊僚の松田修理の許可を得兵士二千を募り京師より播磨に往き秀吉の命を以て上月城を守る二月勝久糧食乏しく且つ備兵復た入りて之を守る後ち秀吉攻て之れを拔く而して其の備作の衝路に當りて其の守り難きを憂ふ時に幸盛勝久を勸めて之を請ひ遂に其の諸を得たり是に於て勝久悉く遺臣を集めて之に據る四月毛利輝元元春隆景等に命じ兵を率ゐて上月城を圍ましむ是に於て秀吉親ら出て、之を救ひ信長亦荒木村重瀧川一益明智光秀筒井順慶等に命じ之を援けしむ而れ共諸軍輙く城に近く能はずして敗るるもの多し元春隆景城に迫る益〻急なり是に於て城中相議し罪を神四郎に歸し使を元春隆景に遣はして請て曰く願くは勝久及び兵士の死を救さば即ち城を擧て以て降らんと聽かれず是に於て勝久自殺し加藤經盛之に殉死す久綱出でゝ江州に奔り幸盛降る城遂に陷る

（續日本史、野史）

アマコ クニヒサ 尼子國久 經久の第二子なり甚源氏紀伊守と稱す其の先は佐々木信綱より出づ天文九年國久始めて軍に望み岩屋城を攻めて深瀬隆光倫因州に在り急を告て曰く武田常信南條隆宗山田重正等因州より伯州に入り邊境を掠暴すと是に於て國久晴久に請ひ子族を率ひて藝州より轉して伯州に赴く武田常信爲取を遮し山名豐弘南條隆宗等と伯耆の高野山に陣す國久乃ち光倫等と會し興に戰ふ子豐久死す國久屈せず進みて高野山糟臻を攻め遂に常信を獲て歸る是より國久の子族繁衍し威武兼れ備はり擊つ所必ず破る世に之を稱して新宮黨と呼ふ國久勢を賴み漸く驕る是に於て晴久之を悅びず偶〻人あり曰く國久頃日毛利元就に通ずと晴久益懼措く能はず天文二十三年十一月を以て國久を殺す五子あり誠久、豐久、數久、又四郎、興四郎と云ふ（野史）

アマコ ジフイウシ 尼子十勇士 山中鹿之助、秋宅雀之助、寺本生死之助、尤道理之助、早川鮎之助、藪中莉之助、横道兵庫之助、小倉鼠之助、深田泥之助、植田早苗之助なり

アマコ シモツケ 尼子下野 尼子晴久の族なり業と深慮あり軍に臨み必勝の勢ひにあらざれば妄りに戰はず故に人皆之を嘲て尼子比丘尼と呼ふ晴久陶高房毛利元就と戰ふ挑むに及て高房進みて晴久の本營を擊つ下野敵陣の強勢を察し揚言して曰く此の戰我翠死せざれば則ち大將晴久恐らく免れざらん我れ先登を爲して之に死す可し平生勇ある以て比丘尼と稱する者其の言を食まざれば則ち繼て至れと諸隊共に進て其部長深野氏宮川氏を斬る時に元就の家士中原氏矢を放て下野に中つ馬より落ちて死す（寧實文籍）

アマコ コトマロ 蟹子言滿「テラマチヒアクアン」

アマコ ツネヒサ 尼子經久 出雲の人なり六世の祖檢非違使鹽谷高貞讒を以て死す遺孤歳甫めて三歳一尼あり潛に藏めて之を育す既に長じて其の尼部少輔清定井に出雲守護たり經久少にして個儻氣節を鹽谷掃部に素はれ出でゝ山中入道及び賀麻黨に遷る文明十八年歳且兵を起して急に富田城を襲ひ掃部助を獲て復び城に入る是より威武漸く張り驕人三澤、三刀屋、赤穴等の豪族來屬し遂に一州に守たり永正七年六月兵を起し安藝を侵掠して鏡山を取り又備後に入て豐里城を拔く時に子政久戰死す又た大内義興と兵を交て城を拔く十五年八月阿興入道宗的を標へて相抗衡す毛利興元吉川興經等經久に黨して大内氏と戚ぎを宵はしむ二年夏大内義興安藝を徇へ郡邑多くの之れに屬す是に於て又和議破れ三年六月經久兵を率て北池田に陣し毛利元就亀井秀綱に命じ鏡山を攻めて之を拔く四年六月經久伯州より藝州に往て金山城の後援を爲し大内義隆と戰ひて克たず元就復た乘じ義隆の陣を祈て遂に之を走らす享祿元年義興兵を發して石見に入る經久防戰す天文元年八月子興久佐佗城を以て叛く經久赴き擊つ興久備後に奔り山内直通に依る九年毛利元就畔て大内氏に降る經久之を伐て戰利あらず義隆陶隆房と云へるものを以て元就を援けしむ經久終に敗績す是に於て經久大内氏と兵を交へ累年解けずと云ふ經久初め富田城七百貫の地を以て起り遂に雲、隱、因、伯の四州を鬱貪し天文十年十一月を以て卒す時に歳八十四謚して省心院と號す三子あり政久、國久、興久と曰ふ（野史、續日本史）

アマコ トヨヒサ 尼子豐久 兵部大輔と稱す父は紀伊守國久なり共に尼子晴久に黨す天文九年冬晴久武田山城守と伯耆に戰ふ時に豐久從て大に射戰す遂に弦絕え槍を執て敵中に亂れ入り數十人を殺して卒に戰殺す此時山城守は自殺し尼子勢勝利を得凱旋す（豹皮錄）

アマコ ハルヒサ 尼子晴久 經久の孫にして政久の子なり小字は三郎四郎民部大輔右富門尉と稱す出雲の人其の先は佐々木信綱より出づ天文五年五月大内義隆太宰大貳と爲りて山陽四海諸國の事を領す晴久祖父經久の後を承ぎて山陰の兵權を握り部將に謂て曰く大内義隆勅旨を奉じて中國及び鎮西の兵權を專にすると雖ども我は終に之が麾下たること能はざるなりと乃ち兵三萬を率ひ出でゝ音野鼻に次す義隆之を聞き怒て曰く我れ勅を奉じて專ら征伐に從事す而るに晴久命に忤ひ兵を起す是れ叛賊なり宜く兵を發して之を討つべしと乃ち陶隆房なして逆擊せしめ自ら兵一萬を將ひて之に踵く遇て晴久疾に斃り軍を引て還る義隆亦師を旋へす天文八年十一月晴久家例に因て家族群臣を會し軍議して曰く頃歳毛利元就叛て義隆に屬し頻りに藝備の郡縣を侵暴し殆んど之を領す今にして伐ずれば後患を爲さんと衆議之を贊し曰く元就は僅に一城主のみ之を伐つ甚だ難からずと時に經久（中國治亂記に義勝に作る）特り頭を掉て曰く元就今や微少なりと雖も文武を兼れて知度宏遠且つ大内氏之れが援を爲せり決して輕ずべからず先づ備石を徇へ而して後ち之を擊て可なりと晴久曰く今にして取らざれば彼れの武威稍〻張り他日必ず禍を爲さん況んや彼れ密に我を窺ふの勢あるに於てをや速に之を撲滅せざるべからざるなりと衆議遂に決し乃ち佯て別所助四郎と云へるもゝの輩を唱へて放逐し以て細作と爲し安藝に往きて毛利氏に仕へしむ毛利氏助四郎を敬て近侍と爲す後元就群臣を會して晴久に備ふるの策を決す其の夜助四郎脱して晴久に諧りて報ず是に於て晴久意を決して兵を起し大舉して郡山城を攻む而して利あらず又は武田信實をして兵を發し城を攻めしむ時に城兵出て晴久の陣を斫る大内義隆陶隆房及内藤興盛を以て後援を爲さしめ住吉山に陣す晴久之と戰ひて決せず時に義勝諫めて曰く城堅くして援兵至る我が軍多しと雖ども客戰にして且つ糧食に乏し長く圍みて戰はざるよりは寧ろ師を班へして兵馬を養ひ再舉して來り伐つに如かずと晴久聽かずして曰今や援兵の至るを見て師を班さば人以て怯者とせん抑も運命は天に在り老耄の悔簒用ふるに足らず再言するも勿れと隆房、興盛、元就と謀を合し路を分ちて軍す周軍の襲將深野平左衛門間道より來り襲ふ晴久の軍は多く備前路に在りて之を知らず全く不意に乘ぜられしを以て全軍大に亂る隆房、元就亦間道より晴久の軍を衝き晴久の部下死傷甚だし義勝奮戰して死す十年正月元就復兵を出して來り戰ふ晴久退て富田月山城に還る是に於て備藝石の國人多く反して款を義隆に送る十二年七月晴久兵を率て石州に入り佐波奥迹の城邑を侵す十三年修理大夫に任ぜらる七月晴久備後を徇へんと欲して安藝を略し出でゝ郷川に陣す（或は郷川を笠野に作る）編原貞俊、三吉隆亮の爲に襲はれ死傷最も多く全軍遂に潰走す二十年陶隆房其の主大内義隆を弑す晴久使を足利幕府に遣はして逆臣を伐つを請ひ二十一年十二月晴久從五位下に叙せらる二十三年三月晴久師を率ゐて美作を伐ち進みて播磨に入り其の十七城を拔き十寇の起るに會ひて軍を旋へす是より晴久毛利、吉川の諸族と攻戰年を累れて止まず而して武威漸く衰へ晴久部下の諸城降附相望み終に富田城孤立して轉漕絶せす城中大に餓む時に晴久疾て卒す永祿五年十二月歳四十九なり三子あり義久、倫久、秀久と云ふ（野史）

アマコ ヨシヒサ 尼子義久 晴久の長子なり其の先は佐々木信綱より出づ義久小字は三郎四郎伊豫守右衛門尉と稱す永祿九年十二月父晴久の富田城に卒するや敵將毛利元就洗合に陣す是に於て晴久の部下義久を擁立して專ら守備を嚴にす六年正月大友宗麟使を遣し來りて義久に謂はしめて曰く請ふ毛利氏を攻て以て其の地を分たんと義久乃ち諾して好みを修む七年四月元就の孫輝元元就に請ひて先鋒と爲る元春隆景之を扶て來て富田城を攻む義久弟倫久秀久と隊伍を分ちて三部と爲し拒戰し軍利を失ひて退て糧食に旋へす八年九月元就長圍を築き糧絶ち外に救援なく城中の糧食に苦むを待つ是の時に義輝亦僧を遣して成き行ふを勸む是に於て義久及び弟倫久、秀久出て降る義久後ち髮を剃りて友林と號し髮長十五年八月を以て卒す（野史）

アマコ ヤカベ 尼庄 盜賊なり大阪の商にして尼ケ崎屋尼庄氏衛と云ふ人嘗て尼庄と呼び破産して賊となる富者の財を盜んで貧人を救ふ然も名を匿して深夜投入するを常とす身は綿服を着し麁食を喰ひ節儉自居て曾て雪曉高麗橋より豪商加治久が土藏を望む中に屋上の聲早く消えたる者一樓あるを注視し必ず命取なる事を知る其の夜此庫を破りて入り金を已が胸袴に納め之れを肩にかけて出づ時に雨正に霽る乃ち携ふる傘を川中に投じて去る傘偶〻止つて泥中に在り翌日得たり誌して尼庄と曰ふ然るに尼庄の平生質素にして加治久盜に罹るを訴ふ與力桑原へ左衛門拠究して傘を行狀識に正く盜を爲すべき疑ひなし仍て頗る惑ふ偶〻尼庄娼妓某の親の爲に苦界にあるを憐み金五十兩を其親に贈るの事聞す因て試に其金の出所を問糺するに終に自白せしを以て獄に投じ梟首せらる尼庄の生時其憐みを受けたる貧人頗る多し故を以て之に香花を供ふるを常とせり又道善を修するあり日夜死骸取捨場に香烟の絶ゆるとなし事文政の末に係る（經波奇談）

アマシャウグン 尼將軍「マサコ」

アマツクメノ ミコト 天津久米命 天孫降臨の時天忍日命と共に前驅せる神なり久米の直等の祖たり（古事記）

アマツシルシ クニオシハラキ トヨ サクラヒコノ スメラミコト 天璽國押開豐櫻彦天皇「シャウムテンワシ」

アマツツネヨ アマツヒコネノ ミコト 天津日子根命 素盞嗚尊日神と誓ひて日神の髮に經へる球を嚙みて吹出せる霧の中に生せる神にして凡川内國の造、茨木國造、山代國造（舊事紀に直に作る）額田部湯坐連、倭の田中直、上總の馬來田國造、道後の岐閉國造、周芳國造、倭の淹知造、高市縣主、蒲生稻置、三枝部造等の祖なり（古事記、舊事紀、日本紀）

アマツマウラ 天津眞浦 綏靖帝御宇の時の鍛工にして大和に住す帝の元年命を奉して眞鏡（マカガミ）鐵を造ると云（本朝鍛冶考）

アマツミカボシ 天津甕星 天にある惡き神なり經津主神武甕槌神先づ此の神を誅して後葦原中國に降る一の名を天香々背男と云ふ（古事記、舊事紀）

アマテラスオホミカミ 天照大御神 名は大日孁貴（伊奘諾神祓する時左の目を洗ふ時生ると云）伊奘諾尊の女なり父尊の命を受けて中國の主と爲る弟素盞嗚尊慓悍にして亂を好む天神の織殿に在るや斑馬の皮を剝ぎて之を其の中に投す織女驚きて死す大神亦怖れ國こゝ戸を閉ぢて出でず諸神議して天思兼命を以て大神を出さんことを謀らしむ思兼神、天鈿女命をして俳優をなさしむ百神之を觀て樂み且つ笑ひ喧噪甚し大神大に惟み微に戸を開きて之を覗ひ玉ひしかば手力雄神其手を執りて援け出し奉る是より六合の內再び天日か仰ぐを得たりと云ふ（古事記）

アマトヨタカラノ スメラミコト **イカシヒタラシヒメノ スメラミコト** 天豐財重日足姫天皇「クワウキヨクテンワウ」 天豐津媛 懿德帝の后なり息石耳命の女懿德帝二年二月立つて皇后と爲す孝昭帝及び武石彦奇友背命を生む孝昭帝位に即き尊みて皇太后と曰ふ(大日本史)

アマヌマ コウアン 天沼恒庵 儒者なり名は爵、一字は樂魯恒庵は其の號父は淨還性剛朴にして擊劍を能くし好みて人の雛を救ふ是を以て家甚た貧し寛保三年を以て爵を江戸神田に生む爵初名は有美字は子潤生れて八歲藤華岡の門に入りて書法を傳へ又た經を三浦淳夫に受け詩を劉文翼に學ぶ年十八華岡の京師に遊學するに從ひ終南禪師に見ゆ禪師以て教ふべしと爲し示すに詩文名稱の法を以てす爵早く書詩に名あり年二十一華岡其書を能くするを以て養子と爲し姓島氏を冒す蓋し島は華岡の本姓なり是年爵幕府に仕へて歩軍士と爲り頃之らくして進みて伍長と爲る然れども其人と爲り實にして廉靖にして達微祿に栖々ぜず一旦職を棄て、川越に歸へり其の墨池庵に居て徒を集めて學を講じ遂に本姓に復し裁して天民と爲す是より先き中上人伊勢より來て文字の游を爲すと聞き遂に上人に介し書を通じて近江蕉中大師に知らる其の後再び京師に遊びて大師之に序す爵年二十六にして母を喪ひ四十二にして父を喪ふ其離職の明年華岡亦歿して後なし是に於て門人爵を其家に迎へて書を問ひ經義を講ず從游日々に衆く遠近其學其行を稱せざるなし然れども恒藿平生食味を二つにせず麦の衣地を曳かず目に好色なく耳に樂聲なし恬淡寡欲其實見るべきなり寛政六年病て死す年五十二(墓誌)

アマノアタヒ アハヂ 海直淡路 醫官なり天長の初外從五位下に叙ぜらる仁明帝太子たりし時胸痛を病みて痛み劇し嵯峨上皇之が聞き帝の侍臣を召して喻して曰く朕亦曾て此の病に罹る諸藥効なし終に金液丹と白石英とを服するに及び始めて痊るを得たり但石藥峻猛にして庸醫多く之を用ることを恐る宜しく之を眞工に詢ふべしと乃ち淡路の見上皇に同し遂に其の方を進む刺痛直に止む(皇國名醫傳)

アマノイヌカヒ ヲカマロ 海犬養岡麻呂 萬葉作者の一に列し和歌を善くするを以て名あり詠歌は載せて其の書に在り(萬葉集作者履歴)

アマノ オシホネノ ミコト 天忍骨尊「ママヤアカツカツハヤビアマノオシホミノミコト」

アマノ カタカゲ 天野賢景 義勇の士なり孫七郎と稱す豫州岩戸村の人德川廣忠に仕る是の時作間某廣瀬の城に據りて侵略威を肆にす廣忠之を懲さしむ賢景乃ち伴りて作間に仕ふ賢景を造して之を馴さしむ賢景乃ち伴りて作間の寢室に入り傍人なきを見て之を斬り逃れ還て報す廣忠厚く賞賜す時人天野を稱して作間斬と謂ふ作間後ち三旬を經て死す一說に賢景廣忠の命を受け浪客と稱す假りに山名清三郎と號し擊劍を以て佐久間の家に出入し親近の後之を刺すと云ふ(野史、諸士略傳)

アマノ カヂユウラウ 天野嘉重郎 海軍機關兵曹長なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや乘兵組みとして從軍中同五月十五日旅順附近に於て病に罹り後送歸國の後卅九年十月五級に叙せらる

アマノ キセノ ミコト 天杵瀨尊「アメニギシクニニギシアマツヒタカヒコホノニニギノミコト」

アマノ クワツロ 天野葛蘆 江戸の和學者なり名は政德、字は其所、圖書と稱す(諸家著述目錄)

アマノ ケイタラウ 天野瓊太郎 陸軍步兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け第十聯隊附となり從軍して卅八年三月五日清國盛京省柳匠屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アマノ ケンゴ 天野研五 陸軍步兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや步兵第四十一聯隊附として出征し卅八年一月廿八日清國盛京省黑溝臺附近に於て病に罹り後送歸國の後卅九年十月廿五日自宅に於て死す

アマノ ゲンエモン 天野源右衛門「ヤスダサクベエ」

アマノ サイザウ 天野才藏 海軍少佐なり廣島縣出身にして明治三十七八年戰役に於て運送船監督官として勤務中病に罹り卅八年二月廿二日卒去す

アマノ ソウフ 天野宗步 將棋の名手なり留次郎と稱す(オホヤトウキチ傳參看)

アマノ タウリン 天野桃隣「タイハクダウタウリン」

アマノ ヂンシチラウ 天野傳七郎 眞陰流の劍術の祖なり傳七郎と稱す水戸の藩士眞野文左衛門に從ひて愛洲陰流の劍法を學びて妙旨を得兵學軍禮に達す後ち流名を改めて眞陰流と號す(武術流祖錄)

アマノ トウジラウ 天野藤次郎 水戸藩士にして諱は景忠藤次郎と稱す武技衆に超へ安政の初林九郎となりて江戸に至り不虞の變に備ふ後馬廻組に進み公子の傅を兼ぬ元治元年水戸甲子の變あるや弟景敏と共に松平大炊頭の軍に在りて那珂湊に戰ひ後古河藩に禁錮せられしが慶應三年十一月十七日病死す年三十九(殉難餘稿)

アマノ トリウ 天酒門都龍 狂歌師なり通稱を山本嘉兵衛といふ日本橋通武丁目に住し世々茶を販ぎて業とす性狂歌を好みて檜垣側に列り初名を雲井都龍といひ後に天酒門と號せり茶事は家業といひ茶器材集を印行せり後年德翁と稱し明治十年七月七日歿す深川淨心寺地中玉泉院に葬る(古今狂歌人物誌)

アマノ トホカゲ 天野遠景 藤原木工助爲憲より出づ祖は景澄入江權守と稱し父景光藤內と稱す世々伊豆天野邑に居り因て氏とす遠景初め內舍人と爲り亦藤內と稱す尋で民部丞と爲る源頼朝兵を起すや遠景往きて之に屬し工藤茂光土肥實平等と俱に平兼隆を擊ちて功あり石橋の役に頼朝窘急す遠景諸將と力戰すると數合頼朝遂に脫するを得たり既にして伊東祐親將に參河に赴きて平氏に力を戮はさんとす遠景之を覺て祐親を生擒し黃瀨川に抵りて頼朝に會す源氏中

頼朝源義仲を誅して子義高を送りて鎌倉に質たらしめんと欲し遠景及び岡崎義實に命じ越後に往きて義仲に說かしむ遠景義仲に見えて利害を曲陳す義仲之に從ふ遂に義高を獲て還る三年頼朝一條忠頼を殺さんと欲し之を府に誘致して宴を張り酒を行ひ除じめ工藤祐經に命じて之を斬らしむ明に迫みて祐經雛色あり小山田有重之を察し其の二子を拐きて逃みて將に之を擊たんとす頼朝又遠景に命じ追りて忠頼を殺さしむ忠頼の從士山村小太郎等刃を露はして衝突す守衛の兵士多く創を被む小太郎將に遠景を擊たんとす遠景魚板を擲て之を仆す從者就いて之を斬る是の歲源範頼に從ひて平氏を四海に擊ち功あり頼朝書を賜ひて之を嘉みす尋で鎮西守護と爲る文治二年筑紫奉行と爲り父數所の地頭と爲る源義經西に奔るに及びて頼朝其の支黨の鬼界島に匿る、者あらんを疑ひ三年宇都宮信房を鎮西に遣はし命じて遠景と俱に之を擊たしむ是より先き薩摩人阿多忠景罪を獲て島中に匿し筑後守平家貞に詔して之を討たしむ風濤險惡進む能はずして還る是に至りて遠景人を島に遣はし偵探せしむ具さに要領を得たり四年書を以て頼朝に報ず會ゝ攝政兼實等之れを聞きて頼朝に諭して之を止めしむ頼朝乃ち止む已にして信房具に海路の曲折を圖して之を鎌倉に送る頼朝之を覽て憲を決し遂に遠景信房に命じて之を攻めしむ島人降附す事竣へて鎌倉に歸る視髮して名を遠景と更たむ建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと謀る北條時政遠景及び仁田忠常を召して兵を發して之を誅はしむ遠景曰く一老を殺すに何ぞ兵を煩はすことを爲ん召して誅す可しと乃ち能員の至るを覘ひて突出して之を斬る建永中遠景具に治承以降戰鬪の功を錄して恩澤を希望す實朝者ざず子政景六郎と稱し和泉肥後守たり(大日本史)

アマノ ノブカゲ 天野信景 博識の士なり小名は權三郎後ち宮內と稱す世々尾張藩に仕ふ父は信幸市尹と爲りて政績あり秩四百五十石に進めらる信景幼にして穎悟學を好む長じて寄合と爲り藩名を以て諸學士と國志を撰錄す學文武を兼ね正德五年鐵砲頭に進み享保八年病に罹り職を辭し十五年致仕し剃髮して信阿彌又は白華翁と號す十八年九月八日病みて歿す享年七十三信景博聞強記凡そ和漢の書籍に於て目を過ぐれば誦を成さざるはなし每に一事を得れは必ず其の源委を究はめ博引旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し人を島に遣はし偵探せしむ具さに要領を得たり四年書を以て頼朝に報ず會ゝ攝政兼實等之れを聞きて頼朝に諭して之を止めしむ頼朝乃ち止む已にして信房具に海路の曲折を圖して之を鎌倉に送る頼朝之を覽て憲を決し遂に遠景信房に命じて之を攻めしむ島人降附す事竣へて鎌倉に歸る視髮して名を遠景と更たむ建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと謀る北條時政遠景及び仁田忠常を召して兵を發して之を誅はしむ遠景曰く一老を殺すに何ぞ兵を煩はすことを爲ん召して誅す可しと乃ち能員の至るを覘ひて突出して之を斬る建永中遠景具に治承以降戰鬪の功を錄して恩澤を希望す實朝者ざず子政景六郎と稱し和泉肥後守たり(大日本史)

アマノ ハチラウ 天野八郎 彰義隊の副長なり名は忠告上毛甘樂郡磐戸村の人本姓は大井田氏忠恕の第二子故有りて天野氏を冒す少にして奇氣有り讀書擊劍を好み產業を治ふを肯んぜず四方に漫遊す德川慶喜將軍の職を失ふや慕臣薩藩の朝廷を瞞着し德川氏を淺呼する者と爲り慶應四年二月十二日檄を傳へて諸學士と國志を撰錄す學文武を兼ね正德五年鐵砲頭に進み享保八年病に罹り職を辭し十五年致仕し剃髮して信阿彌又は白華翁と號す十八年九月八日病みて歿す享年七十三信景博聞強記凡そ和漢の書籍に於て目を過ぐれば誦を成さざるはなし每に一事を得れは必ず其の源委を究はめ博引旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し人を島に遣はし偵探せしむ具さに要領を得たり四年書を以て頼朝に報ず會ゝ攝政兼實等之れを聞きて頼朝に諭して之を止めしむ頼朝乃ち止む已にして信房具に海路の曲折を圖して之を鎌倉に送る頼朝之を覽て憲を決し遂に遠景信房に命じて之を攻めしむ島人降附す事竣へて鎌倉に歸る視髮して名を遠景と更たむ建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと謀る北條時政遠景及び仁田忠常を召して兵を發して之を誅はしむ遠景曰く一老を殺すに何ぞ兵を煩はすことを爲ん召して誅す可しと乃ち能員の至るを覘ひて突出して之を斬る建永中遠景具に治承以降戰鬪の功を錄して恩澤を希望す實朝者ざず子政景六郎と稱し和泉肥後守たり(大日本史)

アマノ ハチラウ 天野八郎 彰義隊の副長なり名は忠告上毛甘樂郡磐戸村の人本姓は大井田氏忠恕の第二子故有りて天野氏を冒す少にして奇氣有り讀書擊劍を好み產業を治ふを肯んぜず四方に漫遊す德川慶喜將軍の職を失ふや慕臣薩藩の朝廷を瞞着し德川氏を淺呼する者と爲り慶應四年二月十二日檄を傳へて諸學士と國志を撰錄す學文武を兼ね正德五年鐵砲頭に進み享保八年病に罹り職を辭し十五年致仕し剃髮して信阿彌又は白華翁と號す十八年九月八日病みて歿す享年七十三信景博聞強記凡そ和漢の書籍に於て目を過ぐれば誦を成さざるはなし每に一事を得れは必ず其の源委を究はめ博引旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し旁證、底蘊を極盡し殊とに國典に精し人を島に遣はし偵探せしむ具さに要領を得たり四年書を以て頼朝に報ず會ゝ攝政兼實等之れを聞きて頼朝に諭して之を止めしむ頼朝乃ち止む已にして信房具に海路の曲折を圖して之を鎌倉に送る頼朝之を覽て憲を決し遂に遠景信房に命じて之を攻めしむ島人降附す事竣へて鎌倉に歸る視髮して名を遠景と更たむ建仁二年比企能員北條氏を滅ぼさんと謀る北條時政遠景及び仁田忠常を召して兵を發して之を誅はしむ遠景曰く一老を殺すに何ぞ兵を煩はすことを爲ん召して誅す可しと乃ち能員の至るを覘ひて突出して之を斬る建永中遠景具に治承以降戰鬪の功を錄して恩澤を希望す實朝者ざず子政景六郎と稱し和泉肥後守たり(大日本史)

**アマノ ハヂ

治年間の人なり(古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出)

アマノヒカタ クシヒカタノミコト 天野康景 德川家の臣なり景恒の子にして本名は元景初字を又五郎と稱す後に三郎兵衛と改む姓藤原氏三河の人天文十八年德川家の將軍に從ひて近侍たり弘治二年二月家康の將軍に從ひて之を征し進て矢田城の攻大夫となる日向の賀牟度美良姫を娶りて健飯勝命及び淳名底中姫(安寧の后)を生む(書事記)

アマノヒホコ 天日槍 新羅王の子なり垂仁帝の三年航して播磨宍粟邑に至る帝大友主、長尾市を遣して之を檢問す天日槍曰く僕は是れ新羅國王の子也日本に聖皇ありと聞き故に國を弟知古に讓りて歸化すと乃ち齎す所の寶物羽太玉、足高玉、鵜鹿々赤石玉、出石小刀、出石鉾、日鏡、熊神籬、各一を獻す帝天日槍に詔して曰く播磨國の宍粟淡路島の出淺の二邑を汝に付與す宜しく之に居る可しと天日槍奏請すらく若し諸國を歷て以て其の地を擇ぶを得ば天恩優渥臣の幸之に過ぎず帝之を聽す是に於て菟道川より北近江に入り吾名邑に居る幾もなくして去る更に若狹を歷て但馬に至り住を定め出島の人太耳の女麻多烏を娶りて但馬諸助を生む諸助但馬日槍杵を生み日槍杵清彦を生む清彦世々但馬に家す近世の說に據れば其歸化は神代の末にあり しが如し(大日本史)

アマノヒロマル 天野廣丸 狂歌師なり磯田廣吉と稱す相州鎌倉の產なり壯年東部に出で四ツ谷に住す易を井田某に學びて出藍の名あり又唐衣橘洲を師として狂歌を能くす性酒を好みて醉鈍亭の別號あり人を訪ひ又は消路を行くに常に酒瓶を手にして之を飲み衣服にも樞利 紋を附く終に飲酒の爲めに財を盡し一室屋の破を繕も意に任せず一日家に引歌の會を催す此日偶々咄降る人皆室內に籠を持して閉卷を果せしといふ又一奇人といふへし酒百首の吟あり「くむ酒は是風流の眼なり月を見るにも花を見るにも」の一首最も人口に膾炙す老後本所石原に移り住みて化六年三月二十八日年五十四歲にして沒す廊布今井町(元市兵衛)淨土宗善學寺に葬る玉笹集、酒百首等の著あり(古今狂歌人物誌)

アマノフサヨシ 天野房義 通稱儀助後作十郎と改む東部の人なり西本願寺に仕ふ文政の頃綴錦を織りて名工の名あり(工藝鏡)

アマノヤスカゲ 天野康景 德川家の臣なり景恒の子にして本名は元景初字を又五郎と稱す後に三郎兵衛と改む姓藤原氏三河の人天文十八年德川家の將軍に從ひて近侍たり弘治二年二月家康の將軍に從ひて之を征し進て矢田城の攻大夫となる日向の賀牟度美良姫を娶りて健飯勝命及び淳名底中姫(安寧の后)を生む(書事記)

アマノヤリヘエ 天野屋利兵衛 有名の俠客なり名は直之大阪北組の郷長世々赤穗の城主淺野公の邸に出入して特に眷遇を蒙る元祿の變利兵衛走りて赤穗に赴き其義何ぞ遙問を勞せんと上中下の三答を作りて曰く料る所の如し惜い哉海巳に物故して在らず門弟子便ち禮の答及び海の釋義を持一海の墓前に詣り讀みて以て之を祭る(元亨釋書、東國高僧傳)

アマノヤ ソウヤ 天野屋宗也 茶道を能くするを以て世に名あり利休と同時の人なり(茶人系傳)

アマノヤ タラウザエモン 天野屋太郎左衛門「カシハラタラウザエモン」

アマノヤ リヘエ 天野屋利兵衛 有名の俠客なり名は直之大阪北組の郷長世々赤穗の城主淺野公の邸に出入して特に眷遇を蒙る元祿の變利兵衛走りて赤穗に赴き其義何ぞ遙問を勞せんと上中下の三答を作りて曰く料る所の如し惜い哉海巳に物故して在らず門弟子便ち禮の答及び海の釋義を持一海の墓前に詣り讀みて以て之を祭る(元亨釋書、東國高僧傳)

アマノフヂ 天藤 大和の刀匠にして神護景雲年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

興り聞くを得、大石良雄又竊かに利兵衛に托するに兵仗器械を葬繕するの任を以てす既にして義士相ひ分れて二部に潛匿す利兵衛大阪に在りて專ら兵器を擔任す其の成るや轍ち直に江戸に輸す要子と雖とも未知ることあり其の制甚た奇なり之を以て敢て告くと其の人を探偵すれば則ち利兵衛なり乃ち捕て之を糾す利兵衛言ふ是れ市中盜賊に備ふるが爲めのみ豈に他あらんやと其の制法の異なるを詰れば則ち曰く一武人其制を創む余聊之に倣ふのみと時に大阪の鍛工之を傳聞し其の嘗て利兵衛の爲めに兵器を作るもの告官に告く是に於て兵延に下され拷糺甚だ急なり加ふるに事妻子に及ぶ寬に鞫訊するに水火を以てす利兵衛身に完膚なく氣絕すること數次因て約するに明春自首するを以てす會親悠裕辭氣愈寬悪あるもの〻如くならす故を以て官之を許す明年に至れは世間傳へ言ふ去年十二月四日赤穗の諸士讐を吉良氏に報すと利兵衛乃ち自首して曰く我世々侯の恩顧を受け我に屬するに兵器の事を以てす同に作る所は即ち彼の諸士の用ふるものなり今諸士既に復讐を果す我か事畢れり當に刑に就くへし嘗て事の洩るゝを恐れ又刑の及ふを憫れみ故に始より要撃に知らしめず仰ぎ願くは彼等の刑か宥るし利兵衛一人を罪せられんを之と官其の義心に感し死か減して之を放ち家資悉く其の子利右衛門に賜ひ郷長か憐かしむ利兵衛府に入り郭北瑞光院に寓す院は淺野家と舊敬あるを以てなり而して姓名を改め松永士齋と曰ふ謹を以て終ふ利兵衛嘗て赤穗に至る時暴月に際し藩東公庫の什器を曝露す中に珍玩あり利兵衛良雄に請ひて之を觀る已にして一玉盞を失ふ之を檢問するに利兵衛の外入るものなし衆皆利兵衛を疑ひて良雄に告く良雄驚き利兵衛を召して曰く今日一玉盞を失ふ我子の竊まざるを知る然れども子の外入るものなし衆皆子か疑ふ將に之を如何せんとす利兵衛曰く余直に之か竊む死を逃る所なし請ふ速に刑に就かんと時に有司潛に已に國侯に告く侯紬より之を出だして曰く寡人取りて把玩するのみ利兵衛何そ知らんと是に於て群疑始て釋く良雄其の甘じて罪か引き死を愛まざるを見元祿事變の際遂に寶心を托すと云ふ利兵

衛享保十二年正月歲六十六を以て死す(甘雨亭叢書)

アマノヨロヅタクハタチヒメ 天萬栲幡千幡姫「タクハタチヒメ」

アマベヨタネマロ 海部淳名麿 醫人也長門醫師に任ぜられ貞觀元年擇銅師となる(皇國名醫傳)

アマミダイ 尼臺「マサコ」

アマミダイドコロ 尼臺所「マサコ」

アマム テツガイ 剣菊鐵崖 日回飫肥藩士なり名は忠回豐藏と稱す初め安井淡洲息軒に學ひ天保三年昌平黌に入り古賀氏に學ぶ人と爲り遺厚慤直にして寡欲學絅史に通し兼て詩文を善くす嘉永元年の秋相議中に進任す四年薩藩地恒久村と寨鎭吉村との境論起る官鐵崖を遣して豐後日田に往り之か辨理せしむ尙解けずして江戸に至り幕府に訴へ年六月に遂に調ひ勝を得て歸る慶應三年用人格抵徒堂教授に拜す明治元年藩頭に進む二年藩廢絅堂の時少參事司教を命ぜられ三年十一月照病を以て職を辭し九年六月二日神武今泉村に歿す(日本教育史實)

アマムネタカツグノスメラミコト 天宗高紹天皇「クワウニンテンワウ」

アマリハルヨシ 甘利晴吉 (野史に昌忠に作る)初藤藏と稱す甘利備前守虎泰が子にして武田信玄旗下の士なり天文十九年信玄の信州に軍を出だして小笠原と松本に戰ふや信州の兵は剛強なるにより直に進みて信玄の旗下に突入す此の時藤藏は十七歲なりしが僅に手兵を率ゐ遂に之か擊破せり因て信玄大に其の功を賞す後左衛門尉と稱す來倉丹後守の子彦次傷きて血臘中に浸入し將に死に瀕す人曰く之を治するには馬矢を水に和して飲ましむべしと即ち之を與ふ彦次怒て曰く我死するとも此恥つべきの事を爲さずと晴吉曰く彌が身若し活きて君に事へば患なり何そ活くべきの道を捨て死を求むるやと自ら馬矢の水を飲で彦次に薦む彦次感泣之か飲む因て血を瀉し治するを得たり永祿七年小田原の役に卒す年三十一(豹皮鞟、本朝武功正傳)

アマフユキ 天行 文武天皇御宇の時の刀匠にして多郡の人なりと或は云大同年間の刀匠にして大和字多郡の人なりと(本朝鍛冶考)

アミダキンノソウジャウ 河彌陀院僧正 聖筆と云ふ正應二年八月醍醐寺の座主となり陀院僧正と號す職に在ること一年

アミノノブヒラ 網野延平 江戸の歌人なり本姓は笠倉氏明治廿二年十一月十五日歿す年七十一

アミノハツソン ハリガネ 網の破損針 金一モトノモクアミ「キタセイロ」

アン 安 近江彥根の人なり石田三成の臣山田去歷の女にして後康儀右衛門に嫁す寛文年中齡八十餘にして土佐に歿す三成叛して大垣城に據るの時秀吉の將田中兵部吉政之を攻む其時の情及び當時の風俗を孫兒に語れるの話を筆し世に行安物語と稱して之を傳ふ或は云くアンは名に非ず當時の俗尼を稱してお庵さまといふなり(お安物語)

アンカイホウシ 安海法師 高僧なり天台の興長に從て台教に精しく講說に善し當時其の右に出るものなし源信法師と云ふものあり二十七問を設けて知禮法師に寄問す海其の問項を見て曰く此等の義何ぞ遙問を勞せんと必ず此を出でずと禮の答書至るに迨び大宋の法師も果して料る所の如し惜い哉海巳に物故して在らず門弟子便ち禮の答及び海の釋義を持一海の墓前に詣り讀みて以て之を祭る(元亨釋書、東國高僧傳)

アンカウテンワウ 安康天皇 第二十一代の帝なり名は穴穗、允恭帝の第三子、母を忍坂大中姫と曰ふ允恭帝崩じ太子木梨輕皇子、帝の兄、殘虐にして怒て曰く我死するとも此恥つべきの事を爲さずと晴吉曰く獨が身若し活きて君に事へば患なり何そ活くべきの道を捨て死を求むるやと自ら馬矢の水を飲で彦次に薦む彦次感泣之か飲む因て血を瀉し治するを得たり永祿七年小田原の役に卒す年三十一(豹皮鞟、本朝武功正傳)

アンカンテンワウ 安閑天皇 第二十八代の帝なり名は勾大兄、繼體の太子、母を目子媛と曰ふ位に即て都を和州勾金柴宮に遷し位に在ること二年、十二月十七日崩す壽七十河內古市高屋の陵に葬る(大日本史)

アンカモンキン 安嘉門院「クニコナイシンワウ」

アンカモンキンノシデウ 安嘉門院四條「アヅツ」

アンキモンキン 安喜門院「フヂハラアリコ」

アングワン 安願 興福寺住職なり精勤懈らず時人呼びて安願菩薩と云ふ承和二年秋但州に赴く暴風俄に來り願が獸將に覆へらんとす願依然として怖れず心に觀自在尊を念ず時に空中忽ち雲起り願の項上に當りて垂れ下る一紅怪しみ見る雲中に金色の大悲の像を現ず長け六尺許り願及び衆人瞻仰曉嘆す此に於て猛風即ち止みて怒濤自ら止み遂に岸に趨するを得たり(元亨釋書、東國高僧傳)

アンケイ 安慶「クワイゲツダウ」

アンコクジ 安國寺「エケイ」

アンザイ 安齋「ヨカジマチクウ」

アンザイ 安齋「イセテイジヤウ」

アンザイ 闇齋「ヤマサキアムサイ」

アンザイ イソキ 安西一奇 出羽米澤の俳人なり一奇は其の號別に清閑齋の號あり精一郎と稱す弘化中の人其俳歌に曰く「月よりも涼しき日なり木賊やま」(俳諧海內人名錄)

アンザイカゲハル 安西景春 (里見代代記勝峯に作る)里世安房に居る其先某保元の亂に源義朝に從ふ治承四年源頼朝同國猿島に至り其腐景益を招く景益至る子孫平郡勝山に居る景春に至り丸信朝と共に山下定盛を攻めて之を殺す慶ならずして丸氏と隙を生じ援を東條常政に請ひて丸氏を滅し其地を併す既にして里見義實の爲めに攻められて之に降る(大日本國誌)

アンザイサブラウ 安齋三郎 陸軍步兵少尉なり蝦島藩出身にして明治三十七年日露戰役に於て後備役より召集を受け第一旅團後備步兵第十六聯隊附とし從軍出征し廿八年三月九日清國盛東省田莊屯

附近に於て戰死す

アンザイ トラキチ 安齋寅吉 陸軍歩兵中尉なり北海道出身にして明治三十七年日露戰役起るや第七師團歩兵第廿八聯隊附として出征旅順攻圍軍に從ひ同年十二月一日二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アンザイ マサヨシ 安西政慶 勇士なり小字は大八後ち八左衛門と改む父名は某忠兵衛と稱す始め結城氏に越前に仕へ後ち岡部氏に美濃に事ふ政慶越前に生れ父に大垣に從ふ幼より氣節あり十八年にして父母に辭し諸州に經歷す寛永十四年肥前島原に耶蘇の黨蜂起す幕府諸侯に命じて之を討たしむ年少踰えて賊勢益々熾んなり時に政慶江戸に傳客す島原に到り黑田(筑前守)忠之の麾將内藤氏に付す二月二十七日諸將外城を擊破す賊退きて内城を保つ飛石島銃電の如し時に二十石壘を擊ちて摧壁に緣る一は朱甲を被むり一は玄甲を被むる朱甲は政慶なり乃ち槍を衛眼に欲して刺す賊鎗刀を以て其の左臂を傷つく政慶其鎗刀を奪ひて之を舍つ、石胄を碎き、銃甲を貫く二十八日内藤氏先登す政慶力戰して功あり當時朱甲を稱すれば即ち聞はずして政慶たるを知る十七年曾津中將其勇名を聞て之を召し遂に銃頭と爲す明暦元年病歿す年四十二(墓誌)

アンザン 安山 京都の俳人なり常春の門人氏は阿野、鵜毛翁と號す元文三年七月三日歿す年六十五(俳諧年表)

アンザン キツダウ 案山吉道 高僧なり藤本氏甲州の人八歳にして上野原保福寺建州禪師に從て薙髮す後ち萬安、舟田、大昌、金久等に謁し深く悟る所あり建州の死去に及て藤其の住持を薦め吉道堅く辭し受けずして山に隱る曾て木曾山を過ぎ草賊に遭ふ師内外の衣服金襴を出して之に與ふ賊熟々之を視て禮を爲して曰く某等愚昧にして座報の理を知らず多年劫賊を事とす今何の幸か佛日を覩み得ると即ち薙髮して僧となる師晚に富士山に入り巖窟に入定す其の徒久圓と云ふ者あり師を尋て茲に至り與に死せり久圓は即ち師が山中に遷ひし賊なりと云ふ(洞上聯燈錄)

アンシツ エイニン 安室永忍 高僧なり攝州源氏の子初め竹馬和尚に從ひて道を聞き後ち攝州の高平山に入て跡を晦ます三十年晚に衆請に因り丹波圓通寺の住持となりて逝す

アンシャウ 安祥「クハアンシャウ」

アンシャウキンドノ 安祥院殿 松平氏德川重好(清水家祖)の生母にして德川家重の側室於遊の方なり松平又八郎親春の養女實は三浦五郎左衛門義如の女なり寛政元年四月卒す東叡山に葬る和歌を好み集あり心の月と曰ふ

アンシュウ 安秀 高僧なり美濃の人なり興福寺の平源僧都に從て唯識宗を承け兼て三藏を研きて天德二年維摩會の講師となり尋て新院の勅を受て天德二年維摩會の講師となり尋て新院の勅を受て方丈に滿てり應和二年選ばれて宮中の講會に侍し叡山の賢秀の間に應じ辯難數次秀能く玄深を聞きて餘蘊なからしめたり天祿二年興福寺の主務に補して少僧都に任ぜらる(本朝高僧傳)

アンセイ 安靜「ハギノアンセイ」

アンセイ 安正「アサミケイサイ」

アンセイ 安生「リウアンセイ」

アンセイ 安仙「カノアンセイ」

アンジドノ 安禪寺殿 後花園帝の皇女比丘尼延德二年薨す五十七歳

アンゼンジノ みや 安禪寺宮 後奈良帝第三の皇女(早世廿五歳)

アンゼンジノ みや 安禪寺宮 後土御門帝第一の皇女比丘尼明應六年薨す二十二歳

アンゼンジノ みや 安禪寺宮 陽光院帝第一の皇女天正七年早世

アンゼンジノ みや 安禪寺宮 後土御門帝第三の皇女比丘尼永正十九年薨す

アンソウ シュウヤウ 闇窓「モリヤマタカモリ」長州の人、闇翁珠門禪師に從ひて旨に通す天正十七年度を繼て開堂し長州大寧寺に住む慶長九年歿す(洞上聯燈錄)

アンソウ ソウリャウ 安曳宗樗 禪僧なり駿州の人大森氏の族幼にして最乘大綱禪師に投して學ぶ綱の殁するに及びて春屋に依止す後總持寺に住す

アンチ アンチン 闇知「キヤウゴクタカヒラ」

アンチ 安珍 薩馬山に居す嘗て一比丘と熊野山に詣り半裏郡の村舍に宿す舍主は寡なり兩三婢を出して二比丘を餉す安珍窺あり主婦潛かに安珍の所に至りて心緒を通ず初め二比丘慰勞の密なるを怪しむ此に至りて始て覺る安珍曰く我れ是れ編服豈に闇間の徒ならんや寡居の餘情非類に溢る又恥つべき也と婦人大に恨みて安珍に傍ひて離れず安珍已むことを得ず軟諭して曰く我遠地より熊野に赴く宿志書へ來ること久し婦姑くこれを待てと女喜びて去る曉更に安珍路に上りて神祠に著き歸途婦家を經て入らず急に奔り過ぐ主婦歸程を數へて供膳を儲け門に傍ひて路を伺ふ期を過ぎて至らず適ま一僧過ぐ主婦問て曰く某容貌の二比丘熊野より途に及ぶまで相見ることありや對へて曰く其の沙門此を去ること恐らくは二日前ならんのみ婦聞て大に怒み乃ち蛍に入りて出でず傳へ言ふ主婦蛇と化して安珍を逐ふ安珍道成寺に入り衆に告げて救を乞ふ衆大鐘を下ろして安珍を鐘裏に納る已にして大蛇來り鐘を蟠圍し尾を擧げて鐘を敲く火炎迸散す衆之を如何とも能はず時を移して蛇去る寺衆鐘を倒して中を見るに安珍を見す又た骨なし只だ灰塵のみと(元享釋書、燕石十種)

アンチョウホウシ 安澄法師 高僧なり俗姓身人氏、丹波(丹波一に河内に作る)船井の人、河内善議法師の上足なり大に空宗を啓き兼て密教を學ぶ石淵寺の座主勅操法師と莫逆の交を締ふ平生高志あり弘法を以て己れが任とす人となり敏捷にして議論人を驚かす一時其の右に出つるものなし唯四大寺の泰演法師敵手たり弘仁五年三月寂す年五十二(元亨釋書、東國高僧傳)

アントウ カマヂ 安藤鎌治 勤王家なり諱は正勝鎌治と稱す土佐國土佐郡久萬村の人慶應二年土佐藩命を以て京都の藩邸に行く本藩有志の士早くより京都に潛伏し勤王の事を謀る者少からず鎌治是等の志士と縞に往來して鎮りに力を時事に盡す元治元年七月長州の兵闕下に亂を起すや後幕吏長萬の罪狀を榜文に作りて之を三條橋の西掲示場に掲ぐ在京の諸有志見

て以て不快となす八月二十九日の夜十津川郷士數人來りて其榜札を撤し之を加茂川に投ず是に於て京都町奉行より命あり九月二日再び新榜を掲げしに四日夜復之を拔き去る者あり同十日更に復掲げしに市人薄へて威命の行はれざるとか嘲りて仍て町奉行は之を守護職松平容保に謀る容保乃ち新撰組に其保護を命ず組頭近藤勇其部下を率ゐ新井忠雄等十二人を高瀬川東の酒肆に原田左之助等十二人を先斗町北の町會所に大石幸次郎等十人を三條橋東の一商家に潛伏せしめ又橋本會助等三人は身を乞丐に變じ三條橋下に臥して三所に報ぜしむ鎌治等斯る企あるを知らず十二日の夜藤崎吉五郎宮川助五郎松島和助早川安太郎澤甚兵衛竹村虎太郎中山鎌太郎等と八人圓山下の酒肆に會し新榜撤去の手筈を定め其夜子の刻の頃瑞泉寺の東より掲示場に入り將に木柵に上らんとする時兼れて窺ひ居たる者之を三所に急報し又原田左之助の一隊は曩に鎌治等の一行を見怪しみて追蹤したりしかば直に四方より之を包圍す鎌治等力戰漸く敵を斃け一方を突破して遁れしか急報に依りて馳せ向ひたる新井忠雄の一隊に再び遮られ八人は且つ戰ひ且つ走り高瀬川三條東路に至りし時大石桑次郎の一隊亦來るに會す是に於て鎌治意を決し獨り留りて三面の敵に當り重傷を負ひ辛うじて一方を切り拔けて藩邸に歸りしが藩命を以て職を奉じながら亡命の士と事を俱にしたるは藩に累を及ぼすものなればとて翌十三日自刃して死す時に年二十五年明治三十一年七月特旨を以て從五位を贈らる(殉難錄)

アンドウ カメ 安藤龜 安藤朴翁の妻なり丹波于年郷の人、父道夢居士連歌を能くす蟲幼より敏警父に隨て和歌を學ふ纖筵縫裁に至るまで心を盡さざるはなし朴翁の母其の名を聞き聘して朴翁に要ばす禁渡に出入して歴々歌宴に侍る後水尾帝及び明正帝呼ふに今式部を以てし寵遇甚だ渥し寛文八年歿す年三十九中院大納言通茂其の遺稿を題して今式部家集と曰ふ(近世叢話)

アンドウ ギホク 安藤嶷北 俳人なり通稱元達豐後大分郡玉澤の名族なり果代醫を以て業とす其先安藤業東征に功あり藤を東字に改めたりと云ふ詩文書をよくす花儒園又梅響と號す明治二十八年五月二十八日歿す年四十四(三森松江氏寄)

アンドウ キヤウジヨ 安藤强恕 幼名は眞之助と改む父は是平土佐藩の世臣たり少して擊劍を善くし稍漢籍に渉る人と爲り慷慨氣節を尚ぶ文久三年癸亥の冬國を脫して長州に客たり甲子京師の役戰ひ敗る强恕苦戰圍を破りて天王山に退く衆途に遊るゝ者あり强恕曰く吾輩衆に先ちて義を天下に唱へ垢を含み活を求めんよりは死するに如かずと遂に自殺す年二十二(南海義烈傳)

アンドウ クワイヂウ 安藤快翁 勇武の士なり名は定貫、蒲五郎と稱す維鎔の子、丹波千年郷小口村を食む人と爲り勇敢にして志力あり父死して後土人を糾合し城砦を出雲村に築きて此に據る是の時織田信長明智光秀をして丹波を徇へしむ定貫防禦利なく城を棄てゝ走る迹を丹波に匿まず後數年を歴て小口村に遷り自ら快翁と號す慶長十年歿す(近世叢話)

アンドウ クワンリ 安藤冠里「アンドノブトモ」

アンドウ ゲンザウ 安藤源藏 茶人なり名は英重初名は鹿澤後ち京師に遊ぶ長休宗彦根の人、名は英重初名は鹿澤後ち京師に遊ぶ長休宗佐に從ひて茶法を學び之を以て世に鳴る(茶人系傳全集)

アンドウ サダヅグ 安藤定次 太郎左衛門家重の第四子なり永右衛門と稱す初め德川家康に仕へ後ち岡崎三郎信康に仕ふ信康死して後石川伯耆守數正或は内藤彌次右衛門に屬す又た戰に出て首を取ること十六度長五年内藤氏に隨して伏見城を守り左股を射られ其の矢を拔き麾して士卒を指揮す幸に二の丸の持口に戰死す年六十一子あり正次、正勝、一勝、定次(近代諸士略傳)

アンドウ サダトシ 安藤定壽 茶人なり通稱治右衛門茶法を三宅傳後守源巢高に學びて能くせり(茶人系傳全集)

アンドウ サダトモ 安藤定智 傳十郎と稱す慶長十四年德川秀忠に謁し御書院番を勤む大阪夏の役に青山忠俊に屬し平野口强敵の中に入り胃士一人二橋觀と號す通稱治右衛門茶法を三宅傳後守源巢高に學びて能くせり(茶人系傳全集)

アンドウ サダトモ 安藤定智 傳十郎と四年德川秀忠に謁し御書院番を勤む大阪夏の役に青山忠俊に屬し平野口强敵の中に入り胃士一人足輕一人を誅す功を以て八百石を賜はる元和九年徒士

頭となる寛永元年足輕五十五人を賜られ二百石を賜はる九年與力十騎を加へ十年七百石を加賜す十三年九月二日死す年五十一法名宗休と稱す(近代諸士略傳)

アンドウ サダマサ 安藤定正 家定の子なり家定は家重の第三子なり家定德川家康に仕ふ定正は今川氏眞に仕ふ永祿十一年武田信玄兵を率て駿州に入るや氏眞去て遠州懸川城に退く從卒多く心を變して從はず獨り定正相從て患難を與にす氏眞其忠を賞め感狀を賜ふ氏眞懸川城を開きて相州小田原に往く從兵僅に十餘人定正獨其内に在り氏眞上洛の時定正其の意を知らざるを以て從はず北條常陸介氏照の家に留り屬と戰功あり後ち參州に歸て家康に謁し慶長元忠に屬す十八年岩槻城攻の時先登して敵を斬り猶進みて城下に至りて戰死す年四十三(近代諸士略傳)

アンドウ サダミ 安藤定見 參河守といふ父は安藤八郎範澄と稱す丹波國關の城主柳本伊豫守が臣なり伊豫守是時範澄と名倉彦七郎二人を以て領内出雲城に代監となし留しに肥永年中の春郷士藪周防守山田越中守屬潮丹後守等俄かに逆心を生し柳本が家臣奥父四郎に密議して大將となし不意に出雲城を襲ひ安藤名倉を擊取る是時定見は僅か五歳なりしを乳母竊かに提携して遁れ出て小口村の農舍に潛居して養育せり又四郎は難なく城を奪取て居住十三年を過しけるに定見幼稚といへども常に復讐を心懸け十八歳に及んで本城柳本に援兵を乞ひ近村の土民を雇ひしに民人大に悅び服從す因て即時に兵を擧て出雲城を攻め一時に乘取り自ら仇讐の父四郎と接戰し難なく是を伐取り其仇を復すといふ(豹皮錄)

アンドウ シゲナガ 安藤重長 勝藏と稱す慶長十四年始て德川秀忠に仕へ大阪兩陣に從ふ夏陣に年十六敵の首級を得て從五位下に叙し伊賀守に任す後右京亮に改む此年上州板鼻に二千石を賜ふ七年父の家を繼ぎ五萬六千石餘を賜はる九年命を奉じて家光に仕ふ寛永元年四國の諸侯命を受て大阪城の石壁を築く時其の勤務を慰して衣服を賜ふ重長秋元但馬守泰朝と使として大阪に到り其事を沙汰して江戸に歸る二年御書院番頭となる十年上州總社一萬石を加へ賜ひ部合六萬六千石を領す十二年寺社奉行となる十四年發者番と

なる明暦三年九月二十九日卒す年五十八二子あり長は重信次は信保なり

アンドウ シゲノブ 安藤重信 直次の子なり初字は彦十郎更に五左衛門と稱す德川樂康の家臣なり長祿の戰に從ひて首級を獲又家康の子秀忠に仕へ慶長九年從五位下に叙し對馬守と稱す十五年上野吉井の田五千石を賜はる十六年奉行職に補せらる十七年下總小見川の田一萬石を加賜す大阪冬の役秀忠の軍に從ひ振旅の時諸部を嘗して殿す夏の役起るに及びて後拒に從ひて發す子重長をして兵を率ゐ會戰せしむ城陣と危きに及びて右府秀頼堡び母淀君種倉に匿る伊井直孝之に赴く重信檢監たり城中灰燼して後ち重信大阪に留る二旬餘にして京師に入る是年八月鹿島結城山上等の田二萬石を加賜せらる元和五年十月又上野の田二萬石を賜ほり封を高崎城に遷す都て邑領九萬六千石を貪む七年六月(一に八年九月に作る)卒す年六十五(野史諸士略傳)

アンドウ シン 安藤信 陸軍歩兵大尉なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第三十四聯隊附として出征し八月三十一日滿國盛京省遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

アンドウ ジンゴザエモン 安藤甚五左衛門 駿府城代稻葉正能の老職也明暦二年八月正能自殺す將軍家綱北條氏長を遣はして之を驗せしむ其の死狀人の殺す將軍家綱に似たり是に於て正能の奏正則正能が家衆を召して之を推問す甚五左衛門衆に謂て曰く寡君近ごろ愛女を亡ひ憂傷喪心して以て此に至ると言ひ舉りて湯泣す衆之を憫む太田資次正則に謂て曰く彼れの言信ずべからず正能果して狂せば彼れ當に之を言に顯はさざるべし況や事疑似に涉るをや宜しく近臣を窮治して以て情僞を決すべし正則之を然りとし衆に問ひて曰く正能が近臣誰れか安藤と善きか衆松永寄内を以て對ふ乃ち捕へて訊刺す服せず因て肝を以て試問す果して甚五左衛門と私通して之を殺す家綱二人を執へ正則に賜ふ正則之を焚殺す(續々鼻朝史略、德川實紀)

アンドウ シャウシウ 安藤聖秀 新出義真の伯父なり義真の兵と稻瀬川に戰て敗れ還る北條高時已に東勝寺に逃れて府會焚滅し將士悉く腹を搔き秀愚次は信保なり

アンドウ シュケイ 安藤重信 直次の子なり初字は彦十郎更に五左衛門と稱す德川樂康の家臣なり長祿の戰に從ひて首級を獲又家康の子秀忠に仕へ慶長九年從五位下に叙し對馬守と稱す十五年上野吉井の田五千石を賜はる十六年奉行職に補せらる十七年下總小見川の田一萬石を加賜す大阪冬の役秀忠の軍に從ひ振旅の時諸部を嘗して殿す夏の役起るに及びて後拒に從ひて發す子重長をして兵を率ゐ會戰せしむ城陣と危きに及びて右府秀頼堡び母淀君種倉に匿る伊井直孝之に赴く重信檢監たり城中灰燼して後ち重信大阪に留る二旬餘にして京師に入る是年八月鹿島結城山上等の田二萬石を加賜せらる元和五年十月又上野の田二萬石を賜ほり封を高崎城に遷す都て邑領九萬六千石を貪む七年六月(一に八年九月に作る)卒す年六十五(野史諸士略傳)

アンドウ シン 安藤信 陸軍歩兵大尉なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第三十四聯隊附として出征し八月三十一日滿國盛京省遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

アンドウ ジンゴザエモン 安藤甚五左衛門 駿府城代稻葉正能の老職也明暦二年八月正能自殺す將軍家綱北條氏長を遣はして之を驗せしむ其の死狀人の殺す將軍家綱に似たり是に於て正能の奏正則正能が家衆を召して之を推問す甚五左衛門衆に謂て曰く寡君近ごろ愛女を亡ひ憂傷喪心して以て此に至ると言ひ舉りて湯泣す衆之を憫む太田資次正則に謂て曰く彼れの言信ずべからず正能果して狂せば彼れ當に之を言に顯はさざるべし況や事疑似に涉るをや宜しく近臣を窮治して以て情僞を決すべし正則之を然りとし衆に問ひて曰く正能が近臣誰れか安藤と善きか衆松永寄内を以て對ふ乃ち捕へて訊刺す服せず因て肝を以て試問す果して甚五左衛門と私通して之を殺す家綱二人を執へ正則に賜ふ正則之を焚殺す(續々鼻朝史略、德川實紀)

アンドウ シャウシウ 安藤聖秀 新出義真の伯父なり義真の兵と稻瀬川に戰て敗れ還る北條高時已に東勝寺に逃れて府會焚滅し將士悉く腹を搔き秀愚次は信保なり

**アンドウ シゲノブ

邊藩主なり安藤常刀の後胤にして直紹の子なり安政五年十一月小石川安藤坂の本邸に生る明治四年家ゝ嗣ぎ十七年男爵を授けらる三十年貴族院議員に當選し爾來其職に在り四十一年三月六日病を以て逝く病危篤に臨み特旨を以て位一級を進め從三位に叙せらる至性志厚く舊領の教育十木事業に心を注ぎ巨額の金を之に投じたりと云ふ小銃の射擊に妙を得其名斯界に聲々たり年五十二青山共同墓地に葬る

アンドウ ナリタカ 安藤就高 美濃大垣の人なり卒業心を民治に盡し租法財計に精し維新の初租稅助に任じ尋で檢査頭に任ず時に藩を廢し餘を置き全國租入の簿册悉く大藏省に送る國其制を異にし藩其法を異にす猥雜紛擾として統紀なし是に於て省議制を更めんと請ふ朝廷これを嘉納し遂に改租の令を發し全國の租額已に定まる又た歲計豫算決算及び會計年度改正の法は就高皆興て力あり明治元年二月始て會計官に任へ商法出納驛遞庶務監督諸司列事知事に累進して大藏少丞より大書記官に遷り會計檢査院副長に陞り勵三等に叙し從四位に叙せらる偶ゝ師病を得十九年一月十日家に愛す年五十七戊辰の年奥羽未だ平定に屬ぜず國用多端なり因て紙幣を造り國用を助く時に人民疑を懷き價格低下す就高おもへらく紙幣流通の道はその價格を正すにあり價格を正さむと欲せば準備金を具へて交換を約し信を人民に得るにあらざれば行はる可らずと因て大阪に赴き豪商某々を招き曉諭再三盡力徵集し事また整頓す然る後世間始て其價貨幣と異ならず且其輕便なるを識り價格驟かに騰貴し海内通用せざるはなし二年正月紙幣通用事務の勞を賞し金若干圓を賜ふ少にして學を同藩水野隆沈に受け好て莊子を讀む晚に儒を安田老山に學び自から夢梅と號す退食の餘暇宣染みづから娛む(碑文)

アンドウ ヌカリ 安藤野雁 國學者なり奥州桑折郷山の官吏なり通稱謙次後刀爾と稱す篤忠質の塾に在り最も萬葉に精し又歌詠を巧にす明治二年根岸武香の實山の邸に病死す

アンドウ ネンザン 安藤年山 水戸藩の儒者なり初名は爲明後に爲章と稱す初右平後新介と稱す朴齋の第二子丹波の人、少して兄素軒と俱に儒を學び勞ら國學を修む詠歌は中院内府道茂の門人たり交の雅を以て出で伏見宮に仕ふ後又水戸義公の招に應じて日本史、禮儀類典等の編輯に參預し絲三百石を食む義公薨去の後

も皆惟實み崇ひ呼ふに王子み以てして敢て小日村を使さず惟賈老ゆるに及びて自ら雑錦と號す歌詩み好み優游自娛む臂て千年山八景（即ち夢雲洞、曬月岩、洗耳泉、愛蓮塘、吟雪橋、賞竹徑、嘆梅塢、抱琴園）の記み撰す綴るに和文な以てす平生恒に椎髻長鬚藜杖み曳きて或は近村に閑歩し或は樂藝み携へて村民の病あるものに施し或は所在に松杉柿栗の子み種ゑて久遠の計みなす一生隱居自適以て終ふ元龜元年年四十一なり（近世叢話）

アントク　テンワウ　安德天皇　第八十二代の帝なり名は言仁、高倉帝の太子なり母み建禮門院平德子と曰ふ三歳にして高倉帝の譲み受け位に即く時に清盛權み專にし都み京都に遷し上下嘆怨す既にして清盛死す帝洛陽に遷る頼朝鎌倉に起り平宗盛帝み率じて筑紫に赴き復た讃州壇浦に趨る源義經の爲めに敗られ平氏滅し帝遂に海に投じて崩す時に文治元年四月なり在位五年改元二度壽八歳神器海に沈む（大日本史）

アンネイ　テンワウ　安寧天皇（シヤウコリヒメ）　第三代の帝なり母み五十鈴依姫と曰ふ名は磯城津彦玉手看、稜靖帝の二十五年に皇太子となり三十三年七月三日位に即きて都み和州片鹽に遷し浮孔の宮にあること三十八年にして崩ず壽五十七（大日本史）

アンネン　安然　傳教大師の系族なり長ずるに及びて聰敏人に邁れ早く叡山に登り慈覺大師に從て顯密の二教み學ひて其の秘奥み極む又た花山の遍昭に就て胎藏法み受く博く經論に涉獵し百家に聽聘して其の進作する所大教み補彌す所謂る教時問答、菩提心義、悉曇蔵、大悉曇章等なり其の教時問答は一佛一處一教み立て、三世十法一切佛教み判攝す顯密み錯綜し諸宗み泛綜す台密の者法み之に取る其の悉曇章は深く梵學の奥旨み得たり時人曰く安然は東岳の舌み以て西天の音韻に通ずオ宏瀏なるかなと都率超曰く然り師は顯密の博士なりと又曰く公若し我が門に入らざれば秘教地に墜つ可しと其の英賢の爲めに推さること此の如し元慶八年勅して元慶寺專法阿闍梨とす（元亨釋書、東國高僧傳）

アンパフ　ホウシ　安法法師「ミナモトシタガフ」　鞍風　長崎の俳人なり香川丹丘と稱し月菴と號す（俳家人名錄）

アンブウ

アンベ　ヒヤウゴノスケ　安部兵庫介　江州石山の産にして占術に達す武田信玄その才み愛し信州水内郡に百貫の食邑み與ふ時に永祿十一年東方に烟氣み屬する客星見はる世人災異あらむことみ恐る信玄これみ兵庫に問ふ答て曰これ天、異み示して人み戒むるならむ凡滿れば缺け盛なれば衰ふるは自然の理なり故に人君は每に盈滿み戒しむ主君の繁榮二十代にわたり今其盛み極む主君益に意み留めよと信玄大に悔悟する所あり兵庫は是より職み辭し子孫み商となし自からは俵邑を還納し鄉里にかへりて老み養ふといふ（豹皮錄）

アンマ　ヒロシゲ　安間弘重　武田信玄の士なり天正永祿の際信玄上杉謙信と兵み交へて屢〻信州川中島に抗衡し年み累ねて勝敗決せず互に死傷多し七年八月兩軍相約して曰く各〻士み出だし單身にして戰み試ましめ其の孰輸に歸て川中島の地み得るみ決し以て兵み罷めんと是に於て弘重信玄の命み受けて出づ謙信長谷川基連と云ふものみ出だす基連は軀幹短矮に して弘重は長大遠く衆に超ゆ已にして兩騎相搭し抱て馬より墜つ弘重力強くして基連み壓す而して終に基連の爲めに膂下み刺されて死す甲軍之み觀て憤り兵を進めて將に戰はんとす信玄之み止めて曰く我れ敢て食言せずと乃ち川中島の地四郡み以て越後の所屬と爲し兵み罷むと云ふ（野史）

アンマ　レウグワン　安間了願　補家の老臣にして智勇兼備の男士なり珠に能く長鎗み用ふ補正行の細川顯氏山名時氏と碧田原に戰ふや了願鎗み揮て三十六騎み殪す世之れみ稱す（本朝武功正傳）

アンエ　安慧　高僧なり狛氏河内大縣郡の人聰敏俗に超ゆ七歳にして州の小野寺の廣智菩薩に事ふ廣智其の才器み異とし携へて台嶺の傳教大師に付す時に年十三大師寂するに及びて慈覺遍那孔雀等の經み受く天長四年大日經業み試みて得度し期年の間三部念誦四種三昧み修す承和十一年羽州の諸師と爲る時に管内菅唯識み學びて吉敎み知らず安慧謂み開きしより州人相み聚て、性に期す朝廷定心院を創し十禪師み置く九人み擇み得て一人み闕く安慧み得て數に滿つ貞觀八年六月安慧撰ばれて座主に補せらる十年四月三日寂す年七十四（元亨釋書、東國高僧傳）

アンラクアン

アンラクミン　キンノミヤ　安樂心院宮「コウエンホフシンワウ」

アンヤウキンノミヤ　安養院宮「クニタカシンワウ」

アメクニオシハラキ　ヒロニハノスメラミコト　天國排開廣庭天皇「キンメイテンワウ」

アメシルシクニ　ヨシヒラキ　トヨサクラヒコノスメラミコト　天璽國押開豐櫻彦天皇「シヤウムテンワウ」

アメタラシヒコクニオシヒトノミコト　天足彦國押人命　孝昭天皇の皇子なり母は世襲足媛皇后（大日本史）

アメトヨタカラスメラミコト　イカシヒタラシヒメノ

アメニギシクニニギシ　アマツヒダカヒコホノニニギノミコト　天邇岐志國邇岐志天津日高火之邇々藝命（日本書紀）一書に天之杵火々置瀨尊に作り又一書に天杵瀨命に作る）天忍穗耳命の子なり母は高御産靈神の女萬幡豐秋津師比賣命、父尊葦原中國に至らんとする時生る父尊乃ち天照大御神に請ひて命み以て中國の主となし此に居らしむ乃ち三種の神器み承けて筑紫の日向の高千穗の峯に來る（古事記）

アメノ　アカルタマノミコト　天明玉命　日神窟に隱るゝの時八坂瓊曲玉み作れるの神にして玉作連の祖なり古事記に玉祖命に作る（日本紀、舊事記）

アメノイハトワケノカミ　天石戸別神「クシイハマトノカミ」

アメノウズメノミコト　天鈿女命　古語拾遺に其の神強悍猛固故以爲名今俗強女謂之於賣志此緣也此神素隈の基惡み日神に白す又岩屋戸後に眞榊の葛み以て髮に掛け鬘葛み以て手繦とし竹葉飫憨木葉み以て手草とし石窟の前に誓槽み置ひ之み踏みて俳優みなし大御神み慰めまつる天孫降臨の時地神猿田彦神其の道に立つ衆恐れて進まず命進て其名み問ふて導みなさしむ命の子孫猿田彦命に仕ふ姓み猨女君と云ふ（古事記、舊事記）

アメノウハバルノミコト　天表春命　八意思兼命の子なり信濃の阿智祝等の祖なり（舊事記）

アメノオシヒノミコト　天忍日命　又神爽日命と云ふ高皇産靈神の子天孫降臨の時弓矢を執て前驅せる神也大伴連等の祖なり（古事記、舊事記）

アメノカゞセヲ（カボシ）　天香々背男「アマツミタカクラジ」

アメノカゴヤマノミコト　天香語山命

アメノクヒザモチノカミ　天之久比奢母智神（速秋津彦神の子にして國之水分神の弟なり（古事記、舊事記）

アメノクラドノカミ　天之闇戸神（オホヤマツミノカミの第五子にしてクニノサヂリノカミの弟なり（古事記）

アメノコヤネノミコト　天兒屋命　天照大御神の大臣なり神皇産靈命の子後天孫に從て中國に下る中臣連即ち藤原氏の祖なり春日大明神及平岡大神是なり（古語拾遺、古事記）

アメノサギリノカミ　天之狹霧神（オホヤマヅミノカミの第三子にしてクニノサツチノカミの弟なり（古事記）

アメノサヅチノカミ　天之狹土神　大山津見神の長子なり（古事記）

アメノシタハルノミコト　天下春命　八心思兼命の子なり武藏秩父造の祖（舊事記）

アメノタヂカラヲノカミ　天手力男神「タチカラヲノミコト」

アメノタナバタヒメノカミ　天之棚機姫神　日神岩窟の時神衣を織る（古語拾遺）

アメノタネコノミコト　天種子命　天兒屋命の孫なり神武帝即位に諮詢を進べ又中國已に定まり國政整ふに至り天罪國罪み定め祭時み鳥見山に建てて皇天み祭る世〻以て職となす（古語拾遺）

アメノタラシネノミコト　天帶根命　景行帝の皇子なり

アメノトコタチノカミ　天之常立神　天地剖判の時始めて天に生ぜる神なり（舊事記）

アメノトミノミコト　天富命　天太玉命の孫なり神武帝の爲に櫻原宮を營し又阿波の齋部を率て安房に移り麻を植ゑしむ太玉命の社を建て安房社と云ふ（古語拾遺）

アメノトリフネノカミ　天鳥船神（島之磐楠船命に同じ）

アメノヌカドノミコト　天糠戸命　石凝姥神の子なり日神遯窟の時父と共に天香山の銅み採て鏡み作る鏡作の祖なり（舊事紀）

アメノヌナハラ　オキノマヒトノスメラミコト（テンワウ）　天淳中原瀛眞人天皇「テンムテンワウ」

アメノハツチヨノカミ　天羽槌雄神　倭文の遠祖なり日神退窟の時文布を作る（古語拾遺）

アメノヒカタクシビガタノミコト　天之常立神　天日方奇日方命　大神君の祖にして事代主神の子なり神武天皇の時可美眞手命と共に申食國政大夫となる亦の名は櫛御方命亦の名は阿田都久志尼命母は陶津耳命の女活玉依姫なり命の妹姫踏鞴五十鈴姫命神武の后たるに依り皇太子となれるなり母命の事跡大に賀茂別雷命の傳に似たり此神恐くは別雷命と同神なるべし（舊事紀）

アメノヒワシノカミ　天日鷲神　天太玉命の臣なり阿波の忌部の神なり日神退窟の時津咋見神と共に穀木み種ゑて白和幣み作る日本紀に又天之冬衣神と共に作る（古事記）

アメノフキネノカミ　天之菖根神　素戔嗚尊五世の孫なり尊が蛇み斬りて獲たる神劒み奉じ天に獻ず同く五世の孫に天之冬衣神あり大國主神の父なり同神か（古事記、舊事紀）

アメノフツギヌノカミ　天之吹男神　伊奘那岐神の子、大戸日別神の弟なり一說に曰ふ速吹戸主神の別名なり（古事記）

アメノフトタマノミコト　天太玉命　高皇産靈神の子なり日神隱窟の時和幣み作る齋部氏の祖にして安房の一の宮なる同國安房郡の洲崎神社に祀れる神是也（古語拾遺、日本一宮記）

アメノホアカリノミコト　天火明命「ホアカリノミコト」

アメノホノアカリノミコト　天火明命「ニギハヤヒノミコト」

アメノホヒノミコト　天菩比命（一に天穗日命と書す）素盞嗚尊姉天照大神の御髻の玉み嚼みて吹ける霧中に成りまぜる神なり忍穗耳尊初めて中國み征するとき將として遣はされ往いて大國主忍穗耳尊と和するの後大國主み天日隅宮に隱れしめ菩比命みして之に祭主たらしむ（古事記、出雲國造傳統略）

アメノマヒトツノミコト　天目一箇命　太玉命の臣也筑紫伊勢兩國の齋部及山代國造の祖にして日神退窟の時刀斧鐵鐸み作る（古語拾遺）

アメノミムネトヨオホヂノスメラミコト　天眞宗豐祖父天皇「モンムテンワウ」

アメノミクマリノカミ　天之水分神（ハヤアキツヒコノカミの子にしてツラナギノカミの弟なり（古事記）

アメノミコトヒラカスワケノスメラミコト　天命開別天皇「テンヂテンワウ」

アメノミチネノミコト　天道根命　神皇産靈命五世の孫（一に子に作る）神武天皇の時祀伊國造となる祀の河瀨の直の祖なり（舊事記）

アメノミチカヌシノカミ　天之御中主神　日本開闢の始めに初めて高天原に生れ一神なり舊事記に又底立尊と曰ふに作る（古事記）

アメノミヤ　シンタラウ　天宮愼太郎　勤王の志士にして長州藩士也諱は行文愼太郎と稱す文久三年六月佛國軍艦赤間關に碇泊するや藩の肚士を指

揮して之を鎮撃す後事の粗暴なりしを悔ひ執政に自首し了其罪を待ちしも藩主肯て之を問はず憲太郎痛く其恩に感じ奇兵隊の中に入り竊に報效を謀る元治元年八月健武隊の長及び陣營の見令役に擧げられしかば愈々忠勤を盡さんと期す慶應二年正月其隊の士俗論黨の襲と給堂村にて爭鬪せし時憲太郎勇み進んで敵陣に斫入り遂に戰死す時に年三十九明治三十五年十一月朝廷其志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

アメノムラクモノミコト　天村雲命　饒速日尊の孫にして天香語山命の子なり亦の名は天五多底、度會神主等の祖なり天孫降臨の後中國の水住からず命天孫の詔を奉じ天に登り天照大神の詔を承け井水を改良す今阿波國麻殖郡に天村雲神社あり（舊事記、神道五部書）

アメノモリ　ギウナン　雨森牛南　儒家なり名は宗眞字は牙卿牛南と號す父松庭と號す越前の人大野の官醫たり牛南山本北山に學びて經史に博覽なり尤も詩をよくす當時詩豪を以て稱せらる文化十二年十二月に歿す年六十著はす所論語眞說、詩說溯觀、萬日紀行、筆京、松庭春秋、松庭醫談、牛南子、牛南詩鈔等あり（續諸家人物志、鑑定便覽）

アメノモリ　ハウシウ　雨森芳洲　對馬俊の文學なり名は俊良又誠清、字は伯陽、東五郎と稱す芳洲は其の號、又錦尙堂と號す平安の人或は曰ふ伊勢の人と幼にして醫を學ぶ伊勢の人高尋某醫を以て名あり一日人に謂ひて曰く書を學ぶ伊勢の人高尋某醫を以て名あり一日人に謂ひて曰く書を學ふものは紙費え醫を學ぶものは人費ゆ此際信に然りと芳洲傍に在り之を聽き竊かに謂らく紙を費すは猶可なり人其費すべけんやと是より斷然復た醫を學ばず年十七入にして江戸に往き儒を木下順庵に學ぶ才藻卓絕順庵稱して後進の領袖とす遂に其薦めに因り對馬侯に仕へて文敎を掌る（一に書記に作る）芳洲外國の語に通ず每に韓人と說話するに諺者を假らず韓人嘗て戲て曰く君善く諸邦の音に通ずと而して殊に日本に熟すと正德元年朝鮮來聘の時に新井君美善く用ひられ專其事を司り多く酬答の文を草む從來朝鮮書を幕府に呈するに日本國大君の稱を以てす君美改め日本國王と稱せしむ芳洲乃書を君美に與へて其非を論す君美遂に納れず芳洲本と白石と均しく木下順庵の門人にして相ひ識る三十年而して交情相ひ協はず常に白石が稱して其の心術測る可らずと曰へり芳洲嘗て慢窓茶話を著はし慢窓羅山より其の師順庵及び社友のものを擧くるも而して獨り白石に及ばざるは亦此を以てなり芳洲勃學老いて益く篤く其の子弟に敎ふる懇々倦まず年八十一始めて國歌に志し古逼又自ら賦する一萬首、人其の精力に服す寶曆五年正月六日歿す年八十八、芳洲人と爲り日く吾飲食衣服より以て宮室爵位に至るまで絕て偏好なし故に圍厨寂寞門無事之を鬼神に歸して子顧光なし從ひ學ばしむ幾もなくして曰く茂卿は一代の豪傑なり然れども其人を敎ゆる浮華を尙び德行に原かず久く少年輩を誤り可らずと遂に辭せしむ著はす所橘慢文集、橘慢茶話、橘慢漫錄、多波禮草、朝鮮略說、隣好始末物語、鶴林聘事錄、交鄰提醒あり子孫相繼て學職となると云ふ（甘雨亭叢書、先哲叢談、近世叢語、續近世畸人傳、近代名家著述目錄、事實文編）

アメノヨロヅトヨヒノスメラミコト　天萬豐日天皇「カウトクテンワウ」

アメノワカヒコノカミ　天稚日子神　天津國玉神の子なり天之麻日命瑞穗國を征せんとして往て還らず命思兼神の薦に因り天照大御神の詔を承けて往て征す而して瑞穗國の主大國主神の女下照姫を娶り自ら其の國を獲んと欲して終に還らざること八年天照大御神乃ち人を遣はして之を詰らしむ命之れを殺す大神及び高御產靈神大に怒り命を射殺す（古事記）

アメノヨハバリノカミ　天尾羽張命　一に伊都尾羽張神と云ふ伊弉諾尊軻遇土を斬るの刀即命なりと云ふ天安河の河上に河水を逆に堰きて居る忍穗耳尊の勅により之に順ひ其子（按ずるに曾孫、武甕槌なり）して大國主を征せしむ父の名は伊豆雄走神と云ふ舊事紀に此の外亦名は甕速日神亦名建御雷神亦名建御雷之男神となす（古事記）

アヤカシコネノカミ「カシコネノカミ」　阿夜訶志古泥神

アヤシゲ　綾繁「カメダレウライ」

アヤノコウヂ　アリヨシ　綾小路有義　從三位綾小路俊賢の長男なり嘉永二年五月二十日京都に生る文久二年孝明天皇に仕へて侍從となり今上天皇の代に至るも仍ほ宮中に奉仕し明治十七年七月子爵を授けらる十九年一月御歌所參候となり翌て雅樂部長式部職勤務侍從等に歷任せり例年宮中歌御會始めには殆んど每年特撰の大任を命ぜられたり四十年六月十六日病歿す年五十九其病革るや位一級を進め從二位に叙せられたり

アヤノコウヂ　ザス　綾小路座主「ジツゼン」

アヤノコウヂ　ナガマサ　綾小路永昌　京都の鍛工なり元逸江の人、昌阿彌と號す綾小路鍛工の祖なり子定利彌太郎と稱す文永中の人（萬實全書）

アヤノコウヂノミヤ　綾小路宮「シャウエホフシンワウ」

アヤノコウジノミヤ　綾小路宮「ソンシャウホフシンワウ」

アヤノミヤ　綾宮「フクコナイシンワウ」

アヤノヤマグチノアタヘ　オホグチ　漢山口直大口　佛工なり後漢靈帝の後裔といふ孝德天皇白雉元年詔して佛像一千軀を刻ましめたまふ（日本紀）

アヤベ　カウリツ　綾部剛立「アサダゴウリツ」

アヤベ　ケイサイ　綾部綱齋　豐後杵築藩の學士なり名は安正字は伯章一の字は惟木、綱齋は其の號、幼にして穎慧、父道弘に從て書史を受け長ずるに及びて京師に遊び伊藤東涯北村篤所に就て經史を學び又國侯に從て江戸に赴き室鳩巢を見て大に悅ぶ遂に弟子となる專朱子を修め旁ら服部南郭に從て詩文を講習す綱齋人と爲り剛直にして孝信三世に歷任して最も知る龍溪公に受く公年少と雖も學を好み心を庶政に用ふ綱齋を舉げて經史を討論し事務を諮詢す眷遇甚渥し綱齋亦輔弼の道を竭す公卒して郡宰を拜す會々關西飢へて餓莩途に滿つ綱齋救治の法を議して有司の旨に忤ひ遂に職責を受けて門を閉つ既にして職を罷め貧邑を穢はる是に於て寂寞自守り經義を講採して自樂し

む常に曰く人倫の敎は降りて師儒に在り然れども世人師儒を以て方外のものとなし之を視ること釋氏に異ならず是其の道の明ならざる所以なりと遂に家庭指南一卷を著はし專經論に就て其の條目を明かにす識者之を稱すと云ふ寛延三年歿す年七十五綱齋幼き時父道弘親ら易八謙の卦を書して之を佩びしむ綱齋服膺深く自ら韜晦す故に門人子弟と謀り謙卦の九三に取り私かに謚して有終と云ふ（近世叢語、野史）

アヤベ　ダウコウ　綾部道弘　豐後杵築の儒なり其の先は丹波綾部に出つ因て氏と子孫豐後に徙り其の父友氏滅びて後祖可春、父道一皆隱居して仕へず道弘年八歲叔父の家に往く家人其の幼弱を侮り待つに禮を以てせず憤懣夜を冒し里餘の曠野を經て歸る父母其の膽を異とす試に古文數百言を授く一過すれば即誦を爲す道一益々然異す家素より貧し爾冠に及びて隣邦に仕ふ然れども時々鏘鈌して孝養を致す而して餘力あれば即ち書を讀み醫を習ふ既にして艱苦困窮乏之宅田を典するに至る道弘因て歸りて杵築侯に仕へ歲俸を分て田宅を贖ひ逋稅を償ふ兄死して二子尙ほ幼道弘撫字して成立するを待つ近弘人と爲り暗愚にして議論屈する所なし而して內は親戚に敦く外は朋友に信あり故を以て衆其の駿を憚り久して其恩に服す稱して其鄉の伯夷と言ふ平居子弟に敎ふるに四書小學及び古文詞を以て未だ嘗て聲伎博局の事を習はしめず元祿一三年日疾を得て歿す其の病革なるに及びて子安正東府に在り職守の爲に暇を乞ふを得ず會々其友伊東某東府に行くあり語を寄せて曰く予汝と永訣せんとす私情に涕かれて公義を缺く勿れ故に歸省を奏せずと年六十六六（近世叢語、野史）

アヤベ　ヂウレイ　綾部重麗　高鍋藩の儒者にして通稱恒兵衛、學を好み書を善くす寛政九年物頭に擢られ藩黌の敎授となる晩に罪を得て秩祿を削るる所著木藩史略あり（日本敎育史資料）

アヤベ　トホル　綾部融　高鍋藩の儒者にして字は文淵通稱順輔、歲十七昌平黌に學ぶ後尾藤二洲の門に入る文化十年藩黌の敎授となる十四年罪を獲て禁錮せられ是より士類と交らず天保八年三月十二日歿す歲五十二（日本敎育史資料）

アヤベ　フハン　綾部富阪　文武兩道の士なり豐後杵築藩の士、綱齋の長子、名は安胤字は伊承夙に家學を受て國洛の業を修め尤も毛詩に長ぜり終身諳誦して一字を誤らず又博く武事に通ず最槍術に名あり延享二年父の後を嗣ぐ江都に在ること四歲にして還る寶曆中黑邊して郡宰と爲り采邑を賜ふ初め父郡宰を拜して邑を治め邑を沒せらるを此に至りて是を復す家人以て榮とす富阪心を持する公正、贈遺を受けず恩威兼行はれて能く衆心を得屢々疑獄を決して平反する所多く巡視の日首として孝悌を訪ふ又國主の命を受け群士を率ゐるに文武の術を以てす二公子亦延て業を問ふ安永以還藩政多く梗塞す富阪命を奉し以て經營煩劇を辭せず因て疏通するを得其の功を以て祿益々加はる富阪官に居る前後四十年二君に歷事す獻替剖切、上下敬憚す義に郡宰たりし慮り爲に副宰を置かんと欲す富阪固辭して餘力あれば即ち書を讀み醫を習ふ既にして貧困東西に漂泊すること數年會々兄久しく病て資產空乏宅田を典するに至る道弘因て歸りて杵築侯に仕へ歲俸を分て田宅を贖ひ逋稅を償ふ兄死して二子尙ほ幼道弘撫字して成立するを待つ近弘人と爲り暗愚にして議論屈する所なし而して內は親戚に敦く外は朋友に信あり故を以て衆其の駿を憚り久して其恩に服す稱して其鄉の伯夷と言ふ平居子弟に敎ふるに四書小學及び古文詞を以て未だ嘗て聲伎博局の事を習はしめず元祿一三年日疾を得て歿す其の病革なるに及びて子安正東府に在り職守の爲に暇を乞ふを得ず會々其友伊東某東府に行くあり語を寄せて曰く予汝と永訣せんとす私情に涕かれて公義を缺く勿れ故に歸省を奏せずと年六十六（近世叢語、野史）

アヤベ　ヨネヲ　綾部米雄　陸軍三等軍醫なり明治三十七八年日露戰役に於て檢備役より召集を受け第二軍兵站監部附として出征し十八年五月十六日清國盛京省小松新堡に於て病に罹り歸國後黃島檢備病院に於て療養中六月十六日遂に死す

アヤムド　綾人「テイキンシヤアヤンド」

アヤヤヲ　綾雄「スズキケンスケ」

アヤヤヲカ　綾岡「イケガアヤヲカ」

アユガヒ　鮎貝宗重　兵庫盛宗の子にして安房と稱し入道して日峰齋と稱す世々羽州置賜郡長井荒砧貝城に居る宗重に至りて伊達氏に歸從す子宗信父と和せず故上義光の爲めに滅さる政宗宗重の忠志を賞し采地を與へ二男長七郎宗益を嗣とす（伊達世臣傳記）

アラカガ　ニフダウ　荒加賀入道「ミナモトヨシクニ」

アラカハ　イヅノカミ　荒川伊豆守　上杉謙信の武臣なり吉藏と稱す名は景親勇武人に過ぐ川中島の役に小島彌太郎の膝に戰死せんとするを助けて還る猶進んで信玄の旗下に迫る金丸平八郎と鬪ふて死す（本朝武功正傳）

アラカハ　クニザウ　荒川邦藏　諸官を經て明治二十四年福井縣知事に任ぜられ三十年に至る三十一年內務省縣治局長に任ぜられしが幾もなく之を辭し其後帝國黨の組織に盡力する所ありたり三十六年十月十一日病歿す此日特旨を以て位一級を進め正四位に叙せらる

アラカハ　チャウベエ　荒川長兵衛　八條流の馬術家なり屋代重俊の門人元和四年三月歿す（武術流祖錄）

アラカハ　テンサン　荒川天散　紀州藩の文學者なり名は秀、字は敬元、（一に景元に作る）蘭室、後天敬生と號す通稱善吉、山城の人、入歲にして業を伊藤仁齋に受く、人と爲り明敏豁達にして經史に精通す古義塾中千里駒の稱あり十四歲の時仁齋事故あれば輙代りて經義を講說し諸生を訓督す水戸先生と雖とも與に抗する能はず塾中推して都講と爲す十六歲の時紀藩の國老三浦某見て其の才を奇として之を藩に薦む乃ち聽されて紀室となる時寛文九年十月なり天散業を仁齋に受けてより紀藩に招聘せらるゝまで古義塾に寓すること凡て八年師弟の間に於て信愛尤厚し仁齋又其の贊を執ること尤も群弟子に先ずるを以て之を遇すること亦他人に異なり然れども天散終身專ら師說を奉ぜず以爲く孔子の道は大に唐宋の間に備はりて程朱二公に至りて之を集成す其の大意は往聖に繼き來學を導びき老佛の空妙を排し管商の功利を擯くるに在り若一世に道義を以て己が任とし能く此の意を瞭くものあれば是眞の儒者なり何ぞ必しも字々句々其の師說を守りて而る後能く其の學を奉ずとせん師況を學守し其の遺敎を崇奉し事々其の意の若くせんと欲するは朋輩の端なり夫黨を結び徒を構へ偏に一家を護するは小人の私心なり近時の中江藤樹山崎闇齋の聖流派を區別し弟子を競

誘して己に帰さしむ其の末学の繁盛すれば明寛の病を免れざらんと仁齋一家の言を敢て海内を風靡す其の語孟古義一家言や愈首毎に最上一極宇宙第一の文字を置き孟子を崇重する意を表す常時弟子及び朋友異議あるなれば天散且為に孟子推尊して崇重の意を表するは恐くは大禹が師聞して之を孔孟の外に置くに似たり講ふと雖も創去せんと仁齋之に從ふ天散講業の餘暇には吾邦の地誌を研究して城堡営業の所在を詳記し詳かに其の道里の遠近を知る其の言に曰く士若し此に精からざれば戰陣の用攻守の法を為すに足らずと天散の詩多くは世に傳らず紀藩の伊藤海橋南紀風雅集を編する時其の詩数首を載せ天散享保二十年に没す時年八十二、弟善助の子某を養ひて嫡を襲はしむ其の人品行恶しきを以て除籍せらると云ふ(先哲叢談)

アラカハ ヒコダイフ 荒川彦太夫 本間流の槍術家なり本間次郎兵衛の門人(武術流祖録)

アラカハ ヤウテツ 荒川養鐵(一に荒井 作る)狩野家の畫家なり畫法を狩野常信に學ふ(扶桑畫人傳)

アラカハ ヤシチラウ 荒川彌七郎 陸軍歩兵中尉なり栃木縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに後備役より召集を受け後備歩兵第二聯隊附を為り出征し翌年一月廿八日清國盛京省沈旦堡戰闘の際負傷し翌二十九日瓜洞講戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラキ カイウ 荒木加友 江戸の医者也蕉庵と號す旁ら俳諧を松永貞徳に學びて名あり寛文中の人著述「そら言」あり(俳林小傳、俳家略人談)

アラキ クワンクワイ 荒木寛快 畫家なり彫刻右衛門と稱す片桐々隙の門人安政七年正月没す年七十二養子寛一、寛敏共に業を嗣ぐ

アラキ ゴケウ 荒木吳江 江戸の書家なり名は齊之字は公楚吳江の子左二郎と稱す文青嘉と稱す文化八年十二月没す年五十八、丸山長泉寺に葬る(江戸名家墓所一覽、名人忌辰録)

アラキ ゴカウ 荒木吳江 江戸の書家なり東木と號す名は克之字は子盈鳥蔵と稱す寛政五年五月二十日没す丸山長泉寺に葬る年六十五(江戸名家墓所一覽、名人忌辰録)

アラキ シゲヲ 荒城重雄 陸軍歩兵少佐なり東京府出身にして明治廿七八年日露戰役に於て退役中より召集を受け第一師團第三聯隊附として從軍出征し三十八年十月九日清國盛京省二道河子にて病に罹り歸國後自宅療養中三十九年八月廿五日死去す

アラキ ジフザエモン 荒木十左衛門「アラキモトミツ」

アラキ シマノカミ 荒木志摩守 荒木流の馬術の祖なり志摩守と稱す姓は藤原氏攝津の人村重の族なり叡山齋藤好玄に學ぶ(武術流祖録)

アラキ ゼス 荒木志水 畫家なり志津摩の門に學びて遂に一家を成す(鑒定便覽)

アラキ ソハク 荒木素白 畫の名家名は光辰、通稱三次後ち内膳と改む姓は源氏、母は桂氏、素白甫めて九歳福山城主水野勝成に仕ふ十九歳の時同僚と爭論す去りて伊勢に赴き津の城主藤堂高虎に仕ふ高虎勝成の為めに酒饌を設く素白給事周旋す勝成志りて之を怒りて國に入るを禁ず素白寛歴四年柄浦に到りて告首罪を乞ふ勝成宥して京師に歸らしむ素白削髪して禪寧隱居絲に倣ひ名を虚空素白と改む勝成復召して月俸を與ふ勝成勝俊次で卒するに及びて辭し去る後高虎の嗣子之を招けども辭して應ぜず素白常に書を好み藤木敦直を師として其の名頗高し世に上代風の中興と稱す書體三跡の室に入ると云ふ後水尾帝素白に詔して關白に及びて權大納言藤原廣實使み遣して慰問す使者接壇に及び色紙に書ぜしむ大に旨に愜ふ晩年力衰へず病も絶えず貞享二年春没す年八十六、七男一女あり(野史、素人系傳名家全書)

アラキダ ウヂタケ 荒木田氏鴎 伊勢出田の嗣官なり宇は春生、書雲と號す、通稱丹下、正五位下に叙す伊藤仁齋に學びて詩名あり(名家全書)

アラキダ オキマサ 荒木田興正 伊勢山田の嗣官なり宇は蕙齋、鼎湖又南陵と號す通稱數馬從四位下に叙せらる江戸北海の門に入て漢學を能くす後ち伯父正當の家を嗣で釜谷氏を冒す没年詳かならず(鑒定便覽)

アラキダ ヒサモリ 荒木田久守 伊勢大神宮の神主なり從四位上に叙せられ五十機園と號す久老の子、父の風を嗣て國學詠歌倶によくせり安政五年卒す年七十一(名家全集)

アラキダ ヒサタケ 荒木田守武 和歌連俳名あり伊勢内宮の神官なり正四位に叙し國田長官と稱す足利氏の末連歌世に行はる而して俳諧體の語を

アラキダ ダイガク 荒木田大學 伊勢の人和學者にして内宮の神職なり

アラキダ ツネタダ 荒木田經雅 伊勢大神宮の神主なり從四位上に叙せらる篤學強識にして和學に精し天明中の人(名家全書)

アラキダ ヒサオイ 荒木田久老 通稱宇治主税、名は正董五十機園と號す伊勢外宮の嗣官度會正身の子なり始め彌三郎と稱し外祖父秀世の家を嗣ぎ權禰宜に補す後離縁して實家に還り内書と稱す後齋宮と稱し荒木田久世の嗣となり内宮權禰宜に補す正四位下に叙せらる幼にして皇國の古典を研究し後賀茂真淵の門に入り益々精勤して遂に大家となる最も力を萬葉集に用ふ真淵の萬葉考に次ぐ「槻の落葉」を著はせり人林以て豪放不羈常に青樓に登りて遊宴日を経、酒池肉林を為す自ら娛しむ而して酔中間々忽然掌を拍て曰く古人未發の考なりと乃ち人に誇り曰く世の古典古語を解するものの如き見るに此は若干の書籍を置き沈接苦思以て之を解せんとす是豈能く其の眞面目を得んや吾が學は之に異なり遊宴妓婦と戯れ盃盤狼藉の間に未曾有の奇説を發す是眞の活考たり世人の學問は多く死物のみ常に四方を漫遊し徒を案べ古典を敎ふ徒ひ學ぶもの頗衆し凡其の説く所古人の跡を踏まず依然一家の學を唱ふ、時に本居宣長の説に服せざる者多く贄を箱に執る實に眞淵門の一巨擘なり詠歌は其の專とする所に非ずと雖ども又一體の妙あり文化元年九月没す年五十九、著す所萬葉集槻の落葉、記紀之歌解、信濃漫錄、槻園日本后記歌解、竹取物語歌解、雜波蓋地考、酒吉名區志之考、古冒清淵排論、校正首書肥前風土記、今豐後風土記、今出雲風土記、祝詞考校訂、祝詞考道考、播磨下向日記等あり其の餘校正の書に迂齋廠那微、歌意考、文意考、古器考等あり(三十六家集略傳)

アラキダ ヒサモリ 荒木田久守 伊勢大神宮の神主なり從四位上に叙せられ五十機園と號す久老の子、父の風を嗣て國學詠歌倶によくせり安政五年卒す年七十一(名家全集)

アラキダ ヒサタケ 荒木田守武 和歌連俳名あり伊勢内宮の神官なり正四位に叙し國田長官と稱す足利氏の末連歌世に行はる而して俳諧體の語を

以て連歌を行ふこと守武に始る則ち俳諧式を定む故に後世當時の俳人を云ふもの守武、宗祇、宗鑑等を以て唱首と為すと云ふ天文十八年八月八日没す年七十七(俳家奇人譚、俳林小傳)

アラキダ レイ 荒木田麗 女流者なり詩を作り又連歌に長ず伊勢大神宮の嗣官釜谷權之進の女にして伯父荒木田武遇に養はる学を好み女子の業を修めず紫山又清潔と號す月の行方を著して淀倉安德兩帝の記を述べ池の藻屑を著して慶長に至るの歴史を述ぶ以て三鏡の尾を繪ぐなり文化三年正月年七十五にして没す著書頗る多し(名女傳)

アラキ チクヨウ 荒木竹翁 尺八の名手なり二代目古童と稱す舊近江水口藩士なり少時尺八を好み後江戸に出で虚無僧となりて市中を廻歴す偶々斯道の名人古童に邂逅し其弟子となり熱心技を磨きて其蘊奥を極め終に古童の號を蒙ぐに至れり爾來益々斯道の改良に苦心し尺八の製造方法古曲の吹法を改良し又當時無雙の名手たる鳥瀬勝雄一の指導の下に絃を笛に移すの事業を大成し其他古曲を調査して門弟に傳へ之を保存したる等我音樂史上特記す可し門下生にして斯道の名手亦多く又貴紳の之に技を問ふ者極めて多しといふ明治四十一年一月十七日病を以て逝く享年八十八浅草松葉町梅禪寺に葬る

アラキ ヂブセウイフ 荒木治部少輔 京流の劍客なり初佐々木六角氏に仕へ後北條氏康に仕ふ(本朝武藝小傳)

アラキ マサタケ 荒木正武 陸軍歩兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團第三兵第十一聯隊附として出征し廿八年三月一日清國盛京省王家窩棚に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラキ マタヱモン 荒木又右衛門吉村 伊賀の荒木村の農にして膂力衆に過ぐ擊劍を好み柳生十兵衛宗矩に就き諸流の劍法を極む郡山城主本多甲斐守に仕へ秩祿五百石を食み一藩劍術の師範たり其妻は松平忠雄の臣渡邊數馬の姉なり寛永十年十月數馬の弟源太夫と藤河合又五郎に殺さる數馬仕を辭して其の跡を逐ふ數年にして遺はす又右衛門義

として徐親に忍ひず同しく仕を辭して相携へて諸國を周流す場を江戸に開き劍を教授す同十一年十一月又五郎其黨二十餘人を從へ和の奈良を發して江戸に赴くに會ふ又右衛門一行四人其行途なる伊賀上野に待つ七日味爽又五郎等上野城下を過ぐ數馬突出し源太夫の復讐と呼び又五郎に迫る又右衛門亦伊賀守金道の鍛へる刀を抽て又五郎の黨櫻井甚左衛門に當り一刀に右手を斬ち二刀に胴を兩斷して馬より落し續て敵中に入り又一人を仆し數人を傷けて刀折る敵半弓を射る繁し右衛門又右衛門の若黨武右衛門善之拒き敵四方に散亂し望中又目に遮さる又五郎戰方に酣し又右衛門趨至り呼て曰く數馬力めよや數馬之を聞き精神忽ち十倍し一跳して又五郎に躍り數馬力めよや數馬之を聞き精神忽して又五郎を殺す是日の死傷又五郎甚左衛門重傷にして死す數馬傷を被むる十三箇所孫右衛門十箇所又右衛門一人も受けず村重泣き且つ謝し終に從はず手を執り涙を揮て別る數馬の舊主忠雄既に卒し嗣侯又遠の御從を護送す是時數馬の舊主忠雄既に卒し嗣侯又遠の御從を發して國に迎へ二人に禄各千石を給し使者を郡山藩に遣り僞て又右衛門重傷を病み死せりと稱し終身境を出ず又右衛門重傷を病み死せりと稱し終身境を出ず又五郎の黨に狙撃せられんを恐れて又右衛門寛永十四年(或曰廿年)八月廿四日没す年四十一(豪雄言行錄、事實文粉)

アラキ ミノイラツメ 棟右娘 仁賢帝の宮人なり和泉日爪の女、選ばれて後宮に入り春日山田皇后の生む(大日本史)

アラキ ムニンサイ 荒木無人齋 無人齋流の捕術の祖なり(本朝武藝小傳)

アラキ ムラシゲ 荒木村重 攝津の人なり姓藤原氏、波多野義通の裔なり、父を義村と云ふ信濃守と稱す村重初の名は强介又信濃守と稱す天文弘治の際池田勝政に屬す永祿一年八月茨木城を拔し之に據り尼崎を保つ天正元年二月大將軍義昭に擁し尼崎を出で攝津に赴き織田信長四上す村重之に屬し功あり請て攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到らず事平ぐに及て高野に遁る是に於て其十多く村重に據り攝津守に任ず信長の至るや勝政觀望して到

月信長の命を以て一向の寇と戰ひ大に之を敗る六年正月信長村重等十人を安土に饗し自ら之を送迎す勸め村重使者となり安土に往く使事終り信長肉(一に饅頭に作る)を餽に貫き村重に之を食はしむ村重伏して偽刀を脱し餽饌して遽み顔を仰ぎ口を開て徐に肉を抽き食ひ盡し紬を以て刀を拭ひ以て左右に呈す信長其の大膽なを賞し刀を賜ふ一月秀吉に從ひ毛利氏を伐つ播磨に次ひ村重の部下利を貪り遂城石山に驛する者多り安土の邏騎以て糧を敵に送るとなし之を安土に報す明智光秀村重の新參にして名其上に出るを嫉み乘じて之を讒す信長未だ信ぜず村重播磨より歸るに及びて信長人を遣りて之を誡す村重大に驚き往て謝せんとす部下皆往くなからんとを勸む光秀亦書を送り信長の怒り甚しと告ぐ村重乃ち意を決して叛き毛利氏及び石山と通ず信長親ら將として之を討つ外明中川清秀茨木を以て降る月諸將來り偕る秀吉之を聞き三木より往て村重を諭す村重泣き且つ謝し終に從はず手を執り涙を揮て別る秀吉又人をして之を說かしむ村重之を提へ以て決意を示す十二月信長兵を合し伊丹を圍む村重擊ちて之を卻く近江の兵一人槍を把て扉に乘る城兵將に之を殺さんとす其人捨を投して坐し母あり死する能はざるを告げ宥されんを乞ふ衆憐み之を許す村中聞て其孝を賞し金を與へ人をして之を門に送らしむ信長力取す可らざるを覺り令して長圍を作り其糧道を絶つ天正七年食竭き村重族久左衛門を留めて城を守らしめ自由て伽中に赴き救を毛利氏に乞ふ路塞り果さず奔て尼崎に入る遂に花隈に往く十一月久左衛門使を瀧川一益に遣し妻子を敕さば往て村重を說んと請ふ之を許す久左城を出つ城乃ち陷る久左花隈に赴く村重門を閉て入れず村重の妻伊丹に幽せらる村重と和歌を相贈り互に悲しむ十二月信長伊丹城を屠り村重の一族妻子を京師に斬る天正八年十月花隈食竭く村重潛に兵庫津に逃れ安藝に奔り髮を剃て道薫と號す茶事を以て日を送る後秀吉之を界泊に置き善く之を遇す或は曰く天正七年自殺して死す堺南宗寺に碑あり秋英宗薫居士と題す(野史、素人系傳全集)

アラキ ムラヒデ 荒木村英 建術家なり彦四郎と稱す江戸の人初め高原吉種に從ひ後剛亭和を

師とす（大日本數學史）

アラキ　モトミツ　荒木元滿　荒木流の馬術家なり十左衛門と稱す元尊の子、父元滿に學びて能く箭裝を繼ぎ將軍德川秀忠の師範となり大に世に鳴る其子十左衛門元政亦能く其の傳を繼ぐ（武術流祖錄）

アラキ　ヰガク　荒木維岳　江戸の醫家なり字は嵩夫吳井と號し明和四年七月二十六日歿す押上眞盛寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

アラゴラウ　モヘエ　荒五郎茂兵衛　江戸木挽町に生る性活達豪宕にして常に牛後と爲るを恥ぢ一日或人に謂ひて曰く我れ今ま如何なる所爲をなさば世間俠客の巨魁に愧ぢざる名譽を得るや其の人答へて曰く當時堺町に奴治兵衛と云へる者あり頗る強膽にして又た氣節に乏しからず若し之と一擊を試みば即ち名譽自ら來らんと茂兵衛曰く事其だ容易なりと乃出て治兵衛が寢ふ廁を之に演劇場外に會ふ茂兵衛事を以て之が挑み遂に刀を拔て背及び股に傷つく既にして人來りて彼此を和解し事終に止む後一年を經て復た治兵衛に木挽町に會ふ治兵衛呼で曰く久いかな荒五郎我今ま汝に讎を報ぜんとすと乃進みて之を斫る茂兵衛屈せず搏して之を倒し一轉展相擲つ會〻三男三郎左衛門、ちつこ七郎兵衛等驅せ來りて之が和解し遂に兄弟の義を結ぶ此より其の名俱に著はる茂兵衛後ち深川に終る（本朝俠客傳）

アラシ　キチサブラウ　嵐吉三郎　初代は大阪の俳優なり嵐勘右衛門の弟子なり初竹田吉三郎後坂田郎と改め寶暦八年五月吉三郎名に改む岡島屋といふ俳名里環元竹田芝居の出にて若年の頃は大阪濱芝居の大立者なり寶暦八年より大阪桐の谷座へ上り五年間京都にて勤む明和二年大阪三升座へ下り薄雪姿平の役至極の大評判にて同七年は富士松座へ出て淀屋橋の新狂言に早川又兵衛役古今の大出來夫より七年ぶりにて京へ上り益〻沙汰よく安永四年大阪角の座へ下り益〻誉り岩川次郎吉大當りにて早川と岩川の此二つは末代家の狂言に殘す同六年中の座にて座頭を勤む寺岡勘平の二役又は關藏七茂兵衛一寸德兵衛にて當る同年冬京行暇乞として女護島俊寛の役大出來にて同七年大阪中の座へ下り俳優

アラシ　サンエモン　嵐小六（初世）「アラシサンエモン五代」（二世）「アラシヒナスケ初代」

アラシ　サンゴラウ　嵐二五郎（初代）大阪の俳優なり號は雷子、京都岡崎村の人本姓は島田幼名喜之助、初嵐勘四郎の門人後故有て嵐三右衛門の弟子となる元文四未年七月十二日歿す歳五十三（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐二五郎（二世）來芝と號す初代三五郎の男富三郎と云ふ俳名初め雷子後來芝と云ふ家號は京屋寛政九年剃髮して蜜嚴と云ふ後東岡崎に閑居す享和二戊年五月六日歿す歳七十二（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐三五郎（三世）雷芝と號す二代目の男初名は松之助寛政九年三五郎と改め文化十一年冬市村座へ下る歿年未詳（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐三五郎（四世）雷子と號す三代目の子幼名三四郎後七代目三升の門に入り市川三十と改め後三五郎と云ふ天保八酉年六月二十九日歿す歳三十四大阪下寺町源聖寺に葬る（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（初代）大阪の俳優なり初の名は四崎新平攝州尼ケ崎に住す俳優となるに及んで名を三右衛門と改む古今の名人なり號して嵐々と稱す終に已れが姓とす元祿三年十月十八日大阪に歿す年五十六顏見世と云ふこと此人に始る（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（二代）大阪の俳優なり初代三右衛門の男初の名は門三郎、梨園中名優の名あり元祿十四年十一月歿す年四十一（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（三代目）大阪の俳優也杉島と號す二代三右衛門の男初の名は新平寶暦四年十月歿す

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（四代目）大阪の俳優也三代三右衛門の養子初め松之丞と曰ふ俳名は杉鳳明和二年七月年廿六にして歿す（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（五代目）大阪の俳優也三代目の弟にして紫朝後に杉島又文射と號す四代三右衛門の弟子となる始め傀儡を業とし小六と曰ふ延享四年江戸市村座に下る曖蘿を作て諸方に頒布し以て廣告す始めて女形の俳優曖蘿を配布する事起る後世終に立役の俳優も亦之に倣ふに至る三右衛門初め女形を專とし後立役を兼ね加役の事此人に始まる小六染と稱する模樣大に流行す三右衛門は立役となりて後の名なり天明五年八月廿六日歿す（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（六代目）大阪の俳優也三代目の弟子となる始め傀儡を業とし小六と曰ふ延享四年江戸市村座に下る曖蘿を作て諸方に頒布し以て廣告す始めて女形の俳優曖蘿を配布する事起る後世終に立役の俳優も亦之に倣ふに至る三右衛門初め女形を專とし後立役を兼ね加役の事此人に始まる小六染と稱する模樣大に流行す三右衛門は立役となりて後の名なり天明五年八月廿六日歿す（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（七代目）大阪の俳優なり本と五代三右衛門の門弟也師の名跡を相續す初名は雛三郎又眠子と曰ふ天保嘉永の頃大阪に名あり

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（初代）大阪の俳優なり五代嵐三右衛門の子なり初め名は岩二郎寶暦三年雛助と云ひ女形なり安永四年元服して三右衛門六世となり立役となる同九年江戸森田座に下り後嵐小七と云ひ俳名眠獅又小六（二世）となる家號吉田屋と云ふ後剃髮して是心と法號す天明六年七月廿六日歿す年七十七（名人忌辰錄）

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（二代目）大阪の俳優なり初代雛助の養子なり初の名は秀之助又三世中村十藏と曰ひ二世雛助と改む寛政中市村座に下る同十三年二月歿す年廿八

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（三代目）大阪の俳優なり二代雛助の弟幼名秀之助又直次郎と曰ふ三代の名を嗣ぎ早世す

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（四代目）大阪の俳優なり雛助の男、幼名は岩次郎又秀之助と曰ふ江戸へ下り四世雛助と改め俳名眠升と稱す

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（五代目）俳優なり江戸の產にして初名は市川醜三郎と曰ふ文化中五世雛助と改む姓嵐を改めて叶となす

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（六代目）俳優なり大阪の產初め名は市川紅助五世の養子となり叶雛助又嵐叶升と曰ふ後ち嵐雛助に復す萬延中歿す

アラシ　ミンシ　嵐みんし　大阪の俳優なり本名四脇勝吉安政元年土佐國土佐郡潮江村上町の商家に生る初舞臺は十三歳にして藝名璃三郎と曰ふ夙に田舍役者の麒麟兒と稱せられしが後ち名人四代目嵐璃寛の知る所となり明治五年大阪に出て璃鶴と改め十五年「三人新兵衛」の小女郎を演じて好評を博し遂に璃寛にみんしと改め女形となりしが後ち更に女形を專とし頗る人氣を集めたりしが鉛毒の爲め動作意の如くならず三十六年道頓堀中座に於て圓覺寺の征尾を演ぜしを名殘として病に臥し三十八年一月二十四日死す年五十二

アラシ　リカク　嵐璃珏　家名を豐島屋と云ふ俳名璃珏實は大阪道頓堀芝居茶屋豐重の倅にて幼名市太郎と云大璃寛目德の身弟子にて芳三郎の名をつぎ子供芝居へ出る文政六未年大阪若太夫芝居にて竹田からくりを勤し時中將姫の雪攻にて赤頭の奴に扮せし子供に似合ずよい仕出しも評判高く此時より目德璃寛の預り弟子と成り京道場芝居に修行して天保二卯年璃珏と改名して同四巳年大阪中の座劇見世に初て出て平の宗盛の役を勤め同七申年同座にて師匠病氣に付代役を勤し同九戌年大阪堀江の芝濱芝居を勤め弘化二年春大阪角の座へ出翌未年同月同座にて太功記の鈴木孫市武智重次郎の二役できにて嘉永元申年には筑後芝居にて皿屋敷にておきく役大できなり同五子年角の座にて佐倉宗五郎の役を仕初め古今の大當にて引續て京東芝居にて二度目の大當り同年秋大阪筑後芝居にてあやつりの三番叟釣り狐白藏主の所作事大出來次に角の座にて安倍仲麿の狂言を名殘にして江戸中村座へ下る安政元寅年春大阪筑後芝居へ上る關寺小町百まなこの所作事を出し同年京南芝居親見世に釣り狐を勤同二年春筑後芝居にて鉢の木白たへの役次に八重霧のトもの役大出來にて又京南芝居にて出し大當りなり翌辰年筑後芝居に於て吃又平役を當同四巳年角の座にて宇部谷峠座頭殺怪談を出し其の外小ぜた小平治怪談八百屋お七吉野山瘞本狐法海坊闇奢待の市抔當て助藝なり元治元年七月發狂して死す年五十二

アラシ　コロク　嵐小六（初世）「アラシサンエモン五代」（二世）「アラシヒナスケ初代」

アラシ　サンゴラウ　嵐二五郎（初代）大阪の俳優なり號は雷子、京都岡崎村の人本姓は島田幼名喜之助、初嵐勘四郎の門人後故有て嵐三右衛門の弟子となる元文四未年七月十二日歿す歳五十三（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐二五郎（二世）來芝と號す初代三五郎の男富三郎と云ふ俳名初め雷子後來芝と云ふ家號は京屋寛政九年剃髮して蜜嚴と云ふ後東岡崎に閑居す享和二戊年五月六日歿す歳七十二（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐三五郎（三世）雷芝と號す二代目の男初名は松之助寛政九年三五郎と改め文化十一年冬市村座へ下る歿年未詳（名人忌辰錄）

アラシ　サンゴラウ　嵐三五郎（四世）雷子と號す三代目の子幼名三四郎後七代目三升の門に入り市川三十と改め後三五郎と云ふ天保八酉年六月二十九日歿す歳三十四大阪下寺町源聖寺に葬る（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（初代）大阪の俳優なり初の名は四崎新平攝州尼ケ崎に住す俳優となるに及んで名を三右衛門と改む古今の名人なり號して嵐々と稱す終に已れが姓とす元祿三年十月十八日大阪に歿す年五十六顏見世と云ふこと此人に始る（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（二代）大阪の俳優なり初代三右衛門の男初の名は門三郎、梨園中名優の名あり元祿十四年十一月歿す年四十一（名人忌辰錄）

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（三代目）大阪の俳優也杉島と號す二代三右衛門の男初の名は新平寶暦四年十月歿す

アラシ　サンエモン　嵐三右衛門（四代目）大阪の俳優也三代三右衛門の養子初め松之丞と曰ふ俳名は杉鳳明和二年七月年廿六にして歿す（名人忌辰錄）

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（初代）大阪の俳優なり五代嵐三右衛門の子なり初め名は岩二郎寶暦三年雛助と云ひ女形なり安永四年元服して三右衛門六世となり立役となる同九年江戸森田座に下り後嵐小七と云ひ俳名眠獅又小六（二世）となる家號吉田屋と云ふ後剃髮して是心と法號す天明六年七月廿六日歿す年七十七（名人忌辰錄）

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（二代目）大阪の俳優なり初代雛助の養子なり初の名は秀之助又三世中村十藏と曰ひ二世雛助と改む寛政中市村座に下る同十三年二月歿す年廿八

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（三代目）大阪の俳優なり二代雛助の弟幼名秀之助又直次郎と曰ふ三代の名を嗣ぎ早世す

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（四代目）大阪の俳優なり雛助の男、幼名は岩次郎又秀之助と曰ふ江戸へ下り四世雛助と改め俳名眠升と稱す

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（五代目）俳優なり江戸の產にして初名は市川醜三郎と曰ふ文化中五世雛助と改む姓嵐を改めて叶となす

アラシ　ヒナスケ　嵐雛助（六代目）俳優なり大阪の產初め名は市川紅助五世の養子となり叶雛助

アラシ リクワン 嵐璃寛 俗に目鐵と呼ぶ家名を伊丹屋と云ひ俳名を初に璃珏と云ふ實は大阪新町出生にて享和元西年大阪竹田からくり芝居に初て出る幼名鐵三郎といふて三世嵐吉の親猪三郎の門人なり文化五辰年には大阪座摩いなりの子供芝居へ出て翌年より京宮芝居に修行し同亥年大阪竹田芝居へ下りて八陣の正清伊賀越の十兵衛にて名を上げ翌年も同座にて崇禪寺館討の狂言にて遠城治左衛門見當丸の二役を仕初め古今の大當り大入なり是より益ゝ名を上げ暫く鐵の字仔細有りて壽三郎と云へり文政三辰年若太夫芝居にて永井源三郎と切千兩幟の岩川の役を名殘にして江戸中村座に下る江戸にても目が大きくて小柄故梅玉によく似たり目鐵〳〵といひて評判よし文政五午年大阪中の座へ上り播三郎と改名し源三位頼政役を勤む翌未年には同座にて朝顔の駒澤を勤む同年いせ物語の有道の役大出來にて翌申年大阪堀江芝居にてひらかなの平次松右衛門の二役殊の外宜敷九月には角の座にて伊賀越の山田幸兵衛の親仁形をてがし同十亥年中の座にて今木傳七阿波の十郎兵衛大出來にて當年先師七回忌追善狂言に敎經熊坂切に千兩幟を同座にて當る翌十一子年角の座にて大塔宮の齋藤切にかされの女形を勤む此年同座にて璃寛と改名し加々見山の大領と又助の二役早替り大出來翌丑年の春は中の座にて薄雪の妻平國俊さいざき五平治の四役にて角の大阪と張合同年五月京東芝居にて梅玉と初ての一座にて白石雛明神の森の出合古今の大出來同年秋大阪角の座にて二度目に出し大評判次に連歌の評判にて木下藤吉の役「南無三御供がおくれた」の幕切りは古今の大てきにて天保元寅年春も同座にて雪月花狂言眞柴久次岩木藤馬高木次郎太夫小ぶな源五郎のしんぱう狂言にて故慶子と兩人の取合至極の出來にて是切にて此年伊勢中の地藏芝居へ下り同年の秋大阪中の座へ出て彦山の久吉友平、切に入郎兵衛阿漕の平次の役何れも梅玉と出合にて大當りなり九月には角の座にて蘆屋の與勘平切に油屋お染を出し役まはり目先替り諸人目を驚す同二卯年春同座にて尾形力丸の反逆の役切に法海坊を出し評判よく翌辰年春大阪筑後芝居にて宮本無三四の役近年稀なる大入なり同年中の座へ出て人形屋幸右衛門早世伊丹りの二役至極の沙汰なり翌巳の春中の座にて小栗判官鹽師浜七の二役大出來にて古今の大入次に川中島勘助琢虎の二役評判よく五月には角にて梅玉一座にて和藤内、切に厂金文七の大出來此冬中の座にて大經師の蔓長衛と入郎爲朝を出し翌午年も同座にて煙草切三吉切に出、耶但馬の二役を勤む同六年も同座にて景任下の東吉切に白井權八鎗持定助次に忠臣講釋鹽谷判官小當りなり同十申年は中の座にて八犬傳に犬塚信乃金碗大助の二役を仕初大出來なり同年より紋切に油商人を出し又京へ上り南芝居にて八陣の正清切に油商人を當りなし翌酉年は大阪角の座にて笹原半人船頭小平次の二役を勤め同五月には筑後芝居へ出て尾上多見藏一座にて金比羅御利生に民谷源八郎と切に出村新兵衛の二役の處狂言中に病氣起り引籠りしが遂に養生叶はずして是が舞臺の名殘となり天保八酉年六月十三日終る行年五十歲辭世「芳しき匂ひは四方に立花のあらしに此世さるのか〳〵役」（俳優世々の接木）

アラシ リクワン 嵐璃寛（二代目）家名を葉村屋と云ひ俳名を巖卿と云ふ元京二條新地出生にて旅役者生島岩五郎と云者の子なり尾上和三郎と云て多見藏の門人なり文政十年春より京宮地芝居にて若女形にて天保四年春大阪角の座へ伊丹屋璃寛引立て初て出て廓苧環の狂言にてちんぱの娘おれんの役時嵐德三郎と改名す是が出世狂言と成て翌年七女房槇春日のしぶ抔夫〻に勤む第一口跡よく容貌美しく益ゝ受よく夫より濱芝居へ出て女形を勤む同年秋筑後芝居にて女形より立役を初て勤む小野道風岩川次郎吉大出來なり同十三寅年角の座にて賴政を出し其の翌卯年同座にて熊坂範經切に濡髮を當る弘化元辰年中の座にて璃寛と改名し翌巳年同座にてお初の役大當り出來にて同年九月同座にて葛の葉大當なり始終女形の方が沙汰よく嘉永四亥年角の座にて娘景清の景清を出し大に賞讃を蒙る同年初めて江戸へ下り彼地にても矢張時代の女形の方が評判よく中にも妹背山のおみわ三庄太夫のとり類女猿廻し遠山甚三中野藤兵衛抔は別して評判高く安政二卯年冬大阪角の座へ上り翌春白縫物語にて大友若葉姫乳母秋篠玉楓の大出來なるに番附の居所が人氣にさわり跡へ安達の独萩を出し是も大出來成りしも左のみ喝采なく同年京南芝居親見せに独萩を出し大に好評を博したり夫より益人氣立直り翌辰年大阪角の座にて彦山のお關次に京南芝居にて和田の板額秋は角の座にて大塔宮の花園何れも大出來にて女形さへして居れば當時外に肩を並ぶ者なしよつて女方の大立者たり文久三年四月年五十二にして歿す

アラシ リクワン 嵐璃寛（三代目）初め和三郎と稱す萬延元年二月道頓堀筑後の芝居にて德三郎と改め市川瀧十郎が口上を述べて市中の評判もよく人氣俄に添ひたるが其頃北船場に平野屋とゝへる豪家あり其の別家の一人娘おつれは初めて和三郎の德三郎を見て頻りに戀ひ焦れ居たりしに其の年德三郎は堀江市の側の芝居に出勤して加賀見山におけ初の役を勤むるよしを聞きおつれは飛立つばかりに喜びて親々類の意見も耳に入れず三十日の興行中十八回も見物に赴きされども音信を賴まん術を知られば只だ獨り心の狂ふばかり家には許嫁の良人あれども之れには更に目もかけず家出なせしと幾たびとなく果は狹き屋女の思ひに迫りて德三郎かお初に扮したる似顔の錦繪を肌に抱きしめ焦れ焦れて死したりしかは子ゆゑに迷ふは親の慣ひ切ては死後の思出にもと德三郎を招きて云々と仔細を語り死水を取りて貰ひたしとの事に流石德三郎も哀み傭し請へるがまゝに爲し與へたるが誰が爲したるか蝶狂手向橋と題する唱歌を哀れけに作りて節附をなし色町の藝妓に歌はせしかば一時其の唱歌流行となりけり蝶は平野屋が紋處にして橋は葉村屋が定紋なれば平野屋にても手をわかちて此の唱歌を金もてとゞめたれば人も遂には歌はずなりぬ明治廿七年五月廿一日五十八歲にて歿す

アラシロ ムラジ 暴代連 天皇屋命十一世孫雷大臣命男第子の後六世孫意富乃古の連雄略の御世に東夷に不臣の民ありし頗る膂力ありて朝軍を押し防ぐ是に於て意富乃古の連甲冑五襲を造り之を着て敵の庭に進み入り官軍を勞することなく一朝に滅ぼすことを得たり天皇其の功績を悅び更に名字を加へて暴代連と

號すと姓氏錄に見ゆ又暴代連は武内宿禰の事なりと云說あれども信じがたし（藝工譜略）

アラシ キサブラウ 嵐猪三郎（元祖）大阪の俳優なり環子と號す初代吉三郎の三男にして中村十藏の門人たり中村太三郎後嵐冠十郎と云ひ俳名冠子と云ふ後猪三郎と改む文政八酉年五月十三日歿す歲六十法藏院に葬る（名人忌辰錄）

アラシ キサブラウ 嵐猪三郎（二世）大阪の俳優なり初の名は阪東萬吉後ち嵐冠九郎又冠十郎と曰ふ後猪三郎と改む弘化二年七月七十三歲を以て江戸に歿す

アラダワケノミコト 荒田分命 豐城入彦命四世の孫なり應神帝己巳の歲鹿我別と興に將軍と爲て新羅を擊つ乃ち百濟の久氏等と兵を勸して卓淳に至り將に新羅を襲はんとす或人曰く彼衆我寡勝算期し難しと即ち沙白蓋盧を遣して軍を益さんとゝ請ふ是にて木羅斤資、沙々奴跪等精兵を率て來會し合して新羅を擊て之を破り遂に比自㶱、南加羅、喙、安羅、多羅、卓淳、加羅七國を定む兵を引て西古溪津に至り南蠻沈彌多禮を屠り其の地を以て百濟に賜ふ百濟王肯古王の子貴須と兵を率て來る比利、辟中、布彌支、半古の四邑風を望んで降る荒田別肯古に意流村に會す肯古大に寡び厚く禮して送遲す明年二月歸朝す帝の十五年百濟に往き博識の士を求めしむ王仁、辰孫王を得て還る（大日本史）

アラタキノ アタヒ ヒラブ 荒田井直比羅夫 孝德天皇始めて土木寮を置かれし時將作大匠となり工人を督せし人なり（工藝志料）

アラナミ イカリノスケ 荒波碇之助 尼子十勇士の一人なり初の名は德藏兵庫の舟士なり山中鹿之助等播磨の上月城を攻めんとして兵庫を解纜するとき錨拔けず德藏怪力を出して之を揚ぐ鹿之助之を感じ尼子氏に薦め名を碇之助と改む

アラナミ マサタカ 荒波正隆 陸軍歩兵中尉なり神奈川縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備少尉を以て近衛歩兵第一聯隊附として出征し八月二十六日清國盛京省大四溝戰鬪の際負傷し大四溝近衛師團野戰病院に於て療養中同三十日死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラノ ノリアキ 荒野則明 毛利氏の家人なり曾て古川氏邸に三人の勇士匿るゝあり衆之を捕ふる能はず即明戸を破り直に進みて之を掩捕すと云ふ

アラヘイ ヘツギニウウ 荒兵戸次仁王 九州に隱なき大力者なり播州白旗城賞の時赤松が士荒草正重と組み互におとらぬ強力故鑾方勝負なしに別ると云ふ（早引人物故事）

アラマキ クワウザウ 荒牧光造 陸軍歩兵大尉なり兵庫縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第十二聯隊附として出征旅順攻圍軍に加はり十月廿一日東鶴冠山戰鬪の際負傷し龍頭戰地定立病院に於て療養中十一月二日遂に死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

アラマキ ヤウザブラウ 荒牧羊三郎 陸軍歩兵中尉なり詳を眞刀通稱初め駒吉後に羊三郎と改む文政爲延の間側足輕穿鑿下役足輕勤王の志士なり安政爲延の間側足輕穿鑿下役足輕目附等を歷任久二年春江戸に祇役を命ぜられ將に首途せんとするに遂び俄に亡命して長州に走り白石一郎の家に寄寓す此時島津久光薩兵を率ゐて上京するの途次赤間關に泊す羊三郎之を聞き其行に加はり伏見に至りしか會ゝ寺田屋の事あり薩藩士と共に大阪に退去を命ぜらる此時久留米藩より薩藩に旨を通じて羊三郎を捕へ七月藩地に押送し自宅に幽囚せらる翌年二月赦され四月藩主禁闕守衛の爲め上京するに際し羊三郎も其列に加へられ發足せんとするに方り再び嫌疑の廉あり上京を差留められ幾もなく疑霽れ上京の命下りて首途す同年八月中山忠光大和に兵を擧ぐるに當り羊三郎之に應じ同志と共に戰ひしが事敗れて生擒せられ元治元年二月十八日京師六角の獄舍に於て斬らる時に年二十四明治二年正月藩主羊三郎の忠死を憫み其族を召して後を繼かしむ三十五年十一月特旨を以て從五位を贈らる（甲子殉難士傳）

アラマキ ヒデザウ 荒卷秀三 秋田縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや二等運轉士として日本赤十字社病院船博愛丸に乘組み從軍中三十七年十二月三十日船内にて病に罹り三十八年一月十五日廣島陸傭病院に於て病死す

アラモト イナシキ 荒本稻布 和歌を善くするを以て和銅寶龜の間に名あり詠歌は載せて萬葉集に在り歌て見るべし（萬葉集作者履歷）

アラモト デンジラウ 荒本傳次郎 陸軍歩兵中尉なり島根縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第五師團歩兵第廿一聯隊附として出征し卅八年三月一日清國盛京省李家窩棚附近に於いて戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラヤ タイザウ 新谷泰造 陸軍歩兵少尉なり長野縣出身にして明治四十年韓國暴徒鎭壓の爲め第十三師團歩兵第五十聯隊附として從軍中十一月廿三日咸鏡道北青郡新店に於て戰死す

アラヤ トクヘイ 新谷德平 陸軍歩兵中尉なり福島縣の出身にして明治二十八年近衛師團歩兵第四聯隊附として臺灣に出征し同年八月六日金山面に於て戰死す

アラヰ イツシャウ 荒井一掌 茶人なり佐藤三休に學むて茶道を能くせり（茶人系傳全集）

アラヰ イツペウ 新井乙瓢 俳人なり上野奪多郡黑保根の人通稱佐助碧梧舍と號す明治廿九年二月十一日歿す（三森松江氏寄）

アラヰ イノキチ 新井伊之吉 陸軍歩兵少尉なり靜岡縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第六聯隊附として出征し十月十二日清國盛京省十里河に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラヰ ガウサイ 新井剛齋 陸奥仙臺の人なり名は彰字は子常國藏と稱す剛齋は其の號なり原姓新田其先は左中將より出づ左中將王事に死し子孫四散す奥に在る者名は義貫始めて仙臺に仕ふ曾祖名は義和晩に一子を生む即ち剛齋の祖也之を以て門を分たしめ又氏を更め新井と爲し曰く阜徵の家を以て名閥の氏を承ぐ可からざる也と考名は義路諱は遠藤氏剛齋長じて性和厚にして未だ嘗て遽色忙言せず久しく奥に處る者依慮して離るゝに忍びず學は國洛の風を崇仰す初め田邊樂嘉に師事し後櫻田欽齋に就く授受淵源あり好むで韵語を綴る歌する所千首に下らず嘗然觀る可きも

のあり屢〻内願に丁り家道齋窮墓々定止する所然し而して之に處する悟然亦養の素あるを見る親に奉ずる孝あり父歿して哀毀禮に過ぐ母を喪ふに迨むで亦然り且夕祭服を卸さず凝然端坐少しも怠色なし文化七年剛齋家を承け孝の職を嗣ひ國學教授を司る十二年文政九年假學頭佐に遷る天保四年江戸に祇役し學頭佐の職を免ず既に歸りて復た國學の教授と爲る英山正山及び龍山三公に歴任し侍講すること月に三次恩賜數回天保五年五月疾に懇る其の族及び舊知を會し遺囑して曰く吾先人を喪ふや正に江戸に在り資財乏絶し衣衾棺槨其の疎を極む今に迄るまで憾に介々せり吾死せば謹むで先人の喪に踰えしむること勿れと遂に六月初八日を以て世を下る其生天明六年閏十一月晦を距る享年四十有九城北莊豐寺附の先兆に葬る（事實文編）

アラキ カクジャウ 新井角丈 俳人なり通稱清二郎武藏國入間郡津久根村の人家世〻豪農にして殊に山林に富む樂を修めてよく財を集め而も俳諧の爲にはよく財を散して奬勵す明治十七年二月十四日歿す（三森松江氏寄）

アラキ カンセツ 荒井寒雪 狩野派の畫人なり寒竹の男、畫法を父に學ぶ（扶桑畫人傳）

アラキ カンチク 荒井寒竹 狩野派の畫家なり名は常貞寒竹は其の號、畫法を狩野常信に學んで筆意能く師に以たり津輕侯に仕ふ（扶桑畫人傳）

アラキ キンジラウ 荒井金次郎 相撲の人天保時代の小說家にして千客亭柏琳と稱す

アラキ クメハチ 荒井粂八 陸軍歩兵中尉なり神奈川縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第三聯隊附として出征し七月廿七日清國盛京省四字形高地戰鬪の際負傷し歸國後卅八年十二月廿二日東京陸軍病院遞信分院に於て死去す

アラキ タケジラウ 新井竹次郎 勤王の志士なり諱は義正土佐國香美郡土居村に生る素と北川氏出で〻伯父新井林左衛門の養子となる幼にして讀書を好みしも家貧にして其志を果さず偶〻本藩の士某の京都藩邸の留守居と爲るに及び隨行して京都に赴く在るや數年間を倫みて讀書に怠らず歸郷の後森田梅磵の門に學ぶ元治元年七月清國道之助等と共に野根山に屯し尊攘を唱へて藩論を回さんと欲す然れども藩吏の沮格する所となり捕へられ九月五日奈半利河原に於て同志と共に斬罪に處せられる時に年二十六明治三十一年七月特旨を以て從五位を贈らる（殉難錄稿）

アラキ ゲウミン 荒井堯民 江戸の儒者なり字は繇行通稱は次郎右衛門晴湖と號す奥御小姓御膳番頭取白須甲斐守の家臣にて用人に任ぜられたりされど家貧にして活すること能はず每夜竊かに某氏の宅に忍び賣卜を業として衣食に供せり嘗て周易を閱して通ぜざる所あり太田錦城に謁してその疑襲を問ひ意始めて開悟す是より遂に錦城の門弟となりぬ著す所稿牧教論、談錄賞鈸、龍背發祕、拳霧解話、木朝人物百歌等あり（大田才次郎通報）

アラキ ゲンバチラウ 新井源八郎 水戸の藩士諱は直敬通稱源八郎實は佐谷信成の三男にして新井直忠の養子となり嘉永の初め馬廻組小納戸金奉行を經て安政五年小姓頭取となる前中納言齊昭か駒込の邸に籠居せし時其近侍となり元治元年甲子の夏郡奉行に遷る次て水戸の亂起るに及び松平賴德に隨ひて湊の陣に入り榊原照照と進退を共にして幕軍に降り後下総銚子に禁錮せられ更に上總佐貫に移されしが市川藩に預られて寃罪に陥りしを憤り科田理介と謀り窃に國難の始末を筆記し之を幕府の更員に進め翌年四月三日榊原と同時に自刎を命ぜらる時に年四十二（殉難錄稿）

アラキ サウシウ 新井滄洲 仙臺侯の儒者なり名は義質、字子敬、市郎と稱す佐久間洞巖の子にして師範南部侯の師とし學ぶ後ち仙臺侯に仕て殁す（藝定便覽）

アラキ シゲヲ 荒井重雄 陸軍歩兵中尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや第一師團歩兵第二聯隊附として出征し八月二十日清國盛京省水師營大西溝附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラキ シトミ 新井蔀 上野甘樂郡の俳人なり雲和は其の號、一に安樂居の號あり弘化中の人其の俳歌に曰く「供つれて面白みなきすゝみかな」（俳諧海内人名錄）

アラキ シャウゴ 新井章吾 栃木縣の人安政三年二月を以て生る其家素封を以て聞ゆ風に自由民權說を主張して天下の志士と交はる初め縣會議員たりしが後ち東京に出て地長社を興す大井憲太郎、小林樟雄等と俱に朝鮮に事を擧げんとして成らず捕はる二十二年大赦に逢ひて獄を出て翌年選ばれて衆議院議員となる二十九年拓殖務省に入り北海局長たりしが久しからずして罷む三十五年衆議院議員選擧に失敗せしも三十七年當選す久しく關東自由派の重鎭として立憲政友會員たり三十九年十月十六日病歿す年五十一

アラキ セイカン 新井晴簡 兵庫縣の人明治三年兵學寮に入り六年陸軍少尉に任ぜられ巢進して砲兵大佐となる二十七八年の征清役には臨時徒歩砲兵第一聯隊長たり三十一年陸軍少將に進み下ノ關要塞司令官となり尋で野戰砲兵第一旅團長に轉す三十七八年征露役には下ノ關戰時指揮官たり三十八年二月陸軍中將に進み三十九年三月豫備役を命ぜらる同年五月十七日病を以て歿す年五十四

アラキ セイサイ 新井靜齊 江戸の儒者なり名熙、字は君鑒富坂松苗の門人なり江戸に出でて儒を業とす（名家金書、藝定便覽）

アラキ センキャウ 新井宣卿 江戸の儒者なり平蔵と稱す白石の男なり、寛保元年七月四日病を以て歿す淺草報恩寺中高德寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

アラキ ゼンサイ 荒井全哉 名は盛武佐太夫と稱す其の先は葦名氏世〻奥の荒井に家す子孫因て氏とす五世の祖名は盛次、天正中實を政宗に委し弓隊卒の長を以て始めて仙臺に臣たり其孫名は某次子を以て別に食邑を賜ふ是を全哉の曾大父と爲す全哉の父名は盛定母は新妻氏金哉翁冠より綱村吉村の二公に仕へ公事に東都に從ふ凡そ三十一反其間歴る所の庶務皆其職に稱ふ享保中吉村雲松公主に尙せらる金哉を以てこれが傅と爲す班位國老に準ずる僅かに三等因て遂に家を東郷に移す公主薨去するに及むで仍ほ其旌居り内老を以て事に服し三世に歴事し賞賜加秩前後勝げて記すべからず屢〻致仕を乞ふも許さるされず杖を賜

ふて俟命に上らしめ特に優待を爲す元祿三年は全哉生るゝの歳也實暦四年冬十月晦卒す年六十五東郷高縄の東禪寺中に葬り全哉居士と號す（事實文編）

アラキ コイチベエ 新井小市兵衛 播州姫路の藩士青藍堂と號す文化文政年間愛泉に名ありにして名は勢字は太年通稱勢太郎藍書生と號す文久頃の人（廣益諸家人名錄）

アラキ タメヨシ 新井爲義 陸軍歩兵大尉なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十一師團歩兵第四十三聯隊附として出征し卅八年二月廿八日清國盛京省馬群丹附近戰鬪の際負傷し後送歸國後卅九年一月廿一日善通寺豫備病院に於て死去す

アラキ ツネサブラウ 新井常三郎 陸軍歩兵中尉なり埼玉縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第一師團歩兵第二聯隊附として出征し旅順攻圍軍中に從軍同年十一月二十六日松樹山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アラキ デンラウ 新井天朗 上野吾妻郡の俳人なり天明は其の號、一に猿蓑庵の號あり友三郎と稱す天保弘化中の人其の俳歌に曰く「温石をあたゝめかへて柴見かな」（俳諧海内人名錄）

アラキ ニツサツ 新居日薩 學僧なり字は文嘉、容月と號す上野桐生驛新居宗右衛門の六男なり年若めて九歳武藏國秩父郡御堂村淨蓮寺日執の弟子となり嘉永元年加州金澤に遊び兎山日輝に就く才學日に進み二十二歳にして其師に代り法華文句を講讀す兎山の徒子に野口士政といへるものあり少うして文辭を嗜む日薩之れと交り最とも善し安政三年二十七歳の時相俱に江戸に來り當時都下に名ありし藤森弘庵の塾に入り其の經說を聞き兼て詩文を學ぶ後駒込蓮久寺に住職たるや孝體の母を迎へて介抱至らざるなく勞ら俗家の子弟を化導するに其名遠近に聞えて信徒漸く歸せり後暫くにして鍋ヶ池上に參し檀林を復興す一時讀書の聲鳴磬の聲と相和し教法日に隆んなりし此の時に當り王政復古となり政府教部省を設けて寺院を監督し八宗の才學を召して其宗理を案驗す曾其人なきに苦みしが日薩一宗に推されて其重任に當り一身全宗の事務を負擔して官吏に接し俗徒に應對し事を處する宜きを得一宗日薩に賴りて寧かりしといふ次て政府一宗の流派を定めて富士派、勝劣派に分ち身延池上等を一致派と稱せしむ日薩吏に言て曰く水の別れたるものなこそ稍して派とは申すなれ今我が奉ずる所は日蓮の正統にして取も直さず水の源なり決して派と稱すべきにあらず日蓮宗と單稱するぞ理の當然なると、吏之れを聽かず日薩一篇の書を裁して反覆其理を論じたれ共尙聽かず日薩奮然聽を進めて曰く此事實に名分に關せり小事にあらず公等聽かされば我れ直ちに此書を太政官に携へて是非を決ずべしと強ひて拂ふて起つ吏其の意の廻すべか強爭の一事大いに有司を驚かし日蓮宗猶ほ人あり之を爲す是に於て政府特に日薩に命じて身延山久遠寺に住せしめ大教正に叙し日蓮宗の管長に任ず身延は日蓮宗の本宗にして適〻之に住するさへ一世の榮とす況んや特命を以て其榮たる更に大なりと謂ふべし夫れより全國に日蓮宗教院を分設して教育の道を開き福田會育兒院を起して孤兒を救ふ此の間年〻全國各地方を漫遊して布教に勤め池上は明治の初年師が庵を結びしの地と謂ふ池上は明治の初年師が庵を結びしの地と云ひ將た祖師開基の靈山聖地なり殊て同山の振興を志さし管長を他に讓り身延山をも退くの後ち明治十九年齡五十七歳にして池上本門寺の貫主となり管事を修繕して外部を一新し舊慣を矯正して内部を一變し是れより後必碑碣等を修る勿れと力を金澤藩侯に盡す所多し其來を察するに吾宗の弟子博く宗外の書籍に洋書を學び日本國各院、蒙求發、聖學自在、牛馬問、滄溟尺牘兒訓、唐詩選兒訓及び同文通考種なり（先哲叢談、燕臺風雅、近代名家著述目錄）

アラキ バイユウ 新井梅雄 上野赤城下の俳人なり梅雄は其の號一に醉梅の號あり傳右衛門と稱す弘化中の人其の俳歌に曰く「灯はいつか消けり窓白石は其の號、又紫陽、錦屏山人、天爵堂、勿齋等の

アラキ ハクガ 新井白蛾 有名の易學者なり名は祐登字は謙吉白蛾は其の號、又黃洲龍山古易館の號あり通稱縫部、後ち白蛾を以て通稱とす父祐勝は加州の人、淺見絅齋に學びて江戸に住す後ち白蛾を江戸の下谷に生む白蛾十三歳にして父に學び又た菅野兼山に就て闇洛の學を受け二十二（一説には二十三）にして雒を神田紺屋町に垂る然れども當時物徂徠の徒漢魏の古學明の李王の修辭を以て一世を風靡し能く之れに抗する者なし白蛾自其の企て及ばざるを知り去りて說を研究し占筮應驗あるを以て其の業一時に盛なり爲めに自ら白蛾の門人と稱するに至れり白蛾既に易說を以て門戸を建てしより從ひ學ぶもの頗る多し而れども當時の儒流皆目するに占筮家を以てし其の爲す所を嗤む獨り芥川丹邱白蛾の易學に服す其の古易對問に序して曰く白蛾氏之於三易學一顧幽微閉幽悉剖一後儒陋見一別立二一家之旨一と此序出るに及て諸儒始て白蛾は世の所謂る占筮者の類に非ざを知る古易對問故あり名を占易一家言と改め刻成るに及びて發賣の額未だ一年を出でざるに二千五百部に至ると云ふ白蛾中年の後好みて和歌を詠じ傍我が國の典故を修む寛政三年七月落俟の靈に應じて金澤に歸る翌年五月十四日同所に歿す時年七十八遺言して曰く企素儒術を以て一世に矜誇せんと欲す今僅に管郭の跡を追ひ易術古筮を以て一家を立つ固より以て其の業を不朽にするに足らず故に死後必碑碣等を修る勿れと力を金澤藩侯に盡す所多し其の著書は古易一家言、古易一家言補、古易斷、同外編、古易時言、同外篇、古易遺、周易精藴、古易精義、易學小筌、易學質編、廣易學必讀、梧花心易評註、左國周說、書經通考國字箋、周易本義考、周易啓蒙考、論語疏解、古文孝經發、詩經解、小學疏義、孝子形氣、

アラキ ハクセキ 新井白石 德川時代の碩學也名は君美字は在中、初名は璵、一の字は濟美通稱は勿齋、又紫陽、錦屏山人、天爵堂、勿齋等の

號あり江戸の人、其の先新田二郎倒髮して僧と爲り上州荒居に居る因て新井を氏と爲す父正濟久留里侯（土屋利直）に仕ふ明暦三年侯の邸火あり正濟從て侯の族内藤政親の柳原邸に寄宿す而して白石を生む侯因て呼びて火兒といふ白石生れて岐嶷穎敏三歲の時能く大字を書す侯其の幼慧を愛し召して膝下に置く一日盛岡侯（南部利直）來り之を異として曰く吾嗣子なし請ふ養ひて子とせん侯曰く是侍臣の子吾が兒に非ず盛岡侯曰く侯固辭す七歲の比ひ父母と戲劇み觀、歸りて之を語る侯一も遺忘する所なし父歎異す十歲に及びて常に侯側に給事して侯の文翰を書するに殆ど老成の如しと云ふ侯卒して正濟致仕す嗣頼直無頼なり延寶四年臣某等廢立あり正濟に問ふ正濟不可とす六年某等事發はれ某等皆逐はる白石亦父の此の謀に與かるに坐して禁錮せらる白石側儻不羈氣あり嘗て慨然歎して曰く大丈夫生きて封侯を得ずんば死して當さに關羅王となるべしと既にして節を折りて書を讀む江戸の富人向村瑞軒要はすに孫女を以てせんと欲す且千金の地を以て勤學の賞とせんことを請ふ其の男をして之を說かしむ白石曰く余之を聞く昔し澤上に小蛇あり人其の腮を嚙し（四）韓使國書を上る時上々官之を奉す爾後正使を上し（五）韓使殿見の時坐位遞支三家に同じ宜しく改めて學くすへし（六）韓使賜饗の時遞支三家に陪伴す是古禮に合はす我が使彼の國に至るも此の禮あらす宜しく之を廢すへしと又故事に韓使を饗するに猿樂を用ゆ是に至りて始めて雅樂を用ゆ韓使辭見の禮爭り復書を得る諱を犯す願くは禮なり安そ隣國の君をして國諱を避けしむるに諱むは禮なり何ぞ七世ことあらん且つ五世にして諱まざるは禮なり何ぞ七世の祖を諱まん抑々臣子の情果して忍びさる所あら乎貴匪に我國祖考の諱を犯す何ぞ先つ改め書して後之を請はさると使者屈服其の言の如くす然れとも時人の笑を以て賞を集め生徒百餘人を募り相率ひて渡海して資給せざれども窮困至らざる無けれども屈せず清國通商綜覽を著はして之を寶り以て米鹽の費に充つるに至り智易擴張の事業は其の志の如くならざりしも養ふ所の生徒は各自に用を爲すに至り殊に二十七八年役の前後に於て皆通譯官と爲りて我軍の前導し大に軍事に益したり二十九年十一月臺灣に入りて又爲す所あらんとし黑死病に罹り歿す享年三十八陸軍大尉正七位勳七等たり

アラヲ トミサブラウ 荒尾富三郎 東京府士族海軍中佐なり明治三十七年日露戰役起るや第三艦隊副官として從軍し卅八年一月十五日疾病に罹り退役中より召集を受け第一師團補助輸卒隊附として從軍し卅八年八月廿日清國盛京省奉天府大西邊門外にて病に罹り歸國後自宅にて療養中卅九年十月十一日死す

アラヲ ヨシヲ 荒雄 筑前國淦屋郡志賀村の人なり和歌を善くす之を以て名あり詠歌は萬葉集其の他諸書に散見す（萬葉集作者履歴）

アラヲ クニヲ 荒尾邦雄 舊熊本藩士なり弘化三年八月生る家代々實藏院流槍術師範として藩侯に仕ふ明治二年三月藩命に依り軍艦御用掛洋學修業として長崎表に遊學し同八月出京して慶應義塾大學南校燈議察所藩技術學校等に學び英學工學等を修め七年伊勢山田宮崎外國語學校副教師となる九年工學寮出仕を命ぜられ十九年十月工科大學舍監に昇進し二十四年中一時非職となりしも忽ち復職して爾來三十年間勤勞し書記官として師弟間に愛重されしが三十九年十一月十五日愈病なり歸玉縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て退役中より召集を受け第一師團補助輸卒隊附として從軍し卅八年八月廿日清國盛京省奉天府大西邊門外にて病に罹り歸國後自宅にて療養中卅九年十月十一日死す

アラヲ ユウスケ 新井勇助 陸軍二等軍醫なり始玉縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て從軍し卅八年八月廿日清國盛京省奉天府大西邊門外にて病に罹り歸國後自宅にて療養中卅九年十月十一日死す

アラヲ ヤウテツ 荒井養鐵「アラカハヤウテツ」 狩野家の畫法を父に學びて能くす（扶桑畫人傳）

アラヲ ヤウセツ 荒井養雪 狩野家の畫法を父に學びて能くす（扶桑畫人傳）

アラヲ ツキモリ 在明亭月守 本名は義行といふ父義濟は尾州藩士なり幼時父に從つて鹿兒島に移住す明治十二年教導團を出でて陸軍々曹となり同十三年陸軍士官學校に入り十五年少尉に任ぜらる個儻大志あり支那に遊んで爲す所あらんと欲す人間ふて曰く海内の志士歐米に遊ふもの多し子獨り之れに遊ふは何如答へて曰く近きを先にするの支那に遊んで何事を爲す乎と問ふものあれば曰く其の國情を研究するのみと陸軍卿に謂して之を苦請す十八年參謀本部に入り支那課に勤務し十九年初めて初志を達して支那に遊ぶ少年子弟從ふもの二十餘人あり分つて支那内地を周遊せしむ山川城池の形勢より風土民情水陸物産に至るまで精査して遺さす後支那貿易の大に勉めざる可からざるを唱へ日清貿易研究所を上海に起し獨力を以て資を集め生徒百餘人を募り相率ひて渡海して資給せざれども窮困至らざる無けれども屈せず清國通商綜覽を著はして之を寶り以て米鹽の費に充つるに至り貿易擴張の事業は其の志の如くならざりしも養ふ所の生徒は各自に用を爲すに至り殊に二十七八年役の前後に於て皆通譯官と爲りて我軍の前導し大に軍事に益したり二十九年十一月臺灣に入りて又爲す所あらんとし黑死病に罹り歿す享年三十八陸軍大尉正七位勳七等たり

アラヲ ワシュン 茂尾和駿 陸軍歩兵中尉なり高知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び歩兵第四十四聯隊附として出征旅順攻圍戰に從事中同年十二月十日東雞冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリアケテイ 有家 山城葉田口の刀匠にして有光の子天福年間の人なり或は建治弘安間或は有光の門人にして正安比の人或は建長年間の人と云ふ（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

に終る凡八十餘年間の治革儒に之に戰す乃命じて藩論譜と曰ふ寶永元年家宣立て將軍の儲副となり將に四城に入らんとす君奚間部詮房に由て言ひて曰く凡天下の事臣嘗て進講せり今亦何ぞか言はん請ふ忘るゝなくん敢て忘れずと居ること幾もなく召されて侍講となること乃古義を引いて信篤と稱論す執政遂に君奚の講に從ふ初め家宣我か邦久しく冠服を廢し上下章なきを恨み禮儀を制し俗風を改めんと欲し歷々君奚と議す君奚乃經邦典例を考はして詳に制度沿革の事を記す君奚又請ひて銅字活版を鑄造して以て經籍を天下に周布せんと欲す昔命を奉し行はずして家宣薨す後幾もなく儲君亦不幸にして薨す而して君奚漸く老て當世に意なし乃ち門を杜ち客を謝し日夜典籍を讀み樂とす其の著述三百餘種、世に其の有用を稱す加賀侯嘗て君奚著はす所の古史通を譚み歎じて曰く本朝第一の良書、能く萬古の疑惑を決すと而して事を記する多く國字を用ゆ故を以て日用の簡牘と雖も皆以て傳ふるに足れり尤も詩に長す其豐腴、馴雅直に盛唐諸名家と相頡頏す是に由りて四方爭ひ傳へて遠く海外に傳播す清の翰林鄭任鑰序する所の白石餘稿世に行はる享保十年五月十九日卒す年六十九、明治四十年十一月十五日正四位を贈らる經邦典例を制し俗風を改めんと欲し歷々君奚と議す君奚乃銅字活版を鑄造して以て經籍を天下に周布せんと欲す昔命を奉し行はずして家宣薨す後幾もなく儲君亦不幸にして薨す而して君奚漸く老て當世に意なし乃ち門を杜ち客を謝し日夜典籍を讀み樂とす其の著述三百餘種、世に其の有用を稱す加賀侯嘗て君奚著はす所の古史通を譚み歎じて曰く本朝第一の良書、能く萬古の疑惑を決すと而して事を記する多く國字を用ゆ故を以て日用の簡牘と雖も皆以て傳ふるに足れり尤も詩に長す其豐腴、馴雅直に盛唐諸名家と相頡頏す是に由りて四方爭ひ傳へて遠く海外に傳播す清の翰林鄭任鑰序する所の白石餘稿世に行はる享保十年五月十九日卒す年六十九、明治四十年十一月十五日正四位を贈らる

日本國人君の故事を說き更に賞を賜ふ君奚の故事を說き更に賞を賜ふ君奚の故事を說き更に賞を賜ふ君奚

アリイヘ 有家「コセアリイヘ」
アリウヂ 有氏 河内の刀匠にして有成の子永祿年間の人なり或は門人とし或は弟とし治安年間の人とし又長久年間の人にして名刀釉丸の作者とす（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリガ チャウイン 有賀長因 歌人なり長伯の男敬義齋と號す大阪の人安永七年七月五日歿す年六十七

アリガ チャウシウ 有賀長收 涙花の歌人なり長伯の孫、家風を守りて詠歌を修む涙花に住す門に入て學ぶ者多し初の名は長因と云ふ文政元年五月七日歿す年七十九（鑑定便覽）

アリガ チャウハク 有賀長伯 有名の歌人なり以敬齋と號す京師の人、平間長雅の門に入りて學び苦學數年業大に進み終に一家を爲す專ら名所を探り歌枕秋の鹿覺を著はして世に益あり時に從ひ學ふもの甚だ多し元文二年六月二日歿す年七十七其の他著はす所、初學和歌式、和歌八重垣、同分類、歌林雜木抄、濱のまさご、和歌二葉艸、同龍の塵、世々のしをり、同追加、源氏掌故、長伯集あり（鑑定便覽、諸家人物志）

アリガ チャウリン 有賀長隣 歌人なり初め京都に在りしが後大阪に移る代々歌道を以て世に知らる長隣は其七代目にして長基の子なり情新齋と號し最も柿本人丸を尊崇し脫俗高蹈の風あり門生にして名を成しゝもの亦少からず晩年嗣子長雄の寓に在りて老を養ふ明治三十九年十月一日遂に逝く享年八十九青山墓地に埋葬す

アリカネ 有包 伯耆の刀匠にして貞觀の有行の子元慶年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリカネ 有包 伯耆の刀匠にして弘長の有行の子永仁年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリカネ 有包 伯耆の刀匠にして康元年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリカネ 有包 伯耆大原の刀匠にして建武年間の人なり或は嘉元年間の人と云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリカハ シゲイチ 有川茂一 鹿兒島縣出身陸軍歩兵少佐なり明治卅七八年日露戰役に際し歩兵第三十九聯隊に屬し從軍す三十七年十月十二日清國盛京省三塊石山に於て戰死す勳四等功五級にぜらる（靖乘要略）

アリガ ハンヤ 有賀半彌 水戸藩士にして文久元年品川東禪寺の假英國公使館を襲撃したる浪士の首領なり諱は重信半彌と稱し大番組喜右衛門が次男なり勅書の事起り江戸に至り又長岡驛に屯しゝが藩兵士なり勞ら靖を善くす明人に法りて墨梅に巧みなり

アリカハ バイイン 有川梅隱 薩摩の藩に逐はれて巢さず此時幕府外國と互市を開き外國の使臣を厚遇すと聞き半彌大に憤激し一策を案じ幕中藏の謀り東禪寺に討入り英國公使を斬り以て兩國の和交を破らんとし私に之が準備を爲す有司之を探知して半彌等を捕縛せんとしければ早くも跡を晦ましむ文久元年五月形を變し海路江戸に至らんとす幕府之を傳聞し要所に關門を設け往來の人を檢按すると頗る嚴重なり半彌等乃ち身を刀商人に裝ひ各〻路をかへて江戸に入り旅宿に着き夜々東禪寺の動靜を伺ひ遂に同月二十八日夜を以て事を擧げ同志十二人を率ゐて東禪寺の門戸を破りて斬り入る守衛の士大に驚き防戰頗る努む半彌等衆寡敵せず重傷を負ひて倒る時に年三十二一書を懷にせる「臣等艸莽微賤の身なれども神州の夷狄に汚がさるゝを見るに忍びず尊攘の大義に基づき身命を擲ち區々の微忠を以て聊國恩の萬一に報ぜんとす固より此一舉以て他日の夷狄退攘の端を啓くべく萬一天朝幕府の憂慮を安くし奉らば微臣の身にありて幸之に過るとなし」と後幕府朝旨を奉じて其屍を故鄕に歸葬するとを許せり（殉雖錄稿）

アリキ カンイチ 有木幹一 陸軍歩兵大尉なり岡山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第十九聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はり同年十一月二十七日二龍山戰鬪の際負傷し三里庄鎗帶所に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリキ ゲンゼン 有木元善 備前沼隈の醫なり名は吉、元善は其の字、又通稱に用ふ山脇東洋に就て醫を學ぶ吐納暇言を著はす記する所發明多し（皇國名醫傳）

アリキヨ 有清 山城粟田口の刀匠にして年代詳ならず或は永仁年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリキヨ 有清 山城古刀の鍛工なり或は云三條に住す永承康平年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

アリキヨ 有清 新刀の鍛工にして山城の人姓は橘なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 或は在國一名助友山城三條の刀匠にして信濃小路に住し獅子と稱す三條宗近の門人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 藤五郎と稱す山城粟田口の刀匠にして國家の五子後近江金田に住す建暦承久年間の人なり或は寛喜年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリクニ 有國 左近と稱す山城粟田口の刀匠にして國綱の子嘉祿仁治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 京の刀匠有國の子にして河內有成の門人長元年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 山城の刀匠綾小路に住す寶治年間の人にして本國は備前なり（古今鍛冶備考）

アリクニ 有國 大和の刀匠にして寛弘年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 河內の刀匠にして有成の子正暦年間の人なり或は云右馬進と稱す京の獅子有國と同人なりと又云兼平の門人なりと（本朝鍛冶考）

アリクニ 有國 河內の刀匠にして文明年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 藤五郎と稱す河內の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 備前長船の刀匠にして有正の二子天喜年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリクニ 有國 備前長船の刀匠にして有忠の子保元年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリクニ 有國 備前の刀匠にして建武前の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 備前の刀匠にして嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 備前の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 伯耆の刀匠にして則國の子承曆年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリクニ 有國 伯耆大原の刀匠にして有包の門人延慶年間の人或は云貞治年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 一名神次、近江の刀匠にして鎌田に住す高木貞宗の門人にして貞和年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 信濃善光寺の刀匠にして有常の子應永年間の人なり或は應安年間の人にして有常の門人又は弘安年間の人とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリクニ 有國 古刀の鍛工にして肥後の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 橘姓大和大掾と稱す新刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 山城の刀匠にして長保年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリクニ 有國 古刀の鍛工にして肥前の人なり或は云天文比の人と（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリサカ カンサイ 有阪閑齋 狩野派の畫家なり畫法を狩野常信に學ぶ（扶桑畫人傳）

アリサカ ホクバ 有阪北馬 浮世繪を善くす蹄齋又駿々齋と號す俗稱五郎八始め神田に住せしが後に下谷三筋町に移る北齋の門に入りて畫法を學び善く狂歌摺物讀本の類み畫く殊に讀本の密畫に妙み得て遺響、蘭山作の三國妖婦傳、馬琴作の常世物語、鬼武作の自來也物語等なり又彩色美人畫を善くし席上の略畫に長じ左筆の曲畫を巧にす壽風少しく師と異なる所あり後年剃髮せり歿年詳ならず（葛飾北齋傳）

アリサダ シンワウ 有定親王 東山帝の第三子なり母は宮人藤原氏、元祿十年二月生る三宮と稱す十三年八月圓滿院に入り行惠入道親王の弟子となる寶永五年八月親王となる其の十二月院に入り朝髮して名を覺寧と改め戒を實姓院僧正に受く正德三年十二月更に公辨入道親王の弟子となる四年正月居を滋賀院に徙す其の二月山東に行き輪王寺に入り名を公覺と改む四月二品に叙し五年五月寺務を繼ぐ享保二年二月一品に進み三年六月天台座主に補す七月牛車に乘りて宮中に出入するを許さる（野史）

アリザネ 有眞 備前長船の刀匠にして有忠の二子保元年間の人なり或は云有直と同人なりと（本朝鍛冶考）

アリザネ 有眞 備前の刀匠にして建武前の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリザネ 有眞 備前長船一流の刀匠にして建長比の人なり（古今鍛冶備考）

アリサハ エイテイ 有澤永貞 加州藩の兵學家なり字は天淵、通稱は采女右衛門、其の亭を高臥と號す幼童より鈐韜を讀み喜んで兵事を談ず是の時佐々木秀桑と云ふものあり山鹿素行に從ひ學ふ三十年貞享丙寅の年四十八歲にして其の兵說を究め甲陽軍鑑本末通解十八卷を著み北條氏長及び上杉謙信の兵理を祖述して名聲海內を傾け雌雄二鑑雄備武教等の書世に行はる天淵之を讀みて喜ばず以て徒言と爲す是に於て自ら徑に高坂氏の家法に就て書數萬言を著す一切書する所國字を以てす藩臣其の門に入らざる者なし元祿辛未家火災に罹り百物皆燒く唯〻一井一梧を存在するのみ即ち兎字を其傍に構ふ門人之れを梧井菴と呼ぶ終身兵を談じ年七十七にして卒す（燕薔風雅抄）

アリシゲ 有重 畫人なり稱號詳ならず正安中の人、巨勢家の畫風を受く（扶桑畫人傳）

アリシゲ 有重 備後三原の人にして古刀の鍛工なり或は云尾道に住す天文年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

アリシゲ 有重 河內の刀匠にして寬正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリシゲ 有重 甲斐の刀匠にして天文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリシゲ 有重 備前長船の刀匠大宮の一派にして有經の子建保年間の人なり或は云有忠の門人と又云後冷泉帝御宇の時の人一名成盛と云ふ又云貞和年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリスヱ ガハノミヤ 有栖川宮「タカヒトシンワウ」「モトヒトシンワウ」「ユキヒトシンワウ」

アリスヱ 有末 備中の刀匠にして建武前の人或は云片山の一派にして弘安比の人なりと（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリスヱ 有末 備中青江の刀匠にして眞里の子延德年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリタカ 有隆 山城粟田口の刀匠にして有光の門人天福建長年間の人なり或は弘安正安年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリタダ 有忠 山城の刀匠にして有國の族なり鄧子有忠と稱し三條に住す長和万壽年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリタダ 有忠 油小路有忠と稱す山城粟田口の刀匠にして弘安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリタダ 有忠 備中の刀匠にして文和延文年間の人なり或は云片山に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリタダ 有忠 備前長船の刀匠にして長曆年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリタダ 有忠 備前長船の刀匠にして有正の子大治年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリタダ 有忠 備前長船の刀匠にして有正の五子長和長元年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリタダ 有忠 備前長船一派の刀匠にして承久比の人なり（古今鍛冶備考）

アリタダ 有忠 備前の刀匠にして建武前の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリタダ 有忠 巨勢氏の畫人なり修理亮に任ぜらる弘安年中の人（扶桑畫人傳）

アリツグ 有次 橋姓山城の刀匠にして天和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリツグ 有次 備中の刀匠にして秀次の子弘

安正應年間の人なり或は仁治比と云又青江に住すと云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリツグ 有續 初名國繼勝力丸と稱し高柳庄左衛門と號す播津の刀匠下坂派にして加賀守貞廣の子元祿年間の人也（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリツナ 有綱 河内の刀匠にして有成の子永承年間の人なり或は云有氏の子にして長和年間の人應和三年生ると或は云有氏の門人なりと又云寛仁年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

アリツナ 有綱 古刀の鍛工にして和泉の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリツナ 有綱 越前藤島の刀匠にして文安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリツナ 有綱 越前藤島の刀匠にして永正年間の人なり或は加賀の有綱と同人と云（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

アリツナ 有綱 加賀の刀匠にして則長の子大永年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリツナ 有綱 伯耆の刀匠守綱の子にして大原に住す貞觀仁和年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリツナ 有綱 備前の刀匠長船の一派にして建長年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリツナ 有綱 備前の刀匠にして寶德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリツナ 有綱 伯耆の刀匠にして天德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリツネ 有常 信濃善光寺の刀匠にして丸房の子貞和年間の人なり或は云建長年間の人と又云貞治年間の人にして陸奥舞草の一派なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリツネ 有常 陸奥の刀匠にして永德年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリツネ 有經 河内の刀匠にして有成の族亦和泉篠田及越後に住す正暦年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリツネ 有經 信濃の刀匠にして有國の子明德年間の人なり或は云有國の門人にして善光寺に住すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリツネ 有經 備前の刀匠にして有忠の子康平年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリツネ 有經 備前長船の刀匠にして有行の子元暦年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリトシ 有利 大和千手院の刀匠にして是高の弟寛喜年間の人なり或は弘安年間又は寛元年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリトシ 有俊 大和千手院の刀匠にして年代詳ならず或は同名二世ありと或は建武年間の人にして西京鳥羽に住し長氏にして長長衛尉と稱す或は貞治比の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリトシ 有俊 大和當麻の刀匠にして正應年間の人なり或は正安年間の人或は文永年間の人と云又建武國行孫女の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリトシ 有俊 古刀の鍛工にして備後三原の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリトシ 有俊 越前古刀の鍛工或は云府中に住す千代鶴派の刀匠廣家の子にして明應年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリナガ 有長 小次郎と稱す大和千手院の刀匠にして實治年間の人なり或は亦山城にも住すと云（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

アリナガ 有長 大和千手院の刀匠にして寶德年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリナガ 有永 山城粟田口の刀匠にして京油小路に住す本國大和にして建長年間の人なり或は有長（本朝鍛冶考）

アリナガ 有永 山城粟田口の刀匠にして有國の二子五郎二郎と稱す貞應寛喜年間の人なり或は云有長の族にして油小路に住す正元比の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリナホ 有直 備前長船の刀匠にして有行の門人大治年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリナホ 有直 備前長船の刀匠にして承久年間の人なり或は云建長年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

アリナホ 有直 備前の刀匠にして建武前の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリナリ 有成 初名有盛河内の刀匠にして長和年間の人なり或は後鳥羽帝の御劔石切及源太義平の太刀の作者にして天慶元年に生れ天元五年山城の京に移住し宗近と改むと云或は有國の子或は宗近の子或は泰兼平の子なりと云或は一條帝上工四人の一とし永延比の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリノブ 有延 山城古刀の鍛工にして有國の族なり或は云粟田口に住す實治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリノブ 有信 橘蛙山城の刀匠にして延寶年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリノブ 有信 備中古刀の鍛工なり或は云青江に住す正應年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

アリノブ 有信「イウカンサイ」

アリハル シゲハル 在原滋春 業平の次子なり善く和歌を作る人稱して在次君と曰ふ大和物語に著はす（大日本史）

アリハラ ナリヒラ 在原業平 阿保親王の第五子なり天長中兄行平と共に姓在原を賜ふ世帝して在五中將と曰ふ體貌閑麗にして放縱拘はらず善く和歌を作る論者謂へらく業平の歌は意餘りありて言盡さざる所ありと之を湖謝の花に譬ふ生色少しと雖も尚ほ餘藻あり貞觀中右馬頭に任ぜられ勅を奉じ鴻臚館に就て渤海使人を勞し右近衛中將と爲り元慶中兼相摸美濃權守を歷元慶五年五月廿八日卒す年五十六嘗て武藏に遊びて隅田川に至り水鳥を見て名を問ふ曰く都鳥と乃ち悽然として和歌を作て曰く「名にし負はゞいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありや無しやと」一世傳へて絶唱と爲す後人祠を加茂畷本に建つ業平嘗を能くし善く子規を嘗く又和州不退寺に自筆の肖像あり三條四公條芳野道記に曾て此の像を觀るの事を記す（大日本史、續

本朝畫史）

アリハラ ムナハリ 在原棟梁 業平の男なり（これをムナヤナと讀むは誤なり棟と梁とは家を造る第一の具なるが故に名づけたる名なり築は魚を取る具にして棟には緣由なし）筑前守に任ず古今集中の作者にして卷の上に「春たてど花もにほはぬ山里はもののうかるれに驚のなく」の詠あり（古今集打聽）

アリハラ モトカタ 在原元方 棟梁の子にて業平の孫なり古今集の卷頭に撰ばれたる「年のうちに春は來にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ」の歌は此の人の所詠にして最も人口に膾炙せり（古今集打聽）

アリハラ ユキヒラ 在原行平 阿保親王の第二子なり初め諸王たり天長中阿保上奏して子男に姓を賜らんことを請ふ行平見弟に姓を在原朝臣と賜ふ承和中藏人に補し從五位下に叙せられ侍從となり右近衛少將に累遷す尋で因幡守に除し天安元年兵部大輔と爲り尋で中務に轉じ左馬頭に任ぜらる貞觀中左兵衛督に遷り播磨信濃備前備中四國の守護を歷て從四位下に進み參議に任じ檢非違使別當左衛門督と爲り藏人頭に補せらる參議にして藏人頭に補せらるゝは之を始とす尋で從三位に叙せられ太宰權帥に任ぜらる是より先き筑前肥前等六國の穀を漕して對馬の年糧と爲す年中漂沒する者十の六七行平奏して六國の運漕を停め其の民を發して壹岐の水田を營み以て對馬の年糧と爲さんと請ふ又肥前松浦郡の庇羅値嘉二郷を合して更に二郡を建て上近下近と號せんと乞ふ並に之を許す元慶中治部卿を兼ね中納言に任じ正三位に叙せられ兼民部卿に遷る上表して辭す許さず仁和の初め陸奥出羽按察使を兼ね尋で表を上て辭す優詔して許さず再び表を上る詔して之を許す寛平五年薨ず年七十六（續本朝畫史行平は丹青を好み畫み能くせり薨年八十二とあり）嘗て奏して奬學院を左京三條に創す（大日本史）

アリヒサ 有久 「コセアリヒサ」

アリヒラ 有平 藤原姓越後守と稱す加賀金澤の刀匠にして高平の二子慶安寛文年間の人なり（古今鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリヒラ 有平 一名行吉豐前の刀匠にして信國の族承久年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリヒラ 有平 豐後の刀匠にして兼平の子承久年間の人なり或は云光恒の子にして天仁年間の人と又云正中年間の人と（本朝鍛冶考）

アリヒラ 有平 紀姓豐後の刀匠にして弘長年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリヒラ 有平 肥前の刀匠菊池派にして菊平の族元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリヒロ 有弘 備中の刀匠にして文和年間の人或は云万壽庄に住すと（古今鍛冶銘早見出）

アリヒロ 有弘 備中の刀匠にして應安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリフサ 有房 畫人なり未だ其の姓氏を詳にせず有房繪所預と爲り前加賀權守を兼ね嘗て建長內裏を造るに方り有房詔に應じ之を畫かんと欲す舊本なし偶〻人あり鴨居殿の倉より金岡が畫本を出だして之を有房に傳へ以て其の役を勤めしむと（本朝畫史）

アリホフシ 有法師（又アリホシ）大和當麻の刀匠にして國行の弟子文永年間の人なり或は云友行の弟なりと又曰く次有の別名なりと（本朝鍛冶考）

アリマ キヘエ 有間喜兵衛「ニヒミキヘエ」

アリマ ゲンカン 有馬元函 京師の醫にして有馬涼及四世の孫なり性酒を愛して放縱拘はらず嘗て病家に囑して曰く謝金願くは密に予に與へよ然らざれば荊妻取りて米鹽の費に充つ甚だ惜むべしと然れども心を醫術に用ひ平時傷寒論を讀んで須臾も手に卷を釋かず卒に組先數世の說を集めて傷寒論神解を著す其の書唯々太陽三篇を解す以爲らく傷寒の傳經は此の三篇に止る陽明以下は所謂る中寒なりと伊藤蘭嶋の薦に因りて紀藩に仕ふ（近世畸人傳、皇國名醫傳、近世叢語）

アリマ ゲンテツ 有馬玄哲 宗固と號す洛下の名醫にして法印に叙せらる其の子存庵涼及も亦其名を知らる寛文五年七月二十五日卒す（墓誌）

アリマサ 有正 大和の刀匠にして元弘年間の人なり或は云千手院の一派なりと（古今鍛冶銘早見出）

アリマサ 有正 河内の刀匠にして有國の門人長久年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリマサ 有正 遠江の刀匠にして元安の子正長永享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリマサ 有正 近江高木の刀匠にして貞宗の門人重永の父貞和年間の人なり或は云亦相摸に居ると（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリマサ 有正 六郎と稱す陸奥の刀匠安房の子にして後備前に住す正恒の父なり永延中殁す六十三歲或は云陸奥太郎と稱すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリマサ 有正 陸奥の刀匠にして有行の子治永年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリマサ 有正 丹波の刀匠にして建武前の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリマサ 有正 丹波の刀匠にして綾部に住す應永比の人なり（古今鍛冶備考）

アリマサ 有正 伯耆の刀匠にして小鴨に住す貞治年間の人也（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリマサ 有正 備前の刀匠にして元暦前の人なり或は云應保比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリマサ 有正 伯耆守と稱す備前の人にして新刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

アリマ シゲノリ 有馬茂儀 陸軍步兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集を受け步兵第二十二聯隊附として從軍し卅八年八月三日清國盛京省八家子にて病に罹り同十一日同所舍營病院に於て死す

アリマ シンヒチ 有馬新七 勤王の志士にして伏見寺田屋事件の首謀者なり鹿兒島藩士なり名は正義又武麿といふ父を柳四郎兵衛と云ひ妻子を携へて同藩士有馬四郎兵衛の後を繼ぎて有馬氏を冒す新七少壯の時江戸に遊學し山崎闇齋派の學を修め兼ねて詩歌を學ぶ常に叔父六郎に從ひて心影流の劍法を練磨し願る其術に進す嘉永安政の交尊攘の論漸く旺んなるや新七時に江戸に在り慷慨止み難く同志の人〻と謀りて

アリマ

關東の事情を朝廷に奏し遂に奸吏を除き夷狄を攘ひ以て藩主齊彬の宿志を遂せんと企つ其後竊に日下部伊三次鮎澤伊太夫勝野豐作等と往來して謀る所ありしが遂に相携へて京都に入り藩に出京したる同藩士西郷吉之助海江田武次伊知地壯之丞等を其四條の旅舍に訪ひ僧月照にも會して關東の形勢を之に語り月照之を叡聞に達したり是より新七は攘夷の勅諭を諸藩に下すことを主張專らを之に周旋し遂に勅書の寫及び三條中納言の手書を携へて竊に江戸に下り越前の橋本左内長州の山縣半藏其他四方勤王の士に密會して偏に義擧の策を講ず此時に方り日下部橋本等勤王の士數十人捕縛せられ江戸に檻致せられしかば新七同士に語りて我黨の士早く決する所なくんば天下誠忠の士空しく奸吏の爲めに絶滅せらるゝに至らんと幕府の關老間部詮勝酒井忠義等を刺さんと謀る乃ち常陸の櫻任藏と同じく密に京都に入り間部老中を其參内の途中に刺さんと企てしが警備嚴重にして近く可からず偶〻藩主修理太夫の海路伏見に來れるを聞き建議する所あらんとて一書を呈せしに却て歸國を命ぜらる文久二年の春島津久光の上京するに會し新七も亦其屬從の中に加へられたり四月十日久光海路よりして大阪に著し新七は伍長として久光に隨從し十三日伏見に著す此時西郷吉之助は京に在り藩藩の志士其德量に服し之を棟梁に推し久光の入京を機として事を擧んと謀る久光之を聞き且つ驚き且つ恨み就中清川八郎の如きは他の擧動を緩慢なりとし聲震の下單身事を擧げんと欲し物情惚々たり朝廷亦浪士の亂暴を虞れて勅書を賜ひて久光に之が鎮撫を命ず久光勅詔を畏み嚴に藩士を戒む是より先き江戸在勤の薩藩士數名密に江戸を脱して大阪に來り遂に新七及び田中謙助等と謀り九條關白の邸を襲ひ所司代酒井忠義を誅し公武一體となし攘夷の實効を立てんことを決し既に長州の志士に檄示する所あり然るに未た事を擧ぐるに至らずして久光の知る所となる二十三日の未明田中謙助西郷新吾大山彌助篠原冬一郎等二十七人と共に藩邸を出て他の九人と會して船に乘り淀川を溯りぬ久光事の不穩なるを聞き奈良原喜左衛門海江田武次等をして追て之を留めしめ更に小松帶刀奈良原幸五郎等を急派し命を傳へしむ新七等一行の伏見淀橋際の旅舍寺田屋に在るを聞き幸五郎等此に抵り新七等數輩に會して久光の命を傳へ懇諭する所ありしも新七等頑として聽かず激論の末久光の使者道島五郎兵衛直に刀を拔て一人を斫り新七之を見大に怒り刀を拔きて五郎兵衛を擊ち刀を交へて鬪ふこと三四合新七刀折れ副刀を拔くに遑あらず徒手を揮て五郎兵衛を搏ち二人亂刀の下に斃る新七時に年三十八同志多くは之を知らず變を聞きて血戰せんとす幸五郎手を拍ち鎭靜す可しと呼び更に兩組を脱亦刀を脱して坐に著く眞木和泉田中河内介二人來りて謝するこゝなり尋で國に歸されたり新七爲人痘痕面に滿ちて色黯黑容貌極めて醜なり性豪邁にして物に屈せず幼より勤王の志を抱き幕府の所爲を罵詈して忌憚する所なく人呼びて今高山と稱せり文筆にも長じ同志中種復の書翰は其手に成れるもの多かりしと云ふ此日托して假葬新七の法諡を養法院觀阿有信居士と日ふ西郷吉之助後に新七以下殉難九士の墓石を記せり明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を贈らる（殉難錄稿、伏見殉難史傳）

アリマ タダヨリ 有馬忠頼 久留米の城主なり豐氏の長子、本名は忠郷、小字を吉法師と稱す慶長十八年元服して諱字及び冠服を德川二代將軍秀忠より賜はり從五位下に叙せられ中務少輔と稱す後ち元和三年兵部大輔と改む寛永十四年島原の賊起るや忠郷父に代り赴きて賊を伐ち功あり尋で東府に往き更に中務少輔と改稱す二十年從四位下に叙せらる承應四年三月逝職の途次備前の海上に於て卒す時に年五十三一子あり輕利と曰ふ（野史）

アリマ タンザン 有馬丹山 京師の醫なり寛永中福井侯病ありて醫を京師に求む丹山招きに應じて至る侯已に危し諸臣之を憂ふ丹山診し畢りて藥饌を聞き自末雪の如きものを取り沈思稍々久うして曰く之を殺さんのみと聞くもの愕然其の妄を疑ふ一老臣曰く公病日に篤し衆醫手を收む彼れ決然七日にして李紫溟の家に在り酒醴なるとき戲に一句を吟して曰はく海内詩無し敵、生涯酒是名と聞く者其の謔を笑ふ然と衆之に從ふ果して効あり丹山既に歸る途三國の胡家を過る美人あり之を惚び將に挽ゐ去らんとす樓主其の價を請ふ丹山曰く汝侯府に往て取り來れと或は言ふ丹山は有馬涼及の別號ならんか（皇國名醫傳、遺遊雜記）

アリマ トヨウヂ 有馬豐氏 久留米の城主なり則頼の長子、小字は萬助、天正中從五位下に叙せられ玄蕃頭と稱す庶子の秋父と興に德川家康に從ひ關ヶ原に四上し大垣の敵を濃州の赤坂に擊ちて之を破る十一月栄邑を加賜せられ丹波福知山城に移り六萬石を食む（遺史に八萬石に作る）十九年休暇を賜はり東府を發して駿府に抵る會〻大坂兵起ると聞き命を承て軍旅を整へ直に驛せて孺州吹田に到る天滿口に陣す次年役に從ひて敵首五十七級を斬る元和六年筑後に封ぜられ二十二萬石を食み久留米城に治たり寛永三年從四位下に叙せられ十一年侍從に任ぜらる島原の賊起るや命を承け赴き擊ちて之を平く十九年八月卒す時に年七十三なり法名を如夢道長と曰ひ春林院と號す三子あり忠頼、信賢、頼次（或は頼春に作る）と曰ふ

アリマ ノリヨリ 有馬則頼 赤松則村の裔孫なり兵部少輔と稱す姓は源氏祖父則景始て攝州有馬郡に住す依て氏とす父重則播州三木城に移り又轉して淡河城に移る則頼に至て豐臣秀吉に仕ふ慶長四年三月石田三成潛に家康の伏見の館を燒かんとす則頼實夜侍して家康を護す其後家康に京師又は關が原の役に從ひ功あり因て攝州有馬郡の内に食祿を加へ都て二萬石を賜り三木城に住し七年七月卒す二子長は豐氏次は豐長三千石を領す子孫あり（近代諸士略傳）

アリマ ハクシヨ 有馬白嶼 肥後の藩士なり詩に工みなり名は成章、白嶼は其の號、熊本の人少壯の時文あるを以て市井の中より擧けられ果遷して世子の近侍横目となり晩年學校の訓導に任せらる未た幾くならずして老す白嶼人と爲り朴質にして好んで詩を作る是に於て專ら詩詠を事とす其の敏捷比なし果年作る所の梅花詩四百首あり藩人推して詩豪と爲す白嶼初め侯に從ひて江戸に往き昌平黌の諸學士及び紀平洲、古屋昔陽等と詩を以て交り尤和韻を善くす嘗て李紫溟の家に在り酒醴なるとき戲に一句を吟して曰はく海内詩無し敵、生涯酒是名と聞く者其の謔を笑ふ然

アリマ

れとも其の敏捷に於て之に敵するもの寡し一日熊本火あり白嶼の家火道に當る其の妻衣服什器を收む白嶼詩稿一篋を出して曰く此吾が精神の寓する所先つ持去るべし其の餘の諸物盡く祝融に付すと雖も敢て惜むに足らずと殁する時年七十餘（纓近世叢話）

アリマ ハルノブ 有馬晴信 肥前の武族なり小字十郎兄義純の後を繼き原日野江兩城に居り左衛門大夫又修理大夫と稱す慶長五年關原の役起る四國大名戰艦に乘て赤間關に到る大村喜前建議して悉く城邑に還る晴信亦城に歸り子直純を遣り兵二千を率ゐて吉川小西が水津城を攻しむ關原敗るゝに及て守將自殺以て士卒の死を宥されん事を乞ふ晴信乃ち其城を屠り直純を遣て捷を報す食邑を保有す慶長十四年十二月德川家康晴信に命じて長崎港に至り異國船を燒しむ是より先弘治三年南蠻商船周防に到る爾後一二來往絶えず是に於て長崎を定めて港となし互に交易す蠻人或は天主教を奉じ其法を廣めんと欲して土民を誑惑之を信仰する者は富貴憑の如しといふ故に稍く之に歸する者多し初め我が商香木を交趾に求めんと欲し乘組五十人風浪に遇て臣媚港に漂着す群夷逃留めて終に之を殺す家康慮ばずは年來船交易を乞ふ夷或は竊に告ぐ往きに我が買人を殺す者此船中に在りと晴信長崎奉行長谷川廣智と議して守備を嚴にす夷之を察し上陸せず風を候て發せんとす晴信輕舸を馳て之を追ふ夷銃を縱て拒み去る十二三里烈風遽に起り硫黄島に漂流す晴信火箭を縱て之を襲ふ銃火夷船の火藥に移り炎焔沸涌乍ち碎破し夷人悉く死亡す晴信竊に天主教を修す子直純諫むれ共聽かず廣智に潛て強諫す猶聽かず慶長十七年三月晴信罪あり甲斐に配せられ國除す尋て死を賜ひ舊封を割きて子直純に四萬石を賜ふ（野史）

アリマ ブゼンノカミ 有馬豐前守 有馬流の劍法家なり家康に仕へ後紀侯頼宣に仕ふ子彦八郎父の業を襲て亦紀侯に仕ふ（本朝武藝小傳）

アリマ モリザウ 在間守三 陸軍砲兵中尉なり三重縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや野戰砲兵第十八聯隊附として從軍し八月廿日清國盛京省香河甸西南方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリマ ヤマトノカミ 有馬大和守 有馬流劍術の祖なり一名は乾信、飯篠長威の門人松本政信に從て其正傳神道流の刀槍を學ふ後世此傳を稱し（武術流派錄）

アリマ ヨシズミ 有馬義純 肥前の武族なり本名鎭純姓は藤原氏、伊豫掾純友の後胤なり純友の子諸純父と俱に謀反して死す諸純の子直純敦に過ひて遠江權守に任す直純六世の孫晴隆に二子あり兄を經澄といふ將軍實朝に仕へ城を有馬に築き初て有馬と稱す經澄九世の孫貴純大内義隆に屬し近境を抄略し威武稍々張る孫晴純に至て將軍義晴の相伴衆に列す六郡の主となり大友宗麟と戰ひて勝たず義直其の子義純皆相伴衆となる是時宗麟と連和し龍造寺隆信と戰ひ敗れて而て又之と和し義純の女を隆信の子政家に妻す義純隆信の暴戾を憎み島津義久と通ず隆信怒て兵を遣して之を攻む義久之を援ひ其兵を將として島津家久と島原に戰ひて死す十五年夏秀吉の後を繼ぐ（野史）

アリマ ヨリタフ 有馬頼永 久留米藩第十世の城主なり幼名彌作、頼德の第四子、天保元年年九歲にて世子となり江戸芝三田の邸に移る性聰明至孝學和漢に通じ能れて詩文に長ず疎に馬風に文武に志し學和漢に通じ能れて詩文に長ず疎に馬劍術の如きは最も妙所を極め近士の其技を專らにする者と雖も或は公の右に出つること能はざりしといふ天保五年九月將軍德川家齊に謁し同年十二月從四位下侍從に叙せらる十二年公年二十、頼德病あり公代りて一藩に關り政を視る愼默自修して一意父の命を奉し敢て一事も專らにせず公博く交を當時の名士及び世子に納れ特に松平肥前守齊正、松平土佐守豐熙、薩州の世子修理大夫齊彬に親む嘗て葛飾の世子戶の齊昭肥前の齊正の如きは實に稱世の英傑にして予かも及ふ所に非ずれども予か期する所は此兩君に止らすと詩を賦して曰く賢主四方今在不東西唯聽常肥侯中興志銳難堪惑所願何曾期此儲後肥前侯來訪し偶々此の詩の机上に在るを期讀し賞して曰く是れ絶唱なり願くは我に賜へと公曰く是れ君に示すべきものに非ずと

アリマ リャウキフ 有馬涼及（一に了及に作る）京師の醫なり名は存庵涼及は其の號、又臥雲と號す性安逸不羈にして醫術に精し嘗て其侯の招に應じ往て其の疾を療す留まること數日請ふて曰く老夫寂寞に堪へず請ふ侍女を借らん侯乃麗姝二人を擇て其の使令に充つ涼及大に喜び夜に至れば左右に置きて其の間に臥す然れ共亂に及ばず歸るに臨んで請ふて二女を得既にして得る所の金を出して衣裝を作り以て嫁せむ嘗て後水尾帝不豫なり日を累ねて益〻劇し乃涼及を徵して診せしむ涼及曰く聖病極めて重し然れども臣能相爭ひたるも肥前侯深く愛に寵めて終に返さず共に一笑に付し去る其交情の莫逆にして落落なること此の如し天保十三年春東觀す同十五年四月頼德薨ず六月封を襲ふ是時に當り外國船我近海に出沒して物情惚然西海の諸藩專ら軍備を修む同年七月公大僉の令を江戸の邸内に布き自謂らく諸士に殿正なる僉約を行はしめんと欲せば先づ近習側侍の者をして堅く之を守らしめざるべからず近侍をして之を守らしめんと欲せば先づ後房より始めざるべからず而て其本は予と夫人とにありと在京の諸士は今年を緩うし來年より必す綿服を著し婦人の飾具に金銀鬼甲等を廢すべき旨を令す因て綿服に紋を染めて殿女にたまひ公朝から麻木綿の衣裳古き上下の肩衣を用ひ又夫人晴着は常に綿服を用ひ飾具は皆木製又は竹製に漆ぜし物なり公又夫人公子と飲食物を同うし其品至て麁薄なり藩士既に此の如し數月にして江戸邸内盛く賞素の風に趨る此事久留米に聞え園境の士民皆振起して一冒の令一片の書未だ出てざるに人を相勵み崇儉禁奢の心を興せり弘化二年六月久留米城に入る道中の行裝亦儉令に本づく同年十月に至り封内に大僉令を施行し十一月治財の方法を措置して國用の定準を立て堅年春武備を修むるの命を出す其制大に見るべきものあり國内民庶の公を欣戴尊崇するも恰も神の如く入封秋冬の交より民間に殿樣祭と唱へ農夫相會して公の假席を設け酒食を獻し萬歲を祝せしことあり弘化三年七月三日久留米に薨す享年二十五歲城下の菩堤所なる江南山梅林寺に葬り謚して義源院殿といふ詩集あり題して思銀齋遺稿と云ふ（野崎教景惑書淚餘、思銀齋遺稿）

アリマ リャウヂ 有馬涼及（一に了及に作る）京師の醫なり名は存庵涼及は其の號、又臥雲と號す性安逸不羈にして醫術に精し嘗て其侯の招に應じ往て其の疾を療す留まること數日請ふて曰く老夫寂寞に堪へず請ふ侍女を借らん侯乃麗姝二人を擇て其の使令に充つ涼及大に喜び夜に至れば左右に置きて其の間に臥す然れ共亂に及ばず歸るに臨んで請ふて二女を得既にして得る所の金を出して衣裝を作り以て嫁せむ嘗て後水尾帝不豫なり日を累ねて益〻劇し乃涼及を徵して診せしむ涼及曰く聖病極めて重し然れども臣能

く之を癒さんと配剤日ならずして癒ゆ功を以て擢られて侍藥となり法印に叙せらる一日召さる時に涼及客と圍碁す使者數〻促せども起たず因て不敬の罪を以て逐はる後幾ばくもなくして赦さる嘗て一日嵯峨に適く途に大櫻樹の花方に開くを瞻數金を以て購ひて家に移さしむ櫻樹庭に横たはりて植る能はず役夫相視て噴き たり涼及欣然として曰く結く之を舍け臥して之を觀んと其の曠達なること此の如し傍ら茶事を好む元祿十四年十二月七日歿す年六十九涼及に三子あり業を繼ぎて皆な父の稱を冒ふ其の一人家貧にして衣なし然れども蕩逸にして拘はらず人或は招けば乃裸體にて籃輿に乘じて往く常に花街に遊び宴樂日を經て歸らず然れ共始終傷寒論を手にして毎紙爛るゝに至る又た名護屋玄醫と時を同うするものあり相ひ共に名聲を爭ふ涼及老いて聾なり玄醫病みて聾なり互に聾聾を以て相ひ詣る一日病者來りて診を乞ふ涼及曰く此の如き病狀は尤も聾の能くする所、汝ち試に往きて治を請へ汝の病は耳に在り彼觀察此に及ばずんば其の術を得ざるなり吾乃ち之を治ぜんと病者其の言に從ふ玄醫診し畢りて曰く病候耳に在りと之れに藥を與ふ涼及聞て曰く意はざりき夫の聾此の如き技あらんとは（皇國名醫傳、近世叢語、近世畸人傳、茶人系傳全集）

アリマロ アリマ ワウジ 在滿「カダアリマロ」 有間皇子 孝德天皇の皇子なり母は皇妃小足媛、皇子性黠猾、齊明帝の時非望を抱き帝を欺き奉て牟婁の溫泉に幸せしめ其の虛に乘じて大臣蘇我赤兄と事を謀んとを議す適〻皇子の椅脚故なくして折る以て不祥とし互に盟ひて止む而して其の夜赤兄人を遣はして皇子の第を圍み使を牟婁に馳せて之を以聞し遂に皇子を執へて行在に送る皇太子面り叛狀を問ふ皇子答へて曰く唯天と赤兄と知る我は知らずと遂に死を藤白坂に賜はる時に年十九（大日本史）

アリミチ シンワウ 有道親王 貞敬親王の子也享和二年六月生る文化五年二月光格帝に養はれ尊眞入道親王の弟子となる八年九月親王となる九年三月青蓮院に入りて剃髮し名を尊寶と改め戒を尊眞に受く文政十二年十月業を受けて瀧頂す十一月二品に叙し十二月天台座主に補す一身阿闍梨となる天保三年九月座主を辭し尋て薨す年廿一蓮華藏院と號す（野史）

アリミツ 有光 山城粟田口の刀匠にして櫛笥に住す有國の門人建保年間の人なり或は云ふ國久の子にして弘長年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 大和當麻の刀匠にして有俊の子正和年間の人なり或は云應永年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有綱の子寬仁年間の人或は云治曆年間と又有氏の子永承年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆小鴨の刀匠にして眞吉の子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云五郎左衛門と稱す或は兼光の子又は二世有光は長船に住す嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして應仁年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 豐前宇佐の刀匠にして亦た豐後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 藤原姓備前長船の刀匠にして子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠二世有光は伯耆に住す應永比の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 豐前宇佐の刀匠にして亦た豐後の有光の子文明應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして應永年間の人なり或は云五郎左衛門と稱す或は兼光の子又は二世有光は長船に住す嘉吉年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして應仁年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 豐前宇佐の刀匠にして亦た豐後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 山城粟田口の刀匠にして櫛笥に住す有國の門人建保年間の人なり或は云ふ國久の子にして弘長年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有俊の子正和年間の人なり或は云應永年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有綱の子寬仁年間の人或は云治曆年間と又有氏の子永承年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆小鴨の刀匠にして眞吉の子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 藤原姓備前長船の刀匠にして子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 山城粟田口の刀匠にして櫛笥に住す有國の門人建保年間の人なり或は云ふ國久の子にして弘長年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有綱の子寬仁年間の人或は云治曆年間と又有氏の子永承年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆小鴨の刀匠にして眞吉の子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 藤原姓備前長船の刀匠にして子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 山城粟田口の刀匠にして櫛笥に住す有國の門人建保年間の人なり或は云ふ國久の子にして弘長年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有綱の子寬仁年間の人或は云治曆年間と又有氏の子永承年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆小鴨の刀匠にして眞吉の子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 藤原姓備前長船の刀匠にして子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 山城粟田口の刀匠にして櫛笥に住す有國の門人建保年間の人なり或は云ふ國久の子にして弘長年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 河內の刀匠にして有綱の子寬仁年間の人或は云治曆年間と又有氏の子永承年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆小鴨の刀匠にして眞吉の子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 伯耆の刀匠にして時直の子應永正長年間の人也（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 有光 備前長船の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶備考）

アリミツ 在光 備前長船の刀匠にして新三郎兼安の子とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 出雲守と稱す備前長船の刀匠後に住す正應年間の人なり（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリミツ 在光 藤原姓備前長船の刀匠にして子正應年間の人なり或は云應安年間の人と（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

アリムネ 有宗 伯耆の刀匠にして有國の子長治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリムネ 有宗 備前の刀匠にして文和延文年間の人或は云長船に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリムネ アキラ 有村晃 「コセアリムネ」 陸軍歩兵少佐なり鹿兒島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第七師團歩兵第二十五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍し同年赤坂山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

アリムラ コウ 有村宏 薩軍歩兵少尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第六師團歩兵第二十三聯隊附として出征し八月三十一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリムラ ヂザエモン 有村治左衛門 薩州の士なり名は兼治（一に兼清に作る）畢人の次子劔法を善くし廐布十番に場を開て弟子を教授す嘗て水戸に寓して烈公の爲に知遇せらる烈公井伊直弼を怒り金子孫次郎等直弼を刺さんとするに際り金子の勸誘に因りて同盟をなし萬延元年三月三日を以て直弼を櫻田門外に要し奥中より曳出して其の首を斬る敵あり背より兼治の臂を擊つ兼治之を斬り首を提げ高吟して去る行くこと幾ならず重創歩し難きを以て神田橋內酒井侯邸番に於て屠腹して死す明治三十五年十一月正五位を贈る（今日鈔、振氣嚢、愛國偉績）

アリムラ ユウスケ 有村雄助 勤王家なり肆は兼武薩摩の藩士にして性慷慨憂國の志篤し安政六年藩士岩下佐次右衛門大久保市藏等と俱に藩を出で水戸の志士と交ひり國政改革の策を廻らす萬延元年水戸の金子孫二郎高橋多一郎と議し壯士をして大老井伊直弼を刺さしめんと部署既に定るや雄助及び多一郎孫二郎は直に關西に赴き別に事を舉げんとして密に議を決し多一郎父子は木曾路より雄助及び孫二郎は東海道より出征旅順攻圍軍に屬し同年十一月廿六日東鶴冠山北砲臺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリムネ 有宗 伯耆の刀匠にして有國の子長治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリムネ 有宗 備前の刀匠にして文和延文年間の人或は云長船に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリムネ アキラ 有村晃 「コセアリムネ」 陸軍歩兵少佐なり鹿兒島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第七師團歩兵第二十五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍し同年赤坂山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

アリムラ コウ 有村宏 薩軍歩兵少尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第六師團歩兵第二十三聯隊附として出征し八月三十一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリムラ ヂザエモン 有村治左衛門 薩州の士なり名は兼治（一に兼清に作る）畢人の次子劔法を善くし廐布十番に場を開て弟子を教授す嘗て水戸に寓して烈公の爲に知遇せらる烈公井伊直弼を怒り金子孫次郎等直弼を刺さんとするに際り金子の勸誘に因りて同盟をなし萬延元年三月三日を以て直弼を櫻田門外に要し奥中より曳出して其の首を斬る敵あり背より兼治の臂を擊つ兼治之を斬り首を提げ高吟して去る行くこと幾ならず重創歩し難きを以て神田橋內酒井侯邸番に於て屠腹して死す明治三十五年十一月正五位を贈る（今日鈔、振氣嚢、愛國偉績）

アリムラ ユウスケ 有村雄助 勤王家なり肆は兼武薩摩の藩士にして性慷慨憂國の志篤し安政六年藩士岩下佐次右衛門大久保市藏等と俱に藩を出で水戸の志士と交ひり國政改革の策を廻らす萬延元年水戸の金子孫二郎高橋多一郎と議し壯士をして大老井伊直弼を刺さしめんと部署既に定るや雄助及び多一郎孫二郎は直に關西に赴き別に事を舉げんとして密に議を決し多一郎父子は木曾路より雄助及び孫二郎は東海道より

り畫夜兼行して京都に上る三月三日果して櫻田の變起れり幕吏餘黨を探偵すると最も嚴重にして追捕の命四方に下り嫌疑ある者は直に拘引せらる雄助は遂に伊勢四日市に於て本藩の爲めに捕へられ暫く藩邸に幽閉せられしが後藩の內命にて自刎して果つ明治三十五年特旨を以て從四位を贈らる（殉難錄稿）

アリモト 有元 山城粟田口の刀匠にして有國の三子五郎三郎と稱し京革堂前に住す建曆天福年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリモト 有元 河內の刀匠にして有光の子寬仁長元年間の人なり或は有國の子と云又有國の門人長久年間の人と又天喜比の人にして丹波にも住すと云ふ（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリモト 有元 陸奥舞艸の刀匠にして寬元年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリモト 有元 古刀の鍛工にして越中藤島の人なり亦加賀にも住す（古今鍛冶銘早見出）

アリモト キクヲ 有本菊雄 陸軍工兵少尉なり京都府出身にして明治三十七八年日露戰役起るや第十師團工兵第十大隊附として出征し卅八年九月廿五日清國盛京省双城子にて病に罹り北部馬石堡舍營病院に於て療養中十月二十三日死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリモリ モトキチ 有森元吉 海軍中佐なり薩岡山藩士たり明治二十七八年戰役には海軍大尉として輸送船監督の任務を帶びて戰地に出張す果進して海軍中佐に至る三十七年日露戰役起るや初瀋艦副長として出征し五月十五日旅順口附近に出動中機械水雷に罹りて沈沒し中佐亦之に殉ぜり年四十一戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

アリモリ 有盛 河內の刀匠にして有成の子永祿正曆年間の人なり或は治安年間の人後有成と更む或ひは天德年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

アリモリ 有盛 「下野の刀匠にして亦越後に住す拳盛の族にして時代詳ならず或は云應永年間の人なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリヤス 有安 古刀の鍛工にして遠江の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリヤス、アリユキ 有康「コセアリヤス」 有行「コセアリユキ」

アリユキ 有行 古刀の鍛工にして大和千手院の一派行吉の門人なり或は弘安年間の人にして有利の子と云ひ或は有利の門人本國豐後の人とも云又云仁平比の人にして後豐後峰莊に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

アリユキ 有行 河內の刀匠にして有正の子長曆延久年間の人なり或は有元の子或は有盛の門人とも云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有行 管次とも稱す遠江の刀匠にして平治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリユキ 有行 遠江の刀匠にして友行の子天福仁治年間の人なり或は云元安の子なりと（本朝鍛冶考）

アリユキ 有行 遠江の刀匠にして元安の子正長永享年間の人也（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリユキ 有行 近江の刀匠にして本國山城建保年間の人なり或は河內の有行と同人或は文永年間の人にして神次の子又は延文年間の人と云（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有行 陸奥の刀匠有正の子にして永延年間の人なり或は云長曆年間の人にして有正の父なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有行 伯耆大原の刀匠にして重永の門人貞觀仁和年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有行 備中の刀匠正恒の流にして建長文永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリユキ 有行 備中青江の刀匠にして次家の子貞應年間の人なり（本朝鍛冶考）

アリユキ 有行 備中の刀匠にして貞和の時次の子なり（本朝鍛冶考）

アリユキ 有行 備中の刀匠にして文永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有行 備中の刀匠にして應安比の人なり（古今鍛冶備考）

アリユキ 有行 豐後高田の刀匠にして助近の子行平の門人貞應年間の人なり或は熊谷直實の太刀の作者と云又子手院有行と同人なりと云（本朝鍛冶考）

アリユキ 有幸 山城粟田口の刀匠にして元弘年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリユキ 有幸 山城綾小路の刀匠にして定則の子正慶建武年間の人なり或は正安年間の人と云ふ（本朝鍛冶考）

アリユキ 有幸 大和の刀匠にして正元年間の人なり或は云ふ千手院の一派にして奈良に住す有幸郎と稱すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリヨ 有世 周防の刀匠にして元應年間の人清綱と同人なり（本朝鍛冶考）

アリヨシ 有吉 大和當麻の刀匠にして光友の子延慶年間の人なり或は正和文保間の人或は宋利の子なりと云ふ（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリヨシ 有吉 富田兵衛尉と稱す丹波宮田の刀匠にして天正文祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

アリヨシ 有吉 備後鞍山の刀匠にして應安年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリヨシ 有吉 備後三原の刀匠にして嘉慶年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

アリヨシ 有吉 或は在吉に作る阿波の刀匠にして永德年間の人或は云海府阿伽に住すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶銘早見出）

アリヨシ 有吉 藤原姓阿波守と稱す京堀河の刀匠にして國慶の門人寬永年間の人なり（古今鍛冶銘

早見出)

アリヨシ 在吉 阿波海府の刀匠有吉を看よ

アリヨシ クマジラウ 有吉熊次郎 勤王の志士なり山口藩士にして諱は瓦朋字は子德熊次郎と稱す幼時藩校明倫館に入り書を讀み勉勵人に過ぐ安政五年吉田松陰の門に入り交を高杉晋作其他藩内の志に結ぶ十一月松陰同志を糾合し將に京に上り開老間部侯を要擊せんとす熊次郎其謀に預る已にして上京の擧藩邏の沮抑する所となれり十二月松陰捕せられ野山獄に投ぜらるゝや熊次郎是より先き屢〻危冒するを以て俗論黨外叔某に命じて家に嚴囚せしむ故を以て松陰の近況を知らず友人某其由を告げて始めて之を知り愕然奔り出でゝ入江九一其他新輩と百方救護の術を謀ず而して事遂に諧はず熊次郎亦連坐して家に幽せらる松陰の歿後再び明倫館に入る文久元年高杉晋作と同じく江戸に遊び有備館に入る翌二年十一月晋作等と相議し横濱の夷館を燒夷せんとす世子之を聞き馬を馳せて留む事忠誠に出づるを以て即せられざりき藩主の命を承けて航海術を學び轉て京に上り學習院に候して國事を謀議す三年五月攘夷の詔天下に布く熊次郎久坂義助と相圖り八幡隊を山口に糾成す翌元治元年甲子の夏脱藩して竊に京師に入る此時國中有志の士將に藩主父子の寃を闕下に訴へんと遂に七月十九日の變起る而して長軍利あらず熊次郎義助寺島忠三郎弘勝之助等と鷹司邸に入り陳白する所ありしが敵已に四面を圍み砲火第を燒く義助等皆自殺す熊次郎適〻小瘡を患ひ頗る歩行に艱む是日病を力て出づ義助既に死し熊次郎其僕新吉を呼び戎衣を解き母に贈り永訣して高所に登り自ら觸死す時に年二十二明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる(甲子殉難士傳、殉難錄稿)

アンドウ タツゴラウ 安藤辰五郎 陸軍歩兵大尉なり東京の人明治三十三年五月北清拳匪の亂起るや機逃す可からずと爲し其家宅を寶却して私費留學に決し北京に赴き公使館匪徒の包圍を受くるに及び義勇隊長として防戰に力めしが七月六日未明敵の攻擊激烈なり八時に至り野砲を以て我防禦線を破壞す我兵之を狙擊するや敵は野砲を棄てゝ退却す乃ち之を奪取せんとして伊國兵は一齊射擊を爲すと共に突擊を試み我は英兵及び教民隊の壯丁等と共に敵兵に向ひ突擊せしも近づく能はず却て敵は銃眼によりて我を射擊すると頗る急なり此間大尉先頭に在りて踏兵を指揮したりしが遂に敵彈の爲めに胸部を貫通せられて即死す實性沈着にして勇敢人に對する極めて懇切なりしかば僅城邦人一同の敬服したるのみならず諸外國人も感服せりと云ふ後特旨を以て從五位を贈らる

アラヤ サク 新谷朔 陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にて明治三十七八年日露戰役に於て臨備役より召集せられ第十一師團歩兵第廿二聯隊附として從軍中廿八年三月三日清國盛京省五百半柒西北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アリヨシ ザウキ 有吉藏器 儒者なり名は以顯字は叔孝和介と稱す備前和氣郡の人、寶曆十三年、閑谷鄕黌の講學となる寛政四年閑谷奉行となり秩を銃士に遷す是に於て祭を革め廢を興し黌中觀を改む寛政十二年九月歿す年六十七藏器遺稿あり(行狀、續近世名家碑文集)

アリヨシ タツユキ 有吉立行 初め將監又四郎左衛門と稱す武藏守に除し細川藤孝忠興父子に仕へ忠勇を以て長岡氏を許され天正十七年五月一萬三千石を領知す慶長十二年十二月十四日歿す其子内膳貞道其子内膳貞之以下細川家歷代の國老たり

アリヨシ ナガアキ 有吉良明 攘夷家字兎に從ひ學ぶ師の再び獄に投するや良明懼に其弟子たる熊次郎と稱す長州藩士なり嘗て吉田松陰往て之を其明に告く良明謙然として家を出て衆と夜遁て臺政某々の家に到り松陰の罪名を問ふ因て又た罪を得、松陰東下の後國學に入る壬戌の歲高杉東行久坂通武等將に横濱の商館を燒んとするの事有り良明時に江戸に在り其の擧に與かる後終に俱に高輪の英公使館を燒く癸亥の歲諸子と京師に出て大に力を尊王の事に致す此歲八月禁門の變あり七廻四下す良明も亦諸子と共に國に歸り八幡隊を建つ其冬再び上京す明年甲子六月五日の變良明重圖を脫して速に國に歸り報す尋て又久坂等と脫走し天王山に到る七月十九日の戰鏖司公の邸に死す(防長正氣集)

アリヨリ 有依 古刀の鍛工にして大和の人なり(古今鍛冶銘早見出)

アリヨリ シンワウ 有賴親王 職仁親王の子なり享保十五年十一月生れ十八年八月中御門天皇の養子と爲り九月圓融房を繼ぎ元文五年十二月親王と爲る寛保五年五月房に入り髮を削りて名を觀仁と改め戒を尊鈷入道親王に受け道仁入道親王に從ひて業を受け寛延元年七月灌頂す後ち實曆三年七月二品に叙せられ尋で薨す時に歲二十四なり謚して後正法院と號す(野史)

アリヨシ ブレイ 有吉武禮 舊長州藩士にして明治十年四南役に於て一等少警部を以て別働隊第三旅團附として從軍中六月六日肥後國芦北郡長坂峠に於て戰死す

アリワウ 有王 俊寛僧都の僕なり主の流されて硫黄島に在るや其の敎されざるを憂び書を帶びて謫所を訪ふ俊寛故郷の音を聞て喜び且泣き遂に病て起たざるに至る有王看護の後其の死屍を火葬し骨を帶て京に歸り俊寛の女に告げて後高野の僧となる(源平盛衰記)

アリワウ 有王 古刀の鍛工にして年代住地を詳にせず或は云大和の人と(古今鍛冶銘早見出)

アリヰ シンザイ 有井進齋 儒者なり名は範平阿波德島の人、業を那波魚峯に受け又小出某に從て算術を修め其蘊奥を究む後ち巖本貴庵の門に入りて專ら經史を攻む明治七年長崎師範學校教官に拜し十四年陸軍參謀本部編纂課雇員と爲り十八年東京府師範學校兼中學校教官に拜す二十二年五月歿す年六十、(近世名家碑文續集)

アリヨカ ダウズキ 有岡道瑞 京都の茶人なり茶道を久田宗也に學ひて能くせり(茶人系傳全集)

アルガ アルガ シゲノブ 有賀(アリガに出したるもの多し) 通稱半彌文久元年重信及び岡見富次郎等十餘人と英人を東禪寺に襲ひ其の二人を傷つく衛吏之を禦く斃る死傷あり重信等二人之に死す餘皆逃散すと云ふ(近事記略)

アヰセイカン 阿井清閑 狩野派の畫人にして狩野安信の門人なり(扶桑畫人傳)

アヰハラ ムネマサ 藍原宗正 伯耆流の餌法を善くす相原是平の門人なり(武術流祖錄)

アヲイケ リンソウ 青池林宗 江戸の醫家なり松山侯の侍醫快庵の子名は盈、字は子遠、芳齋と號す初家學を受けて渡醫學を修め京阪の地に遊學す文化の初年東都に歸りて蘭學に志し乃譯官馬場佐十郎に天文臺に就きて之を學び杉田立卿、宇田川玄眞等と共に蘭方を以て一家を興せり而して林宗尤も力を究理學に用ひ格物綜凡の著あり是を我が國究理學の始めと爲す文政五年命を奉じて立卿と與に天文臺に就きて馬場氏譯する所の澄尼日本紀事を紹ぎて其の業を終へ十年又命を以て萬國地誌を譯し銀二十錠を賜はる後ち奥地志六十五卷を草し卷帙浩瀚なるを以て鑒めて七卷と爲し名けて奥地志略と稱す又格物綜凡中に就きて其の要を擇採し以て氣海觀瀾一書を著す後ち天保三年水戸侯に聘せられ醫員兼西學都譯と爲り四年二月疾を以て歿す時に歲五十九なり林宗資性沈靜泗默能く清苦に耐へ常に一室に獨坐して洋書を左右にし譯述を以て自ら娛まと爲す世の洋學を譏ずる者慨れ漢學の力なし林宗は然らず故に其の書皆秩然條理ありと云ふ林宗二男五女あり二男は共に弱死し二女は坪井信道及川本幸民に嫁すと云ふ(洋方醫傳、林宗碑陰)

アヲガヒ チャウベエ 青貝長兵衛 本姓詳ならず長崎の人なり螺鈿を巧にし殊に青貝嵌製の技に長せり因て青貝を氏とす是より先我國の螺鈿は皆鸚鵡螺および薩摩の夜久島の青螺を嵌入す長兵衛巧を支那人に受けて始めて青貝を嵌製するに至る後人その器物を稱して青貝細工或は青貝摺といふ長兵衛人となり剛介にして讀書を好み造工の次と雖手に卷を離てず寬永頃の人なりし(長崎先民傳、訪谷師傳)

アヲキ イウガ 青木遊雅 京都長寺勝圓寺の中管開山なり傍ら生花を善くし宵山流より出て別に宵木流を立てり茶に殿内の奥儀を窮て茶花同道の宗匠たり明治三十八年二月四日示寂す示寂の前日筆を召して明日午前十時遷化すべきを告げ且つ後事を托したるが果して其言の如くなりしと云ふ年六十九

アヲキ エイシャウ 青木永章 肥前長崎の人なり以て時に稱せらる(鑒定便覽)

アヲキ オキカツ 青木興勝 福岡藩の闇學者にして字は定遠一名万字は季方通稱次右衛門五龍山人と號す百野嘉内の子にして青木武衛の養子となる初め四學問所指南加勢たりしが學廢せられて罷む後買物奉行となり長崎に祗役し蘭書を學ふ寛政十二年職を免し闇學師となる本藩に蘭書を讀む此人を始とす文化元年病を以て職を辭し遠村に閑居す九年六月歿す識五十一所著答問十策、蠻人白狀解、南海杞聞あり(日本教育史資料)

アヲキ オリノスケ 青木織之助 陸軍歩兵中尉なり石川縣の出身にして明治二十七年日清戰役に於て第七聯隊第五中隊附として出征中病に罹り二月十一日海城舍營病院に於て死去す

アヲキ カウジ 青木好次 海軍大機關士なり東京府の出身なり夙に海軍機備校に學ぶ明治二十七八年戰役に際し内田千代田艦長に請ひ其從員となりて功あり勳八等に叙せらる内田艦長深く之を賞し其庇護を常に一室に獨坐して洋書を左右にし譯述を以て自ら娛まと爲す世の洋學を譏ずる者慨れ漢學の力なし林宗は然らず故に其の書皆秩然條理ありと云ふ林宗二男五女あり二男は共に弱死し二女は坪井信道及川本幸民に嫁すと云ふ(洋方醫傳、林宗碑陰)

アヲキ カウビン 青木行敏 京都の官人詳ならず長崎の人なり螺鈿を巧にし殊に青貝嵌製の技に長せり因て青貝を氏とす是より先我國の螺鈿は皆鸚鵡螺および薩摩の夜久島の青螺を嵌入す長兵衛巧を支那人に受けて始めて青貝を嵌製するに至る後人その器物を稱して青貝細工或は青貝摺といふ長兵衛人となり剛介にして讀書を好み造工の次と雖手に卷を離てず寬永頃の人なりし(長崎先民傳、訪谷師傳)

アヲキ カウベイ 青木幸平 陸軍歩兵中尉なり富山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第十六聯隊附として出征し八月十九日清國盛京省觀唄北方角面堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヲキ カズシゲ 青木一重 武族なり初字所左衛門重直の後裔濃の人なり今川氏眞に仕へ新坂の戰槍を換へて首級を獲たり氏眞尋で後ち掛川に幽居す東照公嘗て一重の名を聞き召して仕へしむ扇冠にして姉川に從て眞柄直隆と槍を交へ之れを獲たり味方原の後に高天神を守衛す後ち丹羽長秀に屬す天正二年の後ち豐臣秀吉に仕へ擢れて巨銃士十四人軍使に列す又遷て七隊の長と爲る十六年從五位下に叙し民部少輔と稱す大阪兵起るに及び一面を守備す元和元年二月一重有府秀賴の命を受け大藏稱局及び正榮尼と駿府に赴く歸途京師に來るに及び二姉大阪に還る一重獨り京師に拘せらる板倉勝重命を受け一重を旅舍に寓し人を遣して警衛す大阪陷るに聞き薙髮して宗佐と號す後召仕はれて攝津廐田一萬十九石餘を食む寬永五年八月卒す年七十八法名華屋令象梅隣院と號す(野史)

アヲキ カズノリ 青木一矩 越前北莊の城主なり紀伊守と稱す初め德川家康に屬す後ち子右衛門佐と並に石田三成に黨す庚子の秋城に據る前田利長師四萬を帥ゐて願はざる者を攻む會〻大谷吉隆兵を率ゐて北陸を徇へ敦賀城に居る一矩之を聞き人を遣し謂て曰く利長將に大聖寺を攻めんとす請ふ來り援はんことを如し然らずんば則ち北陸悉く彼れの有とならん吉隆驚愕す八月三日敦賀を發して歸江に抵る而して旅を整へ將に府中城を陷れんとす一矩復た人を馳せて謂て曰く大聖寺既に陷り宗永父子首を授く來援如し遲緩せば我亦た保せずと吉隆乃ち兵三千を率ゐて馳せ到る利長已に師を班す會〻三成の速夫來て曰く東師已に到る速に關原に會す可しと吉隆即ち輕ず利長一矩の反覆を怒り兵を督して北莊に迫る會〻關ケ原の敗聞至る一矩大に恐れ降を乞ひ任子を送る利長乃ち其降を受けて南下す一矩尋で卒す利長爲めに哀免を家康に乞ふ聽かれず十月反覆に坐し邑除せらる(野史)

アヲキ カネイヘ 青木金家 肥後の金工なり重兵衛と稱し鐵仁と號す父の名は亦金家山城に住す兵術に通ず天正中の人(鑒定便覽)

アヲキ カンザン 青木金山 儒者なり名は睿暢字は士條別に無夢道人又は無不可齋と號す佐渡の人山本北山の門人にして書畫亦た氣韻あり山林餘響七卷を著す文政元年九月九日江戸に病歿す年三十八(續近世名家碑文集)

アヲキ キンソン 青木錦村 儒者なり名

は先字は思孝上毛高崎の人寺門靜軒の門人明治七年五月十五日卒す年五十八（續墓所一覽）

アヨキ　ゲンガイ　青木元愷　儒者なり名は駿善之丞と稱す南齋と號す父名は重熙世〻彦根侯に仕へ龜井元鳳及び古賀侗菴に學び又兵學に通ず文政十年七月十一日歿す年卅三（古賀煜撰墓碑）

アヨキ　ゲンジラウ　青木源次郎　陸軍歩兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第三十三聯隊附として出征し卅八年三月七日清國盛京省李官屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヨキ　コンヤウ　青木昆陽　德川幕府の儒者なり名は敦書字は厚甫文藏と稱す昆陽は其の號、江戸の産、京師に至りて伊藤東涯に學び一に實學を貴とび經義文章に於ては必しも究思せず故に堀川の徒に類せざるもの〻若しと然れども始より他師あるに非ず人或は言ふ文藏は伸村暢齋に學び後ち淺見絅齋を師とすと此れ同名異人にして昆陽に非ざるなり昆陽は大岡忠相の知を得て官庫の書を觀るを許さる元文四年遂に幕府の命を拜して典籍の事を管す後ち屢々旨を奉じて諸州に到り梵刹民家に投じ其の舊記中國家の事を徵證するに足るべきものを索めて進呈す其の著述する所亦上進せざるなし延享甲子紅葉山の火番に擢げられ尋で評定所の儒者に轉じ終に遷りて書物奉行となる昆陽嘗て遠島流罪のもの往々に餓死するを見嘆じて曰く凡罪あり天年を終らしむるに在るのみ然るに諸島五穀少く常に海産木實を以て食に充つ故に往々餓死を免る能はず豈亦痛ましからずや綴び種藝の地と雖ども凶年に遭へば民菜色なき能はず意ふに百穀の外穀に當つべきものは蕎麥に如くは莫し と官に陳じ種子を薩摩に求め試に之を官の墾荒中に種うるに莽衍甚速なり是に於て蕎麥考一卷を著はして其の培植の法を演ぶ之を上梓し種子を併せて諸州に配賦す未だ數年を出でざるに處として種ふざるなきに至れり今に至り上下之を便とす歲登らずと雖も民の遺かに餓えざるは實に昆陽の惠なり其の墓に題して甘薯先生之墓と云ふも此の故を以てなり昆陽の時に當て和蘭の學未だ開けず昆陽獨り以爲らく其の說に於て必ず收用すべきものあらんと是に於て或は長崎に往きて蘭者に質し或は博く其書に考へ遂に粗〻了會するを得後世西學の隆盛なるは時勢の然らしむる所と雖ども亦一は昆陽に本かざるを得ず大槻玄澤の六物新志に曰く和蘭學之一途草創於白石新井先生、中興於昆陽青木先生、休明於蘭化前野先生、隆盛於鷄齋杉田先生、故近時從事於斯者、皆莫し不し源源於四先生と昆陽博學洽聞にして著書甚だ富む經濟要前集、同後集、同續集、官職畧記、刑法國字譯、昆陽漫錄、同續錄、國家貪貧畧、國家金銀錢譜、同續、答問小錄、奉使小錄、對客夜話、夜話小錄、一夕話、續一夕話、雜集、郡名考、和蘭勸酒歌解、和蘭櫻木一角說、長崎聞書和蘭文字略考、和蘭語譯、同後集、草廬雜談、續草廬雜談、秋夜談、職原抄注、和蘭貨幣考、雜集、明官畧記、官職畧記等あり明治四十一年十一月十五日正四位を贈らる（先哲叢談、近代名家著述目錄、闇學事始）

アヨキ　サキヤウ　青木左京（初代）織部流の茶人なり亦古田齋宮の門人除齋庵と號す

アヨキ　サキヤウ　青木左京（二代）織部流の茶人なり亦拂塵と號す茶道を四世古田齋宮に學びて能くせり（茶人系傳全集）

アヨキ　シンザブラウ　青木新三郎　勤王の志士なり諱は秀枝家世〻加賀藩の料理人たり弘化中新三郎其世子に從ひ江戸に役す幼より皇學に志し國歌を學ぶ江戸在住の日毎に橘守部に從ひ之を修む時に天下漸く多事幕府東國の諸侯に命じて蝦夷地を守しむ新三郎其未だ開拓の業に着手するに及ばざるを見て北川宴之作等と相謀り藩に勸めて其地を幕府に乞ひ開墾せしめんとす許さず既にして新三郎藩に歸り永太郎等と偽戰し勤王の說を唱ふ文久三か建議す藩未だ之を修む時に天下漸く多年の夏將軍遂に京師より歸東し東北の諸侯を召し特に藩世子慶益を召して大に擧用せんとの內諭あり藩議之に應ぜんとす新三郎等同志の士之を聞き極力之が抵止に盡力し遂に其行を止む既にして同年冬朝廷藩主を召して禁闕の警衛に任ずしむ且つ曰く若し疾あらば世子代りて上れと世子慇懃將に上京國事に盡さんとす諭議また之を沮止す新三郎同志と其非を論辯し世子の素志を遂ぜしめんとし百方奔走遂に上京の事決す元治元年五月新三郎世子附を以て上京し長因諸藩士と交り君側を清むるの議に與りしも藩東の混雜する所となり決行せられざるを以て一日不破富太郎等と共に藩邸に出て激論痛議死を以て勤志を貫かんとを勸む世子爲めに力を得て其議に贊し決行せんとせしが老臣等大に恐れ意見を金澤に通じ之を遮止す因て長藩士と相約し七月十九日世子を輔け京都を去れり是日長藩兵入京し會藩兵の爲めに敗られ幕府又世子の退京を責め藩亦急使を馳せて之を尤む遂に世子を譴懲に處せられ新三郎は途中より同藩士篠原某に預けられしが罪定まり堂上方に立入り又諸藩の士と交りて陰謀を企て加ふるに鐵路主命を矯めて長藩士小島彌十郎を助けたる罪重しとして八月十九日自盡を命ぜらる時に年三十二明治元年大赦に會ひ三年金澤藩祭祀若干を賜はる二十四年十二月特旨を以て正五位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

アヨキ　シンシュク　青木神叔　神道家なり又俳諧を北村季吟に學ぶ元祿頃東都石町に住す眷て句あり（「我顏やしくれてのぼる井戸の中」（俳林小傳）

アヨキ　シンベエ　青木新兵衛　岡野左內梁生等と共に上杉氏の臣なりしが上杉氏の衰るや新兵衛祿を沒收せられ去つて結城秀康に仕へ武勇を著はせり曾て伊達正宗秀康に謁て曰く前年會津口の戰に於て最も非常の功名を爲したる者は新兵衛と永井善右衛門なり然ども新兵衛の功は却て其の上に在りと秀康愈〻之を愛遇したりと云ふ

アヨキ　ジャウウン　青木常雲　江戸の金工なり刀劍の裝飾に名あり四郎左衛門と稱す後藤榮乘と同時の人なり（萬寶全書）

アヨキ　ジャウエモン　青木常右衛門　鐵人二刀流の劍客なり名は金家（一に曰く名は秀直）宮本武藏の門人、鐵人と號す（アヲキカネイ〻參看）

アヨキ　シュクヤ　青木夙夜　醫家なり本姓は餘、韓國章王の後ち名は俊明字は大初春塘又八岳と號す醫法を池大雅に學び特に山水に巧みなり大雅歿する後其の舊跡たる東山の大雅堂に住す門を杜ち傳書して口を糊す草榻除かず蹠庭掃はざるも殆ど十年應舉

呉春等と時み同うす（古今雅俗石亭談、扶桑畸人傳、名家全書）

アヨキ　シュンショウ　青木春證　京都の俳人なり後ち貞悟と稱す印雪軒、素心堂、之平翁等の別號あり松江維舟の門人、正德五年七月廿日歿す年六十三（俳家奇人譚、俳林小傳、名人忌辰錄）

アヨキ　ジョスキ　青木如水　茶人なり宗佐に茶道を學びて能くせり京都の人（茶人系傳全集）

アヨキ　スケアキ　青木亮明　陸軍歩兵中尉なり千葉縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや後備にて召集され後備歩兵第一聯隊附として出征し同年九月二十日清國盛京省小東溝東南二八高地に於て戰死戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヨキ　スミマス　青木純增　熊本藩士にして熊本縣八等扈奉職中明治十年二月二十二日命を奉じ軍艦を百貫石に迎ふ途中賊の爲に殺さる

アヨキ　ソウベエ　青木宗兵衛　世〻京都五條坂の陶工にして禁中の調度を調製せり金花山と稱す（陶工傳統志）

アヨキ　ソウホウ　青木宗鳳（初代）遠州流の茶人なり山田大有に學びて能くせり浪花に住す薙髮して凡島と名く紫雲庵水蒲一統子と號す明和二年十二月歿す年七十六（茶人系傳全集）

アヨキ　ソウホウ　青木宗鳳（二代）遠州流の茶人なり初代宗鳳の男にして父に茶法を受く初めの名は宗舒新柳軒又は溫故齋と號す寛政五年七月歿す年六十四（茶人系傳全集）

アヨキ　ソウホウ　青木宗鳳（三代）遠州流の茶人なり初代宗鳳等と同族なるや未だ詳らかならず茶道を青木新柳軒に受けて能くせり（茶人系傳全集）

アヨキ　タツザウ　青木達三　陸軍工兵少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ近衛後備工兵第一中隊附として出征旅順攻圍軍に屬し十二月三日歪頭山に於て戰死戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヨキ　トウアン　青木東菴「ヨゲンチャウ」

アヨキ　トクホウ　青木德峰　學者にして近江國滋賀郡膳所の商家の子なり名は喜字は字角、幼にして穎悟奇童と稱せらる初め京都に遊び後江戸に來りて山本北山に學び詩文に熟通し諸家の書に涉りまた和歌を好み風月を以て生涯となす世人芝翁と稱す明和六年(P)八月十三日歿す齡七十（古今諸家人物志）

アヨキ　トシザウ　青木俊造　陸軍歩兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十三年北清拳匪の亂に於て第五師團歩兵第十一聯隊附として出征し同年七月十三日天津城總攻擊の際戰死す戰功を以て特に從五位を贈らる

アヨキ　トシユキ　青木敏行　陸軍歩兵少佐なり福井縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第十聯隊附として出征し六月十六日清國遼東省盤列嶺東北高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

アヨキ　ナガアキラ　青木永章「アヨキ　エイシャウ」

アヨキ　ナガヒロ　青木永弘　肥前國長崎諏訪社の神官なり主計頭に任ぜらる國周防守と齊しく神學を以て聞ゆ或時意外の事に坐せられて閉居す後赦されて京師に出て、隱遁す櫻町帝其の名を聞き勅して召して神代卷を講ぜしめ旨に合ひ宸翰を賜ふ是に於て之を奉持して四方に周遊す富士山に登りし歌に云く「ふしのねを登りて見れば敷たへの枕に結ぶ草たにもなし」と享保元年正月十日歿す（近世畸人傳、鑑定便覽）

アヨキ　ハチラウ　青木八郎　陸軍歩兵少佐なり福井縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び第七師團歩兵第二十六聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中同年十一月廿八日赤坂山に於て死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

アヨキ　ヒデエ　青木秀枝　通稱新三郎蛙は丹治比氏金澤藩の料理人青木義登の長子なり弘化中料理人となり俸七口を給せらる俟及び世子に從ひ屢江戸に役す肚より國學を好み其江戸にあるや藩守部に就き歌道を修む又兼て武技を善くす平生勤王の志を抱き福岡義比小川忠篤永原好和不破友風等と友とし善し元治元年三月上書して勤王の大義を論陳す五月世子に扈して入京し不破友風大野木克敏と共に長州等諸藩勤王有志の士と交り大に爲す所あらしめんと欲す七月十九日の變世子京師を去るや秀枝亦從て還り加賀小松に至る建東藩命を以て來て之を捕へ金澤に檻致し篠原忠篤の耶に拘す十月十九日遂に死を賜ふ時に年三十二明治二年十月藩秀枝の罪を宥し三年特に祭資料若干を其家に賜ふ明治二十四年朝廷其勤王殉難の節を追賞し之を靖國神社に合祀し尋て十二月特旨を以て正五位を贈らる

マヨキ　ボクベイ　青木木米「ボクベイヲウ」

アヨキ　ヤスヒロ　青木保弘　熊本藩士にして熊本縣中屬奉職中明治九年十月二十四日夜賊徒の襲擊を受け即死す

アヨキ　ヨサブラウ　青木與三郎　勤王の志士なり諱は良晴肥前國養父郡高田村に生る其地對馬藩領にして與三郎も用ゐられて其家臣に列す元治元年甲子の正月藩主の命を奉じ防州三田尻に行き七卿の護衛を勤む同六月忠勇隊に列し東上して天王山に屯す七月十九日の變京師に進入し鷹司邸の門內に戰死す時に年二十九戰中遺骸を失す友人某天王山に遣す所の襯衣を驗らし之を檢するに其左衽に對州藩青木良晴の七字を記せり藩主其忠死を悼み明治三年七月田代驛の劍塚に碑石を建て後山口藩にても京師東山に招魂場を設け石碑を立てゝ戰死の徒を弔ふ良晴亦之に與る明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

アヨキ　リウホウ　青木龍峰　江戸の書家にして名は忠字は羊卿通稱雄五郎福井の藩士なり文久頃の人（廣益諸家人名錄）

アヨキ　ロスキ　青木鷺水　京師の俳人なり名は五者自椿園歌仙堂又三者軒と號す雛屋立圃の門人、享保十八年三月歿す年七十六著述俳諧新式、俳諧入重垣、其の他戲書數種あり（俳林小傳）

アヨチ　カライ　青地可賴　京師の俳人なり安原貞室か門人（俳林小傳）

アヨチ　セイケン　青地齊賢　加州侯の臣なり通稱藏人字は伯敎讓水又兼山と號す本姓本多實は

佐渡氏人と爲り篤實にして決斷あり好みて經術を學ふ室鳩巣常に伯父と稱し國士無双となす久しく劇職に在り謫書其の前に塡委すれども手に隨て判決すること流るゝが如し著はす所兼山秘笈あり(燕齋風雅)

アヨチ リンソウ 青地林宗「アヨイケリンソウ」

アヨチ レイカン 青地禮幹 加州侯の臣なり藤大夫と稱す居る處仁智樓と名く字は貞叔、伯汝の弟なり好て書を讀み手に卷を釋かず初め羽黒養潛の寓館に至り弟子の禮を修す養潛歸國の後再び室鳩巣に從ひ窮理學を研究し粗其の蘊奥に通し又恒に見聞する所苟くも國家典故に裨益あれば巨細となく記して後來稽査の引徵となす著す所浚新文集三卷あり(燕齋風雅)

アヨト フヂツナ 青砥藤綱 上總の人、父を藤満と曰ふ初め北條時頼鶴岡に詣りて齋宿す夢に神之に告げて曰く汝治を致さんと欲ば須らく青砥藤綱を用ふべしと既にして覺む明日書を下して藤綱を徵し食邑數所を給す藤綱怪みて其の故を問ふ即ち告ぐるに實を以てす藤綱辭して曰く佛經に實相なき譬へて曰く夢幻泡影の如しと今夢を以て僕を用ふ他日又夢を以て僕を斬らんか夫れ功なくして賞を受く是を國賊と謂ふ臣未だ微効だもあらず敢て當らずと時頼其の言を賢なりとして益々敬異奏して左衛門尉を授け引付衆と爲す人德宗と田を爭ふ者あり其の辭直而れ共衆感な時頼を憚り田を以て德宗の領に屬す時に北條氏の家睿を稱して德宗と曰ふ藤綱其の事を嚴議し其田を以て本主に歸す本主喜びて錢三百貫を裏にし密に藤綱の廐内に置きて去る藤綱怒りて曰く設を斷じて平か持す豈に特に汝が爲にせんや苟も我を以て公平とせんか相摸殿宜しく賞奬せらるべし汝の貨焉ぞ我を汚すを得んやと金を以て其の家に還す嘗て夜行て滑川を過ぎ誤りて十錢を水に墜す藤綱遽に從者に命じて五十錢を以て炬を買ひ水を照らし錢を搜りて寛に之を得或ひと其の大を失して小を得るを嘲る藤綱聚蹙して曰く甚いかな子等の意を經世に用ひざる十錢少なり雖とも之を失へば則ち永く天下の貨を損ぜん五十錢は我れに損なりと雖も亦人に益す彼此六十錢其の利たる亦大ならずやと此論後世識者多し藤綱時頼及び時宗に歷仕して邑數十所を食む家財に富み而して立身清約衣服麁惡刀室髹ぜず出每に一人木刀を持して後に從ふ官を授くるに及びて應に衛府太刀を佩ぶべきに藤綱裝飾を爲さず只だ弦袋を加ふるのみ性施を好み入る所の俸給は悉く貧困に賑給す其の職に在る廉潔剛直にして權貴を憚らず是に於て姦吏迹を歛め人々自ら飾しむ一時風俗翕然として頓に改まる今に至りて鎌倉美績を誌ずる者或る時頼時宗を稱す蓋し藤綱補益する所多しといふ(大日本史)

アヨノ シュクゲン 青野叔元 は京師の人なり字は欽之源蔵と稱し後源左衛門と改む幼にして學に志し凡そ書として讀まざるなし最も史學を勤む而して調章を爲す喜ばず誇示する所の人あれば之を迂闊なりと謂つて顧みざる也延享の比博聞強識の名都下に播ち方さに水戸西山公の國史を編するや聞て之を召す仕ふること二十年寶永三年丙戌十二月十日病むて江戸府に終ふ歳五十有四女あり甫めて三歳夜するに臨み之を安藤爲實に託す爲實は乃ち同仕にして素と相好き者因て叔元を府下慈照院に葬るに臨て遺言し又同僚三宅嶷に銘せしむ吁二十一世の史浩なり一渉猟の雖しとする所而して叔元の學始て速水の編を取り讀むと十有八遍君臣の事迹と治亂の要と優經該熟而して進で正史に及び斑馬より金元に至る讀むこと各再遍人物制度天文地理財賦有司の事又皆審かに檢尋か加へ上下綜して巨細擧り其をして果然たるを知り其を以て同異を較し一に各代の稗官を以てし旁ら遺根拾て以て同異を較し一に是正に歸し而して後已む或は卯間に値へば諏ち成文を作り以て答ふ是くの如くなる者之を史の專門と謂ふも可也皆て人成な之れを惜しむ廢す人成な之れを惜しむ(碑文)

アヨヤギ タカトモ 青柳高鞆 國學者なり下總滑川の人道和建之助平田篤胤の道を信じ學を權田直助に學ぶ京都に足利三代の木像を梟し執へられて勢州蛮野藩に幽せらる維新後東京府神祇官七尾縣等に奉職し鹿島少官司となり實行教權大敎正に補し明治二十五年十月八日殁す

アヨヤギ タネノブ 青柳種信 筑前の藩士なり通稱勝次本居大平の門に遊ひ古學を唱へて世に稱せらる又詠歌を善ぜり(鑑定便覽)

アヨヤギ ハジメ 青柳一 陸軍歩兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第四十四聯隊附として出征旅順攻圍軍に加はり八月二十一日東雞冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヨヤギ ブンザウ 青柳文藏 仙臺東山の儒醫なり字は茂明東里と號す父を三遠といふ書籍二萬卷を藏す皆讀まざるはなし藩侯に乞て地數畝を得書庫を作り青柳文庫と名つけ之を醫學館に屬す松崎懐堂青柳館の碑文を撰し堀田侯正衛葉額を書す戊辰維新の亂後書庫碑石と共に廢れ書籍も從て散逸す(仙臺史傳)

アヨヤギ ミツナリ 青柳光成 裝劍彫工なり初の名は真光、江戸數寄屋川岸に住す稻田氏の弟なり(裝劍奇賞)

アヨヤマ エンウ 青山延于 水戸藩の文學者なり字は子世通稱は量介、雲龍又拙齋と號す世〻水戸藩に仕ふ祖は興道父は延鎔皆な小官に終る延于幼にして機警稍と長じて樂を立原萬に受け力文章に專らにして手ら柳文を寫し文才大に進む錦裁卓絶時の人めに稱せらる年二十餘にして江戸に來り先輩紀平洲山本北山等と交りを結ぶ時に水戸藩文學隆興し高橋坦宜藤田幽谷川口綠野皆な聲譽を擅まゝにす延于之れと鎬を竝べて驩々学々として先を爭ふ而して爵位に至りては則ち皆な延于を推して壇長と爲す文公みづから大日本史を校し諸生に課し史裁を脩せしむ延于神祇志六卷を撰し以て獻ず文公褒ずるに及んで就公遺志を繼ぎ史臣に督課す延于又た禮義典服二志を撰し以て獻す哀とを請ふ公之に從ひ命じて新に史局を開き以て藩史を修せしむ延于日夜之に指揮す一卷を造むる每とに公著しと稱す何ぞくもなく稿粗〻就る總べて三十六卷命じて東藩文獻志と曰ふ大抵延于の修むる所に係る而して刪潤未だ成らざるに公薨じ延于職を罷め史局亦た廢せらる識者之を惜む世于立つ之を烈公と爲す公の弘道館を起すや延于を擢んで小姓頭と爲し總裁を兼ねしむ延于學館に登り敎々として懈らず既にして中風を患ひ蹇えて天保十四年九月六日殁す年六十八明治卅五年十

一月從四位を贈る延于人と爲り剛直にして諛を惡む故に流俗の爲めに容れられず而して武烈兩公尤とも之を優遇す延于其の知遇を感じ言を盡して隱すことなし左右或は竊笑し以て迂と爲す而して延于顧みずと云ふ延于常に古錢を愛し百方之を覓むること三十餘年因を造りて之を類別排置す又泉譜五卷を著す文昌堂泉譜と云ふ又皇朝史略の著あり(近世先哲叢談、佐藤烈民氏談)

アヨヤマ エンクワウ 青山延光 水戸の儒士なり字は伯卿通稱は量太郎青山延于の長子城西田見小路の宅に生る幼にして喜んで書を讀む未だ曾て幼童の戲をなさず又天性强記にして一たび目を過るときは終身忘れず尤詩文に長し力を史學に盡す其の志父祖の業を繼ぐに在り嘗て纖遺傳を著はして古來能く父祖事を仰慕して苟くも其の事跡にかゝる者は悉く之を蒐錄して後四十七士傳を作る時年僅に十八水戸侯深く其才を愛し彰考館の編修に補す後進て編修總裁となり其修正潤色する所甚多し弘道館の立つに及んで烈公延光を擢んでゝ教授となし役料百石を賜ふ從提學たり子は教授となる者前後のなき所なり父殁して教授頭取となり會澤恒藏と共に文武教授の事を提督す時に藤田東湖學校奉行となる三人相並んで一藩の敎化を贊翼す烈公の爲に重ぜられ大事は常に諮詢を受く後又進んで側用人となり馬廻頭の上に班す文久中藩に黨起り長岡驛に屯す若年嘗渡邊超と共に命を受て之を討す藩に執政某命を受けて往て諭すに却て驕傲を釀して歸る延光の往くに及んで黨人退き去る慶應四年黨人亂を作し弘道館に據る諸將出て戰ふ延光槍を把て進む黨人の銃彈延光の袖下を過ぎ後者を仆す延光神色自若たり人其勇に服す大日本史の成るや烈公之が殿を書す延光為して稿を起さしむ稿成る豐田天功評して曰く立論著筆從六位に叙す同三年九月病殁す年六十四朝廷無比の家學を受けて國史に力を用ふるを稱す延光もと佩弦齋と號す又晩翠と號す晩に春夢居士と號す史學文章に至ては尤其所長にして著述編纂の書甚多し其既に書を成す者左の如し國史紀事本末七十三卷、同論贊一卷、南狩野史三、佩韋齋外集一、征韓雜志一、野史纂略五、三藩事略年表一、四十七士傳一、雪夜清話一、義人遺艸一、刀劍錄二、鶴史新篇(未刊)一、酒史新編一、櫻者聲一書、學校興廢考(未刊)一、佩弦齋一書、漫錄(未刊)九卷、長子勇少年より烈公の近侍となり小姓頭取に進む維新の後內閣の屬官たりしが後病を以り小姓頭取に退居せり(青山延光傳、內藤耻叟氏報)

アヨヤマ エンジュ 青山延壽 水戸藩の儒臣青山節齋の末子なり風に藤田東湖に從學し又武技を修練し殊に槍術に堪能なりしかは烈公より槍を給はり清廉及膚恩に歷任す恩門幼より家康に仕ふ永祿五年九月家康の家臣等一向宗に驚して叛逆す獨り恩門第牛大夫善四郎為に恩戰す元龜二年武田信玄足助口より參州へ進向する況あり喜太夫松平右衛門と共に命を奉じて櫓を百々村に構す此年四月岩津村に戰て死す

アヨヤマ タダカド 青山忠門 清三郎宗俊の後なり喜太夫と稱す姓は藤原氏江州の人父某德川清康及膚恩に歷任す恩門幼より家康に仕ふ永祿五年九月家康の家臣等一向宗に驚して叛逆す獨り恩門第牛大夫善四郎為に恩戰す元龜二年武田信玄足助口より參州へ進向する況あり喜太夫松平右衛門と共に命を奉じて櫓を百々村に構す此年四月岩津村に戰て死す

アヨヤマ タダトシ 青山忠俊 岩槻の城主なり三河の人姓は藤原氏、大納言師賢の後なり祖父を忠門と曰ふ字喜太夫德川家康に仕へ天正三年五月參州月輪邑に戰死す父を忠成と曰ふ初の字は藤七郎天正八年秀忠に仕へ文祿三年從五位下に叙し常陸介と稱し後播磨守と改む一萬五千石を領す十八年卒す歳六十二長子則ち忠俊小字は伊勢千代又藤九郎と曰ふ天正十四年秀忠に仕へ慶長五年十一月從五位下に叙せられ伯耆守と稱し八年常陸の田五千石を領す十二年家光に仕へ十五年更に食邑五千石を賜ふ十八年父の後を繼ぎ大坂冬夏の軍に從ふ元和元年九月酒井忠世及び土井利勝と偕に命を受けて家光に傅たり忠俊其感臣と命を同うするを喜ひ心を靈して輔翼し知て言はざるはなし或は色和けて敎誨し或は顏を冒して諫諍す家光嚴狩幼稚其感もなくして總裁の職を命ず初め總裁興道館に懼敬して言行黨整なり五年食邑を加へられ岩槻城を賜ひ四萬五千石を領す九年十月歸を以て采邑を削る尊りて之を示す總裁欽稱し遂に之を推讓すと云ふ興道酒を好み客を愛し每に客の至るあれば必ず酒殺を備へ歡を盡めて止む家業と貧し泥米屢と空しきも晏如たり寶暦丙子九月五日を以て病みて殁す年五十五(文苑遺談)

アヨヤマ カゲミチ 青山景通 國學者なり美濃苗木藩の士初直意と云ふ通稱は稻吉平田篤胤の門人にして書は三好想山に學ぶ維新の後神祇少祐に任す明治二十四年十二月十一日殁す男胤通醫學博士たり

アヨヤマ カンヂ 青山勘治 江戸の畸繪師なり後に京師に住す年八十餘能く緻密の畸繪を爲す嘗て梨子地二八の盃の糸底に唐人物百人を描き自ら其の伎倆に誇ると云ふ(京都美術協會雜誌)

アヨヤマ シャウテイ 青山尙貞 狩野派の畸家にして狩野常信の門人なり(扶桑畸人傳)

アヨヤマ タダヒロ 青山忠興 清三郎宗俊の後なり喜太夫と稱す姓は藤原氏江州の人父某德川清康に仕ふ永祿五年九月酒井忠世及び土井利勝と偕に命を受けて家光に傅たり忠俊其感臣と命を同うするを喜ひ心を靈して輔翼し知て言はざるはなし或は色和けて敎誨し或は顏を冒して諫諍す家光嚴狩幼稚其感もなくして總裁の職を命ず初め總裁興道館に懼敬して言行黨整なり五年食邑を加へられ岩槻城を賜ひ四萬五千石を領す九年十月歸を以て采邑を削る尊りて之を示す總裁欽稱し遂に之を推讓すと云ふ興道酒を好み客を愛し每に客の至るあれば必ず酒殺を備へ歡を盡めて止む家業と貧し泥米屢と空しきも晏如たり寶暦丙子九月五日を以て病みて殁す年五十五(文苑遺談)

アヨヤマ カゲミチ 青山景通 國學者なり美濃苗木藩の士初直意と云ふ通稱は稻吉平田篤胤の門人にして書は三好想山に學ぶ維新の後神祇少祐に任

を頷て曰く雅樂伯書の威嚴の如きは臣の及ばざる所なり一杯以て性を保つべしと而して機を計り徐に曰く伯書の言ふ所は至理なり雅樂如しと雖も聞かば奈何すべき唯伯書の言納るべしと是故に家光能く諫を納る初弱少にして遊蹤を好み美麗を樂む雙鏡を設けて變を梳る忠俊偶々之を見て忽ち進みて鏡を中庭に投して曰く人君たる者苟も無頼の奬を好めば是れ亂の端なりと忠俊幽居する機辭あり放言避けず故に卒に緋穢ならず忠俊幽居す後數〻命して之を徵す從はずして愛す後慶安元年閏正月子宗俊を召て小諸城を賜ひ邑三萬石を食む是日家光宗俊を床下に召して曰く汝の父能く輔翼の道を竭す孤年若く盛淺く方今其の寃を徒慟し中心孔た疼む故に爲に其魂を弔ひ今汝を以て小諸に封す汝亦父の心を攬り以て我子に仕ふべしと言未だ畢らざるに垂涕衣を濕す（名賢言行錄）

アヨヤマ　タダナリ　青山忠成　忠門の子なり初め藤右衛門と稱す家康の近侍たり年二十一公の後を繼ぎ後ち秀忠の傅となる天正二十年二月相州東郡五千石を賜ふ後戯硯組與力二十騎足輕百人を預げらる慶長五年關が原陣に秀忠に從ひ後ち執政となり内外の書札本多佐渡守正信内藤修理亮清成と連署す十年從五位下に叙し常陸介に任す後ち播磨守に改む十八年二月廿日卒す年六十三法名珠光道的四子あり長は忠俊次は彌太郎泰重朝比奈氏を繼ぐ次は幸成次は備前守通直天方氏を繼ぐ

アヨヤマ　タダヨシ　青山忠誠　蒼篠山藩主にして維新後東京に在り學を芳野世經の門に受く明治七年朝鮮に事あるや忠誠年甫めて弱冠奮然悟る處あり復た士官學校に移り明治十三年同校歩兵科を卒業し尋く陸軍歩兵少尉に任ぜられ職に佐倉の營所に就き後轉して近衛歩兵第二聯隊小隊長に補せられ間もなく陸軍歩兵中尉に昇進し擅て子爵を賜はりたりしが二十年七月十七日突然腸充血症を發し二十六日二十八歳を一期として溘焉長逝したり忠誠常に蒼篠山藩の子弟をして學業を修めしめんと謀り財を捐て資を投して或は學資を給し或は邸内に寄宿舍を建設し以て子弟富學の便に供し又蒼藩士民の日を逐ふて困弊するを見るや數千金を投じて懷蒼會なるものを設け自ら會頭の職に當りて蒼封内の士民を救濟し其他獻金義捐金等を爲す事年海防費三千圓を獻納し銀製黃綬章守忠隣命を奉じて刀劍を賜ふ五年上杉景勝征討の時幸成父忠成と同く從て小山に至る七月石田三成盤内中國を下賜せらる其寵狀の下る日は方に病蓐にありて困頓煩悶の際なりしも之を拜して恰色面に現はれしと云ふ

アヨヤマ　チュウシ　青山忠次　陸軍歩兵中尉なり愛媛縣出身にして明治二十七年日清戰役起るや第三師團歩兵第六聯隊附として出征し同年十月廿五日奉天省虎山に於て戰鬪中負傷同月廿六日義州野戰病院に於て死去す

アヨヤマ　テルマサ　青山輝正　靜岡縣出身にして熊本縣八等屬奉職中明治十年二月二十四日命を奉じ城を出て福岡縣久留米電信局に赴き東西京に報する所有んとせしに途中賊の爲めに殺さる

アヨヤマ　トクラウ　青山得老　俳歌を能くせり下總結城の人得老は其の號、一に自耻庵の號あり兵橋と稱す天保弘化中の人其の俳歌に曰く「枯際やまたひとつ咲くきくのはな」（俳諧海内人名錄）

アヨヤマ　ヘイザウ　青山兵藏　陸軍少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集を受けて從軍し卅六年三月七日負傷同八日第九師團野戰衛生隊繃帶所に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

アヨヤマ　ムネトシ　青山宗俊　忠俊の長子寛永二年忠俊罪を獲て父子近江に謫居す忠俊卒して後召還さる舊友皆な來唁す堀田加賀守過りて之を見て是れ誰人なりやと問ふ隆人肅然對へて曰く青山伯耆守の子なりと加賀守去り宗俊問ふ是何人なるやと座人曰く執政堀田加賀守去り宗俊曰く曰く然らば勤左衛門の子歟と座人色を失ふ其の剛直なること斯の如し宗俊初め三千石を領して大番頭となる慶安元年將軍家光召見して小諸城に封す時汝が父忠俊補導三萬石を賜ひ之に諭して曰く予少き時汝が父忠俊輔導力を竭し直諫身を顧みず以て成立に至る時に予未だ其の忠誠を察する能はず今に至りて始て其の忠誠を知る故に汝に小諸を賜ふ迥ち汝が父を黃泉に慰むる所以なり汝其れ乃父の心を以て心とし吾兒に事ふること汝が父の我に事ふるが如くすべしと言ひ訖りて涙數行下る宗俊亦た感歔す

アヨヤマ　ユキナリ　青山幸成　忠成の子也慶長四年秀忠の前に元服して藤藏と號す大久保相摸守忠隣命を奉じて刀劍を賜ふ五年上杉景勝征討の時幸成父忠成と同く從て小山に至る七月石田三成盤内中國四海の兵を合せて伏見城を圍むの報至る家康軍を江戸城に旋へし兵を調して東海道より進み秀忠は木曾路より進む特に信州道嶮嶇なるを以て十五歳以下の者從騎を賜ふ迥ち汝が父を黃泉に慰むる所以なり汝其れ乃父の心を以て心とし吾兒に事ふること汝が父の我に事ふるが如くすべしと言ひ訖りて涙數行下る宗俊亦た感歔す

アヨヤマ　ユキナリ　青山幸成　忠成の子也慶長四年秀忠の前に元服して藤藏と號す大久保相摸守忠隣命を奉じて刀劍を賜ふ五年上杉景勝征討の時幸成父忠成と同く從て小山に至る七月石田三成盤内中國四海の兵を合せて伏見城を圍むの報至る家康軍を江戸城に旋へし兵を調して東海道より進み秀忠は木曾路より進む特に信州道嶮嶇なるを以て十五歳以下の者從騎を賜ふ迥ち汝が父を黃泉に慰むる所以なり汝其れ乃父の心を以て心とし吾兒に事ふること汝が父の我に事ふるが如くすべしと言ひ訖りて涙數行下る宗俊亦た感歔す

イ之部

イウ　遊の方「アンシヤウキン」

イウアン　遊安　江戸淨土宗靈山寺の沙門なり字は廓榮上野小島新田氏の兒也母は砥氏兒なきを憂ひ妙見菩薩に祈る勝應に感じて生る年十五卷岳和尚に投じ剃染す天資穎特聰明强記一回善く五十頁を諳記す幾ばくならずして南京にゆき俱舍唯識を研究す平安に遊び華嚴法を鍛錬す又宇津宮氏に謁し鄰菅の學を究め遂に法を智哲上人に嗣ぎ貞享三年靈山寺に住し大に講筵を開く學人蟻集す元祿八年正月十日念佛坐化す年八十著はす所往生要集指麾鈔あり（續東國高僧傳）

イウイイウ　悠々「カハハライウイウ」

イウイイン　宥印　薩摩國泰平寺の住職なり性頴敏剛毅にして且つ儒學に精し天正十五年秀吉西征の時泰平寺附近の諸城を攻陷し民屋に放火し其の勢破竹の如し秀吉乃ち泰平寺を本營と爲さんと欲し使を遣はして速かに寺を去らしむ曰く若し運滯するに於ては恐其身に及ぶべしと宥印之を聞き昂然として答て曰く予は當寺の住職なり一身は獨く泰平寺と存亡を共にすへし何ぞ一身の殃を懼れて此寺を捨てんや秀吉其氣慨を快とし再び使者を遣はし禮を厚くし辭を卑くして言はしめて曰く大軍遠く來り本營とすべき地無きに苦む貴寺幸に軍衆を收容するに宜し願くば暫く寺を去りて我に借すべしと宥印答て曰く今若し殿下の請を容れなば人或は干戈を恐れて遁れたりと嘲らん吾大に之を慙づ願はくば吾に退去の地を與へよ然らば直に命を奉ぜんと秀吉即ち中郷なる宅舘寺を選て宥印を居らしめ後始めて泰平寺に移りぬ宥印猶毎晨泰平寺に往き勤行を怠らず軍兵の中を往來して少しも恐るゝ色なし後ち義久秀吉と和を約するに當り宥印其間に周旋して殊功あり秀吉田祿を與へて之を賞せんとす宥印固辭して曰く今や國破れ君辱められる我固より此藩の祿を食むもの何ぞ敢將の賞を受くるに忍びんやと秀吉之を强ゆれども遂に受けずと云ふ（加藤雄吉氏寄）

イウエ　友益「カノイウエキ」

イウエキ　由悅「クロダイウエツ」

イウエツ　遊燕「シトミイウエン」

イウエン　幽雅「タカタイウガ」

イウガ　鷲「カミヤウタタ」

イウガ　我「カノイウタタ」

イウガ　我「ヤマモトイウガ」

イウガ　我「ネギシイウガ」

イウガ　友我　俳諧師なり其の姓詳かならず尾張の人にして今總の門人なり（俳林小傳）

イウカイ　祐海　江戸四谷千日谷一行院の住持にして祐天寺の開基なり名は愚案、拈蓮社信阿と號す寶曆十年正月二日寂す（江戸名家墓所一覽）

イウカヤ　祐高　南都の繪師なり法眼に叙せられる畫所預大藏少輔行忠繪師采女正、中務少輔久行、大進法眼の五人と共に高野大師の行狀を圖す應安七年より康暦元年に至りて成就すと云ふ（扇國名畫拾遺）

イウカウ　幽皓　狩野派の畫家にして鵜澤探山の門人なり（扶桑畫人傳）

イウカク　祐覺　初め法勝寺に居て律を學び覺應坊と稱す後醍醐帝船上山に在るに當り乃ち延暦寺に入り更めて山徒と爲り道場坊助法記と呼ばれ兵を集めて王に勤む又新田義貞に從ひて東足利尊氏を征す足利直義祐根嶺に拒ぐ其の時祐覺傳寶十八僧兵三十餘人を以て盛んに鎧を飾らしめ侍童は皆冑に花勝を戴かしめ衆に先立て進ましむ敵射て八十を斃す僧兵鐘で進みて奮擊す敵軍披靡す、官軍敗るゝに及びて車駕延暦寺に幸す祐覺膽な山中に發す鼎る既にして源顯家大兵を率て近江に至るや帝祐覺に敕して船七百艘を發して之を迎へしむ尋て僧徒及び諸將み分ちて足利尊氏を京師に討つ既にして尊氏欵を納る、帝還るに及びて祐覺駕に扈して京師に入る足利尊氏其の謀の首謀たるを惡みて之を斬る（大日本史）

イウカク　融覺「オダナガマス」

イウカン　友閑「フヂタイウカン」

イウカンサイ　友閑齋　畫家なり名は有信（鑒定便覽）

イウギ　祐宜　京都眞言宗智嶽院の沙門なり字は長善俗姓深澤氏下野四方村の人なり貧性弘毅にして大度量あり年十五邑の正安寺に落髮す後十年にして笈を負て根嶽に濟り日秀賴玄等の諸老に親炙し密義を習ふ又醍醐堯雅僧正に謁して諸尊の祕軌を受く或は南京に遊び唯識三論賢首の宗旨を學ぶ或は北京に腰包し闇城寺に俱舍を聽き延暦寺に台教を問ひ往く處寸陰を惜み夜以て晷に繼く者亡慮廿五年天正十二年甲申の秋學成て鄉に還り何ぼくも無くして諸方受け桑島金剛定寺に住し宏に講肆を開て四來の奬誘し道價嘖左を動す一坐四夏寺務の繁な厭ひ退て邑の佗家山に隱る菴を開て兀坐す入臥龍と稱す學を好む者蹤を追ふて至る稍〻群を成す十六年冬十月奥州岩城藥王寺實宥僧正厚く幣禮を具し請して補處に充つ宜已を得ずして之に投ず恒に法淨厨に充つ慶長七年隆公故あり羽州の由里に謫せらる宜快々去ん拂つて桑島に還る翌年皆川持明院檀越山城守老浦居士素より其の英風を抱りて懇請して主と爲す乃ち爲に法華八講を啓く國人概然として之に集會す九年冬十二月宜勅を奉じて僧正に任す智積の補席と爲る越て十一年五月進院法筵を開く雲衆景從して垂誨を受く宜毎に徒を策して曰我聞く學は勤苦に精し、行は鎔練に成る必しも黠慧に在らず我素と性魯鈍なり少時鄉に在り論席に至る毎に行鞭の屈する所と爲る一日父我に曰く汝の性愚なること如かずと又如持して遂ひる我れ避けて之を脫る此れより勤學して懈らず晝勵夕惕す根嶽より歸るに及びて則ち昔の吾を屈するもの皆來て誨を承く一も抗衝するなし豈に禮古の力にあらずや旅れを勉めよ旅を勉よと宜修驗多し初め金剛定寺にあり一昔燈下書を寫す忽に一女子あり爲に燈炷を正す宜問ふ誰ぞ曰く妾先きに水を涉り失脚して溺死す父母知ることなし妾歸する所なし願くば救濟を賜へ宜曰請ふ所若し實ならば明夜復た來れ女諾して去る明夜果して來る宜爲に髮を剪り戒を授く女禮謝して曰幸に慈化を蒙る忽ず當に解脫を得べし鴻恩を報ぜんと欲して惧らくは寸珍なし此の衣涴たりと雖も幸に慈領を賜へと即ち衣を脫して之を奉ず須臾にして之く所を失ふ直ちに其の衣を視るに甚だ濡へり詰旦僕夫に命して市に出して之を賣さし

む其の女の父祝て怪みて其故を問ふ僕爾さに言ふ父母哭泣して尸を覆む果して之を難頭に得たり宜の常人にあらざるを信ずるなり後皆川に在り夏大旱す志摩守屋庸所雩を請ふ宜之を許諾す院側に小池あり宜佛舍利一粒を以て竹葉に載せ水に泛べ呪を持す少選ありて筑波頂山に片雲出るあるを見る形ち牛尾の如し衆人目を屬す忽ち飛び來りて池上に靈鍵す驟雨盆を傾く土民大に喜ぶ宜謝する所鈔記一十八種世に行はる其手寫卷帙將に棟に充ち牛に汗す慶長十七年壬子冬十一月從脅諸子に誡訓し囑するに後事を以てす十一日早晨浴室に入り自ら淨髮し訖て浴槽中に於て跏趺して化す報齡七十七僧臘六十二顏色怡然生平に異らず三日の後泉涌寺に葬る祐宜心を繪事に用ひ喂あれば常に筆を揮ふ墨畫を善くす雪舟の筆法を學びて其の眞趣を得（扶桑畫人傳、纘本朝畫史、纘東國高僧傳）

イウキ　有輝「テウイウキ」

イウキアン　有寄庵「イウジンザウ」

イウキウ　友丘　淵僧なり字は東林幼より一山和尚を師として圓頂戒を受く後海に泛て元に入り倜く名宿を歷訪して得るところ尤も多し育王の月江和尚に依て主藏寮を拂たり名聲日に著る其辭を告ぐるに及び天寧の楚石琦公偈を作て行を送る既に故國に歸り建長寺に出世し一香を一山に供す尋で圓覺寺に住し某年月を以て靈光寺に終す法弟瓦瞻あり少より英邁不幸にして短折す（本朝高僧傳）

イウキダウ　有紀堂「トシマサイビ」

イウギモンキン　遊義門院「レイシ」

イウケン　獻憲　姓氏を詳にせず下野鹽屋郡の人なり少より洛に入り智證禮圓の二師に從て灌頂を受け台教を修む眞觀の初年清和帝南北の諸高僧に詔して最勝五經を大極殿に講ぜしむ憲問者となり義解神徹に入る會衆歎賞せり常に持念堂に居る寛平五年春三月延暦寺の座主となり翌年八月廿二日寂す壽六十八（本朝高僧傳）

イウクワイ　宥快　高僧なり京師の人、羽林夾將藤原實光の子、天資聰敏幼にして金剛峰に登り實性院信弘の室に入りて三密の瑜伽を習ひ兩部の秘教を受け心を義學に潛めて講論の場骨て敗を取るなし經論章疏に涉獵し讀密の藏奥に該通す是に於て聖光朝野に輝く應安七年信弘の命を受けて寶性院の造營を董す時に年三十大法壇を建つ四方の學士蟻集す毎に寵樹の論無畏の疏は弘法大師の義章に就き其の文理紛糾義路窒塞する處を開拆して斐然章を成すもの凡そ五百餘條是に於て其の幽旨奥意判然として明かなり義學の法此に由りて興る永和三年興雅僧正に安祥寺に謁して入唐裏運の源を杏叩す僧正其の器宇を喜び心を頗けて付與す後光嚴帝其の識行博峻なるを敬し毎に寵遇優渥なり至德中詔して宮中に入りて移法を修せしめ特に御製の和歌一首を賜ふ快即ち製に應じて和す時人傳へて以て榮とす悉曇章は前來能く之を習ふもの罕なり快筆を操て其の鈔を逃ぶ然れ共未だ意に慊ばざる所あり一夕此山の神舟生津姫女人と化し來りて一巻を指授す應永二十三年七月十七日手に契印を結び神咒を誦し定の如くにして化す年七十二平生の述作數百卷あり盛んに世に行はる（東國高僧傳）

イウクワウサイ　幽篁齋「コスゲマタサブラウ」

イウクワウサイ　幽篁齋「サワキスウシ」

イウケイ　有景「ミヤワキイウケイ」

イウケイ　融珪「ユウケイ」

イウケイ　祐慶　刀匠なり大進坊と稱す相摸鎌倉に住す行光の兄にして永仁比の人雖鑄に巧なり或は云五國光の子幼にして下野二荒山に登り僧と爲る然れども彫物を好んで刀劍に還り刀匠と爲る然れども彫物を好んと又云く建久八年生れ廿五歲にして出家す貞治比より鍛冶の業を執り正中元年歿す年一百三十八歲なりと（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

イウゲン　融源「ユウゲン」

イウゲン　由賢「トウバウソザン」

イウゲン　友元「ヒトミイウゲン」

イウゲン　幽玄「メガタイウゲン」

イウゲン　祐嚴　准三后一條關白左大臣成恩寺經嗣の子にして東寺長者、法務たり（三寶院門跡傳）

イウコ　祐願「ナバクワツシヨ」

イウコウ　祐公　醫僧なり書秀軒と號す攝津樂寺に住す諢餘醫治を事とす（皇國名醫傳）

イウコク　幽谷「フジタイウコク」

イウサ　祐佐　狩野派の畫人なり（或は云ふ狩野氏）一說に曰ふ休白の弟子なりと（扶桑畫人傳）

イウサ　有佐「トミヲカイウサ」

イウサイ　幽齋「ホソカハフヂタカ」

イウサイ　友齋「テラザハイウサイ」

イウサイ　悠哉「イトウイウサイ」

イウサイ　勇齋「ナカムラソウテツ二世、同三世」

イウザン　勇山「ナカムラソウテツ初世」

イウザン　右山「ボクイム」

イウザン　悠山「イマオホヂイウザン」

イウザン　幽讀「カンタリカウウン」

イウザン　幽山「タケノウチイウザン」

イウザン　友山「オクヌキイウザン」

イウザン　友山「ダイダウジシゲスケ」

イウサ　**モンキツ**　遊佐門橘　陸軍歩兵少佐なり宮城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第七師團歩兵第廿六聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中同年十一月卅日二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イウジ　酉爾「カツカハハルアキ」

イウシウ　有終「サイトウセツダウ」

イウシウ　祐周　畫僧なり雪村の筆意を學びて水墨山水を能くす（本朝畫史、扶桑畫人傳）

イウシキ　友識「コイケイウシキ」

イウシン　宥信　常陸の產なり少にして東都を出て、寶性院に入り宥快に師事して密壇に侍することを願て宮中に入る後醍醐天皇直に僧都に任ず灌頂を受げて後諸師の門に遊んで縱に密藏顯綱を探る既にして快師の印契を持して如意輪寺に住す衆の歸すること林の如し亨德三年高野の檢校職を司る其終を知らず（本朝高僧傳）

イウシン　遊心　三河万岡寺の僧にして冶刀の術を京師の刀匠慶任に受く弘化安政年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

イウシン　有幸「ウバヤギイウシン」

イウジンアン　有懷庵「サイトウダウセツ」

イウシャウ　祐昌　江州義仲寺の住職なり旁ら俳諧を善くす文化四年二月歿す（俳家奇人譚）

イウシヤウキン　有章院「トクガハイヘツグ」

イウシヤウ　友松「カイホクイウシヨウ」

イウシヤウ　侑松「セツガンイウシヨウ」

イウシヤウ　祐乘「ゴトウイウジヨウ」

イウシヤウアン　幽松菴「セイラ」

イウシヤウシ　友松子「マナセセイケイ」

イウジヤウバウ　祐乘坊義空　醫者なり義存の子、北條仲時に從ひて京師に往き初め佛を學ぶ後ち醫を爲す終に醫を以て顯はる眞治三年徵れて御脈を診す故を以て民部卿三位法印に叙せらる將軍足利義詮最も親信し毎に之に治療を屬せり（皇國名醫傳）

イウジヨウバウ　祐乘坊義存　鎌倉將軍惟康親王の子なり親王職を罷めて京師に歸る後ち義存鎌倉に生る其の母之を育すれども靈甚しきを以て僧疎石見て大に之を憐れみ收めて以て徒弟と爲す名づけて祐乘坊と曰ふ後ち寶藥を業とす世に傳ふる所の磨秘丸是なり子孫遂に祐乘坊を以て稱とす（皇國名醫傳）

イウジヨウバウ　ズキケイ　祐乘坊瑞景　醫者なり義宣の子、丹波氏に從ひて學ぶ治術衆に超ゆ典藥に任ぜらる時に丹波の家適々嗣絕えて元日居蘇の調進闕くるあり應安五年幕府瑞景をして代りて獻せしむ後ち以て例と爲す（皇國名醫傳）

イウジヨウバウ　ソウシウ　祐乘坊宗秀　醫者なり瑞景の子、鎌拔壽院を賜はりて治部卿に叙せらる子は宗安拔壽院の稱を襲ふ子瑞兆亦た三位法印に叙せらる宗安父た上池院紹胤の子瑞碩を養ひ子と爲す後ち紹碩と改む子瑞昌を生む秀存より瑞昌に至るまで九世典藥頭に任ぜらる其子瑞久法眼に叙せらる子瑞翁宗安の稱を襲ぐ其著はす所胃氣辨、脈要方、灸治口訣、肥肉傳あり（皇國名醫傳前編）

イウジヨ　**ホウシンウウ**　祐助法親王　後二條院の皇子母は權中納言公泰卿の女也桂林院と號す曆應四年十一月十八日座主に任ず

イウセイ　祐清「カノテルノブ」

イウセイ　祐清「カノクニノブ」

イウセイ　祐清「カノムネノブ」

イウセイ　由誓「トシマイウセイ」

イウセイ　友清「カノミネノブ」

イウセイ　祐勢「カノマサノブ」

イウセイ　遊清「ホンマイウセイ」

イウセイ　幽囈　越後の俳人なり文化中の人（俳家人名錄）

イウセキ　友石「ヤマモトイウセキ」

イウセキ　友石「エンラカウサイ」

イウセツ　有節　伊勢桑名の骨董戶なり陶法を巧にし樂器を爲す終に醫を以て顯はる眞治三年徵れて御脈を診す故を以て民部卿三位法印に叙せらる將軍足利義詮最も親信し毎に之に治療を屬せり（皇國名醫傳）

イウセツ　祐雪「カノムネノブ」

イウセツ　友泉「カイホクイウセン」

イウセン　幽仙「ウヘノイウセン」

イウセン　友禪「カノイウセン」

イウゼン　友禪　有名の染工なり姓は宮崎氏京師の人後ち加州金澤に移る專ら職業を研究して遂に一家の風を興す所謂る友禪染是なり又畫に巧みなり絹本に染物繪を寫して其精密巧妙なること他人の及ぶ所に非ず祇園の棍女が歌集「棍の葉集」に其筆跡あり元錄年勅あり僧正に任ず眞平素法驗多し初め圓福に住する日中の人或ひは云ふ友禪は染工にあらずして畫僧なり專ら扇面に花草等を畫きて世の求めに應ず婦女喜びて其扇を用ふ故に染工其畫を請ひて以て模範となし一種の染法を發明せり是れ友禪染の名ある所以なりと周說未だ孰れが是なるを知らず（扶桑畫人傳、燕石十種）

イウソウ　祐崇　字は觀譽東關を歷巡して習學精勤す相模の光明寺に住して講經多衆なり明應四年都下を唱導し遂に禁中に入りて彌陀經を講す奏說旨に協ふ勅して慈覺大師傳來の經明を誦ぜしむ乃ち眞如堂の衆僧を率ゐて內殿に就て彌陀經及念佛を誦唱し香衣上人の號を賜はる崇發して殿修の式を以て永世光明寺に移し行ふ重て紫袍を光明寺に賜ふ方今專念の寺初冬十夜念佛を唱ふは崇より始れり一日徵悉す端雲下る死期至れるを知り感儀端坐高聲に念佛す遽に曰く四方の佛來れりと言未終らざるに化す時に永正六年十一月八日なり二藏聽見聞十卷を著はす（本朝高僧傳）

イウソン　祐尊　畫師なり大貳の公と號す其の姓氏及び歿年等詳かならず（續本朝畫史）

イウタク　幽琢　茶人なり左海の人姓氏未詳初め富裕にして紹鷗の高足なりしも頗に家產を失し貧窮なるを以て江州松本に遁れ隱る大野道可の招請に逢ひ越前に到り道可の家に同居し其天年を終ると云ふ（點茶活法）

イウチク　有竹　畫家なり紀伊の人入野呂介右に從ひ學んで山水を畫く（樂定便覽）

イウチク　友竹「ヒシガハモロノブ」

イウチク　友竹「カイホクイウチク」

イウテイ　友汀「イシダイウテイ」

イウテイ　幽汀「イシダイウテイ」

イウテイ　宥貞　京都眞言宗智積院の沙門なり字は仙丁上野勢田郡奈良原氏の子也寧卯俊秀志し出塵を願ふ郡の王藏院祐慶に師事して得度受業す尋で四度瑜伽灌頂等を受く元和八年筮を負ひ京に上り智積の日譽僧正に謁して受業日新なり又高野に上り實翁の講を聽き次に三井に遊び台教及び俱舍を學ぶ後ち智積元壽僧正に見え講益四年道香遠薰講に依り越後長岡の王藏院に住す次に武州寶仙圓福を巢歷して住す明應二年台命を奉じ智積に祝筵す雲納五千揖鄭子巢を園繞す明年勅あり僧正に任ず貞平素法驗多し初め圓福に住する日檀越牧野氏の女疾あり藥石効なし貞に加持を請ふ未だ至らざるの前女即ち闔絕して人事を知らず手脚已に冷なり貞爲に持念須臾くして甦ち蘇息す一日檀信戶田氏の少婦狂疾に嬰る貞に屬して持咒せしむ魅大言す貞聲を抗て叱して曰く十法界一佛性即鼻即佛爾輩皆昧にして自ら知らず兒女を逼惱する何んぞ其れ愚なるやと言

いまだ了らず病蟄拜伏流汗す魅即ち退き病尋て癒ゆ其の感應此くの如し寛文元年北野大報恩寺に退隠す四年夏少恙に染む五月初めの六日睡るが如くにして徂く年七十三法歳五十九(續東國高僧傳)

イウテツ 有徹 鬼鏡有徹と號す肥前唐津の刀匠直行晩年の號なり直行を看よ

イウテン 祐天 名は愚心鼎譽と稱す江戸の僧なり奥州岩城郡新要村四村善内の男なり幼名三之助檀通上人の弟子となる寶永四年十一月二十三日雷鳴沙を雨すら白晝暗夜の如きこと三日駿河の富士山焚け鳴動して雷の如し始めて其の雷に非ざるを知る駿河臺河を檢察せしむるに砂石殆んど五尺餘後連夜沙を降して已まず將軍綱吉僧徒を召して問ひて曰く天沙を雨ふらすは吉凶如何祐天從容として答へて曰く沙は地に在る者なり今天沙を下す順と謂ふべからず禽獸は人を待て而して生活するものなり今將軍禽獸を以て人を殺すは順と謂ふべからず綱吉懼はず明日又祐天を召して曰く汝が言甚だ直しと物を賜ひて之を賞す下總埴生村某女の亡魂人を惱ますや祐天讀經して遂に之を治めたりと云ふ享保三年七月十三日中目墨村に寂す年八十三享保中二世祐海遺跡に寺を建て祐天寺と云ふ(富嶽進志、武江年表)

イウトク 友德 俳諧師なり加友の門人(俳林小傳)

イウトウケン 友東軒「タチハラキヤウシヨ」

イウトクキン 有德院「トクガハヨシムネ」

イウニン 有仁 勤王家なり常陸國茨城郡上入野村小松寺の住職にして常に國事を憂ひ廣く有志の士と交を結び大に爲す所あらんとす安政末年勤王の志士幕鑑が蒙るに及びて奔走顛る力む元治元年水戸甲子の亂あるや同郡那珂四村寶憧院住職範淳と共に正義黨に加擔して松平頼德に隨ひ那珂湊に陣し軍務に從ふ事敗れて銚子に禁錮せられしが後ち館山に移され更に江戸の獄に下り慶應二年五月二日病死す年四十七(殉難錄稿)

イウネン 有年「スズキイウネン」

イウバイ 有梅「セツソンイウバイ」

イウハン 祐繁「ホソカハヨリハル」

イウハン 宥範 高僧なり讃岐櫛梨郷の人少にして郡の新善光寺に入り薙髮して戒を受く淨土の教を學ぶ夢に僧あり聖經數卷を持ち來り人を して任意に之を取らしむ範亦一軸を取りて之を見るに梵字にして知る能はず問て曰くこれ何の經ぞや僧曰く密經なり汝ぶこと八年金藏、胎藏の兩部小野の密派悉く其源底を究む西三谷に往つて俱舍を聽く永仁二年高野山に上る事故ありて久しく留ること能はず夫より下野に至り鶴尊に謁して三寶院の法流を受く又同國衣足寺の學頭經尊に謁して大日經の疏を聽かんとす祥曰く我嘗て泉涌寺の願行上人の招に應じて此疏を東寺に講ぜんとしたりしが偶其寂するに及び講に意なきこと久し奥州加法寺に道性法印あり これ信日の高足なり往て求めんと性法印辭を辭す依て又下野に還る時に年魯く餓ゆべしと性師請を辭す依て又下野に還る時に年魯く餓ゆ行路往反に甚だ苦めたり祥その志懇なるを感じて始めて讃範を開き一年にして軸を畢ふ正安元年祥、疏を武藏の廣田寺に開く翌年春又伊豆密嚴院の請に應じ走湯山に請ず範亦預り聽す凡祥に從ふこと前後九年毘盧寺の妙祥に面

投じ自ら腹を割て焚死す（豊田四郎も亦自殺す光季の子光綱、季村、時重、後北條泰時光季の故地を以て季村に與ふ（大日本史）

イガ　ミツツナ　伊賀光綱　左衛門尉光季の子なり壽王冠者と稱す承久中光季京師に守衛す光綱從ふて俱に在り後鳥羽上皇將に北條義時を討たんとす先づ兵を遣して光季を討つ光綱時に十四光季曰く汝尚ほ幼弱宜しく所親に投じ長ずるを待て幕府に仕ふべしと光綱曰く大人節に死す兒何ぞ去るに忍びんやと光季悅び門を開て敵を待つ既にして官軍來り攻む從者力鬪す光綱檢非違使佐々木高重の至るを見て矢を挾で謂て曰く初め君我に冠を加へ約して子壻と爲す今將に死せんとす敢て賜ふ所の矢を還して以て誅れんと射て其の胸に中つ年少に臂屈くして矢甲を撤せず高重之を憐み流涕して去る官軍競ひ入り從者散亡す光季火を其家に縱ち先づ光綱を殺して火に投じ自ら腹を割ひて焚死す（大日本史）

イガ　ミツムネ　伊賀光宗　左衛門尉光季の弟なり伊賀二郎左衛門尉と稱す建保の末侍所司五人を置く光宗其の一たり承久の初め政所執事に遷り後ち朝官を授けられて式部丞と爲る初め北條義時光宗の妹を娶て後妻と爲し政村及び女を生む女參議藤原實雅に適す故を以て實雅を召して幕府に侍せしむ元仁元年義時疾篤し泰時六波羅に在て未だ還らず義時の妻光宗と謀り顧經を廢し實雅を立て將軍と爲し政村を以て執權と爲し而して光宗兄弟威福の柄を操らんと欲し光宗弟朝行光重と密かに將士に結ぶ義時卒す流言あり曰く武州京師より還り將士に諸弟を殺さんとすと人心危懼す泰時還るに及びて鎌倉騷擾す光宗兄弟慮る三浦義村の家に至る道路頗る怪と爲す又義時の妻の居所に聚りて共に誓ふ泰時頗ろ之を知る然れども置て問はず旬餘にして近國の兵驟に至り殆んど城市を填む政子夜潛かに義村の家に至て之を諭す義村謝して之を知らずと爲す政子色を作して詰責す義村申ぶるに誓言を以てす既にして政子輕經を奉じて泰時の家に徒り數日にして議決し實雅を逐ひ光宗の邑五十二所を奪ひ其の舅二階堂行村に屬して之を因へしめ遂に信濃に幽す光宗謫所に至りて薙髮し四光と法名す明年政子薨ず泰時冥福を修るを以て光宗等を召還し之れに舊邑八所を授く既にして任じて之を使ふ光宗評定衆となる正嘉元年を以て卒す時に年八十（大日本史）

イガンサイ　クワテイ　怡顏齋「マツヲカジヨアン」　五十嵐華亭　畫師なり通稱は相模、越後の人美人花鳥に工みなり（畫乘要畧）

イガラシ　ゲンケイ　五十嵐元敬　畫人なり淺明の三男、畫法を父に學び畫及詩書に巧みなり（扶桑畫人傳）

イガラシ　ゲンセイ　五十嵐元誠　畫人なり淺明の二男、畫法を父に學んで殊に人物に巧なり（扶桑畫人傳）

イガラシ　シウジュ　五十嵐秋壽　野州宇都宮の俳人なり秋壽は其の號一に玉潤舍の號あり與左衛門と稱す弘化頃の人（俳諧海内人名錄）

イガラシ　シキン　五十嵐子謹　畫人なり泉淺明の長男、畫法を父に學んで其の技に過ぎ傍ら又書に巧なり（扶桑畫人傳）

イガラシ　ジザエモン　五十嵐次左衛門　寛永年間肥前唐津の城主寺澤忠高に仕へし人なり此人陶法を善くす仕へを辭して筑前にゆく黑田忠之朝鮮歸化人八歳といふものをして陶品を製せしむ次左衛門の孫にして蒔繪を善くするを以て召して八歳と共に高取に於て陶器を製せしむ是より盛に諸藩を製出し諸國の陶器はた名の茶壺數種あり今に至て名譽を失はず遠州高取燒是なり事は八歳の傳にあり（工藝志料）

イガラシ　シンサイ　五十嵐信齋　足利義政に仕へし蒔繪の名工なり當時義政の命を奉し製せし蒔繪師也上手とある即ちこれなり漆工傳統記に道甫は足利義政時代とあるは非なり（工藝鏡、工藝志料）

イガラシ　シンペイ　五十嵐信平　振津國東成郡古曾部の人に天政三年四月古曾部に陶窯を開きて古曾部燒を興せり（陶工傳統志）

イガラシ　シュンメイ　五十嵐浚明　越後泉州日野の人なり浚明は其の號一に吳は自修の氏なり（一に作る）字は方德（德一に篤に作る）弦峯、又穆翁と號す浚明は其の

イガラシ　ダヘエ　五十嵐太兵衛　幕府の蒔繪師なり寛文九年幸阿彌長房と共に京師に赴き鷹司敬平の女が入内の時の調度に蒔繪し又甲府源綱重が婚儀の調度に蒔繪したり（幸阿彌系圖、蒔繪師傳）

イガラシ　チクサ　五十嵐竹沙　南宗派の畫人なり元誠の二男、名は主膳、竹沙は其の號亦静所と號す畫を父に學びて能くす且つ當時の諸大家に就き大に畫學を勉勵して益々上達す故に其の畫父に優れり特に水墨の山水に巧みなりといふ（扶桑畫人傳）

イガラシ　チヤサン　五十嵐茶三　俳人なり越後新潟の人、本姓佐野氏、家世々商を業とす浚明に至り故ありて佐野氏を冒す浚明幼より學を好み壯年京に入り山崎闇齋の門に從て儒學を學ぶ又宇士新等と遊ぶ詩を善くするを以て稱せらる又畫を嗜しむ江戸に來りて狩野其信に學ぶ後ち宋人樑楷及張平山等の遺跡を追慕し遂に一家をなす山水人物草花共に之を能くす最も設色に長ず嘗て一樓を建てゝ畫を學ぶの所とす而して其樓を下らざる凡四十日無て書を善くす故に其の名海内に振ふ其の三子皆畫を學ぶ嘗て戒めて曰く畫は小道と雖ども因て以て世道を輔く可し留意筆を執る必ず賢哲の遺跡に於てし講んで醜褻淫褻の事を作りて以て人を敗る勿れと平生財を輕んじ己れを寒てゝ人の急を救ふ寶曆中年大に饑ゆ乃ち家資を傾けて賑濟す饑饉既に竭く更に傳寶書畫古器を鬻ぎて之に撒ぐ爲めに全活するもの甚だ多し是時郷の有司寛を濟ふの意なし乃ち府に至りて百姓の爲に之を請ふ有司愧謝大に慶を發す天明元年八月十日歿す年八十二　三子あり長を子謹と云ひ其の畫乃翁に似たり又書を能くす仲を元誠と云ふ人物に長す叔を元敬と曰ふ詩書共に美なり浚明平生飲を嗜ます人或は之を勸て曰く酒は憂を掃ふの帚なりと浚明曰予幸に太平に生れ六經の敎に薰沐し詩書及繪に優遊す其餘餘りあり未だ曾て憂を知らず帚を用ゆる所なしと（近世叢話、扶桑畫人傳、畫乘要畧）

イガラシ　ダウホ　五十嵐道甫　信濃三世の孫にして蒔繪を善くす後前田利家に聘せられ加賀に赴きたり和漢諸道具見知抄に信長時代太閤時代五十嵐京蒔繪師也上手とある即ちこれなり漆工傳統記に道甫は足利義政時代とあるは非なり（工藝鏡、工藝志料）

り奥州會津の人茶三は其の號一に石華齋又は梁園の號あり清兵衛と稱す弘化頃の人（俳諧海内人名錄）

イカルガ　カウエモン　鵤幸右衛門　山城伏見の人なり元和年間始めて小兒玩具の土偶人を造る時人呼て人形屋幸右衛門といふ其の地の工人巧を傳へて今に至る其造る所のものは土偶人及び禽獸また祭器に用ふる讒壺の類なり（工藝志料）

イカルガ　ヘイジ　斑鳩平次　初め上杉謙信に仕へ後ち諸州に漂流して加藤清正の臣莊林華人に寄食す清正平次の武力を愛して之を祿用せんと欲す華人乃ち平次に問て曰く子は仕へんと欲する乎且つ祿は多きを需むる乎我れ之を聞く子は嘗て越に仕へて祿二千石を食むと未だ其の實を審にせず請ふ其の祿の如きは月俸にして足れり抑も我の越に於けるは功を果れて得る所なり今此に到りては未だ尺寸の功なし夫れ舊秩を街りて多きを貪るが如きは越人の恥づる所なり願くは定むるとなくして仕へ他日軍旅に臨む毎に一槍を以て定めて五百石と爲さば是れ幾に之を與ふるに非らず又た虛しく之を受くるに非らずと清正之を諾可す是に於て平次征明の役に從ひ殊功を建つ總て七回にして終に三千石を食むに至れりと云ふ平次居常人に語て曰て武功に依りて名を擧げ榮耀に誇らんと欲し或は餘屢を子孫に遺さんと欲する者の如きは皆な慾なり故に能く拔群の殊功を樹つるなし每に戰場に臨みては其の地を定めて死地と爲し身命を願みざれば則ち功を建るなり強て利害得失を思惟すれば則ち絕倫の功あるべからずと（野史）

イキ　イウゴラウ　伊木祐五郎　陸軍歩兵少尉なり宮城縣出身にして明治二十七八年戰役に於て第二師團歩兵第五聯隊附にして臺灣に出征し廿八年十月十三日同嶋鹽水溪に於て戰死す

イキノアタヒ　マネコ　壹岐直眞根子　壹岐直の祖なり神皇産靈尊の九年武内宿禰筑紫に在り謀を以て弟を獲たり眞根子其貌大臣に肖たるを以て身を以て代らむと請ひ即ち鴆に伏して死す武内慟哭働哭し京師に至りて以て謀を訴へ事解することを得たり（本朝年代人物掌覽）

イキウ　ヒヤクヂ　壹岐氏　二條帝の宮人にして大藏大輔致遠の女なり六條帝を生む（大日本史）

イキ　カウカウ　壹岐好々　奥州伊達の俳人なり好々は其の號又好々庵の號あり弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イキ　カラクニ　壹岐韓國　天友帝の臣なり壬申の亂に兵に將として天武帝の將坂本財を衛我川に擊て其の軍を破る進んで莘池に戰ひ大伴吹負の爲めに敗らる其の終る所を知らず（大日本史）

イキ　コレヨ　伊岐是雄　壹岐の島石田郡の人なり本姓は卜部後ち今の姓を賜ふ始祖忍見足尼命より多きを需むる乎我れ之を聞く子は嘗て越に仕へて祿二千石を食むと未だ其の實を審にせず請ふ其の祿の如きは月俸にして足れり抑も我の越に於けるは功を果れて得る所なり今此に到りては未だ尺寸の功なし夫れ舊秩を街りて多きを貪るが如きは越人の恥づる所なり願くは定むるとなくして仕へ他日軍旅に臨む毎に一槍を以て定めて五百石と爲さば是れ幾に之を與ふるに非らず又た虛しく之を受くるに非らずと清正之を諾可す是に於て平次征明の役に從ひ殊功を建つ總て七回にして終に三千石を食むに至れりと云ふ平次居常人に語て曰て武功に依りて名を擧げ榮耀に誇らんと欲し或は餘屢を子孫に遺さんと欲する者の如きは皆な慾なり故に能く拔群の殊功を樹つるなし每に戰場に臨みては其の地を定めて死地と爲し身命を願みざれば則ち功を建るなり強て利害得失を思惟すれば則ち絕倫の功あるべからずと（野史）

イキ　コマロ　伊吉古麻呂　大寶の初遣唐使雲中其功勞を賞して綿布鉄穀を賜ふ（大日本史）

イキ　タダツグ　伊木忠貞　池田侯の臣なり三十郎、大炊忠次始めて池田信輝に事ふ父忠繁は邈波の役に功あり忠貞五歳にて父殁す池田氏其の食邑三萬三千石を賜ふ元和三年池田氏の轉封に從て伯州倉吉に徙る寛永九年又從て備前に徙る十一年池田氏の命を奉じて武江に往き城壁を築く役畢るの後ち德川氏に謁し衣服及び白金を賜はる十九年又池田氏に武江に從ひて築役を執る寛文三年禁裏に踐祚の事あり池田氏忠貞を京師に遣はして賀を上らしむ十二年病て武州河崎驛に卒す年六十一（事實文編）

イキ　ダダツグ　伊木忠次　尾州清洲の產始め香川を氏とす骨て濃州伊木山の役に軍功あり繰て改めて伊木と稱す所謂伊木清兵衛是なり始めて營を池田信輝に執る振州花熊及び城州山崎尾州犬山の戰に堅を破り敵を走らし武名甚だ著はる輝政の播州を領するに遂て忠次を從五位下に叙し豐後守に任じ同州三木城に居らしめ秩祿三萬七千石を賜ふ（事實文編）

イキ　トウエン　壹岐桐園　飫肥藩の儒者なり名は幸猷字は道夫通稱五左衛門本姓杉本氏出でゝ壹岐氏を嗣ぐ長崎に遊び吉村正庭の門に入る入後敏多藝兵術に通じ繪畫を善くし象胥の譯に精し享和元年藩の敎職となり譯司を兼ぬ高山弘孝川崎良忠と建言して學を興す後江戸に役し勞ら古賀精里に學ぶ是より先藩小説籍甚だ乏し桐園建言して歳に數百卷を購む常に巧智を先にし節操を後にし練達を以て稱せらる年四十六愛謀に擢でられ寵遇比なかりしが後故ありて罷められ家居快々九年にして殁す歳五十七詩集二卷あり（日本敎育史資料）

イキ　トウタケ　伊木遠雄　勇力の士なり曾て大阪の役眞田幸村に從て天王寺を守り東軍と戰ひて男名を著はせり然れども衆寡敵せず戰ひ敗るゝに及びて遁れて往く所を知らず（本朝武功正傳）

イキ　ハカトコ　伊吉博德　齊明天皇の朝に遣唐副使津守吉祥等と共に唐に在り讒せられて罪を獲り時德も亦其の中にあり其の證を申辯す因て免るを得たり時に唐百濟を伐つ博德西京に幽囚せられ困苦年を經既にして事平ぎ國に歸ることを得歸航の途風に遭ひ耽羅島に漂到す其王の子阿波岐等九人を率て來る耽羅島の入貢此に始る天智帝の時に至りて博德小山下に叙す百濟司馬法聰等を護送し年を踰て還る大津皇子の謀反するや博德之に驚す持統帝省て問はず後務大貳に進み直廣肆小野毛野等と新羅に使す大寶中律令定むるの功を賞して田十町を賜ひ五十戸に封じ從五位上に叙せらる寶宇の始め太政官奏して功田を子に傳へしむ（大日本史）

イキ　ハムグワン　壹岐判官「タヒラトモヤス」　生不動與兵衛「ヨヘエ」

イキフドウ　ヨヘエ

イクガ　郁賀　陸州の俳人なり氏は山口通稱善右衛門字山梅人の門人（俳諧人物便覽）

イクグヒノカミ　活杙神　角杙神の妃なり（古事記）

イクコ　ニヨウウ　幾子女王　直仁親王の女なり元文五年十一月法華寺を繼ぐ寛延元年剃髮して名を高覺と改め眞如と號す明和元年十一月薨す時に歳二十八、諡して眞照律院と號す（野史）

イクコシ　やスサダ　生越安貞　陸軍歩兵

少佐なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや後備役より召集せられ第一師團歩兵第一聯隊附として出征し同年十一月二十八日清國盛京省寺兒溝西方高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イクシウ　サブラウザ　郁洲「シノザキサントウ」　生島三郎左長崎の人にして蕃書を善くす少にして陸摩に往き其地に住する洋人より其描法を傳はりて妙を得たり弟藤七螺鈿を善くし且つ百技に巧みに兄弟名を世に擅にせり（長崎先民傳）

イクシマ　シンゴラウ　生島新五郎　俳優なり京都に生れ江戸に下りて山村座に出演す幕府の侍婢江島と通じ竊かに城中に出入す正德四年顯はれて八丈島へ謫せらる山村座亦爲に業を禁せらる享保十八年正月歿す年六十四（古今役者大全）

イクシマ　トウシチ　生島藤七　元和年間の人にして長崎に住す螺鈿嵌裝の巧手なり（長崎先民傳、工藝志料）

イクシエン　郁子園「カタヲカヒロミツ」

イクタノカミ　生田神「ワカヒルメムチノカミ」

イクタ　キヤノスケ　生田木屋之介　勇士なり舊名隅田小介といふ日向の人なり隅田刑部の嫡男たり十六歳の時其朋輩を殺して出奔し墨田の臣井上九郎右衛門の許に潛り質を孝隆に委せんと請ふ九郎其の贈力を愛し時を以て薦達せんと欲す其の夜隣舍に入り殺せる者あり木屋之介直に往き之を縛す九郎即ち孝隆に說き即日職祿を授く嗣後橋津の生田にて衆に擬して手柄ありければ孝隆悅び名を生田木屋之介と命ず天正五年佐用城攻の前宵竊に城壁に附て屏柱に鋸の切痕を入れて目標となし翌日先登して其柱を鈎縄にて曳蹶し城を陵て進分の功を揚げぬ（豪雄言行錄）

イクタマ　クニヒデ　生田國秀「イクタミチマロ」

イクタマ　キンブウ　生玉琴風　江戸の俳人なり元大阪の人槃羅架と號す芭蕉其角等の門に遊ぶ享保十一年二月七日歿す（俳家物故年表、江戸名家墓所一覽）

イクタ　ゼン　生田漸　陸軍歩兵大尉なり熊本縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第十聯隊附として出征し同年八月三十日清國盛京省クウシヤツイ北方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イクタ　トウサブラウ　生田登三郎　薯熊本藩士にして明治十年西南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍中三月十五日肥後國山本郡横平山に於て戰死す

イクタ　トライチ　生田虎一　陸軍砲兵少佐なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第九師團野戰砲兵第九聯隊附として出征し同年八月二十三日清國盛京省盤龍山西蕎砲台に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イクタマベ　タルクニ　生玉部足國　阿波の人天平寶龜中和歌を善くするを以て世に其の名あり詠歌は萬葉集其他諸書に載す頗ふる秀逸多し（萬葉集作者履歷）

イクタ　ミチマロ　ヨリヒメ　活玉依媛「タマヨリヒメ」

イクタ　ヨリヒメ　活玉依媛「タマヨ

イクタ　ジンエキ　生熊順益　江戸の醫にして伊豫西條の人、世々醫を業とし最も外科を善くす家方に椒蓮油あり「ソイノウリヨ」と稱す金瘡に神効あり故に俗に金瘡膏と稱す文政中の人（今世醫家人名錄）

イクマ　セン　生馬仙　隱者なり攝州住吉郡の人河内高安郡の東山に入り深谷の中に住す寛平九年沙門明達頭陀の行を持し東山の絕頂に至り深谷を見るに草庵あり下て庵所に到るに優婆塞あり顏色黃粟に似たり頭に白帽を戴き身に白衣を著る明達近づき問て曰く誰そや對て曰くは我ほ是れ生馬仙なりと乃ち五瓜を明達に與へて曰く是れ此地の產なり以て飢に充つべしと明達之を嘗む其の美言ふ可らず明達更らに問ひて曰く此に何なか爲すと曰く吾れ山に入りてより以來未だ山脚を見ず唯々菁墻を求む耳と云ふ（元享釋書）

イクメイリヒコ　イサチノコト　活目入彦五十狹茅天皇「スキニンテンワウ」

イクワシ　伊窩子「フヂキランサイ」

イクワン　以貫「ホツミイクワン」

イクキ　キウシツ　活井舊室　江戸の俳人なり聽々坊又岳雨と號す堅家逸志の門人なり身の丈け大にして世の人天狗坊と云ふ句あり曰く「夕立に打たれてふとる田面哉」明和元年十一月廿八日歿す年七十（俳林小傳、俳家物故年表）

イケイ　オシヤウ　怡溪和尙　石州流の茶

イクタ　ゼン　生田善　陸軍砲兵少尉なり熊本縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第十聯隊附として出征し同年八月三十日清國盛京省ヤツイ北方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イクタ　トウサブラウ　生田登三郎　薯熊本藩士にして明治十年西南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍中三月十五日肥後國山本郡横平山に於て戰死す

イクタ　トライチ　生田虎一　陸軍砲兵少佐なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第九師團野戰砲兵第九聯隊附として出征し同年八月二十三日清國盛京省盤龍山西蕎砲台に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イクタマベ　タルクニ　生玉部足國　阿波の人天平寶龜中和歌を善くするを以て世に其の名あり詠歌は萬葉集其他諸書に載す頗ふる秀逸多し（萬葉集作者履歷）

イクタ　ミチマロ　生田道滿　國學者なり上州館林の浪人にして平田篤胤の門に入り其の學を受け平田篤胤の門に入り其の學を受け平田篤胤の門に入り其の學を受け

して常に章布の交を爲す故に都下碩儒禍匠夫の一技一藝有る者と群胥來往卒に虚日なし冠山亦老健荷くも與に語る可き者あれば貴賤を論ぜず身親から訪訊し殆んと其の封侯たるを忘るゝ也遂に薙髮して冠山道人と稱す文政十二年己丑三月に至り砲洲の賜邸災に罹る因て移りて砂村の別業に居り自後漸く泛交を謝し一二の親串と相來往す或は娛みを園地樹藝に寄せ澹然息慮し以て自から頤養す是歲七月七日適ゝ砲洲の宿に如く其翌丙夜頂背痛み甚だしく癘風の如し左右倉皇醫を邀ふ醫刺絡して稍ゝ緩るむ復た發す療治効なく九日貧の初刻を以て正寢に終ふ（事實文綱）

イケダ　ゲンベエ　池田源兵衛　津經の藩士なり元祿十年藩主源兵衛を江戸に遣り青海勘七の門に入り槍技を學ばしむ業成りて國に歸り韓逸及び青海波文を製すこれ即津輕逸の祖なり源兵衛の孫青海氏を稱し世ゝ相繼ぎ今日に至る韓逸の槍法を用ゐず是れその異なる所なり（工藝志料、漆工傳統紀）

イケダ　コソン　池田孤村　畫人なり名は三信、孤村は其の號、又舊松軒と云ふ越後の人、弱年の頃東都に來り畫を沼井抱一に學びて其の趣を得晚年明畫を學びて稍ゝ畫風を一變す曾て抱一の著はせる光琳百圖に倣ひ新撰光琳百圖を著はして世に賞翫せらる一時抱一の遺跡を鑑定して世人の疑惑を解す性雅趣あり世に一奇人と稱せらる慶應二年二月十三日歿す年六十六（扶桑畫人傳）

イケダ　サウアン　池田草庵　豐岡藩の儒者なり名は禎藏字は子敬少壯にして京都の松尾山に隱れて書を讀み春日潛庵と尤善し後但馬に歸り宿南村に青溪書院を建てゝ教授す其學王朱に偏せず躬踐實業を力む後豐岡の藩黌に聘せられて講説す所著大學説讀、易餘、書經紊說、詩文集若干卷あり（日本教育史資料）

イケダ　シゲアキ　池田重顯　家康の臣なり越前守と稱す重政の子にして參議輝政の甥なるを以て武門に列し慶長十九年五月廿一日德川家康に仕て其の家人となる十月大阪の軍起る重顯命を受け尼ケ崎の城を守る建部三十郎政長を援て功あり孫又八郎邦照に至て家絕ゆ（君臣畧傳）

イケダ

イケダ　シン　池田晋　德川幕府の醫官なり名は晉柔行と號す又錦橋と云ふ瘡瘍の療治を專門とす古鑑堂と號せり（鑒定便覽）

イケダ　シャウイ　池田正意「フルゴホリ　ヒロヱモム」

イケダ　シャウシキ　池田正式　大和國郡山の藩士なり松永貞德が門に入り俳諧を能くし餘ほらり狂歌を詠ず平群實柿、布爾田遣等の狂名は其の戲號なり松江維舟毛吹草を著して正式の「庭訓は春のはじめ　正式怒り氷室守を著して毛吹草を詈る維舟元より狂歌の性禁する能はず大に爭ふ正式其の赫怒に恐れ謹て之を慰喩す（俳林小傳）

イケダ　シャウニフ　池田勝入「イクダノ　テル」

イケダ　センサイ　池田遷齋　江戸の書家なり名は隣字は德潤彌十郎と稱す文化七年二月十三日歿す自山蓮華寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

イケダ　ソリウ　池田素琉　奥州仙臺の俳人也素琉は其號一に玉理山の號あり茂兵衛と稱す弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イケダ　タイリ　池田太理　高魂命の後なり延暦四年正六位下を授けらる明年外從五位下に進む仁和元年下總國海上郡大領となり外從五位上に叙せらる大理和歌を善くす其の歌は萬葉集其の他諸書に見ゆ（萬葉集作者覆歷）

イケシリ　タケゴラウ　池尻嶽五郎　勤王の志士なり諱は仲懸筑後國久留米藩士にして文久三年私に藩を出て京都に遊び又長州に下り類りに國事に奔走せしが元治元年水戸に事起ると聞き頓て彼地に赴き藤田小四郎の部下に屬し筑波山に籠れり事敗れて後藤田等と共に途を北陸に取りて西上せんとする中信州和田嶺に於て戰死す時に年二十二明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に從五位を贈らる（殉難錄稿）

イケシリ　モシラウ　池尻茂四郎　勤王の志士元治甲子の京變に殉難せる天王山十七士の一人なり伯憲諱は憲久留米の藩士なり幼より文學の才あり子なり小字は松千代、母は良照源夫人、慶長十二年正月將軍德川秀忠諱字及び族を賜ひ從五位下に叙し宮内大輔と稱す時に年甫めて七歲、十五年二月淡路國を輝政に加封し忠雄の封國となす十八年正月父薨じ淡路國を割き六萬三千石を食み成山城に居る十九年大阪の軍に從て赴く元和元年六月忠雄の後を承け封を備前國三十二萬石に轉ず二年正月從四位下に叙し侍從に任ず寛永三年八月參議に任じ正四位下に進む九年四月薨ず年三十一法名仁秀良勇清泰院と號す（野史）

イケダ　ツナマサ　池田綱政　光政の子從四位下左少將兼伊豫守に叙任し備前岡山の大守たり武凖の餘暇和歌に志し其蘊奥を得て秀歌多し亦畫に能く祖宇治平等院に納むる所源三位頼政入道頼圓の像は先たる人を致したり

イケダ　テルオキ　池田輝興　輝政の第六子なり小字は古七郎、元和元年六月佐用の田を賜ひ寛永三年八月從五位下に叙し右近衛將監と稱し松平を賜ふ八年見政綱卒して嗣なし赤穗城を賜ひ邑五萬四千七百石を食む十一年七月正位下に叙す正保三年狂を發し備前に流さる四年五月卒す年三十七法名松巖英秀小林院と號す（野史、君臣畧傳）

イケダ　テルズミ　池田輝澄　輝政の第四子なり小字は松千代、母は良照源夫人、元和元年六月播磨宍粟の田六萬石を割き輝澄に賜ひ從五位下に叙し寛永三年八月侍從に任ず十七年家政治らざるを以て采邑を沒收し因州鹿野に配流せらる尋で薙髮して石入と號す寛文二年四月卒す年五十九法名一圓徹心大雲院と號す（野史、君臣畧傳）

イケダ　テルマサ　池田輝政　信輝の二子なり小字は新古、母は荒尾善次が女、清須に生る、初の名は照政、天正八年父兄に從ひ華陽城を攻めて敵を獲信長書及び馬を賜ふ十九年父の血統なり十月織田信忠に從て甲斐を攻む既にして信長弑に遇ふ秀吉葬儀を大德寺に行ふ輝政信長が乳母の子なるを以て織田秀勝と稽ふ昇ふ十二年四月長秋の戰父兄供に死して部下の兵敗走す輝政單騎敵を求む國人鎖を執り圍ふる勤む輝政叱して曰く父兄皆な殁す我れ何の面目ありて獨り生んやと圍人曰く郎君存ずんば誰か父兄の後を承くるものぞと輝政怒りて馬に鞭ち鎧を以て其の頭を蹋る血流れて鎧に及ぶ國人仰れて復た起き覓ひ控て圍る十三年岐阜に徙る三左衛門と稱す八月關白秀吉佐々を成政を征す輝政之に從ふ十五年秀吉に從て薩摩を攻む十六年秀吉豐臣氏井族羽柴を賜ふ從五位下に叙し侍從に任ぜらる四月從四位下に進む十八年又從て小田原を征す七月城陷る進みて會津に抵る州郡悉く平伊勢小栗栖の莊を賜ひ在京の料とす十五萬二千石を食む又た女を娶る利隆を產んで死す文祿三年九月秀吉命じて輝政に配するに德川家康の二女を以てす是を良照源夫人とす慶長五年家康に小山の行營に從ひ上國の變起るに及びて輝政福島正則と先鋒となり四月上旬遂甲斐四州の賊子を吉田城に收む八月十四日清須に抵る源夫人及二男大阪に在り輝政の妹夫山崎家盛大阪に驚す然れども意歸順を懼く三成悉く質子を收むと聞き竊に輝政の爲めに夫人及二子を取りて之を三田に送る廿二日前軍須を發す中納言織田秀信木曾川に拒く輝政新加納より河上正則萩原より各ゝ渡口に出つ岐阜の兵新加納大野の際に陣す輝政兵七千餘を率ゐて上流より渡る敵と米野に戰ひて之に克つ斬獲多し日已に沒し軍を收め宇島及新加納に屯す廿三日遲明正則と岐阜城を攻て之を陷る九月十五日關原の戰に家康輝政に命じて南宮に備へしむ輝政曰く翼くは三成に當らん家康曰く孤が後陣に備へよ輝政枉て之に從ふ十一月封を播磨に轉ず以て五十二萬石を食む八年正月備前三十一萬石を加賜し以て二子忠繼の食邑とす二月右近衛權少將に任ぜらる三月忠繼を携て命を東府に拜す將軍秀忠宴を賜て厚く之を饗す歸るに及びて大久保忠常安藤重信を以て之を箱根に送らしむ輝政京師を過ぎ家康に見え請て曰く忠繼幼弱、長子利隆を以て新封を撫せんと家康之を可とす十二年七月後陽成帝勅して飯馬を賜ふ十五年三月淡路國六萬三千石を賜て以て三子忠雄の支封に充つ十七年正月輝政疾に廢す家康近臣を以て之を視せしむ秀忠安政四年肥薩の間に遊歷し著名の士を訪ひ萬延元年藩命を以て三年間遊學を申付けられ江戸に往き安井衡が塾に入り居ること一年半時勢を察し病に托して歸郷す文久二年京攝の間果して騷擾す是に於て藩命を以て京攝間の動靜探索に從事す時恰も薩長土三藩の戰力して王事に勤むべしとの密勅下り茂四郎を御所に召して旨を授けらる茂四郎感奮是より縉紳の間に出入して盡力頗る勗む此歲十一月勅使三條姉小路の兩卿關東下向の時茂四郎も亦藩命により之に從行し江戸傳奏屋敷に至り勅使の歸京まで之に隨從せり其後歸國して中山侍從が長藩士數十人を率ゐ來り眞木和泉等の幽を解きて歸るに際し茂四郎は藩老の命により長州まで之を見送り偶ゝ赤間關外艦打拂に加はりたり文久三年八月上京を命ぜられ馬關を經三田尻に過り七卿に謁し九月二十日大阪に着し直に上京せんとするに方り藩命あり上京を差止められ茂四郎等續續の情空しく歸るに忍びず竊に上京して室町の旅館に滯留して事情を探索す姉東之助等と知り捕へんとす茂四郎等已むを得ず津和野邸に潛匿し尋で石州津和野に護送せられ更に長州に移る元治元年七月長藩の壯士京都に事を起すに及び茂四郎は眞木和泉等と共に鷹司邸に在りしが最後に會藩の兵鷹司邸を圍ふ茂四郎等數十人奮て門扉を開き躍出して敵數人を仆す尋で天王山の本營に至れば長兵皆去て在らず依て詩一絕歌一首を賦し同志十七人と共に屠腹して死す年二十五明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

イケダ　アキマサ　池田章政　舊岡山藩主なり天保七年五月肥後人吉城に生れ初め滿次郎と稱す相良伊岐守頼之の二男なり弘化四年池田家支封信澄守政善の養子となり明治元年三月遂に入つて宗家を繼げり後從一位に叙し侯爵を授けらる三十六年六月五日病危篤となり特に勳一等に叙し瑞寶章を賜ふ同日東京府下荏原郡大崎村の自邸に薨ず郷里岡山に葬る

イケダ　イタミ　池田伊丹　陸軍少兵大尉なり廣島縣出身にして舊備後福山藩士池田高房の次男なり年十八歲にして士官候補生となり二十九年士官學校を卒へ三十年少兵少尉に任ぜらる三十二年中尉を以て鹽灘守備附となる後原隊に復し三十七年四月大尉に進

み五月第五師團第十一聯隊中隊長を以て日露の戰役に從軍す爾來得利寺鹽平大石橋等に轉戰し終に遼陽の大戰に中央軍に屬して猛戰し九月三日遂に戰死す遂ぐ年二十九特殊の戰功によりて功四級勳五等に叙せらる

イケダ　カツタタラウ　池田龜太郎　陸軍少兵少尉なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第四師團歩兵第八聯隊附として出征中三十八年三月五日清國盛京省漢城堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イケハタ　キヨヒデ　池端清秀　舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て三等中警部を以て別働隊第三旅團附として從軍中三月十二日肥後國鮑田郡段山に於て戰死す

イケダ　クジフラウ　池田九十郎　新潟縣出身にして明治十年西南役に於て二等少警部を以て別働隊第三旅團附と爲り從軍し七月十六日日向國臼杵郡梅木村に於て負傷し十月一日大阪臨時陸軍病院に於て死す

イケダ　セイレイ　池田政禮　舊生坂藩主なり嘉永二年十二月江戸に生れ安政二年十二月生坂一萬石千石の封を繼ぎ元治元年參内して天盃を賜はる明治元年正月伏見の役に猿ケ辻警衛を命ぜられ大津に出て宗藩岡山の兵と合し防禦すべきの命を受け戰鬪して殊功あり二年版籍を奉還し華族に列す十七年七月子爵を授けらる四十年十月七日病歿す年五十九病革まるに及び特旨を以て正三位に陞叙せらる

イケダ　タイシン　池田泰眞　東京の人蒔繪の名手にして帝室技藝員たり明治三十六年三月九日京橋藥研堀の自宅にて死去す

イケダ　タダツグ　池田忠繼　輝政の第二子なり小字は藤松丸、母は良照源夫人、慶長九年正月備前國を輝政に賜ひ忠繼の封國となす更に十郎と稱す十三年將軍德川秀忠諱字及族を賜ひ正四位下に叙し侍從に任じ右衛門督を兼ね十八年播州宍粟佐用赤穗三郡を加叙す十九年大阪兵起る忠繼兵を率ゐ野田福島を攻め之を取る進て今橋口を攻む城中砲を發する雨の如し秀忠鐵楯を忠繼等連りに巨砲を發し城墻を射る城兵橋に火して去る元和元年二月遽かに卒し年僅かに十七法名靈臺元祥龍峰寺と號す忠繼孝友智勇を兼ぬ子なし弟忠雄嗣ぐ（野史、君臣畧傳）

イケダ　タダヲ　池田忠雄　輝政の三子なり小字は勝五郎母は良照源夫人、慶長十二年正月將軍德川秀忠諱字及び族を賜ひ從五位下に叙し宮内大輔と稱す時に年甫めて七歲、十五年二月淡路國を輝政に加封し忠雄の封國となす十八年正月父薨じ淡路國を割き六萬三千石を食み成山城に居る十九年大阪の軍に從て赴く元和元年六月忠繼の後を承け封を備前國三十二萬石に轉ず二年正月從四位下に叙し侍從に任ず寛永三年八月參議に任じ正四位下に進む九年四月薨ず年三十一法名仁秀良勇清泰院と號す（野史）

イケダ　ツナマサ　池田綱政　光政の子從四位下左少將兼伊豫守に叙任し備前岡山の大守たり武凖の餘暇和歌に志し其蘊奥を得て秀歌多し亦畫に能く祖宇治平等院に納むる所源三位頼政入道頼圓の像は先たる人を致したり

イケダ　テルオキ　池田輝興　輝政の第六子なり小字は古七郎、元和元年六月佐用の田を賜ひ寛永三年八月從五位下に叙し右近衛將監と稱し松平を賜ふ八年見政綱卒して嗣なし赤穗城を賜ひ邑五萬四千七百石を食む十一年七月正位下に叙す正保三年狂を發し備前に流さる四年五月卒す年三十七法名松巖英秀小林院と號す（野史、君臣畧傳）

イケダ　テルズミ　池田輝澄　輝政の第四子なり小字は松千代、母は良照源夫人、元和元年六月播磨宍粟の田六萬石を割き輝澄に賜ひ從五位下に叙し寛永三年八月侍從に任ず十七年家政治らざるを以て采邑を沒收し因州鹿野に配流せらる尋で薙髮して石入と號す寛文二年四月卒す年五十九法名一圓徹心大雲院と號す（野史、君臣畧傳）

イケダ　テルマサ　池田輝政　信輝の二子なり小字は新古、母は荒尾善次が女、清須に生る、初の名は照政、天正八年父兄に從ひ華陽城を攻めて敵を獲信長書及び馬を賜ふ十九年父の血統なり十月織田信忠に從て甲斐を攻む既にして信長弑に遇ふ秀吉葬儀を大德寺に行ふ輝政信長が乳母の子なるを以て織田秀勝と稽ふ昇ふ十二年四月長秋の戰父兄供に死して部下の兵敗走す輝政單騎敵を求む國人鎖を執り圍ふる勤む輝政叱して曰く父兄皆な殁す我れ何の面目ありて獨り生んやと圍人曰く郎君存ずんば誰か父兄の後を承くるものぞと輝政怒りて馬に鞭ち鎧を以て其の頭を蹋る血流れて鎧に及ぶ國人仰れて復た起き覓ひ控て圍る十三年岐阜に徙る三左衛門と稱す八月關白秀吉佐々を成政を征す輝政之に從ふ十五年秀吉に從て薩摩を攻む十六年秀吉豐臣氏井族羽柴を賜ふ從五位下に叙し侍從に任ぜらる四月從四位下に進む十八年又從て小田原を征す七月城陷る進みて會津に抵る州郡悉く平伊勢小栗栖の莊を賜ひ在京の料とす十五萬二千石を食む又た女を娶る利隆を產んで死す文祿三年九月秀吉命じて輝政に配するに德川家康の二女を以てす是を良照源夫人とす慶長五年家康に小山の行營に從ひ上國の變起るに及びて輝政福島正則と先鋒となり四月上旬遂甲斐四州の賊子を吉田城に收む八月十四日清須に抵る源夫人及二男大阪に在り輝政の妹夫山崎家盛大阪に驚す然れども意歸順を懼く三成悉く質子を收むと聞き竊に輝の爲めに夫人及二子を取りて之を三田に送る廿二日前軍須を發す中納言織田秀信木曾川に拒く輝政新加納より河上正則萩原より各ゝ渡口に出つ岐阜の兵新加納大野の際に陣す輝政兵七千餘を率ゐて上流より渡る敵と米野に戰ひて之に克つ斬獲多し日已に沒し軍を收め宇島及新加納に屯す廿三日遲明正則と岐阜城を攻て之を陷る九月十五日關原の戰に家康輝政に命じて南宮に備へしむ輝政曰く翼くは三成に當らん家康曰く孤が後陣に備へよ輝政枉て之に從ふ十一月封を播磨に轉ず以て五十二萬石を食む八年正月備前三十一萬石を加賜し以て二子忠繼の食邑とす二月右近衛權少將に任ぜらる三月忠繼を携て命を東府に拜す將軍秀忠宴を賜て厚く之を饗す歸るに及びて大久保忠常安藤重信を以て之を箱根に送らしむ輝政京師を過ぎ家康に見え請て曰く忠繼幼弱、長子利隆を以て新封を撫せんと家康之を可とす十二年七月後陽成帝勅して飯馬を賜ふ十五年三月淡路國六萬三千石を賜て以て三子忠雄の支封に充つ十七年正月輝政疾に廢す家康近臣を以て之を視せしむ秀忠

亦屬ゝ之を問ふ尋で疾癒ゆ八月驗府に往き命の辱きを拜す尋で又東府に來る秀忠饗宴を營中に賜ひ桑譜に任じ從三位に陞らしめ族松平を賜ふ九月京師に朝し詔を拜して國に歸る十八年正月疾再び發し遂に薨す年五十法名泰叟玄高と云ひ國清院と號す輝政年甫めて十一父信輝に侍す信輝栗を燼中に燬り之に謂て曰く汝ぢ之を欲する乎輝政曰く唯と乃ち栗を挾んで之を與ふ箸熱して火の如し輝政怯れず手を延ばして受く其人と爲り沈毅寡欲にして大略あり恒に言ふ我は大主の殊遇を荷ひて列國を併有す以て恩の報すべきなし但ゝ四方事あれば播磨に賜ふに及んで姫地城を通宿中國府寺の三邑に築き更に姫路城と號す食邑を割き金帛を散して以て名士を招致す常に言ふ國主の職は士を養ひ民を撫するに在り治には藩屏たり亂には干城たり是の如き而已封侯の富豈に一身の計の爲めならんやゝ乃ち女色を遠け珍玩を卻く其の自ら奉する儉素一に奢侈を省く西道倚りて以て重しとす大封を得るの後侯伯の宴會に或は私に輝政の短小を嘲るものあり輝政扇を擧て起て舞て曰く勇力あること此の如し封邑あるゝ此の如し何ぞ身の長大なを求めんと發ずるに及んで上下惋惜す八子あり利隆、忠繼、忠雄、四澄、政綱、四興、政虎、利政(野史)

イケダ ドクビ 池田獨美 德川幕府の醫官なり名は獨美字は善卿櫛橋と號す瑞仙は其通稱、周防岩國の人世ゝ痘科を業とす曾祖正直獻笠に從て治痘祕訣を受け圖說を作り家に藏す子孫傳て以て法と爲す瑞仙幼にして孤、叔父詮慰之を教育す長ずるに及びて兼て大小の諸科を攻む荷蘭の外治を以て行はる而れ共瑞仙志家學を隆興するに在り岩國は痘瘡少衞を試むる所なり瑞仙圖說に由て治を爲す效應響の如く始て其の妙を信ず悉く從前爲す所を棄て專ら家學を修む古今の痘書を取り之を總訣に參一磨礪數年術大に熟す大阪の商兒の爲めに治を求むる者あるに値ふ瑞仙往診す時に毒痘傳染比屋夭折す瑞仙の名を聞き爭ひて請ふ其の良毒險寒順逆死生瑞仙一目能く言ふ後皆其の言の如し世醫始めは疑ひ終りは則ち其の精妙に服す是に於て治を乞ふ者貴を執る者相繼き門闌市の其く其の說圖を寶遣し以て利を規牟する者あるに至る大阪に在る數歲京師に徙る寛政中幕府の辟に應じて江戸に至り醫官と爲る痘書を蹟審院に講す醫官に痘科あるは瑞仙より始まる瑞仙性簡宏渺闊を修ぶ怎ず然るに甚だ家法を惜む血を刺し神に誓ひ鍼心厮求するに非ざれば敢て輕く傳へず而して其指授を經る者皆能く名を世に見はす養し痘瘡の方瑞仙に至りて稍ゝ備る治效枚擧するに遑あらず一兒あり性頗宏渺闊を修ぶ怎ず然るに甚だ家法を惜む血を刺し神に誓ひ鍼心厮求するに非ざれば敢て輕く傳へず而して其指授を經る者皆能く名を世に見はす養し痘瘡の方瑞仙に至りて稍ゝ備る治效枚擧するに遑あらず一兒あり黑伏陷起きず口吻血を流し殆んと死に瀕す瑞仙正涼隔散を作り麻黃穿山甲を加へ之を與ふる三日藥を服する三十貼遂に生く率れ是の類なり其著す所痘科辨要痘瘡戒草、痘科鑑刪正 治驗錄、及遺稿等なり(皇國名醫傳)

イケダ トシタカ 池田利隆 輝政の長子なり母は中川清秀の女、岐阜に生る本名は宣歷小字は新藏、慶長五年父に從ひて岐阜城を攻む八年弟忠繼封を備前國に嘉く利隆代りて撫綏す十年三月正五位下に叙し右衞門督と稱す四月從四位下に叙し侍從に任ず十二年將軍德川秀忠榊原康政の女を以て養女となし利隆に配す是を福照源夫人となす十二年九月利隆始めて東府に抵る族を賜ふ更て武藏守と稱す十八年正月輝政薨去す六月府命して其の封を割き播磨を利隆に予ふ十九年冬大阪の兵起る利隆駿府に在り即夜姫路に歸り尼崎を守る尋で二弟と大阪を攻む是の時弟忠繼と竝び進んで長柄川に抵る利隆上流より濟らんと欲す監軍城昌茂之を止む忠繼乃ち其の下流より濟る守兵奔潰す利隆怒り命じて濟らしむ昌茂固く之を止めて曰く地理を審らぜずして輕舉深入せば恐らくは敗衂を取らん利隆曰く我れ豈に必勝を期せん然れども弟先ん已兄後るゝは武に非ず戰若し克されば之に死せんのみゝ遂に鬻して馳す昌茂呼んで曰く大將軍命あり師は全勝を期すと我盲に從はざれば是れ大將軍の命を靡するなりゝ利隆切齒し既にして忠繼覬江を渡つて福島寒を取る利隆猶ほ長柄に在り塵を望んで齊らんと欲す昌茂復た之を止め自ら之を奪て專ら家學を修む古今の痘書を取り之を總訣に參一磨礪數年術大に熟す大阪の商兒の爲めに治を求むる者あるに値ふ瑞仙往診す時に毒痘傳染比屋夭折す瑞仙の名を聞き爭ひて請ふ其の良毒險寒順逆死生瑞仙一目能く言ふ後皆其の言の如し世醫始めは疑ひ終りは則ち其の精妙に服す是に於て治を乞ふ者貴を執る者相繼き門闌市の其く其の說圖を寶遣し以

事實文編)

イケダ トモチカ 池田伴親 圖藝學者なり苗松山藩士池田讓藏の一子後東京に移住して四谷區左門町に生る幼にして穎悟强記三歲にしてよく百人一首を諳記せりといふ明治三十一年第一高等中學を優等を以て卒業し直ちに農科大學に入り三十四年七月卒業學術品行共に優等なるを以て賞賜の時計を受く本邦圖藝學の不進を慨し大學院に入り斯學を專攻し傍ら農科大學に教鞭を執り圖藝學を講じ三十九年農科大學助教授となり尙圖藝學の講座を擔任せり大學院在學中果樹園に關する研究を爲し果樹論を著述し尋いで圖藝果樹論圖藝蔬菜教育書等の著述を刊行し圖藝學會の依頼を受けて日本果木栽培論を英文にて著し其講に應じたり蓋し當時我邦唯一の圖藝學者なり居常學術の研鑽を以て樂みとなし爲めに健康を害するに至るも省みず溫厚人と爭はず學生時代には運動を能くし屢ゝ撰手となりて競技に加はりたり四十年三月論文を以て農學博士の學位を授けられしが尋で同十五日病を以て逝く

イケダ トラク 池田都樂 幻燈師なり初代は高松熊吉と稱す江戸日本橋瀨戸町に住す魚屋と云ひ染物の上繪を業とす長崎の人より蘭人の幻燈の談を聞き之を製せんと欲し飯田町の醫高橋玄養に藥用を問ひ自ら之を畫ゝ三笑亭可樂の門人となり眞笑亭都樂と號し享和三年三月始めて牛込神樂町春日井と云へる寄席に之を興行す是幻燈の始なり嘉永五年十二月廿七日歿す年七十三子二世都樂德右衞門と稱し三世は池田友吉初め郡山に學び都鏡と號す明治二年三世を襲ぐ四世現に幻燈製造を業とす(池田都樂氏贈、名人忌長錄)

イケダ ナガアキ 池田長顯 始め修理と稱す後筑後守と稱す父は長淳母は林述齋の女なり文久二年目附に任じ先手加役京都町奉行を輕て外國奉行となる使命を承け河津祐邦等と歐洲各國に赴き鎖港の事を談すれども要領を得ず歸朝の後開國の建白をなす故を以て罷を蟄り封を削られ職を褫はる後軍艦奉行となり病を以て辭す(舊幕府)

イケダ ナガツネ 池田長常 長崎の長子にして信輝の曾孫なり小字は猿元和元年叙爵し出羽守と稱す寛永九年父の後を繼ぎて松山の城主たり十五年

九月卒す年三十二子無くして家絕ゆ長常性勇悍武を講し士を愛す(野史)

イケダ ナガヒロ 池田長溥 幼名虎彥勝彥と改め後修理と稱し筑後守に任ず系清和源氏に出つ天正中紀伊守名は信輝武を以て聞ゆ其第三子の名を長吉と稱し備中守と稱す其子名は長幸と爲す藝ふて備中守と稱す是れを長溥十一世の祖と爲す考名は長喬修理と稱す眞生の父を大濃城主分部左京亮名は光實と爲す其第四子なり文化五年十二月修理の螟子と爲り秩九百石を承けて小普請組に入る書院番進物番西城の小十人頭となり布衣の班に進む天保六年三月西城の目付に擢てられ七年五月本城の目付と爲る九年六月西城災あり溥拯救の能く到る為を以て時服三領を賜ふ十二年十月普請奉行となり日光修廟工成るを以て十四年大駕日光山の闕宮に詣る長溥に命じて扈從せしむ六月黃金五枚時衣三領を賜ふ閏九月作事奉行に轉し命じて大阪城を修せしむ又京師に赴き二條城を巡視す十月大阪災あり十一月命じて大城造築の事を督せしむ工竣る秩三百石を加賜し原秩を併せて千二百石と爲し黃金七枚時衣を賜ふ三年十一月大目付に晉む嘉永六年十月十日卒す享和三年五月二十八日を以て生れ年を享ること五十五城南東禪寺に葬る釋追贈して玄隆院義獄徹翁禪定門と曰ふその人と爲り眞直勁愽ずして官に居る四十餘年一日の如し前後賞賜する所枚擧に暇あらずと云ふ(事實文編)

イケダ ナガユキ 池田長幸 長吉の子にして信輝の孫なり小字は治兵衞父卒して鳥取城九萬石を襲ぐ大阪の軍に從ひ伯父利隆に屬し天滿に戰て功あり是歲叙爵し備中守と稱す元和三年封を松山城に徙す寛永九年四月卒す子長常嗣ぐ

イケダ ナガヨシ 池田長吉 信輝の三子にして輝政の孫なり小字は藤三郎、天正九年豐臣秀吉以て之を養子となし族羽柴氏及び澤潟の章旗を授く十二年長湫の役に從ひ傷く十三年叙爵して備中守と稱す慶長庚子の役東師に左袒し兄輝政に從ひ岐阜城を攻め功あり長東正家の滅するに及び其の金寶器財を以て悉く長吉に賜ふ十一月島取城九萬石に封せらる十九年九月卒す年四十五法名茂林宗剛と云ふ隣松院と號す

イケダ ニクノスケ 池谷邦之助 陸軍步兵中尉なり靜岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備步兵第三十四聯隊附として出征中卅八年三月十日清國盛京省魚鱗堡附近戰鬪の際負傷し同十一日毛家屯第六師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イケダ ノブテル 池田信輝 紀伊守恒利の子にして攝津の人也、初の名は恒興、小字は勝一郎紀伊守と稱す織田信秀に仕へ星崎城を攻め功あり信秀之を賞して諱字を授く因て信輝と改む元龜元年織田信雄と以て信輝に授け邑一萬貫を食み命じて隊長に任ず信長信雄攝津國を以て信輝父子に與ふ十年六月信長信雄攝津國を以て信輝父子に與ふ十年十月信輝髮を斷り勝入と號す豐臣秀吉と明智光秀を山崎に擊ちて之を破る尋で薙髮し入道す十一年秀吉大垣を以て勝入に與へ封を美濃に徙す十二年秀吉織田信雄と絕つ勝入秀吉に屬し先驅となり長湫に戰ひ之れに死す時に年四十九法名雄獄宗英、護國院と稱す四子あり之を養子なり教正の母は曾て樹正行に嫁し遺腹の子有て再び池田教依の妻となる而して生る教依悅て之を育す教依の人と爲り慮ゝ戰功ありしが後ち病に罹て歿す正長じて勇武あり(本朝武功正傳)

イケダ ノリマサ 池田教正 池田教依が養子なり教正の母は曾て樹正行に嫁し遺腹の子有て再び池田教依の妻となる而して生る教依悅て之を育す教依の人と爲り慮ゝ戰功ありしが後ち病に罹て歿す正長じて勇武あり(本朝武功正傳)

イケダ ハチエモン 池田八右衞門 諱は鼎直中村藩の家老なり初の名は安次郎直常と云ふ後鼎の封を襲ぐ文化十三年佐藤莊左衞門弘人を起して藩政改革を行はしむ弘人老吏を擧げ今村吉右衞門、細野文太左衞門を勸定奉行とし草野伴右衞門を郡代とし農政改革の法を建つ實説を減ずること六分一堤防を築き水利を疏通し農具を給して離散の民を招集せんことを上之を許す寶宇八年從五位下を授けられ景雲中軍監と爲り寶龜中上野介少納言員外少納言を歷て長門守と爲る延曆八年鎭守府副將軍と爲り陸奥を征し度を失ひて敗る九月征東大將軍紀古佐美等と勅勘を蒙むり太政官に於て逼留敗軍の狀を勘問せらる眞牧等皆承伏す是に於て謝して曰く眞牧等愚頑畏拙にして進退度を失ひ軍期を闕怠馬家財政艱難の狀を細叙して諸役の免除を乞ふ當時の幕府の吏貪賂の多寡に因て訴を許否す而して相馬家財政困難して路に充つべきの餘費なし鼎直及草野伴旋最力む五年益鼎致仕し充鼎封を襲ぐ天保六年大に飢ゆ鼎直等金を江戸に借り米を秋田大坂に廣ふて運送す船漂泊し數百日にして領海に達す時に雪降りて寒し飢民迫ると雖も風波の爲に之を陸揚するの途なし鼎直藩侯に乞ひ親臨して水手に酒を賜ひ之を督勵して陸揚せしむ領內爲に飢ゆるなきを得たり八年功を以て老公諱の字を賜ひ名を鼎直と改め又祿百石を增して七百石となる初め鼎直改革を計るや期するに廿年を以てす而して中途飢歲あり果さず衆之を憂ふ偶ゝ二宮尊德の名を聞きて郡代一條七郎右衞門を遣して政を問はしむ尊德面せず曰く大夫自ら來るべしと草野乃ち往て謂し其の法を聞て之を行はんとす衆議決せず鼎直斷然告て曰く何の疑ふとかあらんと衆始めて之に同ず十三年十一月鼎直初て尊德に謂し說を聞て大に感じ弘化二年之を實施す二十年來の萎靡漸を逐ふて復た國頽る富む安政元年尊德日光廟祭田興復の任に當る鼎直乃ち藩に勸めて金五千兩を其の資に獻ず益し尊德の恩に報ずるなり安政二年十一月卅日卒す年六十五(泉田鼎信氏寄)

イケダ ヒロツ 池田廣津 延曆中六位を歷て外從五位下に叙せらる和歌に工みに且つ筝を善くする詠歌は載せて萬葉集其他諸書にあり(萬葉集作者履歷)

イケダ マサツナ 池田政綱 輝政の第五子なり小字は岩松、元和元年六月赤穗城を賜ひ邑五萬四千六百石を食む九年叙し左京大夫と稱す族松平を賜ふ寛永三年從四位下に叙す八年七月卒す年二十九子なし法名凉院隆公雲龍院と號す(野史)

イケダ ママキ 池田眞牧 養老元年安倍宿奈麻呂と上奏して曰く安倍池田本系は同族にして熟姓に非ずと請ふ共に朝臣の姓を賜はらんことを上之を許す寶宇八年從五位下を授けられ景雲中軍監と爲り寶龜中上野介少納言員外少納言を歷て長門守と爲る延曆八年鎭守府副將軍と爲り陸奥を征し度を失ひて敗る九月征東大將軍紀古佐美等と勅勘を蒙むり太政官に於て逼留敗軍の狀を勘問せらる眞牧等皆承伏す是に於て謝して曰く眞牧等愚頑畏拙にして進退度を失ひ軍期を闕怠

す今ま法に據て官を解き冠を取るべしと遂に官を奪はる(萬葉集作者履歴)

イケダ ミツマサ 池田光政 利隆の長子にして輝政の孫なり新大郎と稱す父卒して封播磨を襲ぐ元和三年封を徙して因幡伯耆の二州を領す九年八月將軍德川家光諱字を賜ふ因て光政と稱す從四位下に叙し侍從に任ず寛永三年八月左近衛權少將に任ず九年五月父封を備前に遷す寛文十二年老し天和二年五月卒す年七十四法名天質院晃、通源院と號す、光政學を好み學校を設置し熊澤了介を擧げて之に任ず教化大に行はる時に名君の稱あり(野史)

イケダ ヤスナガ 池田泰長 備後守と稱す姓は藤原魚名三十一世の孫豐後守政泰の嫡子なり播津國菟原郡生田瀧山城主にして荒木村重の麾下たり天正六年村重信長に叛く信長兵を率て之れを討つ泰長村重の爲めに屢と信長と戰ふも雖ども終に同年十一月を以て生田瀧山城沒落す泰長の嫡子源左衛門尉元泰落城後瀧山城主たりし由緒を以て姓を瀧山と改め名を元養と改稱す

イケダ ヨシナガ 池田奉永 紀四郎と稱し武者所刑部丞たり薩摩守奉光の子元久元年伊勢平氏と合戰の時忠節を抽き又承久亂に戰功を顯す延應二年三月十四日卒す歳八十二

イケダ リギウ 池田利牛 俳人なり芭蕉翁の門に學べり句あり「そば切に吸物もなき寒さ哉」と(俳諧小傳)

イケダ リャウミン 池田涼珉 畫家なり水戸の人にして名は貴信一に奉信畫法を狩野主信に學び遂に其の妙を極め狩野氏を稱す延享年間日の出の大黒を畫き大に行はる自ら贅して曰く「新米や二にこりとあさ日山」(武江年表 扶桑畫人傳)

イケダヤ ソウベエ 池田屋惣兵衛 京都三條橋邊逆旅の主人なり平生愛國の志厚く慷慨の士に交はる長州の藩士等仍りて定宿と爲す元治元年六月五日夜亥の刻長藩士吉田年麿等入り來り酒肴を命じ又數遍の書翰を認め惣兵衛を呼して之を各所に走せしむ勤王の有志等十三四人許入り來り二階の一室に籠り寢ぬ俳ほし密談長刻に及ぶ偶ゝ會津藩士町奉行同心與力等と共に來る惣兵衛大に驚ぎ二階に聽せて旨を報ず會藩士等續いて上り來り怒罵狼藉の酒席忽ち鬪爭の修羅場と化す惣兵衛蹤を伺ひ要子を親戚の許に預け己も亦隱れしかども直ちに發見され翌六日町奉行所に拘せられ尋問を受け七日遂に獄に下さる家族亦尋て糺問を受け六ヶ月間町役人へ預けとなれり惣兵衛獄中にて熱病を發し七月十三日遂に歿す時に年四十二遺骸は講ひて上下立寶淨圓寺に密葬し什器等悉く沒收され且つ七ヶ月の間營業を差止められたりといふ(甲子殉難士傳)

イケダナガ エン 池永淵 碧遊亭と號し字は士深源藏と稱す紀伊の儒者なり(諸家著述目錄)

イケダナガ シキブ 池永式部「カノモクノ スケ」

イケダナガ ダウウン 池永道雲 書家なり名は榮春一峰と號す道雲は其の通稱、東都の賈人なり書體一家を成す亦篆刻を以て聞ゆ元文二年七月十九日歿す著はす所篆籀、一刀萬篆あり(諸家人物誌、江戸名家墓所一覽)

イケニシ ゴムスキ 池西言水 俳人なり紫藤軒又は風下堂と號す南部の人、中頃江戸後京都に住す高島玄札が門人、或は云ふ北村季吟の弟子なりと享保四年九月二十四日歿す年七十二(一說に七十三と有り)曾て句あり曰く「木がらしの果はありけり海の音」これより世にこがらしの言水と稱せらる(俳林小傳、俳家物故年表)

イケノウヘ シラウ 池上四郎 鹿兒島亂徒の一將なり父を貞齋と云ふ島津家の奥醫なり四郎幼より醫を好まず常に西郷伊地知の諸先輩に從て其の訓誨を受く戊辰の役屢ゝ軍功あり朝廷召すども就かず征韓の黨議嘗て興からず又私學校黨に交はらず隆盛兵を及んで終に之を佐け第三隊を領して肥後に入り熊本城を攻めて拔けず川尻の營に至り桐野利秋等と會し說て曰く今敵千の兵を止めて城兵の尾擊を扼し全擧得失に於ては恬如たり平生の行事多く人の意表に出て吾言を容れず他日其悔る勿れと其の陣に還る人其の軍略あるか稱す後ち隆盛に從て城山に戰死す四郎將士を馭する甚だ紀律あり軍中皆之を仰き慕ふ肇威或は桐野の右に出ると云ふ

イケノ カメノスケ 池野龜之助 海軍少機關士也島根縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや海軍少機關士候補生として軍艦初瀬乘組み從軍中五月十五日旅順口附近に於て初瀬沈沒の際戰死す戰功により海軍少尉に任ぜらる

イケノ ダイガ 池野大雅 有名の畫家也名は無名、初めの名は勤、字は貸威、秋平と稱す、饅橋、九霞山樵、竹居、鬼詩釣叟、三岳道者等の號あり京師の人幼にして穎敏五歳にして能く字を寫す一日黃檗山に登りて千呆禪師に謁し席上楷字を大書す寺僧皆驚嘆す大雅甚だ畫才あり長ずるに及びて紀伊に之き畫法を祇園南海に學ぶ南海曾て儲ふる所の清の蕭尺木の畫譜を貽りて曰く子畫を學ぶ當に文人學士の畫を學ぶべしと大雅寡んで之を摸す(梅泉曰く先智叢談に祇南海宋の沈無名の畫譜を與ふ大雅大に喜び遂に其の風趣を得、名を無名と改たむと然れども佩文齋畫譜を按ずるに宋に沈無名と云ふ者なし因て之を小田海仙に問ふ海仙余に語り曰く嘗て蕉園堂に於て大雅學ぶ所の蕭尺木太平三山の圖を觀る蕭氏が自跋あり大雅書體も亦頗相似たり所謂る南海が貽る所は蓋しに之を謂ふ乎と余此の說を得て富疑釋然たりと然らば先哲叢談の說誤れるに似たり姑く他日の考を俟つ)又た大和に之きて設色の法を學ぶ是の時望月玉蟾と云ふ者あり亦畫を以て名あり大雅之と約して曰く從來我國の畫家は漢法を學ばず是より共に主唱を爲さんと乃ち俱雲林の畫法を摸し又清人伊孚九に倣ひ山水人物花鳥皆其の奥旨を極む頗る奇韻あり其圖粗密共に雅朴なり寛に一家を爲す時に用ひらるゝと與謝蕪村に越たり又書は唐宋の古法帖を學て(一說に清の蕭尺木の書風を學ぶと)其の妙所を得雅能れて和歌を能くせり大雅人と爲り蕭散恬淡、貧賤に安んじ寵辱に黑はされず惠みて報を望まず夫の毀譽得失に於ては恬如たり平生の行事多く人の意表に出づ故に世奇人を以て之を目す書畫の餞遊蕩、主人の金を糜して逐はれ將に他國に之かんとする時來りて別を告ぐ意甚哀し大雅乃書畫及び什器を鬻きて其の金を貸なひ爲に謝して復仕ふるを得ずしむ又夙に石刻の十三

經を寶ふの志あり絲積紐聚逆に錢百貫を得而れども書肆尚ほ背て實らす大雅乃大息之を久ふし悉く其錢を祇園の廁に獻す、大雅夜門戶を鎖さず夜中背甚を數き書畫の敗紙皆之に在り一夜盜あり物を奪て去る大雅偶ゝ睡覺む盜を呼び返して曰く攫去すべきものは猶數品あり唯ゝ背甚敗紙は我家の珍とする所、取るべからず其の餘は君が欲する所に從ふのみと其の豪放なること大概斯の如し好みて名山に遊ぶ幾として登らざるはなく奥として極めざるはなし到る每に千景萬勝悉く之を筆端に發す數ゝ富士山に登りて每に其の道を異にす因て富士の圖一百を作る奇狀變態皆其の經營する所にして古今畫工の及ばざる所と云ふ又自山立山に登る是より三岳道人の號あり閒居すれば其の妻玉潤と三絃を鼓し古曲を歌ふ安永五年四月十三日(或云五月四日)沒す歳五十四初め漢畫を學ぶや屠子數十本に描き美濃尾張近江に周流して躬自ら之を法ると寶れず乃ち歎息して歸る瀨田橋を渡る時曰く我道行はれず命なりと悉く屬を潮に投じて曰く聊か龍王を祭ると未だ幾くならずして名聲大に振ふ玉潤亦畫を能くせりと云ふ大雅浪華に至る大和屋某之を迎て其の暇隙に書せしむ大雅筆を執りて先づ大和の二字を作り忽ち筆を投じ起て出づ主人以爲らく厠に上ると之を久うして見えず人をして之を跡せしむるに之く所を知らず數日を經て至る主人怪みて之を問ふ答へて曰く初め筆を下す時大和の字心に在り因て以謂らく芳山の櫻花正に盛なり好時機失ふ可らずと故に去りて彼に游ぶのみ而して幸に期に逢れず以て其の願を遂す今まに前約を果すべしと是に於て復た筆を執り屋の字を追書して去る意ふに此談恐らくは好事者の假托する所ならん然れども大雅に非ざれば以て之に當ることなかるべし(香亭雜談、近世叢語、同纘、近世畸人傳、扶桑畫人傳、畫乘要略、墨談、鑒定便覽)

イケノ チユウナゴン 池中納言「タヒラヨリモリ」

イケノ ナミノスケ 池野浪之助 德川家康に仕ふ永祿三年尾州丸根の城攻めに隨ひて功あり同六年一向の門徒反す浪之助從て戰ふ其の外姉川三方ヶ原等の戰に高名を著はす信長諸家の勇士を撰出する時十九人の一に居る又た曾て長篠の軍に隨ひて大に戰ひしと云ふ(君臣略傳)

イケノバウ 池坊「センギヤウ」「センテウ」「センカウ」「センシヤウ」「センジユム」

イケノベノ ナミツギノ ミヤニ アメノシタノ シロシメシシ スメラミコト 池邊雙槻宮御宇天皇「ヨウメイテンワウ」

イケノノ ミヅノスケ 池野水之助 兒湯之助と稱す田信長に從て丸根の役に勇名を著はし其の他所の戰に武名を輝かせり(君臣略傳)

イケハタ カハヅ 池端蛙 薩鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て二等中警部を以て別働隊第三旅團附となりて從軍中二月廿七日肥後國飽田郡坪井戰死す

イケハヤワケノミコト 池速別命「イコハヤワケノミコト」

イケハラ ウムザン 池原雲山 幕府の醫官なり名は以文字は長章雲山と稱す平生家學を研精し傷寒論大疏井衍義數十卷を著はす刀圭の餘暇好て詩賦を作る性櫻花を愛して自ら櫻頭散人と號し曾て壓新春の韻を以て櫻花を詠じて七言絶句五百餘首を得たり文政中年三十八にして歿す(櫻花五百詠)

イケハラ ゴザエモン 池原五左衛門 正天狗流劍術の祖なり名は正重、日置刑部左衛門の門人、水戸侯に仕へて感公、義公の師範たり一に判官流と曰ふ(武術流祖錄)

イケハラ ジツナン 池原日南 長崎の人詩書に長ず名は香穆父大所と號す和學を上田及淵に漢學を仁科幹に學ぶ宮內省侍講局に出仕し正七位に叙す明治十七年七月十日歿す

イケベ カイチ 池邊嘉一 陸軍歩兵中尉也熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第六師團歩兵第十三聯隊附にして出征し卅八年三月二日清國蘆京省沙河堡附近戰鬪の際負傷し同三日三家子衛生隊假繃帶所に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イケベ キチジフラウ 池邊吉十郎 名は重章初め惣左衛門と稱す世ゝ熊本侯に仕へ藤二百石を食む壯時より用ひられて番騎組脇歩士頭等に歷任し慶應四年京都留守居明治二年熊本藩少參事たり廢藩置縣後家居晨を業とす仕を勸むる者あるも應ぜず明治十年西南の亂に友人櫻田慈四郎、山崎定平、松浦新吉郎、大里八郎、友成正雄等と共に舊藩士の子弟を率ひて賊軍に投ず其兵千餘人五隊に分ち合せて自ら之を指揮し熊本有志隊と稱す精銳を以て聞え肥薩日三國に轉戰し屢ゝ征討軍を窘む亂平ぎて後草鼻潛匿す官軍覺りて之を捕へ長崎臨時裁判所に送る其日供に據るに明治維新後は舊弊を去り國是を定め鼎威を萬國に輝す可きに朝廷三の奸邪ありて內外の政宜きを失ひ國運の傾危を來したり偶ゝ四郷桐野篠原等大兵を率ひ上京し政府を責問せんとするに會ひ自ら謂ふ西郷一たび足を擧ぐれば奸臣を除くは必然なりと然れども此際空く傍觀せば西郷志を得るの後猶又權を專にすとも之を制するの地を得難し彼が擧兵の名義は暫く問はず奸を除くの志は一致したるを以て先彼と力を戰せ事成るの後猶爲す所あらんことを期したるのみと同年十月西郷の逆意に與し官兵に抵抗したるの罪を以て長崎に斬られる年四十墓は熊本縣玉名郡横島村外平山に在り

イケベ ハク 池部璞 曆學家なり字は汝玉、肥後の人、世ゝ藩の老職小笠原氏に仕ふ後藩侯に召されて下士となり學館の師員に充らる璞素より天文曆算を善くし勞ら書學踏水等の諸藝に通ず此の數事を以て藩の子弟に敎ふる十年未だ嘗て一日を廢せず其の公務に勉勵する他の及ばざる所なり安永七年歿す年四十七、著はす所曆術全書、律呂曆後篇、初學曆法、大東通曆、推筮新編、七曜通覽、協正曆書、中星考あり(續近世叢語)

イケベ ランリョウ 池邊蘭陵 熊本藩の文學者なり名は匡卿字は亦匡卿、熊本藩の人、父は鶴林亦藩の文學たり蘭陵幼にして句讀を受け僅に大學の半に至り卷を閉て、曰く見既に能くせり請ふ復た昭聯の事をするとなかれと試に後半を讀ましむるに琅々として素より誦熟するが如し遂に復た業を受けず是より親覽日に博く著述日に富む時に鶴林の弟子甚だ衆し父蘭陵に命じて代て敎授せしむる所多し高弟宿生の齡ひ蘭陵に倍する者と雖ども皆弟子の禮を執る年十八君侯

自金若干を賜ひて學費に充てしも鵝林殁するに及びて其の職を繼ぐ後ち擢んでられて學校の訓導となる及び國の子弟を教ゆ時に教授秋山玉山經を校中に說く疾病事故ある毎に必ず闌陵をして代り講ぜしむ玉山殁して後ち藏孤山教授となる闌陵櫛りに助教の事を行ふ祿百石を喜み班上士に至る書を讀む經藝より以下諸子百家稗史小說に至る密該綜ぜざるなし而して目の觸るゝ所終身遺れず其の文章歌詩を作る皆一氣呵成頃刻の間に千百言を累ね詩會ある毎に諸彥皆沈思工夫す闌陵獨り飲啖笑語傍ら人なきが如し而して遂に筆を把りて一揮すれば迫かに常調を出づ孤山嘗て歎じて曰く余詩文を闌みすること多し未だ闌陵の捷且工なるが如きものならずと天明二年殁す年五十七（續近世叢說）

イケン　頤軒「ナカエトジュ」

イケムメイ　池無名「イケノタイガ」

イケモリ　シウスキ　池守秋水　江戸の儒者なり名は龍字は潛夫本姓太田氏秋水と號す通稱儀右衛門世〻豐前小倉侯に仕ふ潛夫經術深邃材用闊より以て之を事業に見はすに足る然るに天挺跌宕俗に徇ふを喜ばず行ひ遂に俗と忤ひ學遂に時と乖く乃ち祿を致して去る時に年三十六氏を改て池守と曰ふ母氏に從ふなり乃ち市間に僦居し徒に授く四方誨を請ふ者衆し嘉永元年十月廿三日殁す年七十一著す所周易實義、中庸斷、孟子摘解等あり（墓碑）

イコトヒメ　五十琴姫　物部膳咋の女なり景行帝三十六年納れて妃と爲す五十功奇命を生む（大日本史）

イコマ　カズマサ　生駒一正　親正の子なり初め雅樂介と稱す文祿中從五位下に叙せられ讃岐守と稱す慶長二年父に代りて明を征し宇喜多秀家に屬して南原城を攻む後ち關白豐臣秀吉薨し奉行等相謀りて難を構ふるに及ぶ一正欺を德川家康に通じ竊に伏見館に候す唐子の秋一正東征に從ひ海道の先驅となる始め田中吉政、竹中重門、戶川逵安と與に三成の將蒲生備中を擊つや克たずして退く後ち黑田長政加藤嘉明細川忠興等奮て敵の前隊を衝くに及び一正及び吉政反擊し遂に大に勝を得たり十一月功を論じて一正を讃岐に封し邑十七萬石を賜ふ十三年一正室家を擧げて東府に徙る是れ實に列侯室を徙すの始なり明年五月秀忠之を賞し書を賜ひて賦役の半を除くと云ふ十五年三月卒す法名を安龍宗泰と曰ひ玉龍院と號す子あり正俊と曰ふ（野史、君臣略傳）

イコマ　サンジン　生駒山人　儒者なり本姓は森名は文雄字は世傑龍藏と稱す河內の豪農なりよりて生駒山人と號す詩を以て聞ゆ著はす所生駒山人集あり（諸家人物誌）

イコマ　ソウケム　生駒宗健　宗徧流の茶人なり專兵衛後に權平と稱す山田宗徧の三男なり四十人なり專兵衛後に權平と稱す分家して百石を賜ひ近習頭を務む隱居後固冠軒宗俊又宗健と號す享年七十九（吉村眞學氏寄）

イコマ　ソウエン　生駒宗圓　宗徧流の茶人なり宗徧の孫にして宗健の子なり不審庵第三世の號を以て流を傳ふ乃ち貪邑二千石を賜はり再び神戶城栄邑四萬一千石を加賜せらる從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年月讃岐と與もに唐島を守る再び師を朝鮮に發するに及び其子一正をして之に赴かしむ慶長三年七月秀吉薨正の凶聞に接して才幹あるを愛し拔擢して中老となし中村一氏及び堀尾吉晴と與に國事を預り聞かしむ後病て卒す一正其の後を繼く（野史）

イコマ　バンシ　生駒萬子　加賀の大夫なり內膳と稱す初め藤九郎と云ふ祿八百石を貪む白鷺居士と號す芭蕉に從ふて兼て俳諧を學ぶ此君蹇を號し金澤長町に住す句あり「春も程に三日月かくる櫻かな」と（俳林小傳、俳家畸人談抄）

イコマ　マサトシ　生駒正俊　一正の子なり初め左近大夫と稱し從五位下に叙せらる慶長庚子の役大阪に屬して諸將と丹後を攻拔す後ち關原の軍敗るるや特に正俊の罪を宥さる蓋し父一正東征に從ひて功あるを以てなり慶長十七年從四位下に叙せられ侍從に任ぜらる十九年冬藤堂高虎と與に大坂城の南面を攻む大阪夏の役起るに及び軍に從て功あり元和六年六月卒す（海禪寺牌子に元和七年に作る）時に年三十六法名は機外宗光、法藏寺と稱す一子あり高俊と曰ふ（野史）

イサ　射狹　崇神天皇の皇子豐城入彥命入世の孫にして始めて車を造り又車の上蓋を造り以て輿を覆ふ雄略天皇及び皇后始めて車に駕す（工藝志料）

イサイ　**　**イサイ　**　**イサイ　**　**イサイ　**　**イサイバウ　以哉坊　美濃黑野の俳人なり安田二桂と稱す露炊薙無事窟の諸號あり五竹か門人にして諸國名錄、百里鶯、夏の山等の著書あり（俳林小傳、俳諧人物便覽）

イサ　エイタク　伊佐榮琢　石州流の茶人なり宇喜多に作州北郡田山邑一千石を賜ひて其の功を賞す十一年賜ひて從五位下に叙し雅樂頭に任ず慶長庚子の役に從ひて功あり是夏父に從て根來、雜賀、湯川を擊ち首級を獲たり乃ち貪邑二千石を加賜せらる從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬石を賜ふ十三年七月二十一日高俊薨して讃岐の邑を收め封を徒す（茶人系傳全集）

イサ　カウタク　伊佐幸琢（二代）石州流の茶人なり伊佐宇喜多に作州北郡田山邑一千石を賜ひて從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年月讃岐と與もに唐島

イサ　カウタク　伊佐幸琢（三代）石州流の茶人なり宇喜多に作州北郡田山邑一千石を賜ひて從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年月讃岐と與もに唐島を守る再び師を朝鮮に發するに及び其子一正をして之に赴かしむ慶長三年七月秀吉薨正の凶聞に接して才幹あるを愛し拔擢して中老となし中村一氏及び堀尾吉晴と與に國事を預り聞かしむ後病て卒す一正其の後を繼く（野史）

イコマ　バンシ　生駒萬子　加賀の大夫なり內膳と稱す初め藤九郎と云ふ祿八百石を貪む白鷺居士と號す芭蕉に從ふて兼て俳諧を學ぶ此君蹇を號し金澤長町に住す句あり「春も程に三日月かくる櫻かな」と（俳林小傳、俳家畸人談抄）

イコマ　マサトシ　生駒正俊　一正の子なり初め左近大夫と稱し從五位下に叙せらる慶長庚子の役大阪に屬して諸將と丹後を攻拔す後ち關原の軍敗るるや特に正俊の罪を宥さる蓋し父一正東征に從ひて功あるを以てなり慶長十七年從四位下に叙せられ侍從に任ぜらる十九年冬藤堂高虎と與に大坂城の南面を攻む大阪夏の役起るに及び軍に從て功あり元和六年六月卒す（海禪寺牌子に元和七年に作る）時に年三十六法名は機外宗光、法藏寺と稱す一子あり高俊と曰ふ（野史）

イサ　射狹　崇神天皇の皇子豐城入彥命入世の孫にして始めて車を造り又車の上蓋を造り以て輿を覆ふ雄略天皇及び皇后始めて車に駕す（工藝志料）

イサイ　**　**イサイ　**　**イサイ　**　**イサイバウ　以哉坊　美濃黑野の俳人なり安田二桂と稱す露炊薙無事窟の諸號あり五竹か門人にして諸國名錄、百里鶯、夏の山等の著書あり（俳林小傳、俳諧人物便覽）

イサ　エイタク　伊佐榮琢　石州流の茶人なり宇喜多に作州北郡田山邑一千石を賜ひて從五位下に叙し雅樂頭に任ず慶長庚子の役に從ひて功あり是夏父に從て根來、雜賀、湯川を擊ち首級を獲たり乃ち貪邑二千石を加賜せらる從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年月讃岐と與もに唐島

イサ　カウタク　伊佐幸琢（初代）石州流の茶人なり伊佐宇喜多に作州北郡田山邑一千石を賜ひて從五位下に叙し雅樂頭に任ぜらる天正十五年封を徒して讃岐の邑六萬一千石を領し高松城に居る小田原及び征韓の役殊功を樹つ文祿二年月讃岐と與もに唐島

イサ　カウタク　伊佐幸琢（初代）石州流の茶人なり怡溪和尙に學び牛ヶ庵と號す德川氏の御數寄屋たり延享二年六月十一日卒す（茶人系傳全集）

イサ　カウタク　伊佐幸琢（二代）石州流の茶人なり伊佐牛ヶ庵に學び牛提庵と號す（茶人系傳全集）

イジウイン　タダムネ　伊集院忠棟　右夫後に入道幸侃和歌と號す島津修理大夫義久の功臣にして武勇のみならず文事に逮し和歌を能す秀吉に寵せられ大隅一郡を領す我意の振舞ある為に慶長四年三月九日伏見に於て切害せらる（即宗院記）

イシウチ　ジョレイ　石內序令　俳人にして寶井其角の門人なり曾て句あり「幕洗ふ川邊の頃やほとゝぎす」（俳林小傳）

イシウチ　テウウウ　石內朝叟　俳人にして寶井其角が門人なり其句に曰く「卯花や身をつにかほる道細神」（俳林小傳）

イシウ　ジュンエイ　以州順榮　禪師は武州龍潭寺の住持なり久しく惟道に侍して堂奧に升る惟道の順世するに及び其の席を繼ぎ晚に加州に於て雲龍寺を開けり（洞上聯燈錄）

イシカワ　セキスキ　石河積翠　俳人なり初の號は雨蘆幕府の士にして尊岐守と稱す中奧御小姓たり俳諧か二世大白堂に學ぶ文化中の人

イシカキ　ゼンサク　石垣善策　陸軍步兵中尉なり宮城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや隊備役より召集せられ第二師團步兵第四聯隊附と して出征し同年十月十一日滿國盛京省三城子山に於て戰死す勳功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシカキ　ホウシン　石垣抱眞　畫家也通稱文左衛門初め駒込片町に住し後ち金杉大塚の里に隱れ抱一上人に就て畫法を受け抱眞と號す上人嘗て謂て曰く汝良工たらんと欲せば宜しく諸名家の圖を縮臨し其の意を得べしと抱眞其言を服膺し一圖を見る毎に其筆意を得べし必ず之を手寫すること數百に下らず又書法を屋代弘賢に受け亦其技を能くす安政三年九月二十二日殁す年六十七（畫北先賢傳）

イシガネ　オトンド　石金音人　左次兵衛と稱す東奧瀨上の和學者なり（諸家著述目錄）

イシガネ　ライヒン　石金瀨濱（石金氏自江村と號す始田口氏備前の人江戶に出て師の家名を襲ひ古畑氏を稱す後宗家絕え依て石合氏に改む幕府の儒官となる明治六年一月十七日殁す年六十六駒込龍光寺に葬る（墓碑銘）

イシウ　伊州「キクダイシウ」

イシカハ　アキミツ　石川昭光　伊達晴宗の四子にして石川修理大夫晴光の嗣となり大和守と稱す石川氏は源頼親の裔にして奧州仙道七郡を領し石川郡泉莊に住す天正十七年叔姪の親あるを以て伊達政宗の麾下に屬せり明年豐臣秀吉の爲めに其領土を沒收せられ遂に伊達氏に仕へ一門の上座となる（伊達家世臣傳記）

イシカハ　アツヨシ　石川敦吉　舊水戶藩士にして安政二年二月生る四南の役に豐部補として從生徒稍〻集る其の名時に大に行はれんとするに臨み偶〻疾を病みて殁す時に寶曆八年歲三十八なり著す所嘉隆文體、修辭諸言、瀨須遺草あり（先哲叢談）

イシカハ　アウシヨ　石川櫻所　奧州登米郡櫻場邑の人なり名は良信陸舟庵と號す少より筆を頁ふて四方に遊び西洋醫術を伊東玄朴に學び後長崎に至り蘭人某に親炙しその業大にすゝむ仙臺藩擢て醫員となす尊て幕府に薦され法眼に叙し侍醫となる將軍慶喜ふかくその用ふべきを知り法印に叙し香雲院といふ元治慶應の間幕府多事なり身は醫班にありといへども常に國家の機務に參し規畫する所おほし戊辰の際慶喜に從ひ大阪より江戶に歸り尋て寬永寺に入りまた水戶に移り幾ばくもなく歸して仙臺に歸り松島に寓すたまたま奇禍に罹り獄にあること殆んと一年にして赦され再び松島に居り優遊自適また世事に關せず明治四年兵部省に召され軍醫寮に出仕し尋て從六位に叙し軍醫介に任じ累進して軍醫監に任じ從五位に叙せらる既にして病を以て職を辭し駿河臺の香雲閣に退き十三年二月某日を以て殁す年五十九その人となり相貌俊邁慷慨氣節ありその學漢洋を兼れ將軍慶喜每に謂ふ櫻所は國を醫するの才ありとその人たるおもふべし著はす所內科髓明、養生訓等あり而して賞に獄中消遣の餘に成る內科簡明一書はその譯稿を松島に起し大牛巢を卒ふその東京に入るや林洞海、石黑忠悳また已に譯稿成るに會す三人期せずして一書を譯す奇といふべし因て三氏の藏板となすといふ櫻所また詩文を善くす大沼枕山、小野湖山等の諸大家皆推賞せざるはなし殁後その詩を刻して香雲關詩鈔といふ（仙臺史傳）

イシカハ　アキミツ　石川昭光　伊達晴宗の四子にして石川修理大夫晴光の嗣となり大和守と稱す石川氏は源頼親の裔にして奧州仙道七郡を領し石川郡泉莊に住す天正十七年叔姪の親あるを以て伊達政宗の麾下に屬せり明年豐臣秀吉の爲めに其領土を沒收せられ遂に伊達氏に仕へ一門の上座となる（伊達家世臣傳記）

イシカハ　アツヨシ　石川敦吉　舊水戶藩士にして安政二年二月生る四南の役に豐部補として從

軍して功あり明治十四年一月陸軍御用掛を命ぜられ同五月鎮兵少尉に任ぜられ巢進して東京第一鎮兵隊長に補せられ四十年十一月陸軍少將に任ぜられ直に豫備役仰付けらる四十一年一月二十二日逝く年六十三

イシカハ　イチム　石川一夢　謠謡師なり鹽物商にして會津屋佐兵衛と稱し牛込神樂坂に居る初め一口と號す安政元年五月廿一日歿す年五十一（名人忌辰錄）

イシカハ　イヘナリ　石川家成　清兼の第二子なり初字を彦五郎と稱す家成父の後を繼ぎて日向守と稱す永祿三年五月德州家康丸根城を攻む家成從て其の先鋒となり兵を督して之れを拔く四年七月家成松平信一と中川の附城に據りて島羽根城を攻め家康の援軍を得て終に之れを陷いる一向の賊徒起るや親屬多くして之を上野に攻む十二年家康の今川氏眞を掛川に攻むるや家成之か先鋒となり擊て之を屈す氏眞和を請ひ相模に遷居するに及ひ家成其の城を賜はり新附を撫綏す是より先き家成泗井忠次と三河東西の旗隊長たり是に至りて其の戰を經數正に讓る元龜元年九月家成忠次と與に命を受けて織田信長を近江に援け敵將佐々木承禎と戰ひ一日二十四戰遂に擊ちて之れを走らす後ち天正元年二月武田信玄の兵か香具輪或は（歌久阿に作る）に攻め其の守將か斬る八年家成家事を子康通に讓りて致仕し殊に老休の田を賜はる十八年伊豆の梅繩の田五千石を賜はる庚子の役家成東府城を守る十二月康通卒し嗣子尙ほ幼なり家成乃ち老休の田を外孫に讓り大垣に從居して再び家事を執る十四年十月卒す時に年七十六法名を香譽梅巖常壽院と號す（野史）

イシカハ　イラツメ　石川郎女　遊女なり字を大名兒と曰ふ久米禪師と親み後大津皇子に召されて內命婦となり之に寵遇せらる万葉集に歌あり（萬葉集）

イシカハ　イロコ　石川色子　仁明帝の命婦なり內教坊に供奉し最も皇帝破陣樂の舞を善くす承和十一年正月內宴に從五位下を授けらる（大日本史）

イシカハ　ウネノジョウ　石川疇之丞　御天守下番露村啓次郎の次男にして石河麻次郎の養子となる天保二年八月家督を繼ぎ小普請を命ぜられ其翌年十月表火之番となり其翌年十二月支配勘定出役を命ぜられ天保十二年十二月に至り其職を免ぜられ同十三年正月病氣願に依り小普請入仰付られ大島甲斐守の組に入れらる其後ち病漸く癒ゆるを以て心竊に時機を察し要職に居らんとを希ふ時に御書物奉行天文方見習淺川六藏と相知り其の紹介を得て當時の奉行島井甲斐守に見ゆ甲斐守水野越前守の諸政を改革するを妨げんと欲す然れども若年寄堀田摂津守井御側御用人新見伊賀守跡部能登守等の諸人皆な越前と其意を同くするあるを以て其の事の行はれざるを危ぶみ摂津等數輩を除かんとし石川を招き告ぐるに機密を以てす石川等是を諾し百方摂津等の失行を探知す然れども未だ其の暇隙を得ず終に之れを陷いる一向の賊徒起るや親屬多くして石川の甲府勝手を命ず是を以て大に怒り甲斐守等の奸計を繼逃して上書し甲府勝手の宥恕を乞ふ甲斐守は京極長門守の領地丸亀に投ぜるを以て乃ち同學舍に入り數學を教授し而して英書を講修す明治十二年暎作嚶鳴社に入り辯論家の名忽ちに揚がる同年共立學舍の閉ちらるゝに及びて大藏省に奉職し五年十月病を以て官を辭し經濟雜誌社に入り政治類典飜譯の業を起す十七年十月即ち滿二年にして豫期の如くに此大業を成就せり加るに此際暎作經濟學講習會の幹事となり事務を統理し又「アダムスミス」氏の富國論を譯し嚶鳴社其他所々の會に出でて演說をなす其勉勵想ふべし後紙幣交換始末を著し又此間に於て深く本邦婦人の有樣に注意し明治十八年婦人東髮會を起し我邦婦人風俗の改良を謀り且明治女學校創立の際の如き與りて最も力あり其勉勵病を惹きて十九年四月廿七日歿す年二十八（東京經濟雜誌）

イシカハ　オトナ　石川老夫　萬葉集作者の一に列し和歌を以て名を知らる文武帝の二年直廣肆を授けられ美濃守となり從五位下に叙せらる（萬葉集作者履歷）

イシカハ　カウザン　石川香山　尾州藩の儒者なり名は安貞字は順夫香山と號し貞一郎と稱す尾張の人、松平君山に學ぶ天明中明倫堂の典籍となり又繼述館の校勘に任じ明倫堂教授を兼ぬ文化七年十二月者內探筋等機密之儀賴聞候次第發覺可致儀為厭ひ甲斐守は勿論六藏等より品能申立候故之儀に可有之哉と疑察および右兩人の所置御糺有之候はゞ自然甲府勝手御宥恕可相成と探索筋其外引合候廉々書面なり申立候始末旁不屆に付御切米御扶持方召放可申付候云々（郵便報知新聞）

イシカハ　エイサク　石川暎作　東京經濟雜誌の記者なり福島縣岩代國河沼郡野澤の人石川市十郎の第三子にして安政五年四月二十日を以て生る暎作幼にして粗豪落蕩敢爲奇行あり然れとも學に勉強し親戚朋友等に對しては情誼厚く厚かりき又た事を處る大人の如くにして學業の傍らに家業酒造の事を幹せしと云ふ明治六年橫濱なる高島學校に入り英書を學ぶ翌七年東京に轉じ語學校、化成舍、又慶應義塾に入る此際實に暎作の千辛萬苦を嘗めし時なり然れとも學資復た給せざるを以て一時手業縣に赴き小學訓導となる偶〻尺振八の共立學舍に於て數學の教師を要す暎作數學に投ぜるを以て乃ち同學舍に入り數學を教授し而して英書を講修す明治十二年暎作嚶鳴社に入り辯論家の名忽ちに揚がる同年共立學舍の閉ちらるゝに及びて大藏省に奉職し五年十月病を以て官を辭し經濟雜誌社に入り政治類典飜譯の業を起す十七年十月即ち滿二年にして豫期の如くに此大業を成就せり加るに此際暎作經濟學講習會の幹事となり事務を統理し又「アダムスミス」氏の富國論を譯し嚶鳴社其他所々の會に出でて演說をなす其勉勵想ふべし後紙幣交換始末を著し又此間に於て深く本邦婦人の有樣に注意し明治十八年婦人東髮會を起し我邦婦人風俗の改良を謀り且明治女學校創立の際の如き與りて最も力あり其勉勵病を惹きて十九年四月廿七日歿す年二十八（東京經濟雜誌）

イシカハ　オトナ　石川老夫　萬葉集作者の一に列し和歌を以て名を知らる文武帝の二年直廣肆を授けられ美濃守となり從五位下に叙せらる（萬葉集作者履歷）

イシカハ　カウザン　石川香山　尾州藩の儒者なり名は安貞字は順夫香山と號し貞一郎と稱す尾張の人、松平君山に學ぶ天明中明倫堂の典籍となり又繼述館の校勘に任じ明倫堂教授を兼ぬ文化七年十二月

歿す歳七十五、著す所唐太宗金鏡管見、陸宣公全集釋義、勸學俗訓、讀書正誤、代奏雜抄、唐宋八大家文構、五史要覽、資治通鑑證補、香山史鈔、玉山史文及び鳴海志等あり養子嘉貞繼ぐ魯庵と號す（續諸家人物誌、鑑定便覽、尾張名家誌）

イシカハ　ガケイ　石川賀係　和歌を善くする為以て大寶中其の名を知らる詠歌は萬葉集其の他諸書に載す（萬葉集作者履歷）

イシカハ　カサブラウ　石川嘉三郎　陸軍砲兵中佐なり山梨縣中巨摩郡五明村の人最も砲術に長じ有阪砲の實用に就ては其力與て大なり明治三十七年日露戰役起るや第五師團野戰砲兵第五聯隊附として出征し七月二十四日の大石橋戰鬪に於て苦戰し羊草勾北方高地に於て戰死す戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

イシカハ　カズノリ　石川數矩　數正の二男なり肥後守と稱す父の邑を頒ち受て一萬石を食む慶長十九年の冬大阪の軍起るや數矩城に籠りて戰死す（君臣略傳）

イシカハ　カズマサ　石川數正　清兼の孫にして庸正（或は康昌に作る）の子なり初字は與七郎、內記、又た伯耆守と稱す數世世臣の故を以て幼より德川家康に勤仕して寵遇日に渥く其の軍に從ひて常に左右に侍す且つ父祖の遺業を承けて酒井忠次と與に政事に參與す永祿四年二月水野信元と云ふ者兵を率ゐ來て村邑を侵す數正家康の先鋒となり之と石瀨に戰ふ後ち家康今川氏眞と協はざるに至り數正竊かに謂らく世子信康駿府に質となりて護衛なし今川氏の狂暴なる其の安危測られすと乃ち往て之れに侍せんと欲す家康に請ふ聽されず因て潛かに書を留めて往て之に侍す永祿五年三月家康の兵鵜殿長照の二子を擒にす氏眞常に長照を重んし併せて其の子を餌愛す故に痛惜して措かず數正之を聞き關口義廣に因て質子を易へんとを請ふ氏眞欣然之を許す數正乃ち人を馳て之を家康に報す家康亦喜びて長照が二子氏長氏次を駿府に送歸す數正乃ち清池夫人今川氏及び世子信康を率して駿府に至る國人皆之れを數正の精忠に歸すと云ふ後ち味方原の役數正軍に從て織田氏を援く又姉川長篠の役並に先驅たり其の尚ふ所多くは破れざるなし天正十一年五月命を受け往て羽柴秀吉の大阪城に徒るを賀す十二年秀吉織田信雄と隙を構ふ家康師を出して信雄を援く數正秀吉の勢り日に益〻盛なるを見て心大に動き終に意を決し天正十三年十月孥を載せ大阪に奔る然れとも秀吉其の不義なるを疾みて禮せず數正是に於て慚悔し終に病と稱して家居す十四年正月和泉國に封ぜられ水野忠重と監軍の事を掌り更らに出雲守と稱す後ち秀吉家康と和するに及び數正の爲に請ひて家康に謁見せしむ十八年七月信濃の深志城に封ぜられ邑十萬石を食む二子あり康長（舊章錄に家清に作る）康勝と曰ふ（野史、諸士略傳、朝武功正傳）

イシカハ　カズミツ　石河一光　（太閤記に真友に作る）父を家光と云ふ一光小字兵助、姓は源氏美濃鏡島の人なり一光羽柴秀吉に仕へて志津嶽の役に從ひ眉尖刀を執りて先登し敵數人を斬り猶ほ以て功とすに足らずとなし其の首級を擲ち進む其の首級を擲ち進む四郎五郎と相遇ふ四郎長槍を舞はして戰ふ一光槍下に潛り進んで四郎の右腕を斫り終に其の首を獲又進んで拜郷久盈と接戰す雌雄未だ決せざるに越兵十數人齊進して一光に萃る久盈乃ち去り一光衆と血戰し敵三人を傷け朝亦數創を蒙り瞑眩して崖下に陷り力を握りて倒る會〻福島正則及び加藤清正到る一光二人に謂て曰く我れ傷けり二人乃ち之れを扶け起す一光又た謂て曰く幸にして卿等に相遇ふとを得る設令今死すとも先登の功りと言曙りて乃ち斃る（野史）

イシカハ　カタナノ　イラツメ　石川刀子娘　文武帝位に即くや竈門銀と同日に嬢と爲る和銅六年十一月蘆門嬢と並に貶せられ嬢と稱するを得ず（大日本史）

イシカハ　カツヨシ　石川勝吉　黑田孝高の家人なり十石衞門と稱す慶長五年關ヶ原の役に島津義弘の家人伊集院有川等義弘の要子を守護し國に歸んとするに當り大に戰ひて遂に悉く島津が船を燒き沈む（君臣略傳）

イシカハ　カンサイ　石川倪齋　當人なり越後の人山水墨竹を作るに巧みなり（鑑乘要略、鑒定便覽）

イシカハ　カンシチ　石川勸七　德川氏の橋普請御用達にして無禄にて石州流の茶道を好み此君庵と號す（茶人系傳全集）

イシカハ　カンスケ　石川勸助　柏山と號す羽州の人京都に出て佐々木志津嶽に學び書を以て業とす享保六年蹇命に依り六論衍義大意を書す歿する年六十八（名人忌辰錄）

イシカハ　キナイ　石川記內　裝劍彫工なり越前に住す鍔絲頭を作るに巧みなり先祖より記內に至り五代目なりと云ふ（裝劍奇賞）

イシカハ　キミコ　石川君子　（君子一に吉美侯に作る）和歌を以て知らる秀歌は載せて萬葉集中に在り和銅六年從五位下に叙せられ靈龜元年播磨守に任ぜらる養老元年從五位上に進み入て兵部大輔と爲り侍從に遷る神龜元年正五位下に叙せられ三年從四位下に進む（萬葉集作者履歷）

イシカハ　キンコク　石川金谷　大炊御門家の儒員也名は眞宇は大乙、賴母と稱す金谷は其の號河內の人儒を南宮大湫に學びて帷を大津に垂る後ち大炊御門家に仕ふ著はす所唐音唐詩選、唐音論孟、李嶠詠物詩解等あり（續諸家人物誌、鑒定便覽）

イシカハ　キヨカネ　石川清兼　忠輔の子なり本名は忠成、初字を助十郎と稱し姓は源氏、三河守と稱す酒井忠親と與に其の家事を執る後ち清兼と改め安藝守と稱す酒井忠親と與に其の家事を執る後ち清兼卒して其の子廣忠を伊勢に迎へ又傳通太夫人を刈屋に迎へて婚を調ふ夫人德川家康を生む清兼又之れに仕へて卒す二子あり康正（或は康昌に作る）康成と云ふ（野史、諸士略傳）

イシカハ　グントウサイ　石川軍刀齋當流　江戸の飯客なり名は勝秋通稱は紋彌、道楊な小石川白山下に開き戸田、東軍、種崎、一貫の四流を教授す、力十五人を兼ぬ寛永九年武術上覽の時松前帶刀と鬪ひ秘術を盡して之を挑む帶刀苦心之に勝たんと欲すれとも敵せず當流謂らく然れとも帶刀は幕府の士なり我は敗るとも害なし勝を彼に讓らんと故さらに敵を留まして後之に打たる

イシカハ　クワウサン　石川晃山　當工な

り名は晃字は士晃俗稱宗助鬢髮山人と號す下野國都賀郡川村の人天資俊敏にして數理に精し年十九水戸に遊び國老某の家に仕ふ僚友と合はず去りて江戸に來り仕官の念を絶ち藷事に志し谷文晁の門に入りて學ぶ後九州に遊び饑寒逸豐等と交ぜり歸途備中倉敷に留まり藷を以て專業となす其の藷は宋元以上名家の筆意に據り近世浮華の態を作るを屑とせず山水花卉朝毛人物皆藷かざるはなし常に人に語りて曰く我若し上官たらば痛く遊手徒食の輩を懲さん其の手を下すに當り先づ俗藷世を寶る者より始めんと明治二年十二月二日歿す年四十九(衣笠氏の話、繪藷叢誌)

イシカハ クワウヘイ 石川宏平 海軍中軍醫なり宮城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや軍艦速鳥に乘組み從軍し同年九月三日旅順口附近に出動中戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシカハ ゲンジャウ 石川玄常 江戸の醫師なり名は世通字は深愚岡と號す文化十二年正月二十八日歿す深川靈巖寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

イシカハ コゲツ 石川壺月 俳人にして貴志沾洲が門人なり(俳林小傳)

イシカハ ゴダウ 石川梧堂 德川幕府の旗下にして書を能くす名は總明字は錫我、一の字は龜甫、知秋庵と號す嘉永五年正月歿す年六十餘(繪墓所一覽)

イシカハ コンリョウ 石川昆陵 書家なり名は陽字は東丈河内の人書藷を能くす(鑒定便覽)

イシカハ ゴエモン 石川五右衛門 大盜なり三好氏の家臣石川明石の子、身體長大にして力三十人を兼れ十六歲の時親に主人の寶藏に入りて金裝刀を盜む管守之れを知り五右衛門を捕へんとす五右衛門刀を揮て遂に其の三人を斬りて遁る是より諸國に流寓し到る所盜を爲し虐を行ふ文祿の末秀吉命して之を捕へ其子一郎と與に釜に入れて油を以て煎殺すと云ふ年三十七五右衛門始め眞田八郎と稱し遠州濱松の人なりしが故あり河內國石川郡山內古底と云へる醫家に依り遂に石川五右衛門と改めたりと其の刑に就き將に死せんとするや歌一首を詠せり「石川や濱の眞砂子はつくるとも世に盜人の種はつくまじ」(本朝武功正傳、燕石十種)

イシカハ サイチ 石川佐一 陸軍少兵中尉なり神奈川縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て第一師團歩兵第三聯隊附として出征中明治三十七年八月二十一日滿國盛京省水師營附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

サウラウ 石川滄浪 江戸の儒醫山に爵ゐ德川家康兵を率ゐ來りて大阪を攻む貞政其軍に從ひ藤田信吉と與に牛野を取り遂に德川氏に仕ふ後ち髮を削りて佳春と號す子孫繼ぎて世々幕府に仕ふ(野史、君臣略傳、本朝武功正傳)

イシカハ ザダモト 石川貞幹 勤王の志士なり初の名は眞魁通稱一ふ因州鳥取の別封松平伊勢守の家人にして江戸の藩邸に生る幼時父母を失ひ義兄岩瀨成晉に育まる安政五年小性役となり文久元年和宮降嫁の折抑ばれて奏者にあげられ傳奏屋敷に勤當す其後同志と謀り二年四月竊に上京し諸藩の士に交りを結び大納言中山忠能少將岩倉具視等に謁見し建言するところありしも未だ志を得ず一旦江戸に歸りて潛伏せしも諸國の浪士續々入洛すと聞きて再び上京して二條衣棚に假寓す三年二月鳥取藩主松平慶德に召されて其意見を陳ぶるを得たり此月二十二日同寓の士數人等寺院に入て足利父子の木像を梟したるを露はれて捕吏其寓を襲ひしかば或は捕はれ或は自殺したり獨り貞幹は其前日より長州邸內に在りしを以て此厄を免れ國老益田親施に請ひて同志の徒と被國に下り赤間關にて佛國の軍艦と戰ひ勇名を顯はせり其後復京都に上りし松平慶永が幕府の命に依り入京すと聞き必然志士逮捕に爲めならんと信じ七月二十六日の夜同志と共に慶永が旅館と定めたる高臺寺を襲撃す翌八月侍從中山忠光に從ひ大和五條に兵を擧げ敗軍の後捕はれて京都六角の獄に繫がれしが元治元年七月十九日斬られる時に年二十二明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる(殉難錄稿)

イシカハ サネキヨ 石川眞清 江戸の和學者にして野村琢齋の門人なり(諸家著述目錄)

イシカハ シュクタン 石川叔潭 德川幕府の旗下なり名は之清、大凡と號す、叔潭は其の字重美遠鎖島の人伊豆守と稱す力三十人を兼れ豐臣秀吉及び其の子秀頼に大阪に仕ふ慶長十九年九月秀頼貞政及び澤田鍋相ゐて片桐且元を擊たしむ已に貞政心を變し密に之れを織田常眞に告ぐ常眞之れを且元に通じ貞政ひそかに大阪城に入り大野治長將に且元の第を襲はんとするに及び貞政要撃を駆けて高野山に爵ゐ德川家康兵を率ゐ來りて大阪を攻む貞政其軍に從ひ藤田信吉と與に牛野を取り遂に德川氏に仕ふ後ち髮を削りて佳春と號す子孫繼ぎて世々幕府に仕ふ(野史、君臣略傳、本朝武功正傳)

イシカハ ゴエモン 石川貞政 姓は源氏の一族にして貞清の弟なり、藤原氏の家人なり名は貞清字は濁、滄浪と號す通稱は清平、奥州の人井上金峨に學ひて江戸に講說す金峨殺して後に益々金峨の義子南壘と力を合せ折衷學を唱へ師說を繼述す金峨の門人牛は此人に從ふ來倉俟其の學を信し聘するに師實の禮を以てす天明中に歿す年三十九著す所滄浪遺稿あり(繪藷家人物誌、鑒定便覽)

イシカハ サダキヨ 石河貞清 (或は光張犬山城主となり邑一萬二千石を食む大阪庚子の役貞清石田三成に黨して犬山城に據り東軍を拒く加藤貞泰竹中重門等兵七千餘を率ゐ來て之を攻む關一政と(石田軍記に福島正則に作る)云る者皆て貞清と親あり因て人をして貞清に歸順を勸めしむ貞清乃ち之を諾し城を致して京師に走り(石田軍記に貞清城を致すの時猶兵一千五百人あり馳せて關原に赴き三成と相會し本多三郷と戰ひ敗るゝに及び杳木谷を經て京師に入り妙心寺に潛匿し又播磨に走り剃髮して池田輝政に依るに作る)龍安寺に依りて哀を請ひ死を免れ剃髮して宗休と號し地ふ卜して京師に居る(一說に後ち召し出されて德川氏の家人と爲るに作る)(野史、君臣略傳)

サダノブ 石河貞信 石河一光清の弟なり、雅樂助と稱す族を奥山氏と云ふ貞信豐臣秀吉に仕へて越前の田邑一萬石を賜はる庚子の役石田三成に黨し大谷吉隆と與に北陸道を徇へて關原に赴く貞信は越前に在り三成時に吉隆小松を歷て關原に出て關原の軍敗に會して相戰はんと欲し海津に抵る而て關原の軍敗れて三成奔ると聞き潛に京師に入り髮を削りて宗巴と號し今出川に幽居して終ると云ふ(野史)

サダマサ 石河貞政 姓は源氏

者なり字は士尙別號は竹崖通稱は貞一郎近江の人なり、幼にして敏警京に遷るに及びて村瀨梅亭に學び一時誹諧に神童と爲す年甫めて十六來て津藩に遊ふ國侯見て之を奇とし歲に俸米を與へて學費に充てしむ仍て還て村瀨塾に寓す文政三年國校有造館を建つ之塾首として藷に應じ來て講官に任ず時に年二十七藷て書學に副し摩政に參謀し又は小性頭を兼ね經筵に侍講し屢々顧問を蒙る之塾學は考證に長じ典故を諳んず大禮の議下る毎とに輒ち古今を引證し裏然册を成して上つる國校の學規釋奠の儀注等其の草する所皆大に旨に稱ふ文政八年津阪書學職を辭す之塾代て其の職に居り文武の學政を總督す藷て班物頭に進み三百石を食む人と爲り謹恪にして儀容修整、燕居獨處と雖とも凝然として危坐すること泥塑人の如し術に上り學に入るに及びて進止皆常處あり尺寸を失はず未だ嘗て人を罵詈せず人亦之を憚る下屬東皂隸に至るまで皆役を執て唯々謹む學政を擧ること二十年諸寮秩然事皆條ありて案れず之を久して用人格に升り復た侍讀を兼ね將に扈從して江戸に如かんとして俄に疾を獲て歿す時に天保十四年九月二十六日年五十一之塾少にして詞藝及び書法を以て聞ゆ意之を屑とせず遂に經義を研藷し尤も心を論語に潛め說約七十卷を著はす古今諸儒の說を折衷して章句訓詁を主とせず體するに和漢の事實を以てす又通鑑を校し校勘記を草せんとして中道に歿す歿するに臨て次子圭に遺囑し繼て之を成さしむ其の他著書亦殆ど身に等し少時嘗て廣益名物六帖四十卷を輯めて綜該遺すこと靡し以て其の强記博覽なるを見る可し(墓表)

イシカハ シンギ 石川眞義 土州の藩士なり潤次郎と稱す人となり勇武あり亦勤王の志厚し家世々土藩の輕士たり祖父ゐ榮吉父ゐ音作と曰ふ元治甲子藩命して眞義をして三條氏別墅黑谷の邸に奉仕せしむ此歲六月六日會津彦根の士等土藩の士野老山輝則等を以て無頼の輩と事を謀ると爲し三條街小橋傍の池田屋に圍む眞義此に至れは正に之れ劍光電を飛し喊聲雷を轟すの時なり會彦の士等眞義の後より至るを認め刀を反して進む眞義叱咤大刀を揮て拒き戰ふ斬て數人を斃し終に敵刃に死す或は云ふ眞義は此時に死せずと未だ何れか是なるを知らず時に年二十九(南海義烈傳)

イシカハ ジンシラウ 石川甚四郎 京都二條の城番たり天明八年正月內災あり公卿武人及び人民の家屋慨れ燒燼す乃ち番長某に謂て曰く速に倉庫を發し都下の人民を賑はせと某曰く江戸に請て而る後發せんと汝命を待たんや其の擅に之を發するの罪は吾迫る何ぞ救命を待たんと遂に穀を發して以て之を賑す將軍獨り之に當らんと欲し海津に抵る而て關原の軍敗れ獨り之に當らんと遂に穀を發して以て之を賑す時に天保十四年大阪城に入り髮を削りて宗巴と家嘗を之を聞き甚四郎を擢て大目附と爲す(續々皇朝史略)

イシカハ タダフサ 石川忠房 德川幕府の應下なり初め叙爵して左近將監と稱し又主水正と改め叙爵して左近將監と稱し又主水正と改め復す忠房の生父は伊丹左兵衛勝興寶暦十三年甫めて九歲出て、石川忠國の養子と爲る明和九年家を嗣ぎ八年始て幕府に謁す忠房少にして仕途に意なく唯々射技を喜びて廢食を廢するに至る時に家臣大野眞猛と云ふものあり諫めて曰く射は精しと雖も止だ一小技のみ壹んぞ遠大を以て自から期ぜざるを忠房深く其言に感じ始めて仕途に志し天番組に入る安永二年二條城を戍る四年大阪城を戍る明春父勝興役にありて病劇なり忠房親づから湯藥を執り之れに侍し交睫せざること殆んど一月遂に憊ゆることなく得たり人其の孝を稱す天保元年父大阪に赴く天明八年大番組頭と爲る寛政三年擢てられて目附と爲る明年洋舶我漂民を護送して松前に抵り別に請ふ所あり官乃ち忠房に命じて論告せしむ忠房松前に往き洋人に告諭するに我國法を以てす頗る其の事情を審くす洋人亦敬服し將に辭し去らんとす會ゝ北風澎湃旬帆を開くことを能はず時方に七月若し此候を過ぎば風濤險惡或は淹留歲を踰えんことを懼る忠房乃ち國詩を裁して賽禱の意を寓す既にして風止む洋舶歸都して復命し又海防籌を具陳す大に喜び眞義をして三條氏別墅黑谷の邸に奉仕せしむ此歲六月六日會津彦根の士野老山輝則等を以て無頼の輩と事を謀ると爲し三條街小橋傍の池田屋に圍む眞義此に至れは正に之れ劍光電を飛し喊聲雷を轟すの時なり會彦の士等眞義の後より至るを認め刀を反して進む眞義叱咤大刀を揮て拒き戰ふ斬て數人を斃し終に敵刃に死す或は云ふ眞義は此時に死せずと未

五年小普請支配と爲る文政二年再び勘定奉行と爲り道中奉行を攝ね十一年本城留主に進む七年病みて卒す年八十二忠房人と爲り剛明實直にして見斷あり事を處し爽快人の及ばざる所なり居常人に謂て曰く余の誠實蓄ゑ遺れざること概れ此の如し(事實文稿)

イシカハ タダフサ 石川忠總 德川氏の家臣にして大久保忠鄰の子なり、小字は宗十郎、石川家成養ふて子となす因りて石川氏を冒す慶長元年元服して諱字を秀忠より受け近侍たり秀忠東征して小田原に次す忠總時に年十九一隊長となり軍に從ふ會ゝ上國の變報至る又其の軍に從ふ八年叙爵せられて主殿頭と稱す家成卒するに及び其の遺領を承く十九年正月實父忠鄰軍に坐して謫せられ忠總亦生を辭して駿府に幽居す是の秋大阪城兵を擧げ敗秀忠曰く忠總既に出て、家成を嗣ぐ忠鄰と絲坐するの理なしと忠總之を聞き潛に四上す(石川家譜に先鋒の命を受けて四上すと作る)伏見に至り家士を勵まして曰く我れ父の故を以て必死を決す願くは汝有衆の一命を請はんと厚く果物を饗して之を慰り發し自ら難處を請ひて薩洲に向ひ衆を率いて奮戰して砦を拔き進んで佐土港の柴を取る夏の役又從て敵首三十級生擒二百七十を獲た明年秋忠總遷りて豐後の日田に封せらる寛永十年邑一萬石を加賜せられ所城に封せられ邑一萬石を加へ七萬石を併食す慶安三年十一月卒す時に年六十九也り法名を日觀と號す六男子あり康勝、總長、貞當、泰總、邦總、總氏と曰ふ(野史、諸士略傳)

イシカハ タルヒト 石川足人 和歌を善くし萬葉集中其の秀歌を載す和銅四年六位を歷て從五位下に叙せられ神龜元年從五位上に進む(萬葉集作者假歷)

イシカハ ヂャウザン 石川丈山 洛東の隱士なり名は凹、初の名は重之嘉右衛門と稱す丈山は其字六々山人、四明山人、凹凸窩、大拙、烏鱗、山木、山村、叢里、東溪、三足蓬の數號あり雲州碧海郡の人、祖正信碧湖に戰死す父信定弗武名あり丈山に入り國界を定め表柱を樹つ文化三年四城留主に遷り

に通ず大阪の役東照公の麾下に在り殊功を建んと欲し獨り竊に營を出て、先登し首二級を斬る然れども其の軍令を犯すを以て黜けらる遂に京師に閑居す時に年卅三乃ち薩原惺窩の門に遊び林羅山、堀杏菴、菅原得菴、野間三竹等の諸名士と文詩相交り嘗て漁村々照の詩を作る其の末句に曰く欲平將二袈衣一曉中返照上釣竿還是晉陽戈と惺窩稱して曰く斯の人後必ず詩宗とならんと母老い家貧しきを以て強いて紀伊侯淺野長晟の招きに應ず將に往んとするとき羅山及び得庵に謂て曰く此れ我が志に非ず已むを得ざればなり母天命を得ば我必ず吾が志を成さんと時に年四十一後從ひて藝州に徒る之に事ふる十三年母疾を以て殁す乃ち上書して致仕を請ふ許されず轍ち私に行て京に反る所司代板倉周防守は丈山と舊あり善く之を遇す乃ち德川幕府に薦めんと欲す丈山固辭す寛永十八年叡山の麓一乘寺村に於て詩仙堂を築て以て居る鷹師狩野探幽を以て漢魏より唐宋に至るまでの詩家三十六人の像を寫さしめ自ら詩を贊して榻間に扁列す因て自ら六々山人と號す或は頑仙子又凹凸窩と號す日に其の下に吟哦して儻游自ら娛しむ諸名公の經過する毎に談論唱和以て娛樂とす居ること之に久し世其風を仰ぎ來り訪ふ者日に多し丈山其の應接を厭ひ板倉侯に謁て曰く我れ老たり甚た世事に倦む將に故闈に歸隱して吾が天命を終へんとすと侯許さず丈山曰く然らば自今復た城市に入らずと乃ち和歌一首を作りて其の意を示す（わたらじな瀬見の小川の淺くとも老の波たつかげはけづかし）後水尾上皇其の風操を高しとし徵して之を見んと欲す丈山乃ち嘗て作る所の和歌を書て之を上り辭するに誓て鴨川を渡らざることを以てすと上皇歎賞強ひず諸侯の召辟皆應せず寛文十二年五月廿三日歿す年九十丈山尤も詩に長ず朝鮮の權汝稱して日東の李杜とす物徂徠も亦東方の詩杰と云ふ兼て書と畫とを工にす嘗て後光明天皇の勅を奉じ繇書を作りて以て獻す帝大に悅び酒肴を賜ふ世之を榮とす要姿を置かず故に嗣子なし門人安宅某繼て詩仙堂を守る後又僧尼の住するあり其の遺琴劍屐拂硯等依然として尚ほ存す享保中靈元上皇嘗て一たび詩仙堂に臨幸す是に由りて遂に列して洛東の名勝と爲ると云ふ著はす所詩仙詩、朝鮮筆語集、本朝仙注、正韻覆醬集、東溪漁隱法、視壽長篇あり（近世叢語、事實文錄、先哲叢談、近代名家著述目錄）

イシカハ　チュウリャウ　石川忠良　陸軍砲兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや召集され野戰砲兵第一旅團彈藥大隊附として出征中同年九月二十一日沙河にて病に罹り同十月十日鞍山店兵站病院に於て病死す

イシカハ　ツルヨ　石川鶴雄　陸軍歩兵少佐なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第三十五聯隊附として出征し七月二十六日清國四平形山附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イシカハ　テイサイ　石川艇齋　詩人なり名は年覽字は公通世々尾州侯の臣たり江戸に住す寛齋の第子なり梧所と號す通稱は鎌次郎（續墓所一覽）

イシカハ　トシタル　石川年足　大業蘇我連子の曾孫なり祖安麻呂は少納言小華下たり父石足文藝あり和銅養老の間內守、左大辨、太宰大貳を歷て養老の間參議と爲り從三位に至る年足性厳勁にして天平元年權に參議と爲り從三位に進ず始めより少納言に補せられ續りに外任を歷て天平中從五位下に叙せられ出雲守と爲る在官數年百姓正稅三萬束を賜ふ東海道巡察使と爲り陸奥守に遷り正五位上に進み奉宮員外亮兼左中辨に除せられ從四位下に進み春宮大夫と爲る是より先き諸國に詔して金光明寺、法華寺を造らしむ而るに主者怠慢久しうして成らず是に至りて年足及び從五位下阿部小島布勢宅主等を遣して檢察せしむ勝寶元年從四位上に進み式部卿兼紫微大弼なり以て數年百姓を安んず帝之を嘉して絁布及び稻穀を賜ふ東海道巡察使と爲り陸奥守に遷り正五位上に進み奉

臣にして家成の子なり左衛門大夫と稱し後ち長門守と云ふ高天神の戰に敵首十六級を獲たり天正八年父の後を繼く十八年小田原の役先登して功あり其の八月上總鳴戸の田二萬石を賜はる庚子の役朝鮮に從ひて小山に在り是より轉じて四上し松平家清と與に清須城を守る明年二月美濃の大垣城を賜はり邑二萬石を食む慶長十二年七月卒す時に年五十四（藩翰譜に十一年八月卒すに作る）（野史）

イシカハ　ヨシズミ　石川義純　八幡太郎義家の子孫河内源氏と稱す從五位刑官代に任ず後醍醐天皇の勅に應じ元弘元年九月廿七日笠置山に於て勇闘衆目を驚かし落城の節戰死す（太平記）

イシカハ　ヨシチラウ　石川與七郎　權の頭の嫡子にして東海第一の美男子なり力詳衆を出で其の美貌は畠山六郎重安に比せり故に國人呼で今重安と云ふ（本朝武功正傳）

イシカハ　ヨリアキ　石河頼明　豐臣氏の家臣なり家光の第四子にして一光の弟、姓は源氏美濃鏡島の人、本名は一宗字を長松と呼ぶ秀吉見一光の功を追思し邑一千石を賜ふ後秀吉に仕ふるに及び累加して一萬石を賜り摂部頭と稱す庚子の役大阪に黨し立花宗茂に從ひて大津城を攻め軍敗れて山林に潛匿し脇坂安治に懇りて赦を井伊直政に請ふ聽かれず遂に自殺す（野史）

イシカハ　ヨリヒラ　石川依平　歌人にして初名は方救（ヨリヒラ）、通稱爲藏後惣太夫に改む柳園また櫂本と號す遠江國佐野郡伊達方村の農惣太夫の子にして六歳甫めて歌を詠ず掛川侯太田資順其名を聞いて歌を徵するに至る初め冷泉爲章に學び後栗田土滿の門に入りて專ら詠歌を勵みて聲名大に揚り近藤芳樹加納諸平と共に一本二平の稱あり掛川侯之を賞して終身秩三人口を賜ふに至る安政六年九月四日歿す歳六十九門人甚だ多く著述姓氏錄同祖部類、萬葉集三山歌考、柳園詠草等あり（柳園詠草）

イシカハ　リウザエモン　シゲマサ　石川龍左衛門重政　面打なり後字多天皇の弘安年間の人京師四條に住ぜり假面十作の一なり（假面譜）

イシカハ　リウエン　石川柳園「イシカハ　ヨリヒラ」

イシカハ　リンシウ　石川麟洲　小倉侯の儒官なり名は正恒字は伯慤麟洲は其の號、平平兵衛と稱す平安の人、幼より學を好みて才氣あり先輩皆な其の大成を期す初め柳淦洲堀南湖に從ひて學を受く弱冠の比父に從て江戸に來り增非養捐を見る養捐所の規模の文を出して之を試む麟洲之を告報す時に年二十二凱旋するに及びて上總の內米地三百石を賜ふ四年又二百石を相摸の內に增賜す八年秀忠日光山に詣る回驛の時故ありて野州宇都宮より驛せて江城に入る其間三十里可り貞清健步故へて後れず寛永九年步卒長と爲る十年監察使に補せらる十年京畿洪水あり貞清使と爲て上國に赴き堤防を巡察す同年甲州の內に食祿千石を加賜せらる十三年東福門院不豫なり貞清命を奉し驛興に乘じて洛に入り奉問す時寛永通寶錢を江州阪下に鑄る貞清命を奉じて往て之を監察す十四年肥前高來郡に耶蘇宗徒蜂起して有馬の舊臣に據る幕府特に板倉重昌と貞清を擢み以て使節と爲す命あり曰く彼に至るの日先づ肥前筑後の兵を招きて之を討つべし若し猶ほ足らざれば則ち肥後筑前の軍を加ふべしと其の夜府を發し日を刻して肥前に至る時に年四十四天草の軍有馬の賊と合し島原に盤を構へ居る貞昌貞清肥前筑後等の軍と盛して賊壘を攻む共の餘四海山陽山陰の兵來會す十五年正月元日大舉して鏖戰の勢を張る先鋒利あらず重昌戰歿す貞清奮發挽ぜず退走する者あ靡く然れども還り戰ふ者寡し貞清鞭を揚げ進みて壁下に至る賊其の幟を拿はんと欲す貞清力戰して胄櫛り鎧損じて疵を被むる從士扶けて舍に歸り以て獨り軍事に任ず城兵夜に乘じて襲ひ出でんことを慮り疵を荷ふて諸軍を巡視すること四回戒令を加へ防衛を嚴にす既にして松平信綱戶田氏識江戸より至る貞清幟を揚げ進みて壁中の事を告ぐ二月二十七日諸軍競ひ進て城を攻む其の夜貞清壘に入り翌朝奮戰して首級を得壘遠に隨り賊平らぐ諸軍凱旋す其の後命あり軍中挾む所の幟及び着る所の胄鎧を御覽に備ふ十八年島銃長に補せられ新たに騎士十人步卒五十人を擢びて之に隸せしむ正保二年騎卒を率ゐて水口の館を戍る慶安三年年五歳內及び江州大水あり貞清巡察使と爲り往て之れを視る四年江府の令て號とす祖は政清父は清定共に德川氏に仕ふ貞清十歳と稱す慶長十四年秀忠に奉仕す時に年十六元和元年土岐定義の隊に列し大番を勤む其夏大阪の役起るや定義の一隊皆江府を居守す貞清執政に告げて軍に從はんことを請ふ許されず貞清志を決し獨步して長途の雖を冒め駕の後に從ひて京師にいたる秀忠其の志を賞して黃金を賜ふ戰に臨みて馬側を離れず且つ敵機を窺ひて之を告報す時に年二十二凱旋するに及びて上總の內米地三百石を賜ふ四年又二百石を相摸の內に增賜す八年秀忠日光山に詣る回驛の時故ありて野州宇都宮より驛せて江城に入る其間三十里可り貞清健步故へて後れず寛永九年步卒長と爲る十年監察使に補せらる十年京畿洪水あり官使と爲て上國に赴き堤防を巡察す同年甲州の內に食祿千石を加賜せらる十三年東福門院不豫なり貞清命を奉し驛興に乘じて洛に入り奉問す時寛永通寶錢を江州阪下に鑄る貞清命を奉じて往て之を監察す十四年肥前高來郡に耶蘇宗徒蜂起して有馬の舊臣に據る幕府特に板倉重昌と貞清を擢み以て使節と爲す命あり曰く彼に至るの日先づ肥前筑後の兵を招きて之を討つべし若し猶ほ足らざれば則ち肥後筑前の軍を加ふべしと其の夜府を發し日を刻して肥前に至る時に年四十四天草の軍有馬の賊と合し島原に盤を構へ居る貞昌貞清肥前筑後等の軍と盛して賊壘を攻む共の餘四海山陽山陰の兵來會す十五年正月元日大舉して鏖戰の勢を張る先鋒利あらず重昌戰歿す貞清奮發挽ぜず退走する者あ靡く然れども還り戰ふ者寡し貞清幟を揚げ進みて壁下に至る賊其の幟を拿はんと欲す貞清力戰して胄櫛り鎧損じて疵を被むる從士扶けて舍に歸り以て獨り軍事に任ず城兵夜に乘じて襲ひ出でんことを慮り疵を荷ふて諸軍を巡視すること四回戒令を加へ防衛を嚴にす既にして松平信綱戶田氏識江戸より至る貞清幟を揚げ進みて壁中の事を告ぐ二月二十七日諸軍競ひ進て城を攻む其の夜貞清壘に入り翌朝奮戰して首級を得壘遠に隨り賊平らぐ諸軍凱旋す其の後命あり軍中挾む所の幟及び着る所の胄鎧を御覽に備ふ十八年島銃長に補せられ新たに騎士十人步卒五十人を擢びて之に隸せしむ正保二年騎卒を率ゐて水口の館を戍る慶安三年年五歳內及び江州大

と爲る未だ幾はくならず由井正雪丸橋忠彌等反を謀て發覺す貞清急に騎卒を遣はし忠彌及び其黨若干人を捕ふ正雪駿河に逃れて死す是歳從五位下に叙せられ左近將監に任ぜらる明暦三年江城大に災す貞清城外を繞りて非常を戒む勞務頻繁能く其の事を幹す萬治二年病を以て致仕し薙髮して土入叟と稱す寛文十二年病で死す年七十九貞清人と爲り專ら武事を好み騎射に邊す其の江府の令と爲るに及びて官反內貨來の五字玩物喪志の四字を板に刻し壁に掛けて自ら警む寡欲にして貽物を禁じ設を聽て私なく刑罰理非を明辨す每に牒を捧げて至る者あれば晝となく夜となく早とに出でて以て之を裁し少しも滯留する所なし其の職を辭するに及びて人皆な追思せりと云ふ貞清好みて人物を薦引し食客常に門に滿つ嘗て一士人を某侯に薦めて曰く集れ極めて材藝あり又た巧に細膩藏を作すと侯大に喜び召して之を祿す侯封土に歸る其士も亦從ふ侯曰く聞く爾巧みに鼓を作ると吾が爲めに之を作すかと其士愕然として辭し敢て作さず他日侯土入に謁るに此の事を以てす土入笑て曰く然り是れ必ず辭せしならん其曾て僕の家に在り驛賓の事あるに會す某に命じて箸を作らしむ凡そ箸を作るは腹豐にして尾瘦たるを常とす某の作る所之と異なり中瘦て首尾皆豐なり僕之を視て以爲く此れ鈹胴を作す必ず妙なるべしと輙ち以て言と爲したるのみ僕老たり前事皆な茫然請ふ之を恕せと冒頭る諧謔に近しと雖ども亦以て人材を薦引するの妙手なりと云ふべし（事實文編、野史、黃粱一夢）

イシクロ　シゲヒロ　石黑重熙　陸軍步兵大尉なり愛知縣出身にして明治二十七八年戰役に於て第三師團步兵第六聯隊第三大隊第十二中隊長とし出征し廿八年三月二日奉天省海城三臺子に於て戰鬪中負傷同月十一日海城野戰病院にて於て死去す

イシクロ　ジンエモン　石黑甚右衛門　播磨の國主池田利隆の臣なり少うして常に遐世音を信ず幌を以て刀に掛け其の兩端を執りて壘に擬一左右往來其の路程四里に過ぐ烈風暴雨と雖ども敢て懈らず佐賀文四郎と云へるもの與に遲明より晚間に至るまで偏に馭馬の法を學び廢れば即ち仰臥し歷を併せて相踏み以て鐙に擬す而して迭に帶の兩端を執り以て壘となし遂に能く其の奥を究む其の術の妙なる馬埒端隱の際馬に鞭を加へ驅せて隱際に至るや前節を整へて管て駐て誤らず或は砲銃を縱つに他人驅馭すれば則ち馬駭飛ぶも其右衛門之れを馭すれば咫尺の間に銃を發するも慢行して跡を誤らず又た人の駕馬を馭するや鞭つと雖ども進まず而して能く驅驅すと云ふ（茶人系傳全集）

イシグロ　ダウテイ　石黑道提　茶人なり珠光に學びて茶道を能くす始め畠山長政に事ふ致仕して京師千本街に住す後其の宅地四十石を以て眞壺に換へて賞翫す其の壺の名を四十石と呼ぶ後世名器の名あり（或云ふ南部千福寺の代官なり）（茶人系傳全集）

イシグロ　チヒロ　石黑千尋　加賀侯の國學者なり嘉左衛門と稱す邢田鳳鳴守部の門人明治の初殁す

イシグロ　ツトム　石黑務　舊彥根藩士なり天保四年彥根に生る湖東小史と號す幼にして藩校弘道館に入り夙に俊才の名あり長じて藩侯直弼に仕ふ直弼卒し直憲後を承くるに當り深く直憲の信任する所と なり遂に其密たり時會と幕末多事に屬せしを以て宣師に入りて計畫する所あり元治の變軍の傳令使として至危を冒し長軍に赴き使命を遂す維新後福井縣令となり數年にして辭職し井伊世子の家庭教師となりしが晚年郷里に退隱して風流韻事を事とせり明治三十九年三月十四日病死す年七十四

イシグロ　マサツネ　石黑政常　江戸の僧工なり加藤直常の門に入り黑常と號す又東鐵子、謙谷齋の號あり通稱は善藏後周助と改む晚に壽命と號す文政十一年七月六十九歳にして殁す二世政常は初代の子なり民之助と稱し政守又盛常と名づく文政十二年父の名を嗣ぐ

イシグロ　ミツマサ　石黑光正　陸軍步兵大尉なり高知縣の出身にして明治二十七八年戰役に於て第五師團後備步兵第十九大隊第三中隊長として出征中病に冒され廿八年七月廿四日朝鮮國開城患者集合所に於て死去す

イシコ　マサヤス　石子正養　和學者にして金左衛門と稱し多頭區舍と號す石見津和野藩士、平田篤胤野々口隆正の門人たり官大敎正に昇り明治二十四年殁せり年七十一

イシコリドメノミコト　石凝姥命　天兒屋根命の孫にして天磐戶神の子なり始めて鏡を作る初め意に叶ふものを得ず再たび鑄て良きものを得たり先鑄るものを紀伊の日前神と祀り次に鑄るものを伊勢に祀る紀伊の一の宮同國名草郡なる日前國懸宮は此神なり後ち天孫に從ひて中國に至る鏡作連等の祖なり（古事記、古語拾遺、日本國一宮記）

イシザカ　アツヨシ　石坂厚嘉　陸軍步兵少尉なり岡山縣出身にして明治二十七八年日露戰役に於て躍備役より召集せられ第十師團步兵第三十九聯隊附として出征中廿八年三月五日滿國盛京省尚老屯南方高地に於て戰死す

イシザカ　シヤウカウ　石坂昌孝　武藏國南多摩郡の人なり年十五村の大庄屋代となれり維新後武山縣大參事學務委員となれり神奈川縣を置かるゝに及び縣會議員に選擧され尋いで縣會議長となる明治二十三年衆議院議員に當選し爾後當選四回に及へり二十九年第二次伊藤內閣の時群馬縣知事となり三縣自由黨の先鞭として稍々勢力ありしも晚年退隱せり四十年一月十三日病を以て逝く年六十

イシザカ　ハヂメイ　石坂白亥　俳歌を能くせり上野北石原の人白亥は其の號、一に幻花庵鼎堂又蓋窩の號あり弘化中の人（俳諧海內人名錄）

イシザカ　ヨゴラウ　石坂與力郎　藤信の家人にして強猛の士なり天正二年非條氏政兵三萬を以て佐野氏政を攻めしむ藤信氏政の後陣として向ひしが善藏後周助と改む晚に壽命と號す文政十二年父の名を嗣ぐ

イシザキ　サダノスケ　石崎定之助　陸軍砲兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て躍備役より召集を受け第二師團野戰兵器廠附として出征中三十八年六月十日清國鐵嶺に病に罹り同二十二日所兵站病院に於て死去す

イシザキ　ショウアン　石崎松庵　挿花家なり名は元應醫を業とし本草の學に深し細川勝元に仕

へて京に住む花は全く及に就きて學び頗る其沖澹幽雅の趣を愛し加ふるに眷て己か精通せる所の本草學の眞理を調和して挿花の進歩に貢獻するところ少からず爲め に花風を一變して漸く完成の域に近からしむ應仁二年六月歿す年六十五(千羽寗三氏贈)

イシザキ　ブンガ　石崎文雅　寛政時代の和學者にして日本紀臨時神祇紀年の著あり(諸家著述目錄)

イシザキ　ボクホ　石崎朴甫　狩野派の畫法か狩野常信に學ぶ(扶桑畫人傳)

イシザト　ドウシウ　石里洞秀　福岡藩の畫師なり名は美章狩野元仙方信の門人なり方信歿して其の子洞春美信猶幼なり洞秀師家に入りこれを輔翼し洞春を待つこと頗る嚴格なり食味を重れしめず衣類帛を用ゐしめず誡めて曰く足下美味を貪し美服を被らんと欲せは讀筆を以て自給せよ家祿を浪費するか許さすと洞春意を傾け洞秀に服從し後終に一名手となる天明五年七月廿五日歿す上野の護國院に葬る同寺の過去帳に仙岳院洞秀松翁居士狩野洞春養父石里洞秀事とあり養父とあれとも洞春實に洞秀の養子となりしにあらす又洞秀狩野家を繼きたるにもあらすこれ蓋し洞秀洞春を養育せしなもて洞春深く其の恩に感して之を父とし尊ひし者なるへし洞秀の生前洞春は呼ひて隱居といひしとそ(河鍋曉齋傳、護國院過去帳)

イシザハ　サダトシ　石澤定敏　陸軍歩兵少佐なり秋田縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第五十六聯隊附として出征し廿八年九月一日韓國咸鏡北道昌斗岑附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イシジマ　ツクバ　石島筑波　(石島自ら修波は其の號、左仲と稱す初名は蘋字は子遊、顯川と號す通稱與右衛門なり三州吉田の人、父を正敦と曰ふ濱松侯に仕ふ筑波幼にして絶倫六歳にして書を讀む書及び詩を江戸徂徠翁に寄せて業を請ふ年十二韓客に客館に會して唱和響の如し是に由りて名稍ゝ顯る父致仕し後ち其の縁ふ然れども其の人と爲り卓拳羞邁仕進の間に俯仰する能はず遂に臣たるを致して去る京壕に遊び歸途名古屋に滯留すること四年從遊極て多し後筑波山下に隱居す蓋し曾祖正猷下館侯に仕へ舊田宅此に在るを以てなり居ること二年復た江戸に來り服部南郭に從ひて遊ふ詩才を以て一時に雄視す寛保壬戌徒を聚めて教授す業一時に振ふ諸侯慮ゝ微せども普辭して應せず詩は嘉萬七子の風を祖述すと雖も專ら李王の緒論を墨守せず博く衆家の長する所を採る寶暦四年八月十七日歿す歳五十一著はす所芙蓉園文集初稿、同二稿、白石率女傳あり(先哲叢談檀欒編、事實文編、諸家人物誌、鑒定便覽、尾張名家志二編)

イシソネ　ハチラウ　石曾根八郎　陸軍歩兵大尉なり長野縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第一師團歩兵第十五聯隊附として出征し旅順攻圍軍に參加中同年九月廿一日太平溝東南方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシダ　イウテイ　石田幽汀　有名の畫家なり名は叔明幽汀は其の號、京都の人、初め鵜澤探源に就き大に狩野派を究め後一家の畫風を出す緻密にして巧みなり一時圓山應擧の師たるを以て世其の名を傳播す天明六年五月廿五日歿す年六十六(扶桑畫人傳、平安名所墓所集)

イシダ　イウテイ　石田友汀　狩野派の畫家なり幽汀の男、畫法を父に受けて能くす(鑑定便覽、扶桑畫人傳)

イシダウ　チクリン　石堂竹林　吉田流竹林派射術の祖なり名は如成、初め眞胥宗の僧たり江州に居り吉田一鶴軒重政に從て射を學ふ德川忠吉に尾張の清洲に仕へて射を教授す慶長中歿す次子石堂彌藏眞次其の統を繼ぐ石戸藤左衛門傳(參看(武術流祖錄)

イシダ　カンペイ　石田勘平「イシダパイガン」

イシダ　カズシゲ　石田三成「イシダミツナリ」

イシダ　キウヤ　石田九野　織工なり上野桐生の人にして花章を製する法を發明し興利伊止織唐織および天保年間の人(工藝志料)

イシダ　ギョクザン　石田玉山　畫工なり名は尙友畫を以て法橋に叙せらる大阪の人岡田玉山の門人にして初め玉峯と號す板刻畫を畫く清正眞傳記、不知火草紙、長柄長者黃鳥墳等を畫けり(武江年表、浮世繪類考)

イシダ　ギョクホウ　石田玉峰　一世玉山の高弟にして繪本蘆茅双紙菅原實記等を畫く(浮世繪類考)

イシダ　ケイノスケ　石田惠之助　陸軍歩兵大尉なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十五聯隊附として出征旅順攻圍軍に參加中同年十一月二十六日松樹山に於て戰死す

イシダ　サキチ　石田佐吉　三歳の第二子なり姓は藤原氏、庚子の秋歳南めて十七、關原の軍に從ふ戰敗るゝに及びて亡けて高野山に走らんとし播州生田に抵る從者の爲めに資財を奪はれ僅かに身を以て高野の青巖寺に遁く僧徒拒みて納れず因りて漂泊して處に歿き終に京師に於て斬らると云ふ(野史)

イシダ　サンケイ　石田山敬　俳歌を能くせり信州高井郡の人、山敬は其の號、一に高巢の號あり弘化中の人

イシダ　シウホウ　石田秀峰　畫家なり近江の人、白井廣士が門に入て畫法を能くす(畫乘要略)

イシダ　シゲイヘ　石田重家　三成の長子なり、姓は藤原氏、華人正と稱す重家關原の役祖父爲成(或は晴成又た政成に作る)入道圓齋及び三成の兄重成(或は三成の弟に作る)外祖父宇田頼忠と留まりて佐和山城を守り敵將小早川秀秋、田中吉政、井伊直政に圍まれ軍敗れて自殺す(野史)

イシダ　シゲナリ　石田重成　治部少輔三成の兄なり從五位下木工頭に叙任す一萬石を領し堺政所を勤む慶長五年九月關ヶ原の役江州佐和山に籠城し敗軍の後父隱岐守爲成其子右近朝成以下一族悉く自殺す重成亦茶事に名あり(北野緣起跋、慶長記)

イシダ　タヒラ　石田平　海軍中尉なり京都府出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び軍艦平遠に乘組み出征中同年九月十八日旅順口附近に出動し鳴渤沖に於て平遠沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシダ　タメヒサ　石田爲久　相模の三浦黛の士なり粟津の役義仲を射て其首を獲

イシダ　ヂブセウイウ　石田治部少輔「イシダミツナリ」

イシダ　トイチ　石田土市　陸軍歩兵中尉なり佐賀縣小城郡南多久村の出身なり三十四年士官學校を卒業して松山歩兵第二十二聯隊第九中隊附となり尋ひて歩兵少尉に任ぜらる三十七年日露戰役起るや歩兵第二十二聯隊附として出征し各地に轉戰し毎に勳功を樹つ後旅順攻圍軍に加はり八月二十二日東鶏冠山の激戰に於て遂に戰死す年二十六戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシダ　バイガン　石田梅巖　名は興長勘平と稱す丹波の儒者なり朱氏學を宗とし心の大虚なるを唱へ心學を創唱す京に住す延享元年九月廿四日歿す年六十島邊山に葬る(諸家著述目錄、平安墓所集、諸家人物誌、名人忌辰錄)

イシダ　ビタク　石田未琢　江戸の俳人なり未得が長子通稱要之助長堂と號す又狂歌を能くして門人多し天和二年三月歿す年七十著述一と本草あり一川音の時雨の亭や屋かた船(俳林小傳)

イシダ　ビトク　石田未得　江戸の俳人なり乾堂と號す通稱又右衛門、江戸の人一時江戸を去り相摸に隱る幾程もなく再ひ江戸に來り髮を削りて兩替町に住す松永貞德か門人にして學殖奇才あり著に「吾吟我集」等あり寛文九年七月十八日歿す年八十三句あり曰く「出し置て寢られぬ伽に炭火哉」(俳林小傳)

イシダフ　ヨシフサ　石塔義房　少輔四郎と稱す足利尊氏の族祖なり父頼茂始めて石塔を以て氏と爲す尊氏兵を擧げてより義房子頼房義基と俱に其の軍に從ふ薙髮して秀慶と名づけ出て陸奥の鎮將と爲る典國元年鎌府に入るを得ず退て中途に陣す三年顯信結城親朝等か率て來り攻む義房軍敗れ營か棄て逃る既にして復た國入を招聚して顯信と相持し誘ひて親朝及ひ伊達氏の族を降だす是に於て關東悉く降る幾ばくもなく尊氏吉良貞家か遺し義房に代て陸奥を鎮せしむ義房寇めて還る正平五年足利直義南朝に歸順す尊て復た反して尊氏と連和し又兵を構て相攻む義房終始直義に從ふ尊氏薩陸山に至るに及ひて直義、義房及ひ上杉憲顯をして之を圍ましむ尊氏の兵纔食乏しく且疲る義房等之を侮り急に攻めすに既にして直義の軍敗る義房乃ち直義と尊氏に歸す而して尊氏の將士の爲めに禮せられず義房愧ち且つ悔ゆ會ゝ直義死す義房遯る所を失ひ意益ゝ安からず新田義興兵を上野に起し來りて尊氏を討つに及んで義房三浦高通二階堂政元等と潛に之に應じ陣に疊て尊氏を斬て降らんことを約す義房計を以て子頼房に告く頼房應せす變を尊氏に告ぐ義房憤れて即夜高通等と兵五千を率ゐて出奔し義興に關戸に會し興に俱に攻めて鎌倉を取る幾くもなく義興河村城に敗走す義房逃れて駿河に匿くる足利義詮南帝を男山に攻むるを知らす(大日本史)

イシダフ　ヨリフサ　石塔頼房　足利氏の庶流なり足利泰氏孫頼茂を養ひて子と爲す頼茂義房を生み義房頼房を生む頼房右馬頭中務大輔と爲る足利直義高師直を殺さんと欲し事敗れて大和に走る頼房越智某と直義に歸順せんとか勸む、尊氏の播磨書寫山に走るや直義頼房等を遣して之を擊たしむ頼房光明山に屯して尊氏と相持すること高師泰石見より還て尊氏を援く尊氏を益さんことを請ふ俄かにして尊氏來り攻む頼房等力戰して遁りに之を破る直義又畠山上杉の黨將を遣して之を援く尊氏退て兵庫に陣す頼房又擊つ頼房桃井直常と近江八相山に戰ひて敗られて來り擊つ頼房直義に兵を益す直義又頼房を遣して直義に從ふて越前に奔る尊氏兵に將たる頼房親音城に匿る既にして父義房と直義に歸順せんとして之を捉ぶり尊て直義に從ふて直常と共に市を爲すに至り寵遇其の右に出つるものなし三成佐和山城主となり采邑十八萬六千石を食む(或は二十三萬石に作る)天正十八年五月秀吉に從ひて東征し大谷吉隆、長東正家、速水守久等と館林城を圍む城の東南に大澤あり頗る險なり三成乃ち居民を驅て木を伐り屋を撤し浮橋を造り以て之に架し衆を麾て齊く登る守將遂に城を致して去る六月三成吉隆等と忍城を攻む文祿元年六月三成兵二千を率ひて海を渡り征韓の軍に從ふ慶長三年太閤秀吉薨す三成無謀あり嘗て謂らく秀吉百年の後ち我れ天下を掌握せん而して之を阻撓するものは德川氏なり又我れに籠るものは上杉氏なりと因りて上杉景勝の臣直江兼續と親昵せんと欲し金

イシダ　ミツナリ　石田三成　本名宗成、小字を佐吉と稱す姓は藤原氏(或は日く平氏)近江の人、父を爲成と曰ふ兄を重成と曰ふ三成の身を起すに及びて井に叙爵せらる爲成は隱岐守と稱し重成は木工頭と稱し各采邑一萬石を食む初め三成の書を觀音寺に學ぶや偶ゝ羽柴秀吉鷹を郊野に縱ち渴して飲まんと欲し寺に入りて茶を乞ふ三成乃ち溫茶を巨鑑に汲み盛ること七八分以て進む秀吉咽を鳴して之を盡くし再び請ふに少煖にして半鑑を汲む又た飲み盡して請へは即ち溥茶を小碗に點して之を進む是に於て秀吉以爲らく此の兒凡庸に非らずと則ち住持に乞ひて携へ歸り以て仕へしむ時に歳甫めて十三なり是れより三成左右に給事して能く秀吉の心を話り恰も響の聲に應するが如し初め祿五百石を食む三成嘗て請ひて曰く臣寵遇を蒙むる玆に年ありと雖ども未た酬ゆる所あらず願くは宇治及淀川兩岸の葦荻を賜ふを得ほ別ち萬石の軍を以て洪恩に報せんと秀吉其の請ふ所を奇となして之を聽す三成乃ち毎日課銀を定めて之を收む後ち秀吉軍を丹波に出すに及び三成自ら騎兵を率ひて軍に從ふ旌幟驃標皆人の認め得さる所のものを用ふ秀吉人を遣はして其の三成なることを知り益ゝ才幹の用ふへきを察し衆に超えて擢用すと云ふ天正十三年七月三成從五位下治部少輔に叙任せられ名を三成と改む秀吉三成の奇才を愛し政事を論ぜしめ事大小となく委任す是に於て列侯群牧依賴し門前常に市を爲すに至り寵遇其の右に出つるものなし三成佐和山城主となり采邑十八萬六千石を食む(或は二十三萬石に作る)天正十八年五月秀吉に從ひて東征し大谷吉隆、長東正家、速水守久等と館林城を圍む城の東南に大澤あり頗る險なり三成乃ち居民を驅て木を伐り屋を撤し浮橋を造り以て之に架し衆を麾て齊く登る守將遂に城を致して去る六月三成吉隆等と忍城を攻む文祿元年六月三成兵二千を率ひて海を渡り征韓の軍に從ふ慶長三年太閤秀吉薨す三成無謀あり嘗て謂らく秀吉百年の後ち我れ天下を掌握せん而して之を阻撓するものは德川氏なり又我れに籠るものは上杉氏なりと因りて上杉景勝の臣直江兼續と親昵せんと欲し金

帛を贈て交を結ぶ霖雨の夜兼續を私第に饗し密かに曰く秀吉千歳の後ち兵を起して我が天運を啓かんと欲す而して之れか病根たるものは德川家康なり之を爲す如何して可ならんやと兼續亦た謟略あり對て曰く急に謀らば則ち難かちん蒲生氏郷と云ふもの會津に在り猛剛勇にして實に家康の扶翼たり因りて先つ氏郷を亡すに如かず之を爲すの計は其の嗣を謀ひ罪に託して封を奪ひ代ふるに上杉氏を以てし而して後ち景勝を挑して異圖を懷かしめば家康必ずや起きて之を伐たん而して足下兵を上國に起し我れ會津より夾みて之を擊たば則ち百千の家康ありと雖ども如何ともする能はざる可し我の勝を得る必ずりと三成其の言に從ひ密に計策を設く四年正月三成異圖益々急にして增田長盛、長東正家等と屢々家康を攻めんと欲す而れども議諧はずして輒ち止む池田輝政、加藤清正、福島正則、黑田長政、淺野幸長、細川忠興、加藤嘉明の七人相議し人を以て三成に謂はしめて曰く我儕骨を粉にし身を碎し外征に從事すること數年蔚山及び梁山の苦戰の如き幸長、長政及び清正最も力を戮せて明碕を捕獲し其の功勳尠なからず然れども監軍福原直高、垣見家純、熊谷直陳（大參河志に太田一吉を合せて四人を數す）の具狀達せず因りて秀吉賞する所なし請ふ其の罪を糾して三子に死を賜ひ以て我儕の寃枉を明にせしめよと三成對て曰く監軍の具狀の達すると達せざるとは我の未だ知らざる所なり而して賞すると賞せざるとは故太閤の深慮に在りて存す我れ癸ぞ預り聞くを得んやと七人憤惋し乃ち連署して家康に就き三成を罪狀し誅戮を加へんとを請ふ聽れず更に前田利家に請ふ亦許されず七人愈々憤懣して措く能はず士を驅り兵を整へ將に三成を攻めんと欲す宇喜多秀家、上杉景勝素より三成と親厚にして三成服を變して宇喜多氏に匿れ兵を備へて自ら衛る已にして三成佐竹義宣の言に從ひ伏見に往きて家康に歸す七人皆追ひて伏見に至り家康に就きて復前請を申入れ兵を諸邸に案めて命を俟つ物情壓然たり伊奈今成家康の命を受け輝政の邸に就き七人を問諭して曰く方今幼君新に立ち偏に無事を欲す七將倶に是れ先君社稷の臣なり朝論せずと雖ども治を以て要と爲すを知るべし且つ夫れ三成相抗し難きを以て大阪を去りて今斯に在り獅等逐ひ來りて府下を驚擾す吾れ今國政を預り開く亂を欲せず請ふ意を宥めよと七將從はず家康又曰く成中に得るか如しと是に於て兼續期なを約して去る是より景勝國に就き城池を繕ひ軍實を具へ潛かに不逞の徒を集め島勝猛及び大谷吉隆を引て腹心と爲し日夕謀議す慶長五年三月家康增田長盛、吉隆等を遣し三成に命して景勝の城壁を完繕するを議めしむ三成辭するに諸侯の常事なるを以てす五月家康遂に東伐に決す三成莊助と三成擊す七月家康東發す三成又吉隆を迎へて商議す吉隆曰く若し家康を謀らは盍ぞ之を伏見に決せざるや今ま潟を去て東下せしむ猶ほ魚の水を得、虎の林に入るが如し到底獅の力敵し難し張耳の時より士卒を擁愛し慈以て主となし仁以て要とす因りて麾下の士悅服し皆死を以て酬いんと欲す然るに我れ島合の衆を驅りて彼を謀らんと欲す勝敗戰はずして明らかなりと再三諫諍して後に之に黨す三成乃ち吉隆、正家等と倶に大阪に適き豐臣秀頼の命を矯めて四諸侯の東伐に會せんと欲する者を抑留し遂に兵を擧げて反す毛利輝元兵を帥ひて安藝より大阪に至る三成等推して盟主となす宇喜多秀家、小早川秀秋、島津義弘、鍋島勝茂、立花宗茂、小西行長、吉川廣家、長曾我部盛親等列侯群牧大小五十餘名前後大阪に會し益々兵を各路に驀りて步騎總て十三萬九千餘、一時國を擧げて命を聽くもの二十六國勢威大に震ふ（逸史に師總て十五萬に作る○落穆集に云く秀家を以て謀主となす）十五日三成等秀家、義弘と會議し列侯の妻孥大阪の各邸に在る者を收め秀家、秀秋、義弘等を以て伏見城を圍ましむ八月朔を以て遂に之を拔き三成諸將の向ふ處を部署す而して秀家、吉隆、正家等皆城守を以て可となす三成可かずして曰く我が衆十萬餘にして敵兵僅に半なり押し兵の要ほ守るべくして守り戰ふべくして戰ふに在るなり晉れ五攻十圍なるとを聞く未だ守るの倍過の衆を以てするを聞かざるなり且已に辭を奉じて彈を伐ち却て一城に墜ば何を以て天下に示さん天正中小牧の役我が御日を曠うして相持し卒に志を得ずして罷め思を以て之を觀るに是れ機を當に戰ふべきに失するなり先君一たび誤

れり今豈に再び誤るべけんや關原の地たる平曠にして敵を待するに利あり我れ軍を彼處に布て前後齊しく擊たば駕れ焉ぞ支るを得んや而して亡くるを追ひて之を呂久川郷戸に蹙めば大業乃ち手に唾して成るべしと列侯諸將の氣を負ふ者皆之に雷同す是に於て三成等師を東海道に進め德川家康と大に關原に戰ふ西軍敗績して終に支へず諸將或は死し或は奔り又多く擄ぜられ餘衆潰亂す三成僅に身を以て逃れ膽吹山谷中に匿る、三成の父爲成入道圓齋、兄重成、及び其の子朝成、三成の敗聞至り且つ小早川秀秋、田中吉政、井伊直政等の來り圍むに及び周章して爲す所を知らず爲成等三成の妻孥を殺して皆死し城陷る三成草野谷に蹋蹐し七旬を歷て高野に抵り山谷に潛匿す是に於て其の從者三人を慰諭し再會を約して離散す採拾自ら給し淺井郡を歷て潛に舜勳院に潛る其の地たるや田中吉政の采邑に屬して部索甚だ急なり寺主乃ち三成を勸めて遁れ去らしむ三成剃め髢髮を服し破笠を被むり面を覆ひ鎌を腰にし佯て樵夫と爲る會々疾に罹りて井口村に抵り里民野乃と云ふものを見て告ぐるに實を以てし飯を乞ひ伴はれて其の家に息ふ野乃の婦逮捕の甚だ急なるを以て勸めて之を告げしむ吉政乃ち人を遣はして三成を執ふ（板坂卜齋慶長記に云く田中吉政の三成を近江の北部に部索するや一夜陣頭を過ぐる者あり守兵就て問へば答て曰く水を汲む者なりと時に甚雨暗黑なり守兵怪みて先づ之を擒にして燭を點して見れば即ち三成なり時に茶褐色の綾衣を服し笠を被むり吉光の短刀を佩ぶ乃ち之を大津に送致す三成久しく窩を患ひ日夜困臥すと國史實錄に云く三成窩下病に罹りて草間に潛匿し饑えて將に死なんとす乃佩刀の金鎭を解き僕に附して往き錢に換へ以て餅を買はしむ餅賣翁之を怪しみ追跟して以て吉政に告ぐ吉政乃ち翁をもて懲尊せしめ竟に三成を擒にす）と三成已に携せられ特に太閤秀吉賜ふ所の包眞の短刀を把り吉政に請ひて曰く我れ辱を忍びて再辱を謀り徽運にして捨に就く卿若し故舊を遺れずんば幸に我を放てと吉政曰く汝魁首と爲り其の罪甚だ深重なり我私に允す能はざるなりと乃ち捕吏に命じて縛する に嚴緊を以てし遂に大津の行營に引致す家康命じて衣食を給し且つ醫を遣はして病を療ぜしめ之を本多正純の陣舍に繫ぐ十月朔奥平信昌命を受けて三成及惠瓊、行長を面縛し駿すに車を以て京師に徇へて四條に斬り首を三條磧に梟す三成二子あり重家、佐吉と曰ふ（野史）

イシダ　ムトク　石田無得　秋田藩の儒家なり名は道、通稱惣助、磯齋、微逕道人又集虛齋と號す家代々商估を業とせり資性直質平素詩に巧みにし又書に能くし殊に換鶴の嗜み深く其揮毫の際常に淡墨を用ふ行草は最も其逸技とする所なり慶應年中菜人無得のの書を清國に贈るものあり清人之を評して曰く實に日東絕妙の筆なりと無得嘗て其墨稿を河に投じたりしが人あり之を拾集して市に鬻き以て利を獲たりと云ふ天保十一年九月歿す年六十八

イシダ　モグノカミ　石田木工頭「イシダヂナリ」

イシダ　リウハウ　石田流芳　海軍少機關士なり石川縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや少機關士候補生として軍艦吉野に乘組み從軍中同年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突に依り吉野沈沒の際戰死す戰功に依り少機關士に任ぜらる

イシヅカ　クニヤス　石塚國保　下野國那須郡興野村の醫なりしが醫業に志して專ら之を奬勵し更に寛延三年京都に出で、西陣織の法を學ぶこと數年、郷里足利に歸りて龍紋織を始む（日本產業年譜）

イシヅカ　クワクサイ　石塚確齋　薩摩の儒者なり名は崔高字は士堅（士一に子に作る）五郎左衛門と稱す薩摩の人精里に學ぶ遂に本州の儒官に擢てら る文化四年二月七日に歿す著す所故語考、地球全圖あり（續諸家人物志、鑑定便覽、名人忌辰錄）

イシヅカ　ソウウウ　石塚宗通　江戸の茶人なり川上宗雪の門人、中川公に仕ふ（茶人系傳余集）

イシヅカ　タツマロ　石塚龍麿　國學者なり安右衛門と稱す濃州郡の人、本居宣長の門人、大に語學を研究す著す所古言清濁考等あり（鑑定便覽）

イシヅカ　チュウタク　石塚鑄太　海軍大主計なり靜岡縣志太郡西益津村の人明治元年三月を以て東京小石川新諏訪町に生る資性英邁活達幼より群を拔く十八年九月海軍主計學校に入り結髮勉成絃常に衆に越ゆ在學三年業を卒へて海軍主計候補生となり海門艦に乘組む二十三年海軍少主計に任ぜられ高千穗、龍驤、比叡、館山等の諸艦に歷乘し二十七年六月比叡艦主計長に補せらる尋で日清戰爭起るや比叡は常備艦隊に編入せられて出征し九月十七日の黃海大海戰に於て比叡は本隊五番艦と爲りて奮戰力めたりしが幾度か窮地に陷り敵彈の集注甚しく艦隊の損傷少からず爲に艦員の戰死亦多かりきこの間鍔太は三宅大軍醫等以下と共に敵彈破裂の下に斃る年二十七

イシヅカ　チュウヘイ　石塚重平　安政二年十月信州小諸町に生る其家土地の門閥なり六歳父を喪ひ當時內外多事勤王攘夷の論方に旺なり十三歳の時其師牧野某寃罪にて斬らる重平憤慨措く能はず其の仇を殺さんと圖り反て屢々暗殺の危險に遇ふも終に免るることを得たり維新後自由民權の論諸方に興るや重平亦默する能はず明治十年鰲鴻武を興して自由民權思想の養成に努め町村會議員聯合町村會議員郡會議員等に歷任し傍ら銀行若原植林の事業を起して大に地方自治の發達に盡瘁す十四年板垣退助等自由黨を大阪に起すに當り長野縣同志會を代表して盡力する所あり十七年黨員會議を大阪に開き一旦解黨の議を決するや內亂陰謀の嫌疑を以て捕へらるしも幾くもなく放免せらる十八年朝鮮事件の爲めに大井憲太郎等と共に大阪の獄に繫がるること二年遂に有罪に決し德島監獄に移され しが二十二年憲法發布の際赦免せらる其年大同團結の組織成るや入りて常議員となる二十四年同志と共に立憲自由黨を組織し其幹事に擧げられ二十八年之を辭す二十七年九月長野縣第五區より推されて衆議院議員となる三十一年四月布哇に渡航し遂に米國に至らんとするや時恰も自由進步の兩黨合同して憲政黨の組織し其內閣成立せしかば直に歸朝して同黨の評議員となる憲政黨の解散して更に政友會の組織せらるゝや入りて其幹事に擧げられ三十三年政友會內閣成るに及び大藏省官房長に任ぜらる三十四年五月之を辭す八月衆議院議員補欠選擧に當選す三十五年八月總選擧にも再選せらる三十七年布哇に航し日本人會長に推され三十八年歸朝同志と共に大同倶樂部を組織し三十九年の帝國議會

に奎院委員長となる四十年四月大藏省稅法調査委員を囑托せらる同年八月十二日病を以て逝く年五十三

イシヅ クワンザウ 石津完造 陸軍歩兵中尉なり大阪市出身にして三十四年十二月一年志願兵として第四師團歩兵第八聯隊に入營す三十七年日露戰爭起るや歩兵少尉として歩兵第三十七聯隊小隊長と爲りて出征し第二軍に從ひ五月二十五六日亘る金州南山の激戰に參加し猛進奮鬪し二十六日南山附近に於て戰死す年二十三戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヅクリ クセキ 石作駒石 信濃國島の邑主山村氏の臣なり名は貞字は子幹（子一に士に作る）駒石は其の號、貞一郎と稱す家世〻山村氏に仕ふ父厚愷兄某の事に坐して祿を失ひ久しく尾州名古屋に在り其の族某に養はる享保中復た山村氏に仕ふ資曆七年に歿す時に駒石十八歲祿を襲ふて近侍となる十九歲始めて書を讀む明和三年春暇を請て勢州桑名に往き南宮大湫に學ぶ日夜誦讀して怠らず其の學大に進む同五年島に歸る邑中の子弟從ふもの多し島は本尾州侯の附屬にして山村氏數世士豪を以て之に據る故に名古屋に山村氏朝宿の館あり安永五年山村氏駒石をして館の留守とならしむ館事大に治る暇あれば出て〻府下の諸士と文學を以て交歡す其の名一時に顯はる天明中邑の稻麥登らざるを以て財用足らず顧る整理に難し山村氏駒石の更才あるを知り擧て其の出納を料理せしむ三歲にして財用大に足る上下之れを悅こぶ遂に擢てられて宰老となる寛政八年正月十四日歿す年五十七著はす所槃山機集、莫逆集、勸學言志編等あり（先哲叢談後編、續諸家人物志、鑑定便覽）

イシヅチ シマノスダ 石槌島之助 伊豫の力士なり初め白山新三郎と號す紀州侯の抱たり長け六尺四寸七分、體量四十五六貫、膂力衆に絕し「叩き」を以て輪を制す曾て之れを以て兜山襷太右衞門を勢州に撲殺したることあり寛永中の人なり（早引人物故事、相撲今昔物語）

イシヅヤ ソウエイ 石津屋宗嬰 泉州堺の茶人なり武野紹鷗の門人（茶人系傳全集）

イシヅ リャウチョウ 石津亮澄 國學者なり屏助と稱す大阪の人、本居大平の門に學びて詠歌を學ぶ古學を修めて上達す後ち徒を聚めて敎ゆ（鑑定便覽）

イシデ ジャウケン 石出常軒 幕府の士なり世〻帶刀と稱す世〻典獄たり常軒廐歌を善くし春雨鈔を著す寛文七年二月六日江戸大火あり傳馬町の獄舍に延燒す時に常軒獄囚を誡めて曰く火已に延燒して免れ難し而れども今次等等しく焦死するは亦哀むべきなり因て吾れ之を解放し以て火災を免れしめん必ずや三日を期して歸るべし歸らざるものは三族を夷滅せんと乃ち悉く放つ而して明日に至り皆回へり來りて一人も漏れ走る者なしと云ふ（環齋紀聞に曰く明暦三年丸山本妙寺の出火に帶刀始めて囚徒を放ちて淺草善慶寺に避けしむ是囚獄の近火に因て放つの始なりと〈野史〉）

イシド トウザエモン 石戸藤左衞門 吉田出雲の弟子名を竹林と改む三井寺に隱れ居る家康家人となし旗本の士へ弓術を敎へしむ是を竹林流と云ふ恐くは石堂竹林と同人（君臣明傳）

イシノ ウヂトシ 石野氏利 離想流鎗術の祖なり初め一藏と稱し文彌平兵衞と稱し傳一と號す赤松圓心の爵石野正直の子なり衣笠七兵衞櫻原俊重に從て學ぶ紀侯に仕ふ元祿十一月十七日歿す年七十三（武術流祖錄、武藝小傳）

イシノ セウスケ 石野樵水 林田藩の儒者なり名は黃裳字は學美通稱駝感初め江戸に出て〻辻元祿甚古賀側庵及び昌平黌に學び歸藩して儒員となる最も文章を善くす明治維新後擢大參事となり九年歿す（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

イシノ トウレウ 石野東陵 林田藩の儒者なり字は子楊通稱充藏播州太田村の人初め中井履軒に學び後古賀精里に學び更に昌平黌に入る文政年間林東陵詩集東陵文集あり（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

イシノ ヒロミチ 石野廣道 和學者なり本姓中原氏、平藏と稱す幕府に仕へ祿三百石を食む從五位下遠江守たり御膳奉行より佐渡奉行に進む時に佐渡志を著す又雅講奉行と爲り御膳奉行となりて上京記を著す和歌を冷泉爲村に古典を伊勢貞丈に學ひて詠歌に巧なり世人之を稱す

イシバシ カズヨシ 石橋和義 足利高經の從祖兄弟なり初めの名は氏義、尾張三郎と稱す祖は義利廣澤太郎と稱し父は義博吉田三郎と稱す和義從五位下左近衞將監、參河守を歷る足利尊氏反して筑紫に走るや官軍の爲めに追擊せられんとす盧舍に延燒す時に常軒獄囚を免れ難し而れども今次等等しく焦死するは亦哀むべきなり因て吾れ之を解放し以て火災を免れしめん必ずや三日を期して歸るべし歸らざるものは三族を夷滅せんと乃ち悉く放つ而して明日に至り皆回へり來りて一人も漏れ走る者なしと云ふ（環齋紀聞に曰く明暦三年丸山本妙寺の出火に帶刀始めて淺草善慶寺に避けしむ是囚獄の近火に因て放つの始なりと〈野史〉）

イシド トウザエモン 石戸藤左衞門 吉田出雲の弟子名を竹林と改む三井寺に隱れ居る家康家人となし旗本の士へ弓術を敎へしむ是を竹林流と云ふ恐くは石堂竹林と同人（君臣明傳）

イシノ ウヂトシ 石野氏利 離想流鎗術の祖なり初め一藏と稱し文彌平兵衞と稱し傳一と號す赤松圓心の爵石野正直の子なり衣笠七兵衞櫻原俊重に從て學ぶ紀侯に仕ふ元祿十一月十七日歿す年七十三（武術流祖錄、武藝小傳）

イシノ セウスケ 石野樵水 林田藩の儒者なり名は黃裳字は學美通稱駝感初め江戸に出て〻辻元祿甚古賀側庵及び昌平黌に學び歸藩して儒員となる最も文章を善くす明治維新後擢大參事となり九年歿す（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

イシノ トウレウ 石野東陵 林田藩の儒者なり字は子楊通稱充藏播州太田村の人初め中井履軒に學び後古賀精里に學び更に昌平黌に入る文政年間林東陵詩集東陵文集あり（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

イシノ ヒロミチ 石野廣道 和學者なり本姓中原氏、平藏と稱す幕府に仕へ祿三百石を食む從五位下遠江守たり御膳奉行より佐渡奉行に進む時に佐渡志を著す又雅講奉行と爲り御膳奉行となりて上京記を著す和歌を冷泉爲村に古典を伊勢貞丈に學ぶ寛政十二年五月歿す年八十三（鑑定便覽、近代名家著述目錄）

イシバシ カズヨシ 石橋和義 足利高經の從祖兄弟なり初めの名は氏義、尾張三郎と稱す祖は義利廣澤太郎と稱し父は義博吉田三郎と稱す和義從五位下左近衞將監、參河守を歷る足利尊氏反して筑紫に走るや官軍の爲めに追擊せられんとす盧舍に延燒す時に常軒獄囚を誡めて曰く火已に延燒して免れ難し而れども今次等等しく焦死するは亦哀むべきなり因て吾れ之を解放し以て火災を免れしめん必ずや三日を期して歸るべし歸らざるものは三族を夷滅せんと乃ち悉く放つ而して明日に至り皆回へり來りて一人も漏れ走る者なしと云ふ（環齋紀聞に曰く明暦三年丸山本妙寺の出火に帶刀始めて淺草善慶寺に避けしむ是囚獄の近火に因て放つの始なりと〈野史〉）

イシド トウザエモン 石戸藤左衞門 吉田出雲の弟子名を竹林と改む三井寺に隱れ居る家康家人となし旗本の士へ弓術を敎へしむ是を竹林流と云ふ恐くは石堂竹林と同人（君臣明傳）

イシノ ウヂトシ 石野氏利 離想流鎗術の祖なり初め一藏と稱し文彌平兵衞と稱し傳一と號す赤松圓心の爵石野正直の子なり衣笠七兵衞櫻原俊重に從て學ぶ紀侯に仕ふ元祿十一月十七日歿す年七十三（武術流祖錄、武藝小傳）

イシノ セウスケ 石野樵水 林田藩の儒者なり名は黃裳字は學美通稱駝感初め江戸に出て〻辻元祿甚古賀側庵及び昌平黌に學び歸藩して儒員となる最も文章を善くす明治維新後擢大參事となり九年歿す（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

イシバシ キタラウ 石橋喜太郎 陸軍歩兵少尉なり滋賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備歩兵第九聯隊附として從軍中三十七年八月二十四日旅順要塞盤龍山西砲臺に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イシバシ ゲンウエモン 石橋源右衞門 兵法家なり承應年間門人別木、林等と共に幕府の芝增上寺に於て法會を執行するに際し同志を糾合し火を縱ちて寺を燒き其の財物を掠めて軍資となし以て事

を舉げんとす石橋も亦其の黨に加はる者と認定せられ總に鋸く是より先き別木、林の二人事露はれて縛につき官に告るに源右衞門を以て魁首となす官更源右衞門を捕へて其の實を糾問す源右衞門答ふるに黨にあらざるか陳へて其の實を糾問す源右衞門の傳にあり（黃粱一夢）

イシバシ マクニ 石橋眞國 江戸町奉行所附幾掛茶屋の主人にして國學に通ず通稱茶屋七助稽古樓と號す安政二年歿す（廣益諸家人名錄、名人忌辰錄）

イシバシ ヨシナカ 石橋義仲 足利泰氏の遠孫なり小字は松壽、父を諦博と云ふ左近衞將監と稱す永享十二年六月畠山滿泰を攻て篠川滿良を殺す義仲父に繼く結城氏朝足利持氏の孤を扶けて兵を起すに當たり將軍義教命して兵を募り結城を攻めしむ義仲兵を出さず嘉吉元年結城陷るを義教書を下して義仲を責む長祿三年將軍義政兵を募て足利成氏を古河に攻む義仲兵を出すと遲緩なるを以て譴を受く義仲の子を尙義と云ふ曉仲に繼て四本松城に居る後ち家臣大內宗政の爲めに墓せられ石橋氏亡ふ（野史）

イシバシ リャウシツ 石橋良叱 泉州堺の茶人なり武野紹鷗の門人（茶人系傳全集）

イシハタ イツブラウ 石幡伊三郎 陸軍歩兵中尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第三軍司令部附として出征旅順攻圍軍に參加し同年十一月二十日二龍山に於て戰死す

イシハラ カイチ 石原嘉市 陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び後備役より召集せられ歩兵第三十五聯隊附として出征し旅順攻圍軍に參加し同年十一月二十六日松樹山補備砲臺戰鬪の際負傷水師營第七師團第三野戰病院に於て死去す戰功により勳六等功五級に叙せらる

イシハラ シュゼン 石原主膳 元甲斐の山縣昌景の銃士なり天正十年德川家康に仕へ秋葉山にて誓詞し酒領を給はり井伊直政の輔臣として附屬を命せらる其の後軍に隨て戰功多し

イシハラ セイジ 石原錢次 陸軍工兵少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや近衞工兵大隊附として出征し十月十二日清國盛京省上老邪鎮戰鬪の際負傷同日近衞師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

イシハラ タケヲ 石原武雄 陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び第七師團歩兵第百七聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中同年十一月廿日二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

イシハラ テイアン 石原鼎菴 （石原自修して石とす）儒醫なり名は學魯字は貞卿、鼎菴は其の號又梓山と號す長崎の人、杭僧澄一及劉曾心越に從て學ぶ順菴深く之を器とす鼎菴詩名あり後ち順菴に從て富勢を喜ばず官路に趨らず濟然として清國盛京省楊家屯にて病に罹り九月十三日長嶺子野地定立病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イシマル カメジラウ 石丸龜次郎 陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第廿二聯隊附として出征中廿八年三月五日清國盛京省孤家子附近戰鬪の際負傷し同廿一日大石橋兵站病院に於て死去す

イシマル キホウ 石丸龜峰 佐賀藩の儒者なり名は良幹字は禮介京攝の間に遊學すること二度、天明四年藩侯の敎諭に學げらる初め醫園の學を奉せしか後國洛に歸し最も經義に邃しまた槍法に通す文化九年二月十八日歿す年七十八（墓表、山野一善報）

イシマル セキセン 石丸石泉 藩家なり通稱は山三郎後に三亭と改む江戸の人藤田東湖の隨筆中石泉に關する記事あり「石丸山三郎といふ人麾下の小祭請なりしが御厨方へ出身を內願せば八十俵の株になるべしと世話する人あり山三郎不正の役筋にて利を貪ることを欲せずとて背はず其後小祭請世話役より山三郎を呼出しければ山三郎自ら思ふに余出身の內願もなく又無事を成さゞれば一身に拘はることにはあるまじ親類縁者などの內あしき事なしたるを察當あるならんと推察しつゝ出けるに學問所勤番を命ぜられたりと雖ども世渡季の中にも如此人あるは賞むべき事なり一是れ天保八年にして石泉が二十五歲の時なり爾來三十餘年勤勉怠に奉じ最も林櫻宇、佐藤一齋諸先生に知遇せられ林家代々の肖像皆な石泉の作る所なり、石泉人と爲り溫厚高潔にして名利を求めず初め谷文晁の門に入り文晁歿して後ち五十嵐竹沙に學ぶ其筆氣韵頗る高く殊に桃源の圖は得意とする所と云ふ栗本鋤雲亦た深く其人物と畫品とを稱賞せり、晚年博物館より囑托せられて古器物の現形を模寫することに從事し文部省に於て諸藩の學政を調査するに方り德川家の依囑に應し多年其の親視する所に據りて聖堂釋奠の圖を作る正確巧密人をして當日の盛事を追想せしむ日本敎育史資料

イシマツ シュンゴ 石松俊吾 陸軍軍醫正なり大分縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵第三十六聯隊附として出征中廿七年八月廿七日清國盛京省楊家屯にて病に罹り九月十三日長嶺子野地定立病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イシマル カメジラウ 石丸龜次郎 陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第廿二聯隊附として出征中廿八年三月五日清國盛京省孤家子附近戰鬪の際負傷し同廿一日大石橋兵站病院に於て死去す

イシマル キホウ 石丸龜峰 佐賀藩の儒者なり名は良幹字は禮介京攝の間に遊學すること二度、天明四年藩侯の敎諭に學げらる初め醫園の學を奉せしか後國洛に歸し最も經義に邃しまた槍法に通す文化九年二月十八日歿す年七十八（墓表、山野一善報）

イシマル セキセン 石丸石泉 藩家なり通稱は山三郎後に三亭と改む江戸の人藤田東湖の隨筆中石泉に關する記事あり「石丸山三郎といふ人麾下の小祭請なりしが御厨方へ出身を內願せば八十俵の株になるべしと世話する人あり山三郎不正の役筋にて利を貪ることを欲せずとて背はず其後小祭請世話役より山三郎を呼出しければ山三郎自ら思ふに余出身の內願もなく又無事を成さゞれば一身に拘はることにはあるまじ親類縁者などの內あしき事なしたるを察當あるならんと推察しつゝ出けるに學問所勤番を命ぜられたりと雖ども世渡季の中にも如此人あるは賞むべき事なり一是れ天保八年にして石泉が二十五歲の時なり爾來三十餘年勤勉怠に奉じ最も林櫻宇、佐藤一齋諸先生に知遇せられ林家代々の肖像皆な石泉の作る所なり、石泉人と爲り溫厚高潔にして名利を求めず初め谷文晁の門に入り文晁歿して後ち五十嵐竹沙に學ぶ其筆氣韵頗る高く殊に桃源の圖は得意とする所と云ふ栗本鋤雲亦た深く其人物と畫品とを稱賞せり、晚年博物館より囑托せられて古器物の現形を模寫することに從事し文部省に於て諸藩の學政を調査するに方り德川家の依囑に應し多年其の親視する所に據りて聖堂釋奠の圖を作る正確巧密人をして當日の盛事を追想せしむ日本敎育史資料

料に載する所のもの即是なり石泉が聖堂以來の相識にして年齢相若ける尚山黃村、木村二梅の諸子皆な先歿し老境其寂寞を極め明治三十二年九月十六日病歿す年八十七（石泉小傳、東湖隨筆）

イシン　意深「キクガハイシン」

イシンアン　以心庵「リヤウジユンホウシンワウ」

イシムラ　ゲンゲウ　石村檢校　琵琶法師なり又三味線を善くす檢校琉球に渡航して小弓（一に胡弓）を見る小弓は三絃を以て作り之を小弓に懸け以て彈ず檢校之れを探て云爲らく一絃二絃は琵琶に均しく三絃は琵琶の三に比して其の高さ二調子なり蓋し琵琶に由來する者ならんと之に因て始めて三絃を發明す或は謂ふ中小路琉球より之を傳ふと未だ其の孰れが是なるを知らず（聲曲類纂）

イシムラ　ゲンザエモン　石村源左衛門「コアフミ」

イシンキン　クワンパク　己心院關白「フヂハラモロノリ」

イシヤマ　ゲツイウ　石山月悠　俳歌を能くせり羽州長上の人、月悠は其の號、一に知足庵の號あり佐助と稱す弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イシヤマ　セントク　石山川德　狩野派の畫家なり畫法を狩野常信に學ぶ（扶桑畫人傳）

イシヤマノ　ソウヅ　石山僧都「リヤウシン」

イシヤマ　チユウナイ　石山仲内　陸軍步兵中尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第八師團步兵第三十一聯隊附として出征中明八年一月廿七日清國盛京吉黑濟奉附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヤマ　モロカ　石山師香　從二位中納言に任ず狩野永納に學びて戲畫を能ず又金木彫物に巧みなり享保十九年十月十三日薨す年六十六

イシヤウアン　倚松庵「エムラセンサイ」

イシヤウカ　因斯羅我　もと漢人なり雄略天皇七年七月詔して新漢（イマキノアヤ）陶部高貴鞍部堅貴等と共に居住の地を賜ふ頗る畫を能くす

イシヤウ—イシヤ

イシヤウタリ　ソウゲン　石王塞軒　平安の儒者なり名は明誠初安兵衛後康介と稱す塞軒は其の號又黃裳、確庵の號あり、父は則之元祿十四年四月十八日を以て近江甲賀郡水口邑に生る幼にして顯悟嶷嶷にして京師に遊び槃を三宅尚齋に受く博く諸名士と交り講究數年遂に久米訂齋井澤蘭室と宅門の三傑と稱せらる而して雲軒は其の魁たり嘗て大洲侯の聘に應じて伊豫に至り政事を預り聞く侯遇すること寶禮を以て頗あり親の老たるを以て辭して鄉里に歸る父母を奉養すること甚だ厚し人皆な其の孝を稱す其の歿するに及びて田宅家財悉く族人に附與し單身平安に遊び講說徒に授く理を窮め道に任ずるを以て先務とす尚齋歿し其の〻寶暦三年年五十三始て江戸に來る嘗て仙となりなる稱す享年五十三始て江戸に來る嘗て仙藝侯の請ひに應じて孟子を其の邸に講ず翌年又阿波侯の聘に應じて之に遊事す侯甚だ之を重んじ握んでて大夫となし俸六十口を賜ふ將に委ぬるに國政を以てせんと欲す居ること數歲侯の失行を見て俸を辭して再たび平安に來り雌を下して道を唱ふ尤も太極圖說の旨を研究し太極圖說大意講義二卷を著はす故に人皆な性理斷治太極廣分と曰ふ安永九年正月二十一日歿す年八十著はす所太極圖說大意講義、讀書摘講、黃裳文集あり其の餘論孟經說は散佚爲はらずと云ふ（先哲叢談後編、諸家人物志）

イシヤウタリ　エイザウ　石渡映三　陸軍步兵少尉なり神奈川縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て軍征中同年八月十四日清國盛京吉黑濟奉方高地出動中戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヤウタリ　タカスケ　石渡隆輔　海軍中主計なり于奚出身にして明治三十七年日露戰役起るや軍艦速鳥に乘組み出征中同年九月三日旅順口附近や軍艦速鳥に乘組み出征中同年九月三日旅順口附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヤウ　イツセイ　石井一晴　奥州仙臺の人なり一晴は其號、別に鳴鳩庵の號あり駿河と稱す

イシヤウ　ウセキ　石井雨石　奥州須賀川の俳人なり雨石は其號、別に夜話亭の號あり久右衛門と稱す弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イシヤウ　サダオキ　石井貞興　肥前長瀨村の人なり苔と竹之助と稱す舊佐賀縣の大屬たり始め江藤新平の亂に應じて鍋島直大の家祿金數萬圓を欺き取

イシヤウ　カツザエモン　石井勝左衛門　大鼓の名手なり初の名は滋長觀世小次郎信光の門人にして屢〻勝左衛門と改む

反て警の爲めに掩殺せらる語は兵右衛門の傳中に在り（野史）

イシヰ　ヒャウエモン　石井兵右衛門　美濃大垣の人なり幼より加藤清正に仕へて屢〻戰功あり從て熊本に徙り慶二百石を禄て寛永中加藤氏國除かれ士民離散す兵右撃を率ゐて大阪に客居し擊劍を以て徒に授く正保元年生玉里の酒肆に客三人あり酣酒して主翁を殺し傭保傷を殺むる者數人隣里之を府廳に訴ふ士卒を遣して捕縛せしむ客樓上に在り梯を攀づる者は下瞰して之を斬る殺傷甚だ多くして獲ること能はず兵右之を聞き子兵介と走りて之を告ぐ吏乃ち命を傳ふ兵右大に喜び乃ち請ひて曰く三人を生獲するは實に難し一人を殺せば如何吏曰く可なりと乃ち兵介に命じて曰く汝樓下に立て予投せば汝ち縛せよ兵介曰く勞にして左に矩火を持ち疾呼して上る三人鉢を齊しくして之を迎ふ矩火鼻頭を掃き烈焰衝灼す三人退縮す乃ち突進し直ちに一人を截り二人を樓下に投ず兵介就て縛す事城代太田資宗に聞ゆ資宗其の勇を稱し近臣を遣はして米二十苞銀二十錠を賜ふ兵右命を拜して賞ものみ辭す使者强て與ふ兵右兵介に謂て曰く士は貧なりと雖ども豈に以て貨を取る可けんや苟くも其現を受けは人將に曰はんとす利の爲めに身を忘るゝ者なりと乃ち往き且つ意を告げて賞ものを辭す資宗歎じて曰く實に烈士なりと乃ち召し見て之を勞ひ命じて酒及び佩刀を賜ふ是に由て二百石を受けて濱松に客となり兵介と共に左右に給事す後ち資宗辭免して國に就き兵右をして勇氏を京に聘せしむ兵右事に托して近郊を遊覽し嵯峨野に至り同僚赤堀源右衛門に邂逅す今ま松軒と號す手を提て故を告ぐ松軒曾槍を善くし其の子源藏も亦父の業を受く兵右其の久しく流離するを憐み源藏を携へて濱松に歸り徒を聚めて槍法を授く時に宮本武藏の徒高阪無一と云ふ者諸州を遊歴し城下を過ぐる毎に榜を掲げて劍槍の師を招き其の技を試み過ぐる所必ず勝つ自ら誇て謂へらく天下に敵なしと一時濱松に含る兵右源藏を竹槍を提げ進て其の胸を搠く無一猶ほ進みて已まず源藏叱して曰く汝知らざる乎と攫し無一起て已まず無一赧然として去る太田氏乃ち源藏を擧げて槍師と爲す業を受くる者益〻多し一夜雨雪す諸少年會飲し醉後に百怪を語り燈心百條を照し一證擧る毎に一條を滅じ將に半ばならんとして燈忽然として滅す中庭に果して物あり車輪の顚倒するが如し源藏槍を提げて之を見れば家狗なり國中傳笑して曰く狗を屠らんと欲せば須らく源藏に學ぶべしと兵右衛門聞て之を病み竊かに源藏を誡む源藏諾を敏へんことを請ふ兵右湯を流し杖を執て起つ源藏槍を舞して進突す兵右杖を揮て槍を鐵し直ちに入て連りに頭を笞ち叱して曰く汝が父の杖なり宜しく心に銘し骨に鏤べしと源藏平伏して罪を謝す乃ち酒を命じ慰勉して之を遣る兵右衛門の家奴事を解せず獨人中其の主の能に誇て曰く前日源藏主人と藝を比らべ笞うたれて起つこと能はずと語遂に流傳し源藏の徒以て告ぐ源藏悲て謂ふ兵右衛門奴をして吾が醜を播かしめ以て吾を辱しむと乃ち夜往て見ゆ兵右衛門喜んで與に碁を圍み止め宿せしむ人定て後ち源藏密かに寢室に入り之を刺して遁れ去る時に兵介宿直なり計を聞て回り屍を抱いて慟哭し城主に請ふに復讐の事を以て大田氏召して曰く共に天を戴かざるの仇報せざる可らざるなり我善く要擊す汝たん寛文七年七月赤堀源藏に示すと而して兵介谷右に在り之に久うして賞に乏し乃ち僕常右衛門を遣して濱松に歸へす初め常右主兵介に從て國を出るや兵介の妻身めるあり是に至て男を擧ぐ常右相見て慰問す家益〻困しむ常右妹あり未だ嫁せず私かに告げて曰く主人貧に乏しくして未だ復讐すること能はず汝女子と雖ども主の爲めに力を出すこと如何妹曰く唯〻時に娼家の人京より來る者あり乃ち相約して妹を賣り八十金を得乃ち復た谷汲に至る此時源藏姓名を變じて大坂に客居し多く惡少年と遊交す或る人告げて曰く頃ろ京四に人を殺す者あり榜して曰く右井兵介と汝之を知る乎と源藏大に驚き往て之を見る乃ち父已に殺に遇ふ乃悲少年三人を率ゐて三絃を鼓し乞兒と爲て谷汲に遷き仇を窺ふ兵介一日行て里中の稱名寺に遊ひて夜歸へる源藏南陽院の側に伏す會〻天雨ふる兵介傘を傾て之を過ぐ伏起て夾み擊つ兵介叱呼して曰く何物の賊か無禮なると刀を揮て相支ふ衆寡敵せず亂刀の下に死す常右死を聞き切齒すれども及ばず湖泣して濱松に歸り之を告ぐ兵介の妻哀慟に勝へず血章に稱す常右天に號泣し誓して曰く一家の此禍に罹る者は皆源藏に由る二孤を長養して以て讎を復する者吾に非ずして其れ誰かあらんと乃ち三歳の兒を携へ初生の孤を懷き途中に乳を乞ふて大阪に至る時に妹故と爲て新町に居り挾衣と名つく常右二孤を託せんと欲す挾衣慨然として託を受く常右乃服を變じ笈を負ふて諸州を歴て源藏を縱跡す後ち病みて海西に死すと云ふ挾衣自から遺孤を撫し客に接する毎とに士人の義氣ある者を見て情を盡し歡を迎へ以て依賴を爲さんと欲す丸義の士三井十左衛門情好特に密なり一夕二兒の故側に在るを見て之れを異し敢衣哀訴して曰く是れ姿が主の遺孤なりと告くるに實を以てす十左其の節義に感じ乃ち携提して養育すること十餘年兄牢三郎既に十七歳弟三介も亦成童是に於て兄弟に謂て曰く汝父祖の仇あり報せざる可らず予挾衣の託を受け以て汝の成立を俟つ者も亦唯〻是れが爲めのみ父の讎を紹ぎ以て其の靈を慰むるも亦只〻斯に在り身を立て名を揚げ紹を繼ぎ靈を興すも亦只斯に在り汝其れ旃を勉めよと乃ち二十金を出し以て行資と爲す兄弟涕泣し愚を謝して行く共に叙と爲て小諸の士島井元右衛門の家に仕ふ兄弟小心事に服するを以て愛せらる一日兄弟私かに語て相泣く元右其の故を問ふ兄弟告ぐに實を以てす元右歎じて曰く汝年少にして其の志慨む可し此の地は僻陬便ならず予が兄郷左衛門東府に在り予書を寄せて汝を託せん誰か行くべきものぞと第三介請ふて行く郷左憐みて之を止め列侯行くに相會ふ毎に則ち謂て曰く寡君槍を善くすると者を求む有らは則ち敬へられよと龜山の行人曰く吾藩に赤堀某なる者あり管槍を善くす嘗て人を殺し其子仇を復せんと欲す亦之を殺す寡君其の勇を聞き召して師と爲す君侯求むる所は其れ斯人の徒乎と郷左歸て三介に告ぐ三介大に喜び拜謝して曰く孝ひに大人に賴て仇の所在を獲請ふ疾く歸り報じ以て素志を遂せんと乃ち星夜小諸に還り兄弟共に龜山に往て仇を狙ふ一日之れに途に遇ふ兄牢三郎後より呼んで曰く子は赤堀氏に非ざる乎と顧みて曰く誰れぞ石井氏の子なり父祖の仇を復せんとすと奮擊して背に傷つく源藏怒り鬪ふ三介跳り進て其の額を擊て倒す牢三郎を刺す事龜山城主板倉氏に聞ゆ板倉氏其の孝義を嘉みし命して之を館僧し使を遣はして狀を太田氏に告ぐ太田氏嘉褒し其の秩祿を復し又命じて金を出し岐挾衣を贖はしむ兄弟之れを母とし養ふ仇を復せしは實に元祿四年五月廿日なり（野史）

イシヰ　ヒロスク　石井廣助　陸軍歩兵中尉なり神奈川縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや警備役より召集せられ歩兵第十五聯隊附として出征し同年十一月廿八日清國盛京省寺兒溝西方約千米突高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヰ　ブツウ　石井佛塢　儒者なり名は耕字は子耕後助と稱す伊豆の人なり（諸家人名錄）

イシヰ　マゴベエ　石井孫兵衛　石井流大皷九世の人なり名は景行後一齋と號す勝左衛門景重の子にして技を父に受く世〻京師に居る加賀侯能出の館あり毎に金澤に至る例とす景重の時蜂須賀侯孫兵衛を聘せんとす辭す維新の際京都に於て藩の周旋方を命ぜらる明治十一年出京し青山御所御警衛に列す明治三十二年一月歿す年七十三子傳太郎先だちて歿す宗家の藝統絶ゆ（石井家譜）

イシヰ　マタタラウ　石井又太郎　陸軍歩兵少佐なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露の戰役に於て第十師團第三十九聯隊附として出征し三十八年三月五日清國盛京省小東勾附近戰鬪の際負傷し同七日瓦家堡子第十師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イシヰ　マツイチ　石井松一　陸軍歩兵大尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十一師團歩兵第二十二聯隊附として出征中三十八年三月一日清國盛京省五百牛泰西北方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イシヰ　ミチザネ　石井道眞　陸軍歩兵中尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年戰役に於て豫備役より召集せられ第六師團歩兵第四十八聯隊附として出征中三十八年三月一日清國盛京省東部林盛堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イシヰ　ミチヤス　石井三千井　諱は延善三千井と稱す藩士なり少にして父母を失ひ兄も亦尊家を出て叔父に託し家を出て太田某に就き大に醫術を修む元治元年八月赤堀家を出て太田某に就き大に醫術を修む元治元年八月赤堀家を出て太田某に就き大に醫術を修む元治元年八月赤堀

し數〻義晴を諫むるも聽かれず終に永祿五年九月一族を率ゐて三好薫を伐ち興に船岡山に戰ふ兵潰えて之れに死す子あり貞良と曰ふ倶に戰死す（野史）

イセ サダチカ 伊勢貞親 足利氏に仕ふ初字を七郎と稱し世は平氏、高望王の玄孫常陸介正度の後ちなり正度八世の孫俊綱と云ふ豐前守に任ぜられ始めて族を伊勢と稱す俊綱の曾孫を貞綱と云ふ貞綱の曾孫貞國貞親を生む貞親年甫めて十六兵庫助に任ぜられ文安中備中守從五位下に叙任せらる享德中從五位上に進み侍從を經て伊勢守に任ぜらる康正元年從四位下に叙せられ明年秋正四位上に進む（一說に云く應仁二年從四位上に叙せらるゝと）文正元年內青右筆となり內外の諸事を與り聞く是に於て幕府貞親を呼びて父と云ひ其の妻を母と稱すと云ふ貞親甲斐氏の女を以て妻となす（或は妻に作る）初め斯波氏の嗣子代德丸夭し濃入道常治と云ふもの貞親に懇り遮り義廉を以て斯波家の嗣となし以て前主義敏を黜く後ち貞親妻を蓄ふ妾は義敏の妻と姉妹たり是に因りて妾言を巧にして竊かに義敏の爲めに宗を復せんとを請ふ貞親爲めに數〻將軍義政に請ふ義政乃ち義敏を以て再び斯波氏の家督と爲す是に於て義廉命を拒みて兵を分國に召し山名、土岐、一色氏等之れに黨し京師騷然たり山名宗全首として列侯を誘ひ連署して貞親の專橫を愬へ之れを誅せんとを請ふ貞親之れを懼れて遁走し蹤を晦ます後ち應仁元年八月京師の騷擾に乘じて京に入り細川勝元に依る勝元乃ち義政に請ひて舊科を赦し幕府に侯し漸く舊職を復す後ち文明三年老を請ひ五年正月卒す時に歲五十七なり法名は悅堂常慶、聽松院と號す三子あり貞宗、貞長、貞藤と曰ふ而して貞宗繼ぐ貞親書を善くす（續本朝書史、野史）

イセ サダツグ 伊勢貞繼 伊勢流乘馬の祖なり御衛と鞍鐙の製法を大坪道禪に受け一流を起す平貞盛十三代の孫にして足利義滿に仕ふ伊勢守に任ず子貞信以後馬衛を傳ふ（近代世事談）

イセ サダハル 伊勢貞春 萬助と稱し和學者にして貞丈の男なり（諸家著述目錄）

イセ サダフヂ 伊勢貞藤 貞宗の弟なり默存居士と號す入道して常喜と云ふ備中守に任ず好みて圖畫を作す（餘林五風集、息園名畫拾遺）

イセ サダムネ 伊勢貞宗 兵庫助と稱す父は伊勢守貞親と稱し將軍義政の嬖臣なり永享八年尾州斯波の嫡子卒去の後家系相續の子なきに由て一族大野持種か子義敏を嗣嫡とす老職甲斐朝倉織田の三人是に服せず遂に伊勢守に就て將軍家に訟へ義敏不德にして貞宗此を聞て父に謂て曰く大人何ぞ斯の如く衷裏の心を黜し再び義敏赦免の事を公方家に願はんと子人君の器に當らず願くは是を廢せんと云ふ其時貞親か妾は甲斐か妹なり內緣の親に由て言を巧にし公方家に愁訴す義政乍ち義敏を廢して澁川義廉を嗣となす其の後義敏は還治して中國に至り大內敎弘に寄寓せり是時伊勢守に斐幸の妾あり新造と云ふ此女義敏か妾と又兄弟なれは義敏之を德とし私に新造を賴んで再び斯波家嗣の事を伊勢守に囑す伊勢守久內緣の蟲負を以て年貞宗此を聞て父に謂て曰く大人何ぞ斯の如く表

イソガハ　マサヤス　五十川昌安　裝劍師なり源七と稱し養松堂と號す永川堂の弟子なり濃州大垣傳馬町に住す尤も刀脇差の身に種をかくに妙を得たり（裝劍奇賞）

イソカヒ　ヨシマロ　磯貝芳麿　陸軍騎兵大尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや騎兵第三聯隊附として出征中同年十二月二十一日清國盛京省十里河にて病に罹り三十八年一月十一日遼陽兵站病院第二分院に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イソカハ　レウアン　五十川了庵　醫者なり名は春一の名は宗知、後ち春意と改む了庵は其の通稱、祖は淨鑑父は了任、了庵天正七年を以て京師に生れ八歳にして世醫盛方院紹繼に養はる居ること七八年業を紹繼に受け復た內田默庵に就て學ぶ既にして又曲直瀨正慶吉田意安に從ふ慶長六年了庵細川興元に從ひて豐前小倉に赴く明年了庵勿めて太平記を梓に刻し以て世俗に便にす事幕府に聞ゆ家康了庵をして新に東鑑を刻せしむ年月を歷て功成り以て之を獻ず八年家康了庵をして信州河中島に往き羽林忠輝に仕へしむ忠輝は家康の愛子なり後忠輝封を越後に益すに及びて了庵も亦た二百石を加賜せらる國に在りて花井氏の姻熱病を療して効あり忠輝聞て之を褒む是に於て麾下の士林も亦た其の名を知る又た瀧川氏の內傷を治して驗あり家康書を忠輝に賜ひて之を感奬す元和中忠輝事に坐して國を除かるる了庵時に四十三洛の舊宅に歸休す此より篤仕に意なく閑居すること四十餘年方技益々進み名聲愈々顯はる刀圭の暇好みて書を讀み頗ぶる和歌を嗜しむ老て益々矍鑠として飲食減ぜず問對流るゝが如く方書を點檢し自つから細字を寫す每に病家の告ぐるあれば遲遲み間はず駕輿して往き昇く者足疲るれば則ち徒步して還る寛文六年死す年八十九著はす所藥石異錄、針灸要略、飲食藥要等あり（墓表）

イソガヒ　マサヒサ　磯貝正久　赤穗四十七士の一人なり十郎左衛門と稱す兄を內藤萬右衛門と曰ふ幕府の士松平興右衛門に事ふ正久幼にして機悟鼓を聽つを學び散樂を能くす年十四堀部金丸の薦を以て淺野長矩に事へて兒小性となる長矩好みて書を繙く正久槍書を善くするを以て命じて書を寫さしむ是れより絕て鼓を擊ずず物頭並に遷り百五十石を食む長矩の死するや正久片岡高房と柩を護して泉岳寺に至る悲慟に堪へず各々髮を斷て還る二人相ひ謂て曰く義央は仇なり吾等國の重恩を荷ひて仇讎を斬らざれば何ぞ生を用ふることをせん（義人錄及び報讐錄に赤穗に居て計を聞くとするは誤なり）と將に赤穗に赴かんとする時母に謂て曰く兒縱令國に淹滯するも請ふ幸に書間を勞する勿れと母之を許す遂に高房と俱に赤穗に至る大石良雄に見え事を議して合はず乃ち衆に謂て曰く君等城に死せよ我は仇に死せん國に殉ずるは一なり君等之を勉て江戸に還る既にして衆復仇を謀ると聞き吉田兼亮に由り良雄に請ひて盟に與る衆或は其の年少うして信に難きを疑ふ然れども正久高房と復仇の謀を執り終始變ぜず其の後母疾に嬰りて死に瀕す衆會々事を擧く正久慨然之に赴き衆向ふ所を知らず正久乃ち一人を執へて燭燭を索め每室中閤黑に之を燒く晃耀晝の如し衆其の機敏に服す明日泉岳寺に赴く路將監橋を過く良雄等正久を顧て曰く獨か兄の家近きに在り宜しく往きて母氏を省すべし正久曰く今日何ぞ敢て私親を省みんと覓に往かず堀部金丸細川氏の第に在り人に謂りて曰く同盟の士は率ね皆な世臣なり正久新進の少年則ち能く奮勵雜に赴く世臣に愧ちずは豈に得易からんやと死する時二十五（赤穗四十七士傳）

イソガヤ　サウシウ　磯谷倉洲　儒者なり名は正卿字は子相號左衛門と稱す滄洲は其の號尾張の人松平君山に學び博洽を以て聞ゆ明和中朝鮮來聘のとき其の學士南秋月筑前の藝井道載及滄洲を併び稱して東海の鰲頭と曰ふ享和二年歿す歲六十六著す所尾張國志滄洲文集あり（續諸家人物志、鑑定便覽）

イソガヤ　シンザエモン　磯谷新左衛門　茶人系傳全集）

イソガヒ　ジンザウ　磯島賢造　陸軍步兵少尉なり富山縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや退役中より召集せられ第十師團步兵第十聯隊附として出征し同年十月二十二日清國盛京省瓦家堡子附近にて病に罹り歸國後自宅療養中三十九年三月十一日死去す

イソシマ　ジラウ　磯島二郎　陸軍步兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第五師團步兵第二十一聯隊附として出征し同年八月廿一日清國盛京省レヤオヤンスイ附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イソ　ジンザウ　磯甚藏　石州流の茶人なり有寄庵と號す岡田道竹の門人（茶人系傳全集）

イソダケルノカミ　五十猛神「イダケルノカミ」

イソダ　コリウサイ　磯田湖龍齋　浮世繪師なり庄兵衛と稱す江戸小川町土屋家の浪人後ち國學研堀に住す浮世繪を畫き法橋に叙す然れども巧みならずと云ふ（扶桑畫人傳）

イソナミノ　オキナ　磯波翁「ヲカダバンサイ」

イソノ　カズマサ　磯野員正（織田家譜に秀昌に作る）近江の人なり父を員吉と曰ふ員正父死して其後を鬪ず丹波守と稱し淺井氏に隸す元龜元年六月姉川の戰ひ其の先鋒となりて野村に陣し坂井正尙と奮戰し敗れて士卒散す會々長政の麾下來り援け再たび進みて羽柴秀吉と相ひ擊つ後ち隊敗れて潰散し自ら餘兵を率ゐ退て佐和山を保つ織田信長遂に師を進めて員正を圍む員正險阻に據りて防禦し二年二月勢挽み て降を乞ひ終に城を致して高島に移り天正元年九月杉谷善住房を携へにして之を岐阜に送ると云ふ（野史）

イソノカミ　アナホノ　ミヤニ　アメノシタ　シロシメシシ　スメラミコト

イソノカミ　オトマロ　石上乙麻呂　物部目の後胤なり父は左大臣麻呂、鳥望清華、當時の右族たり麻呂の季子なるが故乙又た弟麻呂と稱す性穎敏にして雍容閑雅尤も風儀に善し少にして學を好み墳典に耽ける翰墨詩賦當時に冠たり久米若女に姦せし罪を以て土佐に流さる臨岭澤志を文藻に伸べ悲操二卷を作る天平中詔して遣唐使を簡ましむ從來此擧は其の人を得るに難んず之を朝堂に選むに乙麻呂の右に出づる者なし遂に徵還して大使と爲す衆皆時の爲めに推さる

る此くの如きに服す而れども事果さず後ち從三位に進み中納言兼中務卿に拜せられ遂に台位に登る風采日々に新たに芳猷遠く傳ふ勝寶二年卒す著はす所の書亡せて傳はらず詩篇は僅かに懷風藻に存す（日本儒林傳、大日本史）

イソノカミ　カツヲ　石上堅魚　養老三年從五位下を授けらる神龜元年內物部を率ゐて神楯を齋宮南北二門に立つ三年從五位上に叙せられ天平六年正五位下に進み八年正五位上に至る（萬葉集作者履歷）

イソノカミノ　ワウジ　石上皇子　欽明天皇の皇子母は皇妃倉稚綾媛なり

イソノカミ　ヒロダカノ　ミヤニ　アメノシタ　シロシメシシ　スメラミコト

石上廣高宮御宇天皇「ニンケンテンワウ」

イソノカミ　フツノ　オホカミ　石上布都大神（一に布流大神に作る）佐士布都神又の名は纒布都神又の名は布都御魂神を祀る大國主尊國土を天孫に獻するの後天照大神建御雷神をして再び降て中國を循撫せしむ建御雷神曰く僕自ら降らずとも專ら此事に任せる刀佐士布都神を降さんと是石上に祀る神祠なり素盞嗚尊授る所十握劍即是なり祭神は鹿島明神と同じ二十二社の一に列す大和國山邊郡に鎭座す（古事記、二十二社本緣、二十二社註式、延喜式神名帳）

イソノカミベノ　ワウジ　石上部皇子　欽明天皇の皇子母は皇妃堅媛なり

イソノカミ　マロ　石上麻呂　本姓は物部連、大連目の後衞部宇麻呂の子なり壬申の亂弘文帝敗走し大臣以下皆な散ず獨り麻呂之に從ふ天武の朝大乙上を授けられ道新羅大使と爲る年を踰て還る小錦下直廣參に昇進し姓石上を賜ふ持統の朝筑紫に赴て新城を監す尋て直廣壹に進み賞人五十人を假し直大壹に進めらる文武の朝筑紫の總領と爲り尋て中納言に進む大寶元年正三位を授けられ大納言兼太宰帥と爲る慶雲元年右大臣に轉じ封二千一百七十戶を益す和銅元年正二位に累進し左大臣に轉す都を平城に還すや麻呂雖波京留守と爲る養老元年薨す年七十八帝深く悼みて朝を廢す式部卿長屋王左大辨多治比三宅麿をして第に赴て弔賻せしめ從一位を贈る百姓追墓、痛惜せざるなし又其の家に維壹百四絁四百絇綿一千斤布二百端を賜ふ（大日本史）

イソノカミ　ヤカツグ　石上宅嗣　黃門乙麿の子なり性敏悟にして辭容閑雅心を經史に潛めて涉覽する所多く善く文を屬し兼ねて草隸を工みにす淡海三船と文人の魁と稱す勝寶の初め朝散大夫に叙し治部少輔に補せられ後ち文部卿と稱す勝寶の初め朝散大夫に叙し治部少輔に補せられ後ち文部大輔に遷り內外官に歷任す寶字中藤原頲足纒の事に坐して大伴家持と俱に更に下され日ならずして解くことを得たり景雲の初め參議銀青光祿大夫に至り寶龜の初め出でゝ大宰帥と爲り居ること幾ばくもなく入りて式部卿に遷り藤原永平等と定箴して光仁帝を立て中納言に拜せられ請ひて姓を物部と更ため遠祖の姓に復す後ち數年詔して石上に復し大納言に轉じ金紫光祿大夫に至る宅圃素心を文雅に留め山水景致に値へは便ち筆を把りて懷を攄す著はす所の詩數篇を存するのみ天應元年官に卒す（日本儒林傳）

イソノ　キヘエ　磯野喜兵衛　裝劍師なり升屋小左衛門の男京都御幸町御池上に住す（裝劍奇賞）

イソノ　コヱモン　磯野小右衛門　大阪の賞業家なり文政八年十月三日長門國阿武郡萩椿町に生る幼名は仁三郎、河村仁左衛門の次男なり十八歲にして下の關に出て米相場を爲して家產を覆す嘉永三年八月大阪に來り安政三年堂島濱通り一丁目に米問屋を開始す元治元年勤王の嫌疑を蒙り獄に下されしも直に町預となる明治二年京都府御用達となり苗字帶刀を許さる此時より磯野氏を冒す磯野は河村の舊姓なり四年四月大阪北大組總區長を命ぜらる四月大阪堂島米會所を創立して同所米方頭取を命ぜらる又大阪淺瀨築港事務御用掛堂島米油會所頭取等に選任せらる十一年五代友厚中野梧一等と謀りて大阪商法會議所を創設し十四年大阪株式取引所頭取に當選す二十三年一月特旨を以て從七位に叙せらる二十四年一月大阪商業會議所會頭に當選し同年博覽會事務局評議員を命ぜらる二十六年一月大阪株式取引所理事長に當選し二十七年大江卓米倉一平等と圖り全國取引所の機關として帝國商業銀行を創設し取締に擧げらる三十二年十一月堂島米穀取引所理事長に當選す三十六年五月勳勞に依り勳五等瑞寶章を賜はる老年に至るも矍鑠として實業界の爲めに盡率し大阪株式取引所及堂島米穀取引所の兩理事長として其聲望大阪實業界に隆々たり三十六年六月十一日胃肝の癌腫に罹りて死す年七十九大阪長柄の墓所に葬る

イソノ　ジョウチク　磯野乘竹　裝劍彫工なり升屋文右衛門と稱す寬延の頃小左衛門と改む京師に住す（裝劍奇賞）

イソノ　セイハク　磯野正伯　裝劍彫工なり升屋小左衛門と稱す京都御池柳馬場東へ入る所に住す（裝劍奇賞）

イソノ　セイニフ　磯野正入　裝劍彫工なり小左衛門後小兵衛と改む京都二條鉄屋町西へ入る所に住す（裝劍奇賞）

イソノ　ゼンジ　磯禪師（一に前司に作る）は舞妓なり讃岐國大內郡小磯の人後鳥羽院の時藤原通憲に從て舞樂の一種を傳ふ白水干立烏帽子を用ひ太刀を帶びて唐の衣冠に代ふ之を男舞と云ふ女靜の時に至て太刀を用ひず因て白拍子と云ふ（近代世事談）

イソノ　タメカズ　磯野爲員　源三郎と稱す父右兵衛大夫員詮といひ世々京極家に仕ふ永正十五年淺井亮政を小谷城に攻む此時京極勢大に敗走し添ち敵の猛威に恐怖す爲員風せず一歩も引去らず敵六騎を斬り奮戰して遂に死すといふ（豹皮錄）

イソノ　ヒサマル　磯野久丸　山梨縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て日本赤十字社醫員として從軍中三十八年四月二十二日陸軍病院船幸運丸にて病に罹り五月四日廣島檢疫病院に於て死去す

イソノ　ヒデマサ　磯野秀昌　淺井長政の臣なり丹波と稱す姉川の戰長政に從ひ織田信長の兵と戰て大に武勇を顯せり（本朝武功正傳）

イソノ　マサヒロ　磯野正博　裝劍彫工也小左衛門と稱す京都二條鉄屋町西へ入る所に住す初め正勝と銘す（裝劍奇賞）

イソノ　マサモト　磯野正元　裝劍彫工なり俗稱升屋小左衛門と曰ひ京都御池柳馬場東へ入る所

に住す（裝劍奇賞）

イソノ ヨシタカ 磯野義隆　大藩藩の士にして通稱彌右衛門、徒士善兵衛の子にして學を好み て中江省吾に學び經史詩文に通ず用人に擧げられ藩治に功あり寶暦中歿す年七十三（日本教育史資料）

イソノ ノリマロ 磯法麻呂　陰陽師なり和歌を善するを以て其の名四方に聞ゆ詠歌は載せて萬葉集其他の諸書に在り（萬葉集作者傳）

イソバヤシ シンザウ 磯林真三　韓國公使館附武官なり土佐國高知の産藩士にして明治四年藩主に從ひて上京し御親兵に編入せらる五年三月陸軍教導團に入り六年七月更に陸軍士官學校に入る壬辰の事起るに及びて陸軍少尉試補に擧げられ八年一月少尉に任ぜらる偶〻朝鮮の頑民我が雲揚艦を砲擊するの事ありて政府黑田特命全權大使を派して其事を所理せしむるに會し隨行の命を受けて彼地に航す先の陸軍大將西郷隆盛等亂を鹿兒島に作すや眞三師團傳令使に任ぜられ又征討二旅團參謀を命ぜられ大に田原坂に戰ひ後ち肥薩隅日の間に轉戰し遂に城山を圍み自ら請ひて進擊隊に屬し衆に先ちて奮戰大に功あり勳六等に叙せらる十一年八月近衛諸隊の暴動（即ち竹橋の騷動）を企るや眞三其の事情を視察し且說諭鎭撫の命を奉じ單騎にして竹橋の兵營に至る其の途次暴兵の群に遇ふ皆銃劍刀槍を振ひて眞三の前後を圍繞し將に手を下すあらんとす眞三乃ち機智を運らし大聲呼びて曰く余も亦た微意なきに非ちず機智を運らし大聲呼びて曰く余も亦た微意なきに非ちず請ふ少しく余が言を聞け抑〻黨を樹て事を擧げんと欲するものは必ずや首長なかるべからず余不敏と雖も亦た少しく經驗に富めり敢て請ふ其の任に當らんとみと諸兵乃ち逡巡して敢て迫らず已にして一兵あり衆に代り進みて曰く公の言大に理あり某等推して以て將と爲さん請ふ早く令を掌れと眞三之を諾し馬首を轉じ諸兵を率ゐて皇居の門外に至り又謂て曰く衆暫く鋒に持て余入りて以て謀る所あるべしと乃ち近衛局に至り事情を悉して申報し仍りて以て是等の亂あり我が公使遭れて長崎に歸る已にして政府訓令あり公使をして再び韓城に入り謀る所あらしむるや眞三命を奉じ公使花房義質に隨行して大に盡力する所あり十月同國公使館附を命ぜらる是より後ち朝鮮に在りて公務に駐ぜらる正七位勳六等に叙す十七年二月歩兵大尉に任ぜらる同年十六年二月歩兵大尉に轉ず黑川縣京城に寓あり是より先き眞三は內地旅行の命を帶びて京城を發し十二月五日龍仁縣に達し夫より道を水原道に轉じ黑川縣を經て將に歸京せんとす偶〻變亂の起るに會す人其の京城に入るを危み皆な之を止む眞三聽かずして曰く己に京城の急報を聞きて命を惜み難を避くるが如きは日本男兒のなさゞる所なりと遂に決然馬に鞭ちて直に南大門に進む門を去る僅に五六町寄波驛に至りて暴民の爲めに圍まれ終に戰死す後ち其の屍を檢するに全身傷かざる所なく慘狀觀るに忍びずと云ふ後ち竹添公使其の屍を歛めて之を仁州路傍日本人埋葬地域に葬る實に明治十七年十二月二十一日なり十八年二月從六位を贈る子あり熊一と曰ふ後ち政府其遺族に祭祀料八千圓を賜ふ四十年七月正五位を贈らる（時事新報）

イソベ テルヒロ 磯部照博　陸軍少兵中尉なり三重縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや臨師役より召集せられ第三師團歩兵第三十三聯隊附として出征中同年十月十一日清國鎭京省沙河堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イソベ ヒャクリン 磯部百鱗　京都儒家なり明治三十九年四月九日病歿す年七十一辭世の句あり曰く「形こそ消ゆれ命は野に山に」

イソベ ヨシノブ 磯部最信　神道大成教の管長なり世〻德川の支藩田安邸に仕ふ學を勉め武を講し能く其の職を勤むるを以て格を破りて登用せられ藩の學政に擧られ侍講と學政局の督學を兼ね維新の後朝廷に仕へ相川縣の權參事と爲り頗る治績あり明治九年廢縣せられて官を罷む是れより先き專ら經史を攻め六人部是香に遇ひ大に議論を試みて遂に之に服し一意道の教を敷き以て國體を講明し同胞の大和魂を練磨せんことを誓へり明治九年初めて教導職試補と爲り明治十年平田省齋と共に神道大成教の一派を創立し遂に大教正に進み明治廿三年五月省齋の歿するや其の後を繼ぎ書史に涉る因て是の命あり勝重固く辭すれども聞れず乃ち然らば妻と胥議して後命を拜せん家康笑て可とす勝重還り妻に謂て曰我公我をして奉行となりしむ固辭すと雖も聽れず故に妻と議して後命を拜せんと請ふ子の意如何妻遽愕して曰私事は夫妻胥ひ議する事あり〻雖も是れ公事なり拜するを拜ざるとは良人の心にあり妾柔柔ぞ預り聞かん勝重曰拜と拜ざらとは敢て吾心にあらず亦子の心にあり古より今に不る迄和漢共に重職に任じ顯著に補せられて家を滅し身を亡す者少しとせず而して其原因は或は內寵に就き或は意貳に依る災害多く婦女子に發す若し我れ命を拜して後設令親戚と雖も子其訟獄を拒むべきか賄賂を邵くべきか且我身體百行萬惟の業あり之雖も發言するなきか其盟約を聞くにあらざれば我必らず命を拜ぜず是れ則ち子と胥ひ議する所以なりと妻熟思して曰く惟〻命是れ從はんと勝重恰然として神に盟ひ佛に誓ひ將さに柳營に登らんとし服を裝ひ出づ其の裝を逆にす妻遽に之れを言ふ改めんとす勝重色を作して曰く前の盟は是なり何ぞ遺失の速なる此の如くなれば我れ命を拜する能はずと將に服を脫ぜんとす妻侮笑して謝す勝重乃ち出づ家康曰く婦何を謂ふ對て曰く拜すべしと笑て曰く可なり勝重職に就き請謁を杜ち苞苴を絕つ法を奉し理に循ひ努て大體を存す境內翕然として真吏の稱あり遂に小田原及び關東の代官を兼ね武藏の田一萬石を賜ふ慶長六年五月所司代を京師に置く勝重及び加藤正次を擇びて之れに任ず尋て正次本願寺境地に關し私斷あるを坐し罪を獲、勝重命を受て專ら之に任す是の時に當り大亂新に平らぎ衆心一ならず幾向故に狐れて動もすれば口を豐臣氏に藉り未だ東征の施措に安んぜず是の職たるや上み宮闕より下も公卿百司に至るまで公私の事務皆辨ぜざるを得ず時未だ登下に理官を置かず故に四民の賦役、關訟、市井の禁令、寇盜の請謁より傍ら神戶佛字の控訴請求に至るまで專て一署に領す勝重上を奉し下を御す孚誠條達、威和非び行はる萬緒叢委と雖も雍容之を處し裁決流るゝが如し府に滯案なく獄に淹囚なし貴賤目を拭て新政に推服す勝重幼にして浮屠に歸す家に歸るに及て既に更事に徙ふ故に亂世に居り未嘗て甲を擐し陣に臨まず然ども功或は執矛の右に出づ職に襲て大成教管長と爲り神道教法の廣布を以て自任す二十七年蓮門教會の處置に失措あり管長を解かる謝衆快樂まず三十一年一月七日齡七十八にして歿す著す所歌集、詩文集、安心立命訣、說教講本、視詞集、含翠庭雜錄等あり（行狀）

イソマタエモン 磯又右衛門　天神眞揚流柔術の祖なり名は正足柳關齋と號す一柳識部に從て揚心流を學び又神道流を本間文右衛門に學ぶ二流を合して一派を創す近江の人なり後江戶に出で神田お玉が池に住す門人三千餘人あり、文久三年歿す年七十八（見ぬ世の友）

イソマル 磯丸　歌人なり、三河伊經古崎の漁夫、通稱は糟谷半之丞と云ふ初め目に一丁字なし母に流柔術の祖なり名は正足柳關齋と號す一柳識部に從て事へて孝なり母の病を伊羅古明神に祈ると二十年一日旅客の社頭の扁額を讀む者あり新之丞問ふて其の和歌なることを敎ふ半之丞自ら意の趣を詠む言辭達せず人之を笑ふ、藩侯戶田淡路守の郡代某之を聞き創正を與へ國字の手本を與へて習はしむ、芝山大納言持豐に介する者あり其の愛する所となり名を貞長と賜ふ朝神の胙來する者磯丸の家に訪ふ者多し村人之を榮と＝磯丸に家を作て之を與ふ京都に遊び遠藤但馬守新見伊賀守の寵を受け常に其の邸に宿す和歌至情に出るもの多し文化交政年中の人なり歿する年八十餘（國力、歌學）

イソメ イタガキ ソウタン 磯女「コヨロギイソメ」　板垣宗憺　水戶藩の儒醫なり名は炬字は隆德眞庵と號す宗憺は其の通稱亦中村氏江戶の人業を幕府醫官方啓院に受く水戶侯に仕ふ兼て儒學に善し侯修史の擧あり命じて編纂に任す爲めに朝廷に講て法橋に叙す侯又萬葉集の正解なきを憂ひ諸說を會萃し折衷して一に歸せんと欲す宗憺又其の事に參す未だ竣らずして江戶に歿す時に元祿十一年六月九日なり年六十一、宗憺人と爲り方正眞實に侍す或人侯に勸めて曰く宗憺少うして猶學に慣る必ず觀るべきものあらん盍ぞ試に之を爲さしめざると侯宗憺に命ず宗憺然目を張り眥て命を應す一座興を失ふ侯徐言して曰く儒醫の道は弄臣と同じからず宗憺堅く拒む固より其所なりと因て褒賞を賜ふ勸者大に慚づ

（皇國名醫傳、善藏得聞、江戶名家墓所一覽）

イタガキ ノブカタ 板垣信形　武田氏の功臣なり（或は信方に作る）駿河守と稱す信虎に仕へて其嫡子晴信の傅たり信虎次子信繁を愛して晴信を廢せんとす信繁は凡庸にして晴信は驃敏なり信形謀老臣と謀り晴信を助て家を襲ぐを得せしむ晴信初陣に平賀源心を亡ぼし漸く驕奢の心を生じ宮室を起し日を詩歌管絃に消す信形思ふ所あり曾某に就て詩を學ぶ三十日晴信の詩會に際じ出て諫めて曰く君近く武事を忽にして風流に耽る亂世に在て不急の事なり臣詩を學ぶ三十日粗〻其の要を得たり武事に於ては三十年日猶ほ足らずとなすいま君にして臣が諫を納れ詩歌を廢して武事の練習に志さゞんば臣將に死して鬼となり以て君家詩を賦する人に災せんとすと目を瞋し刀を把て諫む晴信大に覺り專ら軍國の事を治む武田氏の威爲に遠近に振ふ信形軍ある毎に參謀となりて功あり諏訪の郡代となり伊奈城に居る天文十五年三月戶石の役（晴信村上義淸を伐つ）十年笠吹の役（晴信上杉憲政を伐つ）晴信に代りて諸軍を督し戰捷を得て大に賞を得たり乃ち饗應を設けて士卒を勞ふ饗罷二あり一は佳肴を供へ一は粗菜を以てす功ある者には甲を與へ功なき者には乙を與ふ衆喜ふ者あり慚る者あり爾來皆死を決して善く戰ふに至る役罷みて諏訪に歸り子信里の室に至る會〻床に扁面歌を題する者あるを見る因て問ふ曰く晴信公の賜ふ所と其の歌を見れば則ち曰く「誰も見よ滿れば やがて缺る月の十六夜の空や人の世の中」と蓋し世を誡むるの歌なり信形沈吟涕泣して曰臣笠吹の役敵の首級千二百餘を得て欣喜に堪ず主公に代て實驗の式を行ふ此の歌或は其の式主公に當したるの告めなり臣今鴻恩を被むり公族の上に班し諏訪の郡代を辱うす主公或は臣が終に主家を犯さんとするの志あらんを疑ひ此の歌を以て暗に諷するものなりと是より時あらは疑死して以て異心なきを明さんと欲すと明年八月廿四日信州上田の役晴信の先鋒となり村上義淸と戰て大に捷つ將軍を還さんとす敵將安中一藤太急に之を襲ふ信形奮戰之れを拒ぐ安中が士絲織部信形が傷を被り疲るゝを伺ひ終に相關て信形を殺す（野史）

イタガキ ノブナホ 板垣信直「イヅモノブナホ」

イタガキ ミンブ 板垣民部「イヅモチノブナホ」

イタクラ カツアキ 板倉勝明　安中城主なり字は子赫甘雨父た節山人と號す勝重の裔勝尙の庶子幼字は鶴五郎又百助と曰ふ文政三年五月年甫て十二封を襲ぐ從五位下に叙し伊豫守を襲稱す天保十四年十一月癸酉晉に拜す明年五月病を以て職を免ず勝明學を好み林櫻宇、古賀侗菴を延き經史を講究す其の加藩を以て大阪に在るや篠崎彌、後藤機等を召し盃酒交を論ず英敏亢爽競奔を喜ぼす諸侯或と雖も子其訟獄を拒むべきか賄賂を邵くべきか且我身體百行萬惟の業あり之雖も發言するなきか其盟約を聞くにあらざれば我必らず命を拜ぜず是れ則ち子と胥ひ議する所以なりと妻熟思して曰く惟〻命是れ從はんと勝重恰然として神に盟ひ佛に誓ひ將さに柳營に登らんとし服を裝ひ出づ其の裝を逆にす妻遽に之れを言ふ改めんとす勝重色を作して曰く前の盟は是なり何ぞ遺失の速なる此の如くなれば我れ命を拜する能はずと將に服を脫ぜんとす妻侮笑して謝す勝重乃ち出づ家康曰く婦何を謂ふ對て曰く拜すべしと笑て曰く可なり勝重職に就き請謁を杜ち苞苴を絕つ法を奉し理に循ひ努て大體を存す境內翕然として真吏の稱あり遂に小田原及び關東の代官を兼ね武藏の田一萬石を賜ふ慶長六年五月所司代を京師に置く勝重及び加藤正次を擇びて之れに任ず尋て正次本願寺境地に關し私斷あるを坐し罪を獲、勝重命を受て專ら之に任す是の時に當り大亂新に平らぎ衆心一ならず幾向故に狐れて動もすれば口を豐臣氏に藉り未だ東征の施措に安んぜず是の職たるや上み宮闕より下も公卿百司に至るまで公私の事務皆辨ぜざるを得ず時未だ登下に理官を置かず故に四民の賦役、關訟、市井の禁令、寇盜の請謁より傍ら神戶佛字の控訴請求に至るまで專て一署に領す勝重上を奉し下を御す孚誠條達、威和非び行はる萬緒叢委と雖も雍容之を處し裁決流るゝが如し府に滯案なく獄に淹囚なし貴賤目を拭て新政に推服す勝重幼にして浮屠に歸す家に歸るに及て既に更事に徙ふ故に亂世に居り未嘗て甲を擐し陣に臨まず然ども功或は執矛の右に出づ職に

ある二十年家康心を頼けて之を信任せり九月三河の田六千六百一石餘を加賜す八年二月從五位下に叙し伊賀守と稱す十四年九月山城の田九千八百六十石を加賜す五年從四位下に叙し侍從に任す六年職を辭す子重宗之に代る是より先き勝重屢〻其の職を辭す慰諭すれども固く請ひて止まず秀忠曰く孤未だ其人を得ず汝宜しく衆を選び以て登庸すべしと勝重答て云く臣洛にある年尚し故に諸士の美惡を識らず請ふ君之を擇べ若し強て臣に選擧せしめば即ち愚子重宗なるか彼れ駑と雖も密夫を慎すべき者にあらず聽さるれば即ち臣の闕み補はんと公悅び重宗を召し之を命ず重宗亦固辭す公曰く子為知るは父に如くはなし汝の父の薦る所なり故に補す と寛永元年四月勝重卒す歳八十三法名傑山宗英長圓寺と號す重宗職に任し初めて京師に入るや勝重之に謂て曰く余聞く頃日一子あり寺に就き佛道を學ぶ一日家に還り其父に告て云く寺主公無道にして怒ること難しと父之を叱す子答て云く嘗て味噌を摺れば其の能はざるか鹽る圍に入れば之を責む髪を剃れば亦之を呵すと父以て然りと爲し乃ち寺に適き具狀して爲めに暇を乞ふ主僧云く事皆實に反す彼れ醬を鍋に移し杓子を把て之を壓す遂に杓子を折る乃ち是也と其の數本を取て之を示す又新に實厠を修造して錠を鎖す彼れ錠を裂き圍に入り得と云ふ因て試に余の頭髪を剃らしむ彼れ求めて頭を傷くと巾を脱して數創を示す是に於て其の父初めて其の子の惡を知れり公事を疑むべからず交〻審考熟識を盡せば則ち理非の理非を定むべからず偏決すべからずと宗重能く庭誡を守り遂に亦良吏の稱あり勝重翠生永勝の女を娶り重宗を生む翠生氏初め中島重次に配す二女一男を産み而して再び勝重に嫁す勝重養ひて子となす男名は重好子を與五郎と稱す天正十八年家康命じて中島氏に復し重次の後となしたりしむ(野史)

イタクラ クワウケイ 板倉璜溪 江戸の儒者なり名は安世字は美仲、安右衛門と稱す璜溪は其の號又軌丘と號す江戸の人、父復軒德川幕府の士なり璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなりと社人慚服す(野史)

イタクラ シゲマサ 板倉重昌 勝重の第二子にして重宗の弟なり初字は宇右衛門又た主水と稱す璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなり社人慚服す(野史)

イタクラ シゲマサ 板倉重昌 勝重の第二子にして重宗の弟なり初字は宇右衛門又た主水と稱す璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなり社人慚服す(野史)

イタクラ シゲマサ 板倉重昌 勝重の第二子にして重宗の弟なり初字は宇右衛門又た主水と稱す璜溪は其の號又軌丘と號す江戸の人、父復軒德川幕府の士なり璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなり社人慚服す(野史)

イタクラ シゲマサ 板倉重昌 勝重の第二子にして重宗の弟なり初字は宇右衛門又た主水と稱す璜溪は其の號又軌丘と號す江戸の人、父復軒德川幕府の士なり璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなり社人慚服す(野史)

イタクラ クワウケイ 板倉璜溪 江戸の儒者なり名は安世字は美仲、安右衛門と稱す璜溪は其の號又軌丘と號す江戸の人、父復軒德川幕府の士なり璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

イタクラ シゲサト 板倉重郷 重宗の嫡子なり寛永十三年十二月從五位下に叙し長門守に任ず後ち阿波守に改む明暦三年父の家督を繼ぎ五萬石を領す萬治元年七月寺社奉行となる寛文元年十二月十八日卒す年四十三(諸王略傳)

イタクラ シゲノリ 板倉重矩 重昌の長子なり初字は長命又右衛門と改む狂面瞎目慈仁にして嚴格才智あり寛永十一年從五位下に叙し主水正と稱し父に從ひ兵を率ゐ先登耶蘇教徒の巢に入り首數級を獲父の遺領を繼ぎ五千石を分ち弟重直に與ふ明暦二年内膳正と改め萬治三年大阪の城番となる攝津の田一萬石を加賜す冬十二月召して老中に補し尋で從四位下に叙し六年七月武蔵上野の田二萬石を巢賜す居た城山に移し八年二月京師に往き權りに而司代の事を行ふ其の人と爲り質素謹厚勞働に倦まず且つ詩歌を好み儒學を熊澤了介に聞き善行善言最も多し初め所司代職に當ふ南京春日の山鹿街巷に徘徊し數〻入りて豆腐を食す店主之を逐はんと欲し庖丁を投す讓て鹿胸に當る鹿跳る故事に鹿を殺す者は一族を夷するなり即ち之を訟ふ重矩春日社人を召して云く是れ犬なり鹿にあらざるなり社人怒りて云く角あり蹄あるもの何ぞ犬ならんや重矩く怒る重矩曰く埔中にありて其の形を變せしなる鹿を害はんか爲に街に出でゝ豆腐を食はず故に市街に出でて之を食ふも鹿にあらざるなり社人慚服す(野史)

イタクラ クワウケイ 板倉璜溪 江戸の儒者なり名は安世字は美仲、安右衛門と稱す璜溪は其の號又軌丘と號す江戸の人、父復軒德川幕府の士なり璜溪物徂徠に師事す聰敏人に絕す而れども放蕩不軌、太宰春臺嘗て衆人の前に面折す璜溪此より春臺を輕識して云く孺一錢も直ぜずと謗圖の徒嘗て服部南郭の家に集る春臺獨り後れて至る足過ちて璜溪の刀を踏む義當に拜謝すべし然るに徑ちに上方に坐し一言過ちを陳べず璜溪恒に春臺の乖僻動もすれば苛禮を以て己れを律するを慎る是に於て特に春臺を目し自ら其の刀を執り之を己れが額上に加へて之を拜す春臺意色特に悪し璜溪都下に教授して醫兎に稱せらる著帆丘集あり(近世畸人傳)

冬の役起る師に從ふ東四戍き之を行ふに及びて木村重成來て神盟の血判を監す家康衆を擇び重昌を擢て神盟の血判を監す家康衆を擇び重昌を擢て木村重成に識十八城に赴き右府秀頼を見る進て左右顧みて曰く右府公容量聞く所に超ゆ嘗て關の長け屬と等しと今日幸に咫尺するを得る親しく寧姿を窺ひ營に還り具に之れを擬せんと扇を把て坐を起ち秀頼の膝を計るに擬して裁書を熟視す尋て秀頼宛名を問ふ重昌曰く東四和稱始て成る幕府は乃ち秀忠公なりと乃ち以て對ふ會〻家康謂らく内膳を城に遣り孤第一事を遺失すと煩慮之れを久うす重昌歸り到る家康曰く孤大要を遺失す宛名を何と爲せりや答て曰く臣命を奉せすと雖も東四既に成る行ふ故に大樹を以てすと家康色解け重昌を讃美せり(德川紀大阪記雜波記を按するに皆家康を以て對ふとあり差異あるに似たり猶考ふへし)後食邑を加賜し一萬五千石を領す寛永十四年冬耶蘇の教徒島原に蜂起す重昌命を受け征討使と爲りて發す教徒未だ滅せず幕府復た松平信綱を遣はして之れを伐つ十五年正月朔重昌其の賊巢を冒して死す歳五十一法名劍峯源光と曰ひ撰月院と號す重昌初め征討の命を承くるや會〻麗物を惠ふ諸老或は曰ふ他人をして之に代らしむへし酒井忠勝曰く否な諸老未だ人を識らす設令重昌惠ひ堪へざるも人をして代らしめは彼は必らず生きず之を遣るに若かずと重昌深く其言を德とす信綱再發すと聞き子重矩を誡て曰く子孫に至る迄忠勝の義を謂るいなかれと遂に之に死す子二人あり長は即ち重矩次は重直從五位下に叙し筑後守と稱し采邑を疏ち幕府に仕ふ

イタクラ シゲムネ 板倉重宗 京師の所司代初名は重統、字十三郎後五郎八又右衛門と改む勝重の長子幼より德川秀忠に仕ふ慶長十四年從五位下に叙し周防守と稱す慶從隊番頭小十人徒步等の隊長と爲る殊に采邑六千石を賜ふ元和六年父に代て所司代と爲り食邑二萬七千石を併有す九年一月從五位下に叙し尋て侍從に任ず寛永元年父の遺領を繼ぎ采邑を加賜す勝重昌に頒ち舊邑を併せて三萬八千石を貪む十年四月一萬二千石を加賜し正保二年五月右近衛權少將に任じ尋で從五位上に轉ず後水尾天皇詔して薊の記號を賜ふ承應三年七月職を罷め明暦二年關宿城を賜ふ是冬十二月卒す年七十法名秀峰源俊と曰ひ松靈院と號す重宗沈重能く慮りて後ち行ふ父勝重在職の秋德川家光假に公事奈親の論を設け子重宗重昌兄弟を召し之を判たしむ重昌直ちに理非を裁判す重宗沈思請て退き兩三日を歴て對ふ重昌の裁斷と異らず衆皆重昌の才敏を稱す他日勝重入て見る家光兄弟の裁斷を說く勝重匍匐對て曰く内膳弱にして智なし周防量あり庸ゆべし家光怪み問ふ答て曰公事は則ち國政、國政は重務、一言を以て億兆に施す是を決斷苟もすべからず熟思再三にして後ち決すべし是を以て周防登庸すべきなり内膳鳥頭の辨才のみ事を任ずる甚た危し と宗重父の職を襲ふ訟を聞く每に必ず先つ愛宕に向て遙拜し後ち出て〻聽事に臨む所親ら春を引き茶を碾し紙障を隔て〻而して之を聽く未だ曾て訟者の顏を視ず人其故を問ふ重宗從容語て曰く吾聞く愛宕神は甚た靈驗あり吾れ獄を斷ずるに正しからざれは神必らず極罰す抑〻訟を聞くの明暗は吾か心の動靜に由る心靜なれば則ち茶の落碾必ず細かなり心動けは則茶必ず細かならず訟を聞く亦猶ほ此くの如し且夫れ人の面溫柔の者あり猛惡の者あり吾先つ其の面を視は則ち其辭を聽かすして正邪曲直既に胸中に決す然れども人心の知り難き未た遽に外貌を以て之を卜すべからず猛惡なる者必ず正しからざるに非ず溫柔なる者必ず皆正しきに非ず此を以て障紙を隔て〻而して之を聽く所以なりと其の心を用ふる機密此の如し故に職に在る殆ど四十年人之に服す二男子あり長重郷次は重形重郷父の後を繼ぐ(野史)

イタクラ シャウシチラウ 板倉正七郎 陸軍砲兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十三年北清團匪の亂あるや第五師團野戰砲兵第五聯隊附として出征し七月十三日天津海光門附近に於て戰死す戰功に依り特旨を以て從五位を贈らる

イタクラ シャウハク 板倉正伯 江戸の鍼醫にして刺針痛を覺えず故に夢方流と稱す文政中の人(今世醫家人名錄)

イタクラ ショウソウ 板倉松叟 德川氏の老中なり名は勝靜周防守又左近將監と稱す緋新後上野東照宮鳴洞官兼中敬正となる明治廿二年四月六日卒す

イタクラ セツザン 板倉節山 「イタクラ タダシケ」

イタクラ タダシケ 板倉忠重 好重の子なり李右衛門と稱す天正二年遠州高天神城の戰に松平家忠に隨ひ曾首一を獲たり後ち遠州小山を攻む時家忠及び酒井忠次の家人中にて強兵五十を選びて密に敵の機勢を伺はしむ此時忠重第一に合戰し功あり寛永三年三月朔日卒す年八十三(野史)

イタクラ チヤウタラウ 板倉長太郎 陸軍步兵中尉なり山梨縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや步兵第三十六聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はる同年八月十六日敵司令官は我勇降使を斥たりしかば十八日より其生命と賴める黑鳩公砲臺の攻擊に着手し砲戰十九日に亘り益々激烈を加ふ非軍死す伏屍累々たり此時に當り中尉軍刀を揮つて陣頭に現はれ衆に先ちて一直線に疾驅し敵壘の突角に迫り壘上に躍り上り順みて部下を見れば悉く壘下に戰死せず縱横奮鬪し身數創を蒙むり進退意の如くならざる者必ず猛惡なる者必ず正しからざるに非ず溫柔なる者必ず皆正しきに非ず此を以て障紙を隔て〻而して之を聽く所以なりと其の心を用ふる機密此の如し故に職に在る殆ど四十年人之に服す二男子あり長重郷次は重形重郷父の後を繼ぐ(野史)

イタクラ チヤウタラウ 板倉長太郎 陸軍步兵中尉なり山梨縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや步兵第三十六聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はる同年八月十六日敵司令官は我勇降使を斥たりしかば十八日より其生命と賴める黑鳩公砲臺の攻擊に着手し砲戰十九日に亘り益々激烈を加ふ非軍死す伏屍累々たり此時に當り中尉軍刀を揮つて陣頭に現はれ衆に先ちて一直線に疾驅し敵壘の突角に迫り壘上に躍り上り順みて部下を見れば悉く壘下に戰死せず縱横奮鬪し身數創を蒙むり進退意の如くならざる者必ず猛惡なる者必ず正しからざるに非ず溫柔なる者必ず皆正しきに非ず此を以て障紙を隔て〻而して之を聽く所以なりと其の心を用ふる機密此の如し故に職に在る殆ど四十年人之に服す二男子あり長重郷次は重形重郷父の後を繼ぐ(野史)

イタクラ チヤウタラウ 板倉長太郎 陸軍步兵中尉なり山梨縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや步兵第三十六聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はる同年八月十六日敵司令官は我勇降使を斥たりしかば十八日より其生命と賴める黑鳩公砲臺の攻擊に着手し砲戰十九日に亘り益々激烈を加ふ非軍死す伏屍累々たり此時に當り中尉軍刀を揮つて陣頭に現はれ衆に先ちて一直線に疾驅し敵壘の突角に迫り壘上に躍り上り順みて部下を見れば悉く壘下に戰死せず縱横奮鬪し身數創を蒙むり進退意の如くならざる者必ず猛惡なる者必ず正しからざるに非ず溫柔なる者必ず皆正しきに非ず此を以て障紙を隔て〻而して之を聽く所以なりと其の心を用ふる機密此の如し故に職に在る殆ど四十年人之に服す二男子あり長重郷次は重形重郷父の後を繼ぐ(野史)

イタクラ ケンゴ 板倉賢吾 江戸の儒者なり名は淳行、字は敬德、助三郎と稱す蘭溪は其の號復軒の長男、業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタクラ リヨウシウ 板倉龍洲 江戸の儒者なり名は經世、字は美叔、經之丞と稱す復軒の三男業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタクラ ランケイ 板倉蘭溪 江戸の儒者なり名は淳行、字は敬德、助三郎と稱す蘭溪は其の號復軒の長男、業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタクラ リヨウシウ 板倉龍洲 江戸の儒者なり名は經世、字は美叔、經之丞と稱す復軒の三男業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタザカ ソウカウ 板坂宗高 「イタザカ カボクサイ」初代

イタザカ ソウトク 板坂宗德 近江坂本の人なり父宗賴醫を以て業とす宗德之を紹ぎ三位と稱す大歌又は湖隱軒と號す人となり豪縱にして疾を視ること神に入る寛正三年大内敎弘伊豫に在りて疾む將軍之を憂ひ屢〻醫を求む宗德選に當りて往く時人之を送り書を以て侍史となり後ち家宣宗潛より四葉及び擢んでられて御勘定方となる幾ばくなせらる其の子彌後入江と稱す世〻醫業を襲ふ(皇國名醫傳)

イタザカ ボクサイ 板坂卜齋 (初代)名醫なり始の名は宗高、宗德の曾孫父を備後と曰ふ京都の人家世〻朝廷の醫たり幼にして恰悧僧と爲りて南禪寺東福寺に出づ(或は曰く東福寺)に住し武田信玄の言に依りて甲陽に往き還俗して醫と爲り卜齋と號す永祿戊辰の秋晴信病あり宗高診して曰く微恙ふるに足らず病れども數年の後必ず發せん發せば則ち治むべからず請ふ早く之を計れと晴信可かず後ち果して其の言の如し餘種五百八十餘の多きに至れり享保十三年四月廿三日歿す年六十四復軒人となり剛直にして顧避せず其の官署に在る時曹長甚だ復軒の謇諤廉直を疾む故に紛冗過り易きものは皆復軒を以て大器ありと爲す質は其の過失あるを俟て之に中てんとするなり然れども缺陥の乘す可きなし復軒又能く其の意を知り獨り任じて之を終始す前後八九年にして一の過失なし著す所復軒雜記及文集等あり三子を舉く伯は惇行字は敬德蘭溪と號す通稱助三郎戰を襲ぐ仲は安世字は美仲軌丘と號す安右衛門と稱す叔は經世字は美叔龍洲と號す經之丞と稱す皆物徂徠に從て學び文章を善くす安世特に藝苑に著稱せらると云ふ(先哲叢談後編、事實文編)

イタクラ ランケイ 板倉蘭溪 江戸の儒者なり名は淳行、字は敬德、助三郎と稱す蘭溪は其の號復軒の長男、業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタクラ リヨウシウ 板倉龍洲 江戸の儒者なり名は經世、字は美叔、經之丞と稱す復軒の三男業を徂徠の門に受く(鑒定便覽)

イタザカ ソウカウ 板坂宗高 「イタザカ カボクサイ」初代

イタザカ ソウトク 板坂宗德 近江坂本の人なり父宗賴醫を以て業とす宗德之を紹ぎ三位と稱す大歌又は湖隱軒と號す人となり豪縱にして疾を視ること神に入る寛正三年大内敎弘伊豫に在りて疾む將軍之を憂ひ屢〻醫を求む宗德選に當りて往く時人之を送り書を以て侍史となり後ち家宣宗潛より四葉及び擢んでられて御勘定方となる幾ばくなせらる其の子彌後入江と稱す世〻醫業を襲ふ(皇國名醫傳)

イタザカ ボクサイ 板坂卜齋 (初代)名醫なり始の名は宗高、宗德の曾孫父を備後と曰ふ京都の人家世〻朝廷の醫たり幼にして恰悧僧と爲りて南禪寺東福寺に出づ(或は曰く東福寺)に住し武田信玄の言に依りて甲陽に往き還俗して醫と爲り卜齋と號す永祿戊辰の秋晴信病あり宗高診して曰く微恙ふるに足らず病れども數年の後必ず發せん發せば則ち治むべからず請ふ早く之を計れと晴信可かず後ち果して其の言の如し

天正中小田原の役に德川家康に從ひ後ち田定か賜はりて江戸に居り頗る恩顧に預かる（墓國名醫傳、卜齋墓誌）

イタザカ　ボクザイ　板坂卜齋（二代）醫者なり幼名は長太郎、如春と稱す又東赤と曰ふ、初代卜齋の子なり父は德川家康に仕ふ如春幼にして父か喪ふ家康吉田意安、同宗恂、施藥院宗伯等に命して之を教導せしむ長するに及びて父の稱卜齋を襲ぎ駿府に給事す家康晩に尤も心を濟生に留め和劑局方に據りほ藥を製し以て諸臣に賜ふ卜齋毎に其の事に與る德川頼宣封國和歌山に就く家康命して侍醫とす居ること數年世子光貞に從ひ江戸に遷る治療頗る効あり名聲大に顯はる後老を乞ひ淺草に退居す藏書多し其の藏書に淺草文庫の印か押したり（後世淺草に圖書館あり亦淺草文庫と云ふ之と異なり）優游性を養ひ藥物を植ゑて自ら樂しむ又多く醫籍を藏め喜びて論方を案む明暦元年病で歿す年七十八（墓國名醫傳、卜齋墓誌）

イタバシ　カンセイ　板橋閑清　宗歸流の茶人なり名は李康水谷義閑の弟子なり時習軒と號す田村侯に仕ふ（古今茶人系傳）

イタバナ　ケンゲウ　板鼻撿校　名は某何許の人なるを知らず寶永年間の人なり幼にして眼か悪ひ遂に明を失ふ博聞強記にして尤も和歌を能くす既に眼して寵を某侯に獲たり侯事あり信州を過る撿校從ふ姥に謂て曰く汝も亦好慢ある乎撿校偶ま「我心なやさめかれつ更科やおばすて山に照る月を見て」の古歌を諳し乃ち其末句での一字を改め濁音と爲して以て獻し兩目月色を辨せざるの感を述ふ侯大に其精敏を賞し寵遇益ゝ厚し後ち官撿校に至て歿すと云ふ（智人傳）

イタミ　オニツラ「オニツラ」　伊丹鬼貫「ヒライヅミ」

イタミ　カウ　伊丹鏗　陸軍三等軍醫なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團野戰病院附として出征中卅八年八月十一日清國盛京省太平勾にて病に罹り九月一日楊家油房舍營病院に於て死去す

イタミ　カツナガ　伊丹勝長　康勝の長子なり姓は源氏（中興武家譜襲記に姓は藤原氏加藤氏の支流に作る）初め歳人と稱す慶安三年七月勝長父の後を繼ぎて一萬石を領し甲斐の德美に居り其の一千石を割きて弟勝重に與ふ勝長勘定頭となり萬治三年冬從五位下に叙せられ播磨守と稱す蒲原の代官一色内藏助はんとすす内藏助盧晉の怨び讎を報ひ駿府に給揮ふて勝長を斬る勝長爲めに死す歳六十一、子勝政繼ぐ

イタミ　シンイチラウ　伊丹眞一郎　勤王家なり諱は重本字は子信眞一郎と稱し信堂と號す福佐藩藩士伊丹三十郎の子にして萬延元年父の後を襲ぎて世祿百四十石を給せり藩内勤王佐幕の二派に分れ軋轢妍悪にして叙せられ播磨守と稱す蒲原の代官一色内藏助はんとすす内藏助盧晉の怨び讎を報ひ駿府に給揮ふて勝長を斬る勝長爲めに死す歳六十一、子勝政繼ぐ

イタミ　ナホマサ　伊丹直政　吉田流の射術家なり半左衛門と稱し吉田印西に學ぶ

イタミ　フミヲ　伊丹文雄　陸軍少兵中尉なり德島縣出身にして明治三十七八年日露戰役起るや第七師團砲兵第七聯隊附として出征中卅八年三月三日清國奉天附近戰鬪の際負傷し同十二日臺子戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イタミ　マサオキ　伊丹雅興　大和守と稱す細川晴元の臣三好長慶權威を振ひ晴元遂に江州に遷れて沈論すと雖も復再興するあらん唯公方家に忠勤せんと伊丹城に籠り曾て三好に隨はず長慶此を聞き攻城數年に及べども毎戰利を失ひ

兼ぬ津田永忠殁するに及び後を承けて督學となり學政を總括せり正德二年九月卒す年七十一　穀齋人となり賀の外館を撤せんとの議あり穀齋大に驚き愁訴一卷を著して藩公に上る其言切實議遂に止む穀齋之を公言せず謙德を見るに足る彼の奉する所程朱の學にありと雖も敢て他學派を排斥せず比較研究して其長を採らんとを勉めたり著書には聖學要旨、便割錄、同別記、自談錄及び文集あり

イチウラ　ナムチク　市浦南竹　名は直春字は子木備前の儒者なり寶歷頃の人（諸家著述目錄）

イチエフ　一葉「シュンジウケン イチエフ」

イチエフ　一葉「ヒグチイチエフ」

イチエン　壹演　相應寺の住持なり平安の人、名は正棟姓は大中臣備州の刺史治知の子なり早とに仕途に登る二兄相ひ繼て殁す因て幻を厭ひ冠纓を解き藥師寺の戒明に就き出家して具戒を受け常に金剛般若經を持す眞如阿闍梨之を見て道器と爲し授るに密敎を以てす壹演居止定まらず或は水邊の樹木に或は山間の岩口に至る所として休宿せざる無く偶ま河內に往く一老嫗宅を讓りて曰く此の地は商賣の巷、魚鹽の津なり師の深悲に非ずんば誰か其の愚頑を諭さんや今此の宅を以て精藍とす願くば此に居れと壹演基址を平にする時一の古佛像を得たり時人傳へて以て異とす漸く天聽に達す有司に勅して其の功を監せしめ寺額を賜ひて相應寺と曰ふ壹演七を逝び方壇を築き靈像を安置す其の壇怨うを變して白色となり宛かも石灰を塗るが如し見るもの驚異す又盛應寺を建つ會ゝ皇太后不豫なり壹演を召して之を咒せしむ立ち所に効あり太政大臣藤原良房病に寢す壹演至れば疾即ち除す上大に悅び擢でゝ僧正とす壹演固辭すれども許されず云ふ貞觀九年七月十二日小舟に乘じて水に浮び泊然として化す壽七十五（元亨釋書、東國高僧傳）

イチエンサイ　イチヂ　サダカ　一烟齋「ウダガハクニナホ」伊知地貞磬　薩摩の儒者なり著書は沖繩志五卷世に行はる明治の初年殁す

イチヂ　スエヒデ　伊知地季彬　薩人なり世々島津家の記錄奉行たり稱名墓誌四卷を著す

イチオオン　キン　クワンパク　一音院關白「フヂハラタダイヘ」

イチガ　一雅　高僧なり字は大全其先は近江の甲賀に居る父賢行あり備前の金河に徙つて雅を生む幼にして聰敏經吏眼を過くれば輙ち暗記す心を佛氏に寄せ加賀安國寺の星山公に依りて薙髮す後京都に入り名を東福寺に隸す良治の初筑前の承天寺に遊び南遊の志あり既に行裝を整へ病に遭ひて果さず再び京師に圃て大道和尙に入室して契印を受く貞治四年秋大道に南禪寺に從ふ淡路の檀越細川氏春道の薦に依り雅を聘して淡路の豐財院に住せしむ應安二年應無嚴慧日山に歸るや雅を招て蔵鑰を司らしむ明年二月大道寂して心喪せり日峯公東福寺に住するや攀ぢて第一座となす永德壬戌將軍義滿の命を以て淡路の安國寺に出世す細川氏春圓鏡敎院を草めて禪刹となし雅を開祖となす嘉慶元年の秋伯耆に往く氏春病を聞き京に歸り問候して末後の要を示す再び安國寺に住す滿春父の業を承けて雅に事ふるゝ益ゝ欽む嘉慶二年棲賢寺の寶輪塔成る雅慶讃す滿春其嗣滿俊を以て弟子の禮を執らしむ應永元年幕府に到りて將軍義滿に見えて厚遇せらる四年疾を得て九月朔鏡寺に歸る翌年九月廿六日壽五十五にして寂化す（本朝高僧傳）

イチカハ　アラゴラウ　市川荒五郎　大阪南區日本橋一丁目の俳舍出羽屋岩松と曰ふ當時歌舞の師匠として有名なりし南畝二ツ井戸町小川けいの贊婿となり荒五郎を名乘る文政年中市川團藏の弟子となり藝名を團次郎と稱す初め稻荷座へ出演したり後ち師を失ふに及び一時不遇悲境に陷りしも能く之に耐へ立廻役となり役者の豐財院に住せしむ應安二年應無嚴慧日山に歸るや雅を招て蔵鑰を司らしむ明年二月大道寂して心喪せり日峯公東福寺に住するや攀ぢて第一座となす永德壬戌將軍義滿の命を以て淡路の安國寺に出世す細川氏春圓鏡敎院を草めて禪刹となし雅を開祖となす嘉慶元年の秋伯耆に往く氏春病を聞き京に歸り問候して末後の要を示す再び安國寺に住す滿春父の業を承けて雅に事ふるゝ益ゝ欽む嘉慶二年棲賢寺の寶輪塔成る雅慶讃す滿春其嗣滿俊を以て弟子の禮を執らしむ應永元年幕府に到りて將軍義滿に見えて厚遇せらる四年疾を得て九月朔鏡寺に歸る翌年九月廿六日壽五十五にして寂化す（本朝高僧傳）

イチカハ　アラヂロウ　市川荒五郎　大阪南區日本橋一丁目の俳舍出羽屋岩松と曰ふ當時歌舞の師匠として有名なりし南畝二ツ井戸町小川けいの贊婿となり荒五郎を名乘る文政年中市川團藏の弟子となり藝名を團次郎と稱す初め稻荷座へ出演したり後ち師を失ふに及び一時不遇悲境に陷りしも能く之に耐へ立廻役となり役者の豐財院に住せしむ應安二年應無嚴慧日山に歸るや雅を招て蔵鑰を司らしむ明年二月大道寂して心喪せり日峯公東福寺に住するや攀ぢて第一座となす永德壬戌將軍義滿の命を以て淡路の安國寺に出世す細川氏春圓鏡敎院を草めて禪刹となし雅を開祖となす嘉慶元年の秋伯耆に往く氏春病を聞き京に歸り問候して末後の要を示す再び安國寺に住す滿春父の業を承けて雅に事ふるゝ益ゝ欽む嘉慶二年棲賢寺の寶輪塔成る雅慶讃す滿春其嗣滿俊を以て弟子の禮を執らしむ應永元年幕府に到りて將軍義滿に見えて厚遇せらる四年疾を得て九月朔鏡寺に歸る翌年九月廿六日壽五十五にして寂化す（本朝高僧傳）

イチカハ　イザウ　市川市藏　大阪の俳優なり尾上多見藏の次男にして市川團十郎の養子、なる安政四年江戸に來る森田座に天竺德兵衛を演す四月十四日演戲に德兵衛宗鑑なして切腹せしめ親子の名乘みなし爲に宗鑑が首を介錯せんとする時祝數に之を觀居たる谷田部の細川藩の士五人之を怒り子として父を強て切腹せしむるは非倫なりと爲し一人刀を抽て將に市藏を斬らんとし舞臺に上る市藏性輕捷幸うじて逃れ舞臺番一人殺され他に傷者一人あり官命あり以後劇場に刀を携ふるを禁ず是より世間市藏の技に堪能なるを賞す後大阪に歸りて死す

イチカハ　ウダンジ　市川右團次　大阪の俳優なり市川小團次の男初めの名は福太郎後右團次と改む俳名宗丑と號す

イチカハ　エビジフラウ　市川鰕十郎（元祖）大阪の俳優なり家名を播磨屋と曰ふ俳名新升、寛政元年大阪北の新地芝居に宮園淨瑠璃首振興行の時頭取市川稱右衛門といふ者口上引合せにて此度の座本市川團藏門弟にて市川市藏と申升と云ふ是此人の出初にて此時十二歲也同年冬より博勞町の稻荷子供芝居へ出て永く修行し通れ上手と稱美せられ同十二年中の座貌見世に初て出て前狂言信仰記にて新作の役を勤め其の後始終師匠市紅に付て薄雪の妻、平岡俊布引の多田の藏人鬼一のちゑ內千本櫻の梶原廿四孝の悲悲藏金門の久次郎役にて第一男よく評判宜敷文化五辰年中の座にて八陣の早人の助役急病に付政清の替り役を勤め古今の大てきにて是より世上に名を上げ翌已年大阪堀江芝居にて在原系圖の業平を名乘り狂言に悪を勤め益ゝ愛よく文化八未年森田座にて忠臣蔵の七役古今獨步の大當り是より翌申年壹ケ年は何なを出して也仇矢なく當り續けしは珍しき事なり同十二亥年九月七代目三升へ梅玉取次ぎ以て師弟契約調ひ依て團十郎より鰕の文字を贈る鰕十郎と改名して俳名新升と號す師弟契約並の當日には歌右衛門は勿論幸四郎半四郎男女蔵其の外市川家殘らず相ならび目出度盃相濟み團十郎より引出物として贈りし品二代目團十郎持品の狂言の大太刀壹腰、四代目團十郎同長大小壹腰、四代目

同自筆の掛物壹幅、黑羽二重定紋付の衣服壹重、淺色定紋付の麻上下一具、此外町中ヒイキ連中よりの贈り物山の如く堺町へ殘飾りし事前代未聞の樣なり即ち當所名殘狂言は妹背山のふか七大々出來にて江戸狂歌連中より三百枚の狂歌折紙として其の頃江戸の浮世繪師豐國に伊勢海老の船盛の中に鰕十郎ふか七にて荒役の上下八巻大小櫂か持居る圖ん書せ贈る其の三百の內の七八ハ爰に題はす「新たなるかへ名みます市の鶴涙花の蘆は御世の大海老」蜀山人「かはる名の海老はだいだいしめ飾又大江戸の座がしらゑ松」四方歌垣眞顏「海老扇のよろひ直垂にしき着て歸る涙花の役者大將」七代目市川三升「七五三五三ゝ升が飾りぞや箔の付たる海老の舟盛」山東京山「樽拍子を揃へて我も謠はゝや雪れある名ゑ鰕の舟唄」山東京傳「摺物の折紙そへてわざものゝ鰕軸卷を送る涙花路」式亭三馬「あら事の家彫鰕の目貫とはほり出し物の道具市川」談洲樓焉馬「以上の色紙短冊は鰕十郎屋風壹双に仕幅して所持す、同年冬大阪角の座へ乘込大はつみなり歌右衛門の傳に委く記す翌子年春同座にて稚兒淵に久次と岩本屋藤三郎齋藤內蔵之助何れも大出來次に御掌前敵討に島川太兵衛大當りにて同子年中も同座にて三浦荒次郎にて梅玉の源左衛門との出合古今大出來にて一代名を殘す同年堀江芝居にて忠臣蔵七役此冬は中の座へ出て大里冠と一座せり翌文政元年も同座にて加賀見山の局玄蕃安七の二役評判翌年は角の座にて花大樹にて山口九郎次郎役歌右衛門の木下と義の長短の場末代其名を殘す是切にて又江戸へ下り同三四は同地か勤め同五年春大阪中の座へ上り染分總にて齋藤藏之助山形屋茂平關野萬兵衛の三役大當りにて同年同座にて毛剃九右衛門か出す翌未年は角の座にて和田雷八役大出來なり次に忠臣蔵にて梅玉市紅三人共七人か勤め五月誓りには夏祭の一寸ゝ後ゆ次の二役大々大當り九月には伊賀越にて澤井又五郎役若阪の早誓り大出來にて同七申年は矢張同座にて鄙大門にて伊勢新九郎と非人丸鐵の二役次に菅原にて松王丸と輝國一切に救入濱等濱地源左衛門ごくもんの庄兵衛新町橋出入の所末代手本にもなるべき大當りなり同八酉年も同座にて百萬石に鳥井又助鹿子勘兵衛次に梅玉一世一代に和泉の三郎毛谷村六助一の谷獵陀六何れも大出來なり此時分に始終梅玉と一座にてしつくりと狂言に腹が合しゆゑ面白く故に文政六未年同座にて宗輝寺の敵討の時生田傳八郎の役に兄弟は梅玉と市紅にて返り討の場誠にえぐたら數見物も目を明て見て居られぬ位の事餘り鰕十郎の仕內にくていに付場よりたばこ盆の火入を投付しと實に敵役の本意なりと其火入を受て鰕十郎門に入て市川滝十郎と改め濱芝居にて修行し後には濱にて大立者と成り座頭を勤め居たりしが文政十三年春梅玉引立と なり復た大阪へ出て東芝居を勤め同秋より大阪中の座へ出て濱芝居の二役次に澁口と喧嘩屋の二役次に澁口上野切に笹野三五兵衛何れも大出來なり同十亥年年同座にて三代目鰕十郎と改名して一の谷の彌陀六を勤め其翌年年目德璃寬一座にて伊賀越の奥田內記鎌くら玄蕃松の金助の三役京大阪にて大當り同未年秋も中の座にて賴政にて母春目役切油商人に平岡丑平古今の大てき翌申年春同座にて八犬傳の犬塚番作犬川角藏の二役第一の大當りなり天保七中年九月十一日を以て殁す年五十（俳優世々の接木）

イチカハ　エビジフラウ　市川鰕十郎（四代目）大阪の俳優なり、家名を小紅屋と稱し俳名眼玉と云ふ幼名を松島巳之助といひて濱芝居の質惡に松島清藏といふ者の門弟なり文政の初めには大阪濱芝居にて座元を勤め其後幼年の間は梅玉の弟玉之介駒之介と一座して大阪北の新地芝居へ出太功記の清水長左衛門五人男の案の平兵衛千本櫻の渡海屋銀平抔を勤め子供に似合ゑ仕內なりと受よく其後京宮芝居にて修行し又大阪にて濱芝居へ出評判よく其頃市川市十郎といふなり天保二卯年には江戸河原崎座へ下る翌年は直に上方へ上り京大阪の濱芝居を勤め弘化二巳年冬角の座へ師匠自猿上りし時四代目鰕十郎か相續して茶の湯の景清にて重忠役を勤め前狂言に管原丞相と淳藏何れも評判よく其後始終師匠と一座して同四年坂東壽太郎と改名し嘉永二酉年市川眼玉と改め江戸へ下り同四年江戸より又元の鰕十郎と成て上り大坂角の座へ出て仙代萩の勝元切に白石噺に大磯屋宗六大出來也同五年は筑後芝居へ出て裏表の忠臣蔵にて大星由良介としかも宅兵衛大當り大入にて是より上手といふ名をとる同辰年中の座へ出て涙乘曾我に工藤祐經大出來にて次昔鑑に松大人氣にて五月には京東芝居にて白石の臺七と切に雷庄九郎盆聲りは角の座にて右の臺七と切木津川八景に堀口萬右衛門腕の次兵館大出來なり其の後病氣に出勤なく惜むべし是れ限にて文政十二丑年十一月四日殁す年廿四歲（俳優世々の接木）

イチカハ　エビジフラウ　市川鰕十郎（三代目）大阪の俳優なり、俳名を新升と云ふ初中山紋十郎弟子にて甚吉と云ふ其後初代鰕十郎門に入て市川滝十郎と改め濱芝居にて修行し後には濱にて大立者と成り座頭を勤め居たりしが文政十三年春梅玉引立と なり復た大阪へ出て東芝居を勤め同秋より大阪中の座へ出て濱芝居の二役次に澁口上野切に笹野三五兵衛何れも大出來なり同十亥年年同座にて三代目鰕十郎と改名して一の谷の彌陀六を勤め其翌年年目德璃寬一座にて伊賀越の奥田內記鎌くら玄蕃松の金助の三役京大阪にて大當り同未年秋も中の座にて賴政にて母春目役切油商人に平岡丑平古今の大てき翌申年春同座にて八犬傳の犬塚番作犬川角藏の二役第一の大當りなり天保七中年九月十一日を以て殁す年五十（俳優世々の接木）

イチカハ　エビジフラウ　市川鰕十郎（四代目）大阪の俳優なり、家名を小紅屋と稱し俳名眼玉と云ふ幼名を松島巳之助といひて濱芝居の質惡に松島清藏といふ者の門弟なり文政の初めには大阪濱芝居にて座元を勤め其後幼年の間は梅玉の弟玉之介駒之介と一座して大阪北の新地芝居へ出太功記の清水長左衛門五人男の案の平兵衛千本櫻の渡海屋銀平抔を勤め子供に似合ゑ仕內なりと受よく其後京宮芝居にて修行し又大阪にて濱芝居へ出評判よく其頃市川市十郎といふなり天保二卯年には江戸河原崎座へ下る翌年は直に上方へ上り京大阪の濱芝居を勤め弘化二巳年冬角の座へ師匠自猿上りし時四代目鰕十郎か相續して茶の湯の景清にて重忠役を勤め前狂言に管原丞相と淳藏何れも評判よく其後始終師匠と一座して同四年坂東壽太郎と改名し嘉永二酉年市川眼玉と改め江戸へ下り同四年江戸より又元の鰕十郎と成て上り大坂角の座へ出て仙代萩の勝元切に白石噺に大磯屋宗六大出來也同五年は筑後芝居へ出て裏表の忠臣蔵にて大星由良介としかも宅兵衛大當り大入にて是より上手といふ名をとる同辰年中の座へ出て涙乘曾我に工藤祐經大出來にて次昔鑑に松

ヶ枝屋九郎兵衛同秋は同座にて後日の鉢木に佐野源左衛門の役益と評判翌安政四巳年春同座にて壽勸進幅に大出來其外石井恒右衛門唐木政右衛門總て武者事の上手也翌年年大阪の竹田芝居にて木下かげの木下東吉切に尼屋庄九郎が勤め此の狂言中に持病つのりつひに安政五年年十月十九日歿す年五十（俳優世々の接木）

イチカハ　カネヤス　市川兼蔬　學士會院會員なり藝州の人夙に蘭學を修め砲術造船築城等の事を研究し著書數卷あり大坂兵學寮教師を囑托せられ尋て東京開成所の教師に轉ず又學士會院の創設に際し伊藤圭介加藤弘之等と共に會員に擧げられ在職廿年兼務と伊藤圭介とは同院の長老たり明治三十二年五月廿六日特旨を以つて從五位に叙せられ翌廿六日歿す年八十二

イチカハ　キゲンジ　市川紀元二　陸軍歩兵中尉なり靜岡縣磐田郡中泉町の人民に第一高等學校に入り工科大學に進みて電氣學を修め工學士と爲る更に一年志願兵として豐橋歩兵第十八聯隊に入り滿期除隊後歩兵少尉に任ぜられ實業界に投じて小田原電氣鐵道會社深川電氣瓦會社の技師となり明治三十七年日露戰役起るや召集せられて第三師團歩兵第六聯隊附として出征し遼陽の戰に先登の勇名を揚げて感狀を蒙り中尉に進む三十八年三月奉天附近の大戰に於て敵の鐵條網を破壞するに著大の功あり しが終に同月七日李官保に於て壯烈なる戰死を遂ぐ年三十四殊勳に依り功四級勳六等に叙せらる中尉業務の餘暇骨相學の研究に從ひ骨相學を以て人種改良の一要件なりと論じ骨相學の理論骨相學兒童教育論の著あり

イチカハ　キョウサイ　市川恭齋　江戸の書家なり名は三平字は三千太郎と稱し桃翁と號す來菴の男、書法を父に受く天保四年六月廿七日歿す年三十八（續墓所一覽、鑒定便覽）

イチカハ　クンケイ　市川君桂　畫家なり名は適（或作廸）字は君啓、君桂は其の號、又眠龍と號す江州の人京師に住す元明の古蹟を慕て巧みに山水人物を畫けり享和三年二月二日歿す年六十八（畫乘要略、鑒定便覽、平安墓所集）

イチカハ　クワクメイ　市川鶴鳴　名は匡字は子人多門と稱す其の先は武川河越の人祖父正勝高崎侯に仕へ或は高崎に居り或は江戸邸に居る父正芳佐野氏から聚りて鶴鳴幼にして鋭敏十歳にして能く書を讀み後ち又廢す父母前後相繼て死す鶴鳴年十七にして以爲らく士たるものは學ばざれば其品卑しく墻に面して正立するがごとしと是より節を折りて書を學ぶ倦まず大内熊耳に師事して業大に進む鶴鳴に繼母あり會々病みて東京開成所の教師に轉ず又學士會院の創設に際し伊藤圭介加藤弘之等と共に會員に擧げられ在職廿年兼務と伊藤圭介とは同院の長老たり明治三十二年五月廿六日特旨を以つて從五位に叙せられ翌廿六日歿す年八十二

イチカハ　キゲンジ　市川紀元二　陸軍歩兵中尉なり靜岡縣磐田郡中泉町の人民に第一高等學校に入り工科大學に進みて電氣學を修め工學士と爲る更に一年志願兵として豐橋歩兵第十八聯隊に入り滿期除隊後歩兵少尉に任ぜられ實業界に投じて小田原電氣鐵道會社深川電氣瓦會社の技師となり明治三十七年日露戰役起るや召集せられて第三師團歩兵第六聯隊附として出征し遼陽の戰に先登の勇名を揚げて感狀を蒙り中尉に進む三十八年三月奉天附近の大戰に於て敵の鐵條網を破壞するに著大の功あり しが終に同月七日李官保に於て壯烈なる戰死を遂ぐ年三十四殊勳に依り功四級勳六等に叙せらる中尉業務の餘暇骨相學の研究に從ひ骨相學を以て人種改良の一要件なりと論じ骨相學の理論骨相學兒童教育論の著あり

イチカハ　キョウサイ　市川恭齋　江戸の書家なり名は三平字は三千太郎と稱し桃翁と號す來菴の男、書法を父に受く天保四年六月廿七日歿す年三十八（續墓所一覽、鑒定便覽）

イチカハ　クンケイ　市川君桂　畫家なり名は適（或作廸）字は君啓、君桂は其の號、又眠龍と號す江州の人京師に住す元明の古蹟を慕て巧みに山水人物を畫けり享和三年二月二日歿す年六十八（畫乘要略、鑒定便覽、平安墓所集）

イチカハ　クワクメイ　市川鶴鳴　名は匡字は子人多門と稱す其の先は武川河越の人祖父正勝高崎侯に仕へ或は高崎に居り或は江戸邸に居る父正芳佐野氏から聚りて鶴鳴幼にして鋭敏十歳にして能く書を讀み後ち又廢す父母前後相繼て死す鶴鳴年十七にして以爲らく士たるものは學ばざれば其品卑しく墻に面して正立するがごとしと是より節を折りて書を學ぶ倦まず大内熊耳に師事して業大に進む鶴鳴に繼母あり會々病みて東京開成所の教師に轉ず又學士會院の創設に際し伊藤圭介加藤弘之等と共に會員に擧げられ在職廿年兼務と伊藤圭介とは同院の長老たり明治三十二年五月廿六日特旨を以つて從五位に叙せられ翌廿六日歿す年八十二

イチカハ　キゲンジ　市川紀元二　陸軍歩兵中尉なり靜岡縣磐田郡中泉町の人民に第一高等學校に入り工科大學に進みて電氣學を修め工學士と爲る更に一年志願兵として豐橋歩兵第十八聯隊に入り滿期除隊後歩兵少尉に任ぜられ實業界に投じて小田原電氣鐵道會社深川電氣瓦會社の技師となり明治三十七年日露戰役起るや召集せられて第三師團歩兵第六聯隊附として出征し遼陽の戰に先登の勇名を揚げて感狀を蒙り中尉に進む三十八年三月奉天附近の大戰に於て敵の鐵條網を破壞するに著大の功あり しが終に同月七日李官保に於て壯烈なる戰死を遂ぐ年三十四殊勳に依り功四級勳六等に叙せらる中尉業務の餘暇骨相學の研究に從ひ骨相學を以て人種改良の一要件なりと論じ骨相學の理論骨相學兒童教育論の著あり

イチカハ　キョウサイ　市川恭齋　江戸の書家なり名は三平字は三千太郎と稱し桃翁と號す來菴の男、書法を父に受く天保四年六月廿七日歿す年三十八（續墓所一覽、鑒定便覽）

イチカハ　クンケイ　市川君桂　畫家なり名は適（或作廸）字は君啓、君桂は其の號、又眠龍と號す江州の人京師に住す元明の古蹟を慕て巧みに山水人物を畫けり享和三年二月二日歿す年六十八（畫乘要略、鑒定便覽、平安墓所集）

イチカハ　クワクメイ　市川鶴鳴　名は匡字は子人多門と稱す其の先は武川河越の人祖父正勝高崎侯に仕へ或は高崎に居り或は江戸邸に居る父正芳佐野氏から聚りて鶴鳴幼にして鋭敏十歳にして能く書を讀み後ち又廢す父母前後相繼て死す鶴鳴年十七にして以爲らく士たるものは學ばざれば其品卑しく墻に面して正立するがごとしと是より節を折りて書を學ぶ倦まず大内熊耳に師事して業大に進む鶴鳴に繼母あり會々病みて東京開成所の教師に轉ず又學士會院の創設に際し伊藤圭介加藤弘之等と共に會員に擧げられ在職廿年兼務と伊藤圭介とは同院の長老たり明治三十二年五月廿六日特旨を以つて從五位に叙せられ翌廿六日歿す年八十二

イチカハ　クワクメイ　市川鶴鳴　名は匡字は子人多門と稱す其の先は武川河越の人祖父正勝高崎侯に仕へ或は高崎に居り或は江戸邸に居る父正芳佐野氏から聚りて鶴鳴幼にして鋭敏十歳にして能く書を讀み後ち又廢す父母前後相繼て死す鶴鳴年十七にして以爲らく士たるものは學ばざれば其品卑しく墻に面して正立するがごとしと是より節を折りて書を學ぶ倦まず大内熊耳に師事して業大に進む鶴鳴に繼母あり會々病みて東京開成所の教師に轉ず又學士會院の創設に際し伊藤圭介加藤弘之等と共に會員に擧げられ在職廿年兼務と伊藤圭介とは同院の長老たり明治三十二年五月廿六日特旨を以つて從五位に叙せられ翌廿六日歿す年八十二

イチカハ　クワンサイ　市河寛齋　富山藩の儒者なり名は世寧字は子靜、一の字は嘉祥、寛齋は其の號又半江及び江湖詩老等の別號あり通稱小左衛門上毛甘樂郡の人、父好齋蘭臺と號す書を好み業を細井廣澤に受く寛齋少うして學に志し笈を負ひて江都に遊ぶ林祭酒正長の門に入りて修學す業成るに及びて名聲藝苑に顯はる會々昌平黌の學員長國ゝ正長寛齋を擧げて之に補す居ること五年病を以て辭し去る寛政三年富山侯其の名を聞き聘して黌舍の教授とする職に居ること二十餘年老を以て致仕す富齋學博く才敏最も詩に長ず清麗奇崎樂に有せざる所なし初め樊川を學び一變して香山再變して劍南終に又諸家を鎔淘して別に機軸を出だす後進の徒推して領袖とす其の指畫を承て能く家を成しし世に名あるもの小島梅外、柏如亭、大窪天民、菊地無絃等の數人あり又性山水を好む上毛は桑梓の地にして佳勝多きを以て屢ゝ游渉探討して上毛志を編す晩に長崎に遊ぶこと一年吳客と唱和して其の敬重を受く文政三年七月十日歿す年七十二私に諡して文安先生と曰ふ著書上毛志の外日本詩記、全唐詩逸、陸詩意註、陸詩考異、宋百在詩、詩家法語、西野漁半、北里歌、三家妙絶、寛齋摘草、鐘園詩鈔、金石私誌、青妖私誌、牛江喝年、瑗浦夢餘錄、詩文集等あり二子生也長は米菴書名一時に高し季は祥風出でゝ鎬木氏に嗣と爲り亦諡を能くす（市河子靜墓志、鑒定便覽）

イチカハ　ケンザウ　一川研三　岐阜縣の士族にして天保十年五月廿五日を以て生る明治三年四月廿七日大藏省出納權少佑に任ぜられ爾後諸官を歷て紙幣察七等出仕に補せられ正七位に叙す同十七年九月十日大藏一等技師に任ぜられ從五位に叙し勳六等に叙せらる十九年奏任官一等に叙せられ同二十一年八月三日特旨を以て位階を進められ正五位に叙す同月五日病を以て卒す

イチカハ　ケンパク　市川玄伯　儒醫にして名は守信字は伸章後名を朱、字を章甫と改め非々、思無邪堂、臥龍窟の號より初め内藤氏を稱す長門國厚狹郡船木村の人、初め藩士山縣太華に儒學を學び後江戸に出でゝ古賀侗庵佐藤一齋太田錦城に學び傍ら宇田川榕齋に醫術を受く居ること五年文政八年歸郷して家塾

を開く後邑主毛利氏に擧げられ其學事に與る嘉永五年二月十三日歿す歳五十七（日本教育史資料）

イチカハ　コダンジ　市川小團次（初代）江戸の俳優なり家名を高島屋と稱し俳名米升、本姓は堀越氏實は江戸日本橋魚河岸の出生といふ幼名米藏といひて七代目白猿の門人也若年より上方へ上り京和泉式部芝居へ出て子供にて忠臣藏の由良之助四谷怪談のお岩の早替り狐忠信抔にて見物に我を折らせ天保三辰年に初て大阪竹田芝居へ出て市川米十郎と改め猿之助と兩人にて三番叟を勤め夫より響く濱芝居にて修行し評判好く其後天保十四卯年冬師匠白猿角の座へ上りし時菅原の宿禰と八重の二役を當て翌春は同座にて石川染にて奴矢田平にて大立廻り大出來にて此時小團次と改名せり次裏表の忠臣藏に高師直の役切源平つゝじに扇折小萩大當りにて弘三化年同座にて七變化にて雷の宙乘大出來なり同年冬膠越狀の五斗兵衛を勤めあらい肝玉じやといふ翌未年の春同座にて矢口のおふれ次に太功記の閻丸にて井戸館の立廻り大評判切におゝ染久松の七役を勤む同年冬江戸中村座へ下る翌年法界坊にて釣鐘ぬけ又忠信にて見蓙ぬけ嘉永三戌年は佐倉宗五郎の新狂言を出し古今稀歩の大當り大入にて翌亥年春は石川五右衛門にて葛籠ぬけ益々大出來にて安政三辰年には宇都の谷峠の座頭を勤め大當りなり其外樂事の上手にて當時江戸一方の大立者となる翌巳年は市村座にて鼠小僧次郎吉にて鼠の妙を顯し其外屹又平安倍の仲麿八百屋お七狐忠信金江谷五郎光陽法師すべて樂事にかけては此人に上越す者もなく鼠の上手と賞せられ世に名人小團次と稱す慶應二年五月八日歿す年五十五子子團次嗣along後小團次と改む（俳優世々の接木）

イチカハ　コマザウ　市川高麗藏　大阪の俳優なり七世團十郎の三男、幼名新之助、六代目錦升の養子となり高麗藏と改め又白猿と號す明治中父の名海老藏を嗣き導て歿す

イチカハ　ゴンジフラウ　市川權十郎　團柔左に次て梨園の雄將と稱せらる本名は岡田菊三郎實家は京都松原通四の洞院にありて禁裏御畳匠伊勢屋と稱す嘉永元年九月に生る父喜三郎は家の富裕なるに任せ觀劇の爲め屢ゝ多財を費散せしを菊三郎幼少の頃より傍觀し遂に師の稽古を爲すに至りしが人の勸むる所により嵐璃寛丸と稱し始めて四條南座に子役を出演せり時に年十一なり遂に璃寛の弟子となり眞の俳優に列せり爾來名優たらんとを志し勵精其技を研きしが十七歳にして嵐璃雅の家を嗣ぎ璃鶴と改名したり慶應三年江戸へ來り猿若町の中村座に出演して團十郎芝翫彦三郎等と共に興行し「御最貴曾我」一座（鏡山）「琵琶の景清」にて璃鶴は奴江戸平藤巴六郎大友常陸之助を演じ然れども當時維新目尚ほ淺く市中の動搖未だ全く定らず一般の興行は殊に寂寥を極めたり明治三年中村の兩座に出演し漸く人氣を集むるに及べり四年六月守田座に出演中情婦キヌが殺人罪を犯せしより璃鶴も連坐し徒三年の刑に處せられ佃島に苦役の身となりぬ七年九月滿期出獄せり璃鶴は此汚辱を雪がんため當時團十郎が河原崎座を再興せしを機とし強ひて請ひ其弟子となり市川權十郎と改稱し中幕の「毛剃」小松屋宗七を演じ好評を博せり爾來我童兄弟門之助女寅鶴助登美三郎等と本郷春木座に出演し後ち歌舞伎明治の爾來にて團郎左と具に大役を演ぜり其品位あり榮を得たり二十三年五月新富座の座頭に推擧せられ團十郎菊五郎芝翫等と一座興行したり二十六年十一月久松町千歳座の總帥に明治座を新築し此に據りて興行を續けたるが三十七年一月の興行に後藤又兵衛を演じ動靡の途にも長し斯界第一の金穴家と稱せらる齢世の句「獻國降伏」にて遠師彌藤太を演じたるを名殘として病死す年六十三左團次の性剛健なり養父死後一時非常の悲境に陥りしも却て不撓不屈の精神を振起して遂に劇壇の立物となれり鮮藝の技倆は關菊に一籌を輸すと雖も人格性行は却て勝る所ありと云ふ深川淨心寺へ葬る釋鑑高操院謙德松嶽日優居士

イチカハ　サンザエモン　市川三左衛門　水戸の書生藩なり烈公の寵たり其藩結城貫齋朝比奈彌太郎等と謀り正藏武田正生藤田小四郎等を懸さんとす元治年中某更と謀を合はせ正生を討たんとせしが後四年正藏の爲に殺さる

イチカハ　シンザウ　市川新藏　俳優なり田安藩の浪士森内彌太郎の子なり幼名藤之助初め中村次の養子となり翌慶應元年正月左團次と改め養父小團次と俱に猿若町の中村座に出演しだんまりにて千島左門之助に扮し好評を得たり二年八月養父と共に守田座に出演し「數革の曾我」「鶴掛松」等にて滿都の喝采を博せり同興行後養父小團次死せり隨て左團次の技倆も亦未熟なる點あるにより遂に大根と嘗らるゝに至れり乃ち去て大阪に歸らんとせしも狂言作者杵屋默阿彌の義俠により止りて市村座に出演せり明治二年正月默阿彌と俱に守田座に出演せしに默阿彌は如何にもして左團次の名を爲んとし從來の立役を廢めて敵役の荒事を演ぜしめしに果して好評を博せり三年三月の慶安太平記には丸橋忠彌（鞠ヶ瀬秋夜）を左團次に演ぜしめしに好個の適役と認められ左團次の名遽に高く一代の出世狂言となれり四年正月書出となり爾十郎の辨慶に富樫を演じ世評愈々好く六月河原崎座の開場に及び新富町の守田座と掛持にて以前の落魂に似ず馬車を以て出入するに至れり爾來守田勘彌の顧問となりて梨園に雄視し十年四月月二十六日廡布鳥居坂井上伯邸の天覽劇には松王秋田城之助曾我五郎黑主忠信などを演じ一代の光榮を得たり二十三年五月新富座の座頭に推擧せられ團十郎菊五郎芝翫等と一座興行したり二十六年十一月久松町千歳座の總帥に明治座を新築し此に據りて興行を續けたるが三十七年一月の興行に後藤又兵衛を演じ動靡の途にも長し斯界第一の金穴家と稱せらる齢世の句「獻國降伏」にて遠師彌藤太を演じたるを名殘として病死す年六十三左團次の性剛健なり養父死後一時非常の悲境に陥りしも却て不撓不屈の精神を振起して遂に劇壇の立物となれり鮮藝の技倆は關菊に一籌を輸すと雖も人格性行は却て勝る所ありと云ふ深川淨心寺へ葬る釋鑑高操院謙德松嶽日優居士

イチカハ　サンザエモン　市川三左衛門　水戸の書生藩なり烈公の寵たり其藩結城貫齋朝比奈彌太郎等と謀り正藏武田正生藤田小四郎等を懸さんとす元治年中某更と謀を合はせ正生を討たんとせしが後四年正藏の爲に殺さる

イチカハ　シンザウ　市川新藏　俳優なり田安藩の浪士森内彌太郎の子なり幼名藤之助初め中村

芝飯の門に入り中村芝之助と據す芝飯の門人中村鶴助（後傳五郎）の養子となり故ありて離縁す父彌太郎後に市川團十郎の番頭となり藤兵衛と改む其の縁を以て新藏亦團十郎の門に入り新藏と改む明治十七年岡本みつの養子となり原籍岡本錄太郎と改名す明治廿二年淺草元鳥越中村座に於て名顯に昇る後眼疾あり眼球脱出するの患あり終に一眼を盲し一眼ム眇す三十年肺ム病み七月九日歿す谷中天王寺に葬る稱號ム幸くす中野其明及び吉澤霽茶に學び琳明の號あり又排名ム晉升と云ふ小說木枯ム著す（河竹新七氏談）

イチカハ　シンシヤ　市川新車（五世）江戸の俳優なり家名ム瀧野屋と稱す俳名新車、江戸兩國にて宵柳と云ふ料理茶屋の悴にて五代目の路考門人にて幼名瀧川路太郎といふ又七代目中四郎弟子と爲て岩井粂太郎と改む其後上方へ上り六代目松本錦升中國筋へ下る時同道して弟子となり松本七藏と改む又後初代小團次米十郎と號せし頃京宮川町芝居にて四谷怪談せし時興茂七女房お勝役にて大に受よく又夫より江戸へ歸り七世白猿門に入り市川新車と成る嘉永七年春大阪中の座へ上り染分總にて光姫ひぬかのお初役至極評判よく其の後仙代萩の神の井別して大でき夫より筑後芝居立女形ム勤め彌ゝ評判宜敷處いか成る處存にや安政二年卯年四條東芝居にて白猿一度にて菅原の松王女房千代切蓮生の玉おり姫ム勤め夫限にて京大阪ム立退き後尾州名古屋に住す明治三年門之助と改む十一年九月十二日歿す年ヵ十七新車ム中川憲書に學び能書の聞えあり（俳優世々の接木）

イチカハ　スケジュラウ　市川助壽郎大阪の俳優なり家名ム大和屋と稱す俳名ム新子と曰ふ後素桐と改む初三桝米五郎と云て三代目大ヵ郎門弟也て永く修行して其後富士松三十郎と云て大芝居へ出文政六未年に初代鰕十郎弟子となり助壽郎と改め始終師匠に付て出勤す夫より四代目團藏と一座して武道の立者となる天保六未年春角の座春陽鶯に鹽冨藤右衛門次に伊賀越のゆきゑ于兩櫓に北の屋七兵衛同九戌年同座にて梅玉二つ胴の時に表具師六郎太夫役何れも大出來なり此時代が盛なり其後は始終筑後芝居にて座頭ム勤め其外石井兵衛餅屋孫左衛門高市武右衛門小山田幸（後傳五郎）の養子となり故ありて離縁す父彌太郎後に內土佐の騎監吉岡太郎右衛門犬塚番作鬼王新左衛門花園主水福島屋清兵衛門番松兵衛加古川本藏堀部彌次兵衛衣笠武右衛門薄雪の正宗監物太郎伊達與三兵衛此の類ひは持前にて外に眞似たる者もなし當時白猿の弟子分といふ此人至て內福にて悴は役者にはせず戒橋南詰四に入る九郎右衛門町にて風呂屋渡世にて終る

イチカハ　スケヨシ　市川祐義　陸軍歩兵中佐なり德島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや後備役より召集せられ後備歩兵第十二聯隊長として出征し同年八月卅一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り功四級勳四等に叙せらる

イチカハ　スミザウ　市川壽美藏　俳優なり本名ム太田兼三郎弘化二年江戸牛込改代町に生る其父鳥藏は高頭なりしが性來遊藝ム好めるにより兼三郎ム幼少より踊の師匠既東住遊の弟子となせり其技の漸く進むに從ひ遂に舞臺に登らんとの望ム起し市川男女藏市川團三郎嵐吉三郎等の一座に入りて靜岡玉川座に於て「刎首」及び「實盛物語」の石童丸及び太郎吉ム演じたり之ム優の舞臺出演の始めゝ時に年十一後ち坂東佳根三郎と稱し兩國垢離場の芝居に出演し座頭ム勤め明治七年二月本郷東田座に出演し座主奥田登一郎の門弟と改め出演したるが音調容貌共に市川團十郎に似たるム以て總て成田屋の態度ム以て演じければ看客亦大に之ム歡びたり十一年四月團十郎の門に入り名顯に上りて市川壽美藏と改め俳號登升と稱す同六五郎年京四條南側芝居へ名前計り出て出勤なし同寅年江戸市村座へ出る明和九年六月二十四日歿す年三十一（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（二代目）江戸の俳優なり江戸木挽町芝居聯り又兵衛と云者の子にして狂言作者坂田太助の養子となり坂東次郎三郎と云ふ夫より元祖團藏弟子と成て市川治郎三と改め元文四未年養子と成享元子年初て大阪へ上る寛延元年初て京へ上り寶暦十一巳年十八年ぶりにて江戸森田座へ下り青砥左衛門役大當り明和二酉年芝居山下市山合座へ上る同三戌年冬明神と久米寺彈正の二役ム名殘にして江戸市村座へ下る寶暦六七の頃京町中にて花の高尾に傳七懲れてと云ふ獣の流行りし時四條北側芝居にて地藏の傳七閻魔の傳七と云ふ割外題にて芳澤崎之助三代目菖蒲かかされ役にて坂東滿藏と同座にて即ち團藏與右衛門の役大當り明和三戌年冬江戸市村座へ下り同五子年森田座にて法道上人役大當りにて此時位ム大上吉と印す同六丑年京四條南側芝居へ名前計り出て出勤なし同寅年江戸市村座へ出る明和九年六月二十四日歿す年三十一（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（三代目）江戸の俳優なり俳名ム二紅と稱し後ち紅と改む幼名虎藏と云ひて實暦七丑年京和泉式部座境內にて川東大鼓持連中身振芝居興行の時中山竹藏事後に泉川猪藏と改め兩人伊兵衛佐兵衛の道行ム勤め其時佐兵衛にて利口なる仕內にて評判よく其後二人共大阪龜谷座へ出て龜谷虎藏と改め彌ゝ評判よく後に元祖富十郎門弟となり苗氏ム中村と改め明和五年春江戸長松座にて下り姫小松にて後寛ム勤め扨も子供に似合はぬと評判高く同年冬勤め其外石井兵衛餅屋孫左衛門高市武右衛門小山田幸（後傳五郎）の養子となり故ありて離縁す父彌太郎後に內土佐の騎監吉岡太郎右衛門犬塚番作鬼王新左衛門花園主水福島屋清兵衛門番松兵衛加古川本藏堀部彌次兵衛衣笠武右衛門薄雪の正宗監物太郎伊達與三兵衛此の類ひは持前にて外に眞似たる者もなし當時白猿の弟子分といふ此人至て內福にて悴は役者にはせず戒橋南詰四に入る九郎右衛門町にて風呂屋渡世にて終る

イチカハ　スケヨシ　市川祐義　陸軍歩兵中佐なり德島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや後備役より召集せられ後備歩兵第十二聯隊長として出征し同年八月卅一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り功四級勳四等に叙せらる

イチカハ　スミザウ　市川壽美藏　俳優なり本名ム太田兼三郎弘化二年江戸牛込改代町に生る其父鳥藏は高頭なりしが性來遊藝ム好めるにより兼三郎ム幼少より踊の師匠既東住遊の弟子となせり其技の漸く進むに從ひ遂に舞臺に登らんとの望ム起し市川男女藏市川團三郎嵐吉三郎等の一座に入りて靜岡玉川座に於て「刎首」及び「實盛物語」の石童丸及び太郎吉ム演じたり之ム優の舞臺出演の始めゝ時に年十一後ち坂東佳根三郎と稱し兩國垢離場の芝居に出演し座頭ム勤め明治七年二月本郷東田座に出演し座主奥田登一郎の門弟と改め出演したるが音調容貌共に市川團十郎に似たるム以て總て成田屋の態度ム以て演じければ看客亦大に之ム歡びたり十一年四月團十郎の門に入り名顯に上りて市川壽美藏と改め俳號登升と稱す同六五郎年京四條南側芝居へ名前計り出て出勤なし同寅年江戸市村座へ出る明和九年六月二十四日歿す年三十一（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（元祖）江戸の俳優なり松本次郎三郎悴にて幼名ム團之助といひ元祖才牛門人也若樂形にて出て元祿十一年江戸中村座にて團藏と改め寶永五年櫻田座にて元服し立役と成れり正德未年二代目相續と不和に成て紋所ム改め年ゝ曾我五郎役にては大當りム とる享保十六寅年冬中村座にて十八年振にて團十郎相續と萬國和合一字太平記と云ふ狂言の時和睦整と舞臺にて一字ム除き元の紋に改め元文五申年巳郎時宗役ム此の世の名殘にして四月五日に終る年六十二世ゝ俳號ム市紅と云ふ（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（三代目）江戸の俳優なり松本次郎三郎悴にて幼名ム團之助といひ元祖才牛門人也若樂形にて出て元祿十一年江戸中村座にて團藏と改め寶永五年櫻田座にて元服し立役と成れり正德未年二代目相續と不和に成て紋所ム改め年ゝ曾我五郎役にては大當りム とる享保十六寅年冬中村座にて十八年振にて團十郎相續と萬國和合一字太平記と云ふ狂言の時和睦整と舞臺にて一字ム除き元の紋に改め元文五申年巳郎時宗役ム此の世の名殘にして四月五日に終る年六十二世ゝ俳號ム市紅と云ふ（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（四代目）江戸の俳優なり家名ム大和屋と稱す俳名ム新子と曰ふ後素桐と改む初三桝米五郎と云て三代目大ヵ郎門弟也て永く修行して其後富士松三十郎と云て大芝居へ出て文政六未年に初代鰕十郎弟子となり助壽郎と改め始終師匠に付て出勤す夫より四代目團藏と一座して武道の立者となる天保六未年春角の座春陽鶯に鹽冨藤右衛門次に伊賀越のゆきゑ于兩櫓に北の屋七兵衛同九戌年同座にて梅玉二つ胴の時に表具師六郎太夫役何れも大出來なり此時代が盛なり其後は始終筑後芝居にて座頭ム勤め其外石井兵衛餅屋孫左衛門高市武右衛門小山田幸（後傳五郎）の養子となり故ありて離縁す父彌太郎後に內土佐の騎監吉岡太郎右衛門犬塚番作鬼王新左衛門花園主水福島屋清兵衛門番松兵衛加古川本藏堀部彌次兵衛衣笠武右衛門薄雪の正宗監物太郎伊達與三兵衛此の類ひは持前にて外に眞似たる者もなし當時白猿の弟子分といふ此人至て內福にて悴は役者にはせず戒橋南詰四に入る九郎右衛門町にて風呂屋渡世にて終る

イチカハ　スケヨシ　市川祐義　陸軍歩兵中佐なり德島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや後備役より召集せられ後備歩兵第十二聯隊長として出征し同年八月卅一日清國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り功四級勳四等に叙せらる

イチカハ　スミザウ　市川壽美藏　俳優なり本名ム太田兼三郎弘化二年江戸牛込改代町に生る其父鳥藏は高頭なりしが性來遊藝ム好めるにより兼三郎ム幼少より踊の師匠既東住遊の弟子となせり其技の漸く進むに從ひ遂に舞臺に登らんとの望ム起し市川男女藏市川團三郎嵐吉三郎等の一座に入りて靜岡玉川座に於て「刎首」及び「實盛物語」の石童丸及び太郎吉ム演じたり之ム優の舞臺出演の始めゝ時に年十一後ち坂東佳根三郎と稱し兩國垢離場の芝居に出演し座頭ム勤め明治七年二月本郷東田座に出演し座主奥田登一郎の門弟と改め出演したるが音調容貌共に市川團十郎に似たるム以て總て成田屋の態度ム以て演じければ看客亦大に之ム歡びたり十一年四月團十郎の門に入り名顯に上りて市川壽美藏と改め俳號登升と稱す同六五郎年京四條南側芝居へ名前計り出て出勤なし同寅年江戸市村座へ出る明和九年六月二十四日歿す年三十一（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（二代目）江戸の俳優なり江戸木挽町芝居聯り又兵衛と云者の子にして狂言作者坂田太助の養子となり坂東次郎三郎と云ふ夫より元祖團藏弟子と成て市川治郎三と改め元文四未年養子と成享元子年初て大阪へ上る寛延元年初て京へ上り寶暦十一巳年十八年ぶりにて江戸森田座へ下り青砥左衛門役大當り明和二酉年芝居山下市山合座へ上る同三戌年冬明神と久米寺彈正の二役ム名殘にして江戸市村座へ下る寶暦六七の頃京町中にて花の高尾に傳七懲れてと云ふ獣の流行りし時四條北側芝居にて地藏の傳七閻魔の傳七と云ふ割外題にて芳澤崎之助三代目菖蒲かかされ役にて坂東滿藏と同座にて即ち團藏與右衛門の役大當り明和三戌年冬江戸市村座へ下り同五子年森田座にて法道上人役大當りにて此時位ム大上吉と印す同六丑年京四條南側芝居へ名前計り出て出勤なし同寅年江戸市村座へ出る明和九年六月二十四日歿す年三十一（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（元祖）江戸の俳優なり松本次郎三郎悴にて幼名ム團之助といひ元祖才牛門人也若樂形にて出て元祿十一年江戸中村座にて團藏と改め寶永五年櫻田座にて元服し立役と成れり正德未年二代目相續と不和に成て紋所ム改め年ゝ曾我五郎役にては大當りム とる享保十六寅年冬中村座にて十八年振にて團十郎相續と萬國和合一字太平記と云ふ狂言の時和睦整と舞臺にて一字ム除き元の紋に改め元文五申年巳郎時宗役ム此の世の名殘にして四月五日に終る年六十二世ゝ俳號ム市紅と云ふ（俳優世々の接木）

二代目の弟子と成て市川友藏と改め市村座へ出る是が江戸大芝居の勤めなり同六丑年京三桝座へ上る龍蟠に立脇太郎役ム勤め次に御所櫻の土佐坊役の處聯優の誉り西芝居に市川團藏着姿花東山にて清玄ム坂田半五郎ム勤め櫻姫は澤村國太郎の時奴壬生半役にて傘ゝさし中がへりして大評判を取り同年冬江戸市村座へ下る市川團三郎と改め安永二巳年春蒲冠者範頼鬼王團三郎の二役大當りにて同年顔見世より三代目市川團藏俳名市紅と云ふ忠臣藏の鹽谷判官大當り同年顔見世同座にて幣くの出端初て勤め翌三年年春曾我五郎渡海屋銀平彌左衛門大當り其翌戌年森田座にて女形の石橋所作事古今の大出來引續き忠臣藏にて七役ム勤る此人ム初なり珍敷との大評判にて大入なり此時より名人と云ふ名ム取り何ム出しても喝采ム得天明四辰年大阪角の座へ上り五月替りに隅田川檀蔦に法界坊と淺山主せんの扇落の幕きり所作事迄見物に我ム折らせ末代家の狂言とす同六午年同座にて忍池にて萬の兵庫信の藤藏の二役元祖爲十郎と出合大出來の處狂言中故障出來芝居休になり寛政元酉年同座にてふきの島聲にて田川宗左衛門役八人切の大評判同三亥年五月同座にていろは假名四十七訓にて判官由良之助切所作事官七神樂雅五變化伏見座頭大出來淀から伏見へ一飛に遊里町中大流行なり同四子年春花大樹に淺井長政と二役木下藤吉にて鎗の長短初り夫當り同六寅年同座にて二の誉り春陽とりに眞柴久吉と三七信高にて大和橋馬ご切りの初り一代の大出來なり同九巳年中の座にて遊山櫻にて足利政左衛門加藤正清の二役大當り翌十午年同座にて法界坊ム名殘にして又京四條南芝居にて忠臣藏と娘道成寺ム暇乞として江戸森田座へ下り桂男忍の大太刀の荒木の左衛門近國と二番目春藤次郎右衛門奴佐兵衛次に大判事清澄二番目法界坊淺山の二役何れも大出來大當りなり同辰年に坂彦と世に篠塚伊賀守で暫くの出端修行者蟷龍にて坂彦とのだんまり大評判なり同十二年中村座へ出て布引實盛義賢の二役の處二番目に法界坊ム名殘として大阪へ上る處森田座役者不入に付無據顔見世中すけに出て四國順禮正直正兵衛實は五代目三郎にて五代目白猿との久ゝの出合は見物どよみ返ム程大入にて三座一の大當りなり翌正月角の座へ上る此年女護島の俊寛ム出し大出來江戸大芝居にて鬼一法眼と業平物狂ひ役ム勤め尾州名古屋へ下る同四卯年角の座にて自來也と名越長兵衛の二役大當りにて同世に白來也ム出し古今獨步姿ふしぎの大當り大出來なり同五辰年九月大阪中の座にて八陣の正清と切に南柯の夢ゆめの夢ゆめに夢見る夢の世「けふも夢寢ても起てゝゆめの世の中」と門人市川市藏事後に元祖日竹麻寺に石碑ム惜む奇特千萬なり又悴團三郎團之助は叶はざる事有て暫く延引なれど弟團三郎は取物も取あへず上坂追福の營み怠なく下寺町遊行寺に辭世ム彫刻して石碑ム建つ（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（四代目）江戸の俳優なり三代目團藏の三男、俳名ム市紅と曰ふ幼名團三郎といふ寛政七卯年大阪中の座にて父市紅春藤次郎右衛門の時子役にて庄之助役ム初て勤め同十年父と供に江戸へ下り子供芝居にて忠臣藏の由良之介ム勤め遠末頼母敷との取沙汰に中の座へ出潮來諷に押小路主水役ム勤め父の面影あるとの評判にて夫より淀芝居にて長柄長助伊勢長政と二役木下藤吉にて久吉と三七信高大和橋馬ご切大出來なり同九巳年中の座にて上る其後嘉永五子年大阪角の座へ上る四代目市紅相續人と成り五代目團藏と改名す狂言は吉備大臣と物種太郎切に白石晰に兵部之介宮城の役次に京東芝居にて右の役ム勤めよく丑年春角の座にて工藤祐經次に由良之助師直ム勤める安政二卯年親助當る同六未年同座にて夏祭の一法眼左り甚五郎何れも大出來金江谷五郎ム大當りなり三庄太夫女護島の俊寛ム蓮記の狂言ム相勤む明治四年十月廿二日歿す年七十二（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎（元祖）江戸の俳優にして三ヶ津荒事の開山なり俳名才牛と曰ふ堀越才藏の悴にして萬治三庚子年の誕生にて幼名ム海老藏といふ其頃江戸の俠客に唐犬重右衛門と太夫評判にて同十一子年大阪角の座にて頃部兵衛國俊の二役同十三寅年も同座にて忠臣藏に判官木藏勘平の三役何れも大出來天保三辰年中の座にていせ物語の豆四郎大當りなり此年江戸河原崎座へくたる同十寅年冬角の座へ上り鬼一法眼帶屋長右衛門阿古屋の三曲ム出し何れも大できなり弘化元辰年角の座にて石川染にて久よしと岩木屋藤三郎切に國性爺のかんき役中の座にて久は切の戻り駕にて治郎作の役兩座かけ持にて是切にて出勤なくついに舞臺の名殘と成て弘化元辰年三月終る（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（九代目）市川鰕十郎の門人にして彝之助と云ふ後四代目の養子となり團三郎となる文政五年五代目ム嗣ぎ團藏と改む弘化二年六月六日歿す年五十八（名人忌辰錄）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（六代目）家名ム三芳屋と稱す俳名三猿別に市紅港ゝ號す三代目團藏の三男、俳名ム市紅と曰ふ幼名團三郎といふ寛政七卯年大阪中の座にて父市紅春藤次郎右衛門の時子役にて庄之助役ム初て勤め同十年父と供に江戸へ下り子供芝居にて忠臣藏の由良之介ム勤め遠末頼母敷との取沙汰に中の座へ出潮來諷に押小路主水役ム勤め父の面影あるとの評判にて夫より淀芝居にて長柄長助伊勢長政と二役木下藤吉にて久よしと岩木屋藤三郎切に國性爺のかんき役中の座にて久は切の戻り駕にて治郎作の役兩座かけ持にて是切にて出勤なくついに舞臺の名殘と成て弘化元辰年三月終る

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（九代目）市川鰕十郎の門人にして彝之助と云ふ後四代目の養子となり團三郎となる文政五年五代目ム嗣ぎ團藏と改む弘化二年六月六日歿す年五十八（名人忌辰錄）

イチカハ　ダンザウ　市川團藏（六代目）家名ム三芳屋と稱す俳名三猿別に市紅港ゝ號す三代目團藏の三男、俳名ム市紅と曰ふ幼名團三郎といふ寛政七卯年大阪中の座にて父市紅春藤次郎右衛門の時子役にて庄之助役ム初て勤め同十年父と供に江戸へ下り子供芝居にて忠臣藏の由良之介ム勤め遠末頼母敷との取沙汰に中の座へ出潮來諷に押小路主水役ム勤め父の面影あるとの評判にて夫より淀芝居にて長柄長助伊勢長政と二役木下藤吉にて久よしと岩木屋藤三郎切に國性爺のかんき役中の座にて久は切の戻り駕にて治郎作の役兩座かけ持にて是切にて出勤なくついに舞臺の名殘と成て弘化元辰年三月終る

いふ人あり海老藏といふ名は此重右衛門か付しといふ依て重右衛門より贈りし絹地に海老か畫ける掛物世と市川團十郎の家に所持して秘藏せり稚なきより伎藝を好み戲場に入る名を改めて初は市川段十郎といふ延寶元癸丑年中村座にて四天王稚立といふ續狂言を興行す此時十四歳にて初舞臺紅白粉を以て惣身を塗り荒事といふ事を始め又先祖より傳はりたる三本太刀あり夫を鎔どり狂言太刀に拵へ今に至る迄しばらくの狂言には太刀を三本佩なり又顔の隈取紅のさし方にも作法ありて一朝一夕の事に非ず延寶三卯年五月木挽町山村座勝関譽曾我といふ狂言にて五郎時宗役を始めて勤む十郎祐成に宮崎傳吉工藤祐經は水島甚右衛門勤るなり是曾我狂言の始りにて明治廿八年まで二百餘年に成る真享元子年中村座にて門松四天王といふ狂言にて鳴神上人役を初めて勤む大當りにて江戸中の大評判なり末世に至るまで譽と成る元祿六酉年京四條村山平右衛門座へ始てのぼり其の時椎が本才麿が門に入て俳諧を學び才牛と呼ぶ是役者に俳名を唱ふる始なり此の時狩十郎を改めて團十郎と號し上京す同十丑年江戸中村座へ團十郎にて下る大福帳ふくびき名護屋といふ狂言にてしばらく勤む其頃の實悪に山中平九郎といふ者と大福帳引合のせりふ大當り寶永元申年市村座にて星合十二段といふ狂言とも又忠信四番纏といふ狂言と即ち佐藤忠信役にて幕引きの時皷打に杉山牛之丞と云ふ者團十郎に意恨ありて幕引にまぎれて刀を以て團十郎の脇腹を刺ぐるぐる才牛は此深手に堪まらず忽ち其場にて命終る元來は商賣の事に付此そうどうとなるといふ二代目稲莚孝心によりて父の仇を報ぜんと彼舞臺にて用ふる狂言太刀を以て牛之丞を討ちしといふ寶永元申年二月十九日殺す増上寺山内常照院俗稱あかん堂に葬る門譽入寶覺樂居士行年四十五

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（二代目）江戸の俳優也元祖團十郎の子通稱成田屋重兵衛、俳名を三升と曰ふ後稲莚と改む則に才牛譽と號す幼名九藏といふ元祿十丑年十歳にて初舞臺是迄は子役と云し事なく若衆役と云しが此九藏出てより子役といふ事初るなり寶永元申年十七歳にて父に離れ中陰中六月迄休み七月より木挽町山村座へ二代目團十郎と改名して出勤す宮崎傳吉の引合せにて其の道善の口上見物の貴賤涙に袖をぬらす此時平安城成都定と云に八力丸役を勤む寶譽寶其角が道善の句に「ぬり顔の父はなが散る」同年秋元禄丑年中村座にて四天王稚立といふ續狂言を興行す此時十四歳にて初舞臺紅白粉を以て惣身を塗り荒事といふ事を始め又先祖より傳はりたる三本太刀あり夫を鎔どり狂言太刀に拵へ今に至る迄しばらくの狂言には太刀を三本佩なり又顔の隈取紅のさし方にも作法ありて一朝一夕の事に非ず延寶三卯年五月木挽町山村座勝関譽曾我といふ狂言にて五郎時宗役を始めて勤む十郎祐成に宮崎傳吉工藤祐經は水島甚右衛門勤るなり是曾我狂言の始りにて明治廿八年まで二百餘年に成る真享元子年中村座にて門松四天王といふ狂言にて鳴神上人役を初めて勤む大當りにて江戸中の大評判なり末世に至るまで譽と成る元祿六酉年京四條村山平右衛門座へ始てのぼり其の時椎が本才麿が門に入て俳諧を學び才牛と呼ぶ是役者に俳名を唱ふる始なり此の時狩十郎を改めて團十郎と號し上京す同十丑年江戸中村座へ團十郎にて下る大福帳ふくびき名護屋といふ狂言にてしばらく勤む其頃の實悪に山中平九郎といふ者と大福帳引合のせりふ大當り寶永元申年市村座にて星合十二段といふ狂言とも又忠信四番纏といふ狂言と即ち佐藤忠信役にて幕引きの時皷打に杉山牛之丞と云ふ者團十郎に意恨ありて幕引にまぎれて刀を以て團十郎の脇腹を刺ぐるぐる才牛は此深手に堪まらず忽ち其場にて命終る元來は商賣の事に付此そうどうとなるといふ二代目稲莚孝心によりて父の仇を報ぜんと彼舞臺にて用ふる狂言太刀を以て牛之丞を討ちしといふ寶永元申年二月十九日殺す増上寺山内常照院俗稱あかん堂に葬る門譽入寶覺樂居士行年四十五

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（二代目）江戸の俳優也元祖團十郎の子通稱成田屋重兵衛、俳名を三升と曰ふ後稲莚と改む則に才牛譽と號す幼名九藏といふ元祿十丑年十歳にて初舞臺是迄は子役と云し事なく若衆役と云しが此九藏出てより子役といふ事初るなり寶永元申年十七歳にて父に離れ中陰中六月迄休み七月より木挽町山村座へ二代目團十郎と改名して出勤す宮崎傳吉の引合せにて其の道善の口上見物の貴賤涙に袖をぬらす此時平安城成都定と云に八力丸役を勤む寶譽寶其角が道善の句に「ぬり顔の父はなが散る」同年秋元禄丑年中村座にて四天王稚立といふ續狂言を興行す此時十四歳にて初舞臺紅白粉を以て惣身を塗り荒事といふ事を始め又先祖より傳はりたる三本太刀あり夫を鎔どり狂言太刀に拵へ今に至る迄しばらくの狂言には太刀を三本佩なり又顔の隈取紅のさし方にも作法ありて一朝一夕の事に非ず延寶三卯年五月木挽町山村座勝関譽曾我といふ狂言にて五郎時宗役を始めて勤む十郎祐成に宮崎傳吉工藤祐經は水島甚右衛門勤るなり是曾我狂言の始りにて明治廿八年まで二百餘年に成る真享元子年中村座にて門松四天王といふ狂言にて鳴神上人役を初めて勤む大當りにて江戸中の大評判なり末世に至るまで譽と成る元祿六酉年京四條村山平右衛門座へ始てのぼり其の時椎が本才麿が門に入て俳諧を學び才牛と呼ぶ是役者に俳名を唱ふる始なり此の時狩十郎を改めて團十郎と號し上京す同十丑年江戸中村座へ團十郎にて下る大福帳ふくびき名護屋といふ狂言にてしばらく勤む其頃の實悪に山中平九郎といふ者と大福帳引合のせりふ大當り寶永元申年市村座にて星合十二段といふ狂言とも又忠信四番纏といふ狂言と即ち佐藤忠信役にて幕引きの時皷打に杉山牛之丞と云ふ者團十郎に意恨ありて幕引にまぎれて刀を以て團十郎の脇腹を刺ぐるぐる才牛は此深手に堪まらず忽ち其場にて命終る元來は商賣の事に付此そうどうとなるといふ二代目稲莚孝心によりて父の仇を報ぜんと彼舞臺にて用ふる狂言太刀を以て牛之丞を討ちしといふ寶永元申年二月十九日殺す増上寺山内常照院俗稱あかん堂に葬る門譽入寶覺樂居士行年四十五

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（三代目）江戸の俳優なり俳名を三升と曰ひ德舞と號す元祿十丑年江戸中村座へ團十郎にて下る大福帳ふくびき名護屋といふ狂言にてしばらく勤む其頃の實悪に山中平九郎といふ者と大福帳引合のせりふ大當り寶永元申年市村座にて星合十二段といふ狂言とも又忠信四番纏といふ狂言と即ち佐藤忠信役にて幕引きの時皷打に杉山牛之丞と云ふ者團十郎に意恨ありて幕引にまぎれて刀を以て團十郎の脇腹を刺ぐるぐる才牛は此深手に堪まらず忽ち其場にて命終る元來は商賣の事に付此そうどうとなるといふ二代目稲莚孝心によりて父の仇を報ぜんと彼舞臺にて用ふる狂言太刀を以て牛之丞を討ちしといふ寶永元申年二月十九日殺す増上寺山内常照院俗稱あかん堂に葬る門譽入寶覺樂居士行年四十五

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（四代目）實は江戸の人松本幸四郎悴にて松本才藏といふ稲莚舞なり享保五子年荒岡の荒事初舞臺にて同十三年頃鯉形の部に入り同廿卯年市村座にて二代目松本幸四郎と改め恵觀師公曉役元文五年には實悪の卷頭となり乘の平内左衛門佐々木摩流工藤祐經願蔵坊弁定九郎加古川本蔵八郎爲朝熊坂長範三庄大夫等何れも大出來なり寶暦四戌年冬稲莚の養子と成て四代目を相續し團十郎と改名して岡崎惡四郎にて暫らく出端大當り此時悴幸蔵に三代目幸四郎を譲る其後色々勤し中にも土左衛門の傳吉平親王將門油屋九平治河津の三郎荒五郎茂兵衛碁盤忠信大見八幡之介寺岡平右衛門手浦八兵衛景清等度々勤大當りなり明和九辰年海老蔵と改名して又實子幸四郎に五代目團十郎を譲り自分は又元の幸四郎となり安永五申年菅原の松王丸と非人茶の湯景清を一世一代に勤め舞臺を五十八年間勤む後に深川木場（曙）居して水石を樂しむ俳名を海丸又夜雨庵二世五粒と號す世に之を木場の親玉と稱す安永七戌年三月朔日殺す廓譽悟粒隨念法子年六十八（俳優世々の接木）

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（五代目）四代目海老蔵の實子にして俳名を三升又は白猿と云ひ狂歌の號を花道のつられと曰ふ幼名松本幸蔵と云ふ寶暦四戌年初舞臺にて同年冬父の元の名松本幸四郎を襲ぎ明和七寅年に五代目を相續して團十郎と改め三升と號す熊井太郎の役にて舞て暫くを勤む次第に受好く堅天明八申年には日本役者の冠首にて位附大至極上上吉に至る寛政元酉年春市村座にて戀使假名書曾我に三立目曾正坊實は景清にて牛四郎の五郎時宗に鞍馬山印可の卷を渡す虚大評判にて二番目荒五郎茂平役にて元觀奥山の戯、へき民兵衛と出合江戸向づくしの掛合大評判舞臺にて正月元日まひ初の折柄舞臺にて狂歌を詠める「あさおきて（當十郎）せがはの水の（路考）いわねそめ（牛次郎）としの始めに汲やく（澤村）みます（三升）」同二戌年貌見世同座にて花御江戸將門祭に平親王將門役大詰に漢の武帝の華勢福祿壽の霊像兩童子調子杜若相勤む何れも大出來堅春も同座にてかしく存曾我に鳴神と文覺上人を勤む古來の通り大々當り同三亥年同座にて金めつき源家の角つばに逝谷金王昌俊にて暫らくの出端此時悴海老蔵に六世を譲り自分は鯉蔵と改名して俳名を白猿と號す時に讃める「鯉蔵も團十郎も世に馴へつられの株も人にまかせて」と此時口上に硯父親は海老蔵の文字を付ましたが私はゑびはさこ鯉の文字を用ひます又父親は稲莚父は

五竹悴は海老蔵の間は稲莚私しは白イ猿と書て白猿と申ふする此心は名人上手に毛が三筋足らぬと申譬て御座ります」と改名の發句に「毛が三すぢ上手に足らず寒し」同四子年河原崎座顔見世に大船盛鯉顔見世に長竹勘解由左衛門役大當翌丑年幟鯉長兵衛を勤め自井增八年都座顔見世に清和二代大寄源氏碓井貞光にて暫を勤め行者快了實は相馬太郎良門にて恭盤を平安城にぐらへ眼下に見下しと云ふ所八百蔵のしほ片岡と四人の出合近年の大當り二番目ふびさこの十の世話事何れも大出來にて古今稀なる大入なり此の時五十六歳にて之を一世一代と上葛飾の牛島須崎村に閑居して名を七左衛門と改め俳名白猿と云ふ舞踊歌に「惜まるゝ時散りてこそ世の中の華も花なり鼻もはななり」寛政十年中村座不入に付勤三郎の心配六代目牛四郎は弟分ゆえ兩人數度來り再勤を乞ふ白猿承引せずおして願に付き然らば興行中口上を逃るに極り世ケ間に毎日舞臺にて即吟の狂歌一首宛を詠む其翌未年五月悴三升父に先ち身まかりぬ惜傷限りなく殊更わけ有て市川家退轉にも及ばんとす時に市村座は内縁有るに付河川菊之丞が勤めに依て祖先の百年忌を幸ひ又孫の海老蔵幼年なれども七世の團十郎と改名させ顔見世三十日ケ間再勤をする生茂浪うれ〳〵に同國の修行者覺善實は大友の黒主にて狐をさし殺しながらのせりだし以前にかはらず大評判にて又享保二戌年河原崎座は元祖稲莚の伯母の血すじを云立て岩井粂三郎は甥の事故父兩人再勤を乞ひに曳る此に曳され再勤の事調ひ名歌德に三升玉垣に磐若五郎照秀にて暫くの出端修行者ばん龍大友のくろ主にて吉例の六部の出立四國順禮正直正兵衛實は五位之助よし實に三代目團蔵兩人の出合古今の大出來にて三座第一の大入なり翌年春同座にて大紋目扮師曾我にて工藤左衛門祐經役對面場にて鳥帽子大紋にての出端昔よりなしとの評判二役巡七兵衛景清にて牢破ぶりの場四代目五粒の再來かと諸人大評判なり阿古屋に常世宣目にて娘人丸に粂三郎三曲の處古今無類の大出來にて次に故牛四郎三回忌追善に姉道成寺を粂三郎勤るに付大詰に海老名源八てる勝にて出る此時男女蔵に衣裳を借りて五六日勤め跡は坂東八十助が替りにて是を蔵の仕納とし元の五百崎に閑居して農民に変り身に成は飛龍を着て一念の窓の前には金佛の歌を百首につられ壁に四の内の紙に彌陀佛の畫像を張り傍に一首のわれ歌「一枚のかみの外國へ產れ來て終にはいたるに しの内かな」寛政十一未年市村座へ二代目狐鯉大阪より下り下りしとき老父琢獅江戸下りの節入門せし古例を云立て入門に來る白猿取敢ず其場にて提灯に三升の紋を印し渡したり依て難介江戸出勤中此紋を用ふ其の後雛介山姥の化身鬼女となる狂言にて其顔の隈とりを白猿に相談す白猿手紙に顔を書て隈取を教へける後ひな介向島武蔵屋へ參り白猿を馳走せんと招くと雖も白猿元より珍味を好む事なければ平に辭退すとて參らず依て雛介乘來りし船中に有りし重箱を取よせ煮染を出す白猿悅て「二の誓りまたしめ升たにしめとて見ればよつ壽丸役初舞臺此時四歳也同九巳年海老蔵と改名して同十二申年つゞれの錦にて高市庄之助の子役を勤め同年市村座顔見世に七代目相續して團十郎と改め俳名三升と號す時に十歳なり同年六月市村座にて六代目團十郎一周忌追善いろう寶初て勤む享和三年同座にて顔見世に初雪物見松と云ふ狂言御厩の富三太役にて丸びたひの髪にて上下鬼ひしの衣裝御幣を擔て暫くの出時に十三歳也文化元子年四月市村座元勤三郎歌舞伎芝居初り寛永元子年より當子年まで百八十一年の謂として相傳の系圖の品舞臺に於て披露す此口上を前々より市川團十郎勤し事なり然るに白猿は隱居の身ゆゑ今七代目團十郎少年十四歳市村座の勤なれども勤三郎頼に依て口上を逃る其辯舌瀧の如し其家の名譽顯れたり諸人之を稱す文化四卯年十七歳にて素袍きて初て暫の出端同八未年六代目團十郎十三回忌四代五代と年回重り中村座にて追善として花川戸助六の初役幕樹物山の如く刀を佩き三升の縫の鞘羽織にて花やかなる出立ち谷へ落し行く器を爭ひ相にて大紋立烏帽子にて馬上の出立兩人大きつまの淨瑠璃にてせり出し大評判也同七卯年都座にて鬼井太郎に初めて暫の出端同十年年中村座にて千本櫻の銀平襟と長刀の身を逆手に持て成田山不動の霊像と成て お染久松の心中を助ける處大評判なり同十一年三月河原崎の新深雪の役にて篠塚伊賀守定勝にて暫くの出端長崎の二座にて小山田太郎に簑助兩人卒都婆の大立廻にて同年の春同座にて大三浦伊達模引に荒獅子男之助役にて大名顧看板に登人讃く是昔より名人上手にてもなき事なり此の時二十二歳にて座頭となる二番目に四代目團十郎廿三回忌追善に助六廓花見時に則助六の初役意久は高麗蔵揚巻は梁三郎白酒實は簑助勤む古今稀なる大當りにて芳原より譽詞あり次の替り忠臣蔵に若狭之助平右衛門の處十日ほど勤ると風邪の心持にて引籠りこれが舞臺の名殘となり寛政十一未年五月十三日殺す啓譽自到本剃信士行年二十二

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

（七代目）俳名を三升又は白猿と號す奪は夜雨菴狂名は壽海老人亭號は二九亭實は菁屋和芝居茶屋丸屋三右衛門の悴にて五代目白猿の孫なり寛政三亥年誕生にて幼名新之助と云ふ同六寅年に市村座にて矢口渡に新田德役初舞臺此時四歳也同九巳年海老蔵と改名して同十二申年つゞれの錦にて高市庄之助の子役を勤め同年市村座顔見世に七代目相續して團十郎と改め俳名三升と號す時に十歳なり同年六月市村座にて六代目團十郎一周忌追善いろう寶初て勤む享和三年同座にて顔見世に初雪物見松と云ふ狂言御厩の富三太役にて丸びたひの髪にて上下鬼ひしの衣裝御幣を擔て暫くの出時に十三歳也文化元子年四月市村座元勤三郎歌舞伎芝居初り寛永元子年より當子年まで百八十一年の謂として相傳の系圖の品舞臺に於て披露す此口上を前々より市川團十郎勤し事なり然るに白猿は隱居の身ゆゑ今七代目團十郎少年十四歳市村座の勤なれども勤三郎頼に依て口上を逃る其辯舌瀧の如し其家の名譽顯れたり諸人之を稱す文化四卯年十七歳にて素袍きて初て暫の出端同八未年六代目團十郎十三回忌四代五代と年回重り中村座にて追善として花川戸助六の初役幕樹物山の如く刀を佩き三升の縫の鞘羽織にて花やかなる出立ち谷へ落し行く器を爭ひ相にて大紋立烏帽子にて馬上の出立兩人大きつまの淨瑠璃にてせり出し大評判也同七卯年都座にて鬼井太郎に初めて暫の出端同十年年中村座にて千本櫻の銀平襟と長刀の身を逆手に持て成田山不動の霊像と成て お染久松の心中を助ける處大評判なり同十一年三月河原崎の新深雪の役にて篠塚伊賀守定勝にて暫くの出端長崎の二座にて小山田太郎に簑助兩人卒都婆の大立廻にて同年

らず芝居側樅物山の如く殊に花やかなる事にて見事也同十二年に粮州高野山へ先祖の石碑を建て大阪中の座へ初て上り平假名の松右衛門平次切に關七九郎兵衛後の七役轉隨院長兵衛九月には御名殘と云ふ看板を上げ左枝大學之介立場の大平次切に鬼若所作事安宅松水寶秋の七種矢の根九郎父た切に近江源氏の和田兵衛と高綱同れも評判よく是れより京芝居顔見世則ち東にて梅玉璃寛一座にて三人だんまり幕切大評判なり此の時發句か詠む「ふとんきて寢たる寒さや東もの」（上方は寢る時衾の代りにふとんを用ふ）文政十三寅年春大阪中の座へ江戸役者一座の看板出る尾上菊五郎松本幸四郎岩井桑三郎坂東彦三郎澤村四郎五郎市川壽美藏市川高麗藏坂東玉三郎大谷門藏成田屋宗兵衛なり大阪役者は淺尾額十郎藤川友吉計りなり狂言仕組中に桑三郎江戸表より引戻しに相成後少々もめ合在て興行ならず依て自分と幸四郎こま藏の三人は角の座へ飛入り梅玉璃寛と一座す又三人のだんまり大評判なり次に忠臣藏にて石堂若狭之助寺岡の三役大當り切に彌々名殘狂言に花川戸助六を出す意久に幸四郎揚まきに松江白酒うりに歌右衛門團三郎に團藏しら玉にあら富仙平に舍丸門平に歌七藤夢屋の勝に瀧十郎高大の役者揃ひにて前忠臣藏と斯程の大座か覺えず是より直に京東芝居にて暇乞狂言にひらかなと不被名古屋を出す此時加茂季鷹「白猿を見さる聞さる人だにもい贈答の狂歌あり季鷹「なぞと呼子島さるにしておけ〳〵」夫より伊勢古市芝居を勤め江戸木挽町河原崎座へ下る後大保五年三月大阪角の座へ下り此時も大座にて秋津島と切に鳴神上人か出す次に三代記の三浦之助一寸徳兵衛は無類の大出來なり是切にて夫よりすぐに大阪を立退き肥前長崎へ下り彼地か遊覽し翌未の年江戸へ返る同九戌年悴新之助へ八代目か讓り自分には海老藏と切に鳴神上人と號す隱居の身の上と成り居る所平民の所有すべからざる珍品か藏せるか以て江戸追放か蒙り下總國成田山へ引籠し所弘化二卯年冬大阪角の座へ出菅原にて松王丸と覺醒の二役切に非人茶の湯の景清を勤む久しの上阪にて評判宜敷翌春同座にて石川五右衛門和藤内市川流の荒事にて何れも評判よく其頃より大阪に住居し都て上方流の時代狂言を呑込み一の谷六彌太物語春藤次郎右衛門由良兵庫助渡し守頼兵衛梶原の石切山田幸兵衛抔至極の評なり嘉永元申年中の座に曾我狂言か初て出す是近來の大はづみ古今大入大當り初る なり翌二酉年悴關十郎兩親孝心によつて江戸表の二の替りに曾我の狂言か勤る此人よ り今時く大阪の二の替りに初て出す 段成人して天保九戌年顔見世より元服して八代目團十郎を相續して俳名三升と云ふ同翌年春五郎時宗役初て勤む大詰に父白猿山姥の山巡りを勤む其時金時役か勤め大出來なり同外郎實初て勤む近世希代の稀者にて家父の大阪に放れ住む事なくつかしく思ひ一度對面せんと上方へ上り父に巡り逢ふ赤大阪にて出勤もなく既に紀州高野山へ參詣して京都名所を漫覽して江戸へ歸る此時父より六彌太物語の狂言の傳授を受け持かへり相勤む翌酉年三月父母に孝心深さを以て官の稱美を受け御褒美を頂戴する事實に役者道の稀者一奇人とも云ふべし此孝心によりて父白猿非江戸表御構ひ赦免となる同七寅年に尾州名古屋へ上り大阪より父白猿參り一座して古今の大入大當なり此時大阪より使あり て無理に呼迎へ閏七月廿八日夜櫻の宮より中の芝居へ乘込む其人無いはん方なく川筋迎ひ舟籠り提灯燈の如く實に天神祭り同樣なり當日儀式相濟み取急き看板を出し前は兒雷也豪傑物語切に興話竹浮名横櫛と云ふ江戸狂言にて即ち尾形の三郎と切に向ふ疵の與三郎の役にて八月六日初日と定り前日より附込み樓數の書付山の如く張るかくて五日に聖稽古もすんで其夜宅へ戻り夜中に俄の變死なれ共翌朝まで家内の者是を知らず跡の顧勅大方ならず父白猿を始家内は勿論芝居掛りの者一統まで途方にくれ道頼堀川竹も闇夜に火の消たる如くなり時に嘉永七寅年八月五日なり法名淨蓮信士年三十二宿坊四天王寺一心寺に葬る

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎

九代目日本名堀越秀七代目團十郎（四代目海老藏の五男にて天保九年十月十五日江戸堺町に生る母は海老藏の妾ヨタメにて幼名を長十郎と云ふ五歳の時木挽町河原崎座の座元河原崎權之助の養子となり天保十四年六月淺草猿若町の河原崎座移轉舞臺開の時年甫めて六歳にて千歳の役か勤む養父權之助は長十郎に深く望み囑し二五年河原崎座にて伊勢海老のあかん平にて吉例の梯の素袍か着て初て暫くの役か勤む時に七歳なり六立目に大杜若補正成の妻にて三升多門丸の役か勤む兩人せり出し櫻井宿にて三略の卷か讓り受る處父白猿上方へ上り留主中に依て中四郎後見する と口上あり夫より段段成人して天保九戌年顔見世より元服して八代目團十郎を相續して俳名三升と云ふ同翌年春五郎時宗役初て勤む大詰に父白猿山姥の山巡りを勤む其時金時役か勤め大出來なり同外郎實初て勤む近世希代の稀者にて家父の大阪に放れ住む事なくつかしく思ひ一度對面せんと上方へ上り父に巡り逢ふ赤大阪にて出勤もなく既に紀州高野山へ參詣して京都名所を漫覽して江戸へ歸る此時父より六彌太物語の狂言の傳授を受け持かへり相勤む翌酉年三月父母に孝心深さを以て官の稱美を受け御褒美を頂戴する事實に役者道の稀者一奇人とも云ふべし此孝心によりて父白猿非江戸表御構ひ赦免となる同七寅年に尾州名古屋へ上り大阪より父白猿參り一座して古今の大入大當なり此時大阪より使あり て無理に呼迎へ閏七月廿八日夜櫻の宮より中の芝居へ乘込む其人無いはん方なく川筋迎ひ舟籠り提灯燈の如く實に天神祭り同樣なり當日儀式相濟み取急き看板を出し前は兒雷也豪傑物語切に興話竹浮名横櫛と云ふ江戸狂言にて即ち尾形の三郎と切に向ふ疵の與三郎の役にて八月六日初日と定り前日より附込み樓數の書付山の如く張るかくて五日に聖稽古もすんで其夜宅へ戻り夜中に俄の變死なれ共翌朝まで家内の者是を知らず跡の顧勅大方ならず父白猿を始家内は勿論芝居掛りの者一統まで途方にくれ道頼堀川竹も闇夜に火の消たる如くなり時に嘉永七寅年八月五日なり法名淨蓮信士年三十二宿坊四天王寺一心寺に葬る

イチカハ　ダンジフラウ　市川團十郎（八代目）七代目の實子にして俳名を三升と云ひ幼名新之助と云ふ文政六未年の誕生なり後海老藏と改む同十

教育を嚴にし先づ淺草馬道の手習師匠森内藤兵衛に學ばしめ讀を淺草傳法院内日音院寺中の土佐派畫家花所麟春に習はしめしが好みしを以て忽ちにして其技に長ぜり踊は西川扇藏及び後花柳壽輔に就きて練習せり養父の監督嚴重なると技藝に熱心なるとは後年人格技藝の秀逸に興つて力ありき嘉永五年九月將軍家男子出生ありて長吉郎と命名せられしを以て頭字を憚りて權十郎と改名せり安政六年七月實父海老藏追善の爲小團次跳升三十郎羽左衛門と共に初めて勤進帳の辨慶を演じたり當時未だ技熟せず屢〻小團次の叱責を受けたりといふ養父の死後明治二年三月名跡ふ襲ぎて河原崎權之助と稱し市村座々頭となり再び勤進帳を演ぜり時に卅二歳なり後六年十一月守田勘彌守田座を新富座に移すに及んで權之助は守田座に出勤するを止められしより權之助は苦心の末芝新堀へ河原崎座を再興し七年七月耳舞臺開に於て權之助の名を親戚山崎縮次郎に與へ自ら宗家の名跡を嗣きて九代目市川團十郎となり備後三郎和田和泉守楠正成熊谷直實等を勤めたり其年十月狂言「河内山」及び「毛剃」を演じて團十郎の名益益揚れり然れども世後の興行不入にて家計大に困難となり再興の同座も入手に渡！團十郎は止むなく旅稼に出づるに至れり此苦境に際し守田勘彌は再び團十郎を招きしかば九年九月守田座か改めて新富座に出勤するもとなり翌年同座焼失十一年の春新築落成して「四南戰爭」の狂言大當り六月同座の座頭となり爾來着々技藝の進歩を計れり十二年七月來國前大統領グランドの觀覽あり其名は遂に海外に響きたり二十年四月廿六日麻布鳥居阪の井上伯邸行幸の際「勸進帳」「曾我」翌二十七日皇后陛下行啓の折は「操三番」「寺子屋」「伊勢三郎」「吉野山」等を菊五郎左團次其他と共に演じて天覽の榮を得たるは歌舞伎創設以來の大名譽なり瓊寛彦三郎死後團十郎に遇ぐる者なく二十二年一月中俳優組合の設けらるゝや推されて頭取となり又同年千葉勝五郎福地源一郎等の歌舞伎座を起すや他の反對を招きたりしが勸彌の金力に卷込まれ團十郎も亦同座に出勤することゝなり「黄門記」天切「六歌仙」を演じ爾來同座附となりて興行毎に大入を占め給金も一回の興行に五千圓を得其しきは大阪の歌舞伎に對して二回五萬圓定めにて買はれしことあり技藝絶妙と稱せられしが其最も得意なりしは「勸進帳」の弁慶助六其他を除き家康由良之助酒井の太鼓水戸黄門松王紅葉狩毛剃幡隨院長兵衛等は空前にして又絶後の適役と評せらる所謂「活歴」とは團十郎の創めし藝風にして其意時代劇を演ぜる所以で已れ自當時の時勢習風俗を研究し以て已れ自分となり劇の主人公たるの用意を爲すにあり其時代の人となり劇の世話物に對し團十郎が時代物の特長を示し古今無類と稱せられし所以なり而して其技藝が梨園界に併ぶ者なきと共に其品性に於ても卓絶群を抜きなきと共に其品性に於ても卓絶群を抜きれざる圍門の素れなく豊正和樂なる家庭併曼社會に免れざる圍門の素れなく豊正和樂なる家庭を作り嗜好を文事釣魚に有し是等の餘技も亦觀る可きものあり き老後墨繰と舞踊に力めしが三十六年五月歌舞伎座興行に春日局を演ぜしを最後として健康勝れず相摸國芳ヶ崎の別莊に靜養中同年九月十三日急性肺嫩病及び尿毒症併發の爲め享六十六を以て逝く遺骸は東京に送り壯嚴なる神葬式を以て寄山墓地に葬る謚號を玉垣道守彦靈と稱す俠爵伊藤博文の弔詞に曰く「一技藝の士にあらずして社會の一偉人なり云云」と

イチカハ　トウガク　市川東嶽　名は執字は子範椿々山の門人にして花卉翎毛に長ぜり酒を嗜み鯨飲連日頽る人に厭はれ辛螺苦瓜の圖に題して云く讀破万卷書獨行千里路三年辛苦（繪畫叢誌）

イチカハ　トヨジ　市川豐二　勤王の志士なり諱は久明豐二と稱す姫路藩士にして祿七人口金三両を給せらる性剛毅事に當て屈撓せず幼より劍術に長ず文久二年夏藩の專業生となり無外流を以て各地に歴游す文久二年夏藩の重臣本多意氣揚に從ひて江戸に滯藩の重臣本多意氣揚に從ひて江戸に滯藩の大義を唱ふ三年の春河合總兵衛に伴はれて再び京都に上り諸藩の士と往來す八月廟議一變七卿長州に走りしかば總兵衛と興に其跡を追ひ中途より京に歸る後千種家の雜掌香川肇京師の儒者家里新太郎を切害したる事露はれ禁錮せられたる事露はれて藩に送られて禁錮せり（續諸家人物志、江戸名家墓所一覽）

イチカハ　トヨジ

イチカハ　バイテン　市川梅顚　儒者なり名は綜字は孟瑶達齋と號し鐵心齋と號す俗稱一郎文化年間の人（諸家人名錄）

イチカハ　バンアン　市川万蕣　書家なり名は三策、万蕣は其號なり米蕣翁の季子、年少にして江戸德川氏に仕て騎士となり祿二百三十石を食む江川太郎左衛門高島四郎太夫の門に入り洋式の砲術を修む明治三年大藏省の命を受け倫敦にて新製する所の紙幣の文字を書し尋で該省の屬官たること二十餘年二十五年三月職を辭す特旨を以て從七位に叙せらる四十年十一月十日歿す年七十一万蕣は唯に書を善くするのみならず篆刻點茶彈琴の技にも通ぜりと云ふ

イチカハ　ヒンサイ　市川彬齋　土佐の人なり與宮慥齋と友と善し共に心学を砥礪し一時王學を海南に唱ふ（王陽明學派）

イチカハ　フクサイ　市川復齋　津和野藩の儒者にして名は住儼通稱舞五郎世〻藩井氏に仕ふ爲人端慤にして勁拔學程朱を主とし博く經史に通じ文章を善くす江戸に遊學すること前後十年昌平黌及び古賀氏の門に學ぶ藩井氏學館を再興するに當り教頭に擧げられ學規を調理して大に功績あり文久中寺社奉行を兼ねしが幾ならずして歿す歳三十五易簀の前日手書文章悉く之を灰にす故に著書傳はらず復齋夙に開港論を抱持せしが一藩に容れられざりしといふ（日本教育史資料）

イチカハ　ベイアン　市河米菴（自ら修して河となす）江戸の書家なり名は三亥亦通稱に用ふ字は孔陽、米菴は其の號小左衛門と稱す安永八年亥月亥日を以て生る因て三亥と曰ふ又た小山林堂、金羽山人、百筆齋、樂齋、亦顔道人の號あり寛齋の男書體米元章を學で別に一家の風をなす尤も楷隷に巧なり我邦享保の比より書に名ある人多しと雖も未だ和臭を脫する能はず近政に至りて墨池の技殊に闢けしは此の人の鼓動振作に出でしもの多しと云ふ嘗て加州侯に答事す安政四年七月十八日江戸に歿す年八十著はす所米家書譜、米菴墨談、皇國州名歌、四遊小草、毛信遊草等あり（繪畫家人物志、江戸名家墓所一覽）

イチカハ　マサヨシ　市川正好　俗稱甚左

衛門尾州名古屋の藩士なり人となり忠純にして吏事に通ず寶永享保の頃信州木曾に拏行たりしが林務の缺漏多きを嘆に斷然舊制を改正し五木の禁を設け輪伐の法を興す實に木曾山林中興の偉業なり寶暦七年四月歿す年八十三（市川正好傳）

イチカハ　モンノスケ　市川門之助（初代）二代目團十郎の門弟なり享保元文中の人俳名新車初長之助又辨次郎と曰ふ享保四年門之助と改め十四年正月二十九日歿す年四十八能く少年を扮して名あり

イチカハ　モンノスケ　市川門之助（二代目）初代の實子にして幼名は秀松後辨藏俳名新車と稱す寶政六年歿す年五十二

イチカハ　モンノスケ　市川門之助（三代目）二代の男幼名は辨之助又男女藏後海丸と曰ふ文化二年門之助と改む文政七年七月廿七日變死す歳卅一（或は曰く男女藏の子幼名辨松後男寅と改む）

イチカハ　モンノスケ　市川門之助（四代目）初の名は男寅女形なり文化中の人（常磐津文字太夫四世參看）

イチカハ　モンノスケ　市川門之助（五代目）イチカハハシムシヤ」

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（元祖）江戸の俳優なり家名を寶來屋（又曰立花屋）と云ひ定花と號す俳名吉太郎と云ふ延享三年二代目柏莚門に入り松島八百藏と改む寛延二巳年より苗氏を市川と改む遠世上に名を上げて吉例の暫春の曾我には五郎時宗工藤祐經は度々當りはづさず譽れを傳藏（讓る寶暦九卯年十月十九日卒す年三十

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（二代目）俳名を中軍と稱す初豐竹和泉大夫と曰ふ後七代目傳九郎門人となり中村傳藏といふ寶暦三年定花の妹を妻にして二代目八百藏と改む安永六酉年七月三日歿す年四十四

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（三代目）實は二代目澤村宗十郎倅にて幼名金平といふ又澤村四郎五郎と改め頼形にて出て後元服して瀬川雄次郎と改む安政六年より又元の四郎五郎と成る八年市川團十郎の門に入り三代目八百藏を相續し文化元年二世助真に中村傳九郎小町姫に岩井喜代太郎後に四代目八百藏の事なり九郎小町姫に岩井喜代太郎後に四代目八百二年松本米三同座にて伊勢古市芝居を勤む夫より京北川芝居へ上り諸轉の勘平と切に小町櫻を出し直ぐに江戸へ歸る文化元子年春市村座にて四紅葉想戀深川に相撲取白藤源太役參者おしゆんに松本米三兩人とも古今の出來にて一代の大手柄なり文政二巳年大阪若太夫芝居へ上り座頭を勤む信仰記の大膳を勤めたれ共上方の人氣にはまらず直に江戸へ歸る當用なる人にて自分悴の用ふる衣裳は皆自分が仕上藥付の縫まで我が手に致せしと云ふ天保四年歿す年五十三（俳優世々の接木）

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（六代目）家名を瀧野屋と稱す元大阪出生にて中山金藏と云ひ中山久吉の弟子なり寛政七卯年より子供にて初て出其後榊山門に入り榊山金藏と改め又四郎三郎と云て京大阪宮地芝居にて修行し文政三辰年江戸へ下り中山栢藏といふ七代目白猿弟子と爲り市川雷藏と改め同七申年市村座にて二代目男女藏を相續して同九戌年大阪流後芝居へ上り夫より永く濱芝居を勤居たりしが又江戸へ下りて死す（俳優世々の接木）

イチカハ　ヤホザウ　市川男女藏（三代目）初の名は市川團吉後五代目八百藏の名を嗣ぎ又關三十郎と改む安政中歿す

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（四代目）俳名を中軍と稱す實は江戸振付藤間勘十郎の倅にて初岩井喜代太郎といふ六代目半四郎門人なり文化四卯年大阪中の座へ上り始終大里冠と一座して扨もよい男じやと評判よく同巳年より暫く濱芝居へ出て忠臣蔵にて勘平定九郎となせ彦山のおその藤屋伊左衛門其外色々江戸狂言の玉屋新兵衛糸屋佐七抔にては評判よく其後江戸へ歸る弘化二年七月三日歿す年七十三

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（五代目）初の名は市川團吉後五代目八百藏の名を嗣ぎ又關三十郎と改む安政中歿す

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（六代目）五代目の男幼名關花助後市川八百藏と改む又父の名跡を襲ひ關三十郎と改む

イチカハ　ヤホザウ　市川八百藏（七代目）尾州の俳優なり六世八百藏の名を嗣ぐ

イチカハ　ランダイ　市川蘭臺　書家なり名は鏘、蘭臺は其の號、寛齋の父なり上野甘樂郡の人

イチカハ　リシヨウ　市川鯉昇　本名岡本母は宮染、嘉永六年八月江戸八丁堀に生る父は陝洲糧器馬小染と稱し各席亭へ出演す明治十二年始めて女優となり市川升猿と稱し四谷榎夢に出演す市川宗右門弟子と改め三崎座九女八の一座に加はり又京阪地方を巡業す二十七年六月歸京三崎座の座頭となり越後郷吉を出して大入を占め二十八年四月市川權十郎の門に入り鯉昇と改め技藝益々上達し三崎座の座附となり三十八年六月三崎座興行にて妹背山の久我之助入鹿を演じ二番目狂言に俠客頼朝喜三郎に入り鯉昇と改め三十三年四月市川團十郎の門に入り鯉昇と改め技藝益々上達し三崎座の座附となり三十八年六月三崎座興行にて妹背山の久我之助入鹿を演じ二番目狂言に俠客頼朝喜三郎を出演せしに忽ち急病を以て死す年五十四

イチカハ　ヤホザウ　市川男女藏（初代）白猿門弟にして家名瀧野屋と云ひ俳名新車又は海丸實は二代目門之介の倅にて幼年辨之介といふて道と立身して寛政九巳年桐座夏芝居不座にて講釋の由其之介重太郎の二役切に積戀雪關羅暮最勒なり關兵衛役か勤宗真に中村傳九郎小町姫に岩井喜代太郎後に四代目八百藏の事なり九郎小町姫に岩井喜代太郎後に四代目八百二年松本米三同座にて伊勢古市芝居を勤む夫より京北川芝居へ上り諸轉の勘平と切に小町櫻を出し直ぐに江戸へ歸る文化元子年春市村座にて四紅葉想戀深川に相撲取白藤源太役參者おしゆんに松本米三兩人とも古今の出來にて一代の大手柄なり文政二巳年大阪若太夫芝居へ上り座頭を勤む信仰記の大膳を勤めたれ共上方の人氣にはまらず直に江戸へ歸る當用なる人にて自分悴の用ふる衣裳は皆自分が仕上藥付の縫まで我が手に致せしと云ふ天保四年歿す年五十三（俳優世々の接木）

イチカハ　ヤホザウ　市川男女藏（二代目）家名を瀧野屋と稱す元大阪出生にて中山金藏と云ひ中山久吉の弟子なり寛政七卯年より子供にて初て出其後榊山門に入り榊山金藏と改め又四郎三郎と云て京大阪宮地芝居にて修行し文政三辰年江戸へ下り中山栢藏といふ七代目白猿弟子と爲り市川雷藏と改め同七申年市村座にて二代目男女藏を相續して同九戌年大阪流後芝居へ上り夫より永く濱芝居を勤居たりしが又江戸へ下りて死す（俳優世々の接木）

イチカハ　ヤホザウ　市川男女藏（三

あり功四級命蹤勳章を授けらる二十八年十月砲兵大佐に進む　十二年四月陸軍少將に任ぜらる三十六年由良要塞司令官に補せらる三十八年十月十五日病を以て逝く（病革に及び特旨を以て位一級を進め正四位に叙せらる

イヂチ　スエトシ　伊地知季利　薩鹿兒島藩士にして明治十年西南役第三旅團附と爲りて從軍中三月十四日肥後國玉名郡二保に於て戰死す

イヂチ　テイケイ　伊地知貞馨　國學者なり通稱壯之丞但庵と號す維新の際拙小太郎と變名して國事に奔走す鹿兒島藩少參事となり後修史館に出仕し明治廿年四月十五日歿す

イヂチ　マサハル　伊地知正治　宮中顧問官たり明治十九年五月初旬より腦神經病に罹り同廿三日歿す明治元年二月東山道先鋒總督參謀となる同十月三十日春來久々の軍旅籌策其機宜に中り速に東北平定の功を奏し今般凱旋せしにより取あへず御太刀料金三百兩を賜はる同二年六月東北平定の賞として永世祿千石を賜はる同四年十月中議官同五年二月大議官同七年四月議長に任じ同八年六月一等侍講に任じまた修史局副總裁同十年修史館總裁を命ぜられ同十二年四月宮內省御用掛を仰付られ一等官を以て年俸四千圓を賜ふ同十四年七月勳一等に叙し同十七年七月特旨を以て華族に列ぜられ勳功に依て伯爵を授けらる同十九年宮中顧問官に任ず五月廿三日特旨を以て正三位に叙せらる此日遂に薨す

イチヂヤウ　壹定　高僧なり本姓詳ならず少にして聖寶僧正に從て密教を傳習し兼て三論を受く後殷若寺の觀寶を嗣ぎ東大寺の唐院に住して專ら顯密を弘む天慶七年秋七月醍醐寺の座主に補せらる時に眞禁僧都維摩會の講師に當り病に罹りて俄に寂す仍て定を推して之に代らしむ博辯梁を驚せり八年正月禁中御修法に奉舞僧都に代りて行ばしむ已講の人にして未だ僧綱に歴ずして內道場に入るは定を以て初例となす是歲權律師に任じ天暦元年二月九日寂す年六十三（水朝高僧傳）

イチヂデウ　アキヨシ　一條昭良　後陽成帝の第九子なり母は中和院　慶長十年四月生る九宮と稱す關白一條內基嗣なし十四年正月入りて嗣となる十二月正五位下に叙し元服す禁色昇殿を聽さる時に兼遐と名づく右近衛少將權中納言內大臣を經て關白氏名の長者內覽となる牛車に乘りて宮中に出入するを聽され翌月更に攝政す九年左大臣を辭す十一月攝政を辭し十二月更に改む正保四年復た攝政し更に關白となる辭す明年薙髮して東觀と法名す寛文十二年二慶安四年薨す年六十八知德院と號す東福寺に葬む（野史）

イチヂデウ　ウチツグ　一條內嗣　經通の長子なり蛙藤原氏、北朝に仕へ叙爵せられて權大納言に累進す正平十二年南朝に赴きて後村上天皇に從ふ後光嚴院命じて其の官爵を削る（野史）

イチヂデウ　ウチマサ　一條內政　土佐國司なり蛙藤原氏、小字を吉房子と曰ふ天正元年兼定の臣長曾我部元親兼定を逐ふ後ち女を以て內政の子なり蛙藤原房基の子にして母は大友義鑑の女なり父の後ち繼ぎ東大寺の唐院に住して久禮田定祐を以て內政の子と曰ふ後ち長曾我部氏に火を縱て自殺す）八年五月內政淀川、北川等と元親を伐つ謀り事露れて二人自殺す內政伊豫邊津に放たれ尋で酷殺せらるゝと云ふ元親久禮田定祐を以て內政の子を保護せしめ稱し亡びて大和に移る

イチヂデウ　カネサダ　一條兼定　從三位侍從右近衛中將藤原房基の子にして母は大友義鑑の女なり父の後ち繼ぎ東大寺の唐院に住して專ら顯密を弘む天慶七年秋七月醍醐寺の座主に補せらる時に眞禁僧都維摩會の講師に當り病に罹りて俄に寂す仍て定を推して之に代らしむ博辯梁を驚せり八年正月禁中御修法に奉舞僧都に代りて行ばしむ已講の人にして未だ僧綱に入るは定を以て初例となす是歲權律師に任じ天暦元年二月九日寂す年六十三（水朝高僧傳）

イチヂデウ　アキヨシ　一條昭良　後陽成帝の第九子なり母は中和院　慶長十年四月生る九宮と稱す關白一條內基嗣なし十四年正月入りて嗣となる十二月正五位下に叙し元服す禁色昇殿を聽さる時に兼遐と名づく右近衛少將權中納言內大臣を經て關白氏名の長者內覽となる牛車に乘りて宮中に出入するを聽され翌月更に攝政す九年左大臣を辭す十一月攝政を辭し十二月更に改む正保四年復た攝政し更に關白となる辭す明年薙髮して東觀と法名す寛文十二年二慶安四年薨す年六十八知德院と號す東福寺に葬む（野史）

イチヂデウ　ウチツグ　一條內嗣　經通の長子なり蛙藤原氏、北朝に仕へ叙爵せられて權大納言に累進す正平十二年南朝に赴きて後村上天皇に從ふ後光嚴院命じて其の官爵を削る（野史）

イチヂデウ　ウチマサ　一條內政　土佐國司なり蛙藤原氏、小字を吉房子と曰ふ天正元年兼定の臣長曾我部元親兼定を逐ふ後ち女を以て內政の子を保護せしめ稱し亡びて大和に移る

イチヂデウ　カネサダ　一條兼定　從三位侍從右近衛中將藤原房基の子にして母は大友義鑑の女なり父の後ち繼ぎ東大寺の唐院に住して專ら顯密を弘む天慶七年秋七月醍醐寺の座主に補せらる時に眞禁僧都維摩會の講師に當り病に罹りて俄に寂す仍て定を推して之に代らしむ博辯梁を驚せり八年正月禁中御修法に奉舞僧都に代りて行ばしむ已講の人にして未だ僧綱に入るは定を以て初例となす是歲權律師に任じ天暦元年二月九日寂す年六十三（水朝高僧傳）

イチヂデウ　カネフユ　一條兼冬「フヂハラカネフユ」

イチヂデウ　カネヨシ　一條兼良　左大臣從一位關白經嗣の第二子なり蛙藤原氏、兄經輔病を以て陞り中將に轉じ權中納言に進む兼定德非く才拙く且放縱荒政にして戚臣を斥け民庶を暴亂し部下を制する能はず部下の士長曾我部元親兼定の威を藉りて郡邑を蠶食し兵武頗る張る永祿の季年に方り部下の士安岐元種と云へるもの拵兵を兼定に請て元親を攻めしが却て元親の爲めに破られ遂に退て安岐城に嬰りて自殺す是時に當りて元親は東五郡を領し兼定唯き幡多、高岡の二郡を有するのみ是に於て吉良親貞、佐竹信虎守等相謀りて元親に歸し其利益を盛にして兼定の威權日に減じ臣庶月に離散す天正元年國人菅讓し稻吉新藏人を遣はし元親に請ひて曰く君若し兼定を逐ひ幼君を立て、主と爲さば國人の幸是れより大なるなからんかと元親大に悅び乃ち廢立を謀りなり衆に諮て曰く我祖は一條殿の爲に家業を復せしものなり故に敬重せざる可らず我の安岐津野と戰ふや兼定竊に兵を出だして之を援く我れ憾なしと爲さず然れども之れに報いざるは祖君の德を思ふのみ然るに兼定今因墓にして益々民を苦しむ願くば衆と興に其の子を立て、之を奉戴せんと是に於て衆皆な默書を送る既にして族人兼定の子吉房子を擁して幡多を逃げ潛かに浦戸に走る時に吉房子歲甫めて十歲なり月兼定薙髮して外戚の親に依り豐後に奔り白杵に至りて大友義統に因る大友氏近年島津、毛利と戰を構へて勝敗未だ決せず因りて其の或は敵の間諜ならんを恐れて納れず（四國軍記に曰く大友宗讃爲に假館を築きて之を置き尋で人を土佐に遣はし夫人氏を迎へて俱に居らしむと）兼定漂蕩して伊豫の御坐郡に至るに及び從兵稍々來り屬す遂に土州に入りて元親の子城三を拔き伊豫の戶島に屯す時に播磨守則延善く之を遇す西御坐郡の國人亦た竊かに兼定の舊國なる議し船艦を艤して將に歸せんとす會ゝ元親の兵來たり侵し火を津浦に放つ國人梁木盛を構へて之を拒ぐ吉良親貞と云へるもの來り攻めて之を陷る六江兵庫太夫（四國軍記に入江左近に作る）終に兼定を殺す兼定時に歲三十一子あり政內政と曰ふ（野史）

イチヂデウ　カネフユ　一條兼冬「フヂハラカネフユ」

イチヂデウ　カネヨシ　一條兼良　左大臣從一位關白經嗣の第二子なり蛙藤原氏、兄經輔病を以て

癩髮するに及び兼良代て父の後を繼ぎ叙爵せられて左大臣從一位に累遷す永享四年攝政と爲り月を經て辭す文安三年正月大政大臣に拜せられ四年六月關白氏長者と爲る初め二條持基の關白たるや兼良及び左大臣近衛房嗣等皆な其の職を得んとを望む而して持基薨するに及び房嗣之に代る兼良怒り禁ずる能はず爲に屢〻將軍足利義勝の母勝智藤夫人に款きて之を請ひ終に房嗣をして其の職を辭せしめ自ら之に代る享德二年兼良職を解く詔して三宮に准し食邑三千戶隨身兵仗及年官年爵を賜ふ長祿二年之を辭し應仁元年復た關白に補せらる二年八月京師細川勝元と山名持豐の爭あり避けて九條に寓居す其の戰鬪の盛んなるに及びて又九條を去て南都に到り曾房に寓居して時の靜寧に至るを待つ兼良初め聊歌を編して良基の菟玖波集に纂き以て勅撰に擬せんと欲し二十卷を纂輯し名けて新玉集と曰ふ未だ奏覽を經ずして兵革に遇ひ亦た隻字を遺さず因りて南京に在て詳かに其の事を叙し名けて筆占と曰ふ文明二年七月關白を辭す四年美濃に遊びて藤河記を作り五年六月髮を削りて法名を覺惠と號す十三年四月薨す時に歲八十誼して後成愚寺と號す兼良博學多聞にして最も朝典に熟し和歌を善くす又神道に通じ佛書に涉る當時推して以て才學絕倫と爲す其著す所新玉集、筆占の外公事根元、文明一統記、樵談治要、東齋隨筆、桃華藝葉、除宮雜例、花鳥餘情、代始私抄、年立源語秘訣、歌林良材、連珠合璧、雙井卷、小夜寢覺等あり兼良初め桃華坊に居りて自ら桃華老人或は桃華野人と稱し又た三關老人と云ふ自ら謂ふ我れ管丞相に勝れるもの三あり曰く攝家たり曰く太政大臣たり曰く延喜以後の事を諳ずと人あり嘗て兼良を招きて床頭に管公の像を掛く兼良悅ばずして曰く奚ぞ彼れを我が席上に置くやと兼良又嘗て二階堂政行の問に應じ其の言を錄し二列問答と曰ふ九子あり敎房、冬良、敎賢、尋尊、敎實、良鎭、桓澄、惠助、政尊と云ふ冬良家を嗣ぐ（野史）

イチヂデウ　クワンパク　一條關白「フヂハラサネツネ」

イチヂデウ　コレタダ　一條伊尹「フヂハラコレタダ」

イチヂデウ　サネツネ　一條實經「フヂハラサネツネ」　ジュンコ

イチヂデウ　一條順子　一條忠香公の室松壽院と稱す父は伏見宮邦家親王母は顯景院景子文政十年二月四日京都河原町の伏見宮邸に生る幼名納言近衛大將正二位一條忠香に入輿を順子と改む嘗て和歌會結の道に長ぜり忠香公の歿後幕末紛擾の際は實良公を助けて忠勤を勵みたり明治元年息女美子の方御入內に決し翌二年皇后宣下ありてより烏丸今出川上る の邸に住せしが二十三年に至りて上京せられたり四十一年一月病危篤の報天聽に達するや痛く震憂を惱まされ破格を以て勳二等に叙し寶冠章を授けられたり同月二十五日赤坂の本邸に於て逝去す年八十二

イチヂデウ　ジラウ　一條次郎「タケダダタ」

イチヂデウ　セツシャウ　一條攝政「フヂハラコレタダ」

イチヂデウ　ゼンカウ　一條禪閤「イチヂデウカネヨシ」

イチヂデウ　タダヨリ　一條忠賴「タケダダタヨリ」

イチヂデウ　ツネスケ　一條經輔　左大臣從一位關白經嗣の長子なり蛙藤原氏、本の名を良忠と曰ふ叙爵せられて權大納言に任ぜられ後ち病を以て薙髮す（野史）

イチヂデウ　ツネツグ　一條經嗣　關白良基の子なり蛙藤原氏、權大納言房經薨して嗣なし經嗣初め正五位下に叙し元服を加へて禁色を聽され左大臣從一位に累遷し關白に補せられ後ち三宮に准す應永二十五年十一月薨す時に歲六十一謚し て成恩寺と號す經嗣和漢の學に富み頗る世の尊崇を受け七子あり經輔、兼良、詁藏、良什、良濟、義玄、一慶と曰ふ兼良嗣ぎ餘皆僧と爲る（野史）

イチヂデウ　テンワウ　一條天皇　第六十七代の帝なり名は懷仁、圓融帝の太子、母は東三條院詮子と曰ふ位に在ること二十五年改元するもの六、病を以て太子居貞に讓り一條院に崩ず壽三十二火葬して骨を圓城寺に葬る（大日本史）

イチヂデウ　サダイジン　一條左大臣「ミナモトアサノブ」

イチヂデウ　ダイジャウダイジン　一條太政大臣「フヂハラサネイヘ」

イチヂデウ　ダイジャウダイジン　一條太政大臣「フヂハラキムツネ」

イチヂデウノキミ　一條君　清和帝の皇孫三品貞平親王の女なり京極御息所に仕ふ其歌後撰集及拾遺集に入れり

イチヂウ　ノリフサ　一條敎房　太政大臣兼良の長子なり蛙藤原氏、左大臣に累進し長祿二年關白を爲る尋で從一位に陞る後ち左大臣を辭す寛正四年關白を辭して計されず一座宣大外記中原師藤經奏して實量の次に列せしむ後父兼良執奏して實量の座に進めしむ應仁二年九月敎房亂を土佐に避け（足利家譜に兵庫に住すに作る）文明十二年十月土佐畑に於て薨す時に歲五十八、謚して妙華寺と號す二子あり政房、房家と云ふ（野史）

イチヂデウ　フサイヘ　一條房家　左大臣敎房の第二子なり蛙藤原氏、文明元年父に從て亂（細川勝元と山名持豐との爭）を兵庫に避け遂ひに土佐に徙る是時に當りて守護細川氏漸く衰へて國郡亦た靖からず房家遷りて中村の故墨に居り衆推して之を御所と稱す後ち房家將軍足利義政に遷りて國司に補せられ中村城を修築し邑一萬七千貫を領す是に於て國人多く來服す房家に七大夫五屬あり以て政を輔け城內輜穩す其の所謂七大夫とは長曾我部、本山、吉良、大平、香宗我部（秦山集、四國軍記並に山田に作る）安岐、津野の七氏にして五屬とは東小路、西小路、入江、飛鳥井、白川の五氏なり其の餘士臣五十一人、土豪四十五家あり相屬して畑を治む是を土佐一條の祖とす明應三年二月房家正五位下に叙し永正三年六月左近衛中將に任ぜられ十一月從四位下に進む七年從三位に陞り權大納言に任じ正二位に至る天文八年十一月薨す歲六十五、謚して藤林寺と號す嘗て長曾我部元秀政を擅にするや六族相謀りて元秀を殺す元秀に孤あり國親と曰ふ房家憐みて之れを收め其の故邑を復し六族と相和せしむ房家二

子あり房冬、房兎、房冬家を繼ぎ房通宗家一條冬良の爲めに養はる（野史）

イチデウ フサフユ 一條房冬　正二位權大納言房家の第一子なり姓藤原氏、父の後を嗣ぎ土佐國司たり永正七年十二月從五位上に叙し侍從に任ぜられ權中納言、左近衛大將從二位に累進す天文十年を以て薨す時に歳四十四、謚して圓明院と號す子あり房基と曰ふ（野史）

イチデウ フサミチ 一條房通　姓藤原氏、房家の子にして太政大臣從一位關白氏長者冬良の爲に養はれて子と爲り叙爵せられて左大臣關白准三宮に至り累世攝班に列すと云ふ（野史）

イチデウ フサモト 一條房基　正二位權中納言左近衛大將房冬の子なり姓藤原氏、父に繼て土佐國司たり享祿三年九月從五位下に叙し五年侍從右近衛中將に任ぜられ從三位に陞り阿波權守を兼ね後ち天文十八年四月自殺す時に歳二十八謚して前光壽寺と號す子無定嗣く（野史）

イチデウ フユヨシ 一條冬良　太政大臣兼良の第二子也姓藤原氏、父の後を繼ぎ叙爵せられて太政大臣從一位關白氏長者に累進す永正十一年薨す歳五十一、謚して後妙華寺と號す冬良文才あり增鏡、新蒐玖波集、世諺問答を著はす冬良子なし姪房家の子房通を養ふて後と爲すと云ふ（野史）

イチデウ マサフサ 一條政房　左大臣教房の長子也姓藤原氏、叙爵せられて權大納言從二位に累進す文明元年十月兵亂の爲に害せらる嘗て政房亂（細川勝元と山名持豐との戰）を避けて攝津兵庫に在るや山名氏の軍兵郡邑を侵掠し來りて兵庫に及ぶ時に政房直衣を着して端坐す兵士其の貴人なるを知り敢て犯さず會〻一士あり粗暴敢て憚るなく突進槍を以て之れを刺す政房毫も動ぜずして瞑すと云ふ祖父兼良南京に在りて訃を聞き慟哭す（野史）

イチデウ ユキフサ 一條行房「フヂハラユキフサ」

イチデウ ロクラウ 一條六郎　武田氏の一族にして武勇を以て名あり川中島の戰に鬼小島彌太郎と決戰して遂に敗死せり（本朝武功正傳）

イチデウキンノミヤ 一條院宮「ゲンエンホウシンワウ」

イチ ニサン 市二三　江戸の小說家なり文化時代の人高麗井醉放逸人等の別號あり國丸國滿紅翠齋等の畫を附して草雙紙を著作す（小說家著述目錄）

イチニンサイ 一忍齋「オホヨドミチカゼ」

イチノウケン 一囊軒「ヤスハラテイシツ」

オヘヤ 一之御部屋　德川家宣の側室にして右近の方と稱す家千代の母太田宗庵の女なり明和三年六月逝去東叡山に葬る謚して法心院と云ふ

イチノノジョウ シゲミツ 市允茂光　高倉天皇の頃の人能く筆築を吹き譽を時に擧ぐ朝廷其藝を聞き詔して徵せども起たず茂光嘗て旅行して海濱を過ぐ適〻海賊に値ふ茂光廻り避くるに由なし庶幾はくは幸に免るゝことを乃ち賊に謂つて曰く我平素音律を嗜む願くば一曲を吹くを待て後我を殺せと賊之を頷づく乃ち筆築を出し小調子を吹く音聲悲悽腸を斷つ賊聞て甚だ感歎覓に之を許して去らしむと云ふ（築華紀求）

イチノセ シャウスケ 一瀨正助　佐賀藩の學者にして肥前武雄の人なり安永天明の頃藩侯弘道館の學職に補せらる所著四書小學近思錄等の講義あり（村）

イチハン 一瀨正藩　陸軍歩兵大尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ獨立第五十九聯隊附として出征中讨八年七月十七日清國盛京省永陵にて病氣に罹り九月四日同所兵站病院に於て死去す

イチノコク トモノスケ 市野東谷　江戸の儒者なり名は光業字は子嘩三右衛門と稱す元商家なり富巨萬あり神田伏見町に住し藏書三萬卷あり大宰春臺の門人寶暦十年十一月年三十五にして歿す（諸家著述目錄、名人忌辰錄、江戸名家墓所一覽）

イチノ トモノスケ 市野知之助　陸軍砲兵大尉なり京都府出身にして明治三十七年日露戰役起るや第四師團司令部附として出征し同年八月三十一日清國盛京省大趙家臺に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イチノミヤ ウメフ 一宮梅生　陸軍少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや第二師團歩兵第三十四聯隊附として出征し八月三十一日清國遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イチノミヤ サダイフ 一宮左大夫　一宮流拔刀術の祖なり名は熙信武田家の麾下土屋惣藏の臣となり戰功多し初め長野無樂齋に從て拔刀流を學び阪力士なり本名は高橋乙吉、攝津國豐能郡庄内村の農にして年二十猪名川の門に入り琴ノ浦の薩陶によりて技倆著〻上進し明治三十年四方關脇となり三十一年西技倆著〻上進し明治三十年四方關脇となり三十一年西方大關となり三十三年張出し大關に据り三十六年名古屋の東京大阪合併相撲に於て梅ヶ谷朝汐大砲の三大敵を破りて名聲大に揚れり其後相撲協會の重役等と議協はず斯界を退くに至りしが協會は特に其功勞を賞し一代頭取となしたるも爾來敢て相撲場に入らず松島高砂町に貸座敷業を營みしが三十九年六月十一日病を以て歿す年三十九近代の相撲巧者として硬漢の稱ありし嘗阿波國撫養にて土地の人氣力士春日山と取組となりしが春日山は人氣盛にて或る人縁かに一の濱に賂ふて八百長的相撲を取組んことを懇請したるも一ノ濱は斷乎として之を斥て土俵に立ちしに人氣意外に激昂し自ら勝を制せず危害身に及ぶべきの恐れありしも力士の本分を盡して跳ゝ悔ゆる所にあらず之決心し必勝を期して一番勝負にて美事剛敵を破りしかど今迄湧返りし觀客は忽ち沈靜し其半數は頓て退場するに至れり一ノ濱は必らず異變あらんことを豫期せしが終に其事なかりき春日山は一ノ濱の氣慨に感じて即夜其門弟たらんことを請ふに至りと云ふ

イチノヘ サンノスケ 一戸三之助　名は宗明三之助と稱す津藩の人なり父を儀右衛門宗普といふ八歳にして高橋正益の門に入り讀書筆術を學び十一歳添田儀左衛門貞俊の門に入り柔術を練習す爾來武藝に身を委ぬること數年其の名漸く世に知られたり特に弓術に秀でたり明珍鍛の腹卷を射貫き或は陶製の皿を貫通する等その妙技絶倫にして遠近に稱讃せらる寶暦三年十月九日年七十三にして歿す弘前法立寺に葬る

イチノミヤ ナリスダ 一宮成助　長門守成永の子にして阿波國名東郡の人なり其家世〻同國一の宮の宮司たり因て大宮司と稱す成助三好元長の女婿となる天正三年三月三好長治の其主細川眞之を襲うて高崎に退くや成助之を討つ長治奔りて今切城に入る成助進みて之を圍む長治遁れて別宮浦に死す五年九月篠原自遁兵を率ゐて至る成助之に勝つ自遁授を紀伊に乞ひて成助を圍む成助勝たずして遂に長曾我部元親の爲めに謀殺せらる（阿波志）

イチノ メイアン 市野迷菴　名は光彦籌窓と號す晩に迷庵と改たむ俊卿は其字、六世の祖重光勢州白子邑より來りて賈廚を江戸神田に開く其四世の孫業字は士曄實にして學を好む子光紀春川氏を娶りて俊卿を生む俊卿幼にして崖異祖父の遺書を讀みて發憤し業を黒澤迂仲に受け日夜淬厲して經藝を講貫す迂仲甚はだ之を賢なりとす林述齋時に岩村公子の爲めに諸名士を延て詩及び古文を修む俊卿市人を以て常に賓位に居り平澤旭山市河寛齋の諸老と雖ども又た皆な齒德を忘れて之と親交す是に於て俊卿の名一時に稱甚し後進爭ひて其の門に趣く年三十餘に交游を謝して曰く君子の學は唯〻以て己の爲めにし商人の道は餘力を守るに小山の行藏に從ふ後命を受け福島正則等と四上して城に據り部下六百を督して固く守備す三戰の驚高木守光多醫に屯じ丸毛親吉福羅に伊藤彦兵衛大垣に互に相謀し今尾を距る里許大久礎に陣す長勝兵を率ゐて賀地に輝し水を隔てゝ矢戰す二十四日黎明河を渡りて急に旌陣を奬ふ視吉筆福線に敗死す長勝進み攻めて之を追ふ敵大垣に奔る長勝福羅に據る長勝福羅に及びて桑名大垣の繼道を斷ち或は大垣の外郭を襲ふて皮兵十七人を馬野瀨に殺たり又家人を遣し敵の急遽を捕へて謀狀を得之を正則に送る關原軍終りて一萬石を加賜せらる十三年封を伯耆の矢橋城に轉じ邑三萬千三百石を食む大阪冬の役家康に大阪に從ふ十一月吹田川を渉り進みて天滿に抵る翌て人をして天滿川の深淺を探らしめ樣を城際に建つ夏の軍起るや采邑星田に陣して近里を焼き陣營を構ふ五月家康星田に到り次日之を發す此の時長勝命を受けて星田を戍る又兵を率て摩下に賜す元和二年夏遺命して大阪の功を褒し二萬石を加賜す居を越後三條城に移す六年三月卒す年六十四長勝一女ありて男なし嘗て幕府に請ふて女婿長吉をして嗣たらしむ未だ果さずして卒す族臣皆長勝の姪長政を立てゝ嗣となさんと欲し之を愬ふ命じて其の邑を割り殊に近江河内の田二萬石を長政に賜ふ（野史）

イチハシ ナガマサ 市橋長政　長勝の姪婿林右衛門の子也初字は左京慶長三年德川秀忠に仕へて大阪の役に功あり下總香取海上二郡の内千石を賜ふ明年二千石を加賜す長勝卒して其後を繼ぎ近江河内の田二萬石を賜はり近江仁正寺に居る從五位下に叙せられ伊豆守と稱し下總守と改む子孫相襲て侯たり（野史）

イチバ ツウセウ 市場通笑　江戸の小說家なり名は鄕一、字は子彦一の字は道夢俳號を橘塵と曰ふ通稱は小倉屋小平治經師を業とし油町に住し一生娶らず市中の仙と稱せらる著はす所は小說教訓を主とす故に世人綽號して教訓の通笑と曰ふ文化九年八月廿七日歿す年七十四（讀志日本戲作者小傳）

イチバ ヘイザエモン 一場平左衛門　小笠原流射禮の名家なり、名は正長長野業親に從て上泉秀胤の兵法射術を學ぶ寛文七年正月十一日江戸に歿位下に叙せらる下總守と稱す慶長庚子の亂に德川家康に從て大阪の役に從ふ後命を受け福島正則等と四上して城に據り部下六百を督して固く守備す三戰の驚高木守光多醫に屯じ丸毛親吉福羅に伊藤彦兵衛大垣に互に相謀し今尾を距る里許大久礎に陣す長勝兵を率ゐて賀地に輝し水を隔てゝ矢戰す二十四日黎明河を渡りて急に旌陣を奬ふ視吉筆福線に敗死す長勝進み攻めて之を追ふ敵大垣に奔る長勝福羅に據る長勝福羅に及びて桑名大垣の繼道を斷ち或は大垣の外郭を襲ふて皮兵十七人を馬野瀨に殺たり又家人を遣し敵の急遽を捕へて謀狀を得之を正則に送る關原軍終りて一萬石を加賜せらる十三年封を伯耆の矢橋城に轉じ邑三萬千三百石を食む大阪冬の役家康に大阪に從ふ十一月吹田川を渉り進みて天滿に抵る翌て人をして天滿川の深淺を探らしめ樣を城際に建つ夏の軍起るや采邑星田に陣して近里を焼き陣營を構ふ五月家康星田に到り次日之を發す此の時長勝命を受けて星田を戍る又兵を率て摩下に賜す元和二年夏遺命して大阪の功を褒し二萬石を加賜す居を越後三條城に移す六年三月卒す年六十四長勝一女ありて男なし嘗て幕府に請ふて女婿長吉をして嗣たらしむ未だ果さずして卒す族臣皆長勝の姪長政を立てゝ嗣となさんと欲し之を愬ふ命じて其の邑を割り殊に近江河内の田二萬石を長政に賜ふ（野史）

イチハシ ナガカツ 市橋長勝　美濃池田郡市橋莊の人なり姓は藤原氏、父長利壹岐守と稱す右府信長及關白秀吉に屬し初め若城の城に居り後ち福塚の城に移る長勝初の字は九郎左衛門、信長に仕へ後桑名に移り一萬石を食み從五

後一家を成す天正中の人（武衛流祖錄、谷派劍術記）

イチノミヤ ズキハサイ 一宮隨巴齋　小笠原流射禮の名家なり名は宗巴、初め足利義輝に仕へ後ち今川氏眞に仕ふ（本朝武藝小傳）

イチノミヤ 一宮　伯耆の刀匠なり一宮法師長江日乘を看よ

イチノミヤ ナガツネ 一宮長常　金工なり俗稱詳ならず雪山と號す又含章子と號す越前の人にして京師に來り鍍金師柏屋忠八の弟子となりし性靈を嗜み自善く靈く後金工保井高長の門に入り彫刻を學び蟷牛蛙土蜂などの寫生をなし漸次に龍或は獅子人物など彫り出し細妙と稱せらる嘗て禁中衛立の金具を調進し越前大掾を受領しこれより越前大掾源長常と銘せり天明六月二月歿す（裝劍奇賞、一宮長常傳）

イチノミヤ ナガヨシ 一宮長義　裝劍彫工なり長常の子京師の人後ち大阪に移住す其の妙技を得て父と並に名家を以て稱せらる（裝劍奇賞）

イチノミヤ ナリスダ 一宮成助　長門守成永の子にして阿波國名東郡の人なり其家世〻同國一の宮の宮司たり因て大宮司と稱す成助三好元長の女婿となる天正三年三月三好長治の其主細川眞之を襲うて高崎に退くや成助之を討つ長治奔りて今切城に入る成助進みて之を圍む長治遁れて別宮浦に死す五年九月篠原自遁兵を率ゐて至る成助之に勝つ自遁授を紀伊に乞ひて成助を圍む成助勝たずして遂に長曾我部元親の爲めに謀殺せらる（阿波志）

イチノ メイアン 市野迷菴　名は光彦籌窓と號す晩に迷庵と改たむ俊卿は其字、六世の祖重光勢州白子邑より來りて賈廚を江戸神田に開く其四世の孫業字は士曄實にして學を好む子光紀春川氏を娶りて俊卿を生む俊卿幼にして崖異祖父の遺書を讀みて發憤し業を黒澤迂仲に受け日夜淬厲して經藝を講貫す迂仲甚はだ之を賢なりとす林述齋時に岩村公子の爲めに諸名士を延て詩及び古文を修む俊卿市人を以て常に賓位に居り平澤旭山市河寛齋の諸老と雖ども又た皆な齒德を忘れて之と親交す是に於て俊卿の名一時に稱甚し後進爭ひて其の門に趣く年三十餘に交游を謝して曰く君子の學は唯〻以て己の爲めにし商人の道は餘力を守るに小山の行藏に從ふ後命を受け福島正則等と四上して城に據り部下六百を督して固く守備す三戰の驚高木守光多醫に屯じ丸毛親吉福羅に伊藤彦兵衛大垣に互に相謀し今尾を距る里許大久礎に陣す長勝兵を率ゐて賀地に輝し水を隔てゝ矢戰す二十四日黎明河を渡りて急に旌陣を奬ふ視吉筆福線に敗死す長勝進み攻めて之を追ふ敵大垣に奔る長勝福羅に據る長勝福羅に及びて桑名大垣の繼道を斷ち或は大垣の外郭を襲ふて皮兵十七人を馬野瀨に殺たり又家人を遣し敵の急遽を捕へて謀狀を得之を正則に送る關原軍終りて一萬石を加賜せらる十三年封を伯耆の矢橋城に轉じ邑三萬千三百石を食む大阪冬の役家康に大阪に從ふ十一月吹田川を渉り進みて天滿に抵る翌て人をして天滿川の深淺を探らしめ樣を城際に建つ夏の軍起るや采邑星田に陣して近里を焼き陣營を構ふ五月家康星田に到り次日之を發す此の時長勝命を受けて星田を戍る又兵を率て摩下に賜す元和二年夏遺命して大阪の功を褒し二萬石を加賜す居を越後三條城に移す六年三月卒す年六十四長勝一女ありて男なし嘗て幕府に請ふて女婿長吉をして嗣たらしむ未だ果さずして卒す族臣皆長勝の姪長政を立てゝ嗣となさんと欲し之を愬ふ命じて其の邑を割り殊に近江河内の田二萬石を長政に賜ふ（野史）

イチハシ ナガマサ 市橋長政　長勝の姪婿林右衛門の子也初字は左京慶長三年德川秀忠に仕へて大阪の役に功あり下總香取海上二郡の内千石を賜ふ明年二千石を加賜す長勝卒して其後を繼ぎ近江河内の田二萬石を賜はり近江仁正寺に居る從五位下に叙せられ伊豆守と稱し下總守と改む子孫相襲て侯たり（野史）

イチバ ツウセウ 市場通笑　江戸の小說家なり名は鄕一、字は子彦一の字は道夢俳號を橘塵と曰ふ通稱は小倉屋小平治經師を業とし油町に住し一生娶らず市中の仙と稱せらる著はす所は小說教訓を主とす故に世人綽號して教訓の通笑と曰ふ文化九年八月廿七日歿す年七十四（讀志日本戲作者小傳）

イチバ ヘイザエモン 一場平左衛門　小笠原流射禮の名家なり、名は正長長野業親に從て上泉秀胤の兵法射術を學ぶ寛文七年正月十一日江戸に歿

す

イチハラ シャウザウ 市原庄藏 陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せされ歩兵第十九聯隊附として出征中卅八年八月十日清國盛京省金家屯にて病に罹り九月廿六日桑林窩棚舍營病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

イチハラ タヨメ 市原多代女 俳人なり陸奥岩瀬郡須賀川驛の人市原元輔の母なり二十一歳にして夫に後れて能く家を修め乙二の門に入て俳譜を善くす久文三年九月歿す年九十三(俳諧名書)

イチハラ ヨシヲ 市原芳雄 陸軍歩兵少尉なり石川縣金澤市の出身にして明治十七年二月一日を以て生る性孝順頴悟十四歳にして名古屋地方幼年學校に入り常に首席を以て特待生たり尋いて陸軍士官學校に入り優等の成績を以て業を卒へ三十七年三月歩兵少尉に任ぜらる此年日露戰役起り第三師團歩兵第三十四聯隊附となりて出征し奥軍に屬して金州半島に上陸す六月十五日瓦窩高舗附近の激戰に於て遂に戰死す年二十一戰功により勳六等功五級に叙せらる

イチビノヤ 櫟屋 佛齋師なり南都の人、佛齋を齋くに妙なり天文の頃僧櫟屋順禪あり嘗し此人を謂ふ乎然れども紹巴の手簡に又櫟屋の事を記するあり然れば一人の名に非ざるが如し(皇國名畫拾遺)

イチベエ 市兵衛 上總市原郡姉崎村の里正次郎兵衛に仕へて皂隷と爲る元祿中次郎兵衛犯罪者を皆げざるを以て伊豆大島に流され且其の田宅皆な官に沒入せらる次郎兵衛の父老て且盲子二人あり女六歳男三歳次郎兵衛既に行く其の妻産に方りて頗る艱やみ女を生て死す市兵衛之を憐に抱き過れく里の乳ある者に呼ひて之に乳す親戚願みず三日裝然として依る所なく兒女は則ち呱々として啼て已まず市兵衛其の妻と之を養ふ所以を謀り己の女を售りて人の婢と爲し其の價銀若干と他人の田を耕し受くる所の者若干とを合して一小廬を買ひ以て次郎兵衛の父と子女とを置きて奉す之に事ふること其主在ますの日の如し四日是に於て飢寒の患なし市兵衛猶は己の妻の或は子を生みて朝夕主家に給し能はざらんとを恐れ遂に與に俱に床蓐を同うせざること十有一年是より先き次郎兵衛罪に就くの日市兵衛東都に抵りて官廳に餅伏し身を以て其の主の罪に代らんことを請ふ姉崎は東都を去ること往還三日程可り而して市兵衛の來請すること月に必ず一二次而して此くの如くすること亦た十有一年寶永乙酉二月市兵衛又た來りて訴ふること初の如し而して自ら晉東に向て請ふ所を得ざれば空しくへらざらんことを矢ふ吏其の由を訊ふ市兵衛答へて曰く次郎兵衛の父茲年八十三而して風疾を患ふること既に三年常に語て曰く願くは一たび次郎兵衛を見ることを得ば則ち死すとも憾なしと且つ三子益々長じて愈々慕ひ日夜悲泣して已まず是れ焉ぞ視るに忍ふべけんや小子無狀告愬して勤めず以て斯の感を貽す故に敢へて官威を冒して愬請す暫らく次郎兵衛の罪を赦るし放還して以て老父と訣るゝことを得せしめば則ち小人擅訴の罪は身首處を殊にするも亦た辭せざる所と官其の誠忠を憐れみて其の請を許るし且つ其の主の舊宅を以て之を市兵衛に賜ふ市兵衛皆て曰く始め是れ主の爲めにして終り己の至る小人義として敢へて命を奉ぜざるなり願はくは之を舊主の子萬五郎に賜へと官亦た之を許る(事實文編、野史)

イチマタ ダムジャウ 一萬田彈正 筑前國御笠郡竈門山の城主左京大夫親敦の長子にして大友氏族の大身なり宗麟無道にして彈正の妻の容貌美なるを見て之を得んと欲し彈正を殺す其弟高橋鑑種怒て大友氏に背き毛利家に通して之と戰ふ大友家是より衰ふ(大友記)

イチマン 一番 **イチマル** 一丸 遠江の鍛工にして元暦年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

イチマロ 一麿 江戸の俳人なり氏は石橋晴朔庵又百路房と號す初め寶諧と稱す鳥得器の門人なり(俳諧人物便覽)

イチミ 一味 **イチムラ ウザエモン** 市村宇左衛門(元祿)泉州堺の俳優にして村山又左衛門の二男、村山又三郎と稱す名古屋山三の門人なり江戸に出て萬治中江戸葺屋町の地に免許を得て大歌舞伎狂言座を建て座元となる寛文四年玉川主膳と二幕の戯狂言を工夫す人呼て大芝居と云ふ(後天保の頃淺草猿若町に移る)貞享三年七月歿す年五十二此人の一生未だ市村氏を稱せずと見ゆ(俳優略傳)

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(二代目)俳優なり上州某郡市村の產村田九郎右衛門に養はれ後養父の名を嗣て宇左衛門と稱す

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(三代目)俳優なり二世の長子、幼名竹之丞初代宇左衛門と稱す

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(四代目)俳優なり二世宇左衛門の次男幼名竹之丞若年にして夫元となる幼より佛を好み妻を書へす自性院の弟子となりて天台を學び家職を姉婿に讓り延寶六年二十五歳の時佐藤兵衛憲清發心して四行法師となるの戯を演し舞納の日剃髮して誠阿と稱し舞臺より寃を負ひ諸國修行に出つ京に上り叡山に入り勤學數年法師權大僧都阿闍梨に拜し安住院に住す後本所五ッ目自性院を再興し常行念佛を修す世に是れを竹之丞寺と云ふ享保三年十月十日六十五歳にして寂す

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(五代目)俳優なり菊居某の子なり四世宇左衛門の姉婿にして四世佛に入るに先ち之を養子とす

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(六代目)俳優なり幼名竹松(七代目)俳優なり傳記不詳

イチムラ ウザエモン 市村宇左衛門(八代目)俳優なり初竹之丞俳名何江と號す當時に名あり寛延元年始て羽左衛門と改む寶暦十二年五月五日歿す年六十六

イチムラ ウザエモン 市村羽左衛門(九代目)俳優なり初め市村龜藏と號し後宗家を相續す當時に名あり狂歌を好み狂名を櫓大夫元櫓と云ふ又家橋と號す天明五年八月廿五日歿す年六十二押上大雲寺に葬る

イチムラ ウザエモン 市村羽左衛門(十代目)俳優なり幼名七十郎

(十一代目)俳優也演劇壇に上らず故に傳詳ならず

イチムラ ウザエモン 市村羽左衛門(十二代目)俳優なり家橘と號す十一代羽左衛門の男後竹之丞と曰ふ名譽あり嘉永四年八月廿日歿す年四十

イチムラ ウザエモン 市村羽左衛門(十三代目)俳優なり十二代羽左衛門の男、幼名九郎右衛門、後ち母族の名跡を相續して五代目尾上菊五郎と改む(畫看)

イチムラ カキツ 市村家橘 (十四代目)「バムドウカキツ」

イチムラ サクマ 市村佐久馬 陸軍歩兵大尉なり佐賀縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び歩兵第十五聯隊附として出征中病に罹り同年十二月二十七日清國盛京省大王庄第一師團第二野戰病院に於て病死す

イチムラ ワカタイフ 市村若太夫 三絃家なり茂兵衛又は善三郎と稱す俳優七代目市村宇左衛門の弟、夙とに淨瑠璃曲を好み樂を蘆瀬式部太夫の門に受く享保元文の間其名最も著る(髯曲類纂)

イチヤアン 一夜庵「ヤマサキソウカン」

イチヤウアン 一陽庵「ハセガハセツタン」

イチヤウサイ 一陽齋「カノエイナフ」

イチヤウサイ 一陽齋 **ウタガハトヨクニ**(初代)

イチヤウサイ クニサダ 一陽齋國貞(二世)「ツノダクニサダ」

イチヤウサイ トヨクニ 一陽齋豐國「トヨクニ」

イチヤマ シチジフラウ 一山七十郎芝居撮付なり瀧川菊之丞に附屬す弘化頃の人三世に至て絶ゆ

イチユウサイ 一雄齋「ウタガハクニサダ」

イチユウサイ 一勇齋「ウタガハクニヨシ」

イチユウバウ 以中坊 武藏浦和の俳人なり氏は松澤通稱松堂屋興三郎旅籠屋を業とす藍花井、竹天仙の號あり玄武坊の門人(俳諧人物便覽)

イチライホウシ 一來法師 三井寺の僧なり治水四年宇治川の役筒井の淨妙の戰疲るゝを見て刀を揮つて橋桁に上り我請ふ君に代らんと淨妙が肩を越えて躍つて敵中に入り縱橫戰鬪して敵兵數十人を殺す(源平盛衰記)

イチラウ 一朗「ナガキイチラウ」

イチリウケン 一柳軒「ヨカムラフボク」

イチリウケン 一柳軒「ヒライハセンザン」

イチリウサイ 一柳齋「ウタガハトヨヒロ」

イチリウサイ トヨハル 一柳齋豐春「ウタガハトヨハル」

イチリウサイ トヨヒロ 一柳齋豐廣「ウタガハトヨヒロ」

イチリウサイ 一麟 一流齋 常陸の刀匠吉光を見よ

イチリン 一麟 高僧なり名は天祥一菴と號す藤原氏右族九條家に生る幼にして顯發東海源公に東山の大中菴に依て童役に服す年十七得度戒を受く南禪建仁の間に遊ひて諸名宿に參す勞文才を以て中立鷄公と双璧の名あり鷄は東海の子にして清燈の孫南禪寺を董鋒世に名あるものなり龍山見公に隨ひ叩問詳切機たず山常に難得子といふ延文二年山、天龍寺に遷る鱗を擧げて綱紀に任ず明年正月天龍寺火あり山、甲夜に北山に退く事倉卒に出て奥夫一人を缺く鱗代て朗昇く其蔦敬此に至る冬十月山の知足塔に歸歛す喪終りて南禪寺の衆に首版たり永和三年薩摩の大願寺に出世し筑前の聖福寺に遷る康應元年洛の萬壽寺より建仁、天龍の諸寺に歷任す應永八年足利義滿鱗に告て曰く序遷此に至る請ふ宗機を活并せよ庶くは傾聽せんと鱗答て曰く願くは一晩年東山護國の塔を守る一時の名衲と悉交遊を訂す凡擅起の敎施は一毫をも私せず用て起廢に充つ應永十四年十二月二日徽恙に因りて化す年七十九、佛祖歷年圖二卷、藏鑒十卷、語錄二卷、龍涯集一卷あり(本朝高僧傳)

イチリャウサイ 一遼齋 **メウサ** 「イヒカハ アキトモ」

イチレンシヤ 一蓮社「テイギヨク」

イチロ 一露「ゼシンケンイチロ」

イチワ 一王 大和の刀匠千手院の一派にして金王の門人承元年間の人なり(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

イチワウ 一王 大和千手院派の刀匠にして建長年間の人なり或は國吉或は永光と稱す或は文保年間の人にして金王の弟子なり或は重弘の二子なり或は承元比の人にして金王の門人なりと云(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

イチヰノ ツボネ 一位局 飛鳥井雅親の女也姓は藤原名は雅子、性嗇を好みて土佐光信の風を學び物語又は人物扇合等を圖す曾て岩屋物語事實を嗇きて其の詞を書す永正年中の人(扶桑畫人傳)

イチエン 一圓 無住と號す名は曉相模鎌倉の人本姓は梶原其先は世〻源將軍に仕ふ曉幼にして父を失ひ常陸の親族に依る年十九州の山寺に投して僧となる此時教門の名德大學は東關に在り曉俱舍を幸圓僧都に法華を法身大德に受く廿七歳の時上野の長樂院に往て藏叟譽公に依る參禪の暇釋論及圓覺を聽く二年を過ぎ關城寺の實道法師に謁して止觀の旨を質す又南都に趣き歷訪して得ること多し菩提山に居ること又五年密教を修むる傍法相の玄旨をも究め當時諸説の場經歷せざるなし聖一國師に謁するに及ぶ其實深に服し弟子の列に就て禪要を受く文永の初尾張の木賀崎に長母寺を創め禪敎兼弘む圓性寫誠にして爾異尤も多し一歳久旱雨らず邑人曉に請て之を祈らしむ三日後雷雨大に至り五穀枯死を免る藤相國其道行を崇び請じて東福寺を董せしむ三請すれども固辭して就かず正和元年十月十日桑名の蓮華寺に寂す年八十七沙石集十卷、聖財集三卷雜談集十卷、小鏡一卷を著はす今皆世に行はる(本朝高僧傳)

イチエンサイ 一圓齋「ウタガハクニマル」

イチヨ イオリ 一尾伊織 茶法を善くせり名は道尙(尙一に高に作る)宗碩と號す又た一庵及ひ徹齋の號あり細川三齋の家老津川四郎左衛門に學べり花筒杓を造りて名あり元祿二年三月十三日歿す年九十一(茶人系傳全集、古今茶人系譜)

イチヨウ 一翁「シユンジウアムイチヨウ」

イチヨウ 一翁「オホクボイチヨウ」

イチヨウ　一翁「シゲサト」
イチヨウサイ　一翁齋「ウタガハクニミツ」
イチヨウソウシュ　一翁宗守「センサウシュ」

イチヨウカ　カイエン　市岡檞園　名は猛彦藤十郎と稱す、尾張の和學者にして餘慶舍の門人なり（諸家著述目錄）

イチヨウカ　トモヒロ　市岡智寛　物產家なり信州伊奈郡の人寛政十一年信陽圃譜一卷を作り菖類凡七十種を圖說す（日本博物家年表）

イチヨリ　ミチナホ　一尾通尙「イチヨイオリ」

イチヨウ　ゲンザウ　市岡源三　海軍少尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役に於て軍艦吉野乘組在職中同年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突により吉野沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イチヨウカ　タツシュウ　市岡達洲　陸軍少兵中尉なり廣島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第五師團歩兵第二十一聯隊附として出征し十月十日清國蘆京省荒地附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

イツアン　チヨセイ　一庵如淸　薩州の人なり幼にして頴悟家を辭して落髮し遠遊を憚らず偏く知識に參し後ちに眞化寺の上堂に値ひ從ふこと五載能州の神保氏實相寺を建つるに及びて師を推して開山と爲す（洞上聯燈錄）

イツイ　一意「ゴトウイツジヨウ」
イツイイ　一祐「ダイトウイツイウ」
イツイツテイ　逸々亭「サトウチクラウ」
イツウン　一閑　明の歸化人にして朝霞齋金剛山嗹々子等の號あり寛永中我に歸化す西湖飛來峯下の產なるを以て飛來を氏とし一閑張を製り世に賞せらる明暦三年十一月二十日歿す歳八十子孫世々其法を傳ふ（工藝鏡、茶道筌蹄）

イツカン　一侃「ナカラキズキサク」
イツカンコシ　一間居士　タケノセウア

イツカンサイ　一閑齋「マツハラケイホ」
イツカンサンジン　一閑散人「ハナブサイツテフ」

イツカンソウ　一閑叟「タナカソウトク」
イツキウオシャウ　一休和尙　紫野大德寺禮、靜齋と號す、通稱五右衛門藝州の人服部南郭に學び後ち京師に講說すと云ふ所著孝經傳、靜齋文集、音例、初學作文法あり（鑑定便覽、諸家人物志）

イツキヨ　一漁「イチギヨ」
イツキヨウ　一章　高僧なり字は固山、俗姓は源氏肥前佐賀郡の人、生れて寧親魁異年僅に七歳父携て高城寺の藏山和尙に謁す山其法器たるを知り左右に侍せしむ筑前の觀音寺に往き登壇して戒を受く正安元年一山西禪來朝の時大宰府に謁して無中の號を授けらる十七歳京の三聖院に上り無爲元公に參し又相摸に往き西禪公に藥陽問に侍して祕訣を承く眞和元年東福寺に出世し饌香藏山に報い文和の初天龍寺に昇る法を乘る三年延文五年正月小恙に罹りて寂す年七十七遺命して圓鑑禪師の塔左に葬る（本朝高僧傳）

イツクウ　一空「ミヅタニカン」
イツクシマ　オムロ　嚴島御室「ニムジヨホウシムワウ」

イツクワダウ　一華堂「ワダウウツウ」
イツクワダウ　一華堂　ジヤウア」
イツクワン　エイ　一華文英　甲州の人姓は源氏同州永昌院の雲關に從て學ぶ關の世を去るに及びて其の席を繼ぐ永正六年逝す年八十五（洞上聯燈錄）

イツクワン　一觀　支那の瓦工なり天正四年織田信長近江の安土城を築きし時召して明樣の瓦を造らしむこれ本邦明樣の瓦を用ゐる始めなり爾來諸國の工人舊制の布目瓦を廢めて明樣の瓦を製す（工藝志料）

イヅクワンジヤ　伊豆冠者「ミナモトアリツナ」

イツケイ　一敬「ホソキイツケイ」
イツケイ　一昱「ホムシヨウサイイツケイ」
イツケイ　一鶏「アヲマヤオキミチ」
イツケイ　一蕙「ウキタイツケイ」
イツケイ　一蕙　江戸の俳人なり氏は足立通稱富次郎と云ふ仲蓬居と號す金令含道彥の門人本町三丁目に住す（俳諧人物便覽）

イツケイ　一溪「カノイツケイ」
イツケイ　一珪「ハナブサイツケイ」
イツケイアン　一溪庵「カンクワテイオニタケ」

イツケイ　エイシウ　一經永就　其の里族を詳かにせず少より歷遊を志し道を瞎師に聞く永澤通幼の道譽を慕ひ就て學び後ち攝州景福寺の住持となる（洞上聯燈錄）

イツコ　一虎　武藏江戸の鍛工にして國重晩年の號なり所作の銘に山城守藤原百國入道一虎と刻せり（古今鍛冶銘早見出）

イツコウ　一口　定次と稱す大和佐山の刀匠にして寛永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

イツコク　バウヨウ　一谷茅翁「オタサダオキ」

イツサ　一茶　信濃の俳人なり氏は小林通稱彌太郎俳諧寺と號す寶暦十三年信州水內郡柏原驛に生る幼にして母を失ひ繼母の爲に苦しむこと久し自ら闘み遊けて早くより風雅に身を委ぬ初め素丸に學び後隨齋成美に從て俳諧を學ぶ其俳趣脫俗洒落自ら一機軸を出だせり「おらが春」と稱する自筆の集あり印行して世に行はる性嚴落にして王侯貴顯と雖も毫も恐るゝの色なし

嘗て加州侯出府の路次使を馳せて旅宿に召す一茶之に應ぜざるのみならず却て所用あらば當方へ御座れと對へたりと云ふ其風致見るべきなり江戸に遊ぶこと十年餘下谷阪本に住す俳諧寺と號す文化十一年歸國文政十年十一月十九日歿す行年六十五信州柏原の明專寺に葬る業と崎行あり自費と雖も常に灯を點じて貴火に供す客の來るありて喫飯の時に至れば俱に酒樓に上りて各各錢を出して飲食す（俳諧人物便覽、俳諧年表、俳林小傳、蠶北先賢傳）

イツサイ　佚齋「チヨザン」
イツサイ　一哉「アベイツヤ」
イツサイ　一齋「タニイツサイ」
イツサイ　一齋「ミナセチカモト」
イツサイ　一齋「シンジツアンイツサイ」
イツサイ　一齋「マツシタキカウ」
イツサイ　一齋「サハシゲヒロ」
イツサイ　一齋「サトウイツサイ」
イツサイ　一齋「ムラシギヨクス井」
イツサイ　逸齋「ヒグチイツサイ」
イツサイ　鶴齋「スギタゲンパク」
イツサイ　逸窓　江戸の俳人なり氏は山路二世蓮之の門人本所法恩寺前三笠町に住す（俳諧人物便覽）

イツサウ　一草菴「ウヘノイウセン」
イツサウ　一草　俳歌を能くせり羽前米澤の人高德寺の僧なり一草は其の號、別に破顏と號す弘化頃の人其の俳歌に云く「行先や小草のうへに更衣」（俳諧海內人名錄）

イツサウアン　一草庵「ウヘノイウセン」
イツサウ山　江戸の俳人なり如水庵と號す素丸の門人深川常盤町に住す（俳諧人物便覽）

イツサン　一山「イツネイ」
イツサンゴンゲン　伊豆山權現　火產靈神又の名は輌遇突智神を祀る

イツサンダウ　エイシュン　一蠶堂永春「ナラジヨウイ」

イツシ　逸志「カサヤイツシ」
イツシ　一絲　江州永源寺の住僧なり名は文守桐江と號す一絲は其の字若倉木工頭長嶋の三男後ち加茂の靈源寺井に丹州法常寺の開基たり初め東都に於て澤庵和尙に參し頗る其の堂奧に入る然れども甚だ重んぜられず因て京師に出て愚堂に見えて印見解を呈し遂に印記を受く常に法嗣の寵遇を蒙り壯年にして在世佛頂國師の號を賜る時人之を稱す曾て烏丸光廣、小堀政一、松花堂昭乘等と外方の友たり法務の餘暇畵を好み一華の逵摩其の他祖師の像を畵けり粗にして頗る氣韻あり又茶道を善くす正保三年三月十九日寂す年十九（龍門夜話、皇國名畵拾彙、扶桑畵人傳、茶人系傳全集）

イツシ　一枝「シユンサウアンイツシ」
イツシ　一四　京都の俳人也氏は四川明月庵敍齋と號す區田鞭石の門人延享三年九月十四日歿す年三十八齡世「何悟る喝と一聲秋のせみ」（俳諧年表）

イツシ　一之　畵僧也江藏主と號す畵法を明兆に學びて能く師に似たり佛像及び人物を善くし最も墨畵に長ぜり筆力秀潤にして風致あり（扶桑畵人傳）

イツシウ　一舟「ハナブサイツシウ」
イツシウ　シヤウイ　一州正伊　防州熊毛郡の人姓は藤原氏なり十三にして薙髮し屑冠より諸方に遊び偏く宿老を訪ひ道を學び月江和尙に從て悟道す長尾景信の上州最大山に双林寺を建つるに及びて師其の住持となり世を閉ずる七十二（洞上聯燈錄）

イツシキ　アキノリ　一色詮範　足利氏の族なり姓は源氏、足利泰氏の七男公深參河の國吉良の莊一色に住し始めて族を一色と稱す是を一色氏の祖とす公深義氏範光を生む範光丹後の守護と爲り詮範を生む詮範兵部少輔左京太夫に任す正平二十年建德二年正月能登野の一揆を攻め五月赤賊を擊ち之を平らく元中八年十二月將軍義滿の前驅と爲りて山名氏清を擊つ三年正月若狹國今富莊を賜ひ且つ諸將に驗して各々其の餘寇を討たしむ殊に詮範父子の勳を賞し子滿範に食封を給し且大莊を掃み詮範の食邑と爲す應永二年六月朝髮して信將と號す十三年六月卒す子あり滿範と稱す（野史）

イツシキ　サダシゲ　一色貞重　近江の人なり彈次郎と稱す岡崎に至りて德川氏に仕ふ家康天正十八年關東に移りし時病ひに臥して從はず十九年正月十四日岡崎に死す（君臣略傳）

イツシキ　トキムネ　一色時棟　京師の儒士なり字は子績、菊叢と號す通稱雲溪、時棟は其の名、儒を以て松山侯に仕ふ後に甦を前田と更む著すところ二酉洞吟譜等あり享保十年十月年七十にして歿す（諸名家人物誌）

イツシキ　ノリカツ　一色範勝　藤長の子なり左兵衛尉と稱す慶長十六年謁を德川家康に執り叙爵せられ式部少輔と稱す子範規あり（野史）

イツシキ　ノリタダ　一色範規　範勝の子なり左馬介と稱す德川幕府に仕へて孫範永に傳ふ範永字は長十郎九歳にして早世す食邑二千石遂に沒收せらると云ふ（野史）

イツシキ　ハウケイ　一色芳桂　江戸の儒者なり名は規字は範通寛延元年七月十八日歿す澁谷長谷寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

イツシキ　フヂナガ　一色藤長　持範の曾孫式部少輔晴具の子なり天文二十一年從五位下に叙し式部少輔に任す將軍義輝に仕へて供奉に列し足利義昭、織田信長、豐臣秀吉に歷事して宮津城に居る、石田三成藤長を迎へて交を厚うす藤長は細川忠興の親姻なり故を以て三成藤長をして忠興を誘はしむ藤長驚オ三成の奸計を察せず使を遣し藤孝父子を招て曰く我朔と俱に故太閤の恩顧厚誼に浴す志を翻して幼君を翼戴すべしと藤孝父子亦藤長をして德川に屬せしめんと欲し之を召す忠興其父に謂て曰く藤長若し從はずんば之を戮して三成の羽翼を殺くべしと藤長使命を聞き悅て田邊に赴ぐ忠興曰く幼君の爲めに事を計らんと欲せば先づ三成を滅すべし三成實に幼君を以て囮と爲し己と合はざる者は侯伯の功ありと雖も皆之を亡し天下を奪はんと欲するの姦謀なり往年關白を滅し或は秀秋を讒し今復た內府を伐んと欲す暴惡勝て算るに遑あらず藤長怒て曰く內府却て嗣君を謀り四海を奪はんとする の兆鏡に掛けて見るが如し因て三成と俱に太閤の舊恩に酬ひんと欲し命を齊芥より輕んず足下父子の如き不忠な懷く者にあらずと忠興大に憤りて曰く子大言を吐かず宜く東師と力を竭して戰ふべきなり藤長大に恣り將に忠興を斬らんとす忠興乃ち刀を把りて藤長を斬

る藤長の從者百四五十人圍入す細川氏の家士長岡興長有吉武藏等出て悉く之れを殺す子範勝あり(野史)

イツシキ　ミツノリ　一色滿範　詮範の子なり兵部少輔、右馬權頭、修理大夫と爲る明德三年正月丹後國に封ぜらる應永八年四月髮を削りて道範と號す十五年六月鑾船漂著す其の主亞烈進獻と云ふもの生黑象一、山馬二、孔雀、鸚鵡各〻二を贈る偶〻十一月暴風起りて鑾船を破り環す次年命じて船を造り遣歸す十六年正月卒す子持範初字二郎式部少輔と爲り北野一色と稱す次は義貫其の次は持信(野史)

イツシキ　ヨシサダ　一色義定　義道の子なり(義定或は滿信に作る)字は五郎、父の後を繼く家勢益〻衰ふ明智光秀細田信長の命を受けて河北石見を攻て大斥候たらしむ國人揖槃す石見敗れて丹波に走る光秀計策を廻し義定に勸めて長岡藤孝の女婿となり丹後の半國を割きて藤孝に與へしむ而して義定宮津の八幡山に居り中郡、竹野、熊野の三郡を領す後ち徙て弓木城に居る細川忠興義定を八幡山に襲し兵を伏して殺す實に天正九年三月なり(明智記を按するに義定を義俊に作る力量あり父戰歿の日擊て其一面を破て宮津四弓木城に入る從騎五十餘槃き戰ふ明智光忠圍み攻む累日撓まず藤孝人を遣して和平を乞ふ義定出て〻降る信長命して終に殺さしむと又丹州三秦物語に云く天正九月三日忠興八幡山に徙る五月義定細川氏を墜る十年雪源忠と曰ふ子なし(野史)

イツシキ　ヨシスエ　一色義季　義春の從弟なり其の後を繼きて左京大夫と稱す義季の子義幸の子義道嗣ぐ(野史)

イツシキ　ヨシタカ　一色義堯　德川家康の臣なり嘗て鑒賞を蒙る因て一功を建て之を償はんと欲す天正七年九月松平康親に屬し驍州持舟を攻め城主岡田元次が將三浦義鏡を殺し遂に其の罪を赦さる(君臣略傳)

イツシキ　ヨシツラ　一色義貫　滿範の子なり本名は義範(或は直信に作る)初字五郎、應永十八年六月兄持範と和を講じ持範は丹後を分領し義貫は若狹を領す是冬兵部少輔に任じ修理大夫と爲り相伴衆に列す永享十年五月義貫和人世保持頼と兵を率ゐて越智伊豫守を大和に伐つ十二年石川九郎伊勢島に往きて之れを鎮撫す十二年五月義貫世保一族と幕府に叛き兵六千餘を率ゐて信貫龍門山を築きて據る(若狹守護代年記に云ふ是れより先義貫の兄兵部大輔鎌倉に誅せらる是を以て叛くと又國史實錄に云く將軍義教義貫の夫人妾色あるを以て義貫を殺し夫人を奪ふ夫人興中に在り史餘論並に載す將軍の侍女小辨なる者義貫を讒して曰く寵覆を謀ると將軍是非を問はずして征伐せしむと各書載するを擊つ接戰日暮れ城固うして拔けず武田信賢(或は信景に作る)請ふて先登となり進みて龍門山を攻め一信景を以て大斥候たらしむ國人揖槃す石見敗れて丹波に走る光秀計策を廻し義定に勸めて長岡藤孝の女婿となり丹後の半國を割きて藤孝に與へしむ而して義定宮津の八幡山に居り中郡、竹野、熊野の三郡を領す後ち徙て弓木城に居る細川忠興義定を八幡山に襲し兵を伏して殺す實に天正九年三月なり(明智記を按するに義定を義俊に作る力量あり父戰歿の日擊て其一面を破て宮津四弓木城に入る從騎五十餘槃き戰ふ明智光忠圍み攻む累日撓まず藤孝人を遣して和平を乞ふ義定出て〻降る信長命して終に殺さしむと又丹州三秦物語に云く天正九月三日忠興八幡山に徙る五月義定細川氏を墜る十年雪源忠と曰ふ子なし(野史)

イツシキ　ヨシスエ　一色義季　義春の從弟なり其の後を繼きて左京大夫と稱す義季の子義幸の子義道嗣ぐ(野史)

イツシキ　ヨシタカ　一色義堯　德川家康の臣なり嘗て鑒賞を蒙る因て一功を建て之を償はんと欲す天正七年九月松平康親に屬し驍州持舟を攻め城主岡田元次が將三浦義鏡を殺し遂に其の罪を赦さる(君臣略傳)

イツシキ　ヨシツラ　一色義貫　滿範の子なり本名は義範(或は直信に作る)初字五郎、應永十八年六月兄持範と和を講じ持範は丹後を分領し義貫は若狹を領す是冬兵部少輔に任じ修理大夫と爲り相伴衆に列す永享十年五月義貫和人世保持頼と兵を率ゐて越智伊豫守を大和に伐つ十二年五月義貫世保一族と幕府に叛き兵六千餘を率ゐて信貫龍門山を築きて據る(若狹守護代年記に云ふ是れより先義貫の兄兵部大輔鎌倉に誅せらる是を以て叛くと又國史實錄に云く將軍義教義貫の夫人妾色あるを以て義貫を殺し夫人を奪ふ夫人興中に在り史餘論並に載す將軍の侍女小辨なる者義貫を讒して曰く寵覆を謀ると將軍是非を問はずして征伐せしむと各書載するを擊つ接戰日暮れ城固うして拔けず武田信賢(或は信景に作る)請ふて先登となり進みて龍門山を攻め一多く義貫の兵士を得、義貫獨り眉尖石川九郎伊勢島に往きて之れを鎮撫す十二年五月義貫世保一族と幕府に叛き兵六千餘を率ゐて信貫龍門山を築きて據る(若狹守護代年記に云ふ是れより先義貫の兄兵部大輔鎌倉に誅せらる是を以て叛くと又國史實錄に云く將軍義教義貫の夫人妾色あるを以て義貫を殺し夫人を奪ふ夫人興中に在り史餘論並に載す將軍の侍女小辨なる者義貫を讒して曰く寵覆を謀ると將軍是非を問はずして征伐せしむと各書載するを擊つ接戰日暮れ城固うして拔けず武田信賢(或は信景に作る)請ふて先登となり進みて龍門山を攻め一多く義貫の兵士を得、義貫獨り眉尖刀を揮て死戰す信賢自ら奮鬪し義貫遂に之れと戰ひて死す一族三百餘人皆な自殺して亡ぶ子義直あり(野史)

イツシキ　ヨシナホ　一色義直　義貫の子なり兵部少輔又左京大夫後に又修理大夫となり應仁元年正月丹後伊勢の兵を率ゐて山名宗全に驚し足利幕府の警衛す五月細川勝元衆を率ゐて來り闘ふ義直戰はずして走る西陣勝元、畠山政長及び東條元次路次を杜塞し國に歸るを得ず宗全の陣營に於て兵士の離散する者多し文明元年足利義視宗全が營に入る義直之が後隙と爲る十五年五月從四位下に叙せらる子義春繼ぐ(野史)

イツシキ　ヨシハル　一色義春　一色義直の子なり家を繼き右京大夫となり相伴衆に列す長享、明應年間將軍足利義視に近江の陣營に從ふ義春の從弟義季其の後を嗣ぐ(野史)

イツシキ　ヨシミチ　一色義道　義幸の子なり父の後を繼ぎ左京大夫に任ず天正三年織田信長更に義道を丹後に封す後ち義道度なし國人離畔す信長又之が援たらしむ藤孝進發して丹後に入る義道の部下菅

日裘を上て辭を告げ又た偈を書して衆に別れ奄然として化す年七十一上皇寢室に幸して嘆嘆し便ち震奎を染めて國師の號を贈らる（元亨釋書）

イツネンオシャウ 逸然和尚　肥前長崎興福寺の住持なり名は性融泯雲庵主と號す本と明人黃檗派なり氣宇磊落にして宗法に拘はらず圓齋を好む揮毫縱橫にして雅致あり（皇國名畫拾彙、畫乘要略）

イツノ ダンザウ 伊津野團蔵　薩熊本藩士にして明治十年四番役に於て警部補別働隊第三旅團附と爲り從軍し四月三日肥後國益城郡堅志田に於て戰死す

イツノミヤ 逸宮「サダコナイシンワウ」

イヅノメノカミ 伊豆能賣神　或は曰ふハヤアキツヒメノカミと同神なりと（伊勢諸尊を見よ）（古事記）

イヅノ ノリツネ 伊豆則常　京師の俳人にして北村季吟の門人なり（俳林小傳）

イツパウ 一寶「キンレイシヤイツパウ」

イツパウ 一抱「ヲカモトイツパウ」

イツパク 一伯「ショウヤウサイイツパク」

イツアン 一筆庵「イケダエイセン」

イツビツサイ ブンテウ 一筆齋文調「ツムリヒカル」

イツビツバウ 一筆坊　名古屋の俳人なり谷氏又書は懷素の風を善くす辭世の句に云く「水冷し我が世を華に洗み終り」寛政丙辰年八月十六日歿す年七十三（尾張名家志）

イツブ 逸芙「セキネイツブ」

イツブウ 逸風「ホリエイツブウ」

イツペイジ 一平次　其の姓を逸す長崎の人後ち大阪に來り四つ竹を拍つに工みなるを以て其の名遠近に聞ゆ其の四つ竹節今尚ほ存せり（聲曲類纂）

イツペウ 一表「オクダイツペウ」

イツペウ 一瓢　江戸の俳人なり名は恒雅字は日恒、境修と號す又知足坊と曰ふ谷中本行寺の住持なり（大家人名錄）

イツペウアン クワンリ 一瓢菴關里　石州流挿花の祖なり近藤平五郎政好と云ふ幕府の士なり石州流の挿花は初め茶道の附屬として專門の業ならず其の道を祖片桐貞昌より傳へて二世片桐貞長兵衛二世長衛四世長兵衛五世片桐貞昌に居る關里就て石州流の茶を學び從て花道を研究す而も遠州流花道は此の時已に專門の業となり之を學ぶ者多し關里之を學んで頗る奥に達す而して師の名を諱かんと欲して能はず他の弟子に諱がるゝを恨み乃ち親貞に請ふて石州流花道を專門の業となり之を學ぶ者ことを請ふ親貞乃ち之を許す關里爰に石州流嘉六世と稱す花道の家元となる是石州流挿花專門となるの嚆矢なり門人中山勝重七世を襲ぎ瓢青庵關秀名あり關里入世は田村永成と云ひ明治十九年五十餘歳にして歿し九世を鈴木爲次郎と云ふ（正瓢庵宗月氏寄）

イツペン 一遍　上人は遊行僧なり幼名は松壽丸又智眞隨緣遊行等の名あり姓は越智氏名は通秀別府氏を稱す父は伊豫國主河野七郎通廣の二男母は北條氏五日生る一遍七歳にして伊豫の國天台宗得智山繼教寺に登り永慶に從て學ぶ建長五年三月廿四山派弘誓寺聖達に見えて直ちに聖道を捨て、淨土に歸す此時智眞と改む建治元年十二月八日紀州牟婁郡熊野社に百日參籠し誓て曰く我一切衆生を度せむと欲し融通念佛を勸進すこの教化佛意に違はず神慮に背かずば願くば示現を垂れたまへ然らずむば永く社壇を降りすと遂に念佛勸進の算を授けらる神勅偈頌に依り智眞を改め一遍と號す更に神勅に任せ本願念佛の金札を勸化す又遊行とは代々の智識の轍を慕ひ勅札を荷ひて遊行するに因り世人自ら通稱とすと云ふ正應二年八月二十三日攝津國八部郡兵庫津の西月山眞光寺に寂す年五十一（繼宗祖師傳）

イツポ 一甫「シモダハウタク」

イツポ 一甫「ヲダサハライツポ」

イツポ 一甫「ホムシヨウサイイツポ」

イツポ 一蜂「カハクマイツポウ」

イツポ 一蜂「ハナダサイツポウ」

イツポ 一鳳「ニシザハイツポウ」

イツポ 一峯「ヒロセイツポウ」

イツポ 一峯　近江佐々木の鍛工にして石堂の一派寛永年間の人源姓なり是を初代とす二世一峰は佐々木善四郎と稱し後削髮して入道源一峰と號す天和元祿年間の人亦佐々木に住し又武藏に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

イツポウカンジン 一蜂閑人「ハナブサイツテフ」

イツポウサイ 一鳳齋「ウタガハクニナホ」

イツポウリンサウ 一蜂麟曹　武州青松寺の住持なり姓は藤原氏江戸の人、幼にして輪鑾を事とす十四歳の時青松寺の久室に依て得度し猶文章を治む室呵して曰く出家の兒驕慢の奴僕とならんやと師答ふる能はず是れより誠を傾けて塗究す室寂を告げ瑞籌の來て其の處を補するに當りて遂に玄妙の奥に達し慶長四年能州總持寺に出世し後ち瑞籌の嗣頭室の遺命に因り其の席を繼て青松寺に住す凡そ叢林の備らざる者悉く一新せり將軍德川秀忠の師に命じて宗要を提綱せしむるや師名一時に内外に著れ官僚諸侯の節を折て道を聞く者織るが如し青龍湖雲瑠璃光正山等の如き皆師を以て開山第一世と爲せり元和癸亥の年壽五十七を以て逝す（洞上聯燈錄）

イツポクサイ 一卜齋「コマツイツポクサイ」

イツポサイ 一牡齋「サワキメイリウ」

イツポフ 一法　對馬守と號す近江石堂派の鍛工にして一法は即ち常光の晚年の號なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

イツポフ 一法　日置山城守と號す姓は源、近江石堂派の鍛工にして後京に住す寛永年間の人なり（古今鑄冶銘早見出）

イツポンダウ 一本堂「カガハシウアン」

イツポンテイ フヨウクワ 一本亭芙蓉花　江戸の狂歌師なり本と浪花の人通稱平野屋清兵衛、油烟齋眞柳の門に入りて狂歌を學び一本亭と號す別に花間樓とも云ふ天明三年正月二十六日歿す年六十三（江戸名家墓所一覽）

イツマツ クワクリン 五松鶴林　書家なり名は忠俊字は公英本姓小林氏通稱は次右衛門出羽國米澤の人なり京都の醫官古野周德の門に入り後江戸に

召さる近衛流の書を能くす後菅家の筆法を學べり依て菅原姓並に法橋を賜はる文化十年十月廿八日歿す年七十一（名人忌辰錄、名家墓所一覽）

イツミ キチダラウ 泉吉太郎　陸軍步兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第七師團步兵第廿七聯隊附として出征し廿八年三月六日清國盛京省輝發嶺の戰鬪の際負傷し同二十日劉家窩棚第九師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

イツミ コジラウ 泉小二郎「イヅミチカヒラ」

イツミサハ リサイ 泉澤履齋　通稱牧太陸中鹿角郡毛馬内の人なり幼にして學に志し朝川善庵の門に遊び學大に進む文化年間清人耶有蛾常陸の海岸に漂泊す幕府時に善庵に照接を命ず善庵履齋を推薦す故を以て幕府更に履齋に命じ耶有蛾を浦賀に送ぜしむ事終て復命し其舟中及滯在中の筆談書及贈答の詩文を呈せり是に於て其名天下に喧々たり諸侯競ふて聘せんとす尊て伊勢龜山藩主石川主殿頭に仕へて儒者となる又南部世子僧侯弟子の禮を執て講說を聞けり安政二年七月江戸の地大に震ふ說て脚を傷け十月歿す年七十七

イツミ サブラウ 泉三郎「イヅミタダヒラ」

イツミミシキブ 和泉式部　越前守大江雅致の女なり和歌に善くす和泉守橘道貞に嫁して女小式部を生む（一說小式部は藤原保昌に嫁して生むとあり）道長に召されて上東門院に仕へ此の間爲尊親王と通ず因て道貞と隙あり終に離別す親王薨するの後其弟敦道親王と通ず而して其の絕たざる間に再び藤原保昌に嫁す嘗て僧性空と云る者あり播磨書寫山に居す世擧りて之を崇信す式部和歌を贈りて曰く「くらきより暗きみちにぞ入ぬべき遙にてらせ山のはの月」と世以て精妙と爲す（大日本史、本朝烈女傳）

イツミ ジュンザブラウ 泉順三郎　陸軍步兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第四聯隊附として出征中廿八年二月廿七日清國盛京省王富寺北方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イツミ センスケ 泉仙介　勤王の志士なり詩は正光仙介と稱す越後村松藩の卒にして天性忠節の志厚く元治元年春佐々耕庵が同志に推されて情況探索の爲めに京都に上るや仙介携ばれて其添人となりて隨行す耕庵は復命の爲め一度歸途に着きしも仙介猶止りて後圖を爲せり然れども耕庵の寃に來らざるを以て其年の夏長州に赴き尋て藩に歸りしが藩の執政等痛く之を惡み種々讒構して罪に陷れ慶應三年五月耕庵と共に首を刎ねらる年四十明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる

イツミ ダイフ セウジヨウ 泉大夫「サクラヰタンバ」

イツミ ダイシヤウ 泉大將「フジハラサダクニ」

イツミ タダヒラ 泉忠衡　三郎と稱す藤原秀衡の第三子也源義經逃て秀衡に遷る秀衡歿するに臨み諸子に命じて義經を奉ずると怠る勿らしむ頼朝命あり義經の首を徵す諸子議して義經を討たんとす忠衡獨り聽かず諸子先づ忠衡を殺して後義經を討つべしと兵を以て其の邸を圍む忠衡の妻は佐藤忠信の妹なり舅あり忠衡と共に敵を防ぎ血戰して俱に死す（名女傳）

イツミ チカヒラ 泉親衡　源滿仲の第下野守滿快の裔なり小二郎と稱す其先世と信濃に居る父公衡泉二郎と稱す親衡膂力人に過ぐ建保中將軍頼家の子千壽丸を奉じて北條氏を滅ぼさんと謀り僧安念を遣し諸國を巡歷して將士を挑ましむ應ずる者稍々衆し安念千葉成胤に謂る成胤縛して北條義時に送る義時訊問して狀を得因て兵を遣して親衡を捕ふ親衡奮鬪大に戰て往く所知らず後世武力を言ふ者これを以て竝び稱すと云ふ（大日本史）

イツミ チユウアイ 泉仲愛　其更なり八右衛門と稱す熊澤了介の弟、備前侯光政に事へて祿五百石を食む性行篤敦更事を以て重んぜらる國主醫て仲愛をして評定所に坐して政事を與り聞かしむ仲愛沈默言はず有司窮に相ひ笑ふ國主之を聞て曰く八右坐に在れば人と敢て矯僞せず是大に國に益あるなり何ぞ其言不言を問はんと衆皆な服す嘗て封内に田を爭ふ者あり相ひ訟ふ侯仲愛なして之を決せしむ仲愛命を受け兄弟を一室に寘き與に飲食せしめ與に浴せしむ夜半に至りて其の曲直を斷ぜず兄自ら悔い弟に謂て曰く今爭ふ所の田相ひ供に耕釋せば如何弟曰く國主より欲する所なりと以て仲愛に告ぐ仲愛大に悅び陳を以て鶴蹄の義を以て之を惡み種々讒構して罪に陷れ慶應三年五月廿四聯隊附として出征し同年九月二日清國盛京省黑英臺戰鬪に參加し遂に戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イツミ ヒデヤス 泉秀彌壽　陸軍步兵少尉なり京都府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第十師團步兵第二十聯隊附として出征し同年九月三日遼陽附近の大戰に參加し負傷同四日ジュジヤトカン野戰病院に於て死去す

イツミ ホウシウ 泉豐洲　江戸の儒者なり名は長達字は伯盈幹太郎と稱す江戸の人、始め南宮大湫に學ぶ後ち紀平洲に從學す平洲歿洲の才學を嘉みし女を以て之に妻はす文化六年五月六日歿す年五十二（鑒定便覽、江戸名家墓所一覽）

イツミ マクニ 和泉眞國　鈴屋門の國學者にして初め和鷹と稱す通稱を渡邊屋東吉郎といひ江戸の人なり京和文化の交村田春海と古道の事に付て論爭す文化二年五月七日歿す（國海問答、鈴屋門人姓名錄）

イツミヤ ジンスケ 和泉屋甚助　江戸の豪商なり太申と號す三十間堀街に居り材木を賣るを以て業と爲す家道殷富にして國典を讀み和歌を學に其だし嘗て荷田春滿を師として性癖あり名譽を好むと特に然れども其の好む所に非ざるなり世間未だ有らざる書を刊行し以て名を後世に傳へんと欲し之を春滿に謀る春滿曰く世傳ふる所の大寶令義解は關市令一篇を闕なりと甚助喜びて之に從ふ其の餘刊行する所乃甚だ多し皆な名を卷尾に署し以て之を標す其の流傳の廣きを欲して損益を問はず又た友人數輩と謀り聯歌會を龜

戸天神祠に開ちき額字を匾せんことを議す甚助曰く菅氏の嫡流に非らざれば不可なりと因りて急に使を裝し百金を齎らして之を申納言高辻公に請ふ公は即ち菅氏の裔なり是に於て甚助の名稍〻著はる甚助命名の起ること蓋土の如く偏く名を知らるゝの士を求めて之と交はる曾〻に儒行醫流巧藝の人のみならず俳優聲妓幇間浮浪の徒に至るまで其の門に出入せざるなし客常に數百人醉飽酣歌日夕止まず家資消耗するも以て意と爲さず甚助名を好むと雖〻甚たしく新に精緻を製し己の號を畫きて章と爲し名けて太申染と曰ふ裁工に命じて衣數千領を作り徧く吉原の娼妓に授けて之を著せしむ又厚く名優中村傳九郎に賂ひ服せしめて以て場に上らしむ居ること未だ幾ばくならずして士女の事を好む者爭ふて模倣す甚助喜ぶこと甚だし試に染戸に抵り之を求む染戸太申染を知らず甚助辭かに其の章を說く染戸笑ふて曰く是傳九郎染なりと甚助大に愧づ（譚海、百家奇行傳）

イヅミヤ　ライダイ　和泉屋亭臺　名は源兵衛初號は莇江戸淺草藏前の米商にして俳人なり

イヅモノ　オクニ　出雲阿國「クニ」

イヅモギノ　ノブナホ　出雲路信直　神道家にして吉都下御靈社の祠官、玄仙の子なり初め板垣氏を稱す通稱民部山崎闇齋に神道を學びて其高足たり（泰山集、先達遺事）

イヅモ　ヒロサダ　出雲廣貞　播津の人なり方術に精し侍醫となり申内記　美作權掾、内藥正、信濃守等を兼ぬ延歷二十四年帝不豫なり廣貞吉水神德と共に御藥を奉ず功を以て爵一級を進む大同三年敕を奉じて安部眞直と大同新撰方を撰す又別に命を蒙り唐制に依りて藥升大小の量を定む又た醫經開委を著す子あり峯嗣と曰ふ（皇國名醫傳）

イヅモ　ミネツグ　出雲峯嗣　醫者なり廣貞の子、淳和帝東宮たりし時帝に奉事す帝爲めに申請して醫學得業生に補せんとし試驗及第す醫に得業生を置くこと是より始まる帝位に即くに及び左兵衛醫師、醫博士兼内藥佐、侍醫、春宮坊、主膳正、尾張權介、美濃權介、越後守、播磨介、典藥頭、攝津守等に累遷す王府の舊知を以て寵遇人に絕す遠任を帶ぶと雖も未だ嘗て任に赴かず一時の名流と同じく命蘭方を選す又た針灸法を註して奏進す真觀元年勅を奉じて備中に赴き嗣は出雲土師と同祖なるを以て請ひて石鐘乳を採る峯嗣は出雲氏姓を菅原と改稱す（皇國名醫傳）

イツヤウ　一陽「イハイヅミイチヤウ」

イツラク　逸樂「タチバナチカゲ」

イツヤイツラク　一樂「ツチヤイツラク」

イツリム　一蘭「ゼンアンイツリン」

イツロ　一路　逸人なり泉州堺の人僧一休と時を同うす一日一休訪問して曰く萬法皆道あり如何一路答へて曰て萬事皆な休む休むへし如何と世を終るまで詩歌にて調味し以て樂とせり　逸樂ツチヤイツラク　德を慕ひて之に食を送れば乃ち手取鑑を同うす一日一休訪問して曰く萬法皆道あり如何一路答へて曰て萬事皆な休む休むへし如何と世を終るまで詩歌にて調味し以て樂とせり　逸樂ツチヤイツラク　樂を設け獲を釣り施を受けて日を消せり一日村童戲れに馬糞及び馬履を蓋に入る一路之を見て曰く我が食已に絕てりと乃ち食を斷て死せり石津上市に一路庵の舊跡あり（野史）

イツロサイ　一露齋「ツキヨカイツロサイ」

イツワ　一和　尾張の俳人にして一雪の門人也（俳林小傳）

イツワホウシ　一和法師　高僧にして南都の興福寺に居る素より聲學あり宴延講師と名を齊す而して和平ならず習ふ所か寒て尾州熱田の神社に隱る社に歷數者あり人の吉凶禍福を云ふに能く當らさるなし一日大言して曰く春日明神靈を降し來れりと乃ち神語を作り和に謂て云く我れ未た嘗て鄉を離てず鄉何ぞ自ら塞つるや天帝の玉簡に維摩の講師を記するに延は前に在り鄉は後に在り天命既に定る其れ强ゆ可けんやと和乃ち釋然として南都に還る後ち果して其言の如し（元亨釋書、東國高僧傳）

イツエン　逸淵　江戸の俳人なり武州男兒玉郡八幡山の人久米氏逸淵は其の號初め可布と號し後可布庵と號す後に甕隱居と號し又椿老似我老人等の號あり明年鄉里に歸居し文久元年七月二十日歿す年七十二其の俳歌に曰く「蘇の巢や撞かぬ尾上の鐘の中」

イテン　以天　諱は宗清紫野大德寺八十三世の法嗣にして點茶を能す城州の人東海な嗣て機雪と號し

大永二年四月廿一日出世して堂を開く後柏原天皇勅して勅に正宗大隆禪師の號を賜ふ相州大守北條氏綱小田原に於て早雲寺を創し師を請て開祖とす一日侍僧に謂へらく滅後塔を建つる勿れと天文二十三年正月十五日寂す壽八十三僧に臘三千一塔婆、骨頭節々也有他、那須殿利發光彩、月在青天影在波と（紫巖譜略、茶家好古集覽）

イトウ　アキラ　伊藤晃　陸軍歩兵少尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十七聯隊附として出征中廿八年三月十日清國盛京省大寒屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ　イウテイ　伊藤由貞　儒者なり名は由貞字は士享、萬年と號す京師の人、少年のとき藤原惺窩の學風を京師の松永氏に受く其の人と爲り孝友溫和、閑靖寡言、經を談じ道を樂み家居して仕へず徒に授て業とす嘗て遠游の志あり遠尾二州に客たり各〻居ること一歲にして去る晚年賀州に抵り客居凡そ六年元祿十四年七月疾を以て金澤の僑居に歿せり年六十一（燕臺風雅）

イトウ　イツゲン　伊藤一元「イトウクワンボウ」

イトウ　イツタウサイ　伊藤一刀齋　一刀流の祖なり初め彌五郎と稱す名は景久、伊豆の人始め鐘捷自齋に就て中條流を汲み劍術國に周遊して塞門師と試合を爲すこと三十三度一人も其の術に及ぶ者なし流派後世に盛なり（家雄言行錄）

イトウ　イヘエ　伊藤伊兵衛　江戸染井の花戸なり頗草木の培養法に精し元祿七年花壇地錦抄六卷を著はし草木の培養法を述へ同十四年草色繪前集一卷を著はし實永七年增補地錦抄八卷を作り享保四年廣益地錦抄八卷同十四年地錦抄附錄四卷、遠生花林抄五卷を作る（日本博物學年表）

イトウ　ウシウ　伊東有終　俳人なり美濃の人可布庵逸淵の門人にして行庵と號す初め梅園酒雄と號せり明治八百屋（一名菩薩集）の撰あり明治九年四月三日武藏入間郡川角村に病歿す（三森松江氏寄）

イトウ　ウネメ　伊東采女　伊逸侯の臣なり高祿を食む時に伊達宗勝政を秉りて專權竊かに宗家を奪ふの志あり渡邊金兵衛甚股肱と爲て亦た權を擅にす寛文七年幕府監察使仙臺に至る故事觀察使至れば必らず藩士を城上に見て杯を賜ふの儀あり其の席に列す源太郎は皆其の父嘗て國老たり宜しく小老に次ぐべしと而るに金兵衛故らに其例を違へて二人を諸有司の後に置く采女曰く幕使を城上に饗するは頗る盛儀と爲す然るに其の枉ぐること此くの如し安ぞ默止すべけんやと乃ち伊東廣孝及び氏家傳治を以て柴田外記原田甲斐に見えて之を正さんとす請はしむ二老答辭異同あり廣孝將に書を幕府に上り以て宗勝の奸狀を陳べんとす采女も亦其議に與かる宗勝命じて之を度庭主水の宅に召し將に誘ふて之を擒にせんとす二士諜して之を知り謂へらく寃を被りて死せんよりは若かず宗勝を擊ちて死せんにはと將に衆を率ゐて一關を破はんとす臣僚宗勝の意を承け二士を擒にして之を府に告ぐ宗勝命して采女を幽し廣孝を斬り傳治を流す（事實文編）

イトウ　エンシン　伊東燕晋　軍談師にして伊東派の祖なり調筵と號す通稱は仙右衛門天保十年十二月十日歿す年八十（名人忌辰錄）

イトウ　エンリャウ　伊東燕凌　講釋師なり二代目は漆畑新介と稱す初代の門人にして初め凌宇と曰ふ安政二年七月歿す年五十五辭世に曰く「辭さめのこれや此世の秋の水」（名人忌辰錄）

イトウ　カイテイ　伊藤介亭「イトウチャカウ」

イトウ　ガウガク　伊東蘆岳　（伊東氏自ら修して東と云ふ）江戸の儒者なり名は惟骨、字は良弼、幼之助と稱す蘆岳は其の號、藍田の長子、幼より奇才あり詩を善くす近體爾韻徵及び心賦考注を著はす（續諸家人物志、懲定便覽）

イトウ　カウヂザイ　伊東如義齋　儒者也名は儀字は邦遂其の先は安藝の人、祖道樹徒りて長門赤間關に居り遂に長門の人となる父直信四男を生む好義齋は其の第二子なり好義齋生れて異質あり鄉曲の間に生長すると雖ども未だ嘗て里巷の習俗に染まず幼より節俚の事を聞けば輙ち之を厭惡す年十五六歲兄を助けて家を幹す常に兄弟の窮を憂ひ爲めに其の家を經理す諸事其の宜しきを得故を以て宗族皆な之を稱す好義齋好みて書を讀む然れども窮鄉下邑に於て以て師とすべきものなし年三十許京師に往き諸儒の門に遊び日夜學を勉む是の時伊藤仁齋一家の言を建て〻程朱を非議す號して古學と曰ふ以て一時を風靡す好義齋仁齋に從ひて學ぶこと數年既にして其の說を疑ひ遂ひに程朱に歸す其の學問章を尙はず務めて實行を旨とす元祿中來り學ぶものには必ず誨ゆるに孝悌忠信を以てす松平大和侯禮を厚うして招聘し委するに師儒の職を以てすなる恒に侯の左右に在りて書を講じ事を論ずる必ず顏を犯して直言す數年の後辭して白金別邸に老す侯尙ほ其の宅に延燒す松平周防侯之を聞き迎へて微疏洲の別邸に居らしむ其の養子滯齋の行事を崇むなり享保十三年歿す年七十一二子あり皆夭す姓滯齋を以て嗣とす門人私に稱して恭節先生と云ふ（續近世叢語）

イトウ　カウタラウ　伊藤幸太郎　陸軍少尉なり千葉縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第一師團歩兵第二聯隊附として出征し十月二十九日清國盛京省松樹山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ　ガクジ　伊東學而　石川流の茶人なり姓は藤原名は秀春、杯庵と號す別に養正齋、比隱齋等の號あり渡邊立庵の門人（茶人系傳全集）

イトウ　カゲツナ　伊藤景綱　義朝の臣なり保元の亂に爲朝を攻め子伊藤五伊藤六と共の矢に中りて歿す

イトウ　カトウ　伊藤河東「マスミカトウ」

イトウ　カフノスケ　伊藤甲之助　勤王の忠士なり諱は和義藏士佐高知の藩士怡然の子なり幼より文學を好み又劍砲馬術にも通ず文久三年正月主命を受けて東上し四月十一日石清水行幸の時朝廷より布衣烏帽子を賜りて姉小路少將に隨身す五月また主命に依り三條家の守衛となる八月十八日の變起り三條公以下七卿四寅するに及び甲之助も亦三條公に隨從して防州三田尻に到る翌元治元年甲子六月長藩士上京して七卿の勅勘及び藩侯父子の寃罪を雪がんとて朝廷に哀訴する所ありしが言用ゐられずして遂に七月十九日の變となる甲之助亦其群に入り境町御門に向ひ奮戰せしが長軍利あらず甲之助は退て寅川邊中街に至り割腹して死す時に年僅に二十明治三十一年五月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿、海南義烈傳、甲子殉難士傳）

イトウ　カンギウ　伊藤閑牛　松山藩の儒者なり名は克誠字は伯享、昌平黌に學び藩黌の教授となり後京都邸の留守居及び會計主事となる明治五年三月十四日歿す歲五十七（墓碑銘）

イトウ　ガンスケ　伊東鴈助　德川家康の臣なり樹原康政に屬して戰〻戰功あり因て家康命じて騎士とす永祿十二年五月家康大井川邊を巡見する時陽の山縣三郎兵衛之を窺ひ伏勢に供す亦た好義齋の教授と助等防戰甚だ力む山縣竟に兵を引て去る天正十年家康織田信長に從て長驅甲州に入る勝頼亡びて其の士多く降る時に平原宮内と謂ふものあり害を家康に加へんとし爲めに傷けらるゝもの多し鴈助乃ち捕て之を殺す然れども鴈助味方の兵の爲に誤りて殺さる其の子亦雁助と曰ふ亦菅力あり戰に從て屢〻功あり嘗て總州帛一の剛力者山岸主殺助と鬪し遲美、鈴木、簗瀨と俱に之を生得す慶長十五年二月を以て歿す（君臣略傳）

イトウ　キイノカミ　伊藤紀伊守　建孝流槍術の祖なり名は佐忠奥州の人、菅槍を工にせり（武術流祖錄）

イトウ　キウカウ　伊藤九皐　書家なり華岡の男なり父の業を受て能くす（懲定便覽）

イトウ　ギサイ　伊藤宜齋「イトウリヨウシウ」

イトウ　ギダウ　伊藤宜堂　儒者にして名は雅言字は俊藏如不及齋と號す伯耆國日野郡江尾村の人初め文化中鳥取藩老荒尾氏に仕へ又京師に出て〻正親町三條氏に仕へ一が辭して江戸に游寓すること十四年學大に進む文政八年歸りて米子に居り尊て石見大森村の宰祿本氏に聘せられ又九日市に寓す天保六年出雲

神門郡上鹽谷村に寓す到る處諸生を教授し此に居ること三十年一郡翕然として學に嚮ふ文久二年鳥取侯に召され命を奉じて二部清口の兩驛に鄉黌を設けて教授す明治四年江尾村に歸老す七年二月十七日歿す歳八十三宜堂爲人溫厚にして學識經に通じ最も周易に邃し傍書に工に畫竹を善くす所著周易包蒙續孝子傳詩文集あり（日本教育史資料）

イトウ キチタラウ 伊藤吉太郎 陸軍少佐 兵大尉なり富山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て騎傳役より召集せられ歩兵第三十五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中三十七年八月二十二日清國盛京省盤龍山東砲臺に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ キッタラウ 伊藤橘太郎 陸軍歩兵少佐なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十三聯隊附として出征し翌八年三月七日清國盛京省李官堡附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ キンザブラウ 伊藤金三郎 陸軍歩兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや第一師團歩兵第十五聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はり同年九月二十日太平溝東南方高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ キンリ 伊藤錦里 越前侯の儒者なり名は韜字は若夏、莊治郎と稱す錦里は其の號又鳳陽と號す平安の人、龍洲の子、夙に家塾に學ぶ經藝を以て聞ゆ資性慎重名聞を求めず謁見を請ふものと雖ども贄を執るものに非らざれば概れ之を謝絶す越前に仕ふる殆ど四十年數々役に江都若くは福井に抵ると雖ども奉職謹慎外交を爲さず休暇家に在れば則ち生徒を教育して門外を踏まず志士溝壑に在るを忘れず諸を書して自ら警む子弟も嘗て文恪先生と曰ふ京都大震院に葬る錦里博く交らずと雖ども其の第江村北海清田儋叟と名一時に高し錦里は則ち經、北海は則ち詩、儋叟は則ち文を以て謳はる博士清原佩關目して伊藤氏の三珠樹と云ふ著はす所遵翠館集、尋海草、尋山草等あり二子を擧ぐ伯名は聖謨字は世典、紫山と號す叔名は聖訓、字は世奕、江亭と號す皆早世す故に播州の人鹽田士善を養ふて嗣とす（續近世叢語、先哲叢談）

イトウ キャウカ 伊藤鏡河 豐後藩の儒者なり名は幸猛字は寛叔、鏡河は其の號、原と田近氏九歳の時出でゝ伊藤氏の養子となる稍々長じて學を好み永五年藩侯始めて國學を建つ鏡河擢でられて督學と爲る時に年二十五恒に大河浩樂、室何遠、森伯高等と遊び好んで兵を談じ古今の成敗を論ず氣一坐を壓す天明四年召されて江都邸に至り淨安香橋の二公子に併せ傳たり能く啓沃の任を盡す香橋公子統を承るに及て近侍長に轉す幾なくして學館司業に遷る大鑑公統を承く嘗て一友紙を贈る即ち以て詩書古注論語古朝を寫す其又近世叢語、續諸家人物志、江戸名所墓所一覽）

イトウ クワンソウ 伊藤貫宗 京都金閣寺の長老なり尾張國東春日井郡鞍掛村に生れ幼名を宗一と呼び父は同村定光寺住職伊藤國藏なり十六歳の時大林寺に入りて得度し三十三歳の春金閣寺の住職となり以て晩年に及ぶ此間療病館を創設して京洛の貧者に施藥し又金閣寺保存會を起し名刹の荒敗を修理したる學宗教界に對する貢献少からずと云ふ明治四十一年二月二十五日入寂す

イトウ クワンポウ 伊藤冠峰 儒者なり名は一元又通稱に用ふ字は吉甫、冠峰は其の號伊勢の人、家世〻巨商たり冠峰日夜書を讀み極めて勢利に淡なり簿書計算の煩を厭ひ其の家産を以て之を弟の子に委ね自ら尾州名古屋に遊學して業を秋元淡溪に受く又醫事を好みて自ら處方を驗す府に在る五年頗る才學の名あり淡淵門人の經義に從事するものは半ば冠峰を推す後ち諸州に漫遊し晩年美濃の笠松里に隱居し田數頃を購ひ山水の際に徜徉して以て娯樂とす然れども猶ほ書を讀み業を講じて子弟に教授す其の人と爲り恭謙、喬輔江戸に徙居せし後屢〻書を寄せて江戸に來り教授を業とするを勤むべきも肯ずず又紀平洲之を尾府に薦めて儒員とせんと欲す又肯ずして曰く顏を抗して儒者と稱するは吾が能く及ぶ所に非らずと天明四年歿す年七餘江村北海冠峰を評して曰く冠峰なる藝苑に馳騁せしめば其の歌詩の名方今の赤羽護洲の諸子に讓らずと著はす所自放編、冠峰文集、綠竹園詩あり（先哲叢談、諸家人物志）

イトウ ケイイチラウ 伊藤啓一郎 陸軍歩兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第三師團歩兵第三十四聯隊附として出征し同年十月十二日清國盛京省沙河堡

附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ ケイザウ 伊藤敬藏 勤王の志士元治甲子の京變に殉難せる人なり長州藩士諱は正直通稱を敬藏といふ奇兵隊の一時勢力の挽みしを見同志櫻井愼平等と別に一隊を組織し之を集義隊と名づく元治元年甲子七月十九日の京變に於て隊士擧りて天王山に據るや正直砲隊の長となりて京に進入し鷹司邸中にて勇戰して失せぬ（殉難錄稿）

イトウ ケイスケ 伊藤圭介 有名の博物家なり、尤も植物に委し錦窠と號す幼名を西山左仲と云ふ名古屋の醫西山玄道の次子にして享和三年正月二十七日生る兄存眞大河內氏を嗣ぐを以て圭介乃ち家を出て儒學と醫學を講習し傍ら植物を好み水谷助六に從て植物學を學ぶ又文政四年十九京都に游び洋學を藤森泰助に學び十年江戸に出て宇田川榕庵に從ひ植物を研究す屢〻諸先輩に從て諸國に遊び山川を跋渉して動植鑛物を採收す是より先獨逸人シーボルド長崎に來り文政九年將軍に謁するの途次熱田驛に水谷助六大河內存眞及び圭介と會見し互に樽俎する所多し十年三月望、圭介の宅修養堂に同志を會して藥品會を開く出品中虎頭象皮象齒犀皮木綿茯等あり又諸物産家の眞蹟あり是後年博覽會の嚆矢なり徑屢〻同會を開き漸く擴張する所あり圭介夙に長崎に游ぶの志あり父母に乞ふて終に許され年二十五の九月長崎に遊ぶ蘭館に出入しシーボルドに就て醫と本草を學ぶ同窓に高良齋、高野長英、岡研介、賀來佐一郎、林洞海等數十人あり翌年春齡して歸るに臨みシーボルド贈るにツンベルグの日本植物書を以てすゝ氏は林鄕氏の高弟にして天明四年我が國に來り調査せし所を著述せしものなり圭介後に此の書と林鄕氏の二十四綱を參照して我が植物の羅丁名を付し又二十四綱を譯し泰西本草名疏を著したり名古屋に歸るや蘭法醫を開業す然れども未だ行はれず天保八年因歎なし版木を圭介に借りて數千册を印刷し領內に頒つ又種痘の法を唱へ先づ自家の小兒に種ゑ又貧人に錢を給して之を試みしむ皆邇痘の効あり藩の世子亦之を種ゑんと臨時に藩醫格に進め施術を行はしむ是より漸く洋法の隆盛を見るに至れり嘉永中海防論盛に行はる四年圭介遠西礦石考を譯し又三百目加農砲を鑄て藩に獻ず頃して丹心報國と云ふ安政六年藩の寄合醫師に命ぜらる又領內の諸國を經歷して標本を蒐集することを命ぜらる文久元年九月幕府の命を以て江戸の蓍書取調所物産學出役を命ぜられ二十八扶持金十五兩を給せらる文久三年十二月病を以て辭して郷に歸る是より先シーボルド獨逸に歸るの際に禁を犯して再渡を禁ぜらる是識特に政命あり再び來朝して横濱に來る圭介に面せんことを乞ふ圭介幕府の命を以て横濱に出張し歷訪する所あり時に虎列刺病流行す圭介暴瀉病手當素人心得書を刊行し之を世間に頒つ慶應元年藩の奥醫師に擢でらる明治三年朝廷藩に命じて圭介を召す同十二月大學出仕を命ぜられ少博士準席となる四年七月文部省出仕となり六年獨書課に入て官版日本產物志の編輯に從事し漸次各國の部を落す十年九月東京大學理學部員外教授となり又小石川植物園に於ける植物取調を擔任し同開草木目錄及び圖說を編す十四年七月教授に任し同年內國博覽會の審査官となり以後屢〻審査官を命ぜらる十二月東京學士會院會員に推選せられ十五年從五位に進み二十年勳四等に叙し廿一年理學博士を授けらる二十九年九十賀壽の博物會を名古屋に開く二十六年從四位に叙す廿四年一月廿一日男爵に叙し勳三等に叙し大學名譽教授に任ぜらる同日歿す年九十九著す所右擧ぐる所なり今より永く戸役を除き年々銀を賞ひて以て積善を表せんと弘化二年八月歿す私に謚して靖共と曰ふ（野史）

イトウ ゲンボク 伊東玄朴 醫師なり名は淵長春院法印と稱す明治四年正月二日歿す年七十二

イトウ ゴ コアン 伊藤五「フヂハラタダキヨ」庵 名は立誠初め高と號す京都の儒者なり尾張藩に仕ふ正德元年正月歿す年七十一（諸家著述目錄）

イトウ コウアン 伊藤恒庵 江戸の儒者なり名は履仁字は天爵文化七年歿す下谷金杉東源院に葬る（江戸名家墓所一覽）

イトウ コウサイ 伊藤弘濟 京師の儒者なり壽賀藏と稱す東里の子（或は云ふ弟なりと）父の業を繼ぐ人と爲り溫厚にして寡言天保九年の冬德川幕府命じて曰く弘濟父祖五世教論を以て任とす純德の報想ふに當に斯の如き綿々の業あるべし是れ世に希に見る所なり今より永く戸役を除き年々銀を賞ひて以て積善を表せんと弘化二年八月歿す私に謚して靖共と曰ふ（野史）

イトウ コザエモン 伊藤小左衛門 三重縣伊勢國三重郡室山村の人なり始めて製茶製糸の業を縣下に興す鑒し小左は家世〻農業を營み傍ら味噌醬油等を釀造す始め家計甚だ裕なら弟三人あり曰く小右衛門曰く小三郎曰く所左衛門、小左三弟と共に同心協力して專ら家業を勵み自ら雇人に先ちて事に從ふを以て未だ數年ならずして釀造の業大に進み遂に室山味噌の名を成し販賣の途日に弘まれるに至れり會〻安政元年小左地大に震ひ其の郡中最も甚しく有つの家屋倉庫等皆な倒潰に歸し之に加ふるに連旬の霖雨を以て貯ふる所の味噌醬油類も亦大率腐敗に屬し從來の產業殆んど地に墮んとするの傾きあり是に於て小左兄弟相謀り名は益道字は子行、華岡は其の號善藏と稱す伊勢の人、江都に寓す初め細井廣澤に學び又關鳳岡に從ひて師說を研究し六書に於て大に發明するところあり後趙文敏を慕ひ一家の風を成す安永五年十一月廿九日歿す年六十八下谷金杉東源院に葬る著はす所五鉢千字文、容衆當集、華岡印譜、八仙歌帖及び臨僕帖等あり（續近世叢語、續諸家人物志、江戸名所墓所一覽）

イトウ ゴヱモン 伊藤五「フヂハラタダキヨ」 クワカウ 伊藤華岡 江戸の書家な

各〻其の負擔を分ち奮ひて他人の手を假らず三年を期して此の損失を回復せんとを謀り辛苦經營日夜懈らず期に先ち遂に家屋倉庫を再造し其の結構反て舊時に優れり元來室山の地たるや四日市驛の助郷にして常に馬を出だし運送の用に充て來れり其の一頭の給米年〻十四俵の定制なりと雖ども文化年間米價頗る騰貴したる以て其の米額を減ぜり是より驛馬及び助郷馬も亦た頭數を減じ運輸の道澁滞して商業者の苦情少からず小左之を憂ひ車を以て馬に代ふるの利あるを說くと雖ども驛吏等舊慣に泥みて容れず因りて小左之を官に陳供し猶ほ屢〻請ひて已まず遂に允許を得爾來其の便に依り運輸頻繁にして沿道諸人馬給せざるの時に遇ふと雖ども獨り四日市のみ其の乏きを告げず是れ皆な小左の功なり嘉永七年領主松平下總守の用達となり勤苦多きを以て苗字を稱し雙刀を佩ぶるを許され庄屋格上席より代官格上席に進む一日小左書を閱し外國に於て茶及び生絲の需用殊に多きを覺り始めて志を蠶茶の業に歸し乃ち山地段歩許を開拓し茶實を播き而して耕耘培養の道を盡し凡そ五年を閱して遂に二十貫目の茶芽を摘むことを得たり安政六年に至り横濱港開け茶絲の互市始めて行はるゝを聞き其の素志に慊ふを喜び文久元年茶商と相謀り製茶十餘萬斤を運送して二千六百餘圓の利を得而して益〻茶樹を植ゑ製造を務め園地を增したるもの稀にして小左之を勸むれども敢て信を置かず茲に至りて人其の先見に服し競ひて之が栽培を謀るに至れり故に北勢の產茶なして現今の盛大に至らしめし所以のものは小左が僅かに五町の園圃より起因せしものなりと云ふ小左又一方には蠶事を起さんと欲し先づ桑苗二百株を得て之を己れの園圃に植ゑ各地の培養法を參酌して以て其生成を遂げ而して養蠶を創む文久二年始めて工女二人を雇ひ手繰法に倣ひて試に生絲を製す其次年は工女十人第三年には二十人第四年には三十人と逐次專業を擴張して明治六年に至り信濃國の風に倣ひて器械繰製絲に改め翌七年に八十八坪の製絲場を建て以て上野國富岡製絲場の式に據りて十人繰の機械を据ゑ尋で四十二坪の貯繭庫四十二坪の蒸氣釜場を造り又別に三層の養蠶室を構ふ而して製絲者を信州諏訪より招き生絲百餘斤を製したり然るに其品質善良ならず富岡製に比すれば價格四割を減じ之が爲め一千餘圓の損失を蒙れり然れども小左毫も挽ま自ら富岡に抵て製絲の要法を學び翌八年器械を增し廣めて二十人繰圓を賜りたり又前後博覽會共進會に生絲茶を出して褒賞を受けたるは明治十年內國勸業博覽會に於て生絲に優狀を受け同年佛蘭西萬國大博覽會に於て銅牌を受け同年墺太利國萬國大博覽會に於て二等賞を受け同年第二回內國勸業博覽會に於て有功三等賞を受け同十六年神戸共進會に於て茶に賞井に追賞を受け同年第二回內國勸業博覽會に於て銅及び生絲に銀牌を受けたり子小左衛門嗣ぐ（官報）

イトウ　コジラウ　伊藤小次郎　陸軍步兵少尉也三重縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第三師團步兵第二十三聯隊附として出征中同年十月十四日清國盛京省沙河附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ　コレフサ　伊藤惟房　陸軍步兵少佐なり茨城縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第七師團步兵第二十五聯隊附として出征旅順攻圍軍に從軍中同年十一月三十日赤坂山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イトウ　サコン　伊東左近　勇　武の士也或時の戰に忽ち敵三十人を殺す赤見新兵衛驍せ來る左近與に戰て深く之を傷く而れども終に山形伊賀守の爲に討たれ死す（本朝武功正傳）

イトウ　シウラウ　伊藤脩郎　陸軍一等藥劑官なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや姫路陸軍病院に勤務し次で出征同七月十八日清國盛京省思山嶺にて病に罹り同三十八年十月十日姫路陸軍病院に於て死去す戰功に依り勳四等に叙せらる

イトウ　シゲオミ　伊藤茂臣　尾張の醫者なり字は子長資性義氣あり孝子の病むもの あれば涙を垂れて救藥す又其の貧なるを見れば厚く施與す常に子弟に謂て云く醫の人を治むる豈に其の貴愚親疎を問はん然れども其の吉人に於ける最も常に心を盡すべし と（近世叢語）

イトウ　シゲヨシ　伊東重義　通稱新左衛門伊達侯に仕へて國老に至る初め執政伊達宗勝政を擅にし竊に宗家を奪ふの志あり嘗て奥山大學を擧げて國老と爲す大學勢を恃みて人に驕り酒色に沈湎し私を營みて國を害す重義同志の士と共に上疏激切す宗勝又た大學の職を罷ひ重義及び原田甲斐を以て之に代らしむ甲斐は性奸巧宗勝の與に國事を謀る可らざるを知りて固辭すれども聽かれず因て宗勝及び執政田村宗良に請ひて云く事若し請ふ所の如くならば即ち就かん然らざれば就くも亦益なしと其の言に云く二氏宗家の爲めに竭さんとせば即ち宜しく命を効して已まざる可し且つ其の言の少しく國家に裨ひありとせば芻蕘と雖も敢て拒む勿れ又云く事の家に係るあらずして二氏の私を以て人を翻陟するを得る莫らしめよ或は其の自利を謀るを勸むる者あれば二氏宜しく己の寇となして之を逐ざるべし又云く二氏或は相猜疑して隙を生ずる毋れと二氏其の言を善とす因て誓書を送る重義幾ばくもなくして病みて死す（事實文纂）

イトウ　シゲヲ　伊藤重雄　陸軍步兵中尉なり千葉縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ近衛後備步兵第一聯隊附として出征中三十八年十月四日清國盛京省夏家堡子にて病に罹り同二十九日上肥地會營病院に於て死去す

イトウ　シゼン　伊藤士善　越前侯の儒者なり本姓鹽田氏、播州北條の人名は榮吉、士善は其の字君敬と號す錦里に三男あり皆早世す士善養子となりて其の家を嗣く編井侯に仕へて家政を墮さず寛政八年歿す（變定便覽）

イトウ　シンゴザエモン　伊東新五左衛門　加藤清正の家人なり、慶長五年九月宇土城を攻て功あり（君臣略傳）

イトウ　シンゴラウ　伊東新五郎　元と武田氏の臣なり天正十年の秋德川家康織田信長に從ひ甲州に入りし時遂に家康に從ふ是の時北條氏直慶〻招くといへども應せず氏直復た書を裁して招く中澤縫殿左衛門同新右衛門卒に氏直に謁ふ新五郎米倉左太夫と俱に中澤を斬り其の首級に氏直の書簡を添て家康に獻す家康感賞す（君臣略傳）

イトウ　ジンサイ　伊藤仁齋　鴻儒なり名は維楨字は源佐、初の名は維貞字は源吉、仁齋は其の號又た古義堂と號す堂前に海棠一株あり因て又棠隱の號あり平安の人、父長勝三子あり仁齋は其の長子、寛永丁卯堀河に生る幼にして深沈、戲遊を好まず十一歲のとき始めて大學の治國平天下の章を讀み歎して曰く今世亦之を知るもの有る乎と既にして稍〻詩を屬するに用語凡ならず衆共に嘆異す十九歲にして李延平問答を讀む反復齧まず紙爲に爛敗す是より意を性理の學に用ひ日夕研磨し遂に心學原論、大極論及び性善論を著す皆二十八九歲の頃に在り其の室に皷修の二字を揭げて自ら警しむ個〻疾に罹りて人事を謝絕すること殆んと十年計り家產之が爲に傾く親戚故舊皆勸め遂に宅を伸弟に附し別居書を讀む間〻老佛の教を修め嘗て自骨觀法を修して山川城郭悉く空想を現ずる僥ゆ既にして其の非なるを悟りて之を廢す中歲にして始めて宋儒の學は孔孟の意に乖くの疑を發し考索多年略〻諸に就くを得たり乃謂く大學の書は孔氏の遺書に非ず而して明鍵止水、沖漠無朕、眇用一源等の說は皆老佛の淫辭にして聖人の意に非ずと是に於て門を閉て生徒を延く門前惑ち市を爲す曰く諸葛孔明は霸者の臣のみ豈に王位の才あらんや或は得られざるを治むるに在り何ぞ爭ひを事とせんと、後德大明亦我爲る能はず古の宰相論語半部互に攻辯卒に或は相諷詞するに至る然れども仁齋は獨り坦夷溫厚終始爭はず年三十六にして始めて論孟古義及び中庸發揮等の諸書を草定す又同志會を設け聖像を壁間に掛け先拜して後物を品第して生徒を勵まし或は私に筵問を擬作して書生を試み復文會を設けて文章を習はしむ毎月以て常とす延寶元年京師火あり延いて書堂に及び百物蕩盡す此の時仁齋唯〻古義一部を持して逃れ京極大恩寺に寄居す是より先き母里村氏賂遺を患ふること三年仁齋奉養備さに至り未た一日も懈怠せず肥後侯聘禮を厚うして招げども辭するに侍養入なきを以て應せず明年父亦死去す服喪前後過して四年なりと云ふ仁齋人と爲り寬厚和毅、疾言遽色せず人に接するに誠を以てす而して其の大義の關する所に及びては之を誘ふに百石を以てすと雖ども奪ふ可からず故を以て德聲日に隆し四方の士京を過ぐるもの學ぶと學はざるとを問はず一たび其の面に接し其の講ぶ聽くを願はざるはなし刺を投して來謁するもの無慮三千餘人唯〻飛驛佐渡壹岐の人門に及はざるのみ一日大石良雄來りて其の講に侍り睡りて臨かず衆皆微笑す仁齋曰く汝等妄りに笑ふ勿れ予を以て觀るに彼れ庸器に非ず必ず能く大事に堪へんと後果して然り生徒を敎導する未だ嘗て科條を設け書察を嚴にせず而れども各〻其の材を成す平生學者に勸むるに道術に明かに治亂に達し有用の材たるべきを以てし空文に馳せ記誦に流るゝを戒しむ學專ら論語を以て主とす孟子之に次ぐ勞ら易大學近思錄等の書に及ぶ敎授倦まざること四十餘年之を講ずる直に主意の明かなるを期して末稍を研究せず從容屬飫、醴く者啓發する所多し嘗て曰く儒者の學は最も闇昧を忌む其道を論じ經を解する須からく明白端的なるべし十字街頭に在りて白日事を作すが如く一毫も人を瞞着し得ずして可なり附會すべからず穿鑿すべからず假借すべからず遷就すべからず尤も圓護以て其の短を掩ふを忌む又粃點人をして悅ばしむるを戒む云々と又曰く諸葛孔明は霸者の臣のみ豈に王位の才あらんや或人問ふて曰く子獨に用ひらるれば孔明の功復た爲すを得べきやと仁齋曰く人各〻能あり我孔明たる能はず孔明亦我爲る能はず古の宰相論語半部を以て天下を治するものあり我亦孟子梁惠王一篇を以て天下を治めんと其の志を立つる此の如し文を作る專ら唐宋八家を祟とび辭理平穩務めて通曉し易からんことを欲し文選浮靡の句、李王鉤鎖の辭皆之を取らず明に於ては唯〻唐荊川、歸震川、王遵巖の三家を取るのみ其の詩は杜工部を宗とす眞享中中津の浮屠道香將に國に歸らんとす仁齋序を贈りて曰く自人視之固有儒有佛、自天視之本無儒無佛、吾道師道、豈有二乎哉、と然れども其の後に至りて又曰く雖釋迦不能離今日之天地一而獨立則自見之儒道之不可離爲と朝鮮安愼徵之を覽て曰く其の旨趣固より古人と異にして而して文亦絕佳、日本未た此の如きの文あるを聞かずと携へて其の國に歸る元祿十五年仁齋篤學の聞震疆に達す

留して其文を索めしむ仁齋之を讀む世之を樂とす仁齋家屢〻空し然れども之に居て晏如たり又世の毀譽褒貶毫も慊懥に介せず五子あり長は長胤、次は長英、次は長衡、次は長準、次は長堅各〻儒學を以て顯はる而して長胤、長堅殊に秀出たり時人相呼びて曰く堀川五藏首尾最も眞しと寶永二年三月十二日仁齋歿す年七十九私に謚して古學先生と曰ふ明治四十年十月廿三日正四位を贈らる著はす所心學原論、大極論、性善論、論孟古義、中庸發揮の外に大學定本、童子問、語孟字義、文集、詩集、周易乾坤古義、春秋經傳、通解、仁齋日札、讀近思錄鈔、和歌集、文式等あり（先哲叢談、近代名家著述目錄、近世叢語、仁齋日札、野史、甘雨亭叢書）

イトウ　シントク　伊藤信德　京都の俳人なり通稱は助左衛門、竹丈子又梨柿園と號す初の名は宗宵、松永貞德の門人（一に高瀨梅盛の門人後ち江戸檀林に會す）なり又山本四武高瀨梅盛芭蕉等に交る元祿十一年十一月十一日又曰く十月十三日歿す年六十餘（俳林小傳、名人忌辰錄）

イトウ　ジンペイ　伊藤甚平　佐渡國相川の人にして弘化の初年金坑内に產する無名異を用ゐて一種の燒物を製し始む是れ即ち相川朱泥燒の創始なり（陶工傳統志）

イトウ　ギャクチュウ　伊藤若冲　京師の畫家なり初の名は春教、後ち汝鈞字は景和、若冲は其の號、又斗米庵と號す、青物問屋の主なり幼より畫を好み初め狩野家に學ひ後ち元明の古蹟を模倣し又光琳等を能くす殊に鷄畫に巧みなり家に鷄數頭を養ひ數日其の形狀を熟視して後ち揮毫す故に能意其の眞に入る恰かも靜動鳴啄の爲すが如し然れども形似を事とせず專ら寫意を主とせり世人大に感賞して其の名一時に傳播す後ち京師の深草石峯寺の側に閑居して黃檗派の傳瑚和尚に附屬す偶〻鷄の畫を請求する人は必ず米一斗を以て謝禮とす故に斗米庵の號あり寛政十二年九月十日歿す年八十五（畫乘要略、扶桑畫人傳、石亭畫談）

イトウ　ジュンキチ　伊藤順吉　陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第廿二聯隊附として出征中卅八年一月廿八日清國盛京省葦塘堡南近に於て戰死す戰功に依り勳六等功九級に叙せらる

イトウ　シュンリン　伊藤春淋　京師の儒者なり父元圓は筑後の人、醫を業とす春淋長崎に生る年叅州侯に仕ふ後ち致仕して京師に寓居す寛文十八年歿す（鑒定便覽）

イトウ　ショウケン　伊藤松軒　江戸の歌人なり武者小路實岳の門人倚松庵と號す次太夫と稱し又畫を能くす寛政六年十月三十日歿す年八十六（江戸名家畫所一覽）

イトウ　スケカネ　伊東祐兼　原と昌吉と稱し薩藩荒田村の人なり日州飫肥の區長となり士民を誘導して學校を設け以て子弟を養ふ故に該區の人復た鹿兒島に游學するものなし是を以て私學校黨祐兼を惡むと甚し已にして野村綱等捕はるとの聞く祐兼素より知人たるを以て自ら安んずる能はず乃ち永山彌一に從軍して右衛門尉を見て其の異志なきを示す皆曰く速に從軍せよと是に於て清武隊に屬して肥後に入り岩村に出て戰ふ幾ばくもなく彌一の命を以て鹿兒島に赴き歸官に募兵を促す應ずるもの數百驅て隊伍を編制し由日某と之を率ゐて木山に到る偶〻病に罹り退て人吉に在り又村田新八の命を受て福山に至り又薩營を發す尋て本營の長岩本平八に代り伊敷の援兵に赴く亦都城に至り支營を設け守りを置て還る已にして熊本鎮臺の命を受て宮崎に走り軍務所の部密となり專ら兵政を執る宮崎陷るに及びて終に官軍の爲めに獲らると云ふ（西南男士傳）

イトウ　スケキヨ　伊東祐清　祐親の次子なり九郎と稱す初め頼朝の伊豆に流さるゝや祐清其の常人に非ざるを知りて私に善くし之を遇す父祐親の將頼朝を殺さんとするや祐清其の謀を告げて以て之を遁けしむ頼朝深く之を德とす祐親の死するや祐清其の子祐親怨讐して遂に之を廳に設ふ勝して曰く汝が父の罪は吾猶ほ之を宥めんと欲す汝は吾子祐經を以て之に托して曰く金石の年十五に及ばゝ則ち子爲めに烏帽子を加へ妻すに子が女を以てせよと祐親之が許諾す金石は祐經の幼名なり既にして長じて伊東莊を食む祐親は祐經と同く京師に往き平重盛に謁して祐經を留めて宿衛せしめ身伊豆に還りて悉く其の采邑を擧ふ祐親之を官に訴ふ祐親竊に主司に賂ふ主司裁決して各〻其半を領せしむ祐經怨恨竊に京師を出て將に祐親を圖らんとす祐親悟りて駅を京師に告ぐ祐親憤懣に祐親を殺さんと謀る時に源頼朝謫せられて伊豆に居る祐親及び子祐泰諸豪族と頼朝を迎へて富士野に獵す祐泰先づ至る八幡後より射て之を倒す祐泰暫絕し馬より墮つ祐親繼で至る大見射て其の手指を傷く祐親呼びて曰く賊あり之を捨て集る大見八幡身を脫して逃る祐親祐泰を見て其の矢を拔き擊ち屬して曰く汝を射る者は誰ぞ祐泰瞋目中あり曰く祐經宿怨あり衝憤乃ち次子祐清を遣して大見八幡を殺さしむ初め頼朝の伊東に在り其要私かに之を告ぐ祐親家に還り聞て之を惡む罪を平氏に獲ることを恐れて竊に其の兒を殺し併せて頼朝を害せんと圖る祐清之を告ぐ頼朝走りて北條に適く治承中頼朝兵を擧げて石橋山に敗れ土肥に走る祐親兵三百を帥て之を追ふ及ばず乃ち土肥の民屋を燒て還る頼朝兵威日に盛に隣東悉く降附す祐親勢窮り將に舟を伊豆餌名に艤し駿河に赴て平維盛に會せんと して途に天野遠景の爲めに擒へらる時に頼朝黃瀨川に屯す遠景祐親を以て往て之に詢す祐親の女婿二浦義澄請ひて之を己れが家に拘す謫永中頼朝の妻政子のことあり因て祐親を宥さんと請ふ頼朝之を許す義澄大に感び祐親をして幕府に詣りて罪を謝せしむ祐親歎じて曰く我何の面目ありて復た頼朝を見んやと遂に自殺す（大日本史）

イトウ　スケノブ　伊東祐命　歌人なり三郎と稱し柳園と號す鶴岡藩士風に才名あり維新の際力を藩事に盡して功勞勝からず初め郷戸久敬の門に入り又た前田夏陰、加藤千浪に就きて孰れも其奥を窺ふ所勤務の首座となる明治二十二年十月病歿す年五十六、其の遺稿柳の一葉二卷世に行はる（柳の一葉）

イトウ　スケマロ　伊東祐麿　酒鹿兒島藩士にして帝國海軍の指導者なり天保五年八月鹿兒島に生る明治元年正月春日艦長に補せられ同月兵庫出發阿州伊島沖に於て幕府の遠征艦開陽丸と砲戰す同八月隆軍應援の爲め阿州に赴く二年奥羽發〻崎に於て脫走艦回天丸と砲戰す慶應十二月歸京す三年三月乾行艦長として出京し之を獻納す八月普佛問戰我が國局外中立を宣するにより沿海警備を命ぜらる十月海軍少佐に任じ正七位に叙せらる尋で龍驤艦の副長に補し四年中佐に進む五月中軍隊增撰官に補せらる此月御巡幸の供奉として四海を航行す八月海軍少將に陞進す六年外務兼副島種臣清國差遣により艦行を命ぜらる七年盛滯著地處分に關し副島種臣清國に赴く八年東部指揮官命ぜらる十年の役陸軍中將鮫島黑田清隆と俱に應援官を命ぜらる十年の役陸軍中將鮫島黑田清隆と俱に應援官を命ぜらる十月勳功により勳一等に叙し旭日重光章を賜はる十一年十一月海軍中將に進む十三年三月海軍省出勤を命ぜらる十二月軍務局長を命ぜらる十七年兵學校長に補せられ七月特旨を以て華族に列せられ勳功により子爵を授けらる十八年八月國防會議議員を命ぜらる十二月元老院議官に任ぜられ錦鷄間祗候を命ぜらる十月海軍少佐に從五位に叙せらる二十年十一月從三位に叙せらる二十年十一月貴族院議員に任ぜらる三十二年四月侯爵を命ぜらるの高齡に付御紋付御杯並に酒肴料を下賜せらる三十七年九月正三位に叙せられ三十九年二月二十六日特旨を以て位一級を進め從二位に叙せらる四月必ず平氏の爲めに碧血を注ぐ年七十五海軍大臣は特に現職の禮遇を以て遂に薨す

イトウ　スケユキ　伊東祐之　加州の儒者なり字は禮卿峯野と號す祐之は其の名頼名は申言、字は思思、剛溪と號す京師の產、幼にして穎悟風に文を爲す此時藩藩の議論勤王佐幕の兩派に分れて懦背定らず清兵衛卓然として惑はず諸藩の志士と交り偏に勤王の志を保持す之が爲め俗論黨の讒する所と爲り慶應元年八月同志と共に幽囚せられ九月禍を沒せられ十月二十三日遂に死に處せらる時に年三十五明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる

イトウ　ゼンキ（アキ）　伊藤善鬼（ミコガミタダ

イトウ　スケヨ　伊東祐世　豐後岡藩の文學者なり字は孟禮、又子長、檢溪と號す輔世は其の名鏡河の子父に職秩を承けて學館の司業と爲る（近世叢語）

イトウ　スケヨシ　伊東祐慶　祐丘の子初め右京亮と稱す慶長關ヶ原の亂に年甫て十二父に代て關東に左祖し大阪より采邑飫肥城に之き佐土原を拔き遂に諸地を復す十一月黑田如水及び加藤清正兵を合して清正等兵を班へすに及び祐慶失望す七年更て修理大夫と稱す十三年卒す子孫世〻侯たり（野史）

イトウ　スケサブラウ　伊東季三郎　陸軍歩兵大尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十三聯隊附として出征中卅八年三月七日清國盛京省李官堡附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ　セイスケ　伊藤清輔　陸軍歩兵中尉なり岩手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第五聯隊附として出征中卅八年一月廿七日清國盛京省黑流臺附近戰鬪の際負傷し三月一日遂陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ　セイベイ　伊藤河兵衛　勤王の志士なり諱は勝益字は默道幼名平次郎後に清兵衛と改む島津右衛門の四男なり後藤陶藩士伊藤暴之助に養はれ安政四年其議を受けて祿二百石を受て清兵衛人と爲り溫厚にして氣慨あり幼より力形深藏魚住源次兵衛等に從ひて文學を研究し又武術を習ひ弓馬劍槍等其道に通達せざるはなし萬延元年足經頭となり後長崎に勤番し病により歸て藩を辭す元治元年十月京都守衛の命に任じ尋いで大津より越前敦賀に至り武田耕雲齋等の議送を爲す此時藩論勤王佐幕の兩派に分れて懦背定らず清兵衛卓然として惑はず諸藩の志士と交り偏に勤王の志を保持す之が爲め俗論黨の讒する所と爲り慶應元年八月同志と共に幽囚せられ九月禍を沒せられ十月二十三日遂に死に處せらる時に年三十五明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる

イトウ　ゼンキ（アキ）　伊藤善鬼（ミコガミタダ

イトウ ゼンヂ 伊藤善治 陸軍歩兵少佐なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て臨備役より召集せられ第七師團歩兵第廿五聯隊附となりて出征し卅八年三月八日清國盛京省小集屯附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ ソアン 伊藤素安 醫者なり風竹軒と號す醫を以て時に行はる元祿中の人也（京師に住す（鑒定便覽）

イトウ タクジ 伊藤卓二 海軍少機關士なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや海軍少機關士候補生として軍艦吉野に乘組み從軍中同年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突に依り吉野沈没の際戰死す年二十四戰功に依り少機關士に任ぜらる

イトウ タケアキラ 伊東武明 新選組の壯士なり初名は甲子太郎後に攝津と改む常陸志筑の藩士にして擊劍に長し和歌に達す憂國の赤心を貫かむと欲し同志を募り遂に實弟鈴木三樹等十五名を率ひ慶應元年春土方歳三の説に應し新選組に入る隊長近藤勇之を擧て參謀となし鈴木以下委く精鋭の壯勇なるを以て之を什伍長に任ず同隊の威爰に於て盛大なり征長の役中國九州を巡廻して曉る所あり因て寡り内治を主とし外寇に當らんと論ず近藤土方等は佐幕主義なるを以て之と善からず武明等大久保市藏に面會し自説を述ぶ大に賛成を得て遂に離隊に決し同志等と謀り一夜近藤等と大激論し直に分袖して洛東高臺寺内月心院に寄宿し山陵衛士となる爾來市藏の厚遇を受く勇これを以て薩に籠し討幕の徒に與すとなし謀計を構へ先つ武明一人を誘ひ酒宴を設けて泥酔せしめ之を歸路に刺す猶寵を施して其同志を殺せんと伏を四方に張り其術中に陷入れ藤堂平助服部三郎兵衛千葉監物等を殺し數人を傷く時に慶應三年十一月なり（新選組始末記）

イトウ タダナリ 伊藤忠也 一刀流忠也派劍術の祖なり小野忠明の子、典膳と稱す父の業を傳へて大に其の家名を揚ぐ父忠明其の精妙を稱して伊藤景久三十三度の勝負に用ふる所の一文字刀なり門下の徒弟數十百人あり急井忠雄最も著はる伊藤忠雄是れなり（事實文編、武術流祖錄）

イトウ タダヲ 伊藤忠雄 一刀流第四世の劍客なり本姓は龜井氏、平右衛門と稱す世々紀州藩代々宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て臨備役より召集せられ第七師團歩兵第廿五聯隊附となりて出征し卅八年三月八日清國盛京省小集屯附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ ソアン 伊藤素安 醫者なり風竹軒と號す醫を以て時に行はる元祿中の人也（京師に住す（鑒定便覽）

イトウ タツジ 伊藤卓二 海軍少機關士なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや海軍少機關士候補生として軍艦吉野に乘組み從軍中同年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突に依り吉野沈没の際戰死す年二十四戰功に依り少機關士に任ぜらる

イトウ タツノブ 伊藤立誠 平安の儒者壯士なり初名は甲子太郎後に攝津と改む常陸志筑の藩士にして擊劍に長し和歌に達す憂國の赤心を貫かむと欲し同志を募り遂に實弟鈴木三樹等十五名を率ひ慶應元年春土方歳三の説に應し新選組に入る隊長近藤勇之を擧て參謀となし鈴木以下委く精鋭の壯勇なるを以て之を什伍長に任ず同隊の威爰に於て盛大なり征長の役中國九州を巡廻して曉る所あり因て寡り内治を主とし外寇に當らんと論ず近藤土方等は佐幕主義なるを以て之と善からず武明等大久保市藏に面會し自説を述ぶ大に賛成を得て遂に離隊に決し同志等と謀り一夜近藤等と大激論し直に分袖して洛東高臺寺内月心院に寄宿し山陵衛士となる爾來市藏の厚遇を受く勇これを以て薩に籠し討幕の徒に與すとなし謀計を構へ先つ武明一人を誘ひ酒宴を設けて泥酔せしめ之を歸路に刺す猶寵を施して其同志を殺せんと伏を四方に張り其術中に陷入れ藤堂平助服部三郎兵衛千葉監物等を殺し數人を傷く時に慶應三年十一月なり（新選組始末記）

イトウ タダナリ 伊藤忠也 一刀流忠也派劍術の祖なり小野忠明の子、典膳と稱す父の業を傳へて大に其の家名を揚ぐ父忠明其の精妙を稱して伊藤景久三十三度の勝負に用ふる所の一文字刀なり門下の徒弟數十百人あり急井忠雄最も著はる伊藤忠雄是れなり（事實文編、武術流祖錄）

イトウ タツタラウ 伊藤龍太郎 勤王の志士なり諱は祐之通稱を龍太郎といひ丹波氷上郡中山村の農民直四郎が伊子なり嘉永年中柏原の藩士廣澤門平が養子となり間もなく離別せられ郡に上り大野應之助の弟子となりて劍術を修め安政二年江戸に行き桃井俊藏の門に入り猶ほも其技を磨きたり同五年八月水戸に行き弘道館に教師となり二年の後郡に歸る文久三年宣嘉親王を其地に擁ぐるに會し直に之に加はりて奮闘せしも軍利あらず祐之は出石の藩兵に捕へられ翌年正月廿五日山陰路に送られしが間もなく京都の獄に繫かれ優應三年十二月十三日遂に斬刑に處せらる年二十九（殉難錄稿）

イトウ タツノブ 伊藤立誠 平安の儒者壯士なり初名は甲子太郎後に攝津と改む常陸志筑の藩士にして擊劍に長し和歌に達す憂國の赤心を貫かむと欲し同志を募り遂に實弟鈴木三樹等十五名を率ひ慶應元年春土方歳三の説に應し新選組に入る隊長近藤勇之を擧て參謀となし鈴木以下委く精鋭の壯勇なるを以て之を什伍長に任ず同隊の威爰に於て盛大なり征長の役中國九州を巡廻して曉る所あり因て寡り内治を主とし外寇に當らんと論ず近藤土方等は佐幕主義なるを以て之と善からず武明等大久保市藏に面會し自説を述ぶ大に賛成を得て遂に離隊に決し同志等と謀り一夜近藤等と大激論し直に分袖して洛東高臺寺内月心院に寄宿し山陵衛士となる爾來市藏の厚遇を受く勇これを以て薩に籠し討幕の徒に與すとなし謀計を構へ先つ武明一人を誘ひ酒宴を設けて泥酔せしめ之を歸路に刺す猶寵を施して其同志を殺せんと伏を四方に張り其術中に陷入れ藤堂平助服部三郎兵衛千葉監物等を殺し數人を傷く時に慶應三年十一月なり（新選組始末記）

イトウ ダンサイ 伊藤濟齋 江戸の儒者なり名は貞宇は智量慈愛と號す通稱貞右衛門、好義齋の養子なり、父治成宇は順齋、常壽齋と號す京師に儒居して醫を業とす濟齋故ありて江都に來り父の兄好義齋に依る好義齋二子あり皆な天す是に於て養はれて其の子となる後ち好義齋土屋侯の別邸に老す會ゝ火災ありて其の宅延燒す因て松平周防侯の別邸に徙居す周防侯濟齋を召し月俸を賜ひて養父の養に供す養父死す爾侯尚ほ更へして寮米を給せしむ齋は其の行藝學術を尚ぶ深く六經を究め博く千史に渉る文詞を好まず實踐を以て先とす爾侯召して之を待つこと養父を待つの禮の如し年老て慈愛と號す醫書の業を辭す明和元年九月廿一日歿す年六十六嗣なし仲島氏の子約を以て子とし女を以て之に妻はす濟齋實厝中嶋巢文集を纂めて梓行す續て又其の經解若干編を纂す梓行未だ成らずして死す其の徒皆な之を惜しむ著す所性理要錄あり（續近世叢語、名家人物志）

イトウ チクマ 伊藤竹熊 陸軍砲兵大尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るや野戰砲兵第十四聯隊附として出征中同年十月十七日清國盛京省沙河附近にて病に罹り翌十一月六日新庄第五師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イトウ チクリ 伊藤竹里 久留米侯の儒者なり名は長準宇は平藏又以て通稱とす竹里は其の號平安の人、仁齋の第四子、東涯の異母弟なり歳十四にして父を喪び東涯に撫育せられ長ずるに及びて群書を博

く幽邃する三年其の寃明かなるを以て釋されて京に歸り文學の職を奉ずると故の如し坦庵年老て文學を廢せず村上友仝、伊藤仁齋等と相書し實永五年八月廿四日歿す年八十六坦庵因に在り日に書を讀み詩を賦し曾て憂色なし既にして因を出て人に語て曰く文學を爲さざるべからず我固に在て後ち益ゝ其の滋味あるを知る若し予をして俗累たらしめば則ち三年の久しき必ず憂煩して死せんのみと著はす所坦庵遺稿、老人雜話あり男元恭 先て歿す門人清田氏を養て嗣とす之を龍洲とす（先哲叢談、皇國名醫傳）

イトウ ダンサイ 伊藤濟齋 江戸の儒者なり名は貞宇は智量慈愛と號す通稱貞右衛門、好義齋の養子なり、父治成宇は順齋、常壽齋と號す京師に儒居して醫を業とす濟齋故ありて江都に來り父の兄好義齋に依る好義齋二子あり皆な天す是に於て養はれて其の子となる後ち好義齋土屋侯の別邸に老す會ゝ火災ありて其の宅延燒す因て松平周防侯の別邸に徙居す周防侯濟齋を召し月俸を賜ひて養父の養に供す養父死す爾侯尚ほ更へして寮米を給せしむ齋は其の行藝學術を尚ぶ深く六經を究め博く千史に渉る文詞を好まず實踐を以て先とす爾侯召して之を待つこと養父を待つの禮の如し年老て慈愛と號す醫書の業を辭す明和元年九月廿一日歿す年六十六嗣なし仲島氏の子約を以て子となし女を以て之に妻はす濟齋實厝中嶋巢文集を纂めて梓行す續て又其の經解若干編を纂す梓行未だ成らずして死す其の徒皆な之を惜しむ著す所性理要錄あり（續近世叢語、名家人物志）

イトウ チャウエイ 伊藤長英 福山藩の儒者なり名は長英字は鄰又以て通稱とす、梅宇と號す仁齋の第五子、東涯の異母弟、寶永中福山に釋く正德元年侯尚ほ更へして寮米を給せしむ齋は其の行藝學術を尚ぶ深く六經を究め博く千史に渉る文詞を好まず實踐を以て先とす爾侯召して之を待つこと養父を待つの禮の如し年老て慈愛と號す醫書の業を辭す明和元年九月廿一日歿す年六十六嗣なし仲島氏の子約を以て子となし女を以て之に妻はす濟齋實厝中嶋巢文集を纂めて梓行す續て又其の經解若干編を纂す梓行未だ成らずして死す其の徒皆な之を惜しむ著す所性理要錄あり（續近世叢語、名家人物志）

イトウ チャウカイ 伊藤長衛 高槻侯の儒者なり名は長準宇は平藏又以て通稱とす介亭と號す長衛は其の父を喪び東涯に撫育せられ長ずるに及びて群書を博覽し最も史學に長ず享保八年久留米侯に仕ふ猶平安に居る十三年世子の侍讀となり移りて江戸赤羽の邸に居る時に講三十五哲里東剣の後徙り學ぶもの頗る衆し終に寶暦六年九月十一日赤羽の邸に歿す歳六十五、竹里色なし既にして因を出て人に語て曰く文學を爲さざるべからず我固に在て後ち益ゝ其の滋味あるを知る若し予をして俗累たらしめば則ち三年の久しき必ず憂煩して死せんのみと著はす所坦庵遺稿、老人雜話あり男元恭 先て歿す門人清田氏を養て嗣とす之を龍洲とす（先哲叢談、皇國名醫傳）

イトウ ツナマル 伊東綱丸 海軍中尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び軍艦高砂に乘組み從軍中同年十二月十三日旅順口外鐵甕擊に參加し遂に戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ ツナマル 伊東綱丸 海軍中尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び軍艦高砂に乘組み從軍中同年十二月十三日旅順口外鐵甕擊に參加し遂に戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ ツナヤマル 伊藤長秋 江戸の書家なり字は萬年匡山と號す松山天姥の門人天明七年八月二十日歿す年五十餘（江戸名家墓所一覽）

イトウ チュウタイ 伊藤忠信 信濃國春日井の僧名は祐義庶里と號す幼より學ぶ好み江戸に出て、太田錦城に學べり性書を寫すことを好み歿せし時までに千有餘卷を寫せりといふ經書該博にして且多く歷代の鄙記を諳んじたるを以てその書を歸じ故郷を談ずるを聽く時は田夫村子も皆耳を傾けざるはなし天保九年二月廿二十七日歿す年六十一著す所中庸遡擅、孟子蒐擅、孝經解、大學解、老子解、傷寒論張義を始めその他數部あり（大田才次郎遺稿）

イトウ ツナヤマル 伊藤綱丸 海軍中尉なり東京府出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び軍艦高砂に乘組み從軍中同年十二月十三日旅順口外鐵甕擊に參加し遂に戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ デウクワ 伊東潮花 軍談師なり鷹明堂と號す易占家遊に精く旁ら之を教授す明治十三年七月廿五日歿す年七十一（名人忌辰錄）

イトウ デハノゼウ 伊藤出羽掾 大阪の人なり淨瑠璃曲を善くするを以て世に名あり未だ其の傳を詳かにせず或は曰ふ初代岡本文彌なりと今考ふ可らず（整曲類纂、常磐津系圖等）

イトウ トウガイ 伊藤東涯 京師の碩儒なり名は長胤原厝と稱す東涯は其の號又儘々齋と號す

明人陳元贇に從ひて書法を學ばしむ侯に從ひて京都に往來すること殆と十餘年其の後母老い父既に死して供奉するものなきを以て仕を辭して京師に還る時に年二十餘議孝養至らざるなし人以て孝命伯陳茂烈に比す、母卒して葬頭の意を絶ち戶を閉ぢて書を讀み研磨年を經る諸侯重嘗を以て招くありと雖ども辭して就かず屢ゝ窮厄に遇ふも志を守て益ゝ堅し號を固菴と改たむ醫し之を習ふ者は固と窮するの習に取り以て自から勵む也遠近其の名を聞き篤く負ひて門下に輻輳する者千餘名に及ぶ然れども立誠素より世の調章を衒り以て利を求むるを疾み專ら經を明かにし道を講ずるを以て己の勤と爲す、雄辯强記、議論を善くし詩賦及び聯句に工に且つ書を善す又た平生吟咏を好む然れども唯ゝ慰適して興を遣るのみ雖益小技を以て人に誇示するを欲せず故に其の稿を留めて世に傳ふることなし京師に教授すること三十餘年先きに一女あり蚤く逝す後終に娶らず六十餘の秋忽ち中風を患ふ而かも猶ほ未だ一日も講論を廢せず墨繼として壯年に異なることなし實永五年三月京師に大火あり立誠災に遇ふ著はす所の經說講義、杜律考證此時皆な焚く殘す所伯寛按馬論、漫興等僅ゝ數篇のみ終に窩を東洞院永昌坊南に移し居ること三年舊疾愈えず終に正德二年正月卒す年七十一（墓誌）

イトウ タミシラウ 伊藤民四郎 陸軍歩兵中佐なり群馬縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや歩兵第十九聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加はり同年十月十九日清國盛京省二龍山に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

イトウ ダンアン 伊藤坦庵 越前侯の儒官なり名は宗恕、字は元務、坦庵は其の號又通稱とす自雲散人、不醒齋、自怡堂の別號あり京師の人龜丹後守宗淳豐臣秀頼に事へ大阪の役に先て死す父宗淳亂を避けて京師に居り醫を業とす坦庵父の業を受け醫を江村專齋、曲直瀬玄理に學ぶ久儒を那波活所に受く寛文中業を改て儒となり專ら程朱の學を唱ふ越前侯に仕へて文學となり祿千石を食む猶ほ留りて京師に居り玄理の女を娶りて妻とす玄理は德川幕府の醫員なり或人坦庵を識して曰く玄理に貴緣して以て大府の學職とならんと欲すと侯之を聞て大に怒り坦庵を福井に徙して之を

仁齋の長子なり三四歳にして能く字を知る長ずるに及びて博聞強記、善く文を屬し經術に深くして家學を繼述す人と爲り沈靜寡默、絜儉謹慎其の言唄々然として口より出す能はざるが如し然れども經義を解剖する縱橫神に入る又た人の過失を舉げず紀伊侯其の名を聞き時に當りて侵傑輩出各〻旗幟を一方に整て互ひに相抵排すれども東涯は一語も他人の學術に及ばず官爵嶷嶷初め物茂卿に學ぶ心に東涯を起く茂卿以て意とせず太宰純心其だ不平なり二子各〻贈詩あり以て其志を言ふ（徂徠の詩に曰く五十三驛莫言難、蹇々山川秋好看、明日先登函嶺雪、如し絲大道達三良安、又曰く揮麈氣秋涼、才子奉恩逆洛陽、但到西山紅葉好、錦衣相映早歸鄉、春臺の詩に曰く田耶妙齡好遠遊、一旦尋師西入周、天邊月落函關曉、雲際星流渤海秋、周道如砥任奔走、邢臺古人骨已朽、到日試問柱下宮、往時老聃今在否、麟嶷東涯に至り之を示す東涯笑ひて曰く物先生度量宏廣、太宰子亦慷慨氣節ありと其の溫厚にして物と競はざるを此の如し（是の時徂徠東涯と各東四に鳴る而して徂徠毎に東涯を驚否して肆かず東涯は此に異なり嘗て曰く物氏の文は譬へは鬼面を裝りて小兒を驚すが如しと奥田三角多年東涯と親狎す其間の徂徠を評隲するを聞くは唯〻此の一言のみと云ふ）人書紙を乞ふあれは貧賤長幼を論ぜず皆立ところに應じて又他の嗜好なし終日砥々乎に勞を辭かず而して得る所ある毎に之を割錄す其の著述身に等し皆天下有用の書なり元文元年七月十七日歿す年六十七私に諡して紹遠先生と曰ふ東涯名敬を以て自任す詩文は其の餘事なり然れども亦一世の鉅匠たり文は唐宋の大家を學ぶ纖密精整浮躁の態なし詩は門戸を堅持せず故に其の態一ならず然れども夫の當時李王を尸祝するものに比すれは一種の滋味ありと云ふ又貧性利欲に淡なり一日二條町を過ぎ會〻襲震の路上に遺るあり書生なして之を拾はしむ中に金數十兩あり東涯眉を顰めて曰く當に之を遺者に還すべしと即ち其地に立ちて待つこと良久し日將に暮れんとす乃ち歸りて之を神棚に置き伊勢の巫祝至るに及びて付して以て大神宮に納む著す所周易經翼通解、文集、詩集、復性辨、古學指要、經史博論、辨疑錄、古今學變、天命感問、聖語通、經史論疏、讀易私記、讀易圖例、周易疑例、卦變考、論孟古義、樸註、中庸發揮標釋、大學定本聯義、語孟字義標注、童子問標釋、周易傳義考異、四書集注標注、遺書管見、用字格、助字考、刊謬正俗、作文眞訣、名物六帖、帝王略論、和漢紀元錄、後漢官制、本朝官制沿革圖考、三韓紀略、朝鮮官職考、歸親考、同姓編、盡醫餘錄、東涯漫筆、閑居筆錄、春秋胡氏傳辨、制度通、唐官鈔、樂制譜、東涯歷代官制沿革圖、唐官品圖、明官品圖、讀書小錄、古今教法沿革圖、紀聞小錄、大禹謨辨、樂記字訣等あり文校正の書に四書集注大全、五經集注、春秋左氏傳、文章軌範、論語集注、詩經說約等あり（甘雨亭叢書、野史、近代名家著述目錄）

イトウ トウシヨ 伊藤東所 京師の儒者なり名は善韶字は忠藏亦以て通稱とす東所は其の號東涯の長子克く學業を繼ぎ家聲を墜さず文化元年七月二十九日七十七を以て卒す私に修屍先生と謚す著す所古義鈔異、中庸發揮鈔、異詩解、詩名物、操觚字訣、古學十論、本草雜論、訣林、談原、助字考小解、四聲譜辨、集帖姓名、修成先生詩集、修成先生文集等なり（野史、甘雨亭叢書、續諸家人物志）

イトウ トウリ 伊藤東里 京師の儒者なり名は弘美字は延藏、東里は其の號、東所の長子なり文化十四年五月二十四日歿す年六十一私に諡して崇敬先生と曰ふ著す所崇敬鑑家人物志、鑑定便覽）

イトウ トキタカ 伊藤時孝 陸軍少兵大尉なり愛媛藩出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團歩兵第四十二聯隊附として出征中卅八年一月廿七日清國盛京省李家窩棚南方に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ トホスケ 伊藤透輔 陸軍二等獸醫

るは仁人の爲さゞる所吾れ豈に獄を脱して生を圖らんや子等盧る勿れと後ち食を斷つこと三十日絶命の辭を作て曰く心の本體寂然として動かず是れ學の德なり我今まで死あるのみ志士は殺す可く辱しむ可らず内省みて疚しからず吾れ將た何をか憂へんと食を絶つこと三十日伊東七十郎廣孝と書し之を獄卒に與ふ後ち四日將に誓願河の上に刑せんとす東曰く彼食を絶つ必らず步に堪へざらん宜しく與して之を殺すべしと廣孝曰く吾れ報國の忠を抱て無辜に死す三年を出でず必らず厲鬼と爲りて之に報いん盡んぞ吾が精神の致す所を覈さるや食を絶つ三十日且强健此の如しと力足獄室を踏む檻下の板間然として聲を成す遂に輿に就くを肯んぜず步して河上に至て坐す劍手心怯首を斬りて半ばに及びて未だ落ちず廣孝從容として顧みて曰く遠く勿れと頸を延べて斬に就く廣孝の父母八十餘亦斬らる兄善右衛門自屠す善右の三子流に處せられ采女國せらる廣孝學を内藤闕齋に受く闕齋操愈暴怒廣孝之を諫止して改むること能はず一日采女客を會す闕齋も亦至る廣孝之を獨入れて說て曰く先生我を殺さは我亦手を下して死に就かず必らず相擊て死なん是れ先生一朝の忿りに其の身を忘れて徒死するのみ國家に益なし何ぞ平日講する所と相反するや闕齋大に愧謝して止む其の人と爲り見る可し（軍實文編）

イトウ　ブクン　伊藤武薰　陸軍步兵少佐なり京都府出身にして明治二十七年日清戰役起るや第五師團步兵第廿二聯隊第三大隊長として出征中病に罹り廿七年九月廿日朝鮮國松湖に於て死去す

イトウ　ブンサク　伊藤文作　陸軍步兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年の日露戰役に於て第三師團步兵第十八聯隊附として出征中三十七年八月三十一日清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イトウ　ブンヂ　伊東文治　陸軍工兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役に於て工兵第二大隊附として出征中同年十月二十二日清國盛京省大英守屯にて病に罹り十一月十五日東三家子舍營に於て死去す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

イトウ　ホウザン　伊藤鳳山　出羽莊内酒田の儒、名は馨字は子德初め郷太郎と稱し後ち大三郎と改む三河國田原侯三宅氏に仕ふ鳳山年少き時朝川善庵の養子となる後ち故ありて去れりと雖もその終身論著する所は大抵朝川氏に本づけり明治三年正月二十三日歿す歲六十五著す所孫子詳解、吳子詳解、尉繚子略說、司馬法略說、六韜略說、三略々說（御案論文字考、封建論、山城雜錄、正氣歌解、學半樓雜錄、十軒集、左傳韋句文字考等あり（大田才次郎通報）

イトウ　ボツカイ　伊東渤海　江戸の儒者なり名は晃字は玄明其助と稱す赤松大庾の門人彎城侯の侍讀安永五年十二月二十三日歿す或は曰く享和三年四月五日歿す年六十三（江戸名家墓所一覽、名人忌辰錄）

イトウ　マカキ　伊東滿嘉記　海軍少尉なり宮崎縣南那賀郡板敷村の人慶應三年正月九日を以て河崎櫻園の養子となり遂に其家を繼ぐ家世〻鹿兒島藩士たり滿嘉記性深沈にして大度あり冒勳苟もせず年甫めて十三東京に遊學し學習院に入り後攻玉社に轉じ同年士官たらんを期す明治十九年八月海軍兵學校に入り卒業の後二十二年四月海軍少尉候補生に任ぜられ横須賀海兵團分隊士に補せらる次て橫須賀水雷隊攻擊部部員に轉じ更に八重山艦分隊士橫立艦分隊士任ぜられ橫須賀海兵團分隊士に補せらる次て橫須賀水雷隊攻擊部部員に轉じ更に八重山艦分隊士橫立艦分隊士を歷て二十七年四月松島艦分隊士に轉補す日清の間風雲急を告ぐるや伊東常備艦隊司令長官の麾下に屬して清韓諸港を巡航し戰爭愈〻開始せらるゝや松島は聯合艦隊の旗艦となり韓國近海に在り九月十七日黃海大海戰に會し分隊長志摩清直と共に奮戰甚勗めたりしが遂に敵彈の破碎する所となり年二十七を以て任に斃れて死去す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

イトウ　ホツサイ　伊東玄明　江戸の儒者なり名は晃字は玄明其助と稱す赤松大庾の門人彎城侯の侍讀安永五年十二月二十三日歿す或は曰く享和三年四月五日歿す年六十三（江戸名家墓所一覽、名人忌辰錄）

イトウ　ボツカイ　伊東渤海　江戸の儒者なり名は晃字は玄明其助と稱す赤松大庾の門人彎城侯の侍讀安永五年十二月二十三日歿す或は曰く享和三年四月五日歿す年六十三（江戸名家墓所一覽、名人忌辰錄）

イトウ　マサヨシ　伊藤政世　坂東の人なり右馬允と稱す文祿元年德川家康に仕ふ慶長五年關ヶ原の役に軍に從ひ十九年大阪の軍起りし時安藤次右衛門屋敷越中守等と忠貫野の寄手杉佐竹の監軍の故を以て破て功あり東西媾和の後大阪城の濠壍を埋むる事を萱す元和元年天王寺表の戰に勇名あり後終はる所を知らず（君臣略傳）

イトウ　マスミ　伊藤益見　陸軍步兵少佐なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備より召集せられ後備步兵第七聯隊附として出征し翌八年三月二日清國盛京省小馬格山附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

イトウ　マスラ　伊藤益荒　勤王の志士なり諱は嘉融通稱益荒肥前國島原藩士にして中小姓を勤め旬讀師を兼ぬ風に皋威の褒徽を歎き幕吏の專橫を憤りて之を挽回匡正せんと志し同藩士井上庄左衛門等十人と文武修業を名として文久二年十二月十八日國を出で書夜兼行して京師に上り百方周旋すれど世人勤王の大義を辨へざる者多きを慨し同三年二月同志の者等と相謀り足利尊氏等の木像の首を斬り是を三條河原に梟したり是より藩籍を脫し浪人となり近畿の間に游說し遂に大和の義擧を企つるに至りしが中途別に思ふ所ありて同年八月關東に赴き元治元年五月太平山の難に入り使番となり數〻敵の討手に會し奮鬪せしが後常州笠間に於て捕手と鬪ひ遂に死す時に年僅に二十一（殉難錄稿）

イトウ　マンイチ　伊東滿一　陸軍步兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ步兵第四十四聯隊附として出征中同年十月十日清國盛京省大孤山にて病に罹り同二十日龍頭山戰地定立病院に於て病死す

イトウ　マムネン　伊藤萬年　秋田藩の士にして名は祐祥通稱兵衛、詳處の子なり仕へて評定奉行郡奉行となる爲人果毅勇敢にして其郡奉行たるや專ら綱紀の事を幹し大に國用の道を開聽せんとし阻まれて退居す其學程朱を主とし實踐を貴び痛く異學を排す共に始見山に上り此處にて剃髮して果つ年僅に十九明治三十五年十一月特旨を以て從五位を贈らる（殉難錄稿）

イトウ　ユウヂ　伊藤雄治　陸軍步兵少佐なり姓は藤原氏其の先工藤祐經より出づ祖父祐國薩人と戰て死す子祐經で卒す子祐光嗣く外舅祐永伊豆を俊ち克たず天文二年八月卒す祐經は其の弟なり初め祐清と云ひ幼名虎熊丸後六郎五郎と稱す天文二年九月叔父祐武兵を起して伊豆父子四人を殺す祐清其の專恣を憎み伊豆の驚の逃去るを招き祐武及び子左兵衛佐を殺さんとす克たずして日知屋に走る國人等左兵衛佐を誅せんとす左兵衛佐拒ぐ能はずして奔る十一月祐清還り名を曦祐と改め修理大夫と稱す六年四月從四位下に叙す十年八月大膳大夫に任ず十月兵を舉げ薩州に奮し復さんと欲し戰て之を敗る十五年三月從三位に陞り髮を剃り三位入道と稱す十八年三月相伴衆となる二十年島津氏と和し大隅を分ち有つ弘治三年復地を爭ひ之に克ち悉く大隅を平げ薩州半國を取る天正四年島津義久の爲に敗られ霧島に到る勢屈し夜後門より逃る譜將畔く者多し次年正月遂に豐後に走る翌津氏部家屯第三師團附として出征し卅八年三月十日清國盛京省奉天附近戰鬪の際負傷し同十三日毛四等功四級に叙せらる

イトウ　リョウシウ　伊藤龍洲　越前福井藩の文學者なり名は道基、一の名は元基、字は子崇、龍洲は其の號又宜齋と云ふ播磨赤石の人、本姓清田氏出で豐藩通稱清左衛門遂江佐野郡鹽井河原の農にして傍ら鍛冶を業とす俳諧は卓池門人にして柿園買笑白童子等の號あり明治九年五月廿八日歿す年七十九（三森松江氏寄）

イトウ　ランゲウ　伊藤蘭嶠　紀州藩の儒者なり名は長堅、才藏と稱す仁齋の第五子、東涯の異母弟、所謂首尾藏の一人なり平安の人、後ち紀伊に仕ふ始めて書を君前に講ずる時案に對して說かず侍臣數〻之を促かす徐ろに對へて曰く君公褥に坐す聖人の書講す可らずと侯之を聞き遽に褥を撤す是に於て講論音吐明朗、辯論明爽侍坐成な嘆して曰く眞儒なりと後ち其講席麗と云ふ好み在て墓陽を作る後ち其講を求むるもの多きを以て之を止む安永七年三月廿六日年八十六にして歿す著はす所書反正あり（先哲叢談、墨定便覽、近代著述目錄）

イトウ　ランサイ　伊藤蘭齋　名は仲道字は環夫上毛の儒者にして姫路藩に仕す（諸家著述目錄）

イトウ　ランデン　伊東藍田（伊東自ら修して東と云ふ）江都の儒者なり名は龜年字は亦龜年、金藏又善右衛門と稱す、藍田は其の號、又天游館と號す藍田詰の次子、江戸の人、物金谷に學ぶ後餘態耳、根岩美に從て益〻切磋す遂に講說して業とす特に文章を善くするを以て其の名一時に高し天明中に至りて護園の高弟皆な凋落して其遺教を維持するもの少し僅に鶴鳴、岳東海及び藍田のみ文化六年四月二日に歿す年七十六著はす所論語徵正文、論語筆解考、徂徠學則附錄標注、湯武論、心賦、正檀文章帆疑補訂、歷代通紀、游房雜記、重訂唐詩選、藍田講義、藍田文集初稿同二稿あり子鑒浩嗣く（續諸家人物志、事實文錄、鑒定便覽）

イトウ　リウタラウ　伊藤柳太郎　陸軍步兵少佐なり山口縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備步兵第廿二聯隊附として出征し卅八年三月十日清國盛京省奉天附近戰鬪の際負傷し同十三日毛家屯第三師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

イトウ　リョウタン　伊藤龍潭　越前福井藩の儒者なり名は元基、字は子崇、本姓清田氏播磨赤石の人、仁齋門人なり後ち藩に仕ふ學者なり名は道基、一の名は元基、字は子崇、龍洲は其の號又宜齋と云ふ播磨赤石の人、本姓清田氏出で豐藩通稱清左衛門遂江佐野郡鹽井河原の農にして傍ら鍛冶を業とす俳諧は卓池門人にして柿園買笑白童子等の號あり明治九年五月廿八日歿す年七十九（三森松江氏寄）

イトウ　ランゲウ　伊藤蘭嶠　紀州藩の儒者なり名は長堅、才藏と稱す仁齋の第五子、東涯の異母弟、所謂首尾藏の一人なり平安の人、後ち紀伊に仕ふ始めて書を君前に講ずる時案に對して說かず侍臣數〻之を促かす徐ろに對へて曰く君公褥に坐す聖人の書講す可らずと侯之を聞き遽に褥を撤す是に於て講論音吐明朗、辯論明爽侍坐成な嘆して曰く眞儒なりと後ち其講席麗と云ふ好み在て墓陽を作る後ち其講を求むるもの多きを以て之を止む安永七年三月廿六日

屋太助と稱し京師新町松原下る所に住せりといふ（鑒劍奇賞）

イトウ　マサヨ　伊藤政世　坂東の人なり右馬允と稱す文祿元年德川家康に仕ふ慶長五年關ヶ原の役に軍に從ひ十九年大阪の軍起りし時安藤次右衛門屋敷越中守等と忠貫野の寄手杉佐竹の監軍の故を以て破て功あり東西媾和の後大阪城の濠壍を埋むる事を萱す元和元年天王寺表の戰に勇名あり後終はる所を知らず（君臣略傳）

イトウ　マスミ　伊藤益見　陸軍步兵少佐なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備より召集せられ後備步兵第七聯隊附として出征し翌八年三月二日清國盛京省小馬格山附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

イトウ　マスラ　伊藤益荒　勤王の志士なり諱は嘉融通稱益荒肥前國島原藩士にして中小姓を勤め旬讀師を兼ぬ風に皋威の褒徽を歎き幕吏の專橫を憤りて之を挽回匡正せんと志し同藩士井上庄左衛門等十人と文武修業を名として文久二年十二月十八日國を出で書夜兼行して京師に上り百方周旋すれど世人勤王の大義を辨へざる者多きを慨し同三年二月同志の者等と相謀り足利尊氏等の木像の首を斬り是を三條河原に梟したり是より藩籍を脫し浪人となり近畿の間に游說し遂に大和の義擧を企つるに至りしが中途別に思ふ所ありて同年八月關東に赴き元治元年五月太平山の難に入り使番となり數〻敵の討手に會し奮鬪せしが後常州笠間に於て捕手と鬪ひ遂に死す時に年僅に二十一（殉難錄稿）

イトウ　マンイチ　伊東滿一　陸軍步兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ步兵第四十四聯隊附として出征中同年十月十日清國盛京省大孤山にて病に罹り同二十日龍頭山戰地定立病院に於て病死す

イトウ　マムネン　伊藤萬年　秋田藩の士にして名は祐祥通稱兵衛、詳處の子なり仕へて評定奉行郡奉行となる爲人果毅勇敢にして其郡奉行たるや專ら綱紀の事を幹し大に國用の道を開聽せんとし阻まれて退居す其學程朱を主とし實踐を貴び痛く異學を排す

あり位にあること三十四年(嘉七十七歳)薨山南纒砂溪上の陵に葬る(大日本史)

イトデ 五十迩手 天日槍の苗裔なり筑紫伊觀縣に居る仲哀帝の八年帝熊襲を親征し筑紫に抵る五十迩手船に乘りて出て穴門の引島に迎へ五百枝の賢木を舳艫に立つ上枝に八尺瓊を掛け中枝に白銅鏡を掛け下枝に十握劍を掛けて之を獻ず因て奏して曰く臣の之を獻ずる所以の者は願くは天皇宇内を統御すること八尺瓊の勾玉の如く山海を照臨すること白銅鏡の如く又此劍を提げて天下を平らげんことを願ふなりと帝之を嘉して號を伊蘇志と賜ふ時人其の居る所の地を號して伊蘇國と云ふ後訛りて伊觀と爲す子孫世々伊觀の縣主たり(大日本史)

イトヒメ 絲媛 櫻井田部男鉏の妹なり應神帝納れて妃と爲す筆總皇子を生む(大日本史)

イトヘイ 糸平「タナカヘイハチ」 糸屋宗有 堺の茶人なり千利休の門人(茶人系傳全集)

イトヤマ テイジ 糸山貞次 海軍大尉なり佐賀縣出身にして明治三十七年日露戰役始まるや海軍中尉なり以て平遠分隊長心得として出征し第三回旅順口閉塞の擧あるに及び自ら請ふて決死隊に加はり閉塞船朝顏丸の指揮官向少佐附として乘組み五月三日の閉塞事業に指揮官を助けて殊功を奏し遂に全乘組員と共に戰死す戰功により海軍大尉に昇任し勳五等功五級に叙せらる

イトヰ ヨウサイ 糸井榕齋 江戸の學者にして名は翼宇は君鳳通稱九兵衛出羽秋田の人文化頃の人(文化諸家人名錄)

イトヲ サウザブラウ 糸尾莊三郎 織部流の茶人なり佐久間直勝に學びて其の法を能くす(茶人系傳全集)

イナウエ セイユウ 稲植政勇 陸軍砲兵少尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰砲兵第十五聯隊補充大隊附として在職中三十八年六月一日東京府下にて病に罹り七月五日東京豫備病院に於て死去す

イナガキ カクノジヨウ 稲垣覺之丞 勤王家なり諱は重喬通稱を覺之丞といふ越後村松藩士にして祿百五十石を領し藩主の側役たり人と爲り長身繊面質直にして才智多く衆に抜る

民を撫す天正十八年豐臣秀吉相州北條氏を征す家康忠次を以て參遠駿三州の水陸軍を監せしめ殊に諭して曰く富士川は急流なり宜しく方に舟を繫ひて速かに復梁となし兵馬をして沈溺の患なからしむべしと忠次巡視經營して力を竭くし其の功漸くにして成る既にして秀吉參州吉田驛に至るに從ふもの雲の如し時に霖雨大風秀吉馬を進めて自若たり諸將皆な停宿を欲すと雖も秀吉を畏れて言ふ能はず忠次馬前に跪て啓して曰く風雨烈しくして且つ士卒勞る願くは暫らく御轡を玆に停められんとなと秀吉叱して曰く留連日を經れば即ち前途の富士川容易に濟るを得べけんや如かず風雨を凌速かに往かんには汝以て何か謂ふか忠次重れて曰く如し小軍ならば即ち宜しく思慮に任すべし今四十萬騎の衆雨を冒し風を受け襲ひて大川を渡らば必らず流沒の禍あらん若し不幸にして十人の溺あらば訛言以て千百人と爲さん此れ敵をして利を得て勢を增さしむるなり況や戰期未だ日を刻せず則ち暫らく大憩を愈へ士卒を休するに如かず殿下の武威赫々として海内畏伏す豈に數日の遲速を以て勝敗を係く可けんやと秀吉曰く善し乃ち吉田に滯留すること三日にして雨晴れ風靜まり大軍進發す舟梁も亦た成りて富士川を涉るに困しまず衆皆喜びて曰く忠次の一言十萬士をして三日の息を得せしむと月を累れて北條氏殲く家康始めて關八州を管す此の時秀吉北條氏の麓翠十萬石を以て家康に與ふ家康忠次をして留りて官吏と與に之を計算せしむ既にして家康秀吉と進て奥州に向ふ忠次日ならずして途中に至る家康曰く倉廩多員粟米億兆想ふに旬を歷て舉る可し汝何ぞ速かなると忠次曰く臣謂へらく粟は纖令多しと雖も之を減ずる可らず縱ひ冪なしとも之を增す可らず故に毎倉官吏をして臣と相共に封印せしむ是れ轍ち奸曲の弊を防ぐに足る是を以て早く事を辦ず若し夫れ毎倉點檢し毎斛當量せば即ち許多の日を費さん何の益か之あらんと家康聞て之を奇とす秀吉も亦た官吏の早く至るを怪みて其の故を問ふ官吏忠次の言を以て對ふ秀吉大に感じて曰く我久しく忠次の才量あるを聞く今般の所爲最も決斷絕倫なることを知る未た我が麾下に此くの如きの人あるや否や知らず若し我に仕へば即ち萬石に昇す可しと家康欣然として乃ち參州小島菖蒲及び武州小室濁巢等一萬石を賜ひて八州の貢稅を掌らしめ市川松戸房州三關の吏に耦す曾て常州に在る時不軌の猿峰起す忠次急に部下の衆を率ゐて合圍し悉く之を誅す慶長五年家康上杉景勝を討ち暫らく馬を根川を渡ること能はざらば則ち數萬の寇讎來ると雖も利根川を渡ること能はざら畜然として進て曰く願くは徹臣をして此を守らしめしめと家康其言を可として之を許す既にして天下一統す果歲の功を賞して從五位下に叙し傅前守に任し掌とる所前の如くす忠次謹て民間の設を謹て寇盜の奸を糾し稼穡の業を勤め田圃の界を正し溝洫を浚ひ堵壁を厚くし秀艸を刈り苗種を蒔き海畔には鹽を煑山麓には産麻草を焚き桑蔴楮を栽ゑ金銀銅硝黃鹽硝の氣を察し土産麻草の宜しきを知り有無交易して各々其の利を得せしむ八州を巡檢して水路の源を尋れ高低を量り廣狹を較べて田野に漑ぎ五穀を種ゆ而して水溢出するの地には陸を割き其の流を通じて海に注ぐ且つ陸を開墾す凡そ其の墾拓する所百餘萬石稅倍蓰し戶口豐賑す世擧て其宜を爲す家利を按して田を開墾す年の久しき貢稅倍蓰し戶口豐賑す世擧て其宜を爲す家康其の富國の功を嘉みし其の新墾の十分一を以て忠次に賜ひ以て殊恩を彰す所在の邪邑驛郵舟梁滯なく往還の人々皆な喜ぶ平生鬻首を誇へ禁戒を諭し鰥寡を恤み仁惠を施す鄉黨之に傚つく曾て甲斐國吏に補せられ能く其の事を舉る忠次早く悟り自ら往て之を斬り其黨を逐ふ家康聞て曰く此小豎なり下吏を遣はして可なり豈に汝の黨を聚む忠次其刀を名づけて大藏と稱し以て家に傳ふ又命を奉じて關左及び甲州の寺社舊貫を按檢し其の宜しきを計りて租戶を寄す其の江府に在るや常に登營して顯問に預る其の鬱陶なるに迄びて昔日の窮乏を忘れず故に賤民の苦を推して寬恕の政を施し妄りに人を殺さず然れども法に違ふ者あれば刑を行ふと雖ただ嚴なり是を以て民倚賴すと雖も畏懼せざるはなし慶長十二年病み死す時に年五十七（湯巢膳顯寺側に葬むる（事略傳）

イナヤ タダハル 伊奈忠治 忠次の子、忠政の弟なり少壯にして父の風あり能く力を地方に竭す關左の公廳を掌どり邑吏の長と爲て多く新圃を開く効を以て武州赤山七千石を賜ふ慶長家光の獵に從ふ忠治馭藝あり曾て奔猪を御前に逐ふ其の驍進迅捷英氣に入る得る所あり曰く彼の馭法猝ゆき處を駕くが如しと（事實文編、君臣略傳）

イナヤ タダマサ 伊奈忠政 忠次の長子なり父の封を襲て萬石を領し從五位下に叙せられ筑後守と稱す元和中難波の役に從ひ淀河を渡りて土囊を積み長流を顯つ一夕夢に忠次甲冑を帶び陣刀を揮ひ忠政を諭して曰く天下の勝敗は此の一擧に在り敵火箭を放たば則ち築堤滅せん宜しく其の備を設けて防護慎まるべしと忠政驚き覺めて其の言の如くす既にして築堤破る遂に水運通ぜずして難波壓池乾涸し城兵大に困しむ又鳴野堤に於て槍を接へて七人を殺す凡を同隊得る所の首總べて三十級（事實文編、諸士略傳、君臣略傳）

イナヤ ヂウザウ 稻田重藏 慷慨家なり名は正辰常陸國那珂郡下國井村の農孫右衛門の子なり幼より水戶藩士田丸稻之衛門の家に專へ町方同心となる郡奉行金子孫次郎其謹直なるを見て郡吏に擧げ士籍に登す孫次郎と志を同うし共に江戶に出て井伊直弼を殺さんとす然るに同盟の士來會するもの未た多からず重藏曰く徒らに人を待たば機を失ふの恐れあり斷じて行はんに何ぞ衆寡を問ふを須ひんやと遂に其議に決し櫻田の擧に及べり重藏奮鬪身に十余創を蒙り戰死す時に年四十七明治三十五年從五位を贈賜せらる（維新史料、櫻田始末、官報）

イナヤ ヒャクセン 稻田百仙 俳歌を能くせり阿波德島の人、百仙は其號、幾太郎と稱す弘化中の人、（俳諧海内人名錄）

イナヤ ブンリツ 稻田文笠 俳歌を能くせり阿波德島の人、文笠は其の號、一に雪月亭の號あり勤解由と稱す弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イナヤダ ホウセイ 稻田鳳棲 俳歌を能くせり阿波の人鳳棲は其の號、一に翠松亭の號あり筑後と稱す弘化中の人（俳諧海内人名錄）

イナヤ チャウザウ 伊奈長三 尾張國智多郡常滑村の陶工なり其の家世〻酒甕を製するを以て業となす長三に至り茶器酒器を製出し大に行はる後白坭を

創造し其の名愈〻顯はる文政五年正月五日歿す年七十八（服部氏筆記）

イナツギ ウコン 稻次右近 有馬豐氏の家臣なり株瀨川の戰に石田三成兵を驅り勝に乘じて有馬則頼を追ふ右近は則頼の軍に殿たり三成の士横山盛物鬼を追ふ右近は則頼の軍に殿たり三成の士横山盛物鬼を追ふ右近の僕躍て右近の冑を提て仆さんとす僕監物を突放し一刀に其の敵を斬り首を取れり右近終に監物の首を梟け備を全たくして歸陣す則頼之を賞し祿六千石を增す右近寛永中島原の城攻に八十五歲にして戰死す惜むらくは其の僕の名を逸す（豪雄言行錄）

イナヅヰ ギクウ 稻津祇空 俳人なり初め青流と號す石霜庵、竹舟者、阿桑門等の別號あり淚華の人、芭蕉に學びて俳諧を善くし亦詩文に長ず曾て宗祇法師の風流を慕ひ諸國を經過して相模箱根の湯本に至り宗祇の墓所に於て落髮して自ら祇空と號す遂に東奥羽越の境に赴き歸りて江戶に遊ぶ後ち去て京師に住し又浪華に寓し再び江戶に來たる途ち箱根湯本に於て歿す時に享保十八年四月廿三日年七十一宗祇の墓側に葬る後ち又靈を深川八幡宮の末社に合祭す其の京都にある時の號を紫野の散雨或は散雨と云ふ（鹽定便覽、俳林小傳、俳諧家譜）

イナツミ イガ 稻富伊賀 丹後田邊の人なり細川忠興に仕ふ鉄法に精はしきを以て世に其の名を知らる文祿中忠興に征韓に從ひ大に其の武功を顯はす忠興素と鳥銃を善くし攻戰の暇田獵を以て樂と爲す伊賀毎に之に從ひ歸りて此の獲ものを較ぶるに忠興常に多し忠興伊賀に謂て曰く汝は鳥銃を以て稱せらる而して今獵る所反りて我に如かず豈に濫りに名を得るに非ずやと伊賀對へて曰く君食は妙手、誠に臣の企て及ぶ所に非ず然れども臣に小技あり請ふ彈丸の疾を驗せんことを忠興默て之を視る則ち伊賀獲る所は皆な背縣に中れり忠興は然らず專ら中るを主とす故に復た擇ぶ所無し因て皆伊賀の銃法に精なるに服せり稻富流砲術の祖は即ち此の人なり（事實文編、野史）

イナツミ イツム 稻富一夢 天正年中以後の砲術家として名あり德川家康仝秀忠と共に一夢につきて砲術を練習せり砲術書にして今に傳るもの多し

イナドメ キケン 稻留希賢 筑前侯の儒者なり字は子善、天資強記蚤歲既に六經を讀み傍ら文選を誦す年十一父に從て京師に至り伊藤仁齋の門に遊ぶ仁齋試に玉粲が登梅賦を寫さしむ輙ち筆を採りて直ちに書す搢法謹細一字を誤らず（近世叢譜）

イナノ トシツネ 稻野年恒 浮世繪師なり蒔金澤藩士にして本姓は武部通稱は孝之助にして稻野家に養はれ明治十年鹿兒島の亂起るに及び東京に上り管視驛の巡査募集に應ぜしが出征するを能はざりしより直に戰を辭し浮世繪の泰斗大蘇芳年の門に入り年芳年英芳宗と俱に大蘇門下の俊才と稱せられいろは新聞等の挿繪を擔任せしが二十年改め今日新聞繪入自由新聞等の挿繪を擔任せしが二十年改め進新聞に聘せられて健筆を以て世に稱せらる後ち京都の幸野楳嶺の門に入りて研鑽する所あり幾ばくもなく大阪毎日新聞社に入り又大阪朝日新聞社に入りて小說の挿繪を擔當し艷麗雄勁の筆を揮へり四十年五月二十七日病を以て逝く年五十四（明治四年鹿兒島の人、姓は越智氏、伊勢河野氏より出ず其出ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智氏、伊勢河野氏より出ず其出ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智の季子通富初めて僧と爲り安藝の安國寺に居り祐宗と名づく此時本宗稍〻衰へ武名振ひ難し一世通直稻葉と稱し驪麗次は通明次は通房次は通則次は通長次は通時次は通勝次は通貞次は通隆次は通茂次は通明次は豐通次は通季は乃ち通則及五子皆戰死す直通時に甫めて八歲長良の崇福寺に在り喝食と爲る年十七と爲るに及び母氏之を迎へて還俗せしめ直通と名け字は彥六と稱す（一說には名は通以字は六郎に作る）直通又曰ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智氏より出ず其出ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智氏より出ず其出ふ後ち一世通直稻葉と稱し驪麗次は通明次は通房次は通則次は通長次は通時次は通勝次は通貞次は通隆次は通茂次は通明次は豐通次は通季は乃ち通則及五子皆戰死す直通時に甫めて八歲長良の崇福寺に在り喝食と爲る年十七と爲るに及び母氏之を迎へて還俗せしめ直通と名け字は彥六と稱す（一說には名は通以字は六郎に作る）直通又曰ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智氏より出ず其出ふ後ち一鐵と號す美濃の人、姓は越智氏より出ず其出ふ後ち一世通直稻葉と稱し驪麗

奮起將に師を進めんとす一鐵秀吉を客課して止む秀吉關白を拜するに迄び一鐵三位法印に叙せらる十六年十一月卒す歳七十三清光院と號す長子貞通次は重通次は直政勝右衛門と稱す次は方通右近太夫と稱す美濃の西條を食む後ち和知に移り德川家康に仕ふ元和中尾張公に屬し金山に居る（野史）

イナバ　ウサイ　稲葉迂齋　肥前唐津侯の儒官なり名は正義初の名は通經、迂齋は其の號、十五郎と稱す後十左衛門と改む江戸の人、初め父正則鈴木政重と云ふもの丶對婿たるを以て迂齋亦鈴木氏を冒す後本姓稲葉に復す年十三淺見擴齋が門人伊部安崇、赤井直義と經義を講究して其教導を承く後佐藤直方に師事す學成り名顯はる丶に及びて直方の高弟にして獨り世に存するを以て山崎の學派を推挙する者皆迂齋を仰ぎ慕ぜざるなく列侯弟子の禮を執るもの甚だ多し寶暦十年十一月十日江戸に歿す年七十七駒込龍光寺に葬る著はす所初學藝蘇芾、迂齋文集、同續文集、同別集、及陳錄、同雜稿、和書集、同續、學話、同附錄等あり（先哲叢談後編、事實文纂、近代名家著述目錄）

イナバ　クワケイ　稲葉華溪　江戸の書家なり名は貞隆兵吉と稱す寛政十二年十二月二十七日歿す淺草西福寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

イナバ　コゾウ　因幡小僧（因幡一に稲葉に作る）本名か新助と曰ふ武蔵足利郡新井方村農市右衛門の男なり豪盜を以て名あり天明五年一橋家に入りて遂に總て歳を同年十月二日刑に就く時に年三十四其の宣告文あり左に掲ぐ

武州無宿　稲葉小僧事　新助

右者儀先達入獄の上御仕置に相成り觀へ引渡に相成候處同人病氣後村方欠落無宿にて所々入立の場立廻り往來人の腰綫袋鑓を盜み去り去年三月已來所々武士屋敷或は寺院又は町家等都合二十四ヶ所度數二十七度長家の屋根或は壁を乗越え住居内へ入り鎧筒鉄前等を破り金子幷に腰物又は小道具類提物衣類反物其外とも色々品具數かと覺えざれど凡そ三百品餘盜取り右盜に入る度數の内六度不得盜腰物三腰は朝取放し上野山内穴の内へ隱し置き金銀小道具類濟し候も有之其外の品々賣捌候代金盜金共都合百四十兩餘錢七八百貫文遊女飯賣女等買揚又たは在方にて辻博奕いたし打負其末の外雑用に遣捨て尚ほ又た盜を心懸一ツ橋殿塀を乗越入込候段重々不屆至極に付於淺草獄門申付る（賞罰譯、温故實錄）

イナバ　サダミチ　稲葉貞通　長通の長子なり本名は以鉄、右京亮と稱す天正十一年豐臣秀吉諸將の軍功を賞す貞通を曾根城に封ずる書との如し其の吉城を奈良高田に築つき貞通及び長谷川秀一をして戍らしむ十三年七月從五位下に叙し侍從に任ず翌年從四位下に叙し更に修築し之れを八幡城と謂ふ貞通及び子典通大阪に繫し犬山城を守る典通大阪に東師に屬す東軍先づ尾州に進するに慶長庚子の役に意密かに東師に通じて鋒順の意を進ぶ遠藤慶隆世ゝ郷上に居る是れより先き邑を他處に遷す此の役興るに及び竊かに謂へらく真通四に繫し犬山城に據らば郷上必らず虛かんと我れ能く地理を諳しず潛かに兵を飛驛に繰らし其の虛を襲はゞ則ち必らず得んと乃ち金齋長近と謀し八月二十日慶隆は升田口より長近は長龍口より共に嶮嶇を歴て國境に抵る九月朔齋之を賜ふ後ち故あり家に復す慶長十一年を以て伏見に卒す子あり嗣を賜ひ幕府に仕ふ（野史）

イナバ　シゲタ　稲葉茂太　陸軍步兵中尉なり群馬縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ步兵第十五聯隊附として戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

イナバ　ダイガク　稲葉大壑　白杵藩の儒者にして名は直好字は公德通稱德一郎、幼より學に志す天保九年藩命を受けて江戸に遊學し蠡田錢瀾等の門に學ぶ學成りて藩黌の舍長となる安政元年寺社奉行に果隆す四年六月六日藩に歿す該五十一所著文集あり又騎術の奥を究む（日本教育史資料）

イナバ　タキザブラウ　稲葉瀧三郎　陸軍步兵大佐なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵中佐を以て第五師團步兵第二十一聯隊長として出征し奥軍中央縱隊たる水越兵團に在りて奉天附近の大會戰に參加す三十八年三月一日拂曉村山枝隊に屬し李家窩棚占領の目的を以て砲兵掩護射擊の下に運動を開始し苦戰甚だ力めたりしが出發後僅に一時間にして各中隊の兵力は殆ど半數に減ず多大の犧牲を供するも意とせず前進を敢命し自若として敵狀を視察しつゝありしに敵彈のために前額を貫かれ即座に殞れたり戰功に依り步兵大佐に昇任し勳三等功四級に叙せらる

イナバノ　ゼンジ（モト）　因幡前司「オホエヒロ」　**イナバノ　ノリミチ**　稲葉典通　貞通の子、小字は彦一又彦六男武父家の繼ぐ從五位下に叙せられ侍從に任ず從四位下に進み大阪の冬役に從ふ寛永三年卒し子一通關ぐ子孫相傳へて侯爵に列なる（野史）

イナバ　ノリミチ　稲葉紀通　丹波國智山の城主なり淺路守に任じ從五位下に叙す大阪の役に於て功あり丹後の國主京極高廣と境を捻す嘗て使を遣はして丹後の鯛魚を乞ふ高廣冷語して曰く彼れ遠く之を我に取らは是必ず懲賞に路ふならんと乃ち魚一百を贈る使者は之を斷て曰く何ぞ我を侮るの甚だしきや彼の家士吾國に來ばゞ必ず殺して以て其の怨を報ぜんのみと丹後の驛卒其の境に入る紀通城櫓に登り

銃を發して之を驚す會ゝ紀通事に因り其の家臣を誅す餘黨大に憤れ流言して曰く紀通不軌を謀り行旅を殺掠すと隣國大に驚き兵を出して之に備ふ司入之を江戸に告ぐ紀通怖れ使を京師に驛せ所司代板倉重宗に告げて其の誣妄を辨ず幕府乃ち江戸に出で丶其の趣を陳すべきの報書を發す書未だ到らず偶ゝ國中相驚慴して曰く隣國の兵至ると紀通難じて曰く隣國我を誤るなりと則ち腹を剖て死す時に慶安元年八月なり（續々皇朝史略）

イナバ　マサナリ　稲葉正成　重通の義子なり祖父を通忠と曰ふ美濃の人、姓は源氏、左近大夫と稱す其の實は林正三の次男、正三字は總兵衛と稱す高須城に居り齋藤道三に屬す後ち右府信長に仕ふ林氏と稲葉氏と元と境を接し相爭ふこと年あり稲葉氏の家老岡部右兵衛議して兩家の和睦を謀り正成の兄新九郎政行（後内匠助と稱す）に配するに重通の女を以て重通死す正成嫂を離し重通の義子と爲る稲葉氏を冒し初め關白秀吉に仕へ征韓の役に從へり永祿元年出で丶小早川秀秋に屬して邑四萬石を食み佐渡守と稱す慶長庚子の役秀秋に從ひて關ヶ原に赴く又た佐和山城を攻てこれを陷る慶長六年十二月正成備前國なる去り美濃の谷口に閑居す十二年召されて舊邑十七條の田一萬石を賜ふ更に内匠頭と稱し大阪兵起るや軍に從ひ功あり元和四年越前侯に屬し食邑一萬石を加へ糸魚川城主と爲る九年仕を辭して退去す正成初め重通の女を娶し正貞を生む次を生む而して宗氏死す重通の養女に配し正勝、正定、正利を生む後離婚して永見氏を娶り正房を生む又山内氏を納れ正能を生む寛永四年二月召されて下野眞岡の田二萬石を賜はる十二月更に叙し復た佐渡守と稱す五年九月卒す法名輝宗道範、現龍院と號す（野史、君臣略傳）

イナバ　マサミチ　稲葉正通　石州流の茶人也丹後守從四位下侍從に任ず美濃守と稱す片桐貞昌に茶禮を學ぶ元水子泰宗湖信軒等の號あり元祿九年九月六日卒す年七十四

イナバ　マサヤス　稲葉正休　德川幕府の若年寄なり貞享元年八月大老堀田正俊を城中に殺す一蟲以て衷心とし刀を挺して亂所す正休同願徹突して死す正休素と正俊と親み善し正俊盜か恃み專横なるに及び正休憤慨を發して之を誅す會ゝ紀通事に因り其の家臣を誅す餘黨大に憤れ流言して曰く紀通不軌を謀り行旅を殺掠すと隣國大に驚き兵を出して之に備ふ司入之を江戸に告ぐ紀通怖れ使を京師に驛せ所司代板倉重宗に告げて其の誣妄を辨ず幕府乃ち江戸に出で丶其の趣を陳すべきの報書を發す書未だ到らず偶ゝ國中相驚慴して曰く隣國の兵至ると紀通難じて曰く隣國我を誤るなりと則ち腹を剖て死す時に慶安元年八月なり（續々皇朝史略）

イナバ　マサナリ　稲葉正成　重通の義子なり祖父を通忠と曰ふ美濃の人、姓は源氏、左近大夫と稱す其の實は林正三の次男、正三字は總兵衛と稱す高須城に居り齋藤道三に屬す後ち右府信長に仕ふ林氏と稲葉氏と元と境を接し相爭ふこと年あり稲葉氏の家老岡部右兵衛議して兩家の和睦を謀り正成の兄新九郎政行（後内匠助と稱す）に配するに重通の女を以て太閤死す正成嫂を離し重通の義子と爲る稲葉氏を冒し初め關白秀吉に仕へ征韓の役に從へり永祿元年出で丶小早川秀秋に屬して邑四萬石を食み佐渡守と稱す慶長庚子の役秀秋に從ひて關ヶ原に赴く又た佐和山城を攻てこれを陷る慶長六年十二月正成備前國なる去り美濃の谷口に閑居す十二年召されて舊邑十七條の田一萬石を賜ふ更に内匠頭と稱し大阪兵起るや軍に從ひ功あり元和四年越前侯に屬し食邑一萬石を加へ糸魚川城主と爲る九年仕を辭して退去す正成初め重通の女を以て宗氏

古今を總括し庶物類纂を著はす嘗て人に謂て曰く吾をして天下の事を徐理する能はしめば亦此の草木の如くせんと書成る手から正副二本を寫す正本は之を幕府に獻じ副本は藩府に納む其の友新井白石稱して曰く年未だ五十に滿たずして千卷の著あり古今の稀に觀る所なりと後世本草を道ふもの率れ若水及び阿部將翰を祖とす又藩府に建議して萬曆版の二十一史を翻刻せんとす幽讀を金部に施す宋史に至り未だ完備に至らずして平安北小路の家に歿す時に正德五年七月五日なり年六十一、著はす所庶物類纂の外に詩經小識、左傳名物考、本草圖纂、本草別集、物產目錄、我土產目錄、採藥獨斷、島和物產品目、炮炙全書、孝女傳、結髮常話、別集、文非、本草綱目指南、食物傳信錄、食物本草、胡枝錄等あり松岡玄達、丹羽貞機、野呂實夫等皆な宣義の門より出づ（先哲叢談續篇、島朝名醫傳、燕薩風雅、近代名家著述目錄）

イナフ ナヒコ 稻生魚彥「カトリナヒコ」 騎なり栃木縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第廿八聯隊附として出征中三十八年三月八日清國盛京省轉鴻橋附近戰鬪の際負傷し同十四日第三師團後備野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イナムラ ミツハ 稻村三羽 江戸の歌人にして通稱增五郎松園と號す幕府の士なり亞元に學び桂園風の歌を善くす（武藏野集、櫛草紙）

イナムラ サンパク 稻村三伯 因州侯の藩醫なり年わかき頃筑前なる蟲井道獻の塾に入る若學する事數年にして學漸く成らんとして翁歿す乃ち笈を負ひ同藩雄波春庵と共に長崎に遊ぶシーボルトの門に入る時に高野長英戸塚靜海も亦此塾にあり三伯同じく醫術の餘暇を以て蘭學を修め大に得る所あり後業成り春庵と共に東歸するに當り途中にして旅費全く盡く仍て宮島の門に入る內に牛の秣を喰ふを見て二人相謀り竊に劇藥を出してかの秣の上に撒布し農家に入り茶を乞ひ煙草を喫して休息す此時牛煩悶な生じ頻りに悲鳴し嘔かんとして嘔かず困頓殆と斃れんとす主人二人に乞ふて曰く貴君見る所醫生の如し願はくば治療を賜へ と二人相顧みて曰く生等實に醫を業とするも未だ牛を服用せしむるに須臾にして苦惱去りて平常に復す人々深く喜び主人慰に二人を乞ひて其家に宿せしめ厚く饗し豐かに謝す依て三四日の旅費を得て去る旅賓盡くるに臨國することを得たりと云ふ三伯は因伯の地に於ける歐學の首唱者なりルマ和解を著す後海上隨鴎と稱す文化八年正月十六日歿す年五十四

イナムラドノ モトカ 稻村屋茂登加 俳歌を能くせり羽州米澤の人、茂登加は其の號、一に曳尾庵の號あり久內と稱す弘化中の人（俳諧海內人名錄）

イナリ 稻荷 山城にあり倉魂命、大宮女命、猿田彥命を祀る二十二社の一に列す元明帝の和銅四年始て秦氏を以て祀る

イヌカヒ イソギミ 犬養五十君 壬申の亂に弘文帝の爲めに兵に將として天武帝の將村國男依と聚津に戰ひ敗れて死す（大日本史）

イヌカヒ ショウザウ 犬養松窓 名は博字は淵舶淳三郎と稱す備中山地村の儒者なり（諸家著述目錄）

イヌカヒ リャウサブラウ 犬飼良三郎 陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに及び第三師團歩兵第三十三聯隊附として出征して同年九月三日遼陽附近の大戰に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イヌガミ コレヂリ 犬上是成 仁明天皇の時の樂師なり當時我邦の樂制一變に際し新曲を作るに與つて力あり（大日本史）

イヌガミ ミタスキ 犬上三田耜 景行帝庶皇子の裔なり推古帝の時大仁に爵す二十六年矢田部造と使を隋に奉じ明年帝を殮へて歸る舒明二年又大仁樂師組を出して隋に入る四年唐大宗高仁表を遣はして報聘せしむ皆な使者と俱に歸る（日本儒林傳）

イヌクバウ タルヒト 犬公方 「トクガハツナヨシ」 犬足人 下野の人なり和歌を善くするを以て人に知らる其の詠歌は戰せて萬葉集其の他諸書に在り（萬葉集作者履歷）

イヌヅカ イナミ 犬塚印南 字は退藏父諱は純則世々姬路藩に仕へて班、大夫に列す印南は其の第六子なり出で、青木氏を嗣ぎ女あり配して女子を生み故ありて姬路を去り江戸に之く印南復た官途に求めあらず昌平黌に遊び其の學優なるを以て聞りて長と爲る既にして姓を犬塚に復す其の人となり寡言恬靜、文翰據依、然嘗喻語等十餘部を著はす嘗て昌平志を編して之を府朝に獻じ銀錠若干を賜はる集あり家に藏す寬政の末に及びて員長を罷め本郷に居して教授す時に儒五に矜誇を競ふを風と爲す印南獨り閒居細談二三同志と一室に在りて得意の語を吐く常に自負して曰く吾れ其れ眞に退藏ならずやと高崎侯召して經を講ぜしむ又た屢々姬路侯の讌に陪す東叡法親王儒道を信じ印南を師として經を談ぜしむ文化十年病て家に終ほる年六十四（憲談）

イヌヅカ ツネジラウ 犬塚恒次郎 陸軍歩兵大尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第十二師團歩兵第二十四聯隊附として出征中廿八年二月廿六日清國盛京省遼牛寨堡子に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イヌヅカ ランエン 犬塚蘭園 儒者なり名は義翔源次左衛門と稱す遠州掛川の人父某始めて藩に仕ふ藩儒弱年のとき江戸に移り駒込邸に在り業を千葉雲閣に受け漢儒の說を主とす寬政中藩主の老中たりし時書翰の字を學ぶ復び掛川に移り私に家塾を開き諸士の子弟を教授し文化三年を以て歿す（小傳）

イヌヤ イハホ 乾巖 陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第九師團歩兵第三十六聯隊附として出征中廿八年三月一日清國盛京省四方臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イヌヤ コグワイ 乾壺外 江戸の俳人なり谷素外の門人にして一龍井と號す文政三年十一月廿四日歿す年七十（俳家歿故年表）

イヌヤ コンサイ 乾坤齋 江戸の醫にして家方に嫌王黑散あり婦人血症に神効あり文政中の人

（今世醫家人名錄）

イヌヤ ザイエン 乾在淵 江戸の茶人なり龍雪と號す寬政十二年正月八日歿す（江戸名家墓所一覽）

イヌヤ ジフラウ 乾十郎 勤王の士なり諱は嗣龍十郎と稱す大和五條の醫師なり少時京都に行き森田節齋梅田源次郎等に從ひ詩文を學ぶ外舶の事起りてより慷慨の余禁じ難く家財を賣拂ひ單身都に上り中川宮に仕へ四方の志士に交はり國事に周旋すること大なり文久二年八月藤本鐵石に誘はれ鄕兵を糾合し中山忠光の部下に加はる軍敗れて後長州に赴かんとせしも前所樓塞せる由を聞き攝津吹田村なる知人の家に隱れ補木禮庵と稱して暫く世を窺ひしが終に幕吏に探知せられ京六角の獄に投ぜられ元治元年七月獄中にて殺さるる時に年三十七明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

イヌヤ ライジョ 乾貞恕 （後犬井と改む）京都の俳人也名は重次越前敦賀の人一靈軒と號す通稱次郎兵衛安原貞室の門に入り其の歿するに臨み花の本第三世の號を嗣く後江州大津に住す元祿十五年三月四日年七十五にして歿す上島羽村實相寺に葬る著書蠅打、阿太知千句、新玉海集等あり（俳家奇人談、俳家歿故年表）

イネ いね 「サエキウヂナガ」

イネイ 以寧「ヒロセモウサイ」

イネン 伊年「タハラヤソウタツ」

イノウ イチウン 伊能一雲 江戸の人、牛込榮士町寶藏院出張所に住す十七藝に達し殊に實藏院槍法を善くして從學する者多し隣家に幕士あり其の祿と同じく一雲に學びて名手と稱す一日祿發狂し劍を揮て亂擊す主人之を如何ともする能はず室を鎖し門を閉づ狂夫庭に躍して大に呼ぶ近づくことを得る者なし主人々を馳せ一雲に告げて曰く賤役警て業を先生に受く今日發狂す請ふ爲めに之を執へんことを一雲答へて曰く是れ難事なり余固と槍劍を以て人の師たり願ふに狂夫を執ふるの術を知らず然れども之を辭するは不可なり余且狂夫に死なん公等因て之を捲執して可なりと便服に刀を佩び使者と同じく入て謁を請ふ狂夫走り前み罵りて曰く來るものは誰ぞや吾斬りて賜殺と爲さんと刃を横へて闕に躍す一雲神色變せず其の右に坐すなりと因て劍を揮ひて虛擊すること數々一雲眸みて曰く子の刀は稍々長し吾之を用ふるに慣る日く然らば吾に色少しく和て曰く吾恐らくは用に中らざん狂夫典へよ之を見と狂夫刀を授く一雲取りて外に擲げ捕て之を倒す衆大に喜び狂夫を縛し去る遠近喧傳し稱して神技と爲す一雲笑て曰く徒手にして狂夫に向ふ豈に劍法を知る者と爲さんや吾死を決して往き幸に其の釁に遇ふのみと又一節切の笛を一思庵に學び一雲と號す又無孔笛翁と云ふ八十餘歲の時一子を舉く矢柄と名づく其の十七歲の時一雲歿すと云ふ矢柄亦槍法を以て林肥後守に仕ふ（醒海）

イノウ タダヨシ 伊能忠敬 儒學者なり字は子齋東河と號し三郎右衛門と稱す晚に勘解由と稱す北總武射郡小堤村神保貞恒の第三子、出て、佐原村の伊能氏に養はる因て其姓を冒す伊能氏は世々閭の右族たり偶々產頗る荒る忠敬慨然として幹蠱を以て志爲し日夕耽勉、儉素を守り奢侈を去り家業百日朔を以て率先す產稍々復す天明三年關東大に饑ゆ忠敬爲めに私儲を發して閭里に賑貸し施して餘近の村落に及び全られて鄕里に歸る後ち大識義に補し香取宮の少宮司に任じ次で擢少敎正に兼補せられ地方敎導の事に盡力す明治十年七月十一日病みて歿す年七十三著す所國史略稱訓正續編、國史略弁護、百人一首新釋、歌文集等あり（小傳）

イハ 岩 江戸根津川島屋の妓なり衣服調度悉く鳥の紋樣を付す人呼て鳥岩と云ふ謂く反哺の孝を忘れざるが爲めなりと（名女傳）

イハイヅミ イチャウ 岩泉一陽 俳歌を能くせり奥州八戶藩の人、一陽は其の號別に雲岩の號あり作右衛門と稱す（俳諧海內人名錄）

イハガキ ゲツシウ 巖垣月洲 京師の儒なり名は蠡字は六藏本姓岡田氏後巖垣氏と改む父を邦彥と曰ふ業を巖垣龍溪に受け其高足たり月洲幼にして家庭に學び長して傳治才識人に過ぐ龍溪の子松苗歿するに及て同社月洲に囑託するに督學の任を以てす天保四道及び壹岐對馬の官道幷びに沿海を測量せしむ十二年又た伊豆七島及び箱根湖を測量し尋で江都府內を量る十四年府內の圖成りて進呈す寬政十二年より此に至りて凡そ十八年五畿七道遐陬僻壤、地として跋涉せざるなく盡く測量して之を圖記す後ち復た字內奥地余國及び度數譜、行程記を修定す文政四年四月圖成て死す年七十七嘉賦朴直にして精力人に超過し七旬を踰えて意氣蓬勃少壯の人の如し測量の命下る每に轍ち喜び顏色に見はれ身險阻を涉て奔走數百里風雨寒暑と雖も未だ嘗て少しも沮喪せず晝夜時刻對數表、紀源法、地球測量術問答、凡そ若干卷あり家に藏す忠敬死して官厚く其功を賞し其の嗣忠海に賞ふと云ふ明治十六年二月正四位を贈らる（墓碣）

イノウ ナビコ 伊能魚彥「カトリナヒコ」

イノウ ヒデノリ 伊能穎則 和學者なり蒿村又た梅宇と號し三右衛門と稱す後ち三造又外記と改む下總香取郡佐原村の人、家もと吳服を商とす心を和歌國學に委れ小山田與清に從學し後平田篤胤の門に入る嘉永年中江戸深川に雛を垂れて古代の法制及び歌學を敎授す明治元年神祇官祿生となり二年大學大助敎に召され宣敎權中博士に轉じ從七位に叙す宣敎使廢せられて鄕里に歸る後ち大識義に補し香取宮の少宮司に任じ次で擢少敎正に兼補せられ地方敎導の事に盡力す明治十年七月十一日病みて歿す年七十三著す所國史略稱訓正續編、國史略弁護、百人一首新釋、歌文集等あり（小傳）

イノウ タルヒト 伊能忠誠 儒學者なり字は子誠通稱次郎兵衛忠誠の第二子、出て、佐原村の伊能氏に養はる因て其姓を冒す伊能氏は世々閭の右族たり偶々產頗る荒る忠敬慨然として幹蠱を以て志爲し日夕耽勉、儉素を守り奢侈を去り家業百日朔を以て率先す產稍々復す天明三年關東大に饑ゆ忠敬爲めに私儲を發して閭里に賑貸し施して餘近の村落に及び全られて鄕里に歸る後ち大識義に補し香取宮の少宮司に任じ次で擢少敎正に兼補せられ地方敎導の事に盡力す明治十年七月十一日病みて歿す年七十三著す所國史略稱訓正續編、國史略弁護、百人一首新釋、歌文集等あり（小傳）

年間官學所を建るや擢て教授と爲る幾はくも無く病を以て仕へず年五十四眼を患ひ明を喪ふ常に弟子をして書を讀ましめ隨て誦ずれば隨て講じ未だ嘗て倦む有らず且つ詩文を作り以て其情を述ぶ其學は經濟實踐を以て主と爲す其已れを行ふや確然守るあり其の人に接するや温恭言少し人と爲り清廉飲食を節し起居を慎み勤儉家を治む明治六年九月四日歿す年六十有六遺稿有り世に行はる(賢人傳)

イハガキ マツナヘ 岩垣松苗 京師の儒者なり松苗は其の名、字は千尺初の名は維光、字は長卿、謙亭又東園と號す從五位上音博士大舍人助に叙任す四尾杏庵の子龍溪の養子となり益々古學を唱ふ又國史に通ず嘉永二年十二月年七十六にして歿す國史略の著あり(鑑定便覽)

イハガキ リョウケイ 巖垣龍溪 京師の儒者なり名は彦明字は亮甫、一字は孟厚龍溪と號す三善氏、長門介と稱す博士清原家に學て古學に通じ後從五位下大舍人權助に擢てらる篤厚誠信の士なり文化五年十一月三日卒す年六十八著はす所論語集解標記、十八史略補正、松蔭館隨筆、龍溪見聞志、松蔭館文集等あり(續諸家人物志、饗定便覽)

イハバ カセウ 伊庭可笑 江戸の小說家なり猪與八と稱し堪亭と號す天明二年六月三日歿す年七十七(戲作家小傳、江戸名家墓所一覽)

イハガタケ 岩ケ嶽 菅力を以て聞ゆ土州高岡郡典津地村の產なり通稱は眞吉、農民窪田助次の長男、性義を重ず夙に國事を憂ふ一夜其の妻と語る曰く聞く近日幕府殿扈朝廷を蔑如し且つ數々天下の義士を捕ふと余微賤と雖も亦た丈夫なり焉ぞ家に在て碌々たるに忍びんや然るに一旦國を去る生死固より期す可かちず女兒猶ほ幼なり一に汝が教養を煩はすと潸然涙下す妻も亦た泣て之を諾す是に於て藩籍に請ひ夫卒と爲り京師の邸に奉仕し傍ら諸藩の義徒と交はる後ち覺に脫して長州に行き姓名を變じ眞田四郎と稱す世を憤り遂に自刄すと云ふ死する年詳ならず(南海義烈傳)

イハガミ カクエモン 岩上角右衞門 (或は角之助)は松平伊豆守信綱の臣なり寛永十五年島原の軍に戰ひ二月廿一日の夜囚徒來襲する時會々岩上は尼子九郎兵衞と營中を巡警す乃ち擊ちて之を退く城昭いるに臨みて信綱の子甲斐守輝綱身を抽て進む信綱岩上をして之を止めしむ輝綱肯んぜず岩上乃ち兜を脫して曰く、君臣の冒を用ひされば臣の首を刎て進めと輝綱已むを得ずして退く輝綱常に岩上を賞して謂ふ余重隆の女の生む所にして伊達晴宗の子なり親隆佐竹氏を聚り常隆を生む常隆初の名は二郎後ち右京大夫下總守修理大夫と稱す父に繼て岩城の平に居り十一年田原谷樋口の二砦を取る十三年十一月佐竹義重結城義親等の諸氏と田村の砦を攻めて之を取る又兵を率て田原井を圍む伊達正宗師を出し二本松を攻む常隆佐竹義重に從ひ之を救ひ大に之を敗る是の夜佐竹義政其叔の爲めに殺され軍散する以て田原井の城卒に陷る十六年正宗竹貫釜河を誘ひ常隆に叛かしむ釜河之を告ぐ常隆俘り諸せしめ兵を率て田原谷を拔き小野新町に逼る五月常隆佐竹鷹名相馬氏と會し正宗と戰ふ七月常隆石川昭光と謀り諸家に戰き和せしむ八月和成る十七年片平定重會津に叛き正宗に降る常隆正宗の約を破る憲り三月兵を出し數城を拔く四月正宗聞きて兵を出して之に備ふ十月正宗人を遣して和を請し以て佐竹氏を伐んとす常隆許諾す佐竹義重之を聞き來り援す常隆之を拒き援ん正宗に乞ふ那須氏來りて義重を救ふ常隆興に戰て利あらず天正十八年常隆笠懸に往き關白秀吉に謁し辭して歸らんとす途に疾を得て星谷に卒す年二十四法名鐘山と云ふ(野史)

イハキナ 石寸名 大臣蘇我稻目の女なり用明帝元年正月宮に入り嬪と爲る田目皇子を生む(大日本史)

イハキ ナンガイ 石城南陔 高島藩の儒者にして名は勉字は子勉、元休の子なり初め松子樂に學び後岳東海に學ぶ天明五年諏訪侯の侍讀となり後諏訪に徙る享和三年君命を奉じて學校を建つ長善館という文政三年二月二十六日歿す歲六十八(大日本教育史資料)

イハキ マサヂ 岩城政治 陸軍步兵大尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團步兵第九聯隊附として出征中廿八年三月二日清國盛京省北臺子に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級と改む慶長五年見佐竹義宣と上杉景勝に黨す七年五月岩城十二萬石を沒收せられて出羽由利十二萬石に移さる元和六年十月卒す年三十八子孫世々侯たり(野史)

イハキ ツネタカ 岩城常隆 陸奥の人姓は平氏、鎭守府將軍繁盛の裔なり父を親隆と云ふ曾祖重隆の女の生む所にして伊達晴宗の子なり親隆佐竹氏を聚り常隆を生む常隆初の名は二郎後ち右京大夫下總守修理大夫と稱す父に繼て岩城の平に居り十一年田原谷樋口の二砦を取る十三年十一月佐竹義重結城義親等の諸氏と田村の砦を攻めて之を取る又兵を率て田原井を圍む伊達正宗師を出し二本松を攻む常隆佐竹義重に從ひ之を救ひ大に之を敗る是の夜佐竹義政其叔の爲めに殺され軍散する以て田原井の城卒に陷る十六年正宗竹貫釜河を誘ひ常隆に叛かしむ釜河之を告ぐ常隆俘り諸せしめ兵を率て田原谷を拔き小野新町に逼る五月常隆佐竹鷹名相馬氏と會し正宗と戰ふ七月常隆石川昭光と謀り諸家に戰き和せしむ八月和成る十七年片平定重會津に叛き正宗に降る常隆正宗の約を破る憲り三月兵を出し數城を拔く四月正宗聞きて兵を出して之に備ふ十月正宗人を遣して和を請し以て佐竹氏を伐んとす常隆許諾す佐竹義重之を聞き來り援す常隆之を拒き援ん正宗に乞ふ那須氏來りて義重を救ふ常隆興に戰て利あらず天正十八年常隆笠懸に往き關白秀吉に謁し辭して歸らんとす途に疾を得て星谷に卒す年二十四法名鐘山と云ふ(野史)

イハキナ 石寸名 大臣蘇我稻目の女なり用明帝元年正月宮に入り嬪と爲る田目皇子を生む(大日本史)

イハキ サダタカ 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸と云ふ天正十八年常陸卒して嗣子なし群臣議して之を迎立す七月數臣秀吉宇都宮に抵る岩城の臣白土攝津能化丸を扶け增田長盛に遇て秀吉に見えんと請ふ初め攝津安土に到り信長に謁するや秀吉時に尙ほ義なり攝津の武骨を見て是れ日必ず音信を通ぜんことを約ぜり秀吉後ち感名大に振ふ攝津驍馬を贈り信を通ず是に於て京都に上る是より主君佐竹義重の之を聞き召して經義を講ぜしむ此時に國家の大本を確立し尊攘の大義を明にす可きを論ず用ゐられず是に於て慶應元年家督を養子尙友に讓り國を去り自ら本姓に復し里見義堯と稱して京都に上る是より訪問して密に謀る所あり乃ち關東諸州を遊說し相模總三浦谷總司桑原五郎等と志士を糾合して事を舉げんこと偶ま幕吏の爲めに謀知せられ遂に捕へられて江戸傳馬町の獄に繫がれ遂に病を發し其年九月廿八日死す年三十四(殉難錄稿)

イハキ サダタカ 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸と云ふ天正十八年常陸卒して嗣子なし群臣議して之を迎立す七月數臣秀吉宇都宮に抵る岩城の臣白土攝津能化丸を扶け增田長盛に遇て秀吉に見えんと請ふ初め攝津安土に到り信長に謁するや秀吉時に尙ほ義なり攝津の武骨を見て是れ日必ず音信を通ぜんことを約ぜり秀吉後ち感名大に振ふ攝津驍馬を贈り信を通ず是に於て京都に上る是より主君佐竹義重の之を聞き召して經義を講ぜしむ此時に國家の大本を確立し尊攘の大義を明にす可きを論ず用ゐられず是に於て慶應元年家督を養子尙友に讓り國を去り自ら本姓に復し里見義堯と稱して京都に上る是より訪問して密に謀る所あり乃ち關東諸州を遊說し相模總三浦谷總司桑原五郎等と志士を糾合して事を舉げんこと偶ま幕吏の爲めに謀知せられて江戸傳馬町の獄に繫がれ遂に病を發し其年九月廿八日死す年三十四(殉難錄稿)

イハキ サダタカ 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸と云ふ天正十八年常陸卒して嗣子なし群臣議して之を迎立す七月數臣秀吉宇都宮に抵る岩城の臣白土攝津能化丸を扶け增田長盛に遇て秀吉に見えんと請ふ初め攝津安土に到り信長に謁するや秀吉時に尙ほ義なり攝津の武骨を見て是れ日必ず音信を通ぜんことを約ぜり秀吉後ち感名大に振ふ攝津驍馬を贈り信を通ず是に於て京都に上る是より主君佐竹義重の之を聞き召して經義を講ぜしむ此時に國家の大本を確立し尊攘の大義を明にす可きを論ず用ゐられず是に於て慶應元年家督を養子尙友に讓り國を去り自ら本姓に復し里見義堯と稱して京都に上る是より訪問して密に謀る所あり乃ち關東諸州を遊說し相模總三浦谷總司桑原五郎等と志士を糾合して事を舉げんこと偶ま幕吏の爲めに謀知せられて江戸傳馬町の獄に繫がれ遂に病を發し其年九月廿八日死す年三十四(殉難錄稿)

イハキ サダタカ 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸と云ふ天正十八年常陸卒して嗣子なし群臣議して之を迎立す七月數臣秀吉宇都宮に抵る岩城の臣白土攝津能化丸を扶け增田長盛に遇て秀吉に見えんと請ふ初め攝津安土に到り信長に謁するや秀吉時に尙ほ義なり攝津の武骨を見て是れ日必ず音信を通ぜんことを約ぜり秀吉後ち感名大に振ふ攝津驍馬を贈り信を通ず是に於て京都に上る是より主君佐竹義重の之を聞き召して經義を講ぜしむ此時に國家の大本を確立し尊攘の大義を明にす可きを論ず用ゐられず是に於て慶應元年家督を養子尙友に讓り國を去り自ら本姓に復し里見義堯と稱して京都に上る是より訪問して密に謀る所あり乃ち關東諸州を遊說し相模總三浦谷總司桑原五郎等と志士を糾合して事を舉げんこと偶ま幕吏の爲めに謀知せられて江戸傳馬町の獄に繫がれ遂に病を發し其年九月廿八日死す年三十四(殉難錄稿)

イハキ サダタカ 岩城貞隆 岩城平の城主なり佐竹義重の三男幼字能化丸と云ふ天正十八年常陸卒して嗣子なし群臣議して之を迎立す七月數臣秀吉宇都宮に抵る岩城の臣白土攝津能化丸を扶け增田長盛に遇て秀吉に見えんと請ふ初め攝津安土に到り信長に謁するや秀吉時に尙ほ義なり攝津の武骨を見て是れ日必ず音信を通ぜんことを約ぜり秀吉後ち感名大に振ふ攝津驍馬を贈り信を通ず是に於て京都に上る是より主君佐竹義重の之を聞き召して經義を講ぜしむ此時に國家の大本を確立し尊攘の大義を明にす可きを論ず用ゐられず是に於て慶應元年家督を養子尙友に讓り國を去り自ら本姓に復し里見義堯と稱して京都に上る是より訪問して密に謀る所あり乃ち關東諸州を遊說し相模總三浦谷總司桑原五郎等と志士を糾合して事を舉げんこと偶ま幕吏の爲めに謀知せられて江戸傳馬町の獄に繫がれ遂に病を發し其年九月廿八日死す年三十四(殉難錄稿)

に叙ぜらる

イハキ ワウジ 磐城皇子 雄略天皇の皇子母は皇妃吉備稚媛二十三年星川稚宮皇子の反に與みして共に誅死す(大日本史)

イハク 伊白「ケイアンイハク」

イハバ グンベエ 伊庭軍兵衞 劍客なり名は秀業常同子と號す家世々江戸幕府に仕ふ軍兵衞劍法を善くして弟子千餘人を有す性固執にして氣慨あり文政天保年間海內治平し幕士稍々偷惰に流れ人々邊服を修む然るに短衣長劍にして市街を往來する者は獨り軍兵衞の弟子のみ閑老水野忠邦大に幕政を革むるに及びて軍兵衞の人と爲りを奇とす某職に擢んず未だ幾ばくなくして忠邦退き軍兵衞職を罷め家居して子八郎を生む安政の末海內多事幕府謂武所を置き劍槍を善くする者を徵して子弟に教授せしむ人軍兵衞に謂て曰く令息は劍法を善くす盍ぞ之を言はざると軍兵衞笑ひて答へずと云ふ(譚海)

イハクラ ゴショ 岩倉御所「アキコナイシンワウ」

イハクラ トモツネ 岩倉具經 公家華族具堯十一世の孫贈太政大臣具視の三男なり嘉永六年六月を以て生る明治元年正月九日東山道鎭撫副總督に任ぜられ京地を發向す同五月白河口副總督を命ぜらる六月復命功を奏す特勅を以て堂上に列し一家を創立せしめられ正五位下に叙す同二年六月二日戊辰の正月岩倉侍從と共に山道進軍兵士と甘苦を同うし總野の間に出馬し日夜勉勵兵氣を鼓舞し職掌を遂げし賞として祿二百石永世賜はる旨を拜す同三年正月米國に留學し同十一年一月歸朝す十月大藏權少書記官に任ずそれより諸官に累進し十七年七月男爵を授けられ露國公使館在留を命ぜらる同二十三年宮中顧問官に任じ勅任二等に叙ぜられまた皇后宮職事務補助を命ぜられ正四位勳三等に叙す同年十月十七日病を以て卒す品川先塋の墓地に葬る

イハクラ トモノブ 岩倉具選 正三位廣雅の子なり從三位に任す文事を好み書を能くす殊更蹴道に造し墨書に妙なり又着色あり文政七年七月七日薨ず年六十八(蹴人傳補遺)

イハクラ トモミ 岩倉具視 實は堀川前第二子なり幼名周丸と曰ふ岩倉具慶養ひ子とす祿百五十石を食む天保九年十四元服從五位下に叙し昇殿を聽さる十二年從五位上に進み弘化二年正五位下に至る安政四年從四位上に叙ぜられ侍從となる時に歲三十三具視人となり深沈にして偉略あり正月是より先き外艦來り國書を呈して通信互市を乞ふ幕府大に之を困しみ將に許す所あらんとす朝廷之を聞き命じて四上して事を奏せしむ此時正篤關白九條尙忠及び自ら爲めにする所あらんとす尙忠艴然色を正くして之れを卻く蓋し具視の發意に出でたりと云ふ正篤大に苦しむ陰に彥藩長野主膳に說き九條家の諸大夫島田左近に因りて議を諮るあらしむ既にして朝議略々定まり勅幕府に委任するの意あり具視之れを聞き直に中山大納言忠能以下八十餘人と謀り連署して其不可を陳す孝明帝之を嘉みし勅して之を改む正篤終に意を果さずして東歸す是より具視の名大に顯はる此の年四月伊井掃部頭直弼大老となり七月荷蘭の通約を改修し魯西亞英吉利と互市を約す而して廷議擾夷を主とし幕府と意見合はずして屢々軋轢の勢あり是に於て公武合體の說起り具視大に其の說を贊く是の年十二月二十九日右近衞權少將に任ぜられ翌文久元年五月九日正四位下に進む時に歲三十七なり是の時に當りて公武合體の說益々勢力を得遂に皇妹和宮を將軍家茂に降嫁するに決し十月廿日京都發靷あり具視從ひて東下し幕府の老臣を諭すに此の機に乘じて敕免を行ふの事を以てす是に於て翌年四月朝日麓に落飾あり攝家方より公卿殿上人其他諸藩主の謹愼を命じ或は幽閉せられし人々に至るまで悉く之を釋す此の年五月十五日具視右近衞中將に轉ず同七月廿八日悉あり本番所奏勤となる是より先き天下の諸有志漸次京都に來集して皇妹東下の不可を論具視を目して佐幕論者となす既にして浪士等九條家の臣島田左近字郷玄蕃等を刺すに至り朝議亦一變して公武合體の主張論者たりし九條尙忠及び久我千種富小路並に具視等は勅勘の身となる是に於て具視遂に獻策中納言康親の第二子なり幼名周丸と曰ふ岩倉具慶養ひ子とす祿百五十石を食む天保九年十四元服從五位下に叙し昇殿を聽さる十二年從五位上に進み弘化二年正五位下に至る安政四年從四位上に叙ぜられ侍從となる時に歲三十三具視人となり深沈にして偉略あり正月是より先き外艦來り國書を呈して通信互市を乞ふ幕府大に之を困しみ將に許す所あらんとす朝廷之を聞き命じて四上して事を奏せしむ此時正篤關白九條尙忠及び自ら爲めにする所あらんとす尙忠艴然色を正くして之れを卻く蓋し具視の發意に出でたりと云ふ正篤大に苦しむ陰に彥藩長野主膳に說き九條家の諸大夫島田左近に因りて議を諮るあらしむ既にして朝議略々定まり勅幕府に委任するの意あり具視之れを聞き直に中山大納言忠能以下八十餘人と謀り連署して其不可を陳す孝明帝之を嘉みし勅して之を改む正篤終に意を果さずして東歸す是より具視の名大に顯はる此の年四月伊井掃部頭直弼大老となり七月荷蘭の通約を改修し魯西亞英吉利と互市を約す而して廷議擾夷を主とし幕府と意見合はずして屢々軋轢の勢あり是に於て公武合體の說起り具視大に其の說を贊く是の年十二月二十九日右近衞權少將に任ぜられ翌文久元年五月九日正四位下に進む時に歲三十七なり是の時に當りて公武合體の說益々勢力を得遂に皇妹和宮を將軍家茂に降嫁するに決し十月廿日京都發靷あり具視從ひて東下し幕府の老臣を諭すに此の機に乘じて敕免を行ふの事を以てす是に於て翌年四月朝日麓に落飾あり攝家方より公卿殿上人其他諸藩主の謹愼を命じ或は幽閉せられし人々に至るまで悉く之を釋す此の年五月十五日具視右近衞中將に轉ず同七月廿八日悉あり本番所奏勤となる是より先き天下の諸有志漸次京都に來集して皇妹東下の不可を論具視を目して佐幕論者となす既にして浪士等九條家の臣島田左近字郷玄蕃等を刺すに至り朝議亦一變して公武合體の主張論者たりし九條尙忠及び久我千種富小路並に具視等は勅勘の身となる是に於て具視遂に獻策中納言康親の第二子なり幼名周丸と曰ふ岩倉具慶養ひ子とす祿百五十石を食む天保九年十四元服從五位下に叙し昇殿を聽さる十二年從五位上に進み弘化二年正五位下に至る安政四年從四位上に叙ぜられ侍從となる時に歲三十三具視人となり深沈にして偉略あり正月是より先き外艦來り國書を呈して通信互市を乞ふ幕府大に之を困しみ將に許す所あらんとす朝廷之を聞き命じて四上して事を奏せしむ此時正篤關白九條尙忠及び自ら爲めにする所あらんとす尙忠艴然色を正くして之れを卻く蓋し具視の發意に出でたりと云ふ正篤大に苦しむ陰に彥藩長野主膳に說き九條家の諸大夫島田左近に因りて議を諮るあらしむ既にして朝議略々定まり勅幕府に委任するの意あり具視之れを聞き直に中山大納言忠能以下八十餘人と謀り連署して其不可を陳す孝明帝之を嘉みし勅して之を改む正篤終に意を果さずして東歸す是より具視の名大に顯はる此の年四月伊井掃部頭直弼大老となり七月荷蘭の通約を改修し魯西亞英吉利と互市を約す而して廷議擾夷を主とし幕府と意見合はずして屢々軋轢の勢あり是に於て公武合體の說起り具視大に其の說を贊く是の年十二月二十九日右近衞權少將に任ぜられ翌文久元年五月九日正四位下に進む時に歲三十七なり是の時に當りて公武合體の說益々勢力を得遂に皇妹和宮を將軍家茂に降嫁するに決し十月廿日京都發靷あり具視從ひて東下し幕府の老臣を諭すに此の機に乘じて敕免を行ふの事を以てす是に於て翌年四月朝日麓に落飾あり攝家方より公卿殿上人其他諸藩主の謹愼を命じ或は幽閉せられし人々に至るまで悉く之を釋す此の年五月十五日具視右近衞中將に轉ず同七月廿八日悉あり本番所奏勤となる是より先き天下の諸有志漸次京都に來集して皇妹東下の不可を論具視を目して佐幕論者となす既にして浪士等九條家の臣島田左近字郷玄蕃等を刺すに至り朝議亦一變して公武合體の主張論者たりし九條尙忠及び久我千種富小路並に具視等は勅勘の身となる是に於て具視遂に獻策友山と更め又對鶴と號す此時や朝議益々具視を厭惡し九月廿五日洛中の住居を禁じ采邑愛宕郡岩倉村に移居せしめ翌年正月十三日更に重慎を命ず具視乃ち風月を友とし和歌を作りて以て自ら娛む而して其の心は未だ一日も王室を忘れず密に皇綱を挽回せんことを以て自ら誓ふ而して天下の志士は概れ具視を目して佐幕家となし敢て近き親む者なし唯水藩の香川敬三長藩の杉孫七郎江戸の儒者大橋順藏肥後の德田隼人木曾源太郎等は具視の英敏凡ならざるに惑ひ且つ其の恢復の志を懷けるを知り遂に心肝を披て其の說を贊成し密に具視の爲に奔走し西郷大久保桂(後ち侯爵)小松の諸氏或は坂本龍馬石川誠之助伊藤源助遠藤茂(後ち藤村紫朝)等の諸氏と謀る通ず時に水戸の北島秀朝も暇爽より歸り會合して中山三條中御門等の諸卿と謀り恢復の議を奏し內勅を諸藩の志士に下す三卿朝にありて宮中に周旋し具視は野に在りて諸藩勤王の士を鼓舞す是に於て復古の業已に胚胎す而して內外の幕吏一人も之を知る者なしと云ふ十二月廿五日帝崩ず是の時皇太子尙ほ幼二條左大臣勅を奉じて攝政す慶應三年正月太子位に即く即ち今上帝なり其の年三月廿九日勅して具視に入洛を許す然れども未だ洛中の住居を禁ぜられ但し月に一宿するが如きは敢て妨げなきの命あり具視其の便宜を得て大に有志と通牒し類りに王政復古の計畫を爲す同年十一月八日に及び自今歸宅勝手たるべしとの勅令を賜はり次て十二月九日勅勘を免ずる是の時に當り幕府政を行ふと雖も權力昔日の如くならず大政に至りては常に裁を朝廷に仰ぐを以て關東の威銳日に衰ふ是に於て具視土藩の後藤神山等に計り其主山內容堂に密意を告ぐ容堂の幕府に建議して大政を返上せしめんは具視實に其計に與るなり十二月八日中山正親町三條德大寺及具視の五卿尾藤薩土の四侯其他諸藩士朝廷に會す此の時具視發言して曰く今內府時勢を斟酌して政權を奉還し天下の事務を一定すべき時に至れり諸侯の時に當りて朝廷宜しく志士斷の政を行ふべし若し尙姑息に因循せば恐らくは又機を失ひ變を生ずることあらん速に天下に號令して政務悉く朝廷より出だすべしと是より議論紛然頓に決せず稍々曉に至るに及び大變革を行ふべきと一定し此の日勅して三條實美以下五卿及び長州に在り友山と更め又對鶴と號す此時や朝議益々具視を厭惡し九月廿五日洛中の住居を禁じ采邑愛宕郡岩倉村に移居せしめ翌年正月十三日更に重慎を命ず具視乃ち風月を友とし和歌を作りて以て自ら娛む而して其の心は未だ一日も王室を忘れず密に皇綱を挽回せんことを以て自ら誓ふ而して天下の志士は概れ具視を目して佐幕家となし敢て近き親む者なし唯水藩の香川敬三長藩の杉孫七郎江戸の儒者大橋順藏肥後の德田隼人木曾源太郎等は具視の英敏凡ならざるに惑ひ且つ其の恢復の志を懷けるを知り遂に心肝を披て其の說を贊成し密に具視の爲に奔走し西郷大久保桂(後ち侯爵)小松の諸氏或は坂本龍馬石川誠之助伊藤源助遠藤茂(後ち藤村紫朝)等の諸氏と謀る通ず時に水戸の北島秀朝も暇爽より歸り會合して中山三條中御門等の諸卿と謀り恢復の議を奏し內勅を諸藩の志士に下す三卿朝にありて宮中に周旋し具視は野に在りて諸藩勤王の士を鼓舞す是に於て復古の業已に胚胎す而して內外の幕吏一人も之を知る者なしと云ふ十二月廿五日帝崩ず是の時皇太子尙ほ幼二條左大臣勅を奉じて攝政す慶應三年正月太子位に即く即ち今上帝なり其の年三月廿九日勅して具視に入洛を許す然れども未だ洛中の住居を禁ぜられ但し月に一宿するが如きは敢て妨げなきの命あり具視其の便宜を得て大に有志と通牒し類りに王政復古の計畫を爲す同年十一月八日に及び自今歸宅勝手たるべしとの勅令を賜はり次て十二月九日勅勘を免ずる是の時に當り幕府政を行ふと雖も權力昔日の如くならず大政に至りては常に裁を朝廷に仰ぐを以て關東の威銳日に衰ふ是に於て具視土藩の後藤神山等に計り其主山內容堂に密意を告ぐ容堂の幕府に建議して大政を返上せしめんは具視實に其計に與るなり十二月八日中山正親町三條德大寺及具視の五卿尾藤薩土の四侯其他諸藩士朝廷に會す此の時具視發言して曰く今內府時勢を斟酌して政權を奉還し天下の事務を一定すべき時に至れり諸侯の時に當りて朝廷宜しく志士斷の政を行ふべし若し尙姑息に因循せば恐らくは又機を失ひ變を生ずることあらん速に天下に號令して政務悉く朝廷より出だすべしと是より議論紛然頓に決せず稍々曉に至るに及び大變革を行ふべきと一定し此の日勅して三條實美以下五卿及び長州に在り

て卒去したる歸小路等の官爵を復す次日(九日)卒かに天下に勅して曰く今より以來大小の政務悉く朝廷より出でん四方其れ之を體せよと又尹の宮及二條家を斥け從來の官職を廢し權に總裁議定參與の三職を置き有栖川宮を以て總裁とし賓美及び中山中御門正親町の四卿幷に尾越薩土藝の五藩主を議定となし具視及び大原萬里小路長谷橋本の諸卿並びに小松帶刀後藤象次郎木戸準一郎等を參與となし以て政治を總括せしむ是れ即ち維新中興の基礎にして明治聖代の文明を致すの創業なり廿七日具視進て議定職に任ず四年伏見の役あり德川慶喜東に走る年號を明治と改む二月具視副總裁に進み海陸軍務會計事務總督を兼ぬ初め慶喜の朝敵となりて征討の命下るや朝廷直に京師に會合せる諸藩の說士を編制して親兵となし二條城に屯せしむ而して彼等各國公使の不日大政復古の祝賀を併せ參朝して謁見を賜はる事に決したるを聞き心陰に愧ぢず怫然として議して曰く抑も我等が君親を棄て妻子に訣れ身を犧牲となし京師に聚り奸を斃し邪を屠り怨なきの德川氏を斃して王政を復する所以は必寬容府因循にして先帝の叡旨を奉せず攘夷の執行遲々として外夷益々横行するを以て先づ幕府を斥け進みて攘夷を決行し以て先帝の神慮を慰せんとの一心にありしなるに今洋夷の入京を許さるゝのみならず天朝謁見を賜はるとは實に神州の大事此の時なり速かに諫奏して之を止め且つ具視に就て其意見のある所を詰問せんと遂に衆中より二三士を選拔して具視に就て疑問を發し且つ草莽有志の不平を訴へしに具視其の皇國を念慮するの精神を褒賞し夫より徐ろに各國の形勢を說き文明開化の良域に至らざれば此の萬民を統御し上叡慮を安んじ宮國强兵の策を成し難しと懇親互市の理四海兄弟の道を懇說せしに首めは容易に服する色なく激論に涉り動もすれば腕力に訴へんとするの勢あり而れ共具視自若として動かず從容理を引き道を說き以て諭すに彼等稍々精神を靜めて聽しより遂に事なくして已む同月右兵衛督となり從三位に進み四月議定に任ぜられ輔相を兼ぬ十月主上東京に幸し西丸を以て行宮と定め輪王寺宮を西丸に幽し會津藩以下二十三藩主の死一等を宥め各藩に幽し仙臺米澤以下の封三分の一を削り同姓をして其の封を襲はしむ其の事多く具視の意見に出でたりと云ふ二年正月廿五日權大納言に任ぜられ正二位に進む四月是より先き具視小松木戸の諸氏と相議して公議所を設け諸藩士を徵して議員となす氏と相議して公議所を設け諸藩士を徵して議員となす選議院設立のことを唱道す是よりして民間論者の民權を說くもの一層勢力を得たり而して具視未だ以て其の時機に熟せずとして其の言を容れず初め高知縣の士武市熊吉、同喜久馬、山崎則雄、島崎直芳、下村義明の五人征韓論の行はれざりしを以て具視の專斷に出でたりとなし七年一月十四日黃昏具視墓居より退朝の途次馬車の赤坂喰違に至るや五士突然出て、具視を刺す乃ち馬丁を逸して具視僅傷を蒙りしも二月廿三日に至り平癒したり時に具視微傷を蒙りしも二月廿三日に至り平癒して參朝常の如し九年五月從一位に進み十二月十九日勳一等に叙せられ旭日大綬章を賜はり同三十一日華族局部長を命ぜらる十年一月廿二日聖上西京に幸す具視留守して事を視る三十一日薩州鹿兒島私學校の生徒同地海軍省所轄の彈藥を奪ひ去らんとせしより遂に西鄕隆盛の叛跡大に顯はれ具視電報を以て京都の行在所に之を奏し遂に戊辰以降曾てあらざる一大戰爭となる是の時具視諸書藩諸主に諭して拔刀隊を募る等頗る力を戡定に盡し遂に蕩平するを得たり十三年米國大統領克蘭土東洋を漫遊し途次我が邦に過ぎる具視屢と接して前年廟使中待遇の恩に報ゆ是より先き露西亞伊太利より勳章の贈賜あり翌十四年聖駕奥羽を經て北海道を巡る具視三條相國に代りて東京に在り十月十四日還幸の當日廟議變革あり二十三年を期し國會を開設し給ふの勅旨あり十五年具視上奏して伊藤參議を歐洲に遣はし憲法を視察せしむ十月華族局部長を免ぜられ十一年一月大勳位に叙せらる十六年癌症に罹り漸次重きを加へ熱海或は四京に赴き病を養ふと雖も効驗なし六月東京に歸り七月十八日戰を辭し廿日竟に薨ず年五十九九具視の病篤きや帝侍醫を遣はして病を視せしむ且つ親ら其邸に臨まるゝこと二回に至る薨ずるに及び勅して太政大臣を贈り葬るに國費を以てす朝を廢する三日葬儀甚だ盛なりき具視性剛毅にして淡泊又儉を好む家範を作て奢侈を戒む範成り十一族之に調印ぜるは薨去の前五日なり十八年七月正一位を贈る

イハクラノナイダイジン 岩倉内大臣

決す之に依て四鄕以下の各參議は冠を掛けて故國に歸へる七年佐賀の役十年四南の役蓋し鉉に胚胎するなり時に前參議板垣退助同副島種臣等其他の諸氏と謀り民權を說くもの一層勢力を得たり而して具視未だ以て其の時機に熟せずとして其の言を容れず初め高知縣の士武市熊吉、同喜久馬、山崎則雄、島崎直芳、下村義明の五人征韓論の行はれざりしを以て具視の專斷に出でたりと云ふ七年一月十四日黃昏具視墓居より退朝の途次馬車の赤坂喰違に至るや五士突然出て、具視を刺す乃ち馬丁を逸して具視微傷を蒙りしも二月廿三日に至り平癒したり時に具視微傷を蒙りしも二月廿三日に至り平癒して參朝常の如し九年五月從一位に進み十二月十九日勳一等に叙せられ旭日大綬章を賜はり同三十一日華族局部長を命ぜらる十年一月廿二日聖上西京に幸す具視留守して事を視る三十一日薩州鹿兒島私學校の生徒同地海軍省所轄の彈藥を奪ひ去らんとせしより遂に西鄕隆盛の叛跡大に顯はれ具視電報を以て京都の行在所に之を奏し遂に戊辰以降曾てあらざる一大戰爭となる是の時具視諸書藩諸主に諭して拔刀隊を募る等頗る力を戡定に盡し遂に蕩平するを得たり十三年米國大統領克蘭土東洋を漫遊し途次我が邦に過ぎる具視屢と接して前年廟使中待遇の恩に報ゆ是より先き露西亞伊太利より勳章の贈賜あり翌十四年聖駕奥羽を經て北海道を巡る具視三條相國に代りて東京に在り十月十四日還幸の當日廟議變革あり二十三年を期し國會を開設し給ふの勅旨あり十五年具視上奏して伊藤參議を歐洲に遣はし憲法を視察せしむ十月華族局部長を免ぜられ十一年一月大勳位に叙せらる十六年癌症に罹り漸次重きを加へ熱海或は四京に赴き病を養ふと雖も効驗なし六月東京に歸り七月十八日戰を辭し廿日竟に薨ず年五十九九具視の病篤きや帝侍醫を遣はして病を視せしむ且つ親ら其邸に臨まるゝこと二回に至る薨ずるに及び勅して太政大臣を贈り葬るに國費を以てす朝を廢する三日葬儀甚だ盛なりき具視性剛毅にして淡泊又儉を好む家範を作て奢侈を戒む範成り十一族之に調印ぜるは薨去の前五日に和す一時議論激烈なりしも覓に非征韓論者の意見に

イハクラノミヤ 岩倉宮「タダナリワウ」

イハクラノミヤ 岩倉宮「セウヘイシワウ」

イハクラ マキコ 岩倉槇子 贈太政大臣

岩倉具視公の室なり江州膳所本田藩士の女文政十年生る貞性沈毅謹厚克く人を愛し具視在世中殊に維新前後十餘年間に於ける內助の功最著しきものありきといふ明治三十六年二月二十三日病を以て逝く年七十七

イハサカノイチベノオシハノワウジ 磐阪市邊押磐皇子 (一に押羽に作る古事記に忍齒別王に作る)履中天皇の皇子母は皇妃黑媛、安康帝雷て位を皇子に傳へんと欲し讒じめ後事を屬す大泊瀨皇子聞て之を喇み眉輪王を誅せし後皇子を誘ひ共に近江なる來田綿蚊屋野に獵し猪を射るに托して皇子を射殺す佐伯部賣輪皇子の骸を抱きて號泣して去らず遂に亦殺さる而して皇子を盛るに槽を以てして之を埋む後に皇子の御子弘計王(顯宗帝)位に即き詔を下して皇子の骸を求め佐伯部賣輪と共に塚二つを築きて葬むる(大日本史)

イハサキ カジ 岩崎可慈 陸軍步兵中尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七八年日露の戰役に於て後備步兵第二十三聯隊附として出征中三十八年三月五日清國盛京省孤家子附近戰圍の際負傷し同六日後備第一師團第四野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イハサキ クワンユン 岩崎灌園 江戸の本草學の大家なり名は常正一に萬字は士方通稱源藏一に玄堂と號す穗川氏の徒士なり小野蘭山の門に入り最も植物に通じ本草圖譜、救荒本草通解、草木育種等の著述あり天保十三年正月二十九日歿す年五十七(廣益諸家人名錄、博物學年表、見ぬ世の友)

イハサキ コジラウ 岩崎小二郎 貴族院議員なり肥前大村の藩臣幼にして嶄然頭角を露はし同藩の先達目して俊才と爲す藩の儒臣松林飯山に就て學を修め飯山兒徒の帶刄に亂るゝ後勤王論を主張して渡邊清、同昇、楠本正隆等と共に維新の際に盡力して功あり尊て民部省に出仕し後黑田清隆が歐米巡回の隨行を命ぜられ轡て英國留學を命ぜられ大に西歐の文物制度を査討し歸朝後諸官を歷任し事務練達の名あり銀行局長の椅子を占むるや清廉を以て稱せらる其後秋田縣に知事となりしが北國の氣候其身體に適せざるを以て辭す幾はくもなくして滋賀縣知事となり尋て大分縣に移る明治二十五年議會解散となり寫時總選擧を執行するの後屬岡縣に於ける官民の軋轢甚だしく紛擾常に絕えざるを以て氏は特に擇ばれて屬岡縣に轉任す爾後官民調和治績大に著る從四位勳四等に叙す明治二十八年六月二十二日卒す

イハサキ ツネカタ 岩崎恒固 飯客なり通稱は多仲初め善之助と稱す寬政十二年を以て生る世々笠間藩牧野侯に仕へ監察となり江戸濱街の邸に居る資性剛直身の丈六尺餘眼光電の如く儻然たる偉丈夫なり人望み見て畏縮せざるはなし最も勇武を好み弓馬飯撿火技柔術盡く其秘訣を窮め既にして擢んでられて擊劍馬術柔術の師範となり上は藩主より下は卒伍に至るまで擧げて其門に入らざるはなし其他諸侯伯往々來つて師事す當時飯客を以て名あるもの千葉周作桃井正八郎の徒常に相往來して其術を磨勵し馬術を以て稱せらるゝ者賀田一貫齋の徒又常に相往來して其法を研究す都下武人を數ふれば必ず指を恒固に屈す嘗て夜酒を被り醉步跟々芝切通を過ぐ時中三賊あり向背双ゝ揮ふて齊しく恒固を斫る恒固屈せず直に刀を拔て縱橫之に接す三賊遂に當る可からざるを知り奔逃して其の跡を匿す恒固從容襟を解て其創を包み寬步謠を唱ひて還る燈に就て體を檢すれば背に二創、額と頸とに各一創あり醫を以て之を療せしむ恒固笑つて云く思ふに身を屈して横戮せし時暗に賊の一腕を隕す是ふ明早應に往て之を檢すべしと其奧武術此の如し明治戊辰擧笠間藩朝命を奉じて脫賊を小山驛に拒ぐに當り恒固齡殆んど七十尙ほ旗奉行を以て軍に從ひ又潁る汗馬の功あり時勢一變郷縣治を なすに及び常に其子恒曦に謂へて云く常人にして武を講ずるは蓋し群雄割據の餘習のみ今より以後必ず武士の稱なけん汝勉めて文字を修め乃父の武勇と其名を齊しうせよと明治七年病を以て笠間に歿す其子恒曦名は桂堂と號し詩文を能くす其著に小學紀事文例五百題詩選あり(小學紀事文例、文莊漫錄)

イハサキ ヤタラウ 岩崎彌太郎 郵便汽船三菱會社の社長なり名は寬、東山と號す天保五年十二月を以て土佐國安藝郡井ノ口村に生る父は彌次郎母は小野氏世々一鄕の名族たり彌太郎甫めて七歲にして學を外戚小野氏に受け後ち小牧周平の門に入りて學ぶ幼にして詩を賦し金若干を賜はる時に歲十四なり是より彌太郎奇童を以て一鄕に稱せらる是の年彌太郎出でゝ高知に遊び岡本寧浦の門に入り研究怠らず學大に進む安政五年江戸に抵り安積艮齋の門に遊ぶ明年父村寅と事を爭ひ遂に謫告せられて嗣に福る彌太郎報を得て直に歸途に上る而れ共費の給す可き無し因りて食を途に乞ひ夜は山野に臥して鄕里に歸り郡奉行の廳に至て父の寃を訴ふ奉行吏と私して報ぜず彌太郎乃ち麗門に至り門柱を削り聯句を大書して云く「官以て賄賂一戚獄囚に愛憎一決」と奉行怒りて之を刪去す彌太郎復た之を廳の外壁に書す是に於て奉行其の筆者を搜索し終に彌太郎を捕へ糾彈して云く之を筆する者恐らくは彌太郎の外に非らざるべしと彌太郎默して答へず其の再び問はるゝに及び意を決して其の實を白す因りて居村及び城下周縕四ケ村內に住居を禁ぜらる彌太郎是より移りて神田村に屛居し旨夜書を讀む名聲漸く緇神學士の間に藉き就中吉田東洋の知遇を蒙り後藤象次郎坂本龍馬等と相交通す蓋し東洋は土藩の碩學にして當時人傑を以て朝野に重んぜらるゝ者なり五年彌太郎命を奉じて長崎に赴き外國の形勢を訪綜す慶應二年出でゝ藩に仕へ職を開成館に奉じ專ら勸業の事務に任ず明年復藩命を以て長崎に赴き通商の事務を掌る既にして彌太郎朝鮮陵島に航し樟木を建て云く「大日本國岩崎彌太郎土藩の命を奉じて本島を覽見す」と蓋し謀る所あるが爲めなり近世我が邦人の朝鮮に渡航する者是を以て始めとす幾くも無くして藩に歸り少參事に任ず後ち大阪留守居と爲り常に其子恒曦に謂へて云く人の武を講ずるは蓋し群雄割據の餘習のみ今より以後必ず武士の稱なけん汝勉めて文字を修め乃父の武勇と其名を齊しうせよと明治七年病を以て笠間に歿す其子恒曦名は桂堂と號し詩文を能くす其著に小學紀事文例五百題詩選あり(小學紀事文例、文莊漫錄)

は通商を擴張し或は藩札の交換を企て或は貨財を諸藩に貸與する等計略與りて力あり明治四年廢藩置縣の際官を辭し且九十九商會を解き其船舶を擧げて還附し尙ほ其收益金數萬を獻ひて地を大阪に卜し汽船運漕の業を創め名けて三菱商會と云ふ其の制實に私立たり而して他日政府の特典を得て郵便汽船三菱會社と稱し我が航權を專領せしもの實に茲に胚胎するなり七年江藤新平、島義勇の叛亂を佐賀に作すや彌太郎政府の命を奉じて同漕に從事し是の歲を以て本店を東京に移し稍々其の業を擴張す時に臺灣の役起るに及び政府新に數艘の汽船を購ひて之を彌太郎に托し戰地回漕に從事せしむ而して役已むの後も其の船を用ひて航路を上海に開き又た沿海諸港の航路を開き大に其の業を擴張す是れより先き帝國郵便汽船會社と競爭を試み互に相苦む然るに新に上海に航路を開くや以て更に太平洋汽船會社と競爭を開き敢出相償はず將に倒れんとす乃ち政府に保護を請ひ益々其の船賃を低落し遂に之を我が近海より放逐するに至れり後終に其の船舶を購ひて以て外船の競爭を絕つ會ゝ帝國郵便汽船會社も政府其の船舶を收めて更に之れを三菱に付與し托するに郵便漕運の事を以てす是に於て始て郵便汽船三菱會社と稱す九年英國彼阿會社新に航線を橫濱上海間に開き三菱會社と抗爭す彌太郎之れに應じ僅に勝を制して復來らしめず是に於て我が航海權全く彌太郎に歸せり翌年四郷、桐野篠原の輩亂を鹿兒島に作すに及び復た政府の命を奉じて戰地回漕に從事す是より三菱の名聲天下に轟き富裕國內に冠たり維新以來十數年にして巨富を致したる者彌太郎に及ぶものなし而して彌太郎十年の功を以て勳四等に叙せられ明治十七年夏秋の交を以て病に罹り月を累ねて漸く重く明年二月六日從五位に叙せられ其の翌日を以て東京の第に薨す時に歲五十二彌太郎人となり豪宕曠逸我が國の航權を擴張するを以て自ら任じ經始一日の如く絕て他事に及ぶことなし而して貨幣を公事に納るゝ少なからず學校を興し文庫を設け學士を養ひ及び貧民を救恤するを以て前後獎賞を受くること數十回金抔二萬餘圓に至ると云ふ

イハサキ　ヤノスケ　岩崎彌之助　日本郵船會社の創業者なり岩崎彌次郎の次男にして彌太郎の弟なり嘉永四年正月八日を以て土佐國安藝郡井之口村に生る家世ゝ郷士たり慶應三年高知藩立學校に入る明治四年大阪に移住し重野成齋に就き漢籍を學ぶ翌五年米國に留學し歸朝の後兄彌太郎の經營を助け副社長となる十八年彌太郎の經營に係る三菱會社の事業を助け副社長となる同年九月從來互に競爭せる三菱郵便汽船會社と共同運輸會社とは合同して日本郵船會社の設立を見るに至れるは蓋し彌之助の謀策に出づるなり同年十月從五位勳四等に叙せらる更に三菱社を起し專ら鑛山炭坑造船銀行等の業務を經營す廿年九月正四位に叙せられ二十三年九月貴族院議員に任ぜらる翌廿四年ひて貴族院議員を免ぜらる二十六年商法發布に際し三菱合資會社を設け廿九年兄彌太郎の嗣子久彌に其社長を讓る同六月特旨を以て華族に列し男爵を授らる同年一月川田小一郎の後を襲ひて日本銀行總裁となり適材を適所に措き大に行務の刷新を謀る既にして三十一年十月之を辭し勳三等に叙せらる三十二年六月從三位に叙せられ三十九年四月勳二等に叙し旭日重光章を賜はる四十一年三月特旨を以て位一級を進め正三位に叙せらる是より先き久しく重患に惱みしが遂に起たず同月二十五日逝く年五十八資性溫厚篤實にして用意慎密沈毅果斷に富み謙抑にして統御の才あり兄彌太郎を助て內外呼應して以て遠大なる事業を經營して功あり彌太郎の歿後盤根錯節を釋きて一家一門の安泰を致さしめ更に其遺志を繼きて着々として事業の發展を期し獨り家門の爲めに謀りて忠なるのみならず國家亦に公共の爲めに盡す所決して少からず而も名聞を忌み多くは隱德を以てせり曾て日本新聞の財政窮乏して廢刊の止むなきに至り誓者は彌之助を問て救援を求む彌之助快諾して即座に一萬金を與へ且つ謂つて曰く予は事業家なれば一切政治に容喙せざる決心なり今日の出資は只世を揉ふの微意のみ口外無用なりと深く文事に志し靜嘉堂文庫を興して古今の珍籍を蒐め學者の閲覽に供せんとす其書既に二十五萬の多きに達せりと云ふかつて清國上海陸心源の遺孫の藏する珍本宋槧叢書が其價の尊きが爲め我宮內省に於て購入を謀議せるの事を聞くや人を上海に遣はして之が交渉に當らしめ遂に十二萬金を投じて二千卷の該珍書を購入したりといふ文圃藝を樂みと其庭園の結構社寺の建築に費せる金盡ぬ天下第一と稱せらるる芝青松寺に於て質素なる葬式を營む則に一箇寺を創立して埋骨する計畫をなせり樞密院殿心光圓照大居士と謚す

イハサキ　ヨシスケ　岩崎嘉資　陸軍步兵中尉なり新潟縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや近衛步兵第一聯隊附として出征し七月三十一日淸國盛京省ハンジヤプーザ北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

イハサクノカミ　磐拆神　「カグツチノカミ」

イハサ　マタエ　岩佐又兵衛　浮世繪の始祖なり名は勝重、世に浮世又兵衛と稱す故に此人の畫風を稱して浮世繪と云ふ天正七年父荒木攝津守村重織田信長の命に背きて自殺す時に又兵衛二歲、乳母に誘なはれて本願寺の支院に隱れ越前の岩佐氏に育はる因て其の氏を冒す慶長年中京師に出て土佐光則の門に入りて大和繪を學び研究して後ち一家の風を成し越前侯に仕ふ其の畫く所常時風俗の人物美人或は遊女白拍子等遊興の戲畫を作るに巧みなり其の筆意緻密にして最優かなり彩色を厚くし金泥を用ふ人其艷色美麗を稱す或は言ふ浮世又兵衛とは其名ありて實は其の人なしと然ども又兵衛の奇畫多く世に有るを見れば其人の存ずるを證す可し又織田信雄に仕ふと云ひ土佐光茂の門に入ると云ふ說あれども又兵衛寬永中に歿するを以て觀れば皆な誤りならん現今遺蹟著名の品は男女少年風俗之圖(屏風)春秋遊園之圖(屏風卷物等)春宵秘戲之圖(卷物)とす(扶桑畫人傳、皇國名畫拾遺、畫乘要略)

イハサ　ヤゴザエモン　岩佐彌丘左衛門　將軍德川秀忠の臣なり初の名は吉純、僉左衛門吉勝の次子なり弓馬刀槍に達し又兵法に通じ靑を善くす元祿中の人(武御流祖錄)

イハシタ　アウエン　岩下櫻園　和學者なり名は貞臨通稱名門字は會侯姓は源野、信濃の善光寺靜嘉堂文庫を興して古今の珍籍を蒐め學者の閲覽に供せんとす其書既に二十五萬の多きに達せりと云ふかつて清國上海陸心源の遺孫の藏する珍本宋槧叢書が其價の尊きが爲め我宮內省に於て購入を謀議せるの事を聞くや人を上海に遣はして之が交渉に當らしめ遂に十二萬金を投じて二千卷の該珍書を購入したりといふ文圃藝を樂みと其庭園の結構社寺の建築に費せる金盡ぬ天下第一と稱せらるる芝青松寺に於て質素なる葬式を營む則に一箇寺を創立して埋骨する計畫をなせり樞密院殿心光圓照大居士と謚す

イハシタ　キゲン　岩下希言　信濃の俳人なり信州善光寺前大門町に住す樂種商なり蔦屋助平と

稱す文化八年歿す

イハシダ　マサヒラ　岩下方平　鹿兒島藩士なり文政十年三月生る通稱佐次右衞門藩にありて生蓼事件の談判に與り慶應二年佛國に渡航し三年參與に任じ明治元年外國事務掛に兼補し兵庫裁判所に在勤す同年大阪府判事に轉じ二年刑法官に出仕し留守次官に轉じ從四位下に叙す九月復古の基業を助けたるの丕績に依り永世賞典祿千石を賜ふ三年正月京都府權知事に任し大坂府大參事を經て十一年五月元老院議官に任ず十四年神官教導職會議々長兼副總裁に補す同年七月勳三等に叙し位勳を歷陞し二十年五月子爵に叙し華族に列す廿三年同爵より選まれて貴族院議員となり同年勳一等に叙す三十三年八月十五日薨ず年七十四

イハバ　シュンテイ　伊庭春庭　江戸の儒者なり名は豐祥元祿七年十月十八日歿す(江戸名家墓所一覽)

イハシロ　メイケイ　岩代名溪　茶人なり通稱七郎兵衞師來庵と號す槐正峯の門人(茶人系傳全集)

イハズヒメノカミ　石巢姬神　伊奘那岐神の子にして大事忍男神の次に生れたる神なり或は曰ふ磐筒之女神と同神なりと(古事記傳)

イハセ　クワセウ　岩瀨華沼　島原侯の儒員なり名は行言字は子言、勘平と稱す華沼は其の號江戸の人河口靜齋に學ぶ島原侯に仕ふ書を善くして草書に工なり文化七年十一月歿す年七十四著す所華沼文集あり(續定便覽)

イハセ　シャウアン　岩瀨尙庵　大垣の儒者にして通稱中藏、學を佐藤一齋大槻訥庵に受け最中庸に精く書を袁菱湖に學びて之を巧にす明治三年の頃歿す(日本敎育史資料)

イハバ　ゼスキケン　伊庭是水軒　心形刀流劍術の祖なり名は光明江戸下谷に住す志賀重郎左衞門に從て神道流の劍を學ぶ後工夫して心形刀流を創む(武御流祖錄)

イハセ　セイ
イハセ　タダシ　岩瀨醒　「キヤウデン」
岩瀨正　海軍機關少監なり舊幕臣岩瀨正美の男なり攻玉社に學び次で海軍機關學校に入り卒業して少機關士となり累進して大機關士となり明治三年戊辰の戰起るや幕臣の出征し第三回旅順口閉塞の戰起るや明石艦分隊長として閉塞船小樽丸機關長として五月三日の閉塞事業に參加し全乘組員と共に一時生死不明なりしが當時負傷して敵に救はれ同年十月十九日死去す年二十八戰功により功五級勳五等に叙せらる

イハセ　タダナリ　岩瀨忠震　幕末の政治家なり字は善鳴號は蟠洲或は百里(居邸築地木挽町に在り築地或は蟠洲と號せり)後に鷗所と改む(廢藏)初め修理と稱す叙爵して伊賀守肥後守に任ず尤も肥後を以て世に知らる旗下殿樂氏の子にして林述齋の外孫に當る岩瀨忠正の養嗣子となり其長女を要とす終生部屋住にて幕府に奉職し戶主とはならざりき忠震含邑千七百石なり後に津田氏の女を娶る三男六女ありしが皆早世し僅に三女のみ他に嫁す忠震天資明敏才學超絕書畫文藝一として妙所に達せざるはなしと忠震の親友木村芥舟(攝津守)の評なり栗本鋤雲も亦忠震を見ずと云へり以て其の月旦を盡せりと云ふ可し阿部伊勢守に登用せられ徒步頭となり累遷して目附外國奉行作事奉行に進む米國軍艦浦賀に來り國事漸く多端となり外國の應接條約の草案新令の發布砲臺の築造巨砲兵艦の製造長崎海軍の新設等皆な其の力なりき忠震なし特に幕末史上に於て有名なる堀田備中守上京し其の上に於て條約調印の勅許を請ふに當り忠震亦關ずざるを得ざるの力なりき忠震は一時生死不明なりしが當時負傷して重視せられしこと斯くの如し安政四年合衆國公使「ハルリス」と條約の各款を議定せしも亦忠震の力なりき井伊掃部頭が大老に任じ僑公を儲嗣に爲さんと首唱せしに由り水戶老公等と共に幕府の嚴譴を蒙る(幽居)其れより江戶向島の別墅に從て神道流の劍を學ぶ後工夫して心形刀流を創む(武御流祖錄)

イハセ　デンザウ　岩瀨田藏　「キヤウデン」

イハタ　ウエモン　岩田右衞門　「コンガ

終るに至る泛刑を敕されず文久元年七月年四十四にして世を逝る爽慨と謚し江戶白山蓮華寺に葬る明治十六年二月舊臣白野夏雲墓碑を建つ永井介堂(玄蕃頭)銘して曰く「於戲爽慨其貌也揚眉秀眼明才氣昂臨事勇往曾不陧防蘇機急發乘翼風牛誠追倪嘉黃不作不愧爰歸其藏」忠震の顏職に在るや俊才を撰拔するの力を盡したるも尠少に非ず其一二を擧ぐれば矢田堀景蔵(鴻齋)河津三郎太郎(安芳)を小普請組より拔擢し平山謙次郎(成齋)河津三郎太郎等を登用し下曾根金三郎江川太郎左衞門に洋式砲術の訓練を任じ箕作玄甫杉田玄瑞を蕃書調所の教官と爲せしが如き明治前後に關係したる偉業に功あるを擧て算す可らず川路左衞門尉大久保越中守(一翁)水野筑後守(痴雲)竹內下野守古賀筑後守、茶溪)等の人才は皆其の親友たりき忠震亦薩摩(齋彬)、肥前(閑叟)水戶(烈公)越前(春嶽)等の藩主に信重せられぬ(木村芥舟直談、匏庵遺稿、舊幕府雜誌、幕末政治家)

イハセ　タラウ　岩瀨太郎　小笠原義政の部下なり常陸の人源頼朝の平惟盛を擊たんとするや義政の忠を爲さんことを盡り平廣常を誘て義政を大矢橋に誘殺し義政の姪秀義を金沙山に攻めて遂に之を走らす頼朝廣常等の虜になり流涕して已まず頼朝怪て其の故を問ふ太郎曰く吾が主の禍冤に罹るを思ひて痛むのみと頼朝曰く汝其の主を思ゝ何ぞ其事に死せざるや曰く將軍吾が主を誅す臣等爭を忍び生を偷みて今日に至る以は將軍に一見するを得て自陳する所あらんが爲なり夫れ將軍は平氏を討つを以て事と爲さず親族を誅除す是何ぞや將軍苟も敵を滅さんと欲せば宜し天下の勇士と力を戰ふべし而して反て親族を誅す將軍誰と與に讐敵を滅さんや又何人をして子孫の扞蔽と爲さんとするか今主人の將軍に歸する者は徒に其の滅を恐れてのみ心服するに非ざるなり恐らくは節を後世に貽さん願くば將軍熟慮せよと頼朝默然たり廣常其他心あるを憐れ之を誅せんことを請ふ頼朝釋て、問はず秀義之に因て罪を免るゝを得たり(大日本史)

イハタ　ウエモン　岩田右衞門